四国横断自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第 八 冊

延 命 遺 跡

1990.12

香 川 県 教 育 委 員 会

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

日 本 道 路 公 団

延命遺跡正誤表

	誤	正
巻頭図版	(2)城岡地区 包含層出土青磁碗	(2)城岡地区 包含層出土青磁皿
	(3)城岡地区 包含層出土青磁碗	(3)城岡地区 包含層出土青磁皿
図版目次xi	巻頭図版 (2)城岡地区 包含層出土青磁碗	(2)城岡地区 包含層出土青磁皿
	(3)城岡地区 包含層出土青磁碗	(3)城岡地区 包含層出土青磁皿
P11～12	38. 長砂古墳跡	38. 長砂古遺跡
P239～240	Ⅱ期（弥生時代後記）	Ⅱ期（弥生時代後期）
P417	挿図番号191－1104 「巴丈」鎌倉時代	挿図番号191－1104 「巴文」鎌倉時代

(1)八反地地区森 5 号塚出土青磁碗

(2)城岡地区包含層出土青磁碗

(3)城岡地区包含層出土青磁碗

(4)八反地地区遺構出土常滑焼

序　　文

香川県教育委員会では、昭和62年12月に開通した四国横断自動車道（善通寺～豊浜）の建設に伴い、路線内の24遺跡について、昭和57年度から昭和62年度まで発掘調査を実施しました。

これらの発掘調査の成果につきましては、昭和62年度までは香川県教育委員会において、それ以後は香川県教育委員会の委託を受けた財団法人香川県埋蔵文化財調査センターにおいて整理作業を実施し、平成元年度までに７冊の発掘調査報告書を刊行しております。

今回第８冊として報告いたしますのは、三豊郡豊中町上高野大地・八反地に所在する延命遺跡（城岡地区・八反地地区）についてであります。延命遺跡の発掘調査では、縄文時代から近世までの遺構・遺物が出土しましたが、城岡地区では中央に道路を配した鎌倉時代の建物群が検出され、八反地地区でも溝で区画された鎌倉時代の建物群が検出されるなど、本遺跡は県下の中世の集落を知るうえで重要な位置を占めることが明らかにされました。

本書が香川県の歴史研究の資料として広く活用され、さらに埋蔵文化財に対する理解と関心が深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理、報告に至るまでの間、日本道路公団及び関係諸機関並びに地元関係各位に多大な御援助と御協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後とも御支援賜りますようお願い申し上げます。

平成２年12月

香川県教育委員会

教育長　松　繁　壽　義

例　　言

1．本書は四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第八冊である。

2．本書に収録したのは、1983年11月28日から1986年９月30日にかけて発掘調査を実施した、香川県三豊郡豊中町上高野大地・八反地に所在する延命遺跡（城岡地区・八反地地区）である。

3．発掘調査は、日本道路公団高松建設局の委託を受けて、香川県教育委員会が実施した。

4．発掘調査は延命遺跡八反地地区を岸上康久・池内右典・西岡達哉・田淵裕司・片桐孝浩、城岡地区を岸上康久・大山真充・池内右典・真鍋昌宏・片桐孝浩が担当した。

5．調査に当たっては、下記機関の指導や援助を得た。記して謝辞を表したい。
日本道路公団、同・観音寺工事事務所、香川県土木部横断道対策室、豊中町横断道対策室、共同企業体、地元自治会、地元対策協議会

6．本書の作成に当たっては、文化行政課職員をはじめ、調査に参加した調査員の助言を受けながら片桐孝浩が執筆した。

7．本書の遺構・遺物挿図の指示は以下のとおりである。
(1)　挿図の縮尺は、掲載の図面内にスケールで示した。
(2)　方位は、国土座標第Ⅳ座標系の北を示す。
(3)　水平基準線の数値は、海抜高を示している。

8．本書に用いている遺構記号は次のとおりである。

ＳＡ…柵列	ＳＢ…掘立柱建物	ＳＴ…土壙墓
ＳＤ…溝状遺構	ＳＥ…井　戸	ＳＸ…不明遺構
ＳＨ…竪穴住居	ＳＫ…土　坑	ＳＰ…ピット

目　　次

第1章　調査の経緯 …… 1
　第1節　横断道調査の経過 …… 1
　第2節　調査に至る経過 …… 5

第2章　遺跡の立地と環境 …… 9

第3章　延命遺跡 …… 15
　第1節　調査の経過 …… 15
　第2節　八反地地区 …… 24
　　1．遺跡の概要 …… 24
　　(1)　地形 …… 24
　　(2)　土層序 …… 27
　　2．縄文時代から弥生時代の遺構・遺物について …… 28
　　(1)　縄文時代晩期・弥生時代前期の遺構検出概要 …… 28
　　(2)　縄文時代晩期・弥生時代前期の遺構・遺物 …… 28
　　SK01 …… 28
　　SD06～09・23・28・37・38 …… 28
　　包含層出土遺物 …… 34
　　(3)　弥生時代後期終末以前の遺構 …… 40
　　SB09 …… 40
　　SB10 …… 40
　　(4)　弥生時代後期終末の遺構 …… 41
　　SD03～05 …… 42
　　SD11・12 …… 42
　　SD24 …… 46
　　SD43 …… 46
　　SD63 …… 46
　　SD15～17 …… 48
　　SD21 …… 61
　　包含層出土遺物 …… 72
　　(5)　弥生時代以前のまとめ …… 79

3．中世の遺構・遺物について …… 82
(1) 掘立柱建物 …… 82
SB01～60 …… 82
まとめ …… 143
(2) 溝状遺構 …… 144
SD47 …… 144
SD48 …… 153
SD50 …… 153
SD51 …… 154
SD54 …… 158
SD66・67・69 …… 158
まとめ …… 160
(3) 土坑 …… 161
SK02 …… 161
SK04 …… 161
SK17 …… 162
SK18 …… 164
SK25 …… 171
SK26 …… 172
まとめ …… 173
(4) 井戸 …… 174
SE01 …… 174
SE02 …… 178
SE03 …… 180
SE04 …… 181
(5) 塚 …… 190
森1・2号塚 …… 190
森3号塚 …… 196
森4号塚 …… 200
森5号塚 …… 201
(6) 柵列状遺構 …… 210
SA01・02・05・07 …… 210
SA08 …… 211

(7) 柱穴出土遺物 …… 212
(8) 包含層出土遺物 …… 215
4．近世の遺構・遺物について …… 221
(1) 溝状遺構 …… 221
SD30～32 …… 221
(2) 土坑 …… 226
SK11 …… 226
(3) 井戸 …… 226
SE05 …… 226
(4) 柱穴出土遺物 …… 230
(5) 包含層出土遺物 …… 231
(6) 近世のまとめ …… 236
5．小結 …… 237
第3節 城岡地区 …… 248
1．遺跡の概要 …… 248
(1) 地形 …… 248
(2) 土層序 …… 251
2．弥生時代の遺構・遺物について …… 252
(1) 溝状遺構 …… 252
SD19 …… 252
SD20 …… 275
SD21～23 …… 277
SD24 …… 279
(2) 弥生時代のまとめ …… 283
3．中世の遺構・遺物について …… 285
(1) 掘立柱建物 …… 285
SB01～29 …… 285
(2) 溝状遺構 …… 312
SD02 …… 312
SD03 …… 312
SD04 …… 317
SD05 …… 318
SD06 …… 319

まとめ …… 319
(3) 土坑 …… 320
SK03 …… 320
SK04 …… 320
SK05 …… 331
SK06 …… 331
SK07 …… 336
SK08 …… 337
SK10・11 …… 338
(4) 土壙墓 …… 340
ST01 …… 340
(5) 不明遺構 …… 341
土器集中 …… 341
SX01 …… 342
(6) 柵列状遺構 …… 342
(7) 柱穴出土遺物 …… 342
(8) 包含層出土遺物 …… 346
4．小結 …… 369

挿 図 目 次

第 1 図　四国横断自動車道埋蔵文化財包蔵地（善通寺～豊浜）…… 4
第 2 図　延命遺跡位置図（1：50,000）…… 9
第 3 図　周辺地域の遺跡 …… 11
第 4 図　延命遺跡グリッド配置図 …… 17
第 5 図　八反地地区周辺遺跡範囲図 … 24
第 6 図　調査区微地形復原・グリッド配置図 …… 25
第 7 図　八反地地区土層模式図 …… 27
第 8 図　縄文時代後期～弥生時代前期遺構平面図 …… 29
第 9 図　SD07・08・37・38土層断面図 …… 31
第10図　SK01、SD37・38出土遺物実測図 …… 32
第11図　SD23・37・38出土遺物実測図（石製品）…… 33
第12図　包含層出土遺物実測図① …… 36
第13図　包含層出土遺物実測図② …… 37
第14図　包含層出土遺物実測図③ …… 38
第15図　包含層出土遺物実測図④ …… 39
第16図　SB09平・断面図 …… 40
第17図　SB10平・断面図 …… 41
第18図　弥生時代後期遺構平面図 …… 43
第19図　SD11・24・63土層断面図 …… 43
第20図　SD03·04·05出土遺物実測図 … 45
第21図　SD05出土遺物実測図（石製品）…… 46
第22図　SD11・12・24・43・63出土遺物実測図 …… 47
第23図　SD15～17平・土層断面図 …… 49
第24図　SD15上層出土遺物実測図① … 52
第25図　SD15上層出土遺物実測図② … 53
第26図　SD15上層出土遺物実測図③ … 54
第27図　SD15下層出土遺物実測図① … 56
第28図　SD15下層出土遺物実測図② … 57
第29図　SD15下層出土遺物実測図③ … 58
第30図　SD16上層・中層・下層出土遺物実測図 …… 60
第31図　SD17上層・下層出土遺物実測図 …… 61
第32図　SD21土層断面図 …… 61
第33図　SD21出土遺物実測図① …… 64
第34図　SD21出土遺物実測図② …… 65
第35図　SD21出土遺物実測図③ …… 66
第36図　SD21出土遺物実測図④ …… 67
第37図　SD21出土遺物実測図⑤ …… 68
第38図　SD21出土遺物実測図⑥ …… 69
第39図　SD21出土遺物実測図⑦ …… 70
第40図　SD21出土遺物実測図（石製品）…… 71
第41図　SD21出土遺物実測図⑧ …… 72
第42図　包含層出土遺物実測図（弥生土器）① …… 73
第43図　包含層出土遺物実測図（弥生土器）② …… 74
第44図　包含層出土遺物実測図（石製品）① …… 75
第45図　包含層出土遺物実測図（石製品）② …… 76

第46図　包含層出土遺物実測図（石製品）③ …… 77
第47図　包含層出土遺物実測図（石製品）④ …… 78
第48図　W－2東壁土層断面図 …… 80
第49図　SD15下層出土遺物実測図（石製品） …… 81
第50図　SD15・21・13土層断面図（S－13東壁） …… 81
第51図　SB01平・断面図 …… 82
第52図　中世遺構平面図 …… 83
第53図　SB02平・断面図 …… 85
第54図　SB02出土遺物実測図 …… 86
第55図　SB03平・断面図 …… 86
第56図　SB04平・断面図 …… 87
第57図　SB05出土遺物実測図 …… 87
第58図　SB05平・断面図 …… 88
第59図　SB06平・断面図 …… 89
第60図　SB07平・断面図 …… 90
第61図　SB08平・断面図 …… 91
第62図　SB11平・断面図 …… 92
第63図　SB12平・断面図 …… 93
第64図　SB13平・断面図 …… 94
第65図　SB14平・断面図 …… 94
第66図　SB15平・断面図 …… 95
第67図　SB16平・断面図 …… 96
第68図　SB17平・断面図 …… 97
第69図　SB18平・断面図 …… 97
第70図　SB18出土遺物実測図 …… 97
第71図　SB19平・断面図 …… 99
第72図　SB20平・断面図 …… 100
第73図　SB21平・断面図 …… 101
第74図　SB22平・断面図 …… 101
第75図　SB23平・断面図 …… 101
第76図　SB23出土遺物実測図 …… 101
第77図　SB24平・断面図 …… 103
第78図　SB25平・断面図 …… 104
第79図　SB25出土遺物実測図 …… 104
第80図　SB26平・断面図 …… 104
第81図　SB27平・断面図 …… 105
第82図　SB28平・断面図 …… 105
第83図　SB29平・断面図 …… 105
第84図　SB27出土遺物実測図 …… 105
第85図　SB28出土遺物実測図 …… 105
第86図　SB30平・断面図 …… 107
第87図　SB30出土遺物実測図 …… 109
第88図　SB31平・断面図 …… 110
第89図　SB32平・断面図 …… 110
第90図　SB33平・断面図 …… 111
第91図　SB33出土遺物実測図 …… 113
第92図　SB34平・断面図 …… 114
第93図　SB35平・断面図 …… 115
第94図　SB35出土遺物実測図 …… 117
第95図　SB36出土遺物実測図 …… 117
第96図　SB37出土遺物実測図 …… 118
第97図　SB39出土遺物実測図 …… 118
第98図　SB36平・断面図 …… 119
第99図　SB37平・断面図 …… 119
第100図　SB38平・断面図 …… 121
第101図　SB39平・断面図 …… 121
第102図　SB40平・断面図 …… 121
第103図　SB40出土遺物実測図 …… 123
第104図　SB41出土遺物実測図 …… 123
第105図　SB41平・断面図 …… 124
第106図　SB42平・断面図 …… 125
第107図　SB42出土遺物実測図 …… 125

第108図　SB43出土遺物実測図 …… 125
第109図　SB43平・断面図 …… 126
第110図　SB44出土遺物実測図 …… 126
第111図　SB44平・断面図 …… 127
第112図　SB45出土遺物実測図 …… 127
第113図　SB45平・断面図 …… 128
第114図　SB46平・断面図 …… 129
第115図　SB47平・断面図 …… 129
第116図　SB47出土遺物実測図 …… 129
第117図　SB48平・断面図 …… 131
第118図　SB50出土遺物実測図 …… 131
第119図　SB51出土遺物実測図 …… 131
第120図　SB49平・断面図 …… 132
第121図　SB50平・断面図 …… 133
第122図　SB51平・断面図 …… 133
第123図　SB52平・断面図 …… 133
第124図　SB53出土遺物実測図 …… 133
第125図　SB53平・断面図 …… 135
第126図　SB54平・断面図 …… 137
第127図　SB54出土遺物実測図 …… 138
第128図　SB55平・断面図 …… 138
第129図　SB56平・断面図 …… 138
第130図　SB57平・断面図 …… 139
第131図　SB58平・断面図 …… 140
第132図　SB59平・断面図 …… 141
第133図　SB59出土遺物実測図 …… 141
第134図　SB60出土遺物実測図 …… 141
第135図　SB60平・断面図 …… 142
第136図　SD47平面図（土器集中箇所）
…… 145
第137図　SD47出土遺物実測図① …… 146
第138図　SD47出土遺物実測図② …… 147
第139図　SD47出土遺物実測図③ …… 148
第140図　SD47出土遺物実測図④ …… 149
第141図　SD47出土遺物実測図⑤ …… 150
第142図　SD47出土遺物実測図⑥ …… 151
第143図　SD48・50出土遺物実測図 … 154
第144図　SD51出土遺物実測図① …… 156
第145図　SD51出土遺物実測図② …… 157
第146図　SD54出土遺物実測図 …… 158
第147図　SD66・67・69土層断面図 … 159
第148図　SD66・67・69出土遺物実測図
…… 159
第149図　SK02平・断面図 …… 161
第150図　SK02・04出土遺物実測図 … 161
第151図　SK17平面図 …… 162
第152図　SK17出土遺物実測図 …… 163
第153図　SK18平・断面図・土層図 … 165
第154図　SK18出土遺物実測図① …… 168
第155図　SK18出土遺物実測図② …… 169
第156図　SK18出土遺物実測図③ …… 170
第157図　SK18出土遺物実測図④ …… 171
第158図　SK25出土遺物実測図 …… 171
第159図　SK26平・断面図 …… 172
第160図　SK26出土遺物実測図 …… 173
第161図　SE01平・断面図 …… 175
第162図　SE01出土遺物実測図① …… 177
第163図　SE01出土遺物実測図② …… 178
第164図　SE02出土遺物実測図 …… 179
第165図　SE02平・断面図 …… 179
第166図　SE03平・断面図 …… 180
第167図　SB03出土遺物実測図 …… 180
第168図　SE04平・断面図、井戸枠内最下部
平面図 …… 183
第169図　SE04土層図・各平面図 …… 185
第170図　SE04出土遺物実測図① …… 188

第171図　SE04出土遺物実測図②　…… 189
第172図　森1～5号塚配置図　…… 191
第173図　森1・2号塚平・断面図　…… 193
第174図　森1・2号塚出土遺物実測図
…… 195
第175図　森3号塚平・断面図　…… 197
第176図　森3号塚平・断面図、出土鉄製品
位置図　…… 199
第177図　森3号塚出土遺物実測図　…… 200
第178図　森4号塚出土遺物実測図　…… 200
第179図　森5号塚平・断面図　…… 203
第180図　森5号塚平・断面図、出土鉄製品
位置図　…… 205
第181図　森5号塚出土遺物実測図①　… 207
第182図　森5号塚出土遺物実測図②　… 208
第183図　森5号塚出土遺物実測図③　… 209
第184図　SA01・02・07出土遺物実測図
…… 210
第185図　SA08出土遺物実測図　…… 211
第186図　柱穴出土遺物実測図①　…… 212
第187図　柱穴出土遺物実測図②　…… 213
第188図　柱穴出土遺物実測図③　…… 214
第189図　包含層出土遺物実測図①　…… 216
第190図　包含層出土遺物実測図②　…… 217
第191図　包含層出土遺物実測図③　…… 218
第192図　包含層出土遺物実測図（石製品）
…… 220
第193図　包含層出土遺物実測図（銅銭）
…… 220
第194図　近世遺構全体図　…… 222
第195図　SD30・31出土遺物実測図　… 223
第196図　SD31・32出土遺物実測図　… 224
第197図　SK11出土遺物実測図　…… 226
第198図　SE05平・断面図　…… 227
第199図　SE05出土遺物実測図　…… 229
第200図　柱穴出土遺物実測図　…… 230
第201図　包含層出土遺物実測図①　…… 232
第202図　包含層出土遺物実測図②　…… 233
第203図　包含層出土遺物実測図③　…… 234
第204図　包含層出土遺物実測図④　…… 235
第205図　包含層出土遺物実測図⑤　…… 236
第206図　八反地地区遺構変遷図①　…… 239
第207図　八反地地区遺構変遷図②　…… 241
第208図　八反地地区遺構変遷図③　…… 243
第209図　八反地地区遺構変遷図④　…… 245
第210図　城岡地区周辺遺跡範囲図　…… 248
第211図　調査区微地形復原・グリッド配置
図　…… 249
第212図　城岡地区土層模式図　…… 251
第213図　溝状遺構平面図　…… 253
第214図　SD19遺物出土状況図　…… 254
第215図　SD19～24土層断面図　…… 255
第216図　SD19出土遺物実測図（第二期）
…… 257
第217図　SD19出土遺物実測図（第三期）
…… 258
第218図　SD19出土遺物実測図（第四期）①
…… 260
第219図　SD19出土遺物実測図（第四期）②
…… 261
第220図　SD19出土遺物実測図（第四期）③
…… 263
第221図　SD19出土遺物実測図（第四期）④
…… 264
第222図　SD19出土遺物実測図（第四期）⑤
…… 265

第223図　SD19出土遺物実測図（第四期）⑥ …… 266
第224図　SD19出土遺物実測図（第四期）⑦ …… 267
第225図　SD19出土遺物実測図（第四期）⑧ …… 268
第226図　SD19出土遺物実測図（第四期）⑨ …… 269
第227図　SD19出土遺物実測図（第四期）⑩ …… 270
第228図　SD19出土遺物実測図（第四期）⑪ …… 271
第229図　SD19出土遺物実測図（第四期）⑫ …… 272
第230図　SD19出土遺物実測図（第四期）⑬ …… 273
第231図　SD19出土遺物実測図（第四期）（石製品） …… 274
第232図　SD20出土遺物実測図（石製品） …… 275
第233図　SD20出土遺物実測図 …… 276
第234図　SD21～23出土遺物実測図 … 278
第235図　SD24出土遺物実測図① …… 280
第236図　SD24出土遺物実測図② …… 281
第237図　SD24出土遺物実測図③ …… 281
第238図　SD24出土遺物実測図④ …… 281
第239図　SD24出土遺物実測図（石製品） …… 281
第240図　環濠推定図 …… 283
第241図　SB01平・断面図 …… 285
第242図　SB02平・断面図 …… 286
第243図　SB03平・断面図 …… 287
第244図　SB04平・断面図 …… 287
第245図　SB05平・断面図 …… 287
第246図　SB06平・断面図 …… 289
第247図　SB07平・断面図 …… 290
第248図　SB08平・断面図 …… 291
第249図　SB09平・断面図 …… 291
第250図　SB10平・断面図 …… 291
第251図　SB11平・断面図 …… 293
第252図　SB12平・断面図 …… 294
第253図　SB13平・断面図 …… 295
第254図　SB14平・断面図 …… 295
第255図　SB15平・断面図 …… 296
第256図　SB16平・断面図 …… 297
第257図　SB17平・断面図 …… 298
第258図　SB18平・断面図 …… 299
第259図　SB19平・断面図 …… 300
第260図　SB20平・断面図 …… 301
第261図　SB22平・断面図 …… 302
第262図　SB23平・断面図 …… 302
第263図　SB21平・断面図 …… 303
第264図　SB24平・断面図 …… 303
第265図　SB25平・断面図 …… 305
第266図　SB26平・断面図 …… 306
第267図　SB27平・断面図 …… 307
第268図　SB28平・断面図 …… 308
第269図　SB29平・断面図 …… 309
第270図　掘立柱建物出土遺物実測図 … 311
第271図　SD02出土遺物実測図（石・鉄製品） …… 312
第272図　溝に囲まれた掘立柱建物群 … 313
第273図　SD02出土遺物実測図 …… 315
第274図　SD03出土遺物実測図① …… 316
第275図　SD03出土遺物実測図② …… 317
第276図　SD04出土遺物実測図 …… 317

第277図　SD05出土遺物実測図 …… 318
第278図　SD06出土遺物実測図（石製品） …… 319
第279図　SK03出土遺物実測図① …… 321
第280図　SK03出土遺物実測図② …… 322
第281図　SK04平・断面図 …… 323
第282図　SK04出土遺物実測図① …… 324
第283図　SK04出土遺物実測図② …… 325
第284図　SK04出土遺物実測図③ …… 326
第285図　SK04出土遺物実測図（石製品）① …… 327
第286図　SK04出土遺物実測図（石製品）② …… 328
第287図　SK04出土遺物実測図（石製品）③ …… 329
第288図　SK04出土遺物実測図（石製品）④ …… 330
第289図　SK05出土遺物実測図 …… 332
第290図　SK05平面図 …… 333
第291図　SK06平面図 …… 335
第292図　SK06出土遺物実測図 …… 336
第293図　SK07出土遺物実測図 …… 337
第294図　SK08出土遺物実測図（石製品） …… 338
第295図　SK10・11出土遺物実測図 … 338
第296図　SK08出土遺物実測図 …… 339
第297図　ST01平面図 …… 340
第298図　ST01出土遺物実測図 …… 341
第299図　土器集中出土遺物実測図 …… 341
第300図　柱穴出土遺物実測図① …… 343
第301図　柱穴出土遺物実測図② …… 344
第302図　包含層出土遺物実測図① …… 352
第303図　包含層出土遺物実測図② …… 353
第304図　包含層出土遺物実測図③ …… 354
第305図　包含層出土遺物実測図④ …… 355
第306図　包含層出土遺物実測図⑤ …… 356
第307図　包含層出土遺物実測図⑥ …… 357
第308図　包含層出土遺物実測図⑦ …… 358
第309図　包含層出土遺物実測図⑧ …… 359
第310図　包含層出土遺物実測図⑨ …… 360
第311図　包含層出土遺物実測図⑩ …… 361
第312図　包含層出土遺物実測図⑪ …… 362
第313図　包含層出土遺物実測図⑫ …… 363
第314図　包含層出土遺物実測図⑬ …… 364
第315図　包含層出土遺物実測図⑭ …… 365
第316図　包含層出土遺物実測図（石製品）① …… 366
第317図　包含層出土遺物実測図（石製品）② …… 367
第318図　包含層出土遺物実測図（石製品）③ …… 368
第319図　城岡地区遺構変遷図① …… 371
第320図　城岡地区遺構変遷図② …… 373

表　目　次

第１表　四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査事業(発掘調査のみ) … 1
第２表　四国横断自動車道建設に伴う発掘調査の概要(1) …… 2

第3表　四国横断自動車道建設に伴う発掘調査の概要(2) …… 3
第4表　八反地地区遺構番号変更一覧表 …… 21
第5表　城岡地区遺構番号変更一覧表 … 23
第6表　八反地地区遺物観察表 …… 377
第7表　八反地地区溝状遺構一覧表 … 421
第8表　八反地地区土坑一覧表 …… 423
第9表　城岡地区遺物観察表 …… 425
第10表　城岡地区溝状遺構一覧表 …… 451
第11表　城岡地区土坑一覧表 …… 451

図　版　目　次

巻頭図版 (1)八反地地区森5号塚出土青磁碗
(2)城岡地区包含層出土青磁碗
(3)城岡地区包含層出土青磁碗
(4)八反地地区遺構出土常滑焼
図版1 (1)眉山・鳥越山・陣山遠景
(2)宮川遠景
図版2 (1)G－25　SD37・38（南西より）
(2)S－9　SD06・07・08(南より)
図版3 (1)W－9　SD07・08・09・10（北より）
(2)SD08土層断面
図版4 (1)SB09・10（北東より）
(2)S－5　SD04・05（北より）
図版5 (1)S－5　SD04・05（南西より）
(2)SD04・05土層断面（北より）
図版6 (1)G－41　SD63（西より）
(2)SD63土層断面
図版7 (1)S－13　SD15・16・17その他（南西より）
(2)S－13　発掘作業風景
図版8 (1)S－13　SD15・16・17(西より)
(2)SD15土層断面（西より）
図版9 (1)W－9　SD09土層断面(北より)
(2)S－13　SD15遺物出土状況
図版10 (1)K－13　SD16土層断面(東より)
(2)K－13　SD04・16土層断面（北東より）
図版11 (1)S－17　SD13・21・22(北より)
(2)SD21土層断面（南より）
図版12 (1)SD21土層断面（南より）
(2)SD21遺物出土状況
図版13 (1)SD21遺物出土状況
(2)SD21遺物出土状況
図版14 (1)SD21遺物出土状況
(2)SD21遺物出土状況
図版15 (1)G－33　SD51その他（東より）
(2)K－33　SB27～30、SD47（南西より）
図版16 (1)G－29　SB35・36（東より）
(2)G－29　SB35・36、SK18（東より）
図版17 (1)G・K－37　SB44～47(西より)
(2)A－37　SD69・70、SB52（南より）
図版18 (1)K－29　SD47、SK17（西より）
(2)K－29　SD47（北より）

図版19　(1)SD47遺物出土状況（西より）
(2)SD47土層断面
図版20　(1)A－37・41　SD69・70(北より)
(2)A－37・41　SD69・70(東より)
図版21　(1)G－29　SK18（南より）
(2)SK18土層断面（北より）
図版22　(1)SK18全景（北より）
(2)SK18近景（南より）
図版23　(1)SK18近景（西より）
(2)SK18遺物出土状況（西より）
図版24　(1)A－41　SK26・28、SB58（東より）
(2)SK26遺物出土状況（獣歯）
図版25　(1)SE01
(2)SE01曲げ物検出状況
図版26　(1)SE01曲げ物検出状況
(2)曲げ物取り上げ風景
図版27　(1)SE01曲げ物取り上げ風景
(2)SE01曲げ物取り上げ風景
図版28　(1)SE01曲げ物検出状況
(2)SE01遺物出土状況
図版29　(1)SE01木製品出土状況
(2)SE01竹製品出土状況
図版30　(1)SE01出土木製品
(2)SE01出土竹製品
図版31　(1)SE02検出状況
(2)K－29・33　発掘作業風景
図版32　(1)G－29　SE03検出状況
(2)SE03検出状況（断面）
図版33　(1)O－29　SE04（南より）
(2)SE04第1層除去後（南より）
図版34　(1)SE04第1・2層除去後(北より)
(2)SE04第1～7層除去後(南より)
図版35　(1)SE04井戸枠・石組検出状況
(2)SE04井戸枠上部板材検出状況
図版36　(1)SE04井戸枠内（埋土除去後）
(2)SE04井戸枠内
図版37　(1)SE04井戸枠内（遺物除去後）
(2)SE04井戸枠石組部
図版38　(1)SE04断ち割り
(2)SE04井戸枠
図版39　(1)SE04井戸裏込め状況
(2)SE04遠景
図版40　(1)森5号塚発掘作業風景
(2)森1～4号塚遠景
図版41　(1)森2号塚（西より）
(2)森2号塚（表土除去後・西より）
図版42　(1)森1号塚（西より）
(2)森1号塚（表土除去後・西より）
図版43　(1)森3号塚
(2)森3号塚（表土除去後）
図版44　(1)森3号塚（石棺出土状況）
(2)森3号塚石棺内遺物出土状況
図版45　(1)森3号塚石棺内遺物出土状況(西より)
(2)森3号塚石棺内遺物出土状況
図版46　(1)森3号塚版築土層断面
(2)森3号塚版築土層断面
図版47　(1)森4号塚（西より）
(2)森5号塚発掘作業風景
図版48　(1)森5号塚（西より）
(2)森5号塚（表土除去後）
図版49　(1)森5号塚（集石除去後）
(2)森5号塚石棺検出状況
図版50　(1)森5号塚（調査後）
(2)森5号塚調査後遠景

図版51　(1)G・K－25（南より）
(2)SE05石組検出状況
図版52　(1)SE05石組側面
(2)柱穴遺物出土状況
図版53　(1)柱穴遺物出土状況
(2)柱穴遺物出土状況
図版54　(1)柱穴遺物出土状況
(2)柱穴遺物出土状況
図版55　(1)柱穴柱根出土状況
(2)包含層遺物出土状況
図版56　(1)縄文時代晩期遺構出土遺物（SK01、SD07・08）
(2)SD23・37・38出土石製品
図版57　(1)包含層出土遺物（縄文時代後期）
(2)包含層出土遺物（弥生時代前期）①
図版58　(1)包含層出土遺物（弥生時代前期）②
(2)包含層出土遺物（弥生時代前期）③
図版59　包含層出土遺物（弥生時代前期）④
図版60　(1)SD03～05出土遺物
(2)SD11出土遺物
図版61　(1)SD15上層出土遺物
(2)SD15下層出土遺物①
図版62　SD15下層出土遺物②
図版63　SD15下層出土遺物③
図版64　SD15下層出土遺物④
図版65　SD21出土遺物①
図版66　SD21出土遺物②
図版67　SD47出土遺物
図版68　SD51出土遺物①
図版69　(1)SD51出土遺物②
(2)SD51出土遺物③
図版70　(1)SD51出土遺物④
(2)SD69出土遺物
図版71　SK18出土遺物①
図版72　SK18出土遺物②
図版73　(1)SK18出土遺物③
(2)SE01出土遺物
(3)SE02出土遺物
(4)SE04出土遺物①
図版74　(1)SE04出土遺物②
(2)SE04出土遺物③
(3)森2号塚出土遺物①
図版75　(1)森2号塚出土遺物②
(2)森5号塚出土遺物
(3)森5号塚集石出土遺物
(4)包含層出土遺物①
図版76　(1)包含層出土遺物②
(2)柱穴出土遺物①
図版77　(1)SD31出土遺物
(2)包含層出土遺物③
図版78　柱穴出土遺物②
図版79　(1)城岡地区遠景
(2)城岡地区発掘調査前風景
図版80　(1)城岡地区丘陵下遺構検出状況
(2)K～S－13・17　遺構検出状況（南より）
図版81　(1)K－13・17　遺構検出状況（南より）
(2)SD02・06～09（南より）
図版82　(1)SB14・15（南より）
(2)SB15（南より）
図版83　(1)SB14（南より）

(2)K·O－13・17　遺構検出状況
図版84　(1)SX01（南より）
(2)K·O－13・17　遺構検出状況（北より）
図版85　(1)SD03～06（南より）
(2)K－21　SK07・08（南より）
図版86　(1)SB21・26、SD11・12
(2)SB21・22、SD11・12
図版87　(1)SB21、SD11・12
(2)SB26
図版88　(1)SB29（南より）
(2)SB29（南より）
図版89　SB29柱穴土層断面
図版90　(1)SK10・11（西より）
(2)SK03（南より）
図版91　(1)SK05（東より）
(2)SK04（東より）
図版92　(1)SK04土層断面（南より）
(2)SK04土層断面（北より）
図版93　(1)ST01供献土坑副葬品出土状況
(2)ST01供献土坑副葬品出土状況
図版94　(1)O－20　土器集中
(2)O－20　土器集中遺物出土状況
図版95　(1)SD19～24（西より）
(2)SD19～24発掘作業風景
図版96　(1)SD19・20土層断面
(2)SD19・20土層断面
図版97　(1)SD19土層断面
(2)SD19土層断面
図版98　(1)SD19遺物出土状況
(2)SD19遺物出土状況
図版99　(1)SD19遺物出土状況
(2)SD19遺物出土状況
図版100　(1)城岡地区発掘作業風景
(2)城岡地区整理作業風景
図版101　(1)柱穴遺物出土状況
(2)柱穴遺物出土状況
(3)柱穴遺物出土状況
(4)柱穴遺物出土状況
(5)柱穴断面
(6)柱穴断面
図版102　(1)SD19第2層出土遺物
(2)SD19第3層出土遺物①
(3)SD19第3層出土遺物②
(4)SD19第4層出土遺物①
図版103　SD19第4層出土遺物②
図版104　SD19第4層出土遺物③
図版105　SD19第4層出土遺物④
図版106　SD19第4層出土遺物⑤
図版107　SD19第4層出土遺物⑥
図版108　(1)SD19第4層出土遺物⑦
(2)SD20出土遺物
(3)SD22出土遺物
図版109　(1)SD24出土遺物
(2)SD03出土遺物
図版110　(1)SK03出土遺物
(2)SK04出土遺物①
図版111　(1)SK04出土遺物②
(2)SK05出土遺物
(3)SK07出土遺物①
(4)SK07出土遺物②
(5)SK08出土遺物①
図版112　(1)SK08出土遺物②
(2)ST01出土遺物
(3)土器集中出土遺物
(4)包含層出土遺物①

図版113　柱穴出土遺物
図版114　包含層出土遺物②
図版115　包含層出土遺物③
図版116　包含層出土遺物④
図版117　(1)包含層出土遺物⑤
(2)城岡地区出土砥石
図版118　包含層出土遺物⑥
図版119　包含層出土遺物⑦
図版120　(1)発掘作業風景
(2)整理作業風景

付　図

付図 1　延命遺跡八反地地区遺構平面図(1)
付図 2　延命遺跡八反地地区遺構平面図(2)
付図 3　延命遺跡城岡地区遺構平面図
付図 4　延命遺跡八反地地区柱穴位置図(1)
付図 5　延命遺跡八反地地区柱穴位置図(2)

第１章　調査の経緯

第１節　横断道調査の経過

四国横断自動車道建設に伴う発掘調査は昭和58年２月から３月にかけて、多度郡条里の検出を目的として善通寺インター予定地付近で開始された。発掘調査実施前には、調査予定遺跡は、17遺跡・60,900㎡とみられていたが、昭和57年度の発掘で善通寺市金蔵寺下所遺跡が新たに発見され、かなりの増加が予想された。翌58年度には調査の基地として善通寺市原田町に「香川県埋蔵文化財発掘調査善通寺連絡事務所」を設置し、金蔵寺下所遺跡以下の発掘調査を本格的に実施するとともに、横断道予定路線内の事前調査を実施した。その結果、新たな遺跡の発見が相次ぎ、最終的には昭和62年度をもって24遺跡・211,500㎡の発掘調査を実施するに至った。各年度ごとの発掘調査にかかわる遺跡数・面積・人員・経費は第１表のとおりである。

報告書作成のための整理作業は昭和61年度から始まり、今年度で５年目を迎え、昨年度までに20遺跡・７冊の報告書を刊行し、今年度は永井遺跡および延命遺跡の報告書の刊行となった。来年度以降には２遺跡の報告を残すのみとなる。また、各遺跡の報告書とは別に、一般啓蒙用として、昭和60～62年度に『語りかける埋蔵文化財　いにしえの讃岐　Ⅰ～Ⅲ』を刊行している。

第１表　四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財調査事業　（発掘調査のみ）

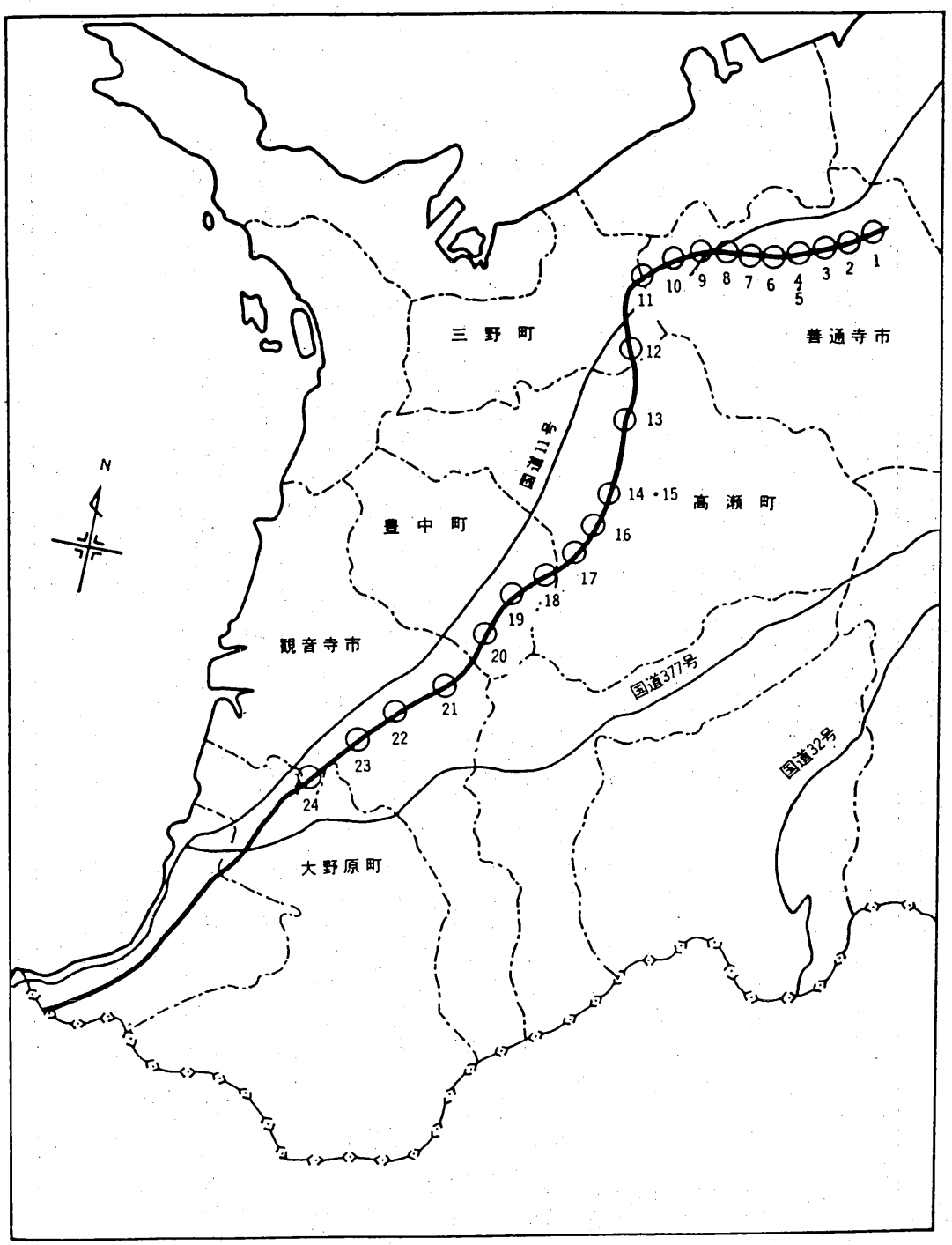
内容／年度	遺跡数	面積（㎡）	人員		発掘調査費（千円）	備考
			職員	嘱託		
57	1	1,300	2	1	8,600	
58	7	19,200	8（うち、係長1、庶務1）	4（うち、所長1）	140,000	
59	16	57,900	9（同上）	5（同上）	245,644	
60	14	78,500	10（同上）	7（同上）	312,500	
61	6	54,120	15（同上）	7（同上）	262,027	人員の内、職員２は報告書作成。報告書作成の経費は含まず。
62	1	480	7	0	1,920	報告書作成の経費は含まず。人員は報告書作成の人数。
合計	24	211,500			971,691	

第2表　四国横断自動車道建設に伴う発掘調査の概要(1)

No.	遺跡名（旧遺跡名）	所在地	面積(㎡)	調査期間	時代	遺構	主な出土品	備考
1	金蔵寺下所遺跡	善通寺市金蔵寺町下所	17,000	58. 4. 1～60. 2.28	弥生時代 奈良・平安時代 中世	包含層、自然河川 溝、掘立柱建物跡30以上 溝、掘立柱建物跡５以上	須恵器、土師器、瓦器、木製品（斎串、人形、馬形、刀形、船形、曲物など。以上奈良時代）、わらじ（奈良時代）	
2	稲木遺跡　C地区	善通寺市稲木町下川原	4,000	59. 4. 1～60. 3.30	弥生時代 古墳～平安時代	竪穴住居跡５、集石墓９ 土壙墓３、壺棺墓10 掘立柱建物跡５、埋甕	弥生土器、土師器、須恵器、銅鏡片２、 承和昌宝５	横断道報告Ⅵ
3	稲木遺跡　B地区	善通寺市稲木町西角	17,000	59. 9.17～60. 2.28	弥生時代 飛鳥・白鳳時代 平安時代	土拡４ 掘立柱建物跡32（内倉庫６）、溝 掘立柱建物跡４	土師器、須恵器、鉄製鋤先	横断道報告Ⅵ
4	稲木遺跡　A地区	善通寺市下吉田町本村東・下所東	300	58. 6.29～59. 2.14	弥生時代 古代	溝 溝	縄文晩期土器、弥生土器、磨製石庖丁	横断道報告Ⅵ
5	永井遺跡	善通寺市中村町島田・榎田、下吉田町下所西	33,300	60. 5. 7～61.12.24	縄文時代 弥生時代 中・近世	自然河川、土拡 溝、土拡、掘立柱建物跡３ 掘立柱建物跡12、溝、土拡	縄文土器（彦崎ＫⅠ、ＫⅡ式、黒土ＢⅠ式）、土偶１、耳飾２、打製石斧多数、杭14、椀１、鳥形木製品１、堅果類多数（以上縄文時代）	横断道報告Ⅸ
6	中村遺跡	善通寺市中村町筆岡	9,000	59. 7. 3～59. 9.17	縄文・弥生時代 平安時代 中世 近世	自然河川 溝２ 掘立柱建物跡15、溝、土拡 溝、土拡	銅印「貞」	四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第１冊（以下、横断道報告Ⅰと略称）62.3.31刊行
7	乾遺跡（吉原B_2）	善通寺市中村町乾	2,100	60. 9. 2～60.11.20	弥生時代 近世	湧水池状遺構、自然河川 土拡、自然河川	弥生前期土器	横断道報告Ⅰ
8	上一坊遺跡（吉原B_1）	善通寺市吉原町上一坊	2,800	60.11.13～61. 1.24	中世 近世	掘立柱建物跡24、井戸１、土拡、溝 井戸２、土拡、溝	近世陶磁器	横断道報告Ⅰ
9	矢ノ塚遺跡	善通寺市吉原町矢ノ塚、碑殿町矢ノ塚	11,800	59.10. 8～60. 8.30	弥生時代 奈良時代 中世	竪穴住居跡1、掘立柱建物跡12、土拡、溝 掘立柱建物跡17、溝 掘立柱建物跡30以上、井戸２、土拡、溝	弥生土器、須恵器、剣形土製品１、鳥形土製品１、分銅形土製品４、石帯	横断道報告Ⅲ
10	西碑殿遺跡	善通寺市碑殿町三反畑	5,200	60. 2. 4～60. 4.30 61. 7.28～61. 8.11	弥生時代 奈良時代 中世 近世	掘立柱建物跡数棟 掘立柱建物跡数棟 掘立柱建物跡数棟 一字一石経塚	弥生土器、須恵器 一字一石経、京焼風陶器碗１（以上経塚）	
11	深尾石棺群	三豊郡三野町大見深尾	500	59. 9.11～59.10.23				路線内には存在せず
12	道免窯跡	三豊郡三野町大見道免丸尾	100	59. 9.11～59.10.23	飛鳥・白鳳時代	灰原	須恵器坏・高坏・壺・甕	横断道報告Ⅱ
13	北条遺跡	三豊郡高瀬町上高瀬北条	100	60. 5. 9				路線内には存在せず 横断道報告Ⅱ

第3表　四国横断自動車道建設に伴う発掘調査の概要(2)

No.	遺跡名(旧遺跡名)	所在地	面積(㎡)	調査期間	時代	遺構	主な出土品	備考
14	利生寺遺跡(利生寺遺跡Ⅰ・Ⅱ区)	三豊郡高瀬町上勝間砂古	3,200	60. 5.22～60. 7.18	弥生時代 中世 近世	土拡5 竪穴住居跡1、ピット 掘立柱建物跡1、井戸1，土拡4	弥生後期土器、中・近世土器	横断道報告Ⅱ
15	大門遺跡(利生寺遺跡Ⅲ区)	三豊郡高瀬町上勝間砂古	5,500	60. 7.22～61. 1.28	古墳時代 中世 近世	竪穴住居跡23、掘立柱建物跡1、土拡6、溝23 礎石建物跡1、掘立柱建物跡13、土拡6、石組井戸1、溝9 溝1	須恵器、土師器、中世土器、鞴の羽口、鉄滓	横断道報告Ⅱ
16	利生寺古墳	三豊郡高瀬町上勝間砂古	700	60.12. 2～61. 3.17	古墳時代	横穴式石室1	須恵器、耳環	横断道報告Ⅱ
17	矢ノ岡遺跡(土佐神社跡)	三豊郡高瀬町上勝間矢ノ岡	2,600	61. 1.28～61. 2.27	古墳時代 中世	竪穴住居跡1 掘立柱建物跡6、溝6	八稜鏡1	横断道報告Ⅱ
18	四ツ塚古墳	三豊郡豊中町笠田笠岡	1,000	59. 4.16～59. 5.14	古墳時代	横穴式石室1	須恵器、耳環	横断道報告Ⅳ
19	財田古墳	三豊郡豊中町上高野	1,000	58. 9.26～58.11.30	古墳時代	横穴式石室1	須恵器、耳環、鉄斧、鉄釘	横断道報告Ⅳ
20	延命遺跡	三豊郡豊中町上高野大地・八反地	18,000	58.11.28～60. 5.15 61. 9. 1～61. 9.30	弥生時代 中世	溝 掘立柱建物跡、土拡、土壙墓、塚、井戸3、柵	土師器、須恵器、瓦器、青磁	本書
21	一の谷遺跡群(刈田郡条里)	観音寺市古川町、中田井町、本大町	36,100	60. 5.15～61.12.25	弥生時代 古墳時代～近世	竪穴住居跡31、土拡、溝 掘立柱建物跡33、土拡、土壙墓、溝	弥生土器(前期、後期)、平形銅剣片、銅鏡片、近世陶磁器	横断道報告Ⅶ
22	石田遺跡	観音寺市池ノ尻町石田	17,200	60. 5. 1～61. 1.11	弥生時代 古墳時代 中世	土拡 掘立柱建物跡3 掘立柱建物跡17、土拡、溝	土師器、須恵器、瓦器、緑釉陶器、黒色土器	横断道報告Ⅴ
23	長砂古遺跡	観音寺市池ノ尻町大長	8,900	61. 1.13～61. 8.12	弥生時代 古墳時代 中世	竪穴住居跡1 横穴式石室1 溝、掘立柱建物跡5	弥生土器、須恵器、玉類、馬具、武器、瓦器	横断道報告Ⅴ
24	柞田八丁遺跡(中姫遺跡)	観音寺市柞田町八丁	14,000	61. 4. 3～62. 1.27 62. 6. 5～62. 6.17	古墳時代 中世	竪穴住居跡7、掘立柱建物跡1、横穴式石室1、溝、土壙墓2 掘立柱建物跡47	須恵器、土師器、耳環、越州窯青磁	横断道報告Ⅴ
	合計		211,500	58. 2. 8～62. 1.27 62. 6. 5～62. 6.17 (調査期間は57年度の多度郡条里の発掘を含む。)				24遺跡



第１図　四国横断自動車道埋蔵文化財包蔵地（善通寺～豊浜）

第2節　調査に至る経過

昭和57年度に多度郡条里下所地区の予備調査から開始した四国横断自動車道（善通寺～豊浜）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査事業は、昭和58年度に財田古墳の調査終了後、引き続き延命遺跡（城岡地区）の調査に着手した。

発掘調査は、この場所に戦国時代の香川右馬助の拠城である高野城に関係がある遺跡の存在を想定して行われたが、この段階では遺跡の内容が十分に把握されていなかったので、予備調査から実施した。なお、この延命の岡には古墳時代後期の延命古墳があり、また、延命院・豊姫神社が後世に建てられている。

予備調査の結果、延命遺跡城岡地区では中世の遺構が検出された。八反地地区では当初森1～5号塚が確認されており、その調査途中で中世の遺構が周辺に広がることが確認された結果、周辺の予備調査が行なわれた。

以上の結果、城岡地区は丘陵上と丘陵下を含め5,000㎡が、八反地地区は13,000㎡が調査対象面積として発掘調査が実施された。

発掘調査は城岡地区・八反地地区を合わせて昭和58年11月28日に開始され、昭和60年5月15日に終了した。しかし宅地部分については、昭和61年9月1日～30日までの期間に調査を実施した。

延命遺跡の整理作業は、昭和62年度に行なわれ、平成2年度に報告書を刊行することができた。

延命遺跡の調査・整理の体制は次の通りである。

昭和58年度

総括　課　長　　遠藤　　啓
　　主　幹　　林　　茂
　　副主幹　　松本　豊胤
庶務　係　長　　下河　芳樹
　　主任主事　酒井　幸子
　　主　事　　前田　和也（6.1～）

調査　善通寺連絡事務所
　　所　長　　石塚　徳治
　　係　長　　伊沢　肇一
　　主任技師　池内　右典
　　　　大山　真充
　　嘱　託　　片桐　孝浩

昭和59年度

総括　課　長　　遠藤　　啓（～11.25）
　　　　磯田　文雄（11.26～）
　　主　幹　　林　　茂

主　幹　松本　豊胤

課長補佐　中村　仁

庶務　係　長　下河　芳樹（～5.31）
　　宮谷　昌之（6.1～）

主任主事　酒井　幸子

主　事　前田　和也

調査　善通寺連絡事務所

所　長　石塚　徳治（～4.30）
　　入江　久（5.1～）

係　長　伊沢　肇一

文化財専門員　岸上　康久

主任技師　池内　右典
　　真鍋　昌宏

嘱　託　片桐　孝浩

昭和60年度

総括　課　長　磯田　文雄（～12.20）

教育次長
課長事務取扱　樫原　悠（12.21～）

主　幹　松本　豊胤

課長補佐　片山　堯

庶務　係　長　宮谷　昌之

主任主事　前田　和也
　　酒井　幸子（～5.31）

主　事　松下由美子（6.1～）

調査　善通寺連絡事務所

所　長　入江　久

係　長　伊沢　肇一

文化財専門員　岸上　康久

技　師　西岡　達哉

嘱　託　田淵　裕司

昭和61年度

総括　課　長　廣瀬　和孝

主　幹　松本　豊胤

課長補佐　片山　堯

庶務　係　長　宮谷　昌之

主任主事　前田　和也

主　事　松下由美子

調査　善通寺連絡事務所

所　長　入江　久

係　長　伊沢　肇一

昭和62年度

総括　課　長　廣瀬　和孝

課長補佐　片山　堯（～5.31）
　　高木　尚（6.1～）

副主幹　小原　克巳（6.1～）

庶務　係　長　　宮谷　昌之
　　主任主事　前田　和也
　　主　事　　松下由美子（～5.31）
　　三宅　浩司（6.1～）
　　水本久美子（6.1～）

整理　善通寺連絡事務所
　　係　長　　渡部　明夫
　　技　師　　片桐　孝浩

平成２年度

文化行政課
総括　課　長　　太田　彰一
　　課長補佐　菅原　良弘
　　副主幹　　野網朝二郎
総務　係　長　　宮内　憲生
　　主任主事　横田　秀幸
　　主　事　　水本久美子（～5.31）
　　石川恵三子（6.1～）
埋蔵文化財　係　長　　大山　真充
　　主任技師　岩橋　　孝
　　技　師　　北山健一郎

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
総括　所　長　　十川　　泉
　　次　長　　安藤　道雄
総務　係長（事務）　加藤　正司
　　主査（土木）　山地　　修
　　主任主事　黒田　晃郎
　　三宅　浩司（～5.31）
　　主　事　　斉藤　政好（6.1～）
　　俣野　英二（～5.31）
　　三谷　浩二（6.1～）
整理　係　長　　渡部　明夫
　　技　師　　片桐　孝浩

調査に携わっていただいた方は次の通りである。

安藤　照枝	池北アサエ	池北　米市	池北チヨキ	池北ミツギ
石川　陽一	井上　和子	井上　　久	岩本　長造	大西　真一
大西　末子	大塚伊知雄	大平　早苗	大森　秀夫	大森　良子
小栗　重一	尾崎　竹男	尾崎マサエ	小田　良子	小野マスミ
片山　恭子	賀上　久江	川西ハルミ	北山多佳子	業天　　勝
香西　正晴	斉藤　菊男	斉藤　裕美	佐藤　義顕	篠原スミ子
島田　義見	白井　テル	白井　正之	資延　哲子	関　　展子
十河　　幸	曽川都治酒	曽根　康世	高橋　千恵	高橋　　守
谷生八重子	谷田　政一	田淵　裕司	造酒　　茂	筒井シゲミ
筒井　康夫	鳥取美智子	鳥取　義雄	中尾　康顕	中　　道子
西宇千鶴子	西岡シゲ子	西岡シゲミ	西岡福太郎	西岡フジエ
西岡ヨシエ	西脇　千春	西脇　　智	則包　重徳	野田ヒサノ
長谷川国一	林　　広	藤谷　　優	細川　敏一	細川　倫子
牧　　利光	馬渕加代子	馬渕　豊子	三谷美喜蔵	宮武　久江

森　ミチエ	矢野賀寿美	矢野　清美	山崎　秀一	山脇　高明
横内　正弘	吉田エミ子			

（以上50音順）

整理に携わった方は次の通りである。

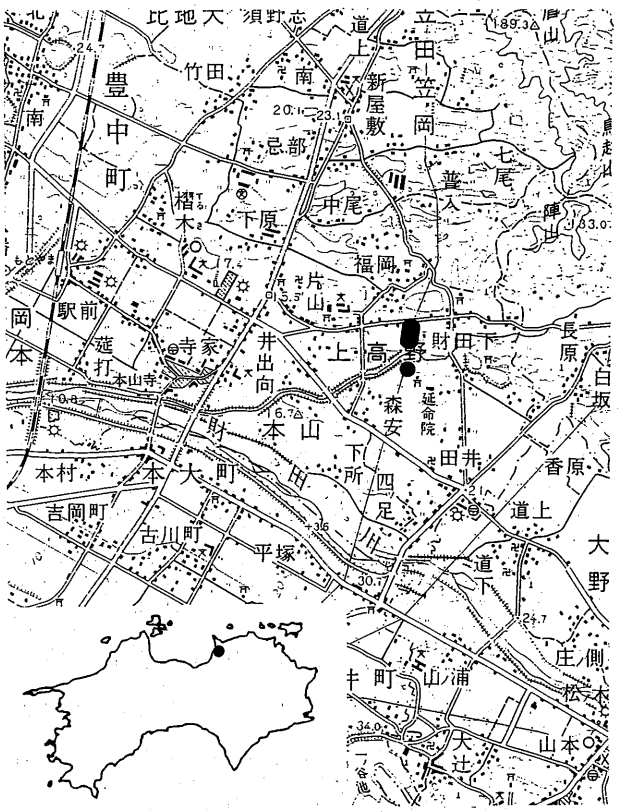
石川ゆかり	岩井　弘恵	岡田　照美	尾形ひとみ	小畑三千代
葛西　　薫	鎌谷　周子	佐藤　明美	塩崎　訓子	鶴岡　園実
東條　俊子	藤堂　収子	戸川　昌代	白玖　昇子	長谷川郁子
林　　肇子	永森　尚子	藤田由紀子	藤原ゆかり	細川　倫子
真井　典子	三谷　和子	三谷　由美	矢野日出子	山先　陽子
山下登志子	横田　周子	若山　淳子		

（以上50音順）

第２章　遺跡の立地と環境

(1)　地理的環境

香川県には大きく分けて三豊平野、善通寺・丸亀・坂出平野、高松平野、志度平野の４つの平野がある。これらは阿讃山脈から瀬戸内海に延びる尾根によってそれぞれ独立した平野を形成している。香川県の一番西端に位置する三豊平野は、阿讃山脈を源とする諸河川（財田川・柞田川・高瀬川）などが北流し、長期間にわたる氾濫、堆積の末に形成した沖積地である。この三豊平野の北西に三豊郡豊中町は位置する。同町は西に七宝山（445.0m）、東に眉山（189.4m）・鳥越山（187.0m）・陣山（133.0m）からなる連山を控え、そこより派生した丘陵およびその延長である低丘陵地、そしてそれらに挟まれた財田川の支流である竿川・宮川が流れる平野部によって構成されている。地勢はほぼ南に緩傾斜しているため、明るく温暖で生活環境には適している。現在までに豊中町内で発見されている遺跡は、この連山より派生した丘陵上および七宝山の裾部に集中する。



第２図　延命遺跡位置図（１：50,000）

今回宮川添いに延びる平野部とその対岸にある独立丘陵上に四国横断自動車道が建設されることとなった。この辺りは平野部であるが条里制の地割りが延びてきておらず古代において開墾が及んでいないところである。当町の東部は小連山や丘陵地帯をなし、北西に横たわる七宝山は燧灘に接しているので町の北から南への中央地帯は古来、香川県と愛媛県を結ぶ交通の要路にあたっている。

(2)　歴史的環境

三豊平野において旧石器時代の遺跡はないが一の谷遺跡群、石田遺跡また伊吹島などにおいて遺物が出土している。縄文時代になると後期に樋ノ口遺跡、晩期に室本遺跡、石田遺跡、延命遺跡などに広がりを見せ、弥生時代前期になって室本遺跡に九州から弥生の波が押し寄せるのであ

る。そして水稲耕作に適した湿地を求め海岸部から内陸部へと生活範囲を広げていくのである。

旧石器時代

豊中町において旧石器時代の遺跡は現在のところ確認されていない。同じ三豊平野で隣接する観音寺市においては一の谷遺跡群の溝状遺構よりナイフ型石器[註1]が、石田遺跡では有舌尖頭器とチャート製の細石刃[註2]が出土している。また、瀬戸内海に浮かぶ伊吹島よりナイフ型石器が表採されている。

縄文時代

香川県下で発見されている縄文時代の遺跡26・27ヵ所のうち11ヵ所は三豊地区内の海辺や島に所在する。早期は、仁尾町の小蔦島遺跡、南草木遺跡、前期は豊浜町の院内遺跡、中期は詫間町の西浜遺跡・蟻の首遺跡・香田遺跡、荘内半島の大浜・箱・生里の三遺跡、晩期は観音寺市の室本遺跡があり、縄文時代全般にわたる。豊中町では現在まで縄文時代の遺跡は発見されていないが今回の延命遺跡の調査で後期と晩期の遺物が出土している。

弥生時代

豊中町での弥生時代の遺跡は大字上高野の延命山・茶の岡・下原岡、大字岡本では不動滝から注ぐ滝下川の流域や天神、大字下高野では大谷川の流域、比地大では政本、笠田地区では天神山の南麓・野津午などがある。正式な発掘調査はされていないので詳細は不明であるが上高野の茶の岡は、高坏・壺・三脚土器などの弥生土器、紡錘車、石鏃・石斧・石包丁・石錐・石錘などの多量の遺物が出土している。延命山遺跡は陣山から派生する尾根が南方に延びた部分に位置する遺跡で、開墾作業中に発見され、大型の打製石鏃・石包丁・弥生土器などが多量に出土した。大字岡本の不動滝から天神地区にかけての遺跡は豊中町でも最大規模の弥生時代中期の集落址と考えられる。弥生時代の集落の居住地選定の条件を、山麓または丘陵状で水捌けがよいところ、近くに清水があるところ、背後に山または林があり狩猟に適したところ、また水田可能地が近くにあるところなどとすると岡本遺跡は、その条件全てを充たす場所にある。

また、弥生時代の遺跡を広く三豊平野で見てみると前期では香川県最古の弥生土器が出土した観音寺市室本の室本遺跡がある。また、大野原町中姫遺跡でも前期の土器が出土している。中期になると荘内半島最高部標高352mの紫雲出山山頂に高地性集落として著名な紫雲出山遺跡が出現する。また、三豊平野とその山間部では銅鐸・銅剣・銅矛などの青銅器が出土しており、県内でも遺跡が集中している地域のひとつである。

古墳時代

前方後円墳の分布密度が高い香川県において、三豊平野はその分布が極めて少なく、かわって後期の群集墳が密集しているという特徴があげられる。

さて、豊中町と観音寺市を分ける七宝山塊の南麓に近い傾斜面に、箱式石棺・壺棺を主とした墳墓群がある。その中の一基、鹿隈鑵子塚古墳は推定径24mの円墳であるが、県教委の調査によ

第 3 図　周辺地域の遺跡

1．宮山窯跡（古墳・ 5 世紀）
2．道音寺跡（奈良）
3．興隆寺石塔群（室町）
4．下高野古墳群（古墳・後期）
5．小円古墳（古墳・後期）
6．原谷古墳（古墳・後期）
7．道上古墳（古墳・後期）
8．野津午古墳（古墳・後期）
9．帰来古墳（古墳・後期）
10．御本祖古墳（古墳・中期）
11．宮脇遺跡（ ― ）
12．四ツ塚古墳群（古墳・後期）
13．室本古墳（縄文・晩期、弥生・前期、古墳・前期）
14．丸山古墳（古墳・中期）
15．経塚古墳（古墳・後期）
16．高屋寺跡（奈良）
17．なつめの木貝塚（縄文・早期）
18．岡本遺跡（弥生・中期）
19．大塚古墳（古墳・中期）
20．妙音寺跡（奈良）
21．財田古墳群（古墳・後期）
22．延命古墳（古墳・後期）
23．延命遺跡
　①八反地地区（縄文・晩期、弥生・前後期、古代、中世、近世）
　②城岡地区（縄文・晩期、弥生・後期、中世）
24．高沢古墳群（古墳・後期）
25．白坂古墳群（古墳・後期）
26．興昌寺山古墳群（古墳・後期）
27．鹿隈古墳群（古墳・前期）
28．村黒遺跡（弥生・後期～古墳）
29．樋ノ口遺跡（縄文・後期，弥生・前期）
30．一の谷遺跡群
　①平塚地区（弥生・前後期、近世）
　②香門地区（中世）
　③竹道地区（弥生・前期、中世）
　④山の前地区（中世）
31．古川遺跡（弥生・中期）
32．石田遺跡（古墳・後期～中世）
33．石ノ経遺跡（弥生・後期）
34．古川下所遺跡（弥生・後期）
35．向井・西の岡遺跡（弥生・後期）
36．青塚古墳（古墳・中期）
37．辻遺跡（弥生）
38．長砂古墳跡（縄文・晩期、弥生・前中後期、古墳・後期）
39．母神山古墳群（古墳・後期）
40．久染遺跡（弥生・後期）
41．柞田八丁遺跡（古墳・後期）
42．小天皇塚古墳（古墳）
43．中姫遺跡（弥生・前期）
44．百々古墳（古墳・後期）
45．幸助藪遺跡（古墳）
46．立石古墳（古墳）
47．上野古墳群（古墳）
48．辻古窯址群（古墳・後期）
49．藤の谷遺跡（弥生・中期）
50．小森塚古墳群（古墳・後期）
51．道下古墳群（古墳・後期）
52．椀貸塚古墳（古墳・ 6 世紀末）
53．角塚古墳（古墳・ 7 世紀頃）
54．平塚古墳（古墳・後期）
55．役場南側古墳（古墳）
56．宗塚古墳（古墳・後期）
57．赤岡山古墳（古墳）
58．経塚古墳（古墳・ 6 世紀中頃～ 7 世紀初頭）
59．藤目山古墳群（古墳・後期）
60．藤目城（中世）
61．岩鍋遺跡（弥生・中期）
62．豆塚古墳群（古墳）
63．雲岡古墳（古墳・ 7 世紀）
64．西の後古墳群（古墳）
65．王塚古墳（古墳）
66．福田原古墳（古墳）
67．竜王山古墳（古墳）

り、箱式石棺の流れをくむと思われる特殊な形の竪穴式石室が検出されている。墳丘中央部にも箱式石棺があったと伝えられており、工事の際、板状鉄斧と「王」字銘を有する鏡片が採集されている。また、当古墳の北東約300mに前ノ原墳墓群がある。その実態は不明確であるが、弥生時代から古墳時代前期にかけての墳墓群の可能性が強い。

この七宝山塊から迫り出した尾根の頂部に半壊した丸山古墳がある。古墳時代中期半ば頃に築造された古墳と考えられるが、削り取られた墳丘の断面に河原石で築かれた竪穴式石室と縄掛突起を持つ石棺の小口部が露出している。この石棺の石材は、九州の阿蘇溶結凝灰岩が使用されている。

この七宝山塊の南、財田川と柞田川に挟まれた低丘陵地の裾に県内では数少ない周濠を廻らした前方後円墳の青塚古墳がある。未調査のため詳細は不明であるが、5世紀半ば頃に築造された古墳と考えられる。この石棺も丸山古墳と同様縄掛突起を持った石棺で、石材も九州・阿蘇溶結凝灰岩を使用している。

後期になると、三豊平野のあちこちで群集墳が造営される。

そのひとつが観音寺市にある標高約92mの独立丘陵に50数基の古墳が分布する母神山古墳群である。これは三豊平野では最大規模であるが、この丘陵の北西部に中期以後の築造と思われる前方後円墳の瓢箪塚古墳がある。これが円墳群と同一系譜のものであるかどうかは不明である。

さらに、三豊平野の南に位置する三豊郡大野原町に椀貸塚古墳・角塚古墳・平塚古墳と呼ばれる三基の巨大古墳がある。これら三基を含めて大野原古墳群はかつて200基近く存在していたが、近世の大規模な新田開発の際その多くが破壊されたものと思われる。

その他の後期の群集墳は、三豊平野を取り囲む山稜・台地上・丘陵上等に多く点在する。

さて、豊中町内の古墳時代の遺跡は、後期の群集墳が多い。しかし、ほとんどの古墳は後世に破壊を受けており、築造時の姿をとどめているのは大塚古墳・延命1号墳だけである。これらの古墳は発掘調査が行なわれていないため詳細は定かではない。

七宝山南西麓に占地する西岡古墳群・よしたけの塚は円墳で、開墾者の話によると、金環・勾玉・青銅鏡・須恵器等が出土したという。

上高野の延命古墳1号墳は、延命の岡の南隅にある延命院の境内に占地している円墳である。石室は片袖式の横穴式石室で、副葬品については全く不明である。

また同地区にある大塚古墳は、陣山の尾根が西に延びた丘陵上に築かれており、当古墳のさらに西にも数基の円墳があったということである。後世の削平により墳形が変わっているが、県内でも珍しい古墳時代中期の上円下方墳である。円筒埴輪、須恵器の坏などが出土したらしいが所在は不明である。

御本祖古墳は、古墳時代中期の周りに周濠を持った三豊平野においては数少ない前方後円墳である。ここは大正時代に発掘調査が行なわれており、その際石棺、鉄刀、鉄剣が出土したようである。笠岡地区にある四つ塚古墳は、四基の群集墳で鳥越山の尾根が西に延びた基部に築造されている。四基とも円墳で、須恵器の壺・坏蓋・横瓶などが出土している。その他後期古墳として原谷古墳、野津午古墳、道上古墳、財田古墳群、堂の前古墳、小円古墳群、帰来1号墳・2号墳等が確認されているが、その規模はいずれも小さく、分布密度も希薄で後世の開墾などでほとんど破壊されているようである。

歴史時代

我国では後期古墳の最終段階頃に仏教文化を積極的に受容し始める。これは讃岐国でも同様で、古代寺院の分布密度が濃いということでも証明できる。その仏教文化の影響の下で造営されたのが妙音寺と道音寺である。妙音寺は豊中町上高野に所在する。発掘調査の際、十一葉単弁軒丸瓦（高句麗系古瓦）、八葉単弁軒丸瓦（山田寺式）等が出土しており、その創建年代は飛鳥時代後期もしくは白鳳時代前期と推定されている。道音寺は豊中町大字笠田笠岡字天神に位置する。ここからは複弁蓮華文鐙瓦が出土しており、創建年代は奈良時代を下らないものと思われる。

第3章　延命遺跡

第1節　調査の経過

延命遺跡は宮川を挟み城岡地区（5,000㎡）と八反地地区（13,000㎡）に分けられる。

城岡地区は「延命の丘」と通称される独立低丘陵の西北端に位置している。ここは、室町時代から戦国時代にかけて多度・三野・豊田郡を領有していた香川氏支配下の香川右馬助の居城である高野城に関係する居館であると言われているが、高野城跡を城岡の北東1.5㎞に位置する陣山に比定する説や、そこから派生する丘陵上に比定する説などさまざまであることから、今回の調査は文献資料にあまり名を残さない高野城の姿を浮きだすものとして重要視されている。そのためまず手掘りによるトレンチ調査で遺構の密度を確認した。その後調査対象面積5,000㎡について本調査が開始された。

八反地地区は、城岡地区の調査中に塚が5基確認されていたことから、同時並行で発掘調査を実施した。調査の結果多数の柱穴を確認したのが契機となり、予備調査を行なったところ遺構が検出されたので13,000㎡について本調査が行なわれることとなった。

本調査は城岡地区・八反地地区を合わせて昭和58年11月28日に開始され、昭和60年5月15日に終了した。しかし、宅地部分については一時中断し、昭和61年9月1日～30日までの期間に調査を実施した。

調査の方法としては、日本道路公団の設置したセンター杭・幅杭をもとに、国土地理院国土座標に準拠し、20mメッシュを基本とする調査区の設定を行なった。

調査区設定に当たっては、5×5mを小区画として、南北にアラビア数字を、東西にアルファベットをつけ、20×20mを大区画として北西隅の記号をその大区画の名称とした（第6図）。

また、各遺構番号は、北から振り直した結果、昭和58・59年度の『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査実績報告』とは若干異なっている（第4・5表）。

調査の詳細な経過については調査日誌抄で記述する。

調　査　日　誌　抄

延命遺跡の調査は昭和58年11月28日から昭和60年5月15日にかけて行なわれた。また宅地部分については一時調査を中断して昭和61年9月1日から9月30日にかけて行なわれた。

昭和58年

11月24日～30日

豊中町財田古墳終了後、延命遺跡にプレハブを移転する。28日より延命遺跡城岡地区に遺構確認のためのトレンチをあける。まず丘陵下から実施する。各トレンチの表土

剝ぎおよび第2層の発掘を開始する。
包含層より土師器・須恵器が多数出土している。

12月1日～27日
寒さは厳しいものの晴天の日が続き、調査は順調に進む。各トレンチの発掘および調査済みのトレンチの土層図・平面図・写真撮影を行なう。そして遺構の検出されたトレンチを拡張し本調査に入る。遺構の検出されなかったトレンチを埋め戻す。
丘陵上に杭打ちを行なう。
つづけて丘陵上のトレンチ（O－19～Q－19）を調査する。
O列・P列の杭打ちを行ない、丘陵上を20mメッシュの調査区に切り替えて調査を実施する。

昭和59年
1月5日～27日
今月は2回大雪のため作業を中止する。丘陵下の調査に並行して丘陵上のトレンチ確認調査も実施する。丘陵下では中世後半頃の柱穴を検出した。丘陵上でも中世頃の柱穴・溝状遺構などの遺構を検出した。
N・P・Q列の調査を行なう。包含層掘削が主な作業で、包含層より多量の中世の遺物が出土した。

2月1日～29日
先月末に降った大雪の影響で月の始めおよび月の半ばでも作業を中止する。その他の日は晴天が続き調査は順調に続けられた。

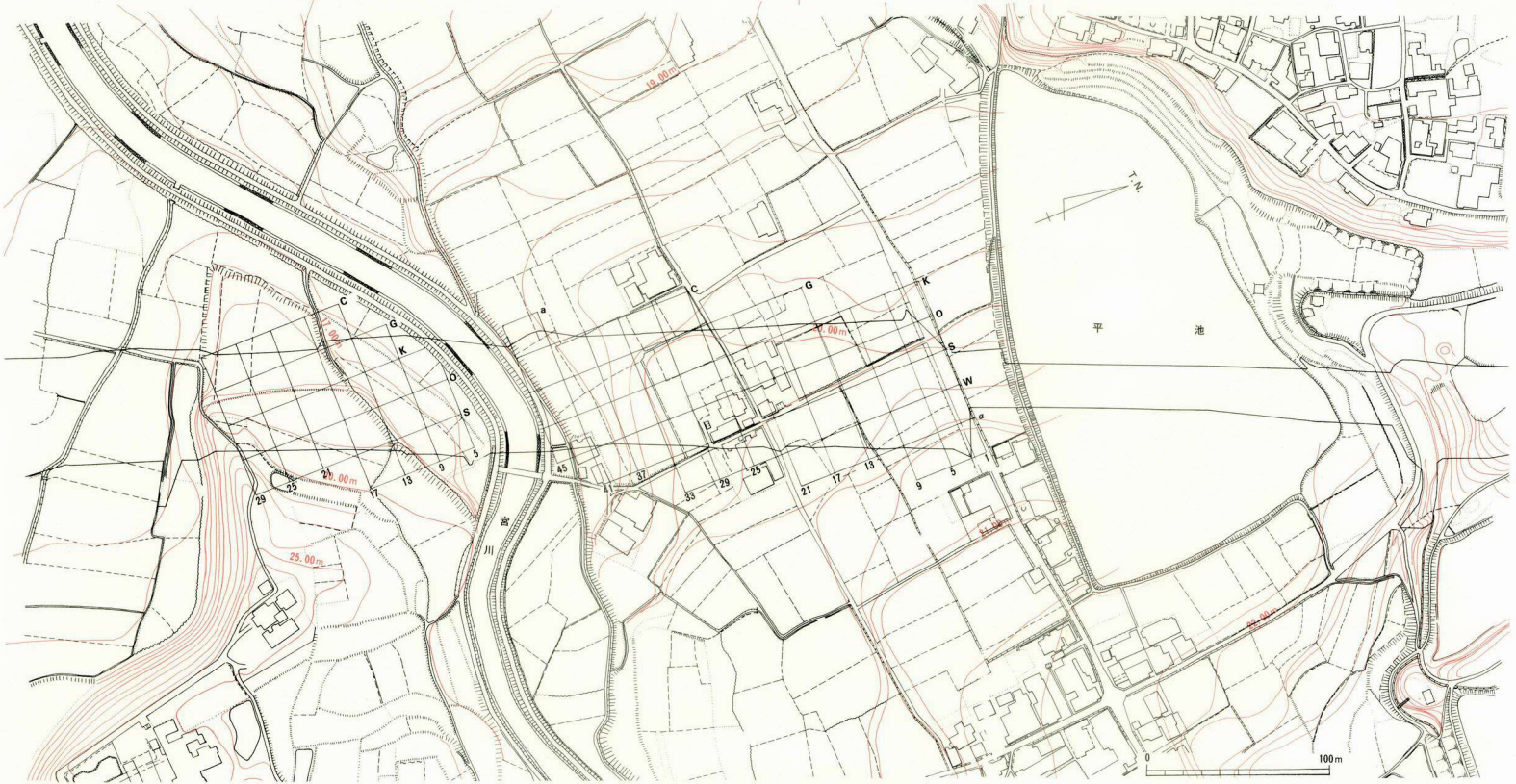
城岡地区
城岡地区のトレンチ調査は遺構面まで掘り下げ、精査の結果、鎌倉時代の短刀・土器片が出土し、河原石や五輪等などが投げ込まれた土坑（SK04）・溝状遺構（SD06・07）等を検出した。
K－21・22・23、L－21・22・23において第5層を発掘する。

八反地地区
その調査と並行して八反地地区にある森1～5号塚についての調査を開始する。森3・5号塚の表土剝ぎ・断面実測・平面実測・レベル測量・写真撮影などを行ない、その後集石を除去する。森5号塚より土器集中部分を検出する。
13日には豊浜町で調査されている大木塚の見学に行く。

3月1日～31日
月の半ばで雨が降り、数日調査は中断する。
中世の柱穴が多数検出される。

城岡地区
O－20・21・22・23・24、M－26・27の第1層を発掘する。K－20の平面実測を行なう。柱穴・溝状遺構・土坑などを検出する。
調査区南部の弥生時代の溝（SD11）を掘り下げる。
SK07の精査の後、写真撮影を行なう。

八反地地区
森5号塚の床面平面実測を行ない、石室内の釘を取り上げる。続いて石室の実測・写真撮影を行なう。
26日には事務所整理・清掃を行ない、今年



第４図　延命遺跡グリッド配置図

度の作業は終了する。

4月4日～27日

前半天気は良くなかったが、後半持ちなおす。

城岡地区

SK07・SK09の精査・実測・写真撮影を行なう。D－27・28、E－27・28、F－28の第1層を掘り下げる。SK09より土師器・瓦器・捏鉢などが出土する。

それぞれの遺構平面実測も並行して行なう。

八反地地区

森5号塚以外の塚について調査を行なう。

5月2日～30日

月の半ばで降雨が続き、土器洗いを行なう。

城岡地区

それぞれのグリッドにおいて土層の掘り下げ・遺構の掘り下げ、その後写真撮影・平面および断面実測などを行なう。

八反地地区

八反地地区において予備調査を開始する。予備調査の結果、多数の柱穴・溝状遺構等を検出する。

森1～3号塚のトレンチ平面実測・土層断面実測を行なう。

6月1日～31日

梅雨の季節でもあり、前半1日、後半2日降雨のため作業を休む。下旬になって曇りのち雨、晴れのち雨などという天候もあったが、雨の中作業は続けられた。

城岡地区

SD26の弥生時代の溝を掘り下げる。溝より多数の弥生土器が出土する。土器は溝の底の部分に溜まったような状態で検出された。

八反地地区

予備調査の結果対象面積全体において遺構が検出されたので本調査に切り替え、杭打ちを行なう。

7月2日～31日

月の前半は梅雨のため雨が多く、そのため土器洗いを行なう。

城岡地区

作業は終盤にせまり、遺構の掘り下げ、遺物の取り上げ、実測、レベル落としなどを行なう。城岡の発掘はSD26を残すのみである。16日にはユンボによる埋め戻しが始まり、19日に終了する。23日にはベルトコンベアーも撤去する。

八反地地区

まず、ユンボによる表土剝ぎを行ない、各グリッドごとに遺構の発掘および土層実測を行なう。17日には発電機・ベルトコンベアーを搬入し、調査体制を整える。

G－23、K－23・25の包含層を下げる。I－25、K－23・25の精査後検出された溝状遺構および柱穴を掘る。

8月1日～31日

城岡地区が終了し、八反地地区に作業員が移る。

八反地地区

I－23～25、K－23～25の調査を主体とす

る。W－2、S－5の調査にかかる。S－5で検出されたSD11を掘り下げる。SD11は北東から南西に流れる溝で灰黒色粘質土の埋土を持つ天幅の広い溝である。

9月3日～28日

月の半ばに曇りが多く、作業はあまり進まず。3・4日に新プレハブが建築され、5日に移転作業を行なう。

八反地地区

S－2・5で検出された遺構を実測する。S－17、O－9・13、K－9を調査する。調査区北部では主として溝状遺構が検出された。S－13の表土剝ぎを行なう。

10月1日～31日

作業は調査区北半部分のS－13の平面実測、S－9、W－9の遺構検出を行なう。S－9、W－9で検出された溝状遺構は全て砂土を埋土とするものであった。

調査は順調に進み遺構検出が終わると同時に平面実測・写真撮影・土層実測を行なう。

プレハブの床が3枚落ち、翌日修理する。

11月1日～30日

今月は月のはじめから晴天が続き、雨の日は少なかった。

八反地地区

調査は調査区A－37～41・G－37～41の表土剝ぎを行ない、遺構検出作業を行なう。柱穴が多数検出され、そのために埋土のチェックを行ない掘り下げる。

G－41、K－41で溝状遺構を検出し、掘り下げる。

O－29・33の表土剝ぎを行ない、遺構検出を行なう。多数の柱穴・土坑・溝状遺構等を検出する。

12月3日～27日

月の半ば頃に天候が安定せず、雨のため一日中作業を中断した日が2日あった。その日は資材搬入・ユンボによる表土剝ぎ・埋め戻しなどを行なう。表土剝ぎ後は遺構検出・精査・掘りあげ・写真撮影・平面実測・レベル落としを行なう。K－13でSD27・SD31の砂層を埋土とする溝状遺構を掘る。G－33では平面実測を行なう。G－29は遺構検出を行なう。O－29でSE01を掘り下げる。井戸内より多数の河原石を検出する。27日には道具整理・室内清掃を行ない年内の現場作業は終了する。

昭和60年

1月

去年に引き続きG－29の調査を続ける。

O－29で検出されたSE01を掘り下げる。円形の井戸枠外に石組を持つ井戸であることが判明する。

ほぼ晴天の日が続き調査は順調に進む。

2月

K－13でも井戸SE02を検出する。この井戸は曲げ物を伴う井戸であることが判明する。しかしこの井戸枠が最終面ではなくて、その下にも掘り方が続き木製品が出土した。

3月

G－29では土坑SK11が検出され、土坑内より多数の土師器椀・瓦器椀・土師器坏・小皿などが出土した。延命遺跡の調査も終わりに近づいている。

4月

今年度の調査は、2日ユンボによる表土剝ぎから開始する。

現場作業は3日から再開した。

月の半ば頃に雨が3日も続き、作業を休むが、その他は晴天が続き調査は順調に進む。

調査内容は最終局面をむかえ調査区内の掘り下げ、遺構面の精査・遺構の掘り下げ・写真撮影・平面・土層断面実測を行なう。

C－21・25・29・33の調査を行なう。

4月末をもって作業員の就労を終わる。

24日には現場の片付けを始め、25日には室内外の片付けをし、所長の作業員への挨拶をもって現場作業を終了する。

宅地部分については作業を一旦中断して昭和61年9月1日～9月30日にかけて調査を行なう。宅地部分でも庭の跡については遺構が検出されたが、宅地本体部分では攪乱により遺構は検出されなかった。

第4表　八反地地区遺構番号変更一覧表

溝状遺構（SD）

新	旧	新	旧	新	旧
01	——	17	26	34	76
02	——	18	No.3	35	08a
03	45	19	No.2	36	10
04	11、43、44	20	No.1	37	07
05	11	21	14、17、05（2次）	38	06
06	13	22	16	39	03
07	27、27'	23	28	40	09
08	22	24	31	41	05、61
09	18	25	56	42	04（2次）
09下層	18	26	79	43	03、42（2次）
10	19	27	78	44	01（2次）
11	17、20	28	04、55	45	02（2次）
12	23	29	77	46	57、75
13	15	30	01、70	47	72（74）
14	21	31	02、69、70'	48	74
15	24	32	65、65'、67、68	49	54
16	25	33	08	50	54

新	旧	新	旧	新	旧
51	46	59	——	67	36
52	47（46）、48	60	62	68	38
53	58	61	60	69	33
54	49、52	62	——	70	34
55	53	63	40	71	SK07一部
56	39	64	07		
57	73	65	37		
58	59	66	35		

土坑（SK）

新	旧	新	旧	新	旧
01	——	11	05	21	18
02	10	12	26	22	01→20
03	24	13	01	23	21
04	13	14	19	24	06
05	14	15	16	25	28
06	25	16	17	26	07
07	27	17	15	27	09
08	02	18	11、12	28	08
09	03	19	22		
10	04	20	02→23		

第5表　城岡地区遺構番号変更一覧表

溝状遺構（SD）

新	旧	新	旧	新	旧
01	——	09	——	17	17
02	02、03、05	10	——	18	18
03	02	11	22	19	26
04	03	12	22	20	27
05	05	13	23	21	25
06	01	14	20	22	21
07	——	15	16	23	24
08	——	16	19	24	11

土坑（SK）

新	旧	新	旧	新	旧
01	——	05	04	09	07
02	——	06	09	10	——
03	06	07	——	11	——
04	05	08	——		

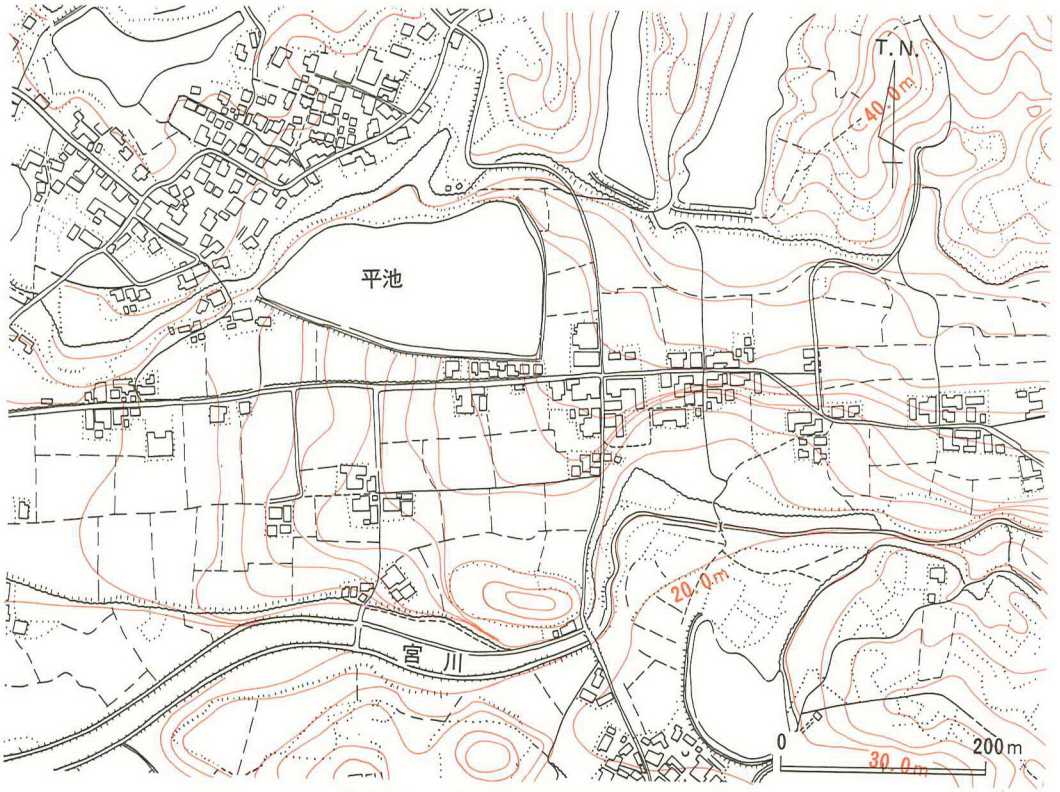
第2節　八反地地区

1．遺跡の概要

(1)　地形

豊中町は北東部に眉山・鳥越山・陣山からなる連山が控え、それらから延びる尾根筋の広い低丘陵が西方に延びている。また狭い平野を挟み向い側には燧灘に面して七宝山系が聳えている。このように豊中町は東西を山に囲まれ、南北に開けた地形を呈している。南は三豊平野へと開けており、北は善通寺に繋がる高瀬・三野町へと開けている。

八反地地区は豊中町八反地に所在し、三豊平野の北東部、陣山の裾野に位置する。この辺りは、小規模ながら陣山から派生する尾根の谷筋と現在の宮川によって形成された沖積地と考えられる。調査区周辺の地形の微地形を復原すると、陣山から派生する谷筋から南西の方向に谷筋が延びていて、それにともなう尾根筋は調査区南方にある独立の低丘陵方向に延びており、ここを境として西側にはまた谷筋があると思われる。今回の調査では縄文時代晩期から中世にかけての遺構が検出されたが、縄文時代晩期と弥生時代前期・後期の遺構はちょうど南方の独立低丘陵に延びる尾根筋の西側斜面部と谷筋にあたる部分に位置しているものと思われる。

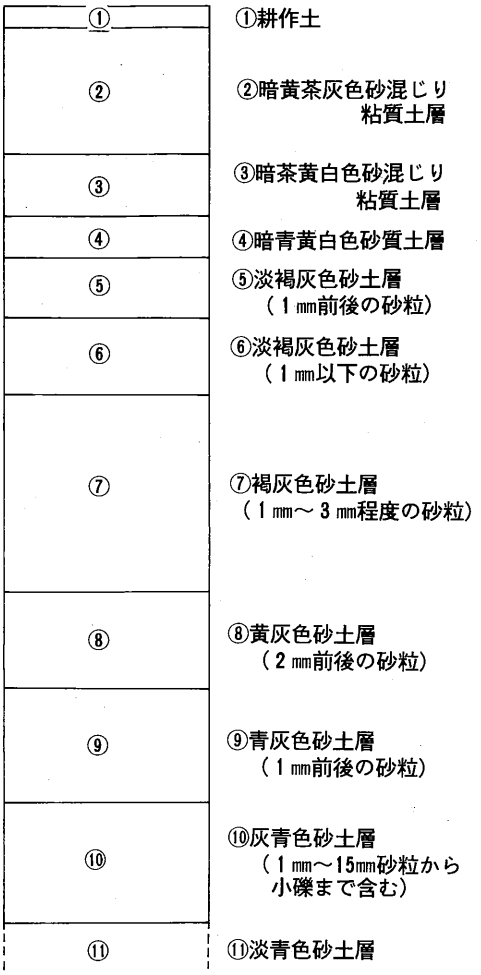


第5図　八反地地区周辺遺跡範囲図

第 6 図　調査区微地形復原・グリッド配置図

(2)　土層序

八反地地区は前項で触れたように陣山から派生する尾根の谷筋と宮川によって形成された沖積地上に位置している。遺構は耕作土直下で検出されたため、遺構面より上部の堆積層は不明である。遺構面の土層は上層が砂混じりの粘質土層で下層になるにつれて砂粒を多量に含むようになる（第7図）。第2層は暗黄茶色砂混じり粘質土層で、第3層は暗茶黄白色砂混じり粘質土層である。これらは少量ではあるが縄文土器を含んでいる。下層になるにつれて砂粒を多く含み第4層では暗青黄白色砂質土層になる。第5～11層より下層は砂土層になっており、この砂土層の下層は黒色の粘土層になると思われる。延命遺跡で検出された遺構はほとんどが第2～4層の土層で部分的に下層の砂土層が遺構面を形成しているようである。主として調査区北部では砂粒を多く含む粘質土層の遺構面が広がっており、南部になるにつれて粘質土になると考えられる。北部では弥生時代前期以前の遺構・遺物が、南部では主として中世の遺構・遺物が確認された。



第7図　八反地地区土層模式図

2．縄文時代から弥生時代の遺構・遺物について

(1) 縄文時代晩期・弥生時代前期の遺構検出概要

縄文時代晩期の遺構は、土坑状の落ち込みと北東から南西に流れる砂を埋土とする溝だけである。土坑状の落ち込みは調査区北西部で数か所検出された。これらの土坑状の落ち込みは微地形復原によって確認された谷筋部にあたり、掘り方も不整形を呈していることなどから湿地状の谷筋のやや深い部分が検出されたものと思われる。また溝状遺構は尾根筋に並走するもので、砂を埋土とする単一土層の溝である。弥生時代前期の遺物は、縄文時代晩期の遺構と同様に尾根筋に並走する溝状遺構より出土している。このように縄文時代晩期・弥生時代前期の遺構としては、しっかりした人為的な遺構が検出されず、出土した遺物はほとんどが自然地形および自然流路より出土したものである。しかし、一部尾根筋に並走する溝には上層に弥生時代末頃の遺物を出土する層が残るものもあり、全てが縄文時代から弥生時代前期にかけての時代のみに機能していた溝とは限らないと思われる。

(2) 縄文時代晩期・弥生時代前期の遺構・遺物

SK01

土坑状の落ち込みは調査区北西部で検出された。全部で5基検出されたが、掘り方が全て不整形を呈しておりしっかりしないものばかりであった。全ての土坑状の落ち込みからは突帯文系の土器と弥生時代前期の土器が出土している。その中で実測可能な遺物が出土したSK01について説明する。

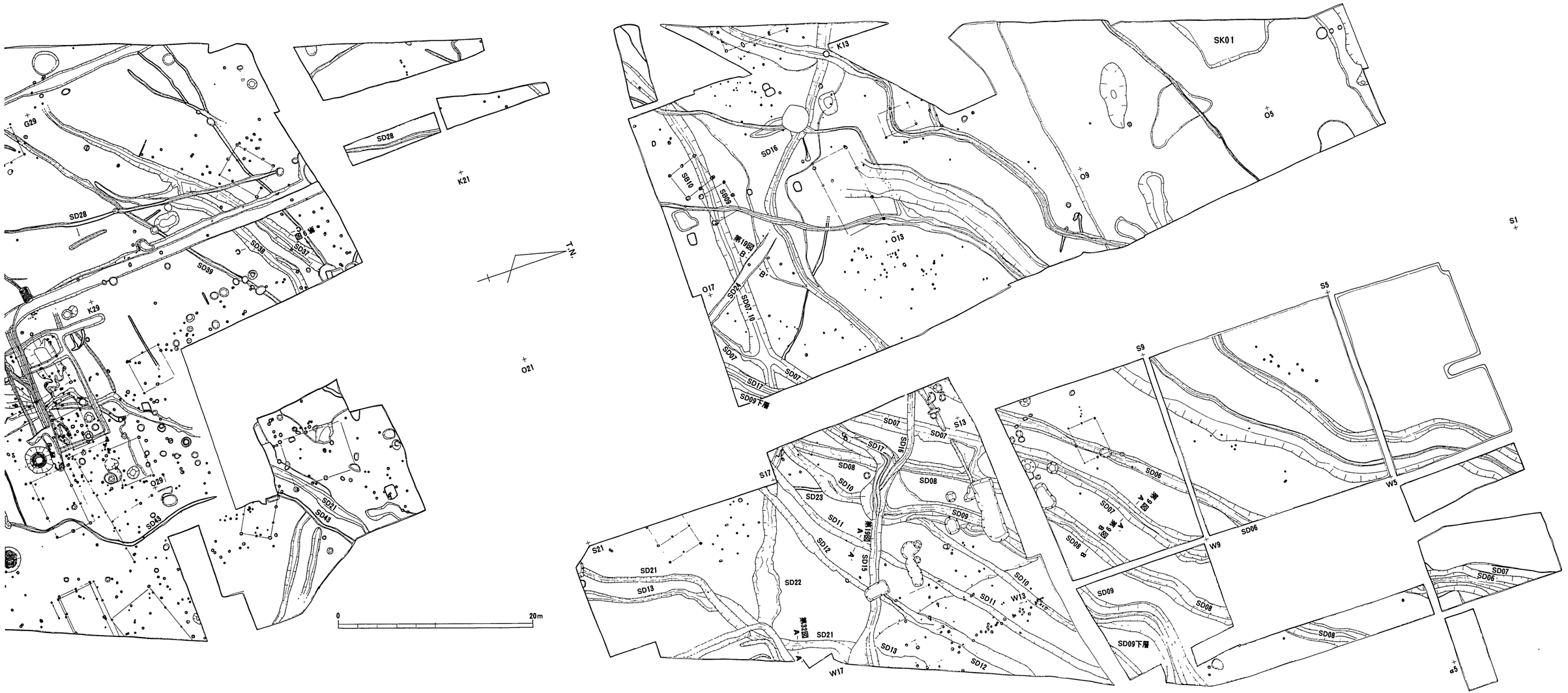
SK01は西側が調査区外に延びているが、天幅5×8m、深さ0.1mの不整形を呈した土坑で灰黒色粘質土の堆積したものである。遺物は縄文土器と弥生土器の小片が多量に出土している。

1～7は刻み目突帯を持つ縄文時代晩期の深鉢である。1～6は体部がやや外反しながら外上方に延び、口縁部外面に刻み目突帯を持つ。刻み目突帯は端部から間隔をあけるものとそうでないものがある。6は体部と頸部の屈曲部に刻み目突帯を持つ。7はやや内傾する頸部を持つ。8は小型の浅鉢である。体部上半に屈曲部を持ち頸部は外反しながら延びる。

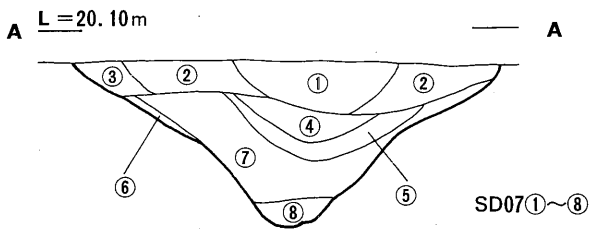
SD06～09・23・28・37・38

尾根筋に併走する溝状遺構で砂だけの単一土層を持つものである。埋土中からは縄文土器・弥生土器・石製品等が出土している。

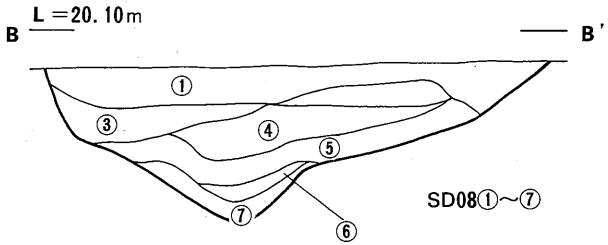
9・10はSD06から出土したものである。9は弥生土器で体部上半に1本のヘラ描沈線が施されている。10は弥生土器の底部である。11～13はSD07から出土したものである。突帯文系の土器で口縁部外面に刻み目突帯を持つ。刻み目突帯は口縁端部からやや間隔を開けるもの（12・13）と開けないもの（11）がある。12は如意状口縁を呈する外面に刻み目突帯を持つもので弥生土器と思われる。14はSD08から出土したものである。口縁部外面に1条の刻み目突帯を持つ。15～19は



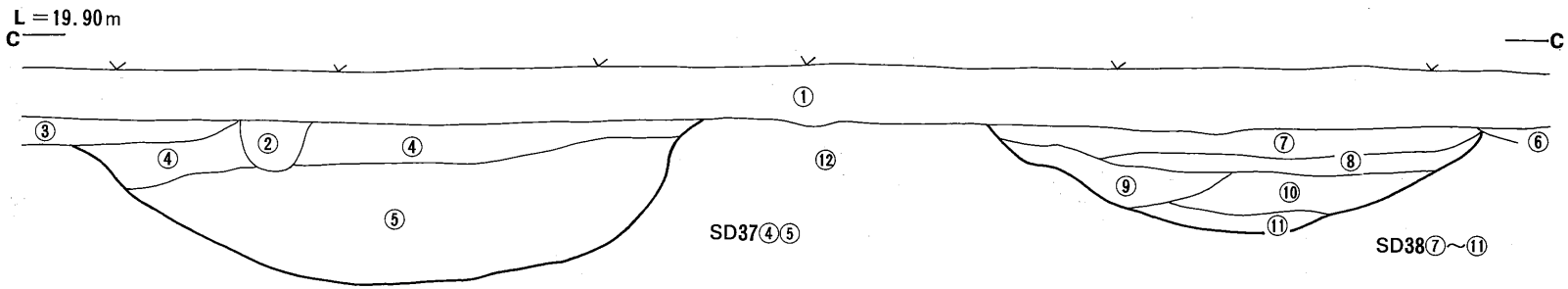
第8図　縄文時代後期～弥生時代前期遺構平面図



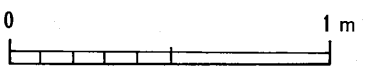
①暗灰茶褐色粘質土層（1～5㎜の砂粒多い）
②暗灰褐色粘質土層（1～5㎜の砂粒多い）
③暗灰褐色粘質土層（②より砂粒が少ない）
④褐色粘質土層
⑤淡褐色を含む灰色砂質土層
⑥黒灰色砂質土層
⑦灰色砂層（1～5㎜）
⑧暗灰砂層（1～5㎜）



①暗灰褐色粘質土層（1～5㎜砂粒多い）
②暗灰茶色粘質土層（1～2㎜砂粒多い）
③淡褐色を含む暗灰色砂質土層（1㎜以下）
④灰色砂層（1～2㎜）
⑤暗灰色砂層（1～2㎜）
⑥暗灰粘質土層
⑦暗灰色砂層（1～3㎜）

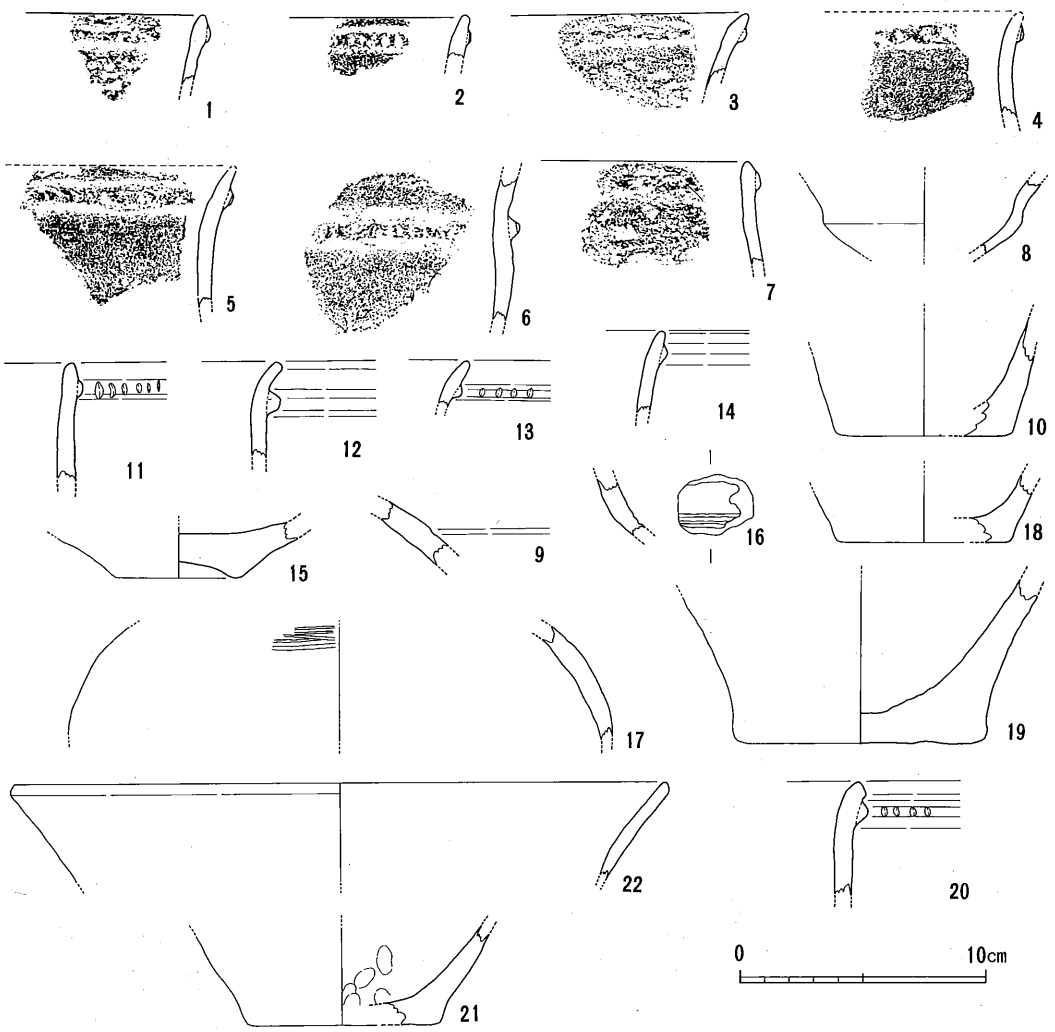


①耕作土
②暗白色粘質土層（淡黒色粘土ブロックを含む）
③暗黄茶灰色粘質土層
④暗黄灰色粘質土層（2㎜～3㎜程度の砂粒を含む）
⑤暗黄灰色砂層
⑥暗黄白色粘質土層（暗黄灰色のブロックを含む）
⑦茶灰色粘質土層（砂粒を含みこげ茶色粒も含む）
⑧暗黄灰色粘質土層（砂粒を含む）
⑨暗灰色砂質土層
⑩褐灰色砂層
⑪暗褐灰色砂層
⑫暗黄灰色粘質土層（こげ茶色粒を含む）



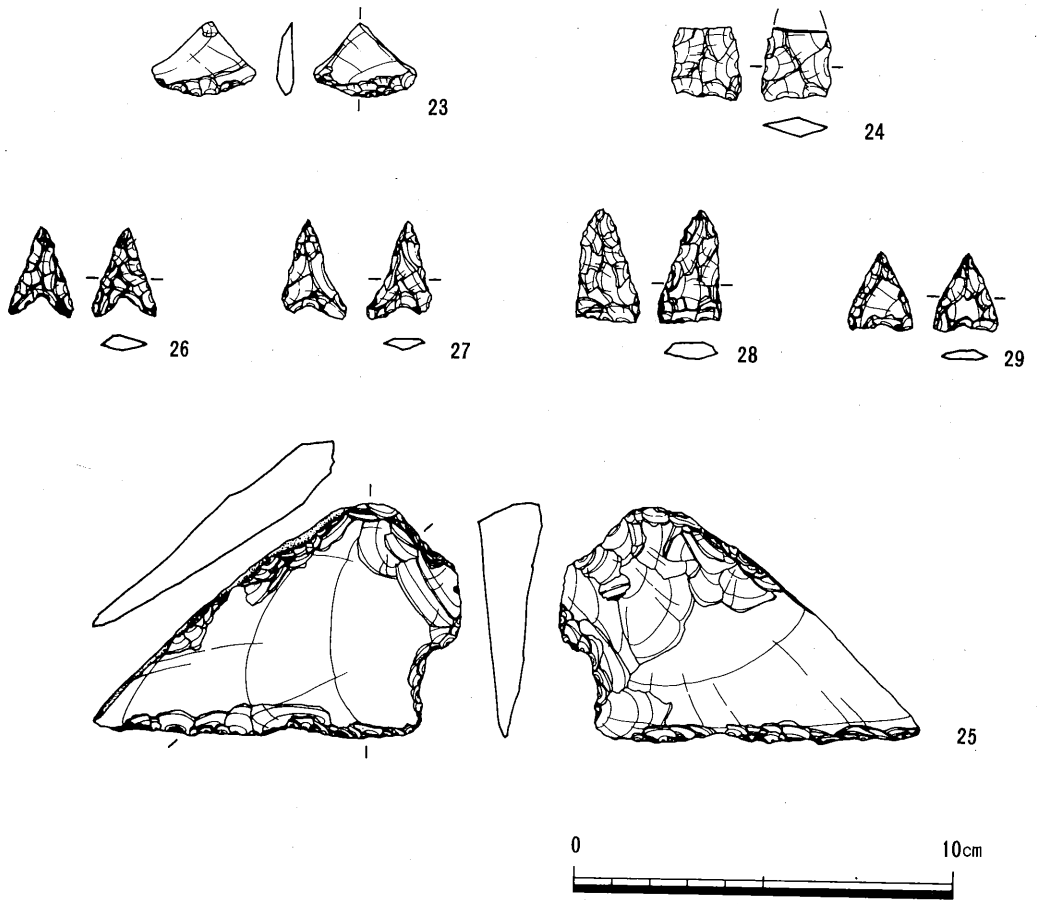
第9図　SD07・08・37・38土層断面図

SD09から出土したものである。15は上げ底状を呈する縄文土器の底部と思われる。16・17は体部上半にヘラ描沈線を持つ弥生土器の壺である。19は弥生土器の底部である。分厚くしっかりした底部から直線的に外上方に延びる体部を持つ。20はSD28から出土した突帯文系の土器である。直線的に延びる頸部からやや口縁を外反させ、外側に面を持たせおわらせている。口縁部外面下には刻み目突帯が貼り付けられている。土坑状の落ち込みから出土した突帯文系の土器に比べると口縁部をやや外反させ、外側に面を持たせるという特徴が見られる。21はSD37から出土した弥生土器の底部である。底部内面に指頭痕が顕著に見られる。22はSD38から出土した縄文時代の深鉢である。直線的に外上方に延びる頸部を持ち口縁端部は上方に摘み上げるようにおわらせている。23・24はSD23出土の石製品である。23はサヌカイト製で、縁辺部に調整が見られるこ



第10図　ＳＫ01、ＳＤ37・38出土遺物実測図

とからスクレイパーの可能性が考えられるものである。24は石鏃である。25はSD37出土の石製品である。刃部には細かい調整が見られ、基部にはつまみ状に抉りが認められる。石鎌と思われる。26～29はSD38から出土した石製品である。全てサヌカイト製の石鏃で基部が凹基式のものと平基式のものがみられる。



第11図　ＳＤ23・37・38出土遺物実測図（石製品）

包含層出土遺物

①縄文土器

八反地地区で出土した縄文時代後・晩期および弥生時代前期の土器は、ほとんどが弥生時代後期・中世の遺構面を形成する土層の中に包まれていたものばかりであった。八反地地区の基本土層序は、前述のとおり茶黄色系の粘質土が遺構面形成土層である。その下層に砂粒を含んだ茶黄色粘質土そして黄灰色砂質土層となっており、黄灰色砂質土層の堆積時にこれらの土器が包含されたと考えられる。しかし、この時期の遺構が茶黄色粘質土（包含層）の下部に存在したかどうかは調査の結果確認できなかった。

出土した遺物は縄文時代後期・晩期そして弥生時代前期のものである。縄文時代後期の遺跡はこの三豊平野では観音寺市の樋ノ口遺跡が確認されているだけである。当遺跡出土の縄文時代後期の遺物は樋ノ口遺跡と同時期（彦崎ＫＩ式期）のものが出土している。縄文時代晩期の出土遺物は突帯文系の土器が多量に出土している。弥生時代前期出土土器は壺・甕が多く、壺は頸部と体部間と体部上半に段またはヘラ描沈線を持つものが出土しており、甕についてはほとんどが如意状口縁を持つもので口縁下のヘラ描沈線もないものと１～３条程度施されるものがある。

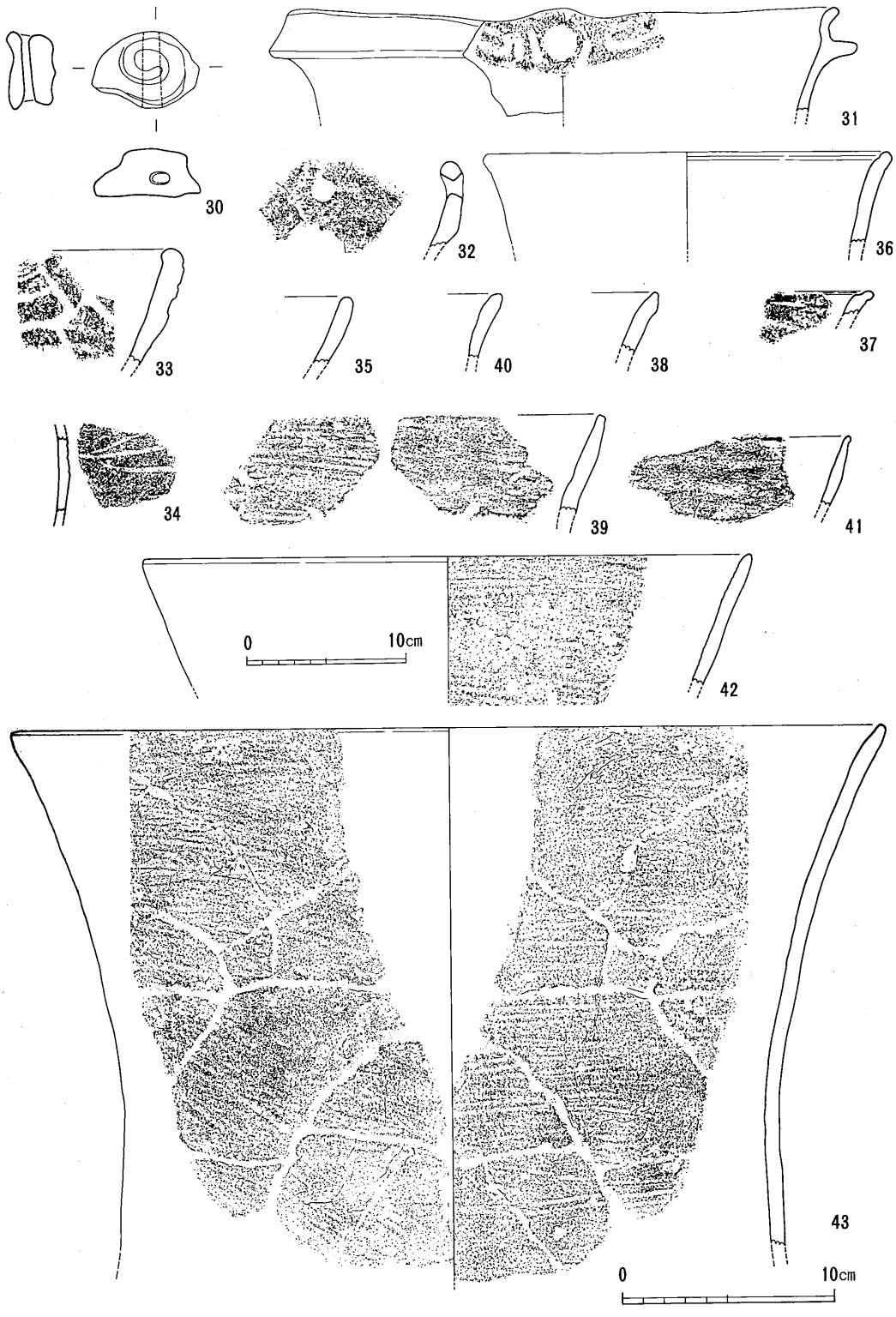
30～43は縄文時代後期の土器である。30は口縁部の装飾と思われ、外面に装飾文様が施され、内部は穿孔が認められる。31は深鉢である。所謂縁帯文土器と呼ばれるもので口縁部外面を拡張させ凹線を施しそれを区切るように円形の窪みと凹線を施すものである。縄文時代後期の津雲Ａ式に比定されるものと思われる。32は深鉢で口縁端部外面を帯状に拡張させ、口縁部は波状口縁にしたものである。波状口縁の山になる部分には穿孔が認められる。33～35は浅鉢である。33は波状の口縁部を持ち、外面にやや太めの凹線文を施している。彦崎ＫＩ式期に比定されるものと思われる。34は鉢の体部で細目の凹線を外面に施している。35は浅鉢の口縁部である。36～43は深鉢である。口縁部内面に沈線を施すもの（36・37）とそのまま終わらせるもの（38～43）がある。37は口縁端部内面に沈線を外面に縄文帯を持つものである。43は体部がやや外反しながら延びるものである。器面調整は口縁部の縄文帯を除くとほとんどが貝殻条痕によるものである。時期は彦崎ＫＩ式期に比定されるものと思われる。

縄文時代晩期の遺物としては突帯文系の深鉢が多数出土している。口縁端部外面に突帯を持つものと頸部と体部間にも突帯を持つ２条突帯のものがある。44～46は口縁部外面に端部からあまり間隔を開けないで突帯を持つ。突帯には刻み目が施されている。47は口縁端部からやや間隔を開けて突帯を持つ。48は口縁端部からやや間隔を開けて突帯を持つが、その突帯が大きく波状になり、刻み目は持たない。貝殻条痕による器面調整が施されている。49は内彎する体部を持ち、頸部から口縁部に外反しながら延びるものである。口縁部外面にはやや端部から間隔を開けて刻み目突帯が貼り付けられている。胎土には多量に砂粒が含まれている。50はやや内彎する体部から外反しながら頸部が延びるもので、その境に刻み目突帯が貼りつけられている。所謂口縁部と

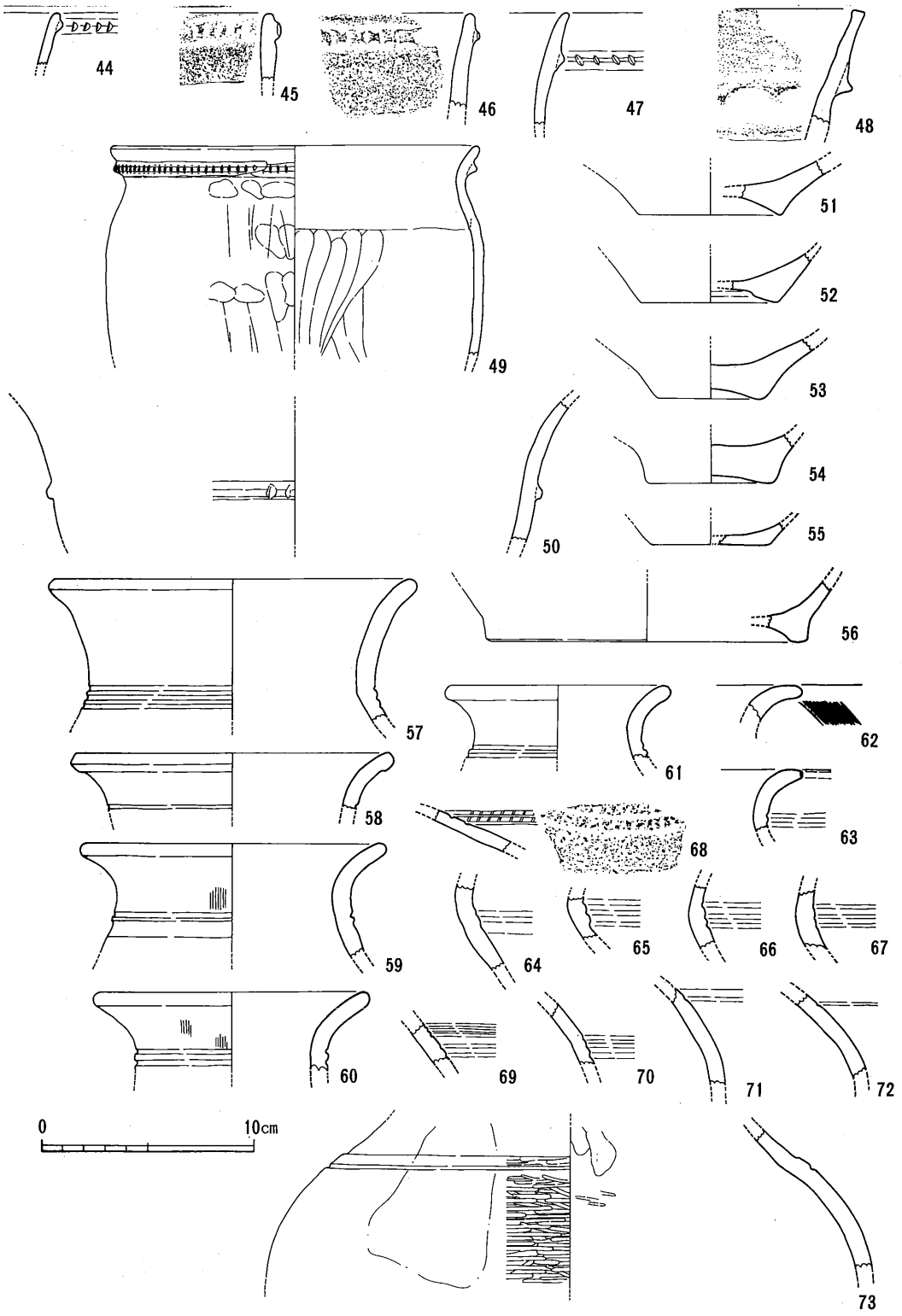
頸部に突帯の付く2条突帯文土器である。51～56は縄文土器の底部である。底部が上げ底になっているもの（51～54）と平らなもの（55）と高台状になっているもの（56）の3種類が認められる。55の平底状の底部は他のものに比べると薄い作りをしており、小型の浅鉢の底部かと思われる。56はやや大型の深鉢の底部であると思われる。

②弥生土器

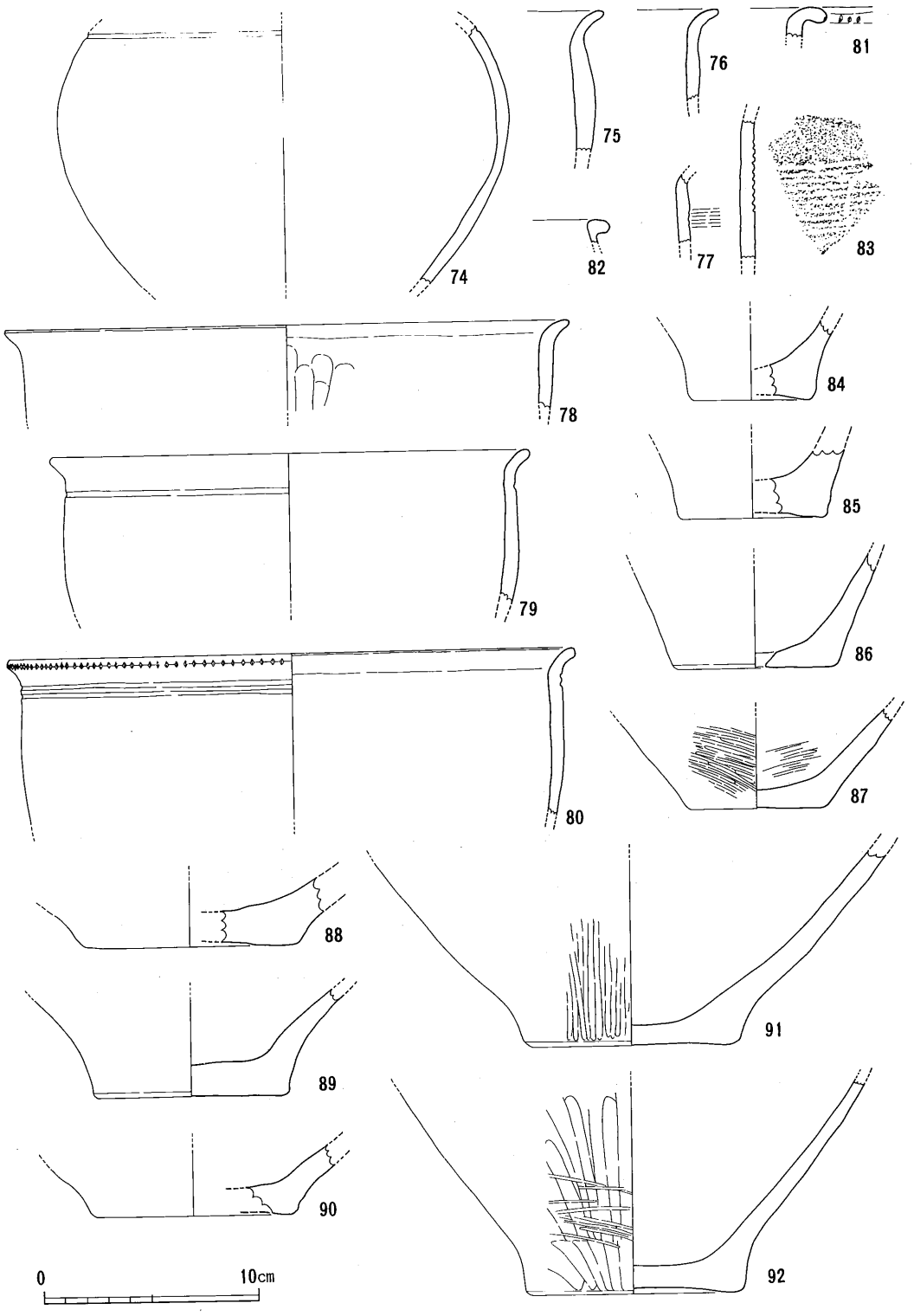
57～93は弥生土器である。57～74は壺で体部上半と体部と頸部の境にヘラ描沈線を施すもの、段があるもの、削り出しによる段があるものなどがある。ヘラ描沈線は1～3条程度のものが多く見られる。口縁部の外反は外方への屈曲が緩いもの（57～61・63）ときついもの（62）があるが後者のほうが少量である。59・64は頸部に1条のヘラ描沈線と削り出しによる段を持ち、外面には縦方向の刷毛目が施されている。65は2条のヘラ描沈線下に削り出しによる段を持つ。68は壺の体部上半で2条のヘラ描沈線間に斜め方向の沈線を施している。69は体部外面にヘラ描による木葉文の模様が施されているものである。73は体部上半に1条のヘラ描沈線と段を持つもので体部外面には横方向のヘラ磨きが施されている。74は体部が球形を呈する壺で上半にヘラ描沈線を施している。75～83は甕である。口縁部が如意状を呈するもの（75～81）と逆L字状を呈するもの（82・83）がある。如意状口縁のものは口縁部の屈曲が弱いもの（76～80）ときついもの（81）がある。口縁端部外面に刻み目を持つもの（78・81）もみられる。また口縁部屈曲部に施されているヘラ描沈線も1～3条程度で施されないもの（75・76・80・81）もある。81は如意状口縁のものであるが口縁部の屈曲がきつく、逆L字状を呈する。82は逆L字状を呈する甕である。83は口縁部下に10条のヘラ描沈線を持つものである。おそらくこれも口縁部は逆L字状を呈すると思われるが、出土量は非常に少ないものである。84～93は弥生土器の底部である。底部形態には底部内側をやや上げ底状にするもの（84・85・88・90～93）と平底のもの（86・87・89）があり、87は体部外面に右下がりの細かいヘラ磨きが施されている。91・92は体部外面に縦方向のやや太めのヘラ磨きと細目のヘラ磨きが施されている。93は体部外面にやや太い縦方向のヘラ磨きを、内面にやや細い横方向のヘラ磨きを施している。94は蓋である。上部中央に摘み状の把手を持ち、それを中心に左右にして2穴の穿孔を持っている。95は土製の紡錘車である。円形に作られ、ほぼ中心に穴が開けられている。96は土器を転用した土錘である。ほぼ円形に作られた薄い円盤の両端を打ち欠いて作られている。転用された土器片は縄文土器の可能性が強く、縄文時代の土錘かもしれない。



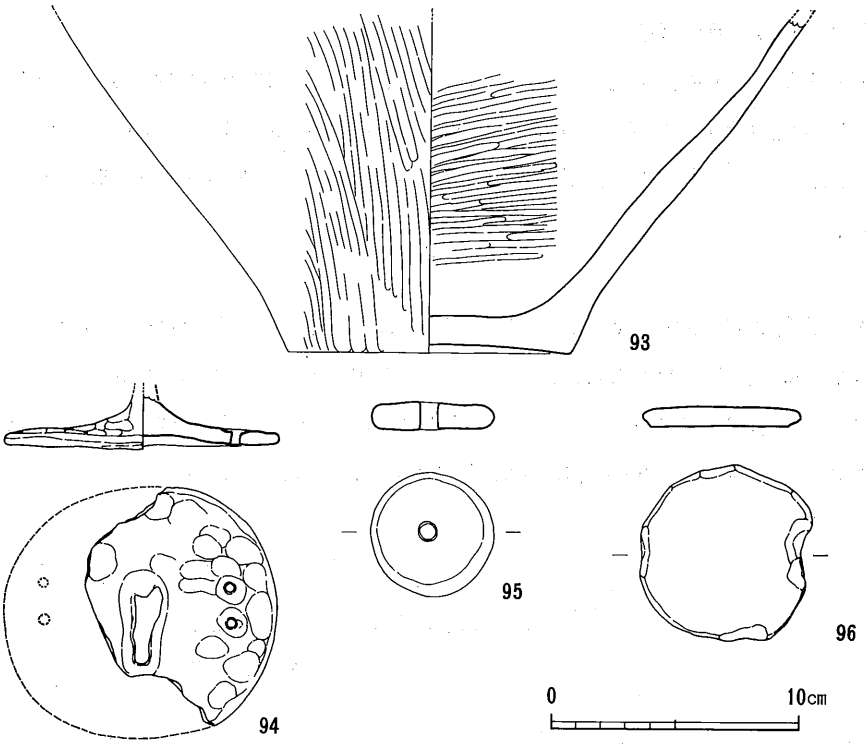
第12図　包含層出土遺物実測図①



第13図　包含層出土遺物実測図②



第14図　包含層出土遺物実測図③



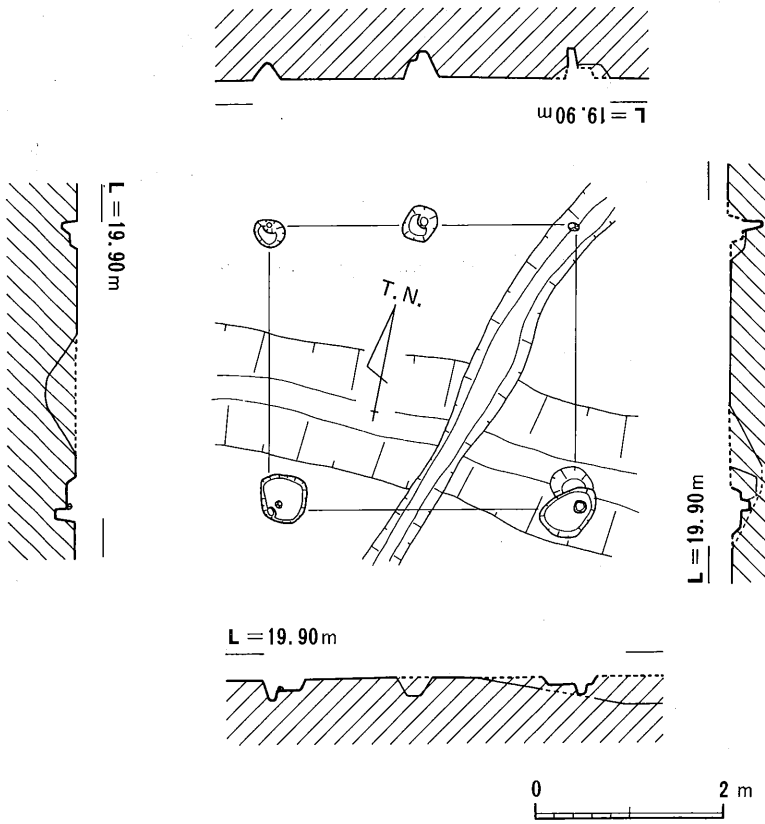
第15図　包含層出土遺物実測図④

(3)弥生時代後期終末以前の遺構

弥生時代後期終末以前の遺構としては、調査区北部で掘立柱建物が2棟（SB09、SB10）検出された。SB09の北東隅の柱穴が弥生時代終末頃と思われるSD04に切られていることから時期決定を行なった。しかし、柱穴埋土が溝の埋土とかなり似ていることからあまり時期差がないように思われる。

SB09

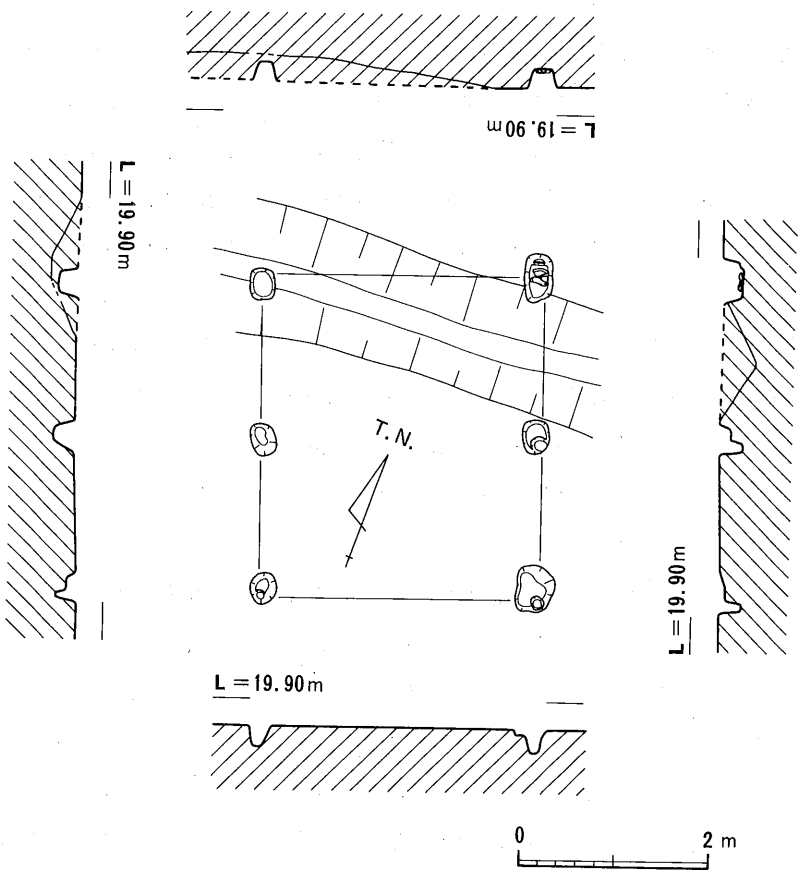
梁間1間×桁行2間（300×323cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅36.8cmを計り、柱間は梁間で平均長300cm、桁行で平均長161.5cmを計る。主軸は真北から11.5°西偏する。柱穴は二段に造られており、柱根径の判るものである。北東隅の柱穴と南側桁行の真中の柱穴がSD04に切られていることから弥生時代後期終末以前の掘立柱建物であることが判る。



第16図　ＳＢ09平・断面図

SB10

梁間1間×桁行2間（291×335cm）の建物遺構である。柱穴は平均幅38.3cmを計り、柱間は梁間で平均長291cm、桁行で平均長167.5cmを計る。主軸は真北から19.4°西偏する。SB09と同様に柱穴が二段に掘られている。



第17図　ＳＢ10平・断面図

(4)　弥生時代後期終末の遺構

弥生時代後期終末頃の遺構は調査区北部で検出された。等高線に平行して流れるものと直行するものがあるが、おそらく前者は微地形復原で確認された尾根筋に並走する自然のものと思われ、後者は尾根筋に直行するものがあることから人為的なもので、おそらく排水施設として使用されたものと思われる。弥生時代後期終末頃にはSD03～05が大きな自然流路としてあり、それに流れ込むようにSD09・15～17・21があったのではないかと思われる。しかしSD03～05を除く尾根筋に並走する溝の上部にも一部同時期の遺物が出土する土層が確認されていることから、尾根筋に並走する溝の中にも弥生時代後期終末頃まで機能していた溝があることが窺える。この時期の遺構としては溝以外にはなく、集落域は調査区以東にあるものと思われる。また調査区北東部の尾根上には、延命山遺跡という弥生時代の遺跡が確認されていることから、平野と丘陵上を含んだ一大集落があったものと思われる。

SD03～05

調査区北部で北東から南西に向って流れている流路で、微地形復原で確認された尾根筋と並走することや、幅が広く主流もしっかりしていないことから人為的なものとは考えられず、おそらく谷筋にできた自然流路と考えられる。この自然流路内には細かい数本の溝が検出されたが、谷筋内の流路の変化ととらえられ、大きく見るとSD03～05は一本の流路としてとらえることができる。埋土はSD03・04が黒色粘土を主体とするもので、SD05は褐灰色粘土を主体とするものである。

SD03～05からは多数の弥生土器が出土している。97～101はSD03から出土したものである。97は頸部が外方に直線的に延び、上半部で2回外方に屈曲させた壺である。口縁端部は上方に小さく摘み上げて終わらせるものである。頸部内外面に刷毛目が施されている。98・99は甕である。体部から「く」の字に屈曲し直線的に延びるもの（98）と、外反気味に延びるもの（99）がある。口縁端部はそのまま摘み出し、ややシャープにおわらせる。100・101は底部である。100は平底の底部である。101は製塩土器である。短く外方に張り出す脚を持ち、内外面に縦方向の指ナデが施されている。102はSD04から出土したもので、おそらく弥生時代前期の壺の底部と思われる。底部は小振りの上げ底状に作られており、体部はやや内彎気味に立ち上がっている。胎土に砂粒を多量に含んでいる。103～114はSD05から出土したものである。103～105は弥生時代前期の壺の口縁部と底部である。口縁部は短く外反するもので端部は丸くおさめられている。104・105は底部で底部外周1㎝程度の幅を持ち、その内側をやや凹ませたものである。106は脚付鉢の坏部と脚部の接合部である。107は甕である。「く」の字に屈曲し、直線的に延びる口縁を持つ。108は甕の底部である。丸底気味の平底を残すもので体部外面には叩きが、内面には指ナデが認められる。109は支脚である。両手を前にのばしたような形態で、脚部はスカート状になるものであろうか。

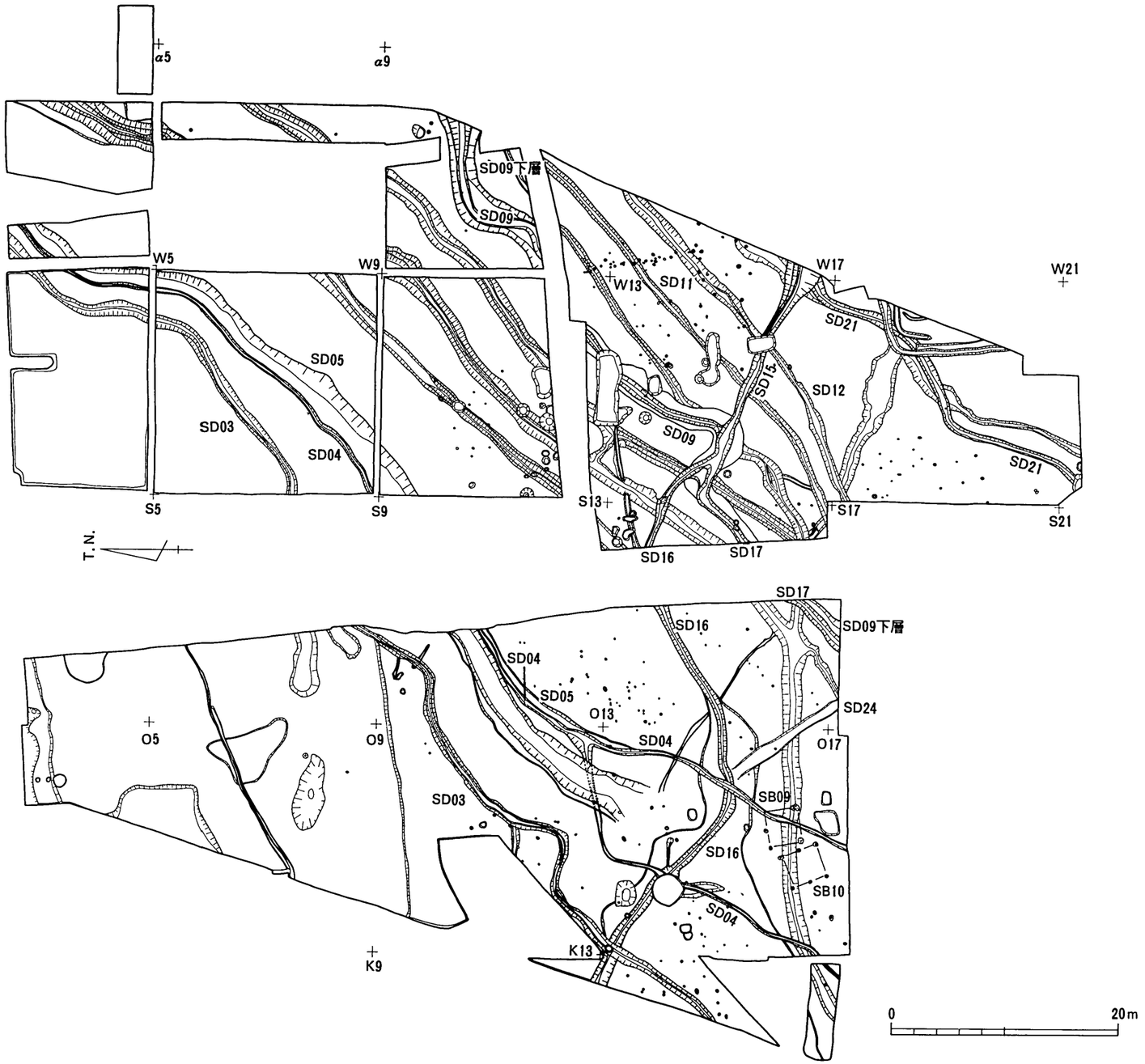
110～114は石製品である。110はスクレイパーで縁辺に調整を加えて刃部としている。側辺には抉り状の調整も見られる。111は打製石斧である。112～114は石鏃である。底部がやや抉れる凹基式のもので112は他のものに比べると長く、側辺のほぼ中央に抉りが認められる。

SD11・12

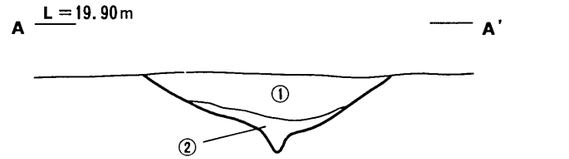
微地形復原によって確認された尾根筋に併走する溝で、埋土が上下2層に分けられる。下層は今までの尾根筋に併走する溝がそうであったように砂を埋土とするもので、上層は灰黒色粘質土を埋土とするものである。しかし上層は部分的にしか確認できなかった。その上層において115～121の遺物が出土している。縄文時代晩期からの尾根筋に併走する自然の流路が弥生時代後期まで機能していたものと考えられる。

115～120がSD11出土のもので、121がSD12出土のものである。

115は小型の鉢である。平底の底部を持ち、体部は短く外上方に延びる。116は外面に指頭痕が

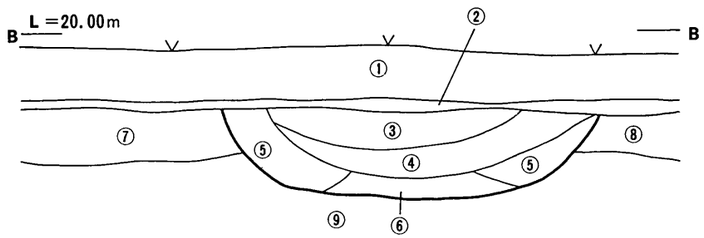


第18図　弥生時代後期遺構平面図



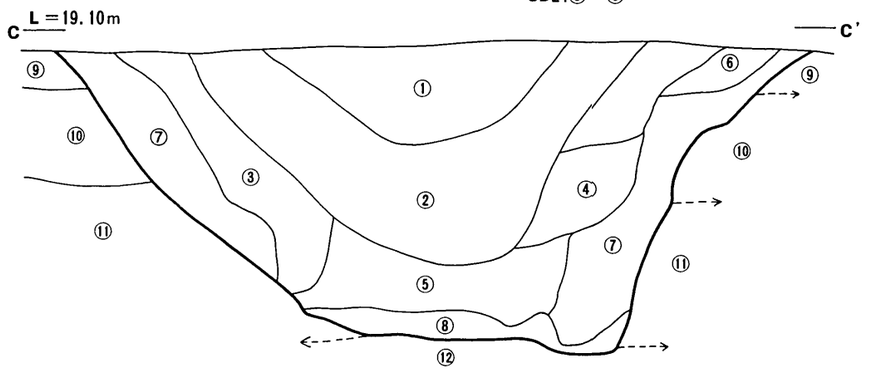
①明茶灰色粘質土層（こげ茶褐色粒を含む）
②暗灰色砂層（１～３㎜程度の砂粒を含む）

SD11　①②



①耕作土
②淡茶灰色土層（床土）
③暗茶褐灰色粘質土層（１～３㎜の砂礫（角）を含む）
④灰黒色粘質土層（１～３㎜の砂粒を含む）
⑤淡灰黒色粘質土層（１～３㎜の砂粒を含む）
⑥明黄灰色粘質土層（中砂粒を含む）
⑦淡黄灰色粘質土層
⑧淡灰黄色粘質土層
⑨淡褐灰黄色粘質土層

SD24③～⑥



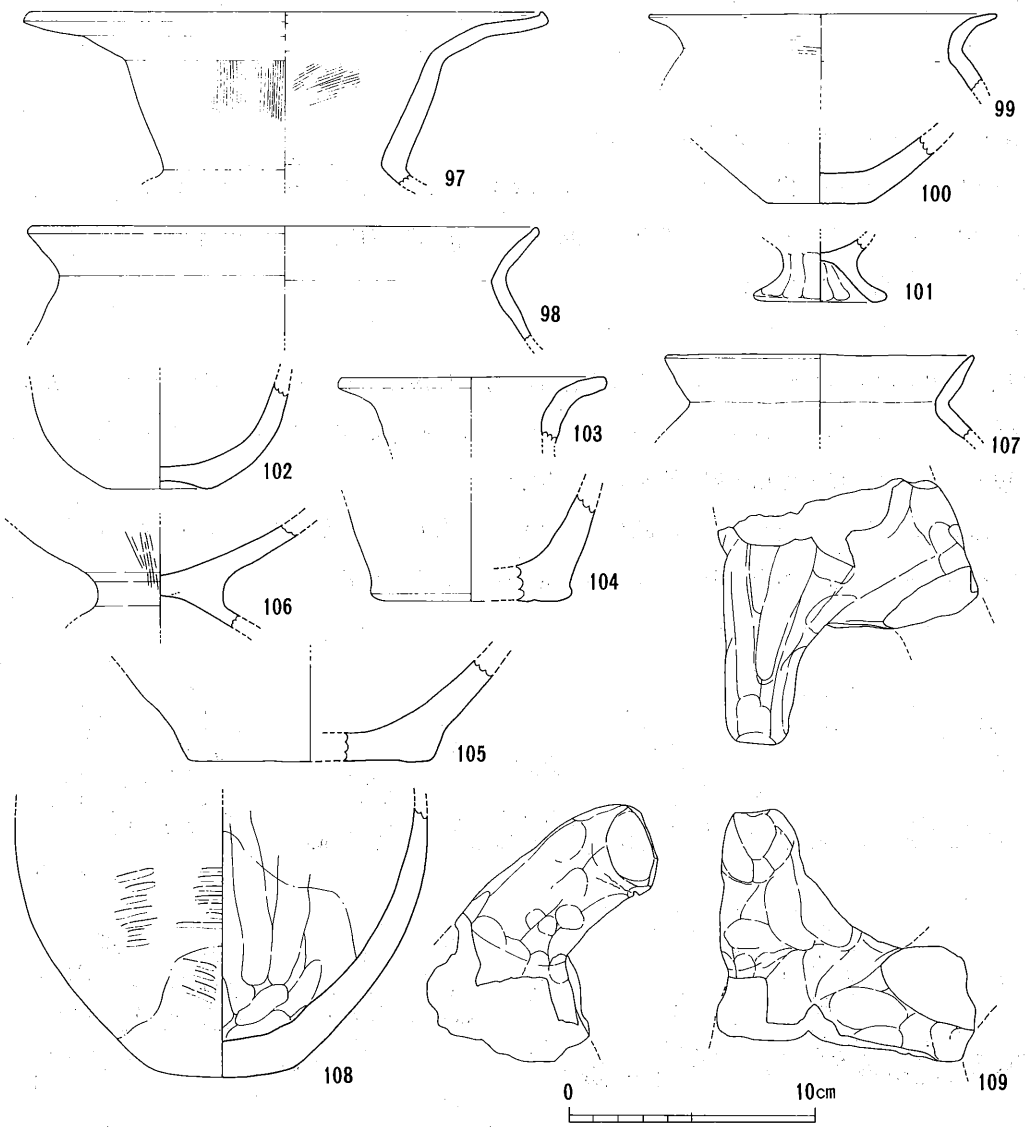
①暗こげ茶色粘質土層（１㎜前後の砂粒を若干含む）
②こげ茶色粘質土層（３～10㎝の褐色土をブロック状に多く含み①より黄色っぽい）
③暗茶暗灰色粘質土層
④暗茶暗灰色粘質土層（③ほど粘らない）
⑤黒灰色粘土層（植物性炭化物を含む）
⑥黄褐色土層（１～２㎜の砂を多く含む）
⑦茶灰色砂質土層（黄褐色砂質土を全面に多量に含み全体に黄色っぽい）
⑧褐色砂層
⑨黄褐色粘質土層
⑩暗茶灰色粘質土層（非常にかたい）
⑪暗茶黒色粘質土層（非常にかたい）
⑫暗灰色砂層

SD63①～⑧

0　1m

第19図　ＳＤ11・24・63土層断面図

密に施されている皿である。117は小型器台である。坏部はやや内彎気味に外上方に延び、外側に面を作っている。広がりのある脚部を持ち、ほぼ中央に3ヵ所の穿孔が認められる。118は壺である。頸部がやや外反気味に外上方に延び、口縁端部を尖らせ気味に終わらせている。頸部外面には下半に縦方向の刷毛目が、上半に斜め方向の刷毛目が施されている。119はやや尖り底に作られた底部に穿孔を持つもので、甑として使用されていたと考えられる。体部外面には横方向の叩きが、底部には穿孔を中心に放射状に叩きが施されている。体部内面は板状の工具で下方から上方に撫でられている。120は壺の底部である。平底を残すもので、体部外面には横方向の叩



第20図　ＳＤ03・04・05出土遺物実測図

きの後細かい刷毛目が、内面には下方から上方へのヘラ削りが施されている。121は甕である。頸部が「く」の字にきつく屈曲するものである。口縁端部は上方に摘み上げている。

SD24

N－15で検出された溝状遺構である。北西から南東に流れる溝で、おそらくSD04・05の支流になるのではないかと考えられる。埋土は灰黒色粘質土層を主体とするものでSD04・05とほぼ同時期と考えられる。

122・123はこの溝から出土したものである。122は鉢の口縁でやや内彎気味の体部から口縁部へと屈曲する。123は底部で尖り底状を呈し、外面には指頭痕を内面には細かい刷毛目を施している。

SD43

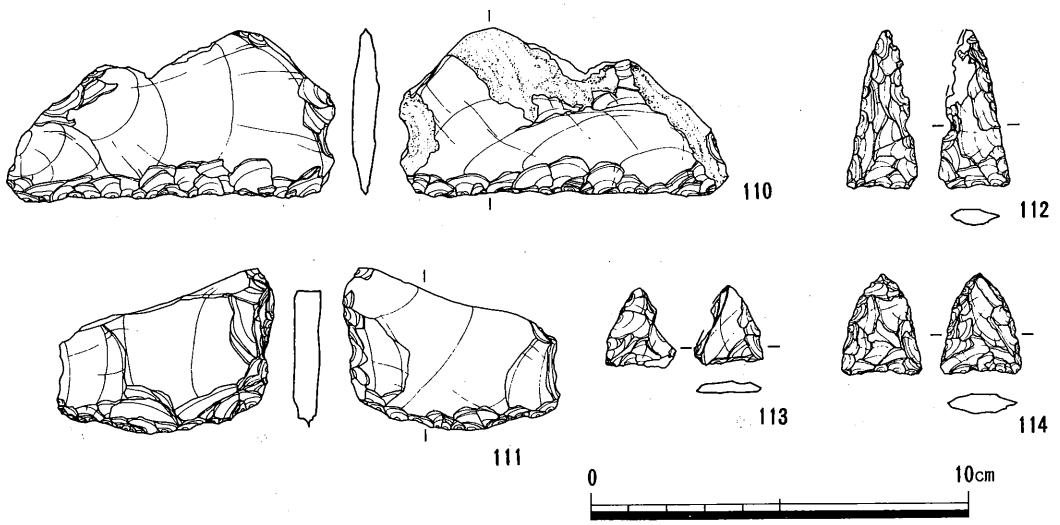
調査区中央で検出された。ほぼ南北に流れる溝である。

124・125はこの溝から出土したものである。124は甕で、口縁は内彎する体部から「く」の字に外方に屈曲し、ほぼ真中でもう一度外方に屈曲する。体部外面には細かい刷毛目が施されている。125は平底を残す底部である。

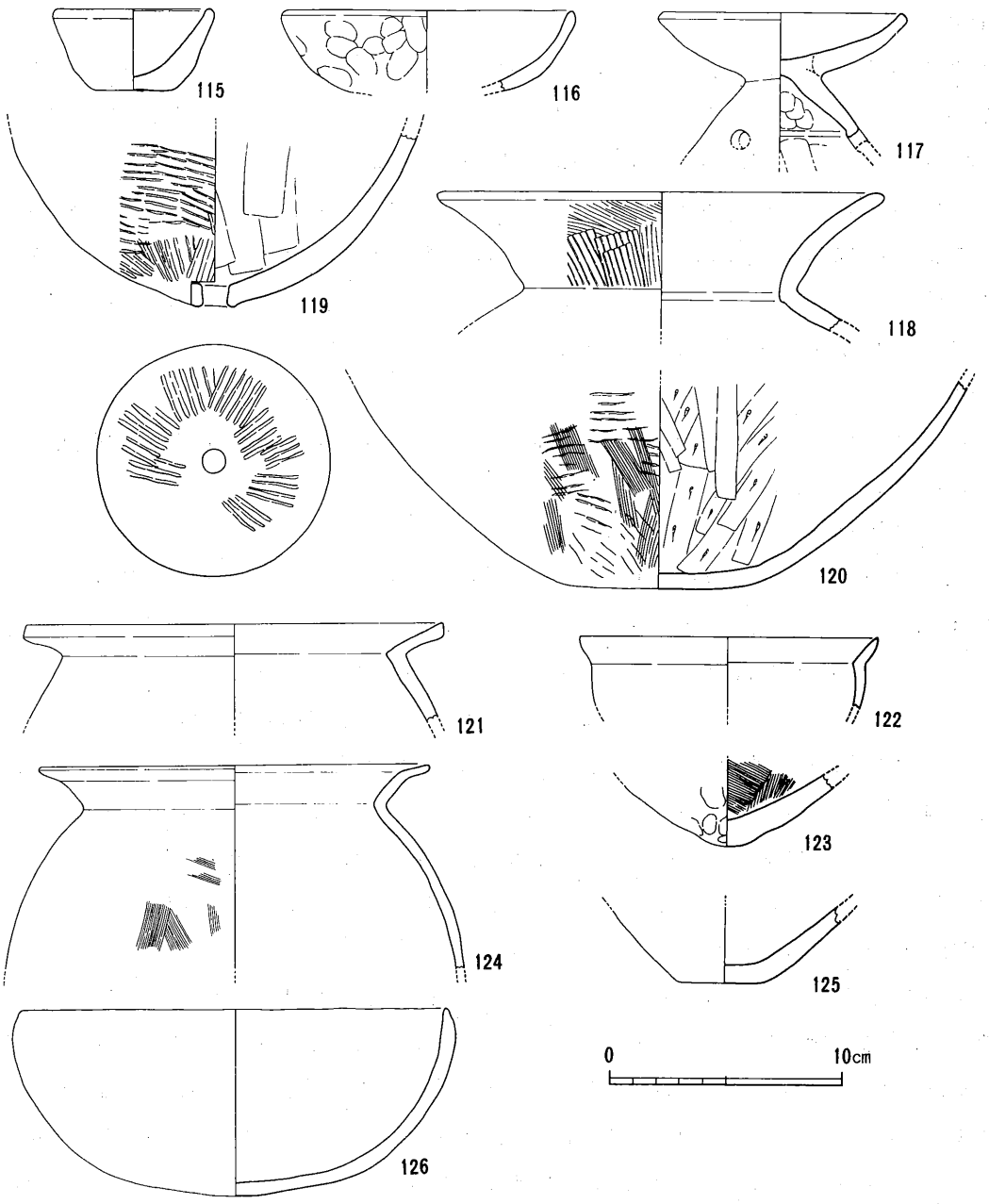
SD63

調査区南辺で検出された溝で、ほぼ東西に流路を持ち東部分では天幅2.50m深さ1.00mであるが西側では徐々に天幅も深さもなくなる。その西側でほぼ直角に北方に曲っている。上層は暗こげ茶色粘土、下層は黒灰色粘土層を主体とする埋土をしている。

126はSD63から出土した鉢である。底部は丸底を呈し内彎する体部を持ち口縁端部はやや摘み出して終わらせている。胎土は白っぽく、砂粒を多量に含んでいる。



第21図　ＳＤ05出土遺物実測図（石製品）



第22図　ＳＤ11・12・24・43・63出土遺物実測図

SD15～17

調査区北部のQ－13～16、R－13～16、S－13～16、T－13～16、U－13～16、V－13～16、W－11～16、X－11～16で検出された。東から延びるSD15はT－15付近で北東から延びるSD09を切っており、S－15付近でSD16とSD17に分かれ、SD16は西方に、SD17は南西に延びている。これらの溝は大きく上下2層に分けることができ、上層は黒色粘質土の層で下層は白灰色の砂層である。遺物はこの溝の上下層から出土しており、特に合流部で多量に出土している。SD16の延長部はO－15付近でオーバーフロー気味に広がっており、北東から延びるSD04・05に切られてはいるがほぼ同時期のものと考えられる。

①SD15上層

SD15は東から延びるものでSD16とSD17に分岐するまでを呼ぶもので、出土した遺物を上層と下層に分けて説明する。

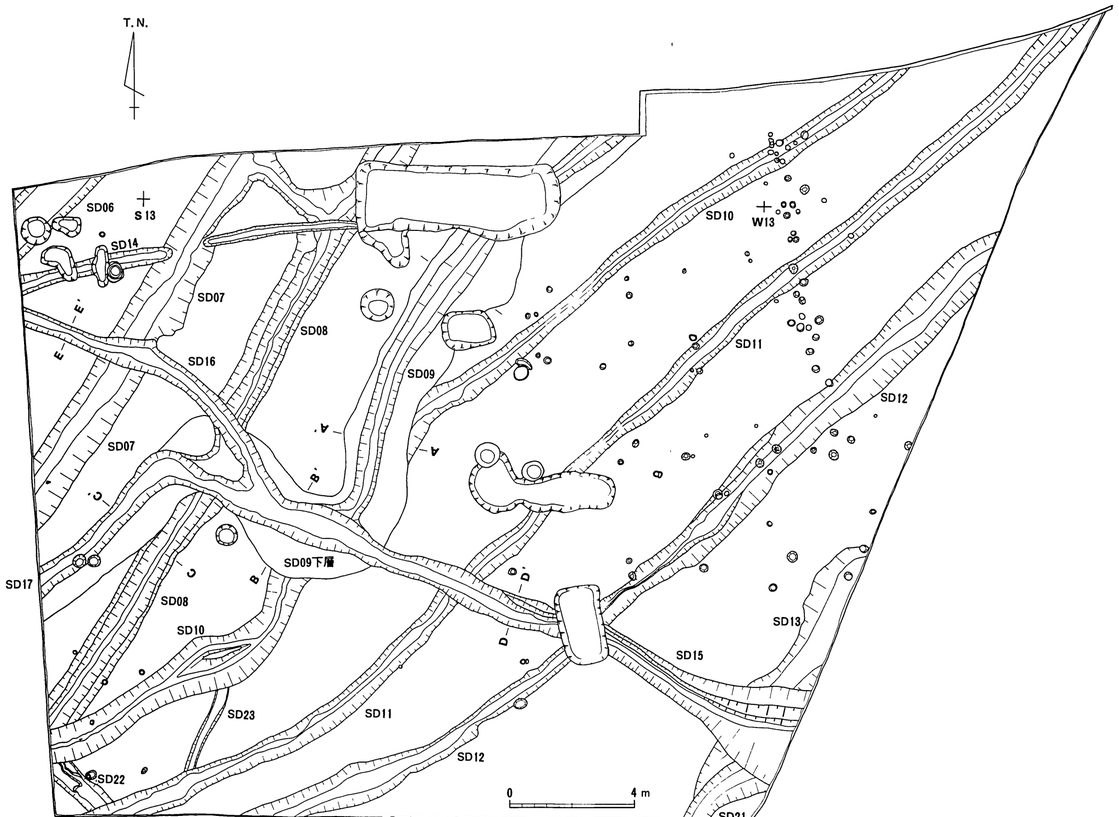
127～166はSD15上層より出土した遺物である。

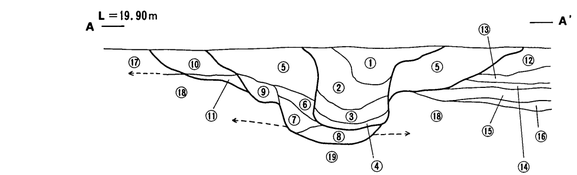
127～137は鉢である。大別して大・中・小の3タイプが認められ、小型のものは外面に指頭痕が顕著に残り、中・大型のものは外面にヘラ削りや刷毛目・指ナデ・叩きが残る。127～132の小型のものは指頭痕が外面に残っており、内面は平滑に作られている。おそらく内型づくりで作られたものではないかと考えられる。体部はやや内彎するものと直線的に外上方に延びるものがある。133は丸底状の底部を持つやや深目の鉢である。体部はやや内彎気味に外上方に延びる。体部内面には指ナデが粗く施されている。137もやや深目の鉢であるが内彎する体部から口縁部は外反させている。体部外面には叩きの後刷毛目が、内面には粗いヘラ削りが施されている。134は鉢である。体部は直線的に外上方に延びる。外面は下方から上方にヘラ削りが粗く施され、内面には刷毛目が密に施されている。135～137は口縁を外方に屈曲させるものである。

138～140は高坏である。138は高坏の坏部で、上半で屈曲し、外反気味に立ち上がる。139・140は脚部で、坏部と脚部の境からすぐ開くものと少し円柱状にしてそれから開くものがある。

141～150は甕である。141～144は小型の甕である。143・144はあまり広がらない体部を持ち頸部も「く」の字に曲がるものと緩やかに曲がるものがある。144は体部外面に刷毛目が、内面にはヘラ削りが施されている。頸部内面には粘土紐の接合痕と指頭痕が顕著に見られる。145～150は胴の張るタイプのもので頸部で「く」の字にきつく屈曲するものと緩やかに曲がるものがある。148・149は頸部で「く」の字にきつく屈曲するもので口縁端部を上面に摘み上げているものである。150は体部最大径がほぼ中央にあるやや胴長の甕で「く」の字に屈曲した頸部から口縁も少し外反気味に延びている。底部は丸底を呈している。体部外面には叩きの後細かい刷毛目が施されており、内面は底部に指頭痕を残し、その他の部分は下方から上方へのヘラ削りが施されている。

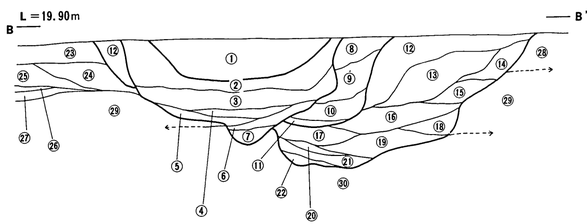
151～159は壺である。小型の壺には頸部が短く延びるものと「く」の字に緩やかに外反するも





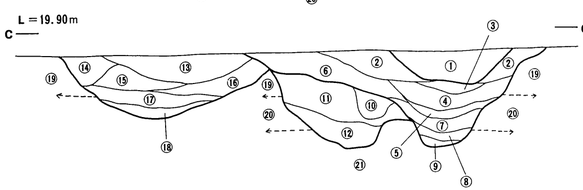
①褐黒色粘質土層（1～4㎜程度の砂粒を含む）
②淡黒灰色粘質土層（1～4㎜程度の砂粒を含む）
③灰黒色粘質土層
④淡黒灰色砂質土層
⑤暗灰色粘質土層
⑥淡黒灰色粘質土層（1～2㎜程度の砂粒を含む）
⑦黒灰色粘質土層
⑧暗灰色砂土層
⑨褐灰色粘質土層
⑩黄茶灰色粘質土層（1～3㎜程度の砂粒を含む）
⑪灰色砂土層
⑫暗黄灰色砂質土層
⑬暗褐灰色砂質土層
⑭淡灰色砂土層（1㎜以下の砂粒）
⑮灰黒色砂土層（1～3㎜程度の砂粒）
⑯暗黄灰色砂土層（1～2㎜程度の砂粒）
⑰黄灰色粘質土層
⑱暗灰褐色粘土層
⑲茶黄色粘土層

①～④ SD09上層
⑤～⑨ SD09下層
⑤、⑩、⑪ SD10



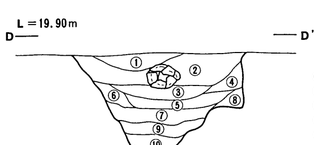
①褐黒色粘質土層（1～3㎜程度の砂粒を含む）
②灰褐黒色粘質土層
③暗褐灰色砂質土層
④暗茶褐灰色粘質土層
⑤暗灰色砂質土層
⑥淡黒灰色砂質土層
⑦暗灰色砂土層（1～2㎜程度の砂粒）
⑧褐黒色粘質土層（1～4㎜程度の砂粒を含む）
⑨淡黒灰色粘務層
⑩灰黒色粘質土層
⑪淡黒灰色粘質土層
⑫暗茶灰色粘質土層（1～3㎜程度の砂粒を含む）
⑬暗黄灰色粘質土層（1～3㎜程度の砂粒を含む）
⑭黄灰茶色粘質土層
⑮褐灰色粘質土層
⑯暗灰色砂質土層
⑰暗黄灰色砂質土層
⑱黄灰色粘質土層（1～2㎜程度の砂粒を少量含む）
⑲暗灰色粘土層
⑳暗茶灰色砂土層（2～3㎜程度の砂粒を含む）
㉑暗灰色粘土層
㉒淡黄灰色砂土層（1～3㎜程度の砂粒）
㉓暗黄灰色砂質土層
㉔黄灰色砂質土層
㉕暗褐灰色砂質土層
㉖淡灰色砂土層（1㎜以下の砂粒）
㉗灰黒色砂土層（1～3㎜程度の砂粒）
㉘黄灰色粘質土層
㉙暗灰褐色粘土層
㉚茶黄色粘土層

①～⑦ SD15
⑧～⑪ SD09上層
⑫～㉒ SD09下層

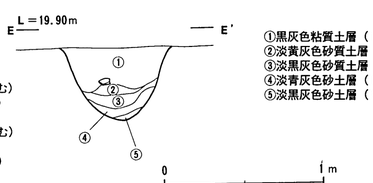


①褐黒色粘質土層（1～3㎜程度の砂粒を含む）
②灰褐黒色粘質土層（1～3㎜程度の砂粒を含む）
③淡黄色砂土層（1～3㎜程度の砂粒を含む）
④淡黒褐灰色砂質土層
⑤暗灰色砂土層（1㎜以下の砂粒）
⑥淡黒灰色粘質土層（1～3㎜程度の砂粒を少量含む）
⑦灰黒色粘質土層
⑧暗黄灰色砂土層（1㎜以下の砂粒）
⑨暗褐灰色砂土層（1㎜以下の砂粒）
⑩黒灰色粘質土層
⑪暗茶灰色砂質土層（1～2㎜程度の砂粒を含む）
⑫暗灰色砂質土層（1～2㎜程度の砂粒を含む）
⑬暗茶褐灰色粘質土層（1～3㎜程度の砂粒を少し含む）
⑭暗黄茶色粘質土層
⑮暗黄灰色砂質土層
⑯暗褐灰色砂質土層
⑰淡黒灰色砂土層（1～2㎜程度の砂粒を含む）
⑱暗灰色砂土層（1㎜前後の砂粒）
⑲黄灰色粘質土層
⑳暗灰褐色粘土層
㉑茶黄色粘土層

① SD17
②～⑨ SD15
⑩～⑫ SD09
⑬～⑱ SD08



①灰黒色粘質土層
②黒灰色砂質土層（2～3㎜程度の砂粒を含む）
③暗灰色砂土層（1～3㎜程度の砂粒を含む）
④淡黒灰色粘質土層（茶色粒を含む）
⑤淡黒灰色砂土層（1～2㎜程度の砂粒を含む）
⑥暗黄灰色粘質土層
⑦暗灰色砂土層（1～2㎜程度の砂粒を含む）
⑧暗白黄灰色粘質土層
⑨淡黒灰色砂質土層
⑩淡黒色砂質土層



①黒灰色粘質土層（1～3㎜の砂粒を含む）
②淡黄灰色砂質土層
③淡黒灰色砂質土層
④淡青灰色砂土層（1～3㎜程度の砂粒）
⑤淡黒灰色砂土層（1～3㎜程度の砂粒）

第23図　ＳＤ15～17平・土層断面図

のとがある。151は頸部が短く直線的に外上方に延びるもので外面には刷毛目調整されており、体部上半には刷毛状工具先端による刺突文が施されている。体部内面には頸部屈曲部まで下方からのヘラ削りが施されている。152は口縁端部外面に擬凹線が残り、頸部外面にはヘラ先による刺突文が施されている。155～157は頸部が朝顔型に開くもので頸部内外面に粗いヘラ磨きを施すものや刷毛目調整を施すものが見られる。155は口縁端部を上下に小さく摘み出している。158は小型の頸部が直線的に外上方に延びる壺で頸部が長いのが特徴である。159は二重口縁の壺である。口縁部外面には指ナデによる凹みが見られる。酒津系のものであろうか。

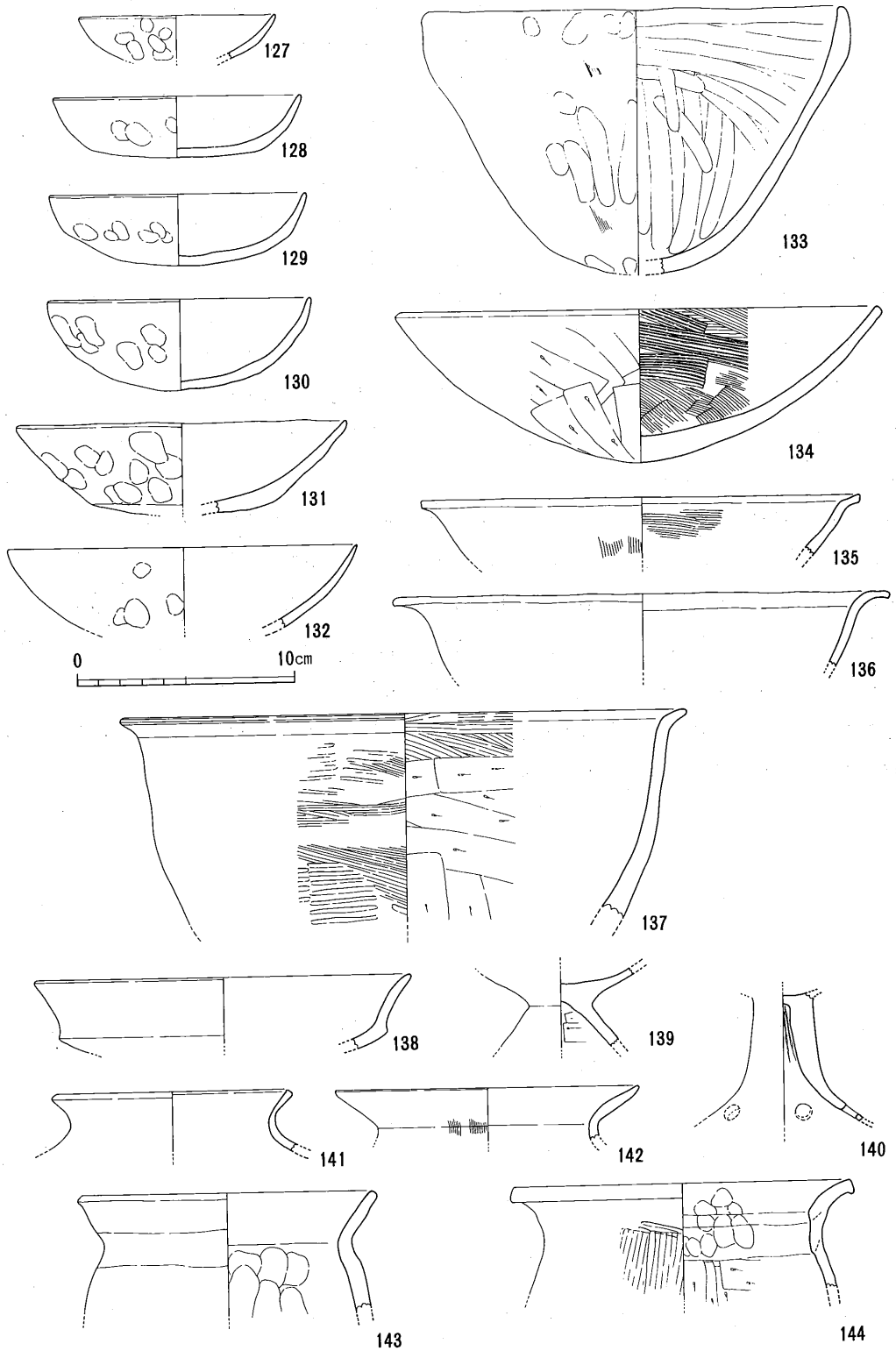
160～162は底部である。160は平底状の底部を持つようで体部外面には叩きが、内面には下方からのヘラ削りが施されている。162はしっかりした平底を持つものである。

163は小型の手捏土器の壺である。体部外面に指頭痕が顕著に見られる。

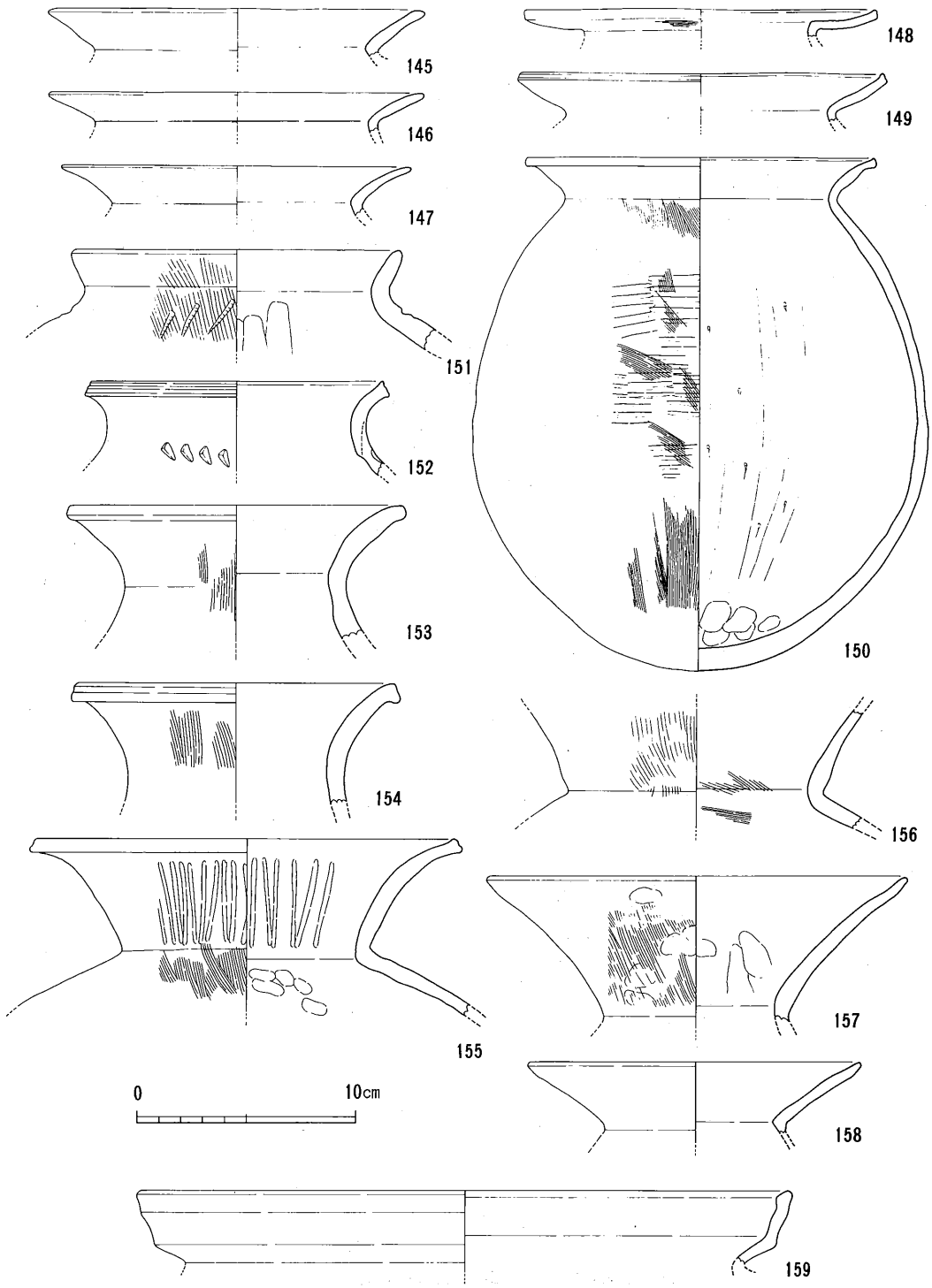
164は支脚である。上部は両手をのばした形態で下部はスカート状の脚である。脚部外面には叩きが施されている。

165・166は石製品である。166は叩き石と思われ両端に磨き痕と敲打痕が残っている。

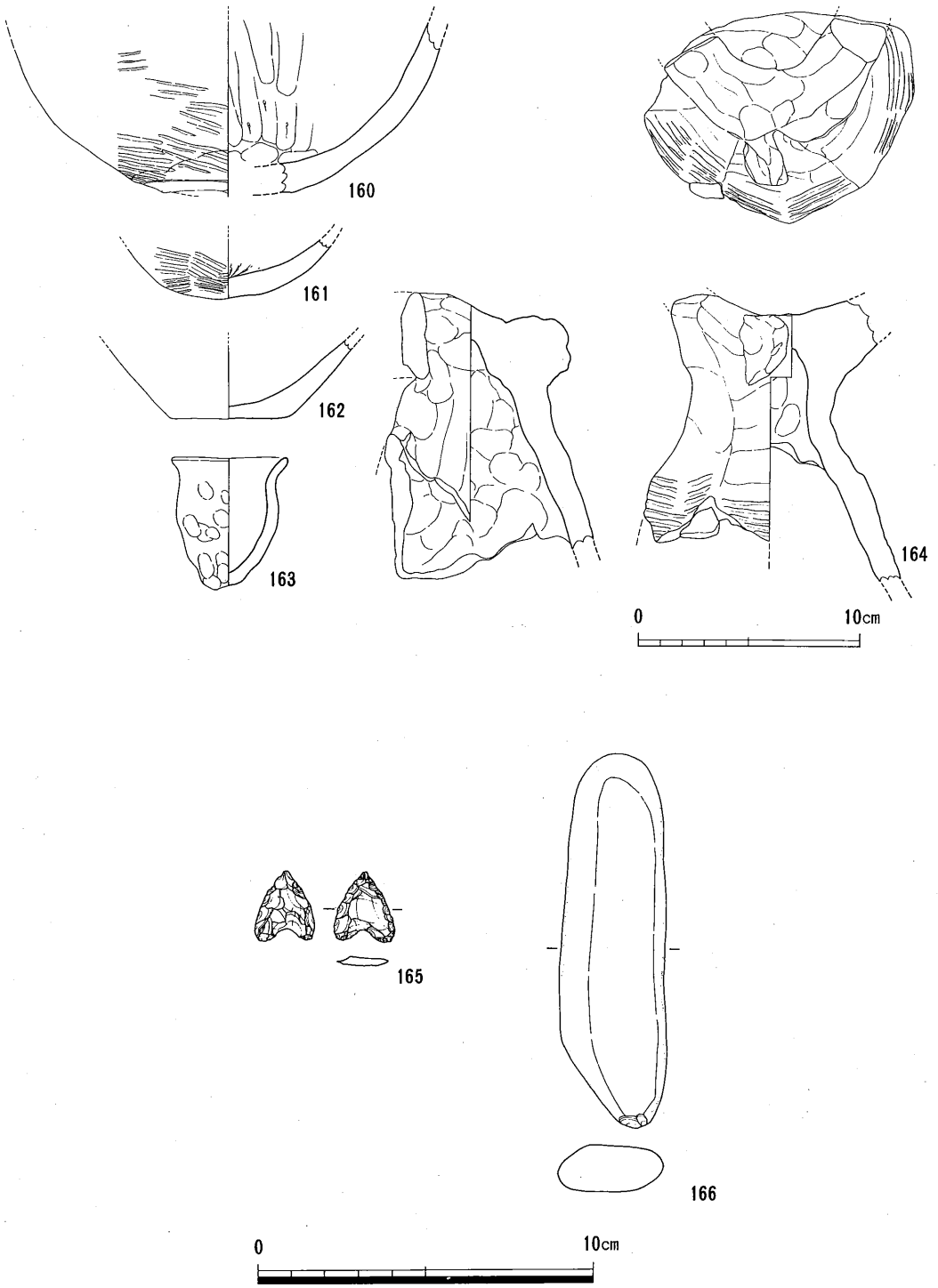
SD15上層には外面に指頭痕が顕著に見られる皿があり、小型の鉢が現われ、大型の鉢もかなりあるようである。高坏は坏部下半の方が上半部より長いものが見られる。甕はやや胴長の体部を持ち、底部は丸底化しているものがある。内面は底部に指頭痕が、体部に下方からのヘラ削りが見られるが、指頭痕の範囲は広がっていない。壺は底部にまだ平底を残すようである。高坏と小型の壺にやや古い特徴を残すものがあるが、その他のものについては庄内併行期新段階～布留式期の古段階に比定される時期のものである。



第24図　ＳＤ15上層出土遺物実測図①



第25図　ＳＤ15上層出土遺物実測図②



第26図　ＳＤ15上層出土遺物実測図③

②SD15下層

白灰色の砂の層から多量の弥生土器が出土している。特にSD09とSD15が切りあう部分がやや深くなっており、そこから多量に出土している。SD15はほぼ東西方向に流れる溝で調査区東にあると思われる居住域からの排水溝と思われる。

167～169は皿である。外面に指頭痕が顕著に見られ、内面は平滑に作られているものが多い。内型によって作られたものと思われる。法量もほぼ一定しているようである。

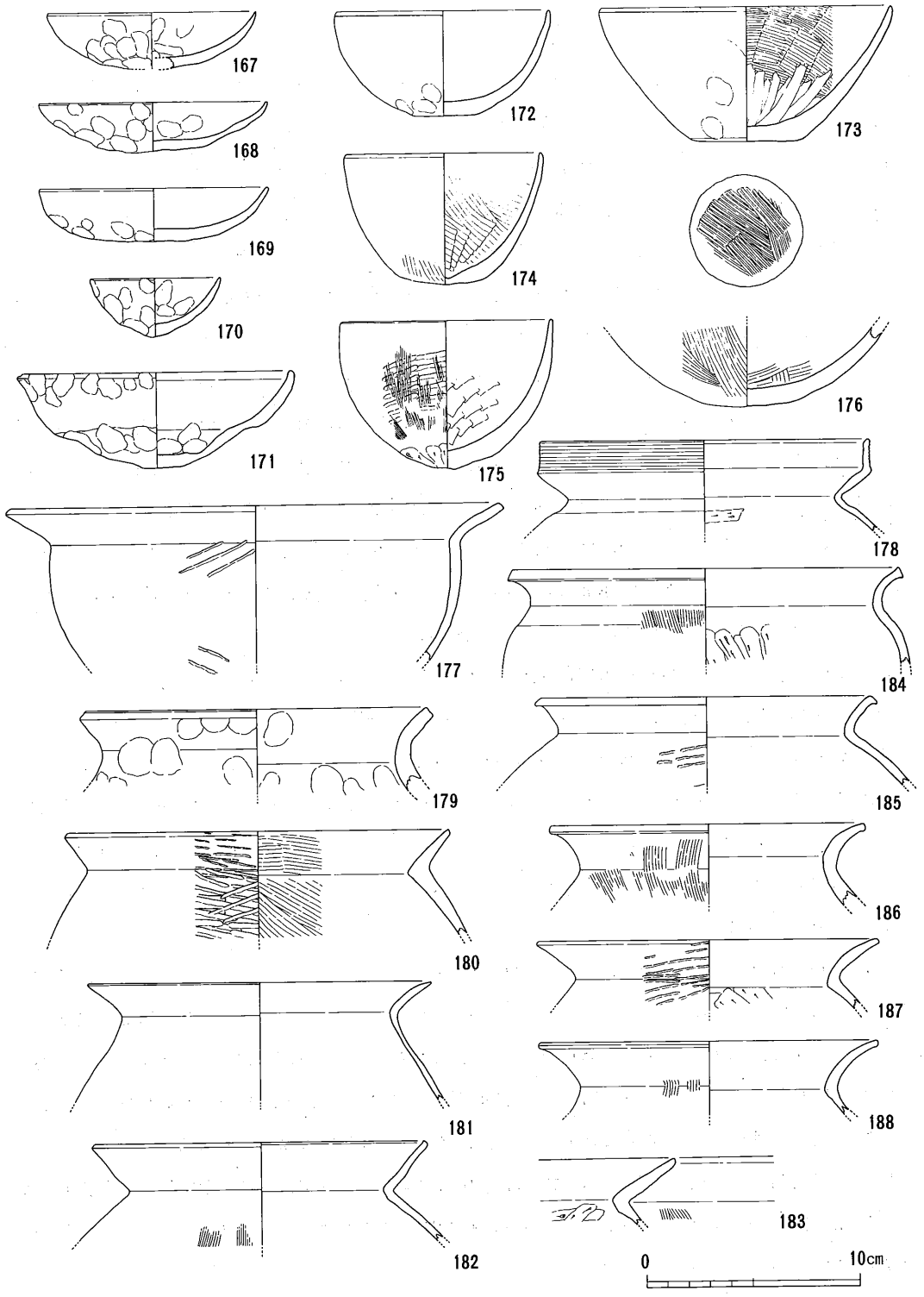
170～177は鉢である。外面に指頭痕が顕著に見られるものと叩き・刷毛などで丁寧に仕上げているものとがある。170は小型の手捏の鉢である。171は少し大きめの外面に指頭痕が顕著に残る鉢で、やはり内型のようなものを使い製作されてものではないかと考えられる。器表面を丁寧に仕上げられた鉢には底部に平底を残すものと丸底のものがある。172～174は底部に平底を持ち、体部はやや内彎気味に外上方に延びる鉢である。173は体部外面には指ナデが、内面には刷毛目の後下方からの指ナデが施されている。底部外面にはヘラ磨き状の刷毛目が施されている。175は底部がヘラ削りにより丸底化された鉢である。底部外面にはヘラ削りが、体部外面には叩きの後細かい刷毛目が施され、内面には板状工具によるナデが施されている。177は中型の鉢である。内彎する体部から口縁が外方に屈曲するものである。かなり磨滅しており器面調整が確認できないが、体部外面には叩きが施されていたようである。

178～193は甕である。178は酒津系の甕で、胎土がチョコレート色をしており、おそらく吉備からの搬入品と思われる。口縁部の立ち上がり外面には櫛描による沈線が施されている。その他の甕は胴張りになるタイプと胴のあまり張らないタイプのものに分けられるようである。前者の口縁形態には頸部の屈曲がきついものと、緩やかに曲がるものがある。口縁形態は頸部の屈曲がきついものは直線的に延び、緩やかなものは外反しながら延びる傾向が見られる。180は口縁部が「く」の字にきつく屈曲し、口縁端部はシャープにおわらせるものある。体部外面には叩きが、内面には刷毛目が密に施されている。

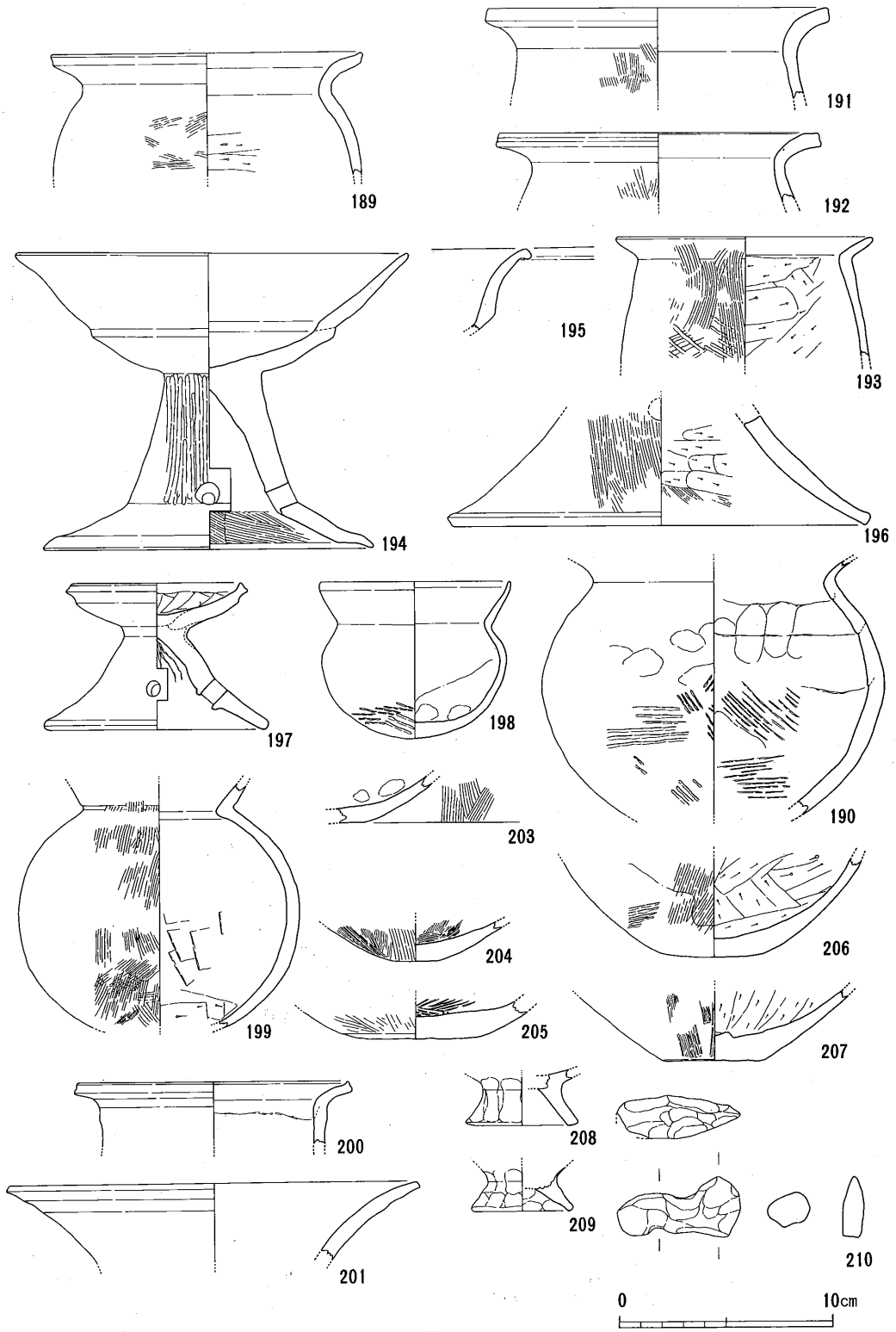
194～196は高坏である。194は坏部のほぼ真中辺りに屈曲部を作り、全体に外上方に直線的に延びる。脚部はやや下方に屈曲部を持ち、端部はまず上方へ、そしてすぐ下方へ屈曲させるものである。脚部には四方に穿孔が認められる。脚部外面とおそらく坏部にはヘラ磨きが密に施されていたと思われる。また、脚部内面下半には刷毛目が施されている。195は高坏の坏部と思われる。坏部上半が外反し口縁端部は外方に折り曲げている。196は大型高坏の脚部と思われる。

197は小型器台である。坏部の口縁端部は外側に面を持ち、外面に凹線状の指ナデを施している。脚部はやや外反させながら広がっている。坏部内面には板状工具によるナデが施されている。3方向に穿孔が認められる。

198～202は壺である。198は小型の丸底壺で口縁端部をやや内方に曲げるものである。底部外面には細かい叩きが、内面には指頭痕が認められる。199は体部がほぼ球形を呈する壺である。



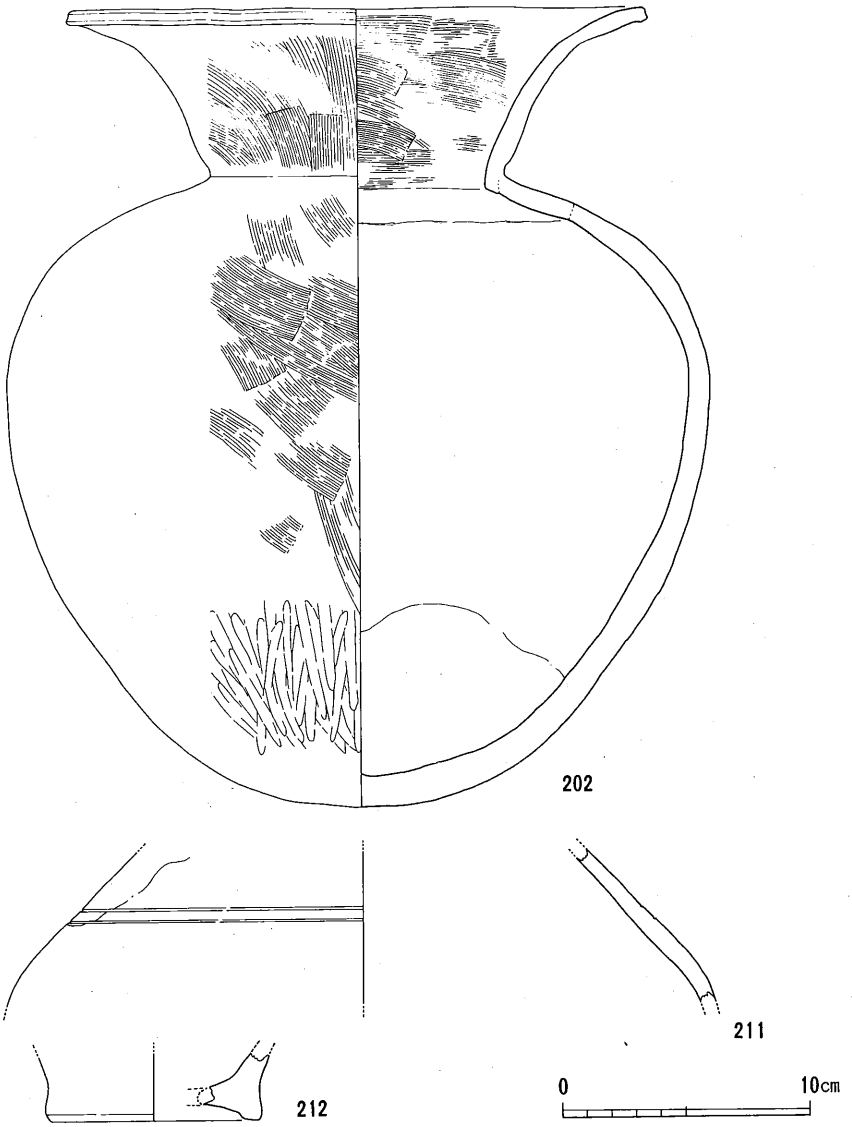
第27図　ＳＤ15下層出土遺物実測図①



第28図　ＳＤ15下層出土遺物実測図②

体部外面には刷毛目が、内面には下半部にヘラ削り、上半部に板ナデが施されている。200は長頸壺の口縁と思われる。直線的に上方に延びる頸部を持ち口縁は緩やかに外反し、端部を上方に小さく摘み上げている。202は口縁部が朝顔状に開く壺で、体部はやや胴長であるが最大径が上半に位置している。底部は丸底である。口縁端部外面には沈線が認められる。体部上半外面と頸部内外面に刷毛目が、体部下半外面には縦方向の太いヘラ磨きが施されている。体部内面は指ナデにより平滑に仕上げられている。

203～209は底部である。ほとんどが平底を残すものであるが、やや丸底化しているものも認められる。208・209は製塩土器の底部である。脚部外面に指ナデが顕著に施されている。他の弥生



第29図　ＳＤ15下層出土遺物実測図③

土器に比べて砂粒を多量に含んでいる。

210は手捏の土製品で、頭部は欠損しているが尻尾をやや大きめに、細く形づくっておりおそらく魚型と考えられる。

211・212は弥生時代前期の土器である。211は壺で肩部に2条のヘラ描沈線を施している。212は高台状の底部を持つもので、底部に穿孔が認められる。

213は安山岩製の打製石斧である。

③ SD16上層・中層・下層

SD16はSD15がS－15付近で二つに別れた北側のもので、蛇行はしているもののほぼ西方に流路を取っている。そしてS－13付近で北東から流れてきたSD04・05に切られている。この溝はN－15付近でオーバーフロー気味に流路が広がるが一番底の部分ではしっかりとした流路が西方へ流れている。埋土は基本的にSD15と同じであるがN－15の部分では下層である砂層がごく少量になると思われる。遺物は、この流路が広がった部分の上層灰黒色粘質土で多数出土したが、ほとんどが小片ばかりで実測可能なものはごく少量であった。

214～221は鉢である。214～217は外面に指頭痕の顕著に残る内型作りによる鉢である。218・219は体部がやや内彎気味に外上方へ延びる大型の鉢である。220・221は体部上半で外方に屈曲する鉢である。内外面に刷毛目が施されている。このように鉢は3タイプに分けられ、法量によっても差があると考えられる。

222～225は壺である。222は朝顔型に開くもので口縁端部は丸くおさめられ、端部上面には浅い凹線が施されている。223は壺の口縁で水平に延びる頸部を持ち、端部は上下に拡張されている。224は小型の手捏の壺である。225は頸部が短くほぼ上方に延びるもので、体部に張りがある。

226～230は底部である。227は体部外面に叩きが、内面に下方からのヘラ削りが施されているようである。底部は小さい平底を残すと思われる。228～230は製塩土器の底部である。短い脚部を持ち、外面には指ナデが施されている。

231は突帯文系の土器である。直線的に外上方に延びる頸部を持ち、外面には口縁端部からやや下がったところに刻み目突帯がある。

232・233は石製品である。232は石鏃である。二等辺三角形状を呈し、基部は凹基式である。233は砥石である。石質は砂岩製かと思われる。

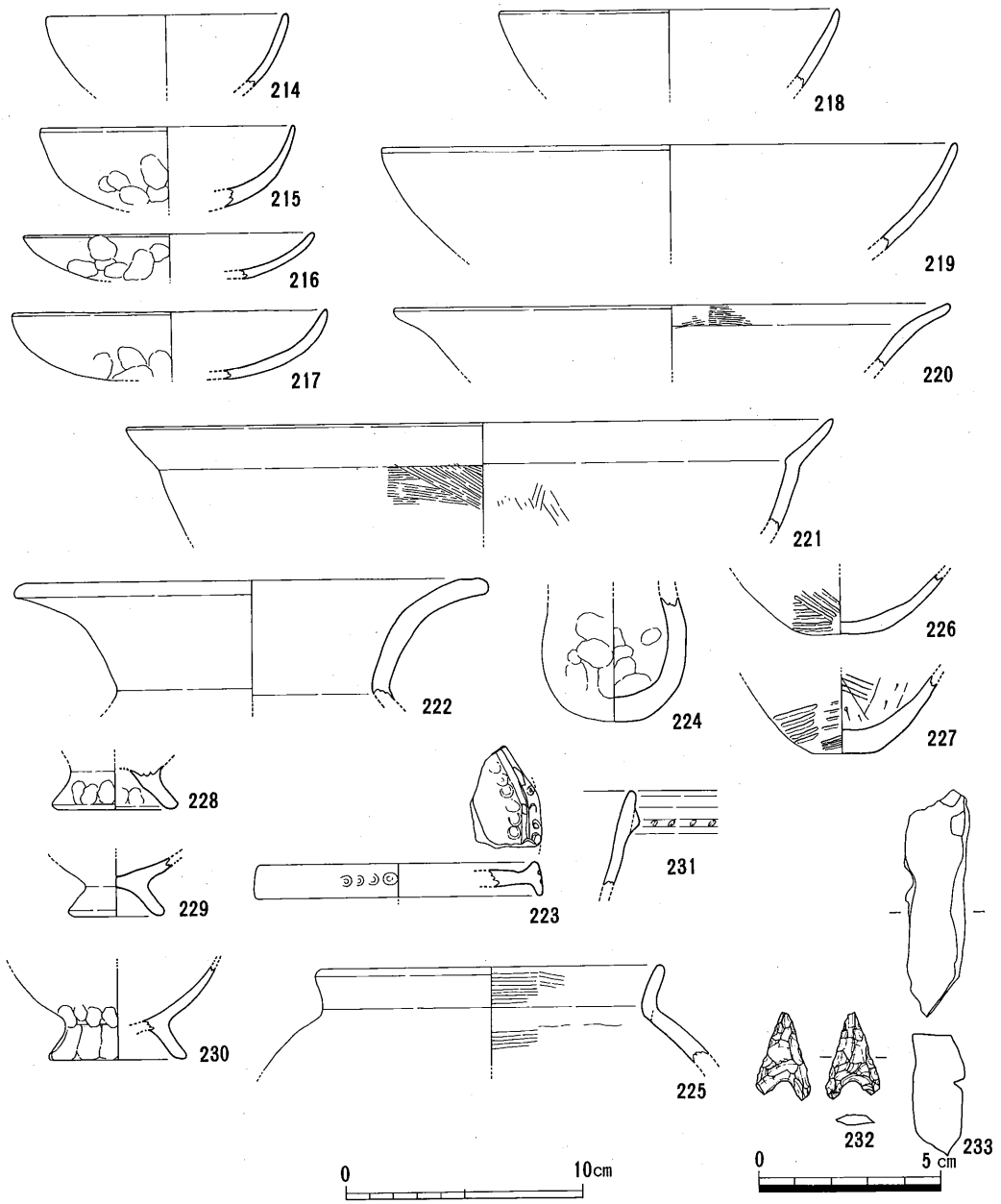
SD16の遺物はほとんどが上層から出土しており、下層から出土したものは225だけである。

④ SD17上層・下層

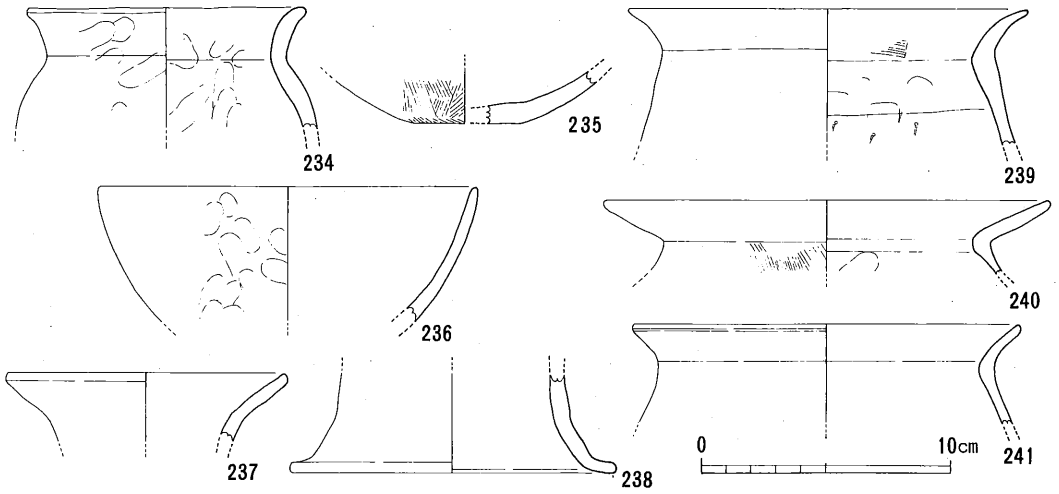
SD17は東から延びてきたSD15がS－15付近で二つに別れた南側の溝である。この溝はそのまま南西方向に流路を取っている。埋土はほぼSD15と同じで上層が灰黒色粘質土で下層が白灰色の砂層であるが、それに包含されている遺物は少量であった。

234・235は上層から出土したもので、236～241は下層から出土したものである。

234は小型の壺で頸部は緩やかに外反し、端部は丸くおさめている。235は底部である。平底を残すもので外面には刷毛目が密に施されている。236は鉢である。体部外面に指頭痕が施されている。237は頸部が朝顔型に開く小型の壺の口縁である。238は高坏の脚であろうか。239～241は甕である。頸部は直線的に外上方に延びるものと、やや外反しながら延びるものとがある。



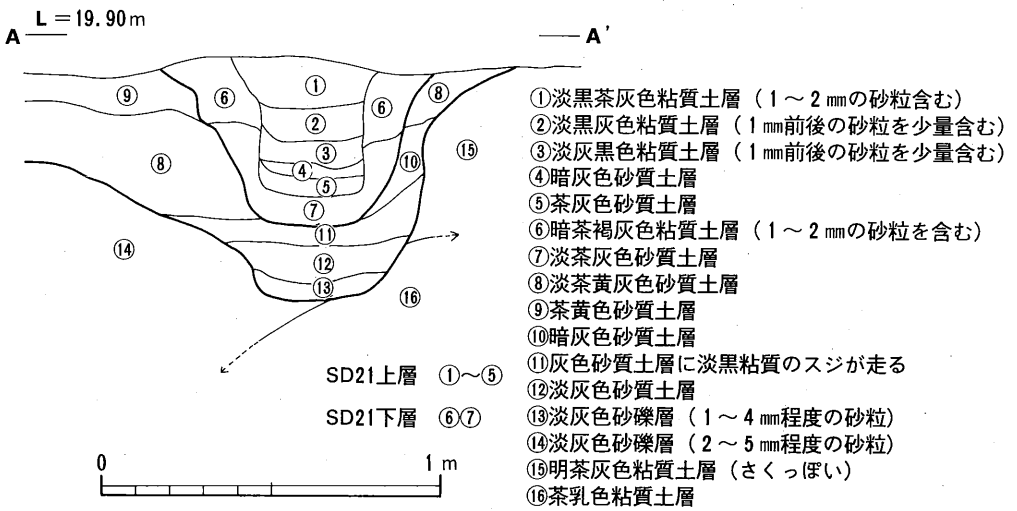
第30図　ＳＤ16上層・中層・下層出土遺物実測図



第31図　ＳＤ17上層・下層出土遺物実測図

SD21

調査区北東部から南西にむかって流れるこの溝はＶ－16（北東部）においてSD15に切られており、調査区外に延びる。天幅85cm、深さ35.5cmのこの溝は①～⑤の黒色粘質土を主体とする堆積土と茶灰色砂混じり粘質土を主体とする堆積土の二時期が考えられ、ほとんどの遺物は前者の方で出土している。遺物は投げ込まれたような状態で出土している。出土している土器を観察するとあまり磨滅していないので住居址などの居住域が近くに存在していた可能性が考えられる。この時期の溝より前の溝はほとんど全てが等高線と平行に流れているが、弥生時代後期終末になると等高線に直行するような溝も見られるようである。



第32図　ＳＤ21土層断面図

SD21の遺物はほとんどが上層の灰黒色粘質土から出土したものである。

242～249は皿である。外面に指頭痕が顕著に残るもので、おそらく内型によって作られたものと思われる。口縁部はやや内彎するものと、直線的に外上方に延びるものがある。

250～274は鉢である。出土した鉢には小型のもの、中型のもの、大型のものが認められ、器型によっても8つに細分できる。250は小型の鉢である。外面に指頭痕が顕著に残るもので、口縁部が片口状に作られている。251・252は鉢の底部と思われる。251は内外面に顕著に指ナデが認められる。253～259はボール状を呈する鉢で法量差で小型のものと中型のものがある。253・254は深目の小型の鉢である。253体部が他のものに比べるとやや内彎気味で口縁端部は丸くおさめられている。255～259は中型の深目の鉢である。体部の形態には2タイプ認められ、ひとつは体部の内彎がきつくほぼ上方に口縁が延びるもので、もうひとつは体部の内彎が緩いものである。259は底部外面にヘラ削りが施されている。260～263は体部が直線的に外上方に延びるもので、口縁端部をシャープにおさめるもの（260・261）と、やや内方に摘み上げるもの（262）と外側に面を作るもの（263）がある。これらの鉢は他のものに比べて内外面の調整が丁寧である。264・265は大型の鉢である。264は体部がやや内彎気味に外上方に延びるもので、外面には叩きが、内面にはヘラ削りの後刷毛目が施されている。265が内彎気味の体部を持ち上部で外方に屈曲するもので体部外面下半にはヘラ削りが上半には叩きが施され、内面にはヘラ削りが施されている。266～268は体部が上半で外方に屈曲する小型の鉢である。265が小型化したようにも思えるもので、小型3器種のひとつ、小型丸底壺の祖形かと考えられる。269～272は底部に平底を持つものである。269はしっかりした平底を持つものではないが、体部下半に叩きが内面には下方からのヘラ削りが施されている。270は底部に平底を持ち体部は丸く作られ、口縁部がやや外反する小型の鉢（小型の手捏の壺と呼んだほうが適切かもしれない。）である。体部外面に指頭痕が見られる。271は底部に平底を持つ小型の鉢である。272・273は271に比べるとやや大きめの鉢で、体部はやや内彎気味に立ち上がり底部はしっかりしている。273の底部は突出高台である。274は体部がやや内彎し、上部で屈曲部を持ち、内彎気味に延びるものである。屈曲部外面には突帯がある。内外面に刷毛目がある。胎土はチョコレート色を呈しており、香川県ではあまり見られないタイプの鉢である。

275～294は甕である。275～279は頸部がやや分厚く、外反するものである。頸部の屈曲がきついものと緩やかなものがある。279は体部がやや胴長の球形を取っており、底部は丸底である。口縁部は直線的に外上方に延び、端部は外面に沈線を持ち、上面を摘み上げている。体部外面には叩きの後刷毛目が施され、内面には底部に指頭痕、体部には下方からのヘラ削りの後粗い刷毛目が施されている。280は口縁部が直線的に延びるもので頸部の屈曲はきつい。体部はやや胴長の球形を呈している。体部外面には刷毛目が内面には下方からのヘラ削りが施されている。281～284は口縁部が外反気味に外上方に延び、端部近くを上方に屈曲させたものである。頸部の

屈曲はきつい。284は体部胴長の球形状を呈するが最大径が上半にあり、底部に丸底状の平底を持つ。体部外面には叩きの後刷毛目が施されている。底部内面には指頭痕が認められる。体部内面の調整は磨滅のため不明であるがおそらくヘラ削りが施されていたようである。285は口縁部が屈曲して外上方に延びるものである。体部外面には刷毛目が施され、内面にはヘラ削りが施されている。285・286はほぼ直線的に頸部が延び、口縁端部を上方に摘み上げるものである。288は体部が胴長のほぼ球形で最大径を中央に持つもので底部は丸底を呈している。口縁部は直線的に外上方に延び、口縁端部は丸くおさめながらやや上端を摘み上げている。体部外面には叩きの後刷毛目が施され、内面は下方からのヘラ削りが施されている。289は頸部が短く外方に延びるものである。体部内面には指ナデが認められる。290～294はやや小型の甕である。体部はほぼ球形を呈するものが多いようである。調整は体部外面には刷毛目が、内面にはヘラ削りが施されている。293は口縁部が短くほぼ水平近くまで屈曲しており、体部は丸味を持っている。体部外面には細かい刷毛目が、内面には下方からのヘラ削りが施されている。294は体部がほぼ球形を呈しており底部はやや尖り気味ではあるが丸底を呈する甕である。

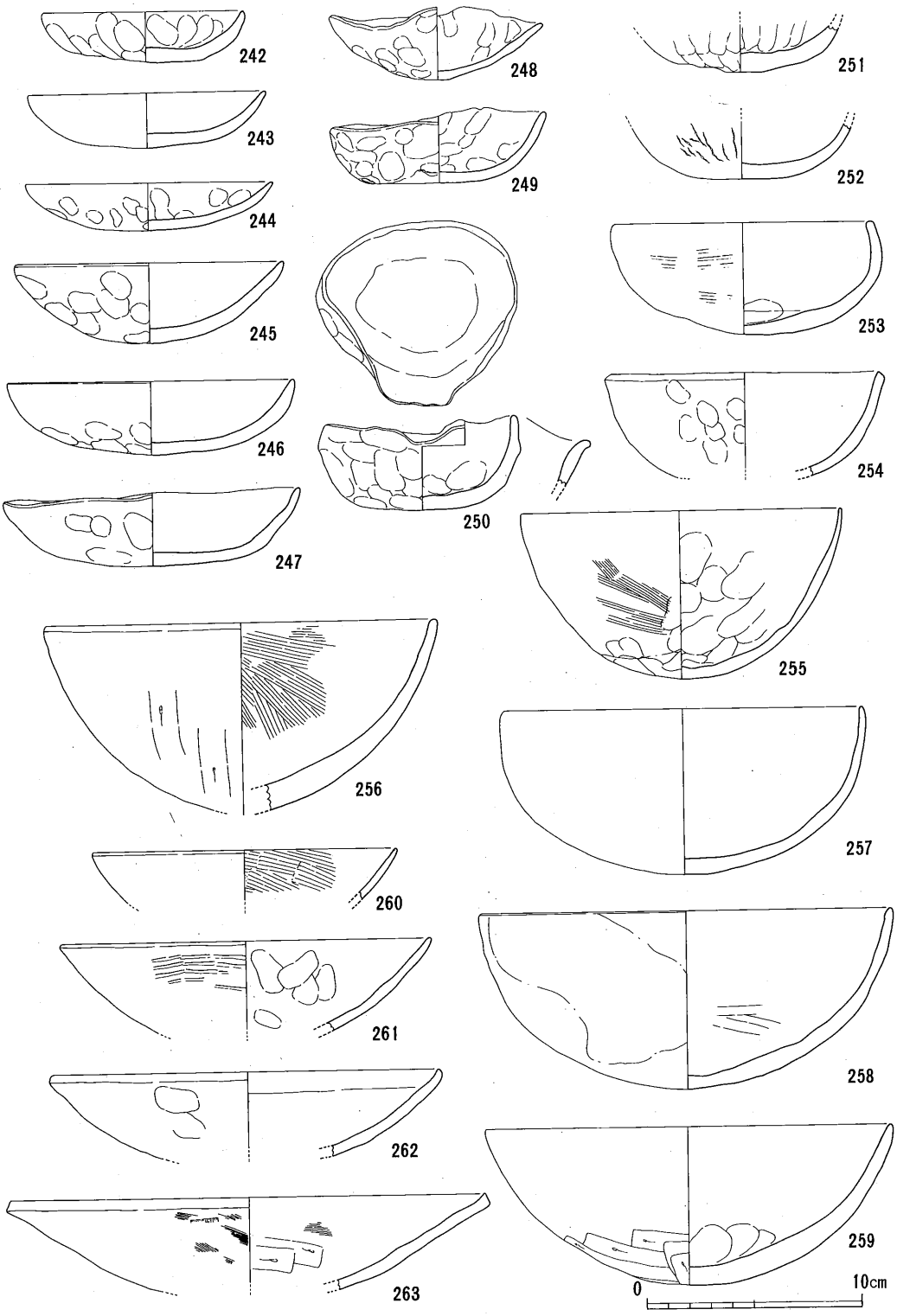
295は小型器台である。坏部は直線的に外上方に短く延び、脚部はやや内彎しながら開くものである。坏部と脚部の接合部と脚部内面には指頭痕が認められる。

296は製塩土器の脚部である。脚部外面には指頭痕が、体部外面には叩きが施されている。

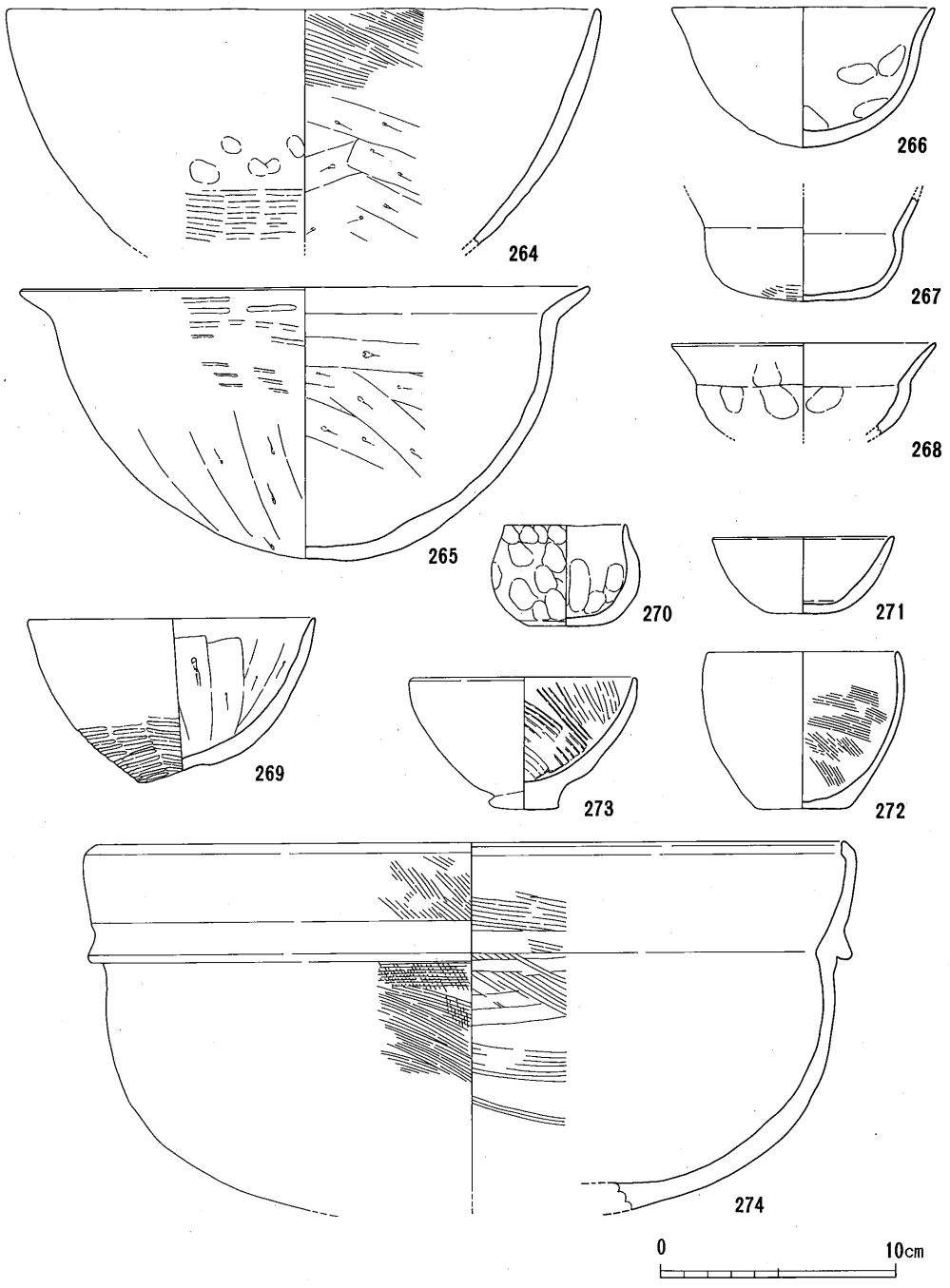
297は土製品である。動物型の胴部と思われ、四隅に足状の突起が認められる。

298は土製の支脚である。土器との接触部は蛇の頭状を呈しており背面には鰭状の突起が付いている。

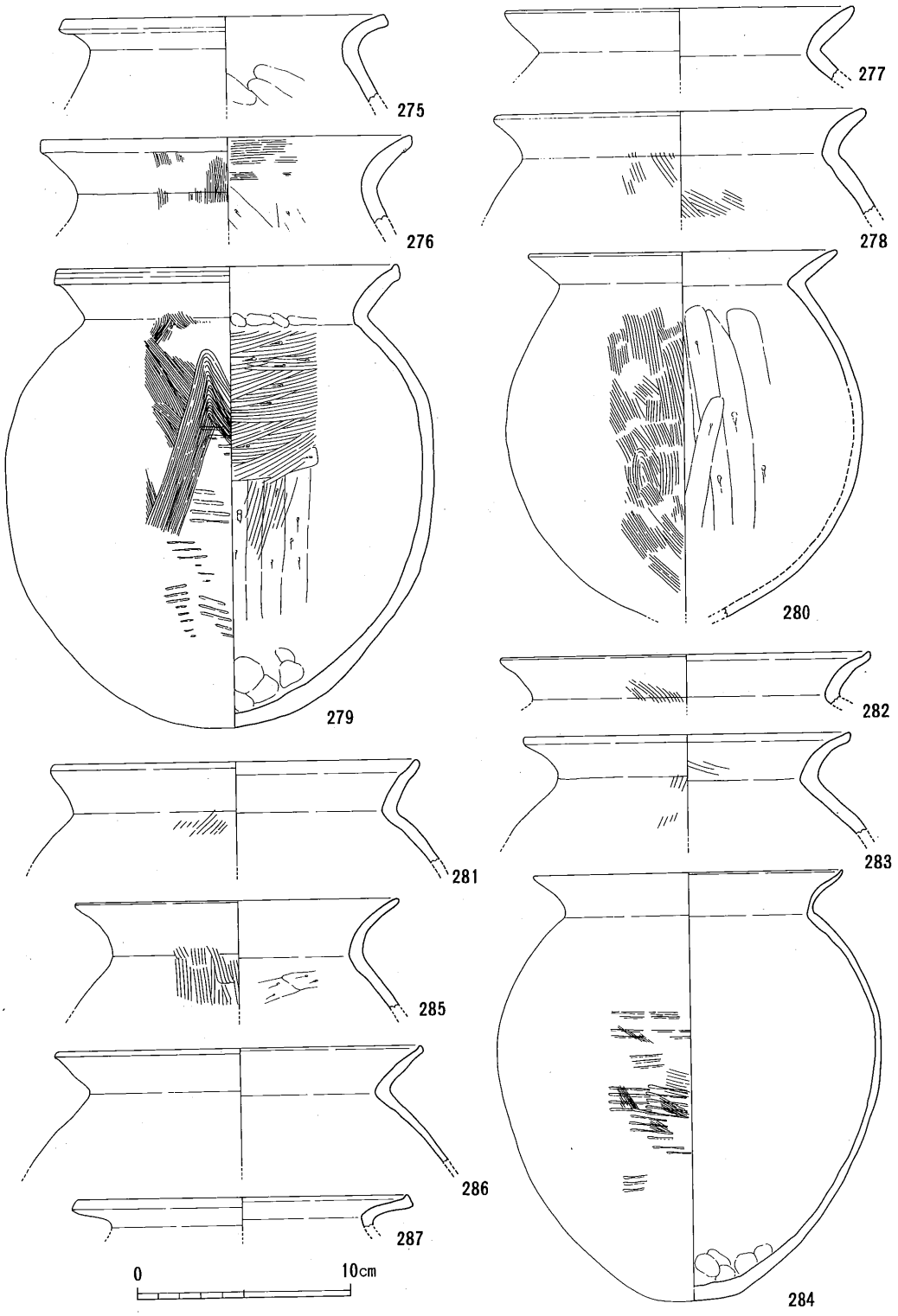
299～312は壺である。299は所謂西瀬戸内系の二重口縁の壺である。300は頸部中央で屈曲部を持ち、外反する二重口縁の壺である。頸部外面には縦方向の刷毛目が内面にはヘラ磨きが施されている。301は頸部中央で屈曲部を持ち朝顔状に広がるものである。302・303は直線的に外上方に延びる頸部を持つものである。頸部内外面には刷毛目が施されている。304は頸部が朝顔型に開く壺である。口縁端部外面には1条の沈線が施されている。305は頸部上半で屈曲部をもち開くものでで口縁端部は外側に面を作っている。305の頸部の屈曲が緩くなったものに308・311がある。311は体部がかなり胴張りのもので底部はおそらく丸底であったと思われる。頸部外面には縦方向の太いヘラ磨きが体部外面には細かい刷毛目が施されている。体部内面には部分的に指頭痕が認められる。306は口縁端部が上下に短く拡張されるものである。307は長頸壺である。頸部が長く延び口縁部は外反する。体部は胴張りで最大径が中央よりやや上方にあり、底部はしっかりした平底を呈している。頸部外面には2条の沈線が施されている。体部上半と頸部外面には刷毛目が施され、内面には下半にヘラ削り、上半に指ナデが顕著に見られる。310は頸部が短く外反しながら外上方に延び、体部はやや胴長で底部が丸底の壺である。体部外面には粗い刷毛目が、内面にはヘラ削りの後上半には粗い刷毛目が下半には指頭痕が認められる。309・312は壺の底部



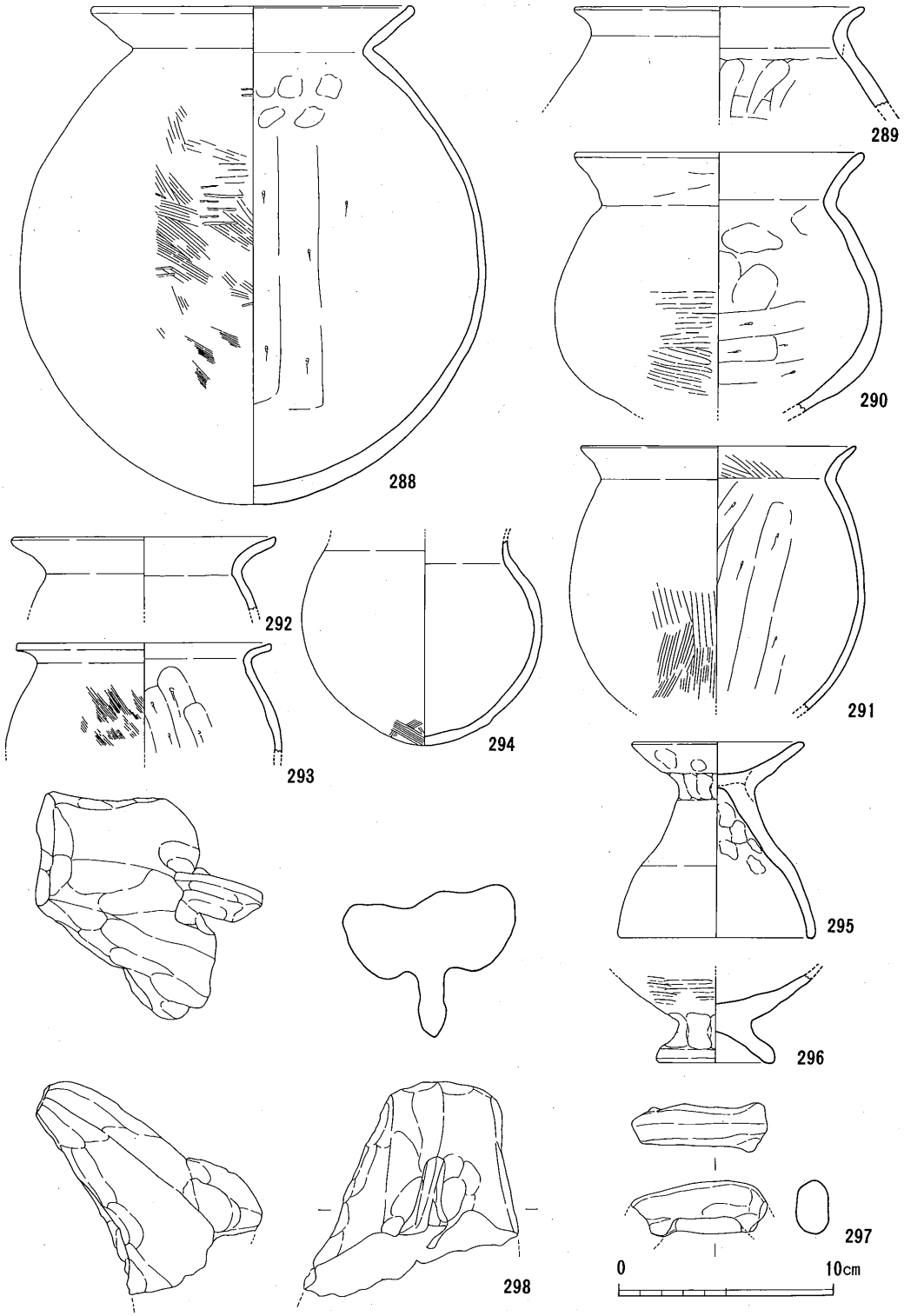
第33図　ＳＤ21出土遺物実測図①



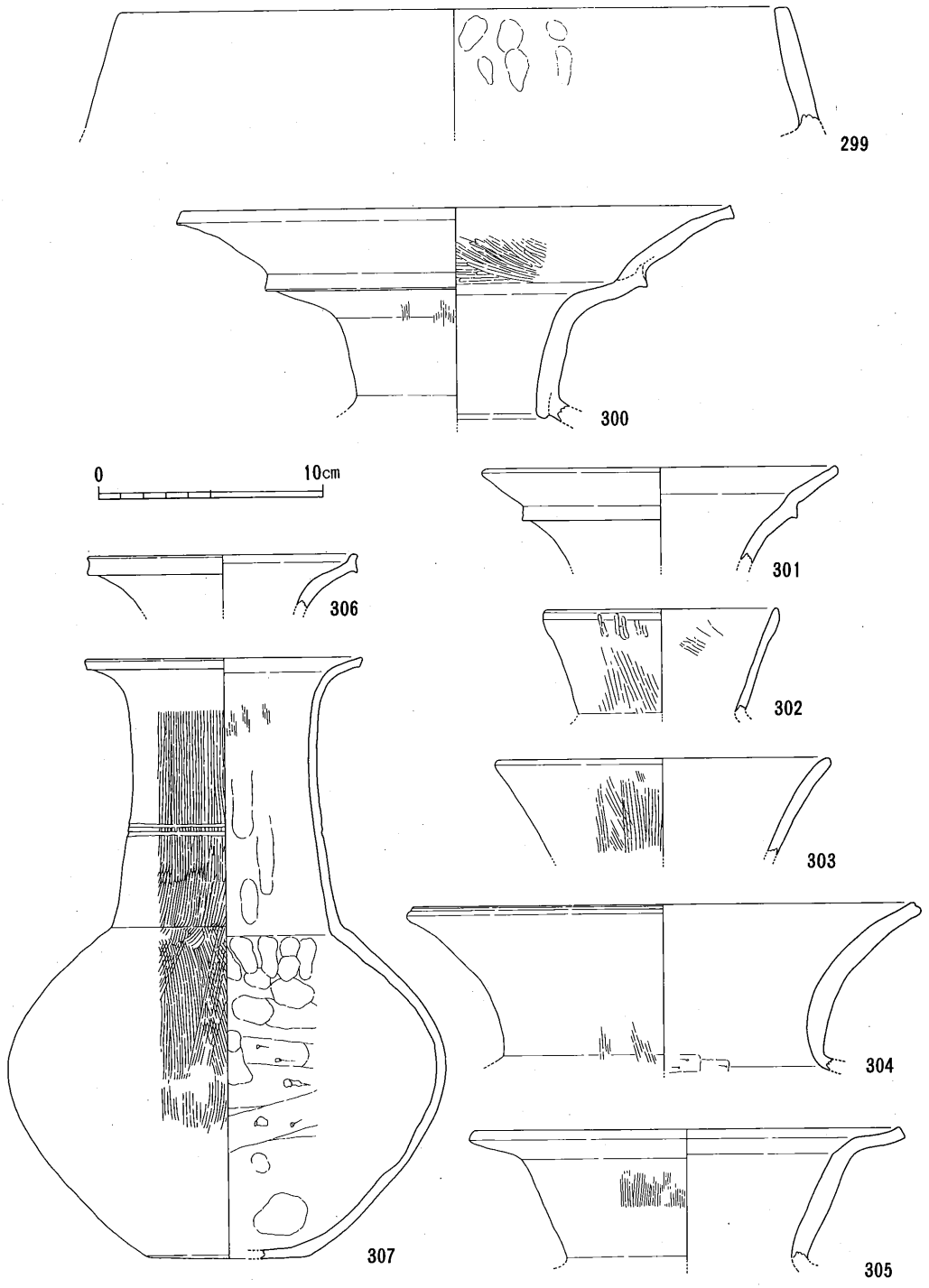
第34図　ＳＤ21出土遺物実測図②



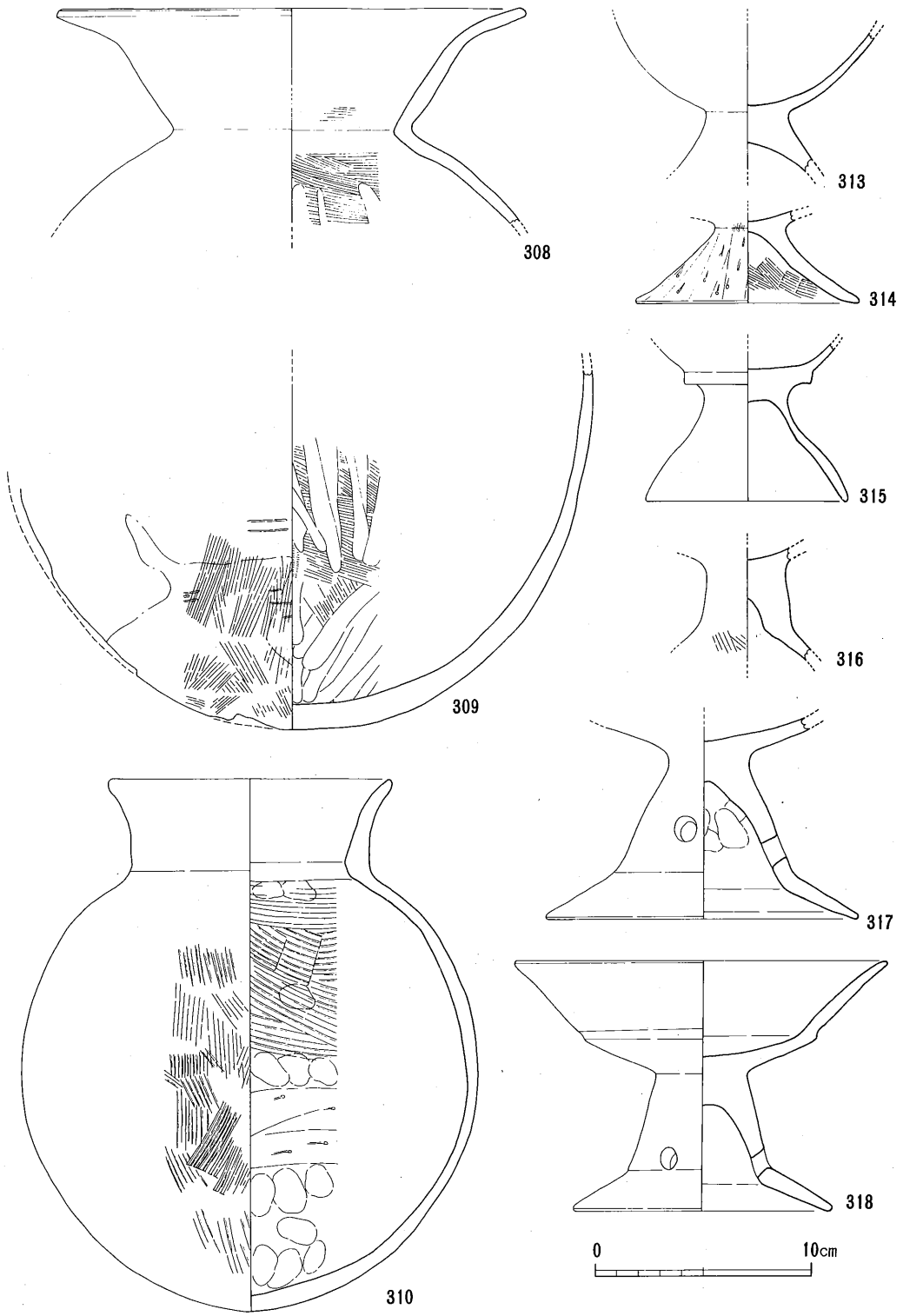
第35図　ＳＤ21出土遺物実測図③



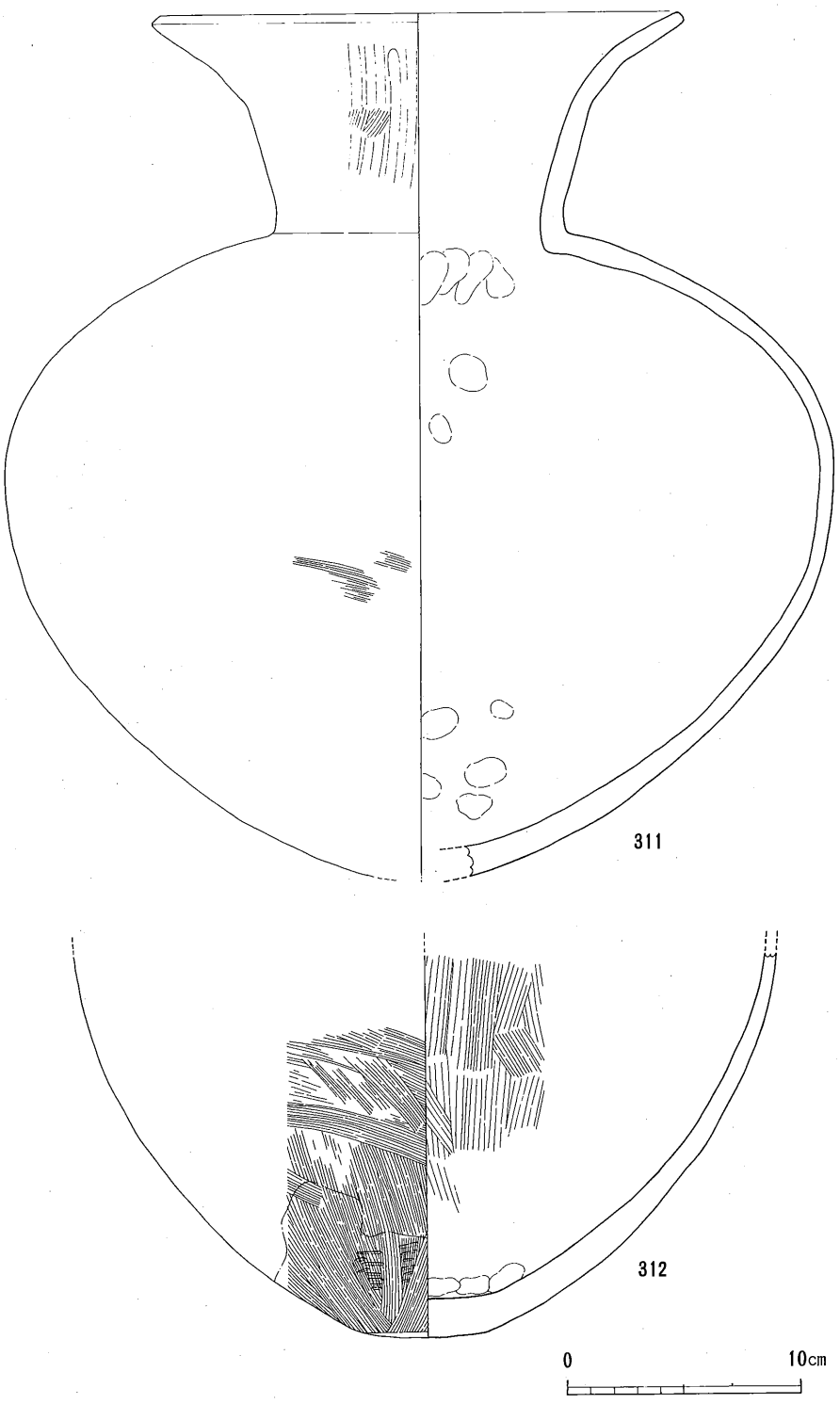
第36図　ＳＤ21出土遺物実測図④



第37図　ＳＤ21出土遺物実測図⑤

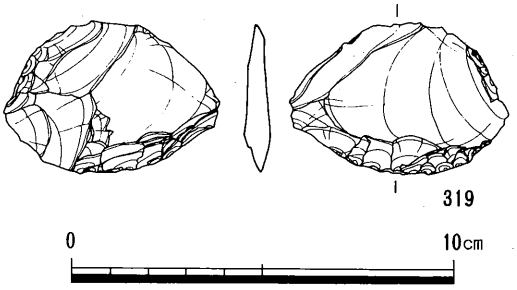


第38図　ＳＤ21出土遺物実測図⑥



第39図　ＳＤ21出土遺物実測図⑦

である。309は308の底部と思われる。底部は丸底を呈している。308と同様体部内面に刷毛目の後縦方向の指ナデが施されている。体部外面には叩きの後刷毛目が施されている。312は底部に平底を持つ壺の底部である。体部外面には叩きの後刷毛目が密に施され、内面にも刷毛目が施されている。底部外面にも叩きが見られる。



第40図　ＳＤ21出土遺物実測図（石製品）

313・314は脚付鉢と思われる。314は脚が大きく広がるもので外面にはヘラ削りが、内面には刷毛目が施されている。

315は高坏か小型器台かと思われるものである。坏部下半に突帯状の段を持っており、脚部はやや内彎しながら広がるものである。

316～318は高坏である。317は脚部上半がやや張っており、下半で外方に屈曲している。脚部中央付近３ヵ所に穿孔が認められる。318は坏部の中央部で屈曲部を持ち上半はほぼ直線的に外上方に延びる。脚部は下半部で外方に屈曲している。脚部の穿孔は３ヵ所認められる。

319はスクレイパーである。楕円形を呈しており、縁辺部には細かい調整が施され、刃部としている。

Ｖ－18で検出されたＳＤ21の続きと思われる溝がＰ－25付近で検出された。この溝はそのまま南西方向に延びており、Ｋ－23付近で消滅している。320～331はこの延長と思われる溝から出土したものである。

320は皿である。器表面磨滅のため外面に顕著に指頭痕は見られない。

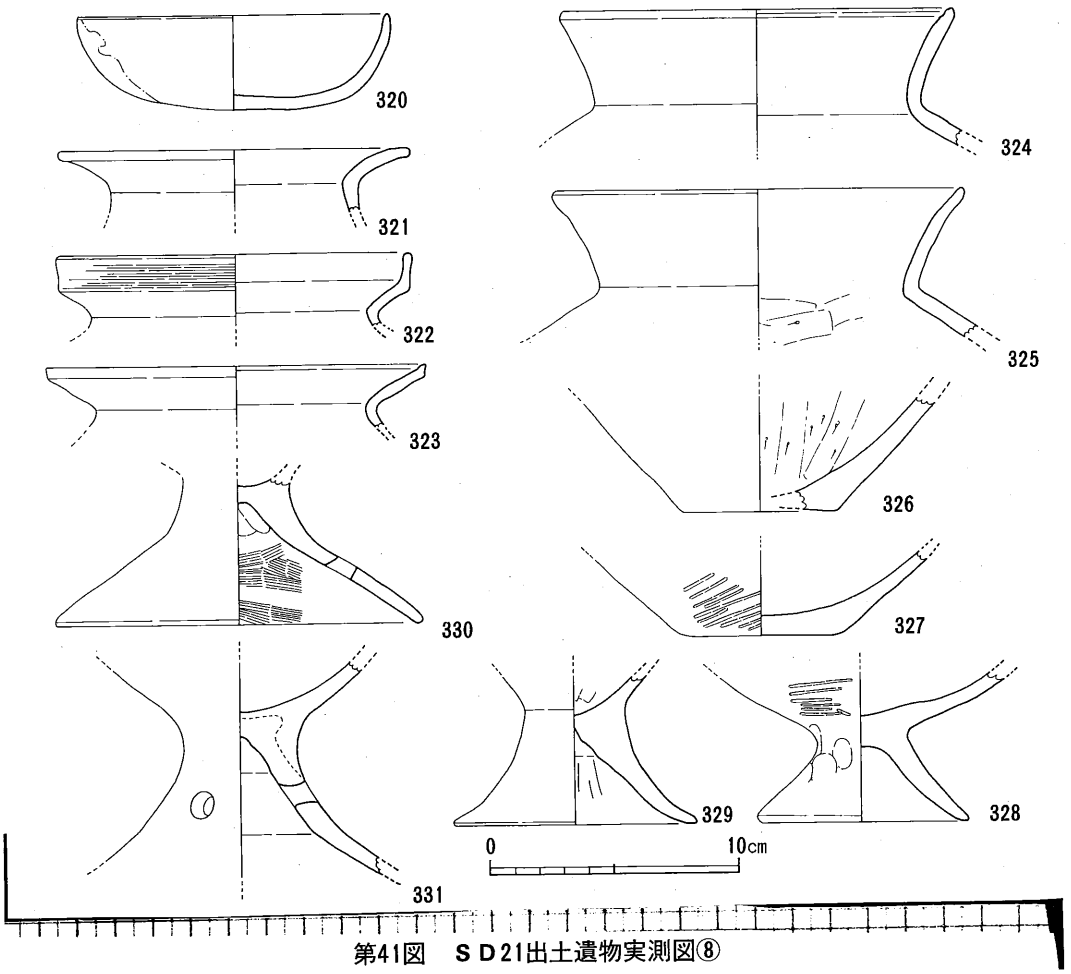
321～323は甕である。321は口縁部が外反しながら延びるもので口縁端部は丸くおさめられている。322は酒津系の甕である。頸部から屈曲した口縁が上方に直に屈曲するもので上半外面には櫛描による沈線が施されている。323は口縁が屈曲して頸部から直線的に外上方に延び端部は上方に小さく摘み上げられている。

324・325は壺である。頸部はやや外反しながら外上方に延び口縁端部内面に沈線を施すもの（324）と口縁部をやや内方に曲げるもの（325）がある。

326・327は底部である。しっかりした平底を持つ。体部外面は叩きがあるものや内面にヘラ削りが認められるものがある。

328・329は脚付きの鉢である。脚は短く広がるもので脚部内面にはヘラ削りが認められる。

330・331は高坏である。330は脚部上半で屈曲し、穿孔は下半部に認められる。331は脚部中央で屈曲し上半部に３ヵ所に穿孔が認められる。

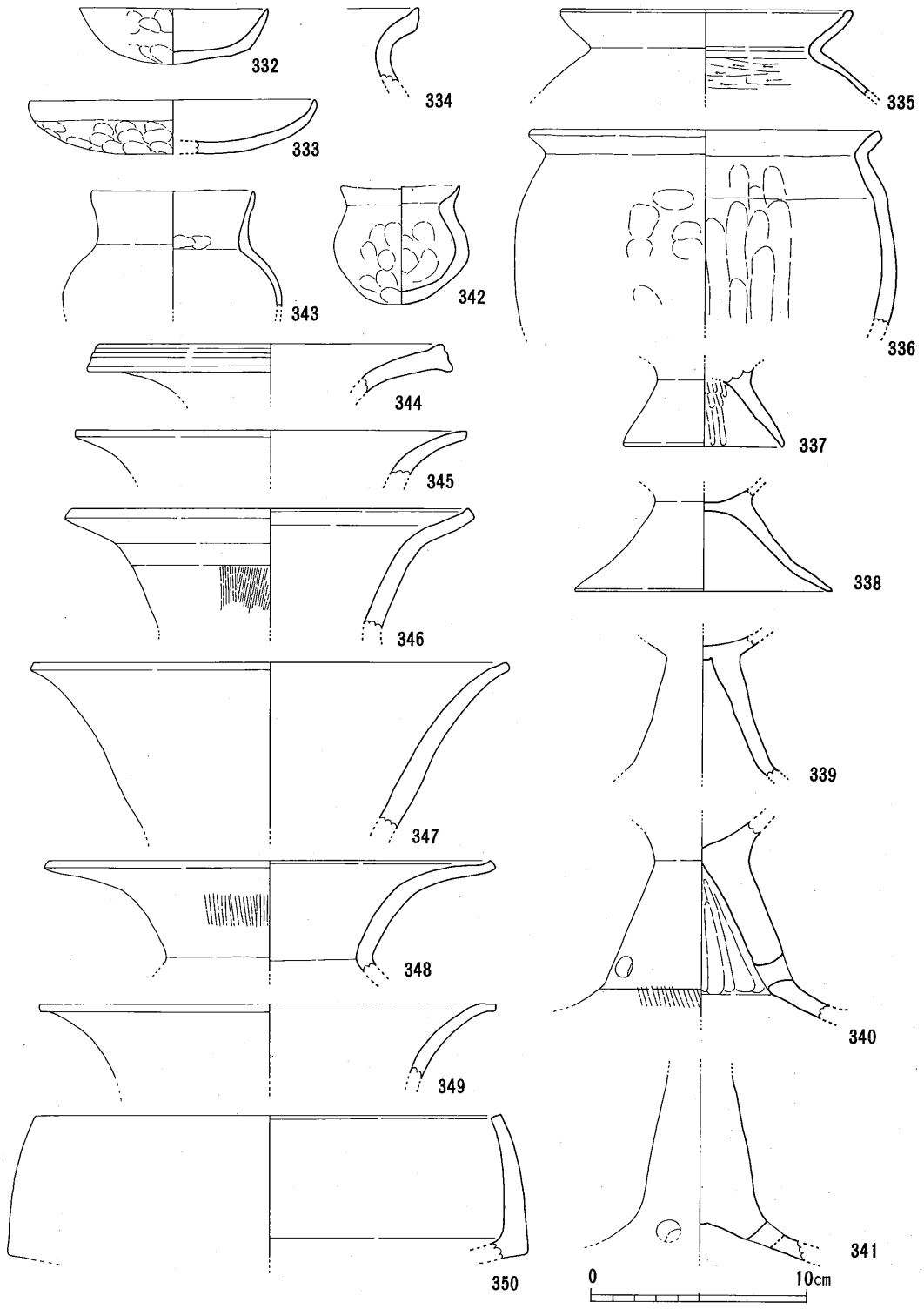


第41図　ＳＤ21出土遺物実測図⑧

包含層出土遺物

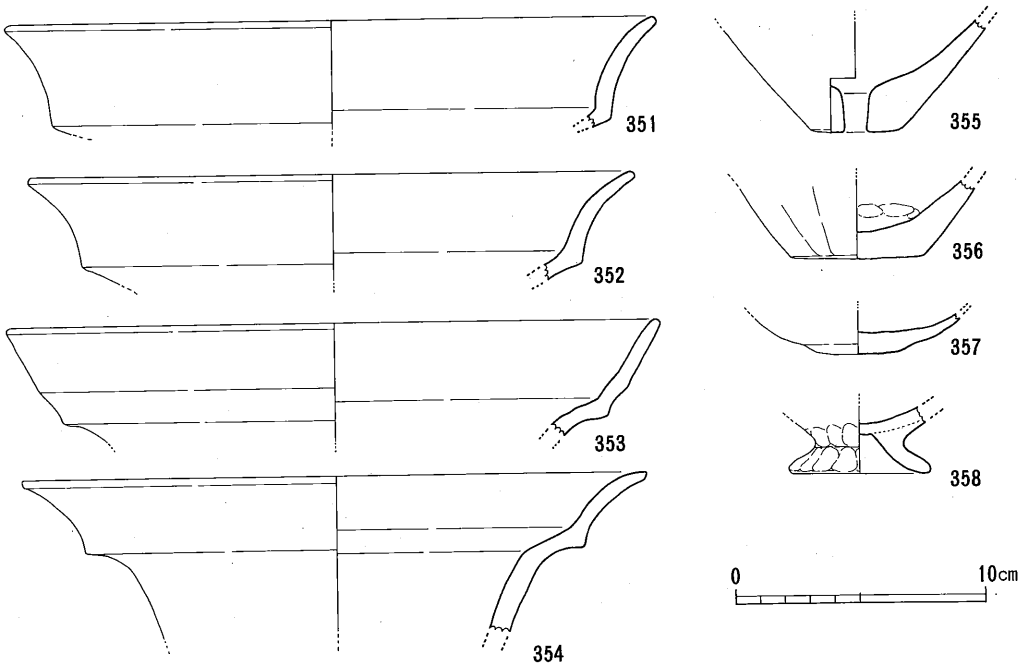
①弥生土器

332・333は外面に指頭痕が顕著に残る浅い皿である。口径の小さいものと大きいものとがある。334は口縁端部外面に２条の凹線を施した壺である。335・336は甕である。335は胴張りの体部から「く」の字に曲がる頸部を持ち口縁端部は上面を摘み上げている。336は短く延びる口縁を持ち胴の張らない体部を持つもので体部内外面に指ナデが施されている。337～341は高坏である。337・341はここでは高坏に入れたが脚が短いことから脚付きの鉢の可能性がある。341は脚が中実になっている。脚部の穿孔は３ヵ所のものが多い。342～354は壺である。342は小型の丸底壺である。口縁端部が細く外方に摘み出されており、体部内外面には指頭痕が顕著に施されている。343は頸部が直線的に上方に延びるもので細く引き伸ばされている。344～354の壺の口縁には頸部が朝顔型に開くものと二重口縁を持つものがある。朝顔型に開くものには頸部上半で外方に屈曲するものとすんなり延びるものとがある。口縁端部は上方に小さく摘み上げるものもある。二重口縁を呈するものは所謂西瀬戸内系と呼ばれるやや内彎気味の上方への立ち上がりを持つもの



第42図　包含層出土遺物実測図（弥生土器）①

と二重に外反する口頸部を持つものがある。344は口縁端部外面に2条の凹線を持つものである。355～358は底部である。355は底部に穿孔を持ち、甑として使用されていたものである。358は製塩土器の底部である。脚部外面には指ナデが密に施されている。



第43図　包含層出土遺物実測図（弥生土器）②

②石製品

359～422は包含層出土石製品である。

359～397は石鏃である。359～362はロケット型を呈するもので基底部に抉りがある。366もそれぞれの先端部を欠損してはいるがロケット型を呈するものと思われる。その他の形態は側辺が直線的で二等辺三角形状を呈するものとやや丸味を帯び五角形状を呈するもの、小型の正三角形状を呈するものなどがある。基底部の形状は凹基式のものや平基式のものがある。396は細目の長い突基式のものである。397は石鏃の未製品であろうか。

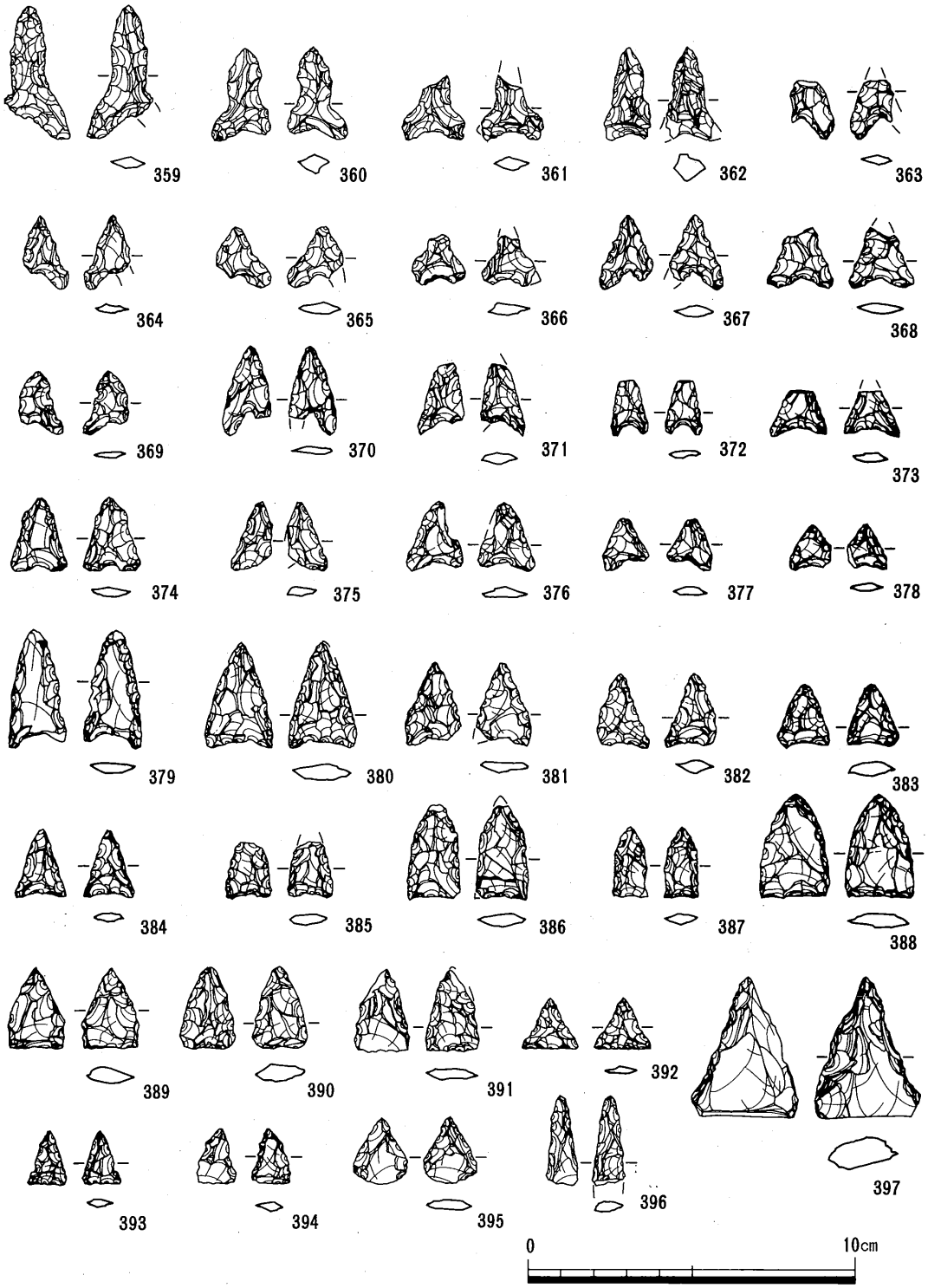
398～400は石錐である。全て先端部を欠損しており、全容は不明である。400は断面三角形状を呈しているものである。

401は楔形石器である。上下縁部に細かい調整を加えている。

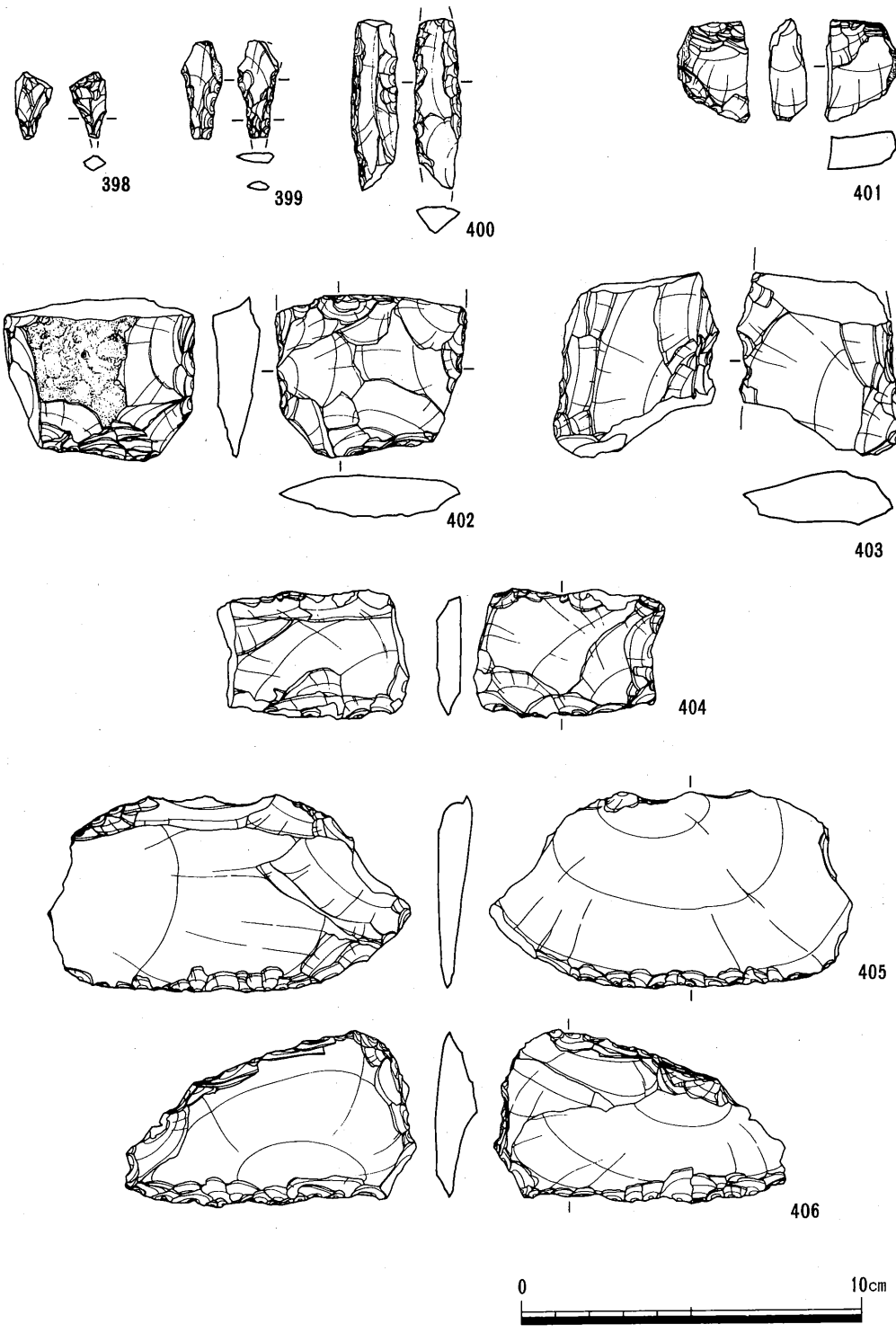
402・403は打製石斧である。402は基部を欠損しており全長は不明である。先端部と側辺に調整が加えられている。403は基部と先端部を欠損している。

404は打製の石包丁である。側辺に抉り状の凹みが認められる。

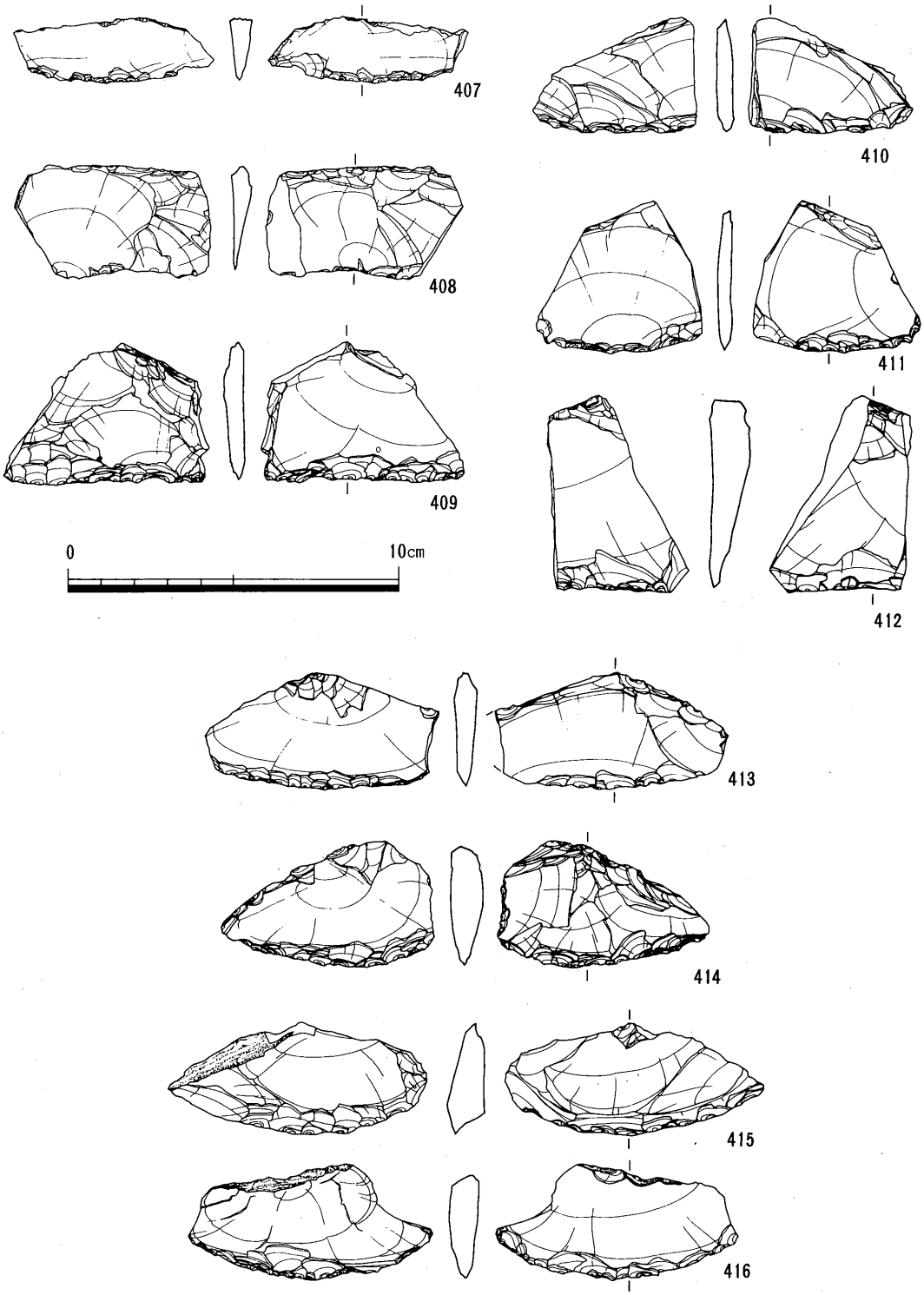
405～422はスクレイパーである。縁部に細かい調整を加えて刃部としている。



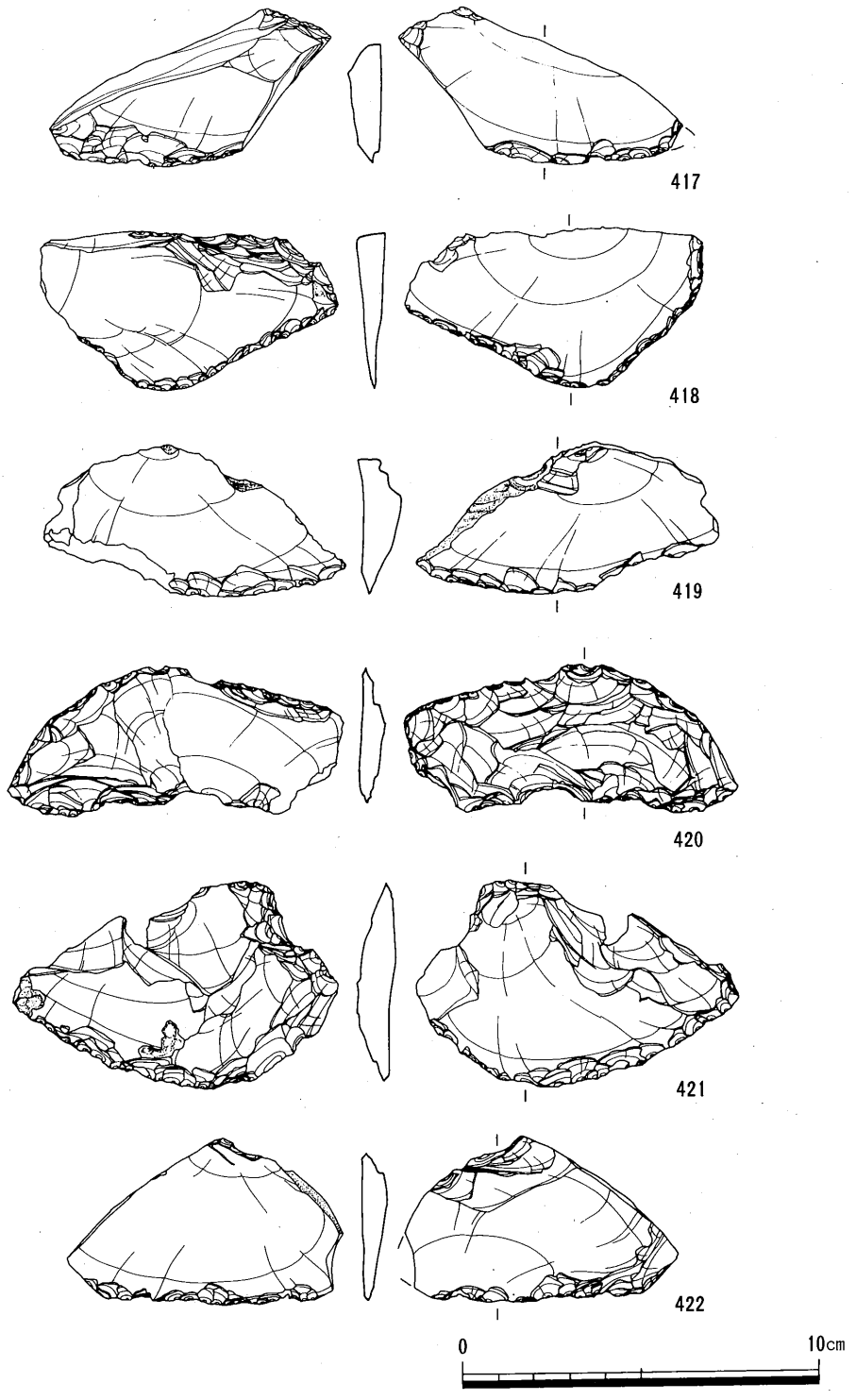
第44図　包含層出土遺物実測図（石製品）①



第45図　包含層出土遺物実測図（石製品）②



第46図　包含層出土遺物実測図（石製品）③



第47図　包含層出土遺物実測図（石製品）④

(5) 弥生時代以前のまとめ

縄文時代晩期から弥生時代前期の遺構は主として調査区北部で検出された。

今回の調査で検出されたSK01からは縄文時代晩期の突帯文系の土器が多数検出されたが弥生時代前期の土器も小片確認されており、縄文時代晩期とされている突帯文系の土器は弥生時代前期の土器と供伴すると考えられている。ただし、SK01は微地形復原によると谷筋の湿地部で検出されたことから流れ込みによる堆積の可能性もあり、遺構としてはとらえられない場合も考えられる。

弥生時代前期の遺物は弥生時代後期と中世の遺構面を形成する土層より出土している。

その他の遺構としては微地形復原によって確認された尾根筋に並行する溝が考えられる。この溝は上下2層に細分できる。上層は弥生時代後期の遺物を包含する暗灰黒色粘質土で、下層が灰色砂土層である。これらの溝は弥生時代前期の遺物を包含する層を遺構面としており、この溝から出土している遺物が少量であることから弥生時代前期に機能していたものとは考えられない。おそらく尾根筋に並行する溝状遺構は自然に形成されたもので、各時代に、人工的に作られたものとは思われない。

以上のように、縄文時代晩期から弥生時代前期の遺構は人為的でない可能性が強いと思われ、不明確な点が多い。

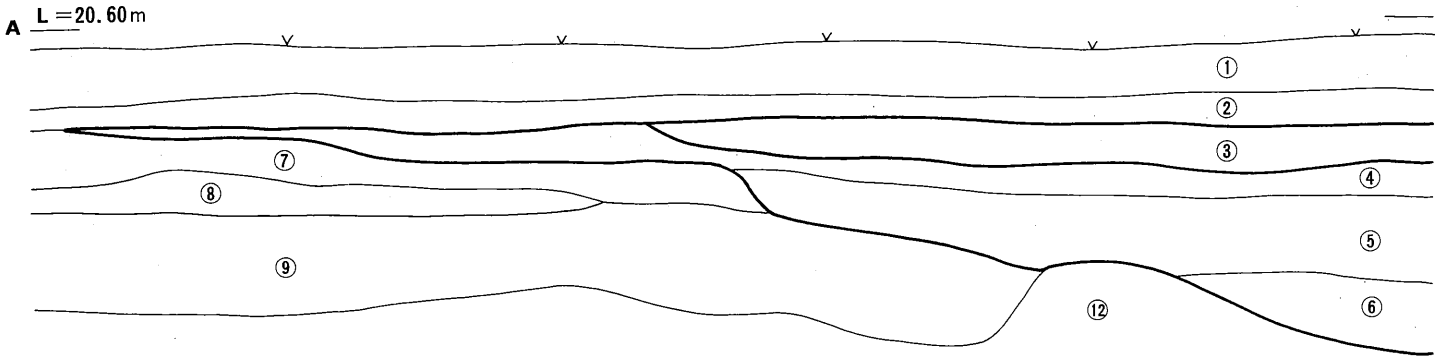
弥生時代後期の遺構も主として調査区北部で検出された。

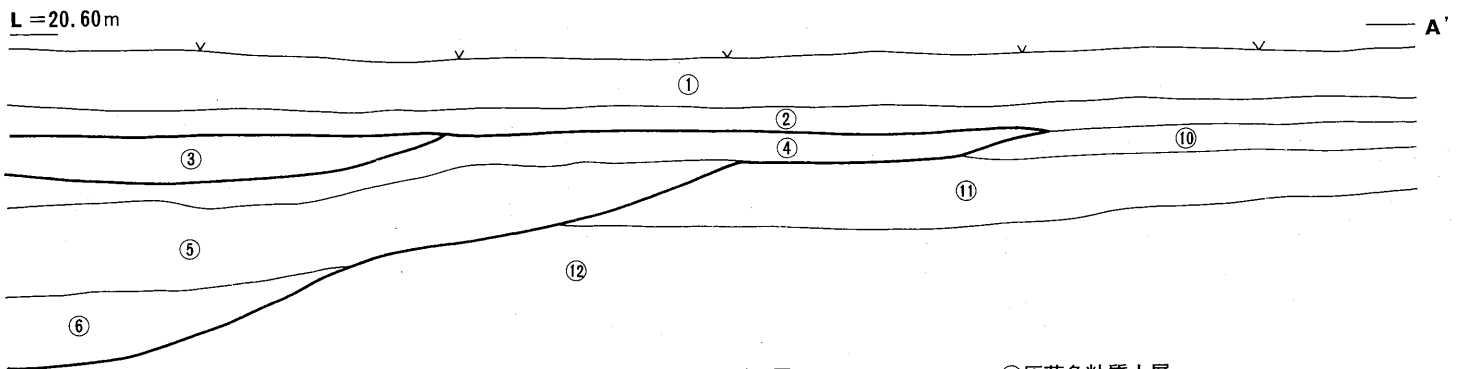
検出された遺構は掘立柱建物が2棟、溝状遺構が7条である。掘立柱建物は弥生時代後期の溝に切られていることから、後期以前に機能していたことが窺えるが掘立柱建物を構成する柱穴埋土が溝埋土とほぼ同じことからあまり時期差がないことが考えられる。また溝は尾根筋に並行するものと直行するものがあり、前者は谷筋に形成されていることから自然のものと思われ、後者は調査区東にあると思われる生活域からの排水溝と考えられる。しかし、この溝にも規則性はなくやや生活域とは距離があるものと思われる。

これらの排水溝と考えられる溝状遺構から多量の遺物が出土した。特に多量に出土した溝はSD15とSD21である。

SD15は上下2層に分けられ、上層は黒灰色粘質土を中心として下層は灰色砂層を中心としている。また、SD21は暗灰色粘質土層でSD15との間に切り合いが認められることがW－16において確認された（第50図）。その土層断面によるとSD21はSD15の上層に切られており、SD15の下層はSD21に切られているものである。

出土遺物から見るとSD15の上層の時期は鉢が多く出土しており、やや古手の高坏138も出土しているが、甕150が胴長で底部丸底化していることから布留古段階に当たるものと思われる。SD15下層の時期は、やや鉢の出土量が少なく壺・甕にも底部に平底を残すものがあることから上層よりはやや古く庄内式併行期の新段階頃かと考えられる。また下層からは酒津甕178が出土して





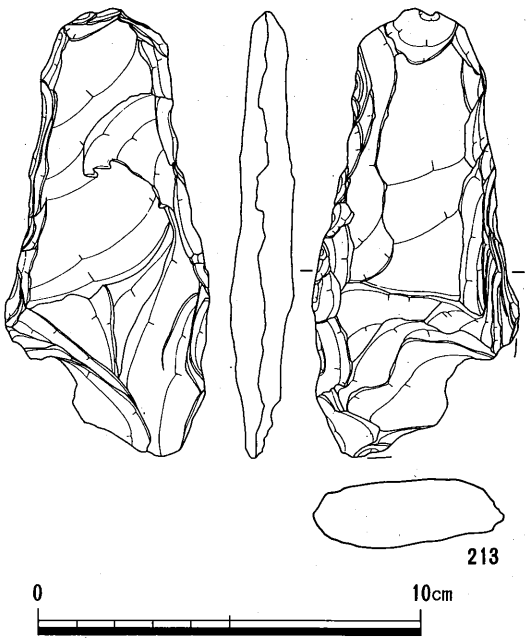
①耕作土
②淡茶色土層（床土）
③黒褐色粘質土層
④淡黒褐色粘質土層
⑤茶黄色粘質土層
（砂粒が少し混じる）
⑥白灰色砂層
⑦汚灰黄色土層
⑧灰茶色粘質土層
⑨暗灰茶色粘質土層
⑩淡黄茶灰色粘質土層
⑪灰茶黄色粘質土層
⑫明灰黄色粘質土層

SD06 ③
SD07 ④～⑥

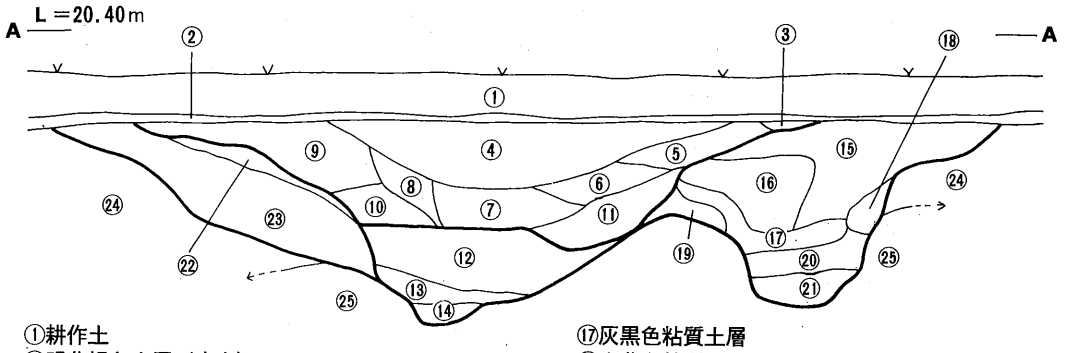
0 1 m

第48図　W－2東壁土層断面図

いる。SD21からは多数の鉢が出土している。この鉢の出土量からもSD15下層よりやや新しいことが言え、甕が胴長で底部丸底化していることから布留古段階に比定されるものと思われる。しかしそれぞれの溝から出土した遺物にはやや時期幅が見られ、埋土もあまり変わらないことから庄内併行期新段階～布留古段階にかけて機能していた溝であることが確認されたにとどまる。



第49図　SD15下層出土遺物実測図（石製品）



①耕作土
②明黄褐色土層（床土）
③淡黄灰色土層（床土）
④淡黒灰色粘質土層（1～3㎜の砂粒を含む）
⑤淡灰黒色粘質土層
⑥明黒色粘質土層（1～3㎜の砂粒を含む）
⑦明黒色粘質土層
⑧淡灰黒色粘質土層
⑨淡茶灰色粘質土層（1～3㎜の砂粒を含む）
⑩淡茶灰黒色砂混り粘質土層
⑪⑩と同じ
⑫明白灰色砂層
⑬灰色粘質土層
⑭白灰色砂質土層（3～5㎜の角礫を含む）
⑮淡茶灰色砂混り粘質土層
⑯濁白灰色粘質土層
⑰灰黒色粘質土層
⑱白黄色粘質土層
⑲濁灰色粘質土層
⑳白灰色細砂質土層（一部灰色粘質土が混る）
㉑白灰色細砂質土層
㉒淡白灰色黄色砂混り粘質土層
㉓㉒よりやや白っぽい
㉔白灰黄色粘質土層
㉕白灰黄褐色粘質土層

SD13　㉒㉓
SD15上層　④～⑪
SD15下層　⑫～⑭
SD21　⑮～㉑

第50図　ＳＤ13・15・21土層断面図（Ｓ－13東壁）

3．中世の遺構・遺物について

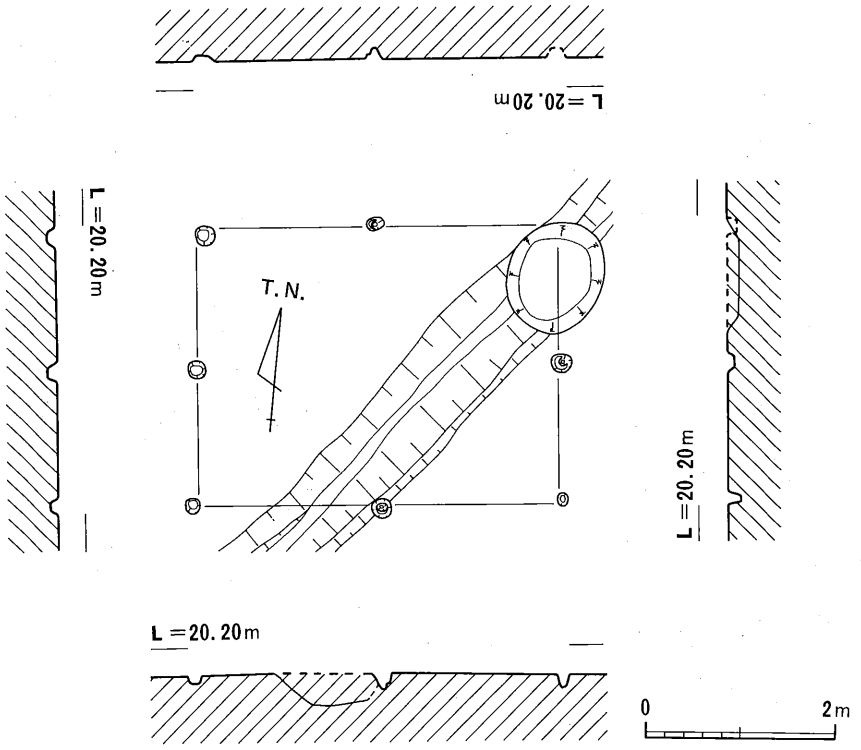
中世の遺構は主として調査区南半で掘立柱建物・溝・土坑・井戸などが検出された。掘立柱建物は庇付きの主屋と思われるものが5棟、それ以外のものが53棟検出されている。主軸は南北ラインから西に約12°までの間にあるが、細かく分けると3時期あるように思われる。溝は31条あり、ほぼ東西南北ラインにのっており、ちょうど掘立柱建物を取り囲むように検出されている。土坑は28基検出された。遺物の出土した大きめの土坑は2基検出されたが両方とも溝の延長部にあり、何らかの関係があったことが窺われる。井戸は4基検出された。特に中世の遺構が密集する調査区南半部分において2基検出された。そのうちのひとつ（SE03）は下部に曲げ物を入れてはいるが浅いもので、水溜めに使用されていたと考えられ、実際井戸として使用されていたものは1基であったように思われる。また、中世の集落に付随して集石墓が2基検出された。出土遺物から見て同時期と考えられ、溝により区画された居住域の外側に墓を持っていたようである。

南西および南東部で検出された掘立柱建物は別の集落と考えられ、出土遺物からもやや時期は先行すると思われる。

(1) 掘立柱建物

SB01

SB01は、梁間2間×桁行2間（286×392cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅18.6cmを計



第51図　ＳＢ01平・断面図

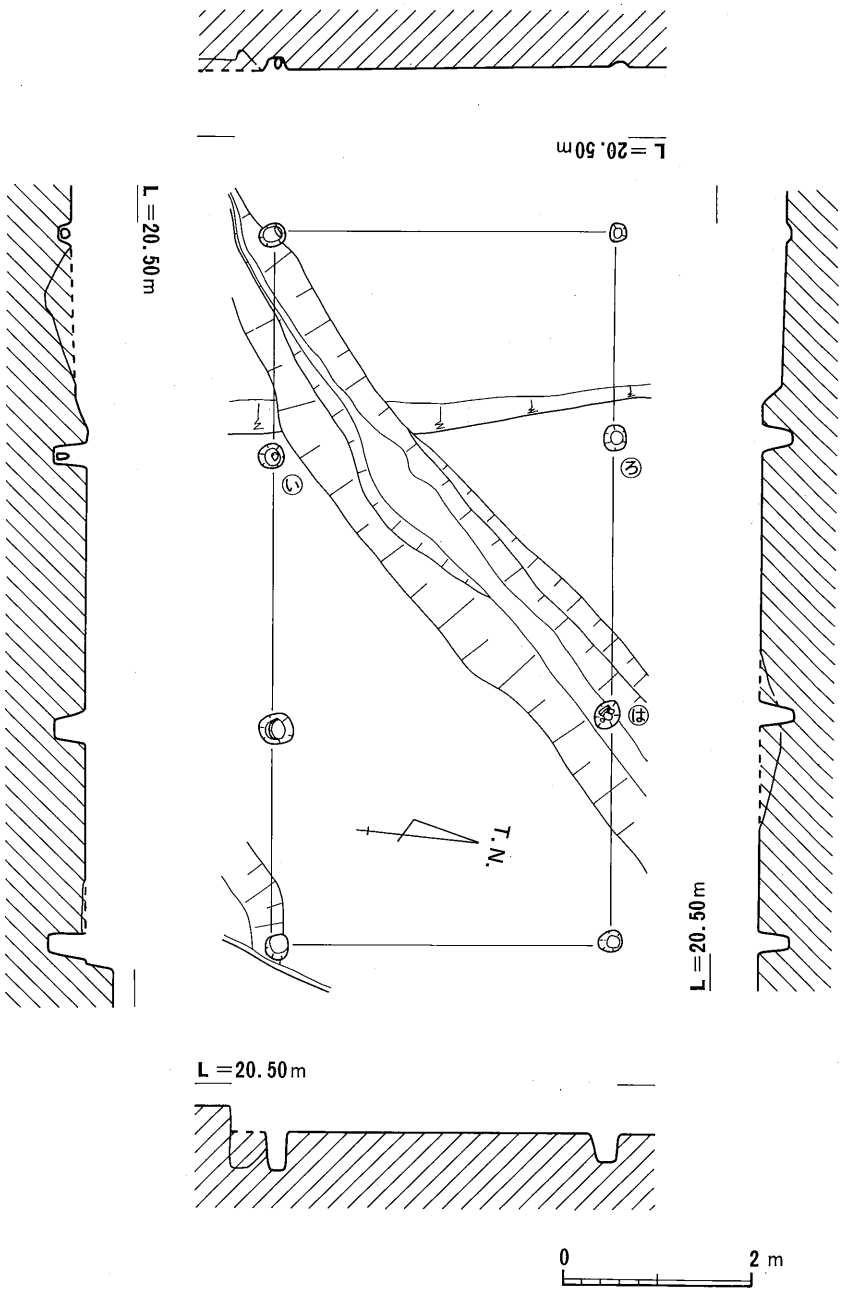
第52図　中世遺構平面図

り、柱間は、梁間で平均長143cm、桁行で平均長196cmを計る。主軸は、真北から5.7°西偏する。

SB02

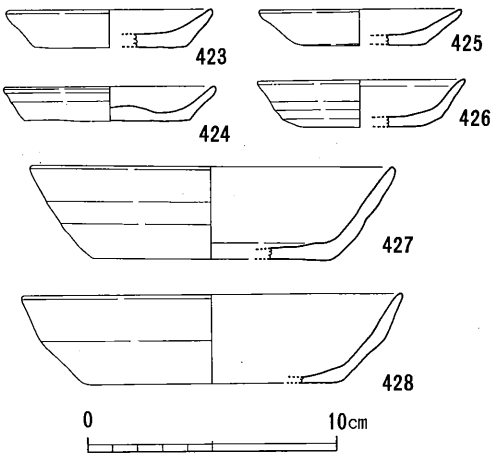
SB02は、梁間1間×桁行3間（356×752cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅25.5cmを計り、柱間は、梁間で平均長356cm、桁行で平均長250.7cmを計る。主軸は、真北から5.6°西偏する。

423～428はSB02を構成する柱穴から出土したもの（柱穴㋑出土遺物426、柱穴㋒出土遺物425、



第53図　ＳＢ02平・断面図

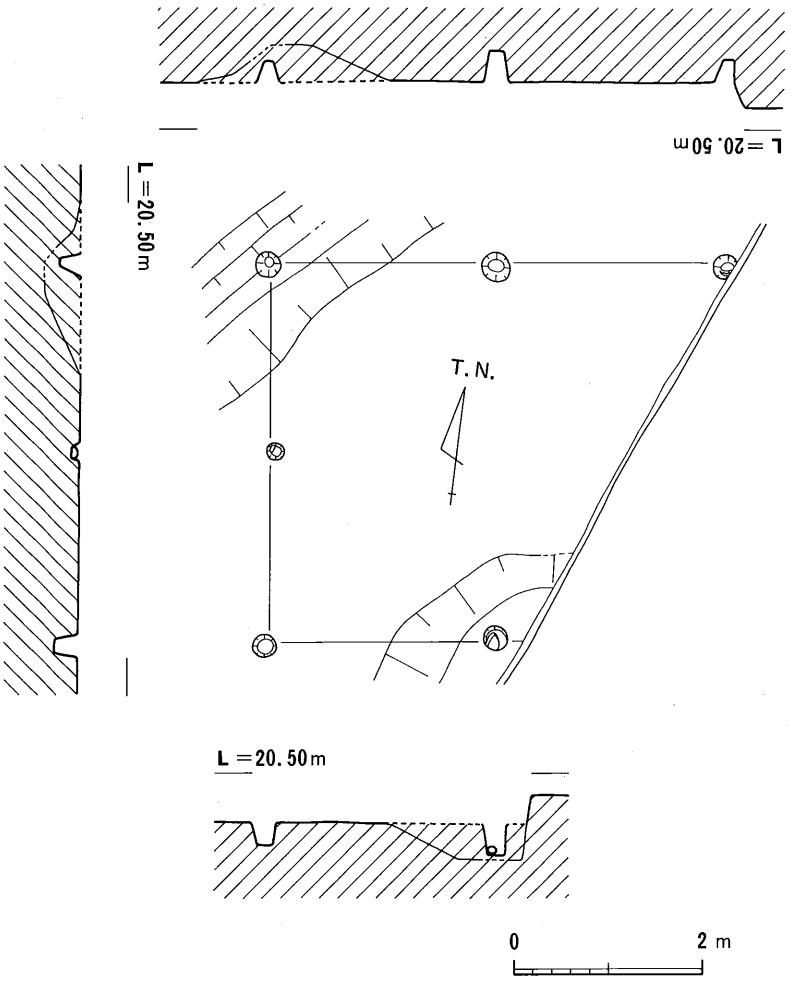
柱穴㊱出土遺物423・424・427・428）である。423～426は土師器の小皿である。423～425は底部ヘラ切りで、426が糸切りである。426は器高がやや深いものである。427・428は土師器の坏である。底部は糸切りされており体部は直線的に延びるものとやや内彎気味に延びるものがある。



第54図　ＳＢ02出土遺物実測図

SB03

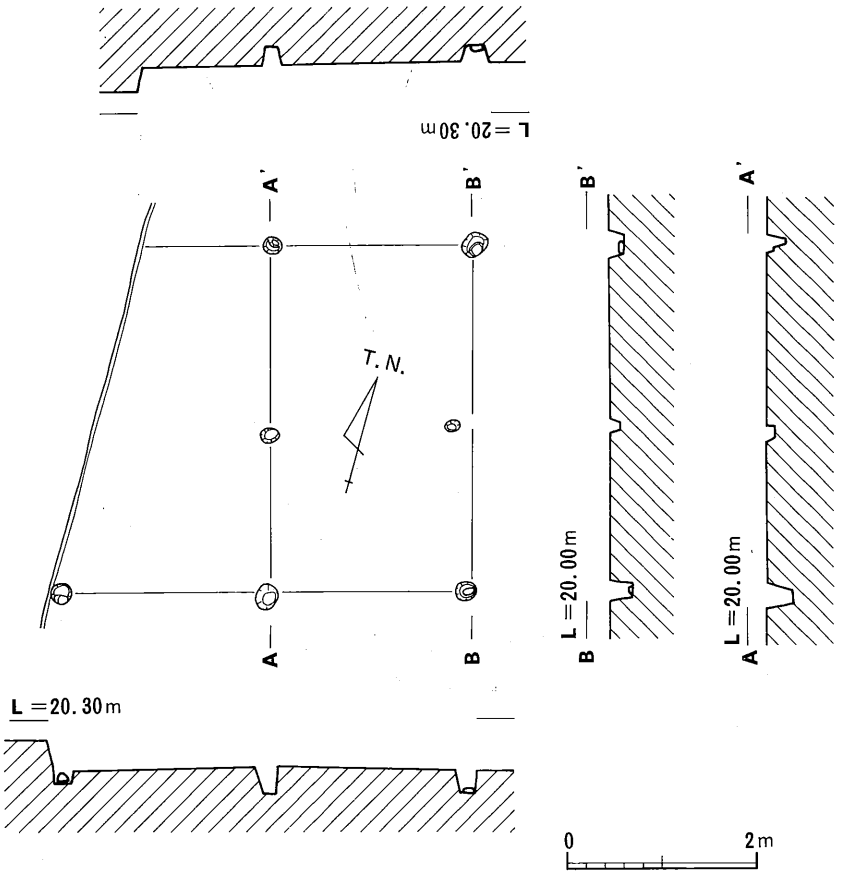
SB03は、梁間２間×桁行（2）間［406×（484）cm］の建物遺構である。柱穴は、平均幅（26）cmを計り、柱間は、梁間で平均長203cm、桁行で平均長（242.7cm）を計る。主軸は、真北から6.9°西偏する。西部分が調査区外にあり、全容は不明である。



第55図　ＳＢ03平・断面図

SB04

SB04は、梁間２間×桁行（２）間［380×（430）cm］の建物遺構である。柱穴は、平均幅（21.7）cmを計り、柱間は、梁間で平均長190cm、桁行で平均長（214）cmを計る。主軸は、真北から15°西偏する。間仕切り状の柱穴が見られる。東部分は調査区外のため全容は不明である。

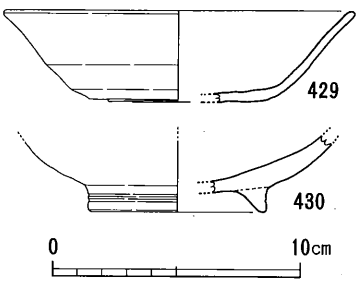


第56図　ＳＢ04平・断面図

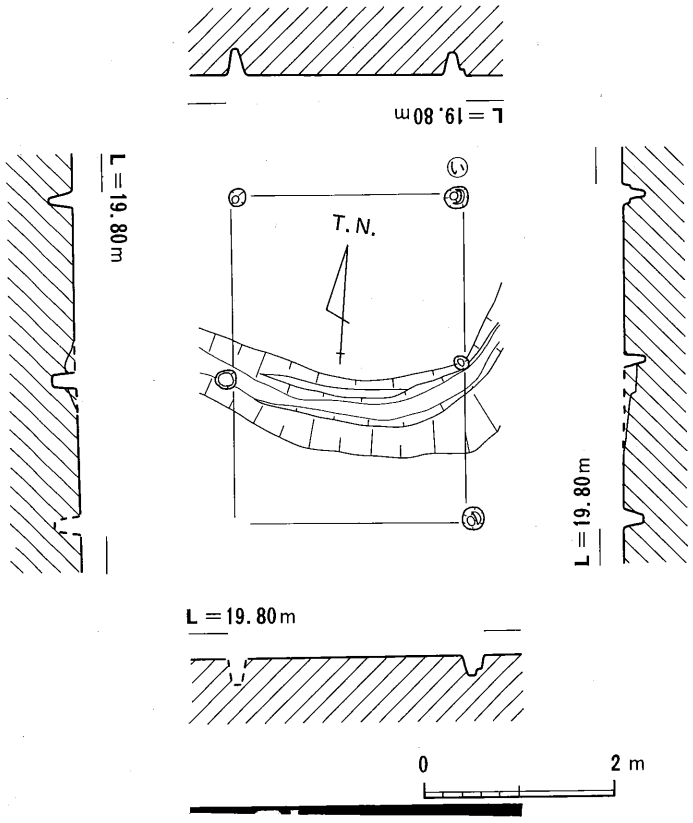
SB05

SB05は、梁間１間×桁行２間（228×344cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅19.2cmを計り、柱間は、梁間で平均長228cm、桁行で平均長172cmを計る。主軸は、真北から3.6°西偏する。

429・430はSB05を構成する柱穴より出土した（柱穴㋑出土遺物429・430）。429は土師器の坏である。底部はヘラ切りされており体部はやや外反気味に外上方に延びるものである。430は黒色土器Ａ類椀である。底部にしっかりした高台が付くもので体部はやや厚めに作られている。



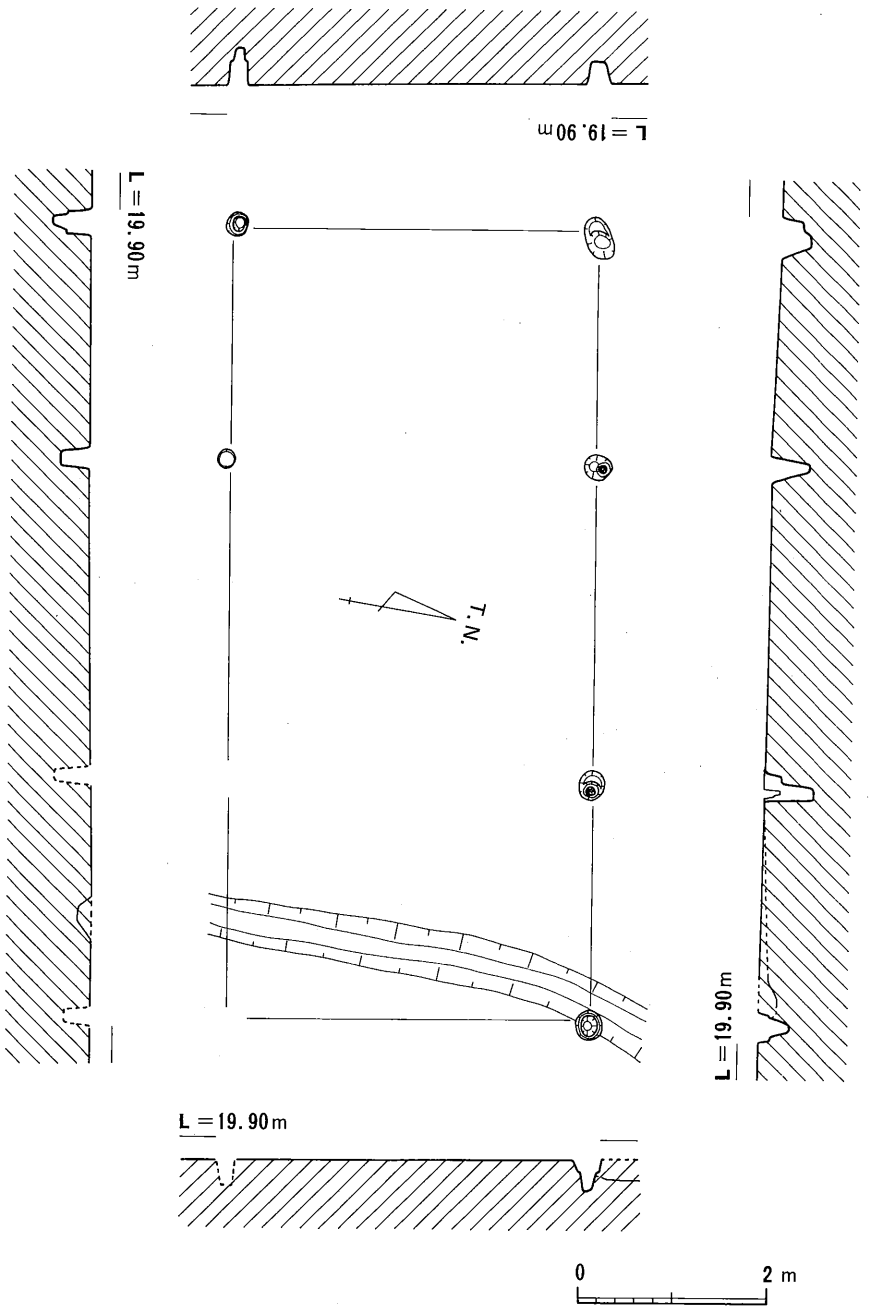
第57図　ＳＢ05出土遺物実測図



第58図　ＳＢ05平・断面図

SB06

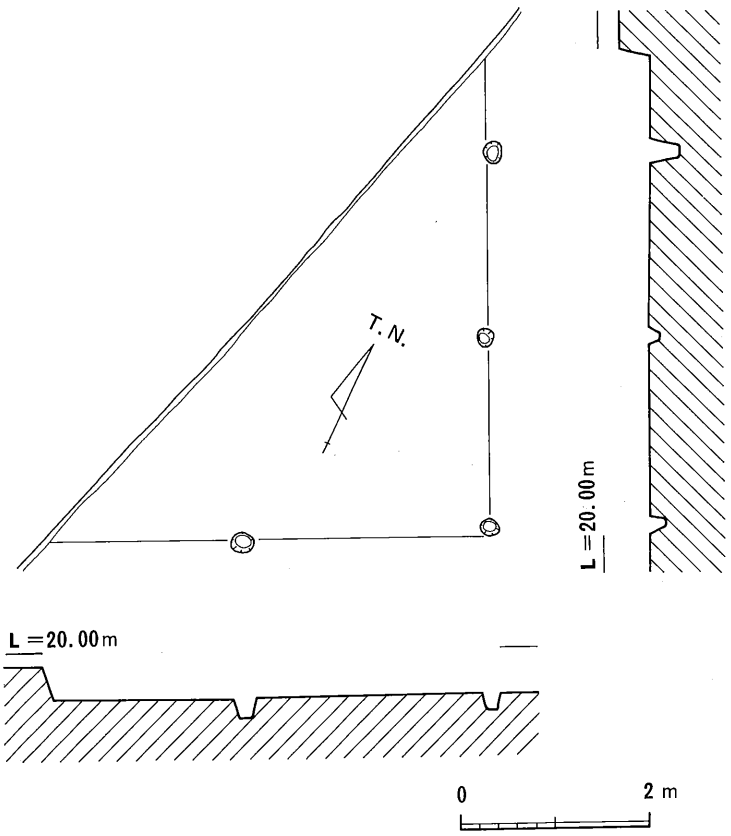
SB06は、梁間1間×桁行3間（380×828cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅29cmを計り、柱間は、梁間で平均長380cm、桁行で平均長276cmを計る。主軸は、真北から9.5°西偏する。



第59図　ＳＢ06平・断面図

SB07

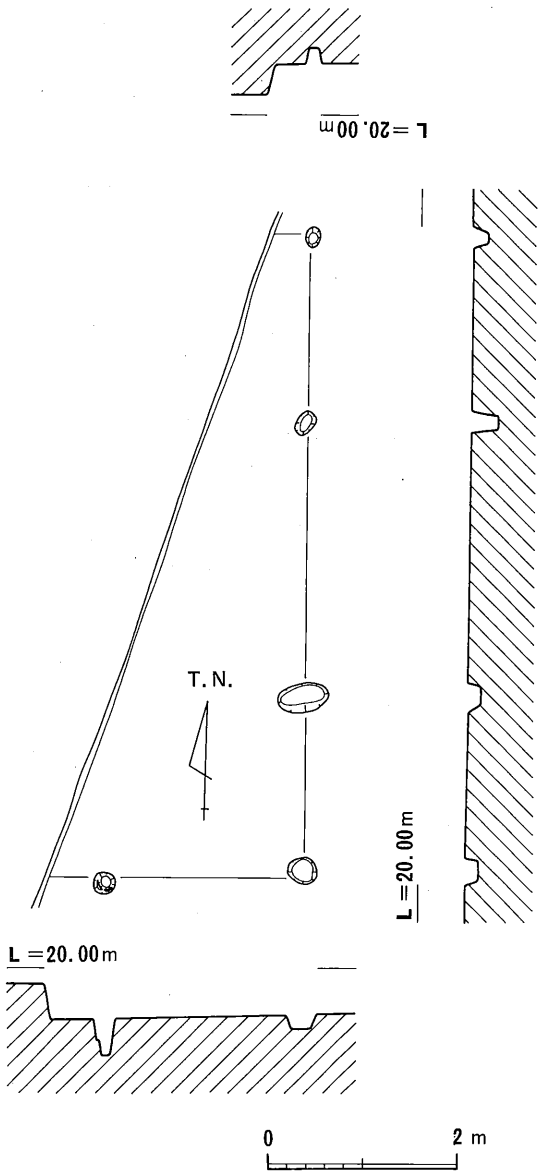
SB07は、梁間（2）間×桁行（3）間［(468) × (494) cm］の建物遺構である。柱穴は、平均幅（20）cmを計り、柱間は、梁間で平均長（260）cm、桁行で平均長（198）cmを計る。主軸は、真北から25.4°西偏する。東部分は調査区外のため全容は不明である。



第60図　ＳＢ07平・断面図

SB08

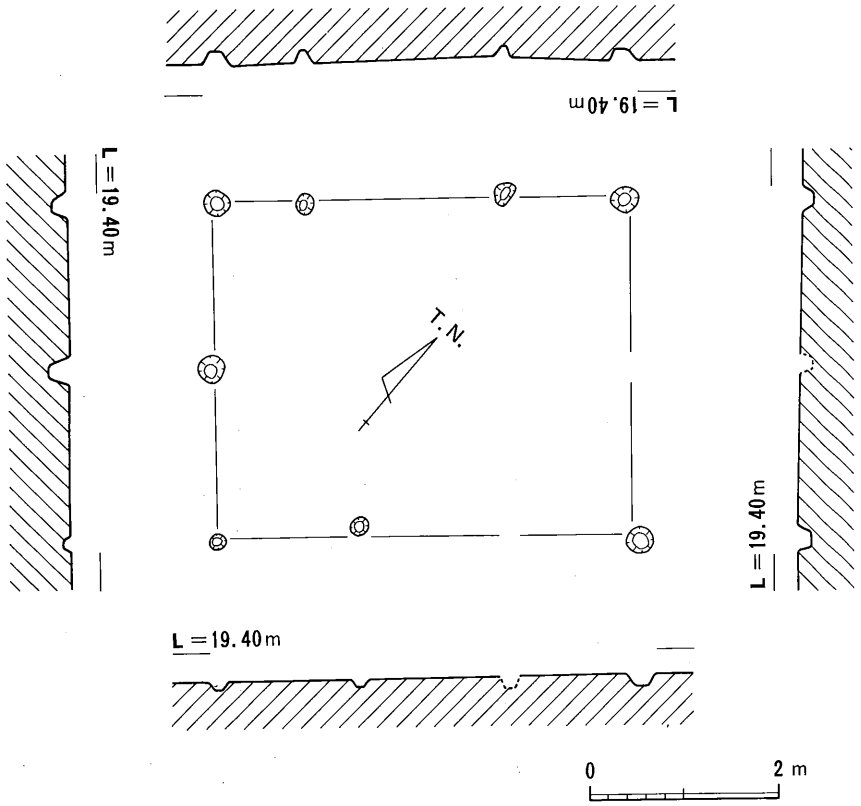
SB08は、梁間（２）間×桁行３間［(274) ×668cm］の建物遺構である。柱穴は、平均幅（25.2）cmを計り、柱間は、梁間で平均長（208）cm、桁行で平均長222.7cmを計る。主軸は、真北から1.9°西偏する。東部分は調査区外のため全容は不明である。



第61図　ＳＢ08平・断面図

SB11

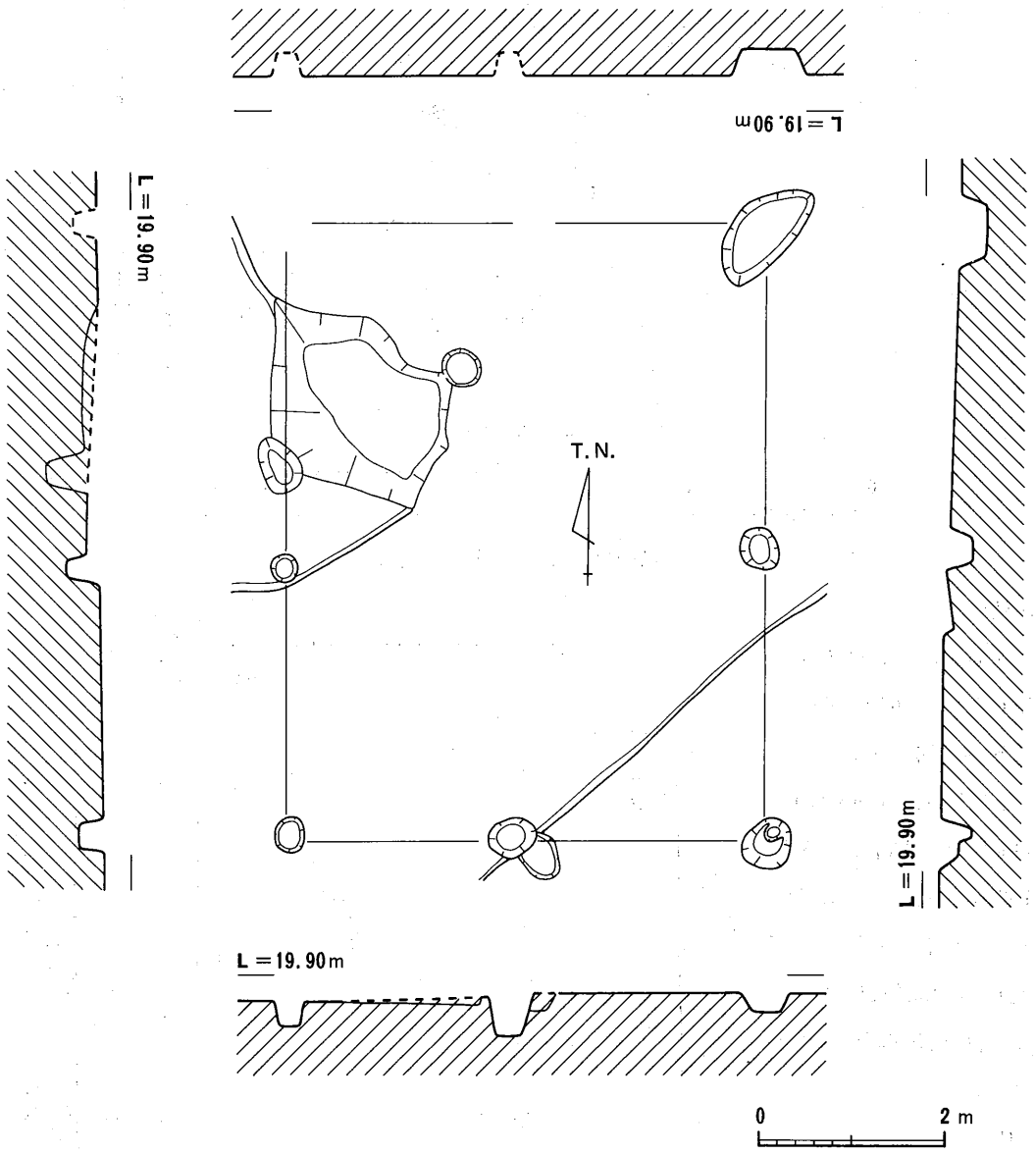
SB11は、梁間２間×桁行３間（358×436cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅24.3cmを計り、柱間は、梁間で平均長179cm、桁行で平均長145.3cmを計る。主軸は、真北から40.6°西偏する。北側の桁行の柱間長にばらつきが認められる。



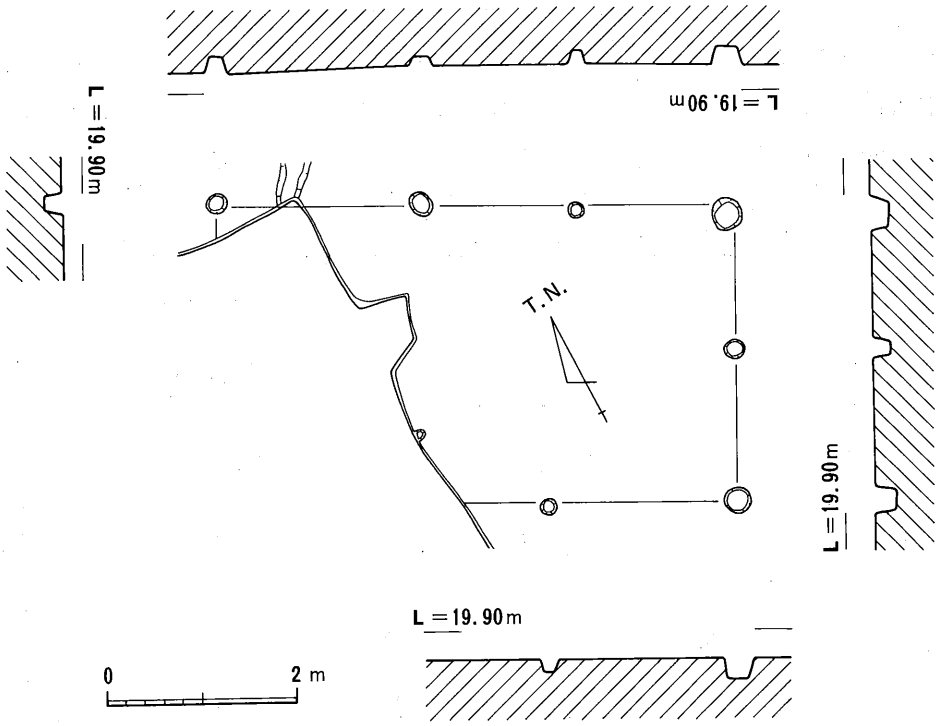
第62図　ＳＢ11平・断面図

SB12

SB12は、梁間２間×桁行２間（520×656cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅52.3cmを計り、柱間は、梁間で平均長260cm、桁行で平均長328cmを計る。主軸は、真北から0.8°西偏する。やや大きめの柱穴を持つものである。



第63図　ＳＢ12平・断面図



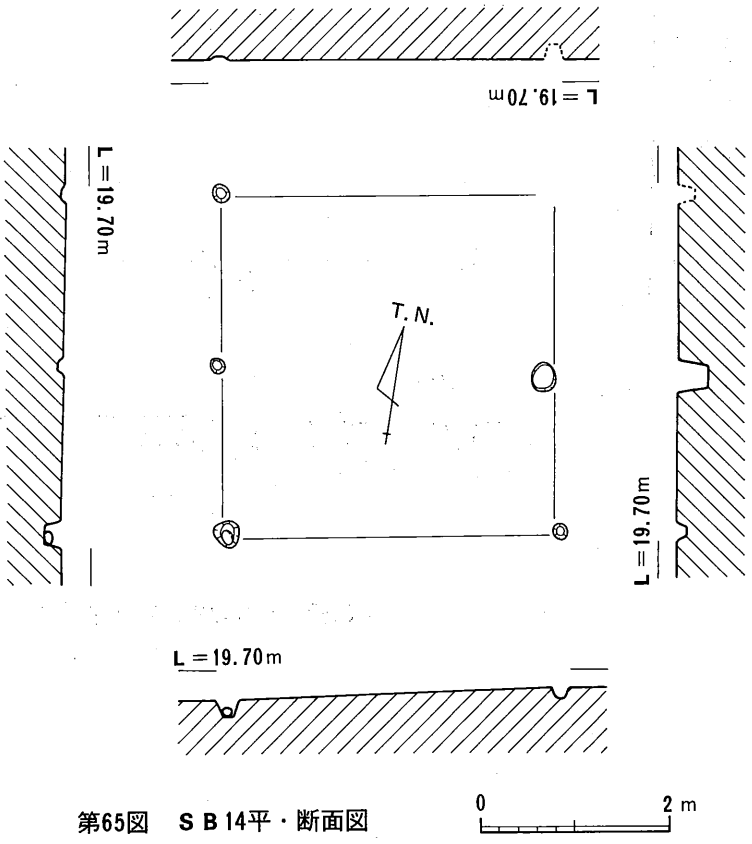
第64図　ＳＢ13平・断面図

SB13

SB13は、梁間２間×桁行３間（304×538cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅23.1cmを計り、柱間は、梁間で平均長152cm、桁行で平均長179.3cmを計る。主軸は、真北から28.3°東偏する。南東隅が調査区外に逃げている。

SB14

SB14は、梁間１間×桁行２間（352×358cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅22.8cmを計り、柱間は、梁間で平均長

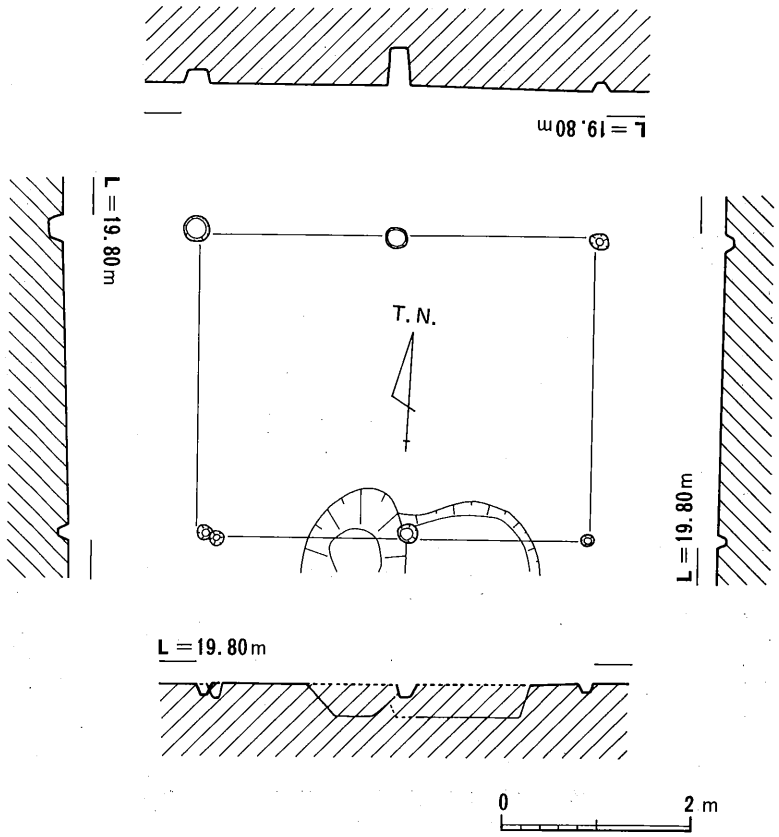


第65図　ＳＢ14平・断面図

352cm、桁行で平均長179cmを計る。主軸は、真北から9.2°西偏する。

SB15

SB15は、梁間1間×桁行2間（320×414cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅19.3cmを計り、柱間は、梁間で平均長320cm、桁行で平均長207cmを計る。主軸は、真北から2.7°西偏する。



第66図　ＳＢ15平・断面図

SB16

SB16は、梁間1間×桁行2間（444×430cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅20.4cmを計り、柱間は、梁間で平均長444cm、桁行で平均長215cmを計る。主軸は、真北から4.3°西偏する。

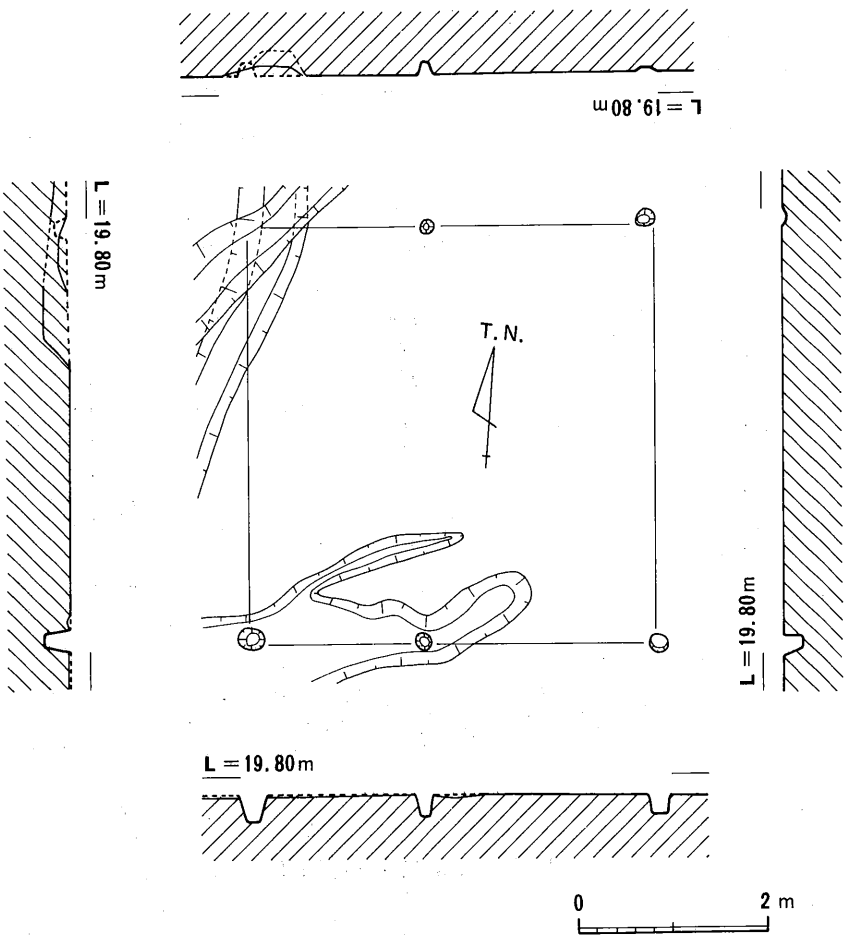
SB17

SB17は、梁間1間×桁行3間（204×516cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅18cmを計り、柱間は、梁間で平均長204cm、桁行で平均長172cmを計る。主軸は、真北から3.6°西偏する。

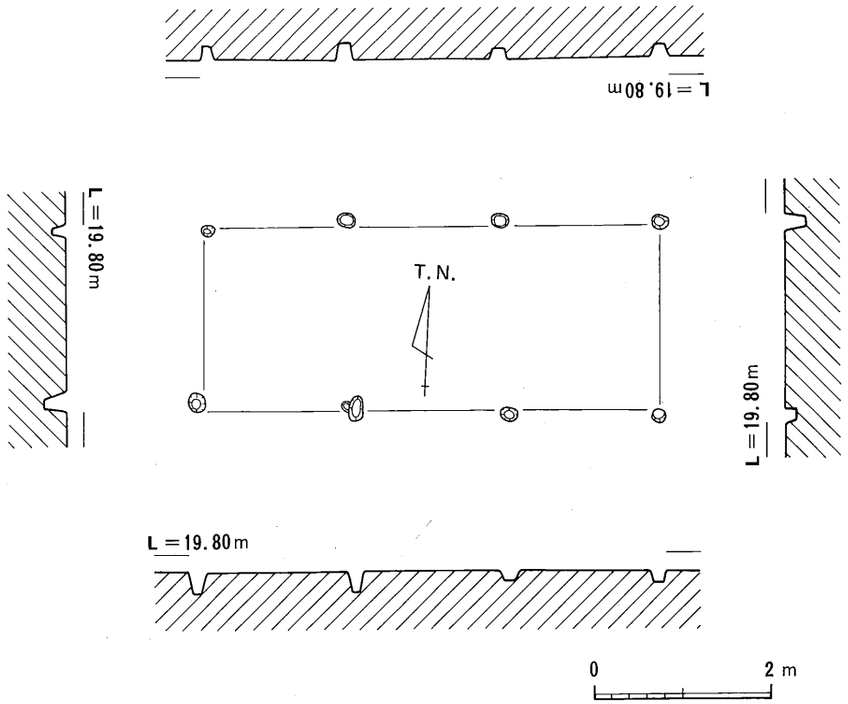
SB18

SB18は、梁間2間×桁行3間（366×613cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅21.4cmを計り、柱間は、梁間で平均長183cm、桁行で平均長204.3cmを計る。主軸は、真北から6.1°西偏する。北側に庇が付くものである。

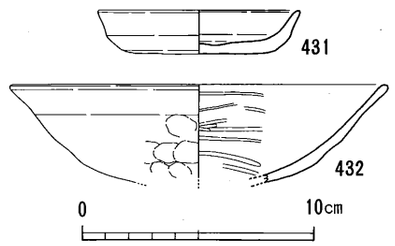
431・432はSB18を構成する柱穴から出土したもの（柱穴㋑出土遺物431、柱穴㋒出土遺物432）である。431は土師器の小皿である。底部が糸切りのもので器高がやや高く作られている。432は畿内産の瓦器である。体部外面に指頭痕が内面にはヘラ磨きが施されている。



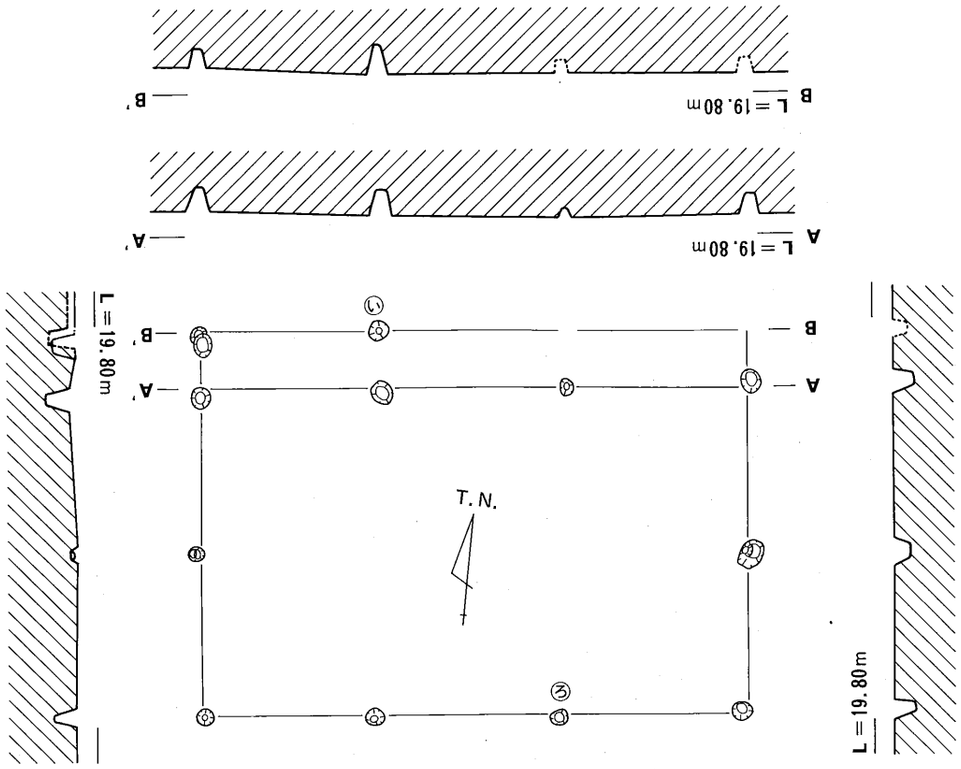
第67図　ＳＢ16平・断面図



第68図　ＳＢ17平・断面図



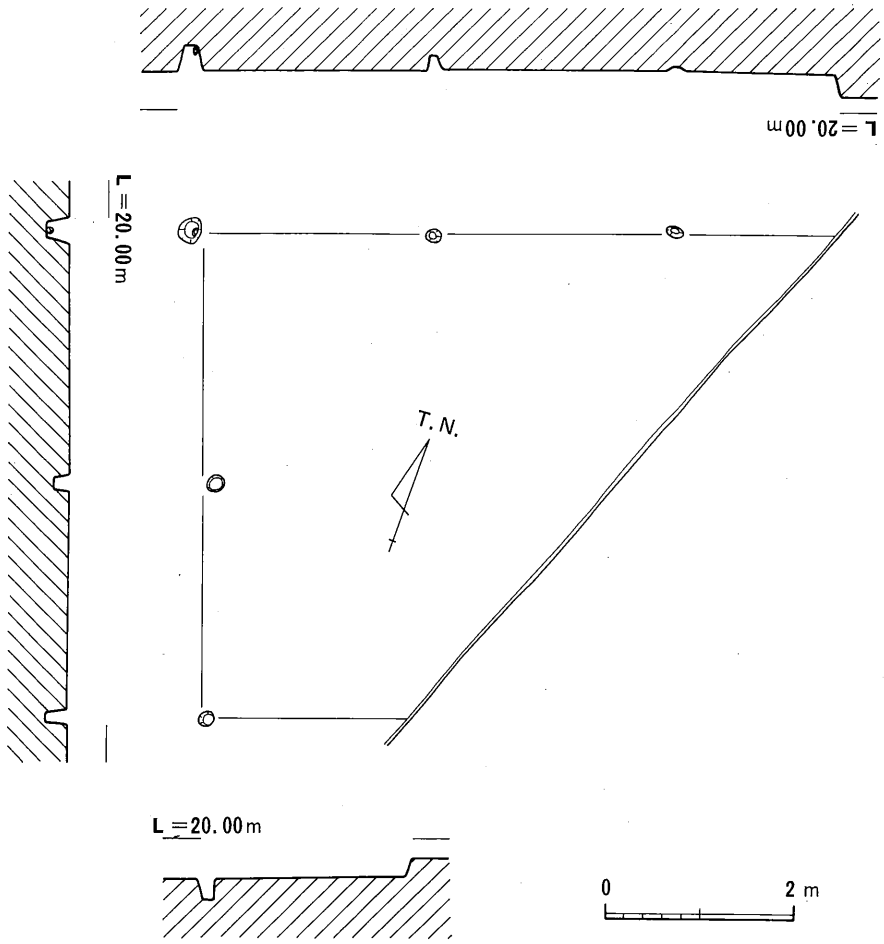
第70図　ＳＢ18出土遺物実測図



第69図　ＳＢ18平・断面図

SB19

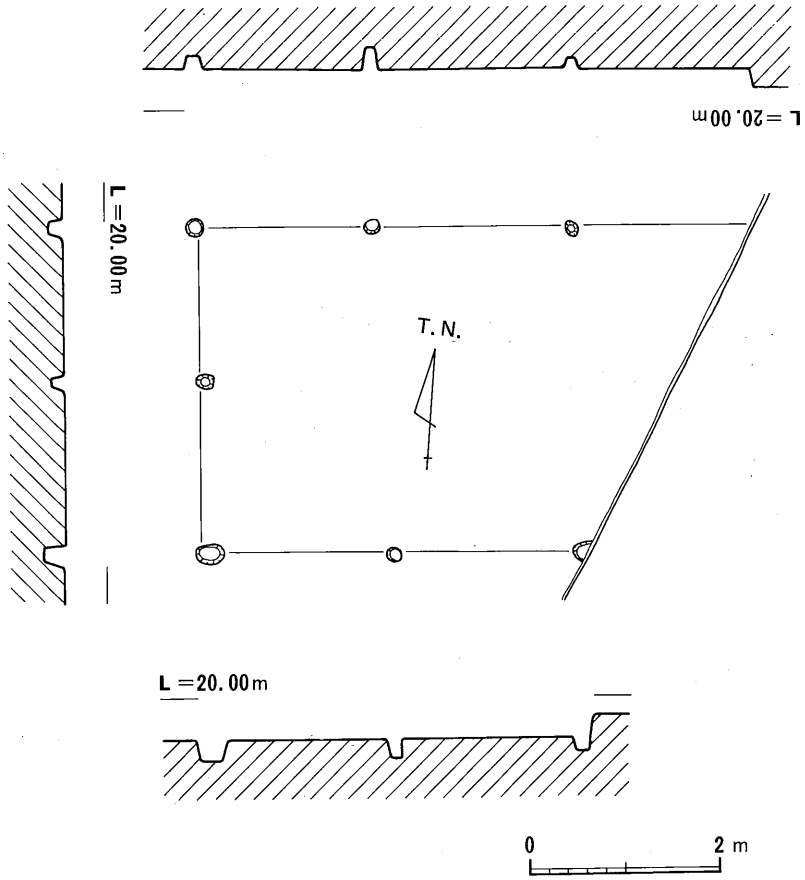
SB19は、梁間２間×桁行（３）間［516×（680）㎝］の建物遺構である。柱穴は、平均幅（19.6）㎝を計り、柱間は、梁間で平均長258㎝、桁行で平均長（252）㎝を計る。主軸は、真北から19.5°西偏する。西半分が調査区外に延びているため全容は不明である。



第71図　ＳＢ19平・断面図

SB20

SB20は、梁間２間×桁行（３）間［340×（584）cm］の建物遺構である。柱穴は、平均幅（18.7）cmを計り、柱間は、梁間で平均長170cm、桁行で平均長（197）cmを計る。主軸は、真北から6°西偏する。西半分が調査区外に延びているため全容は不明である。



第72図　ＳＢ20平・断面図

SB21

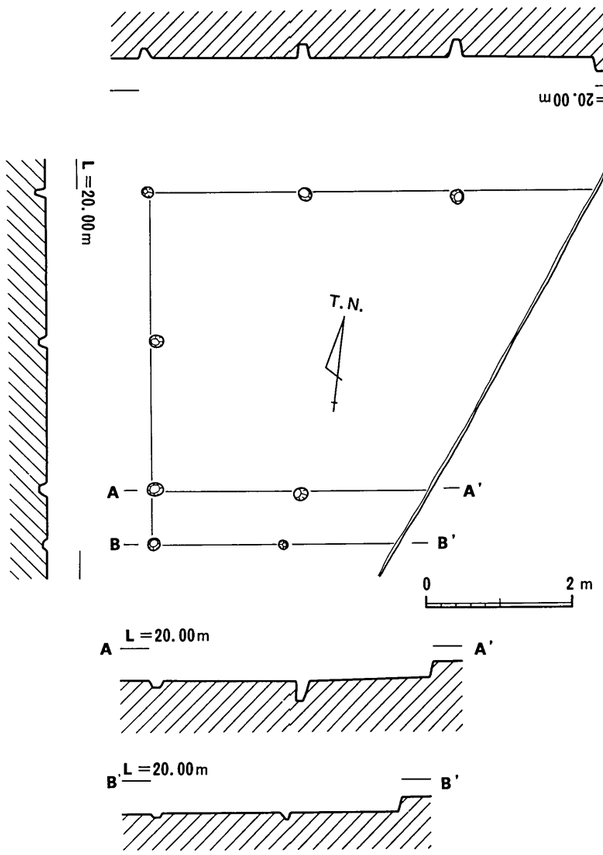
SB21は、梁間２間×桁行（３）間［408×（610）cm］の建物遺構である。柱穴は、平均幅（17.3）cmを計り、柱間は、梁間で平均長204cm、桁行で平均長（204.7）cmを計る。主軸は、真北から6.8°西偏する。南側に庇が付くものである。西半分が調査区外に延びているため全容は不明である。

SB22

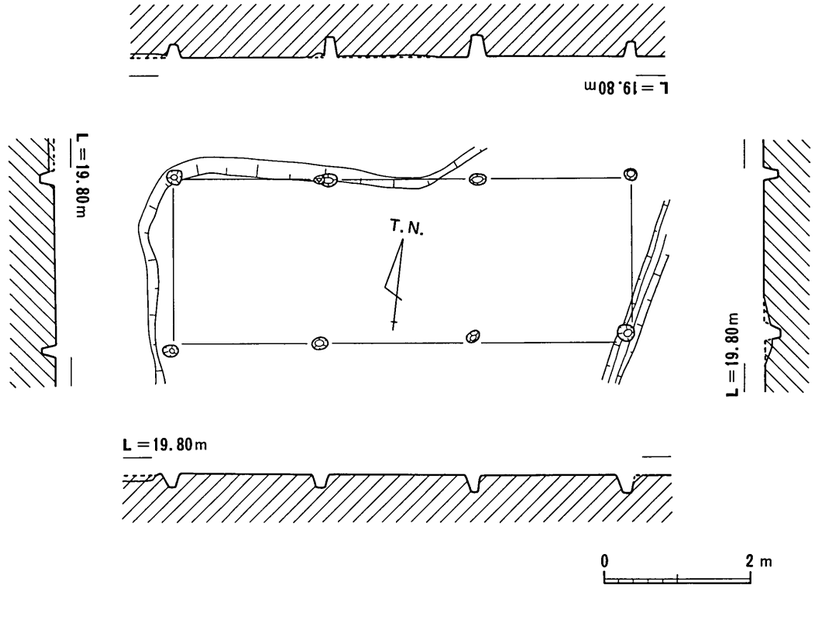
SB22は、梁間１間×桁行３間（225×624cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅21.5cmを計り、柱間は、梁間で平均長225cm、桁行で平均長208cmを計る。主軸は、真北から6.8°西偏する。

SB23

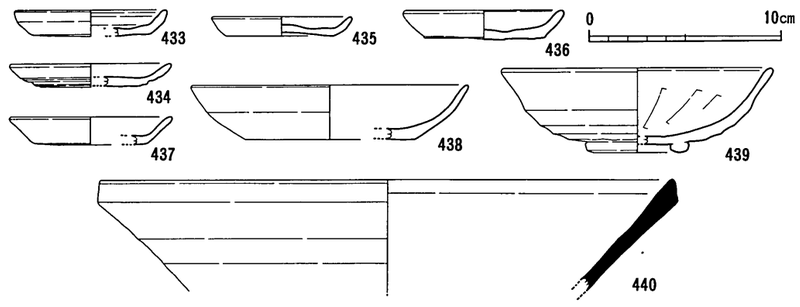
SB23は、梁間１間×桁行３間（416×883cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅29.8cmを計



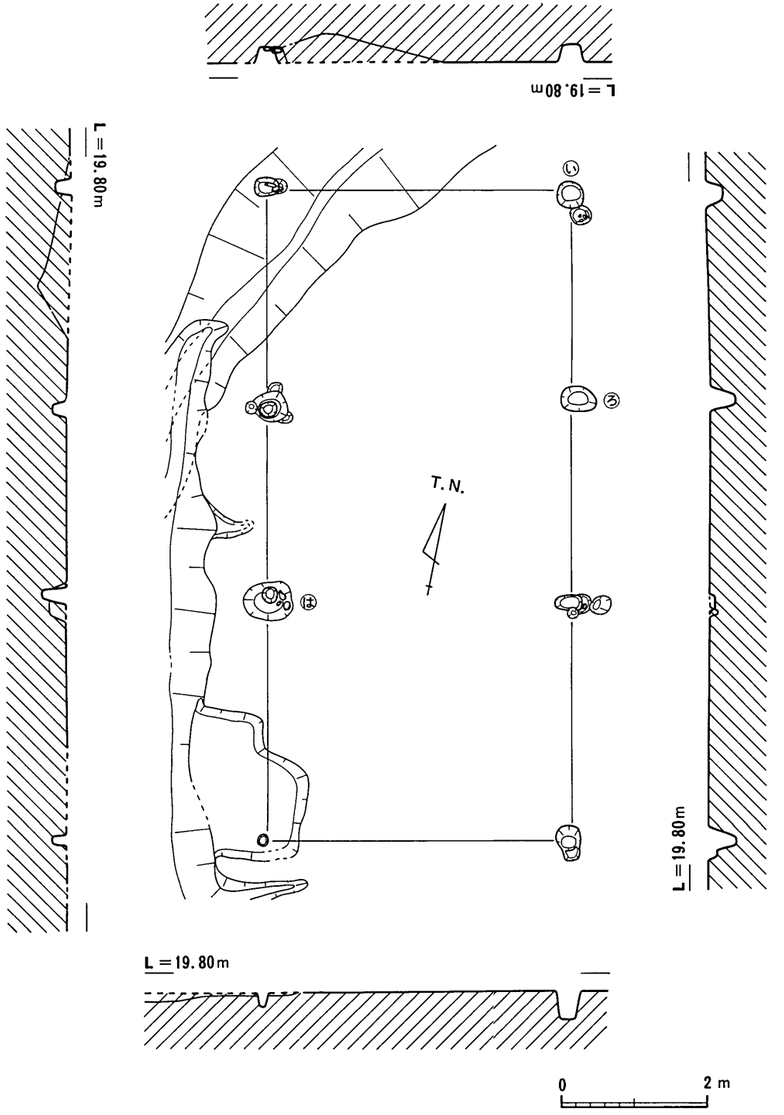
第73図　ＳＢ21平・断面図



第74図　ＳＢ22平・断面図



第76図　ＳＢ23出土遺物実測図



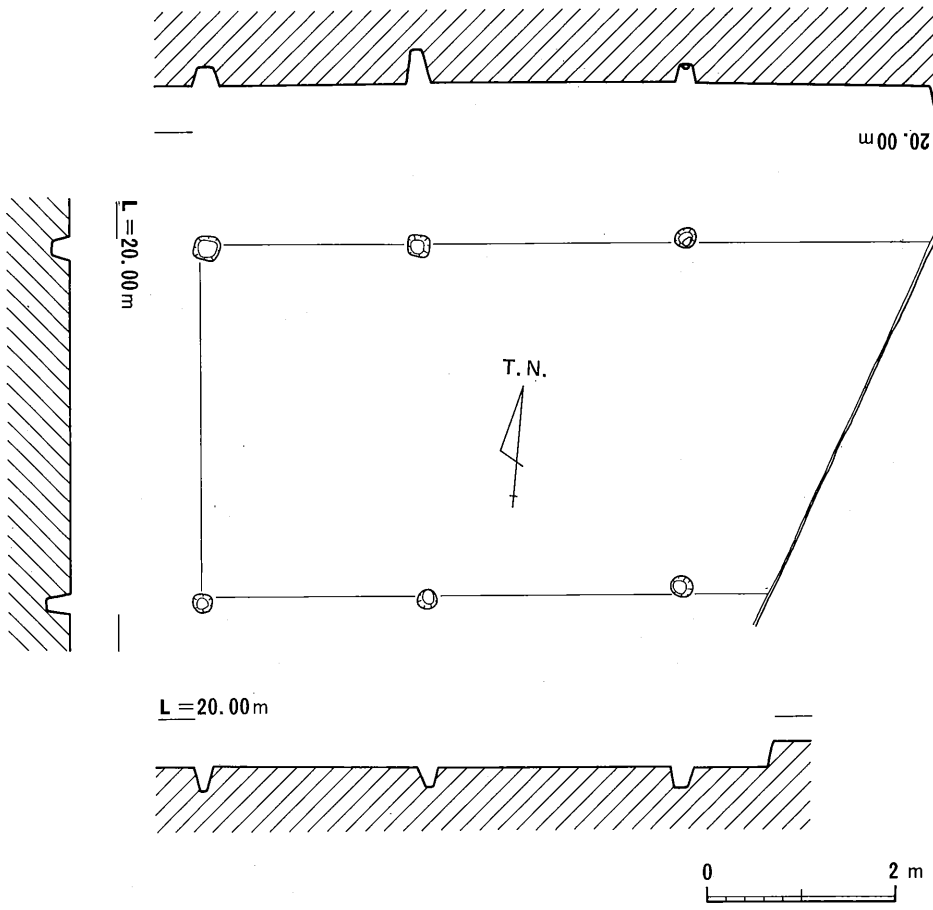
第75図　ＳＢ23平・断面図

り、柱間は、梁間で平均長416cm、桁行で平均長294.3cmを計る。主軸は、真北から11.4°西偏する。

433～440はSB23を構成する柱穴から出土したもの（柱穴㋑出土遺物433・434・437、柱穴㋒出土遺物435・436・439・440、柱穴㋓出土遺物438）である。433・437は土師器の小皿である。433・434は底部がヘラ切りされており、435・437は糸切りされている。438は土師器の坏である。底部は糸切りされており、体部は内彎気味に外上方に延びる。439は瓦質土器の椀である。底部には粘土紐を貼り付けたような高台が付く。体部はやや内彎気味に外上方に延びる。体部外面下半はヘラ削りが、内面には板状のナデが横方向に施されている。440は東播系のこね鉢である。口縁端部内側を上方に引き延ばしている。

SB24

SB24は、梁間1間×桁行（3）間［374×（768）cm］の建物遺構である。柱穴は、平均幅23cmを計り、柱間は、梁間で平均長374cm、桁行で平均長（254）cmを計る。主軸は、真北から5.2°西偏する。西半分が調査区外に延びているため全容は不明である。



第77図　ＳＢ24平・断面図

SB25

SB25は、梁間（2）間×桁行（2）間［(222)×（370）cm］の建物遺構である。柱穴は、平均幅（23.5）cmを計り、柱間は、梁間で平均長（160）cm、桁行で平均長（181）cmを計る。主軸は、真北から11°西偏する。南東部が調査区外に延びており、全容は不明である。

441はSB25を構成する柱穴より出土した瓦器椀（柱穴㋑出土遺物441）である。体部外面に横ナデが見られ、内面にはヘラ磨きがわずかに認められる。

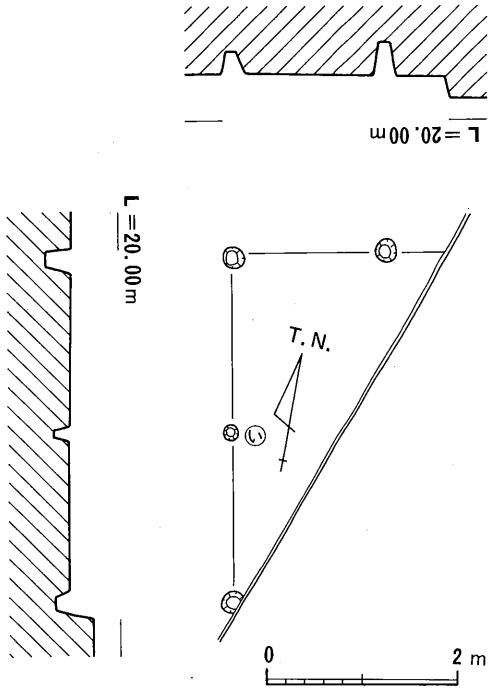
SB26

SB26は、梁間1間×桁行3間（176×288cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅7.7cmを計り、柱間は、梁間で平均長176cm、桁行で平均長96cmを計る。主軸は、真北から7.4°西偏する。柱穴はやや小さめのものである。

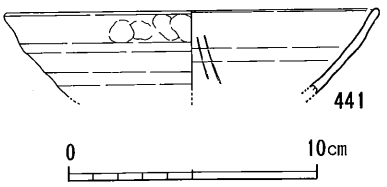
SB27

SB27は、梁間1間×桁行2間（336×409cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅22cmを計り、柱間は、梁間で平均長336cm、桁行で平均長204.5cmを計る。主軸は、真北から5.5°西偏する。

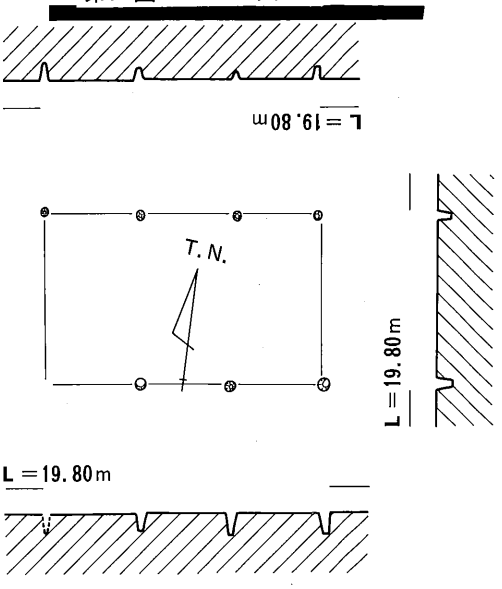
442～444はSB27を構成する柱穴から出土したもの（柱穴㋑出土遺物442、柱穴㋓出土遺物443・444）である。442は土師器の小皿である。底部は糸切りされている。443・444は瓦器の椀である。体部はやや内彎気味に外上方に延び、口縁端部を丸くおさめるものである。



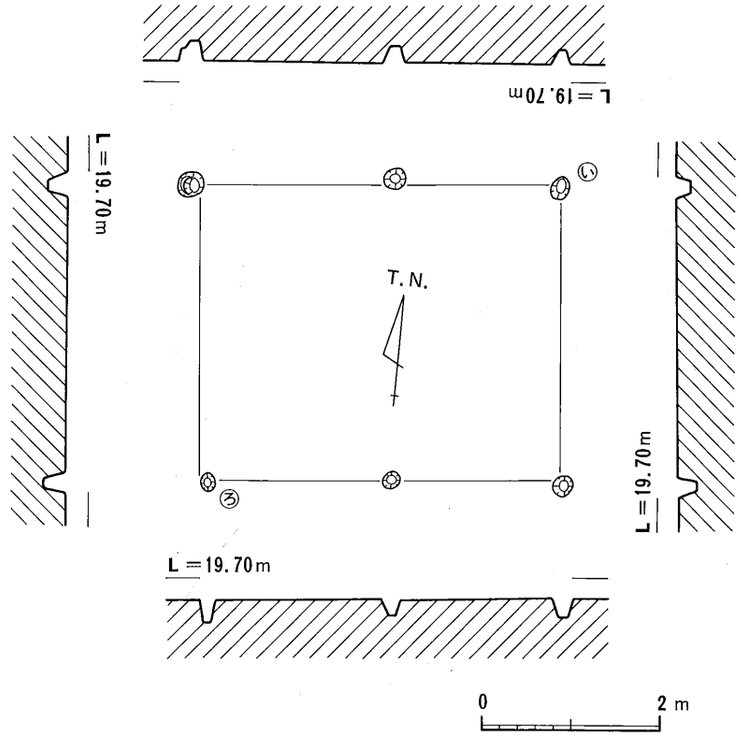
第78図　ＳＢ25平・断面図



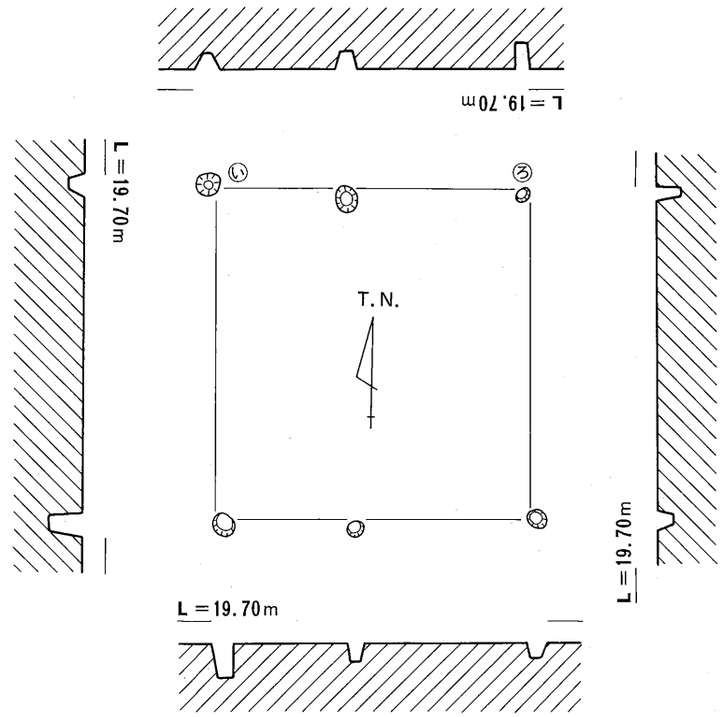
第79図　ＳＢ25出土遺物実測図



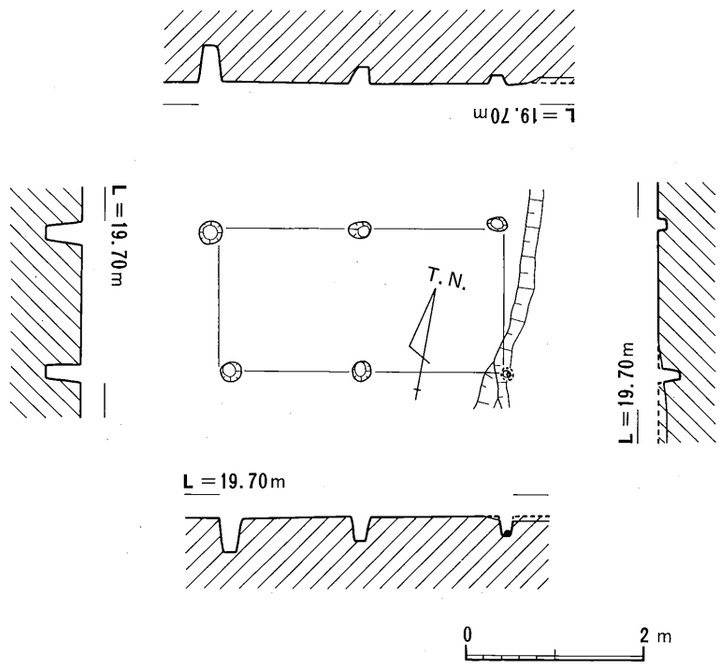
第80図　ＳＢ26平・断面図　0　2 m



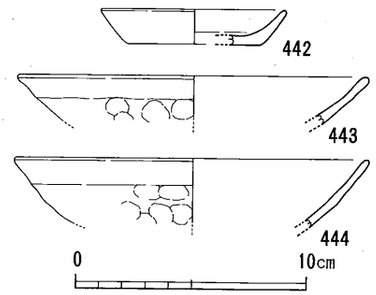
第81図　ＳＢ27平・断面図



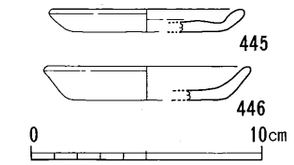
第82図　ＳＢ28平・断面図



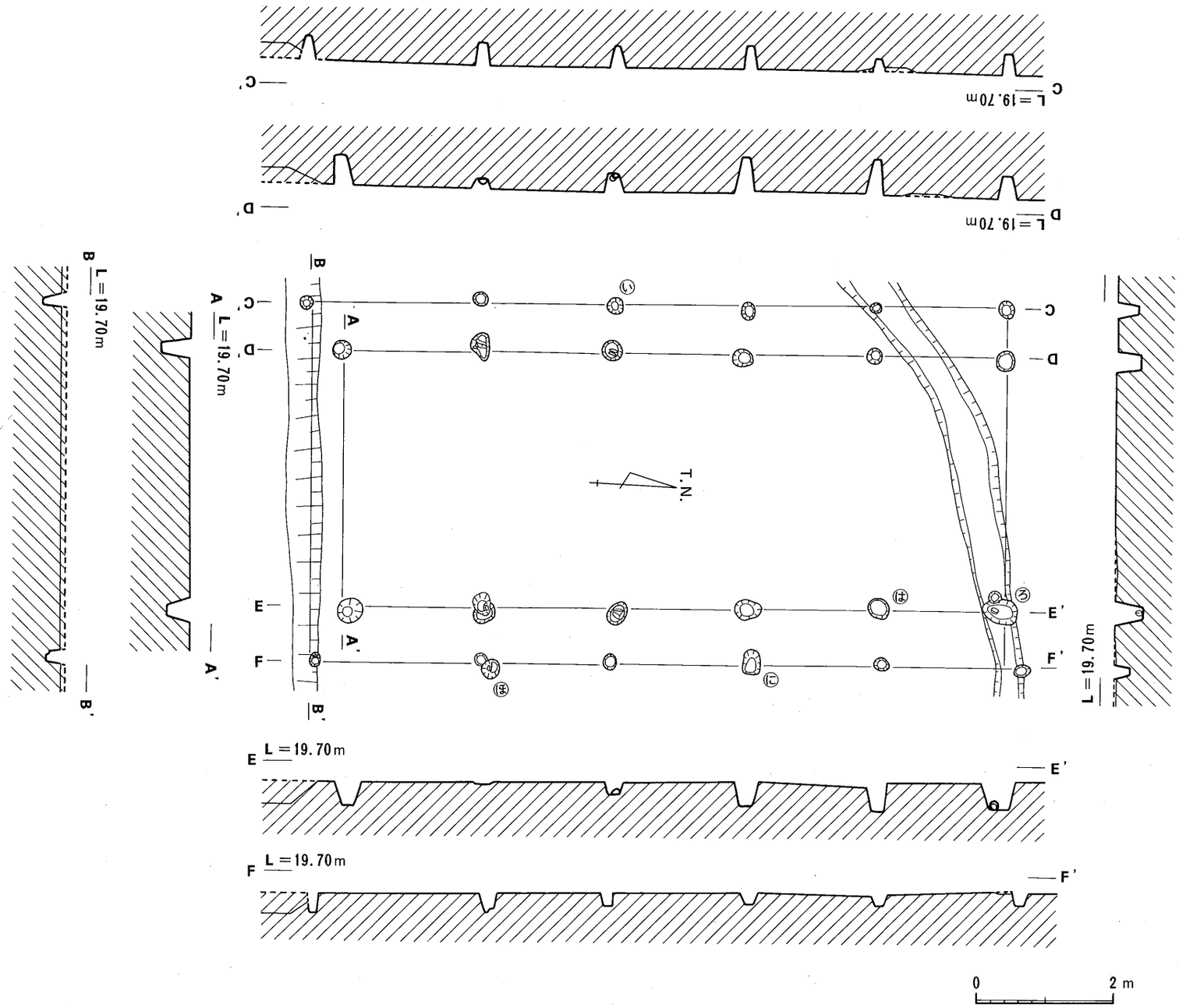
第83図　ＳＢ29平・断面図



第84図　ＳＢ27出土遺物実測図



第85図　ＳＢ28出土遺物実測図



第86図　ＳＢ30平・断面図

SB28

SB28は、梁間１間×桁行２間（374×353cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅22.3cmを計り、柱間は、梁間で平均長374cm、桁行で平均長176.5cmを計る。主軸は、真北から1.1°西偏する。

445・446はSB28を構成する柱穴より出土した土師器の小皿（柱穴㋑出土遺物445、柱穴㋒出土遺物446）である。445は底部ヘラ切りされており、やや厚手に作られた体部が直線的に外上方に延びる。446は底部は糸切りされており、体部は直線的に外上方に延びる。

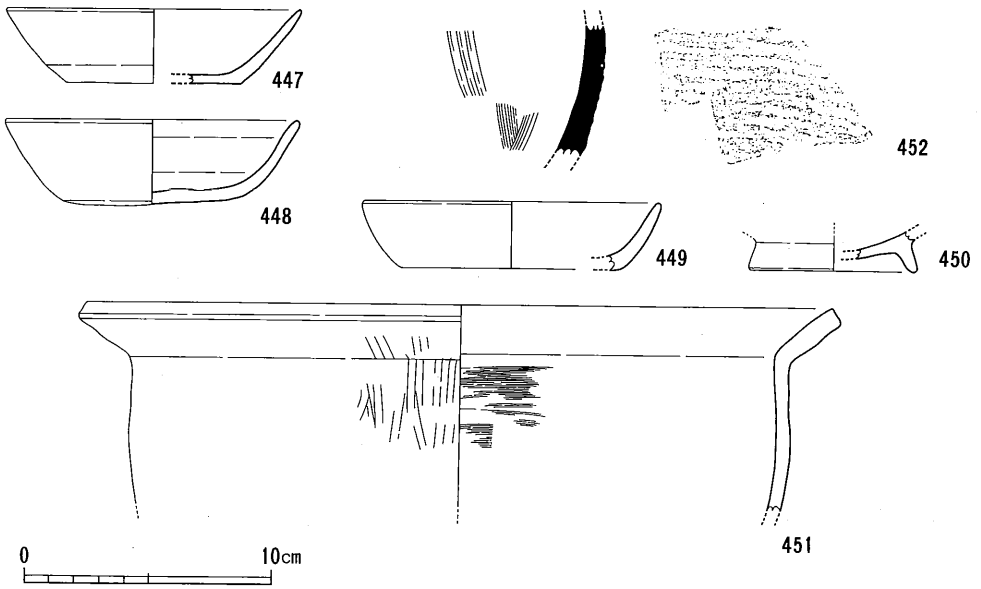
SB29

SB29は、梁間１間×桁行２間（162×319cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅21cmを計り、柱間は、梁間で平均長162cm、桁行で平均長159.5cmを計る。主軸は、真北から9.7°西偏する。

SB30

SB30は、梁間１間×桁行５間（373×955cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅31.2cmを計り、柱間は、梁間で平均長373cm、桁行で平均長191cmを計る。主軸は、真北から3.4°西偏する。東西両側に庇が付いているものである。南の庇の柱穴が斜め方向にずれていることから南側にも庇が付いていたものと思われる。

447～452はSB30を構成する柱穴から出土したもの（柱穴㋑出土遺物447、柱穴㋒出土遺物448・449、柱穴㋖出土遺物451、柱穴㋗出土遺物450、柱穴㋘出土遺物452）である。447～449は土師器の坏である。447・448は底部がヘラ切りされている。体部と底部の境がきつく、稜を残すもの（447）と残さないもの（448）がある。450は黒色土器Ａ類椀の底部である。外方に張り出すしっかりした高台を持つものである。451は土師質土器の土鍋である。口縁部で外方に屈曲する。452は須恵器の体部である。外面に格子目状の叩きが、内面には刷毛目が施されている。



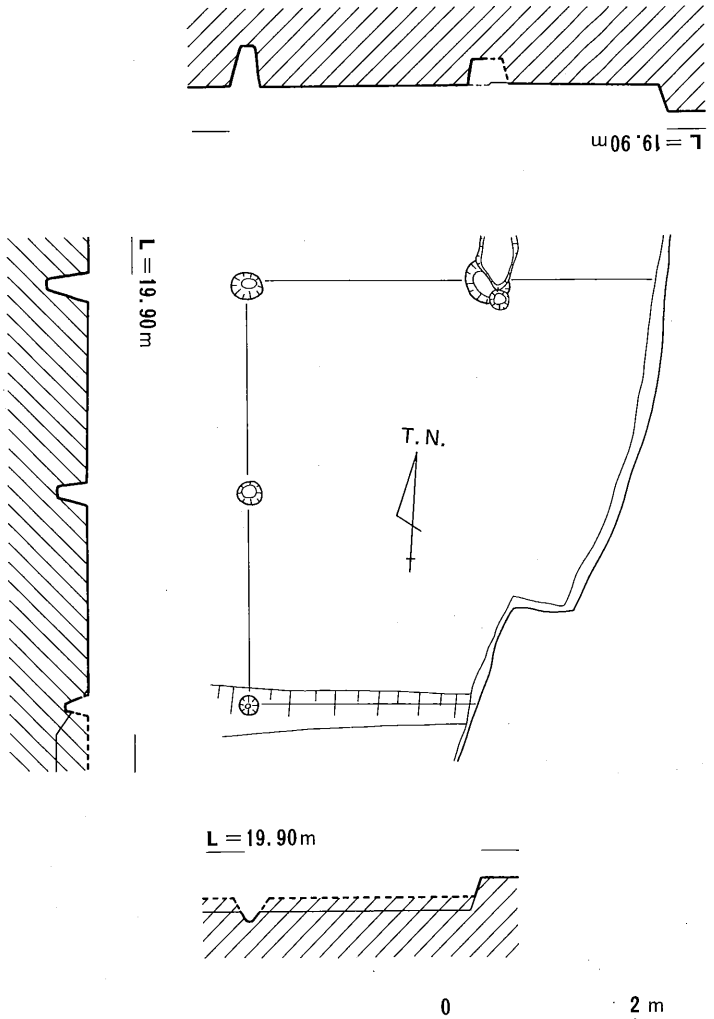
第87図　ＳＢ30出土遺物実測図

SB31

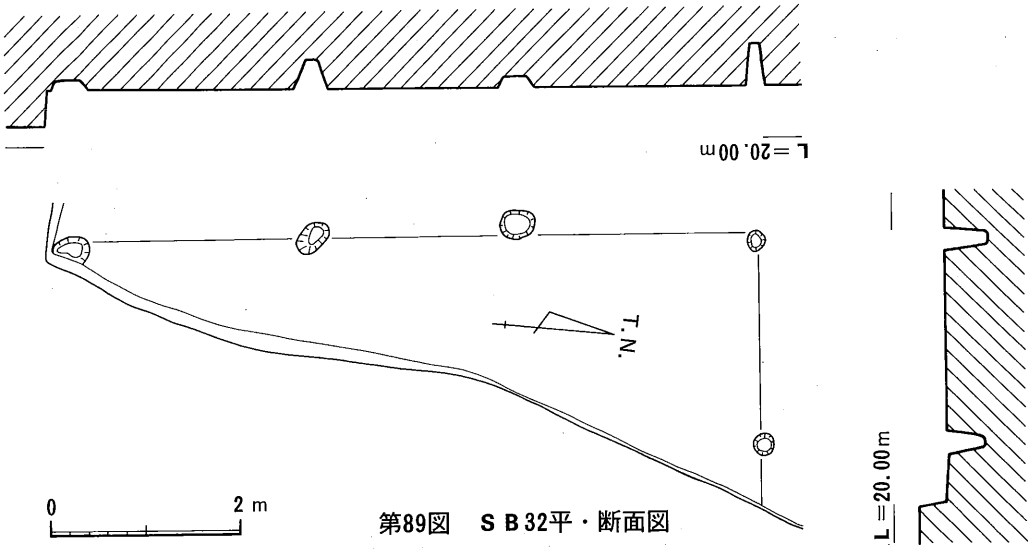
SB31は、梁間２間×桁行（２）間［444×（428）cm］の建物遺構である。柱穴は、平均幅（31.5）cmを計り、柱間は、梁間で平均長222cm、桁行で平均長（248）cmを計る。主軸は、真北から3.5°西偏する。東側が調査区外に延びているため全容は不明である。

SB32

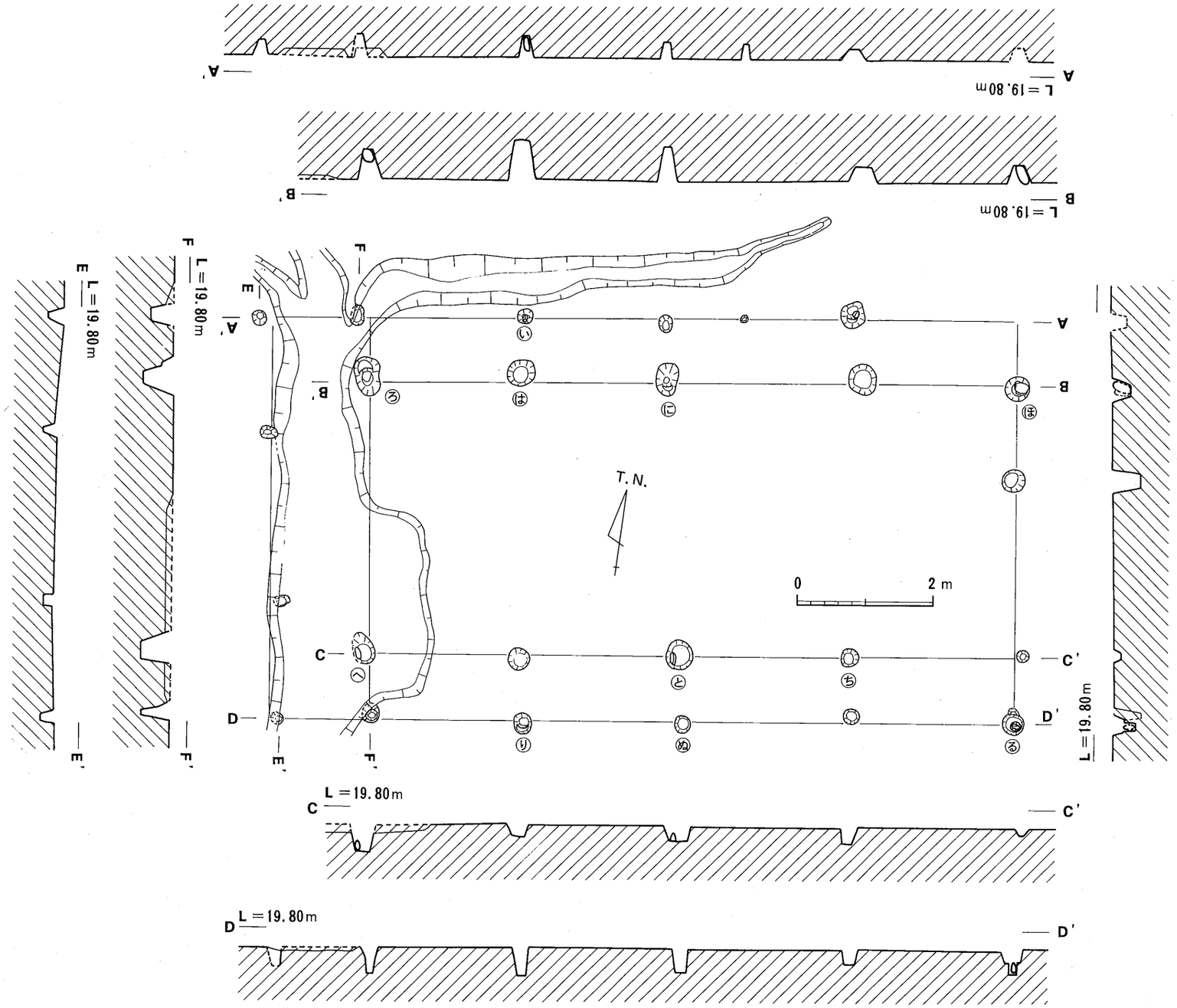
SB32は、梁間（２）間×桁行（３）間［(280)×（724）cm］の建物遺構である。柱穴は、平均幅（30）cmを計り、柱間は、梁間で平均長（216）cm、桁行で平均長（239.3）cmを計る。主軸は、真北から6°西偏する。東側が調査区外に延びているため全容は不明である。



第88図　ＳＢ31平・断面図



第89図　ＳＢ32平・断面図

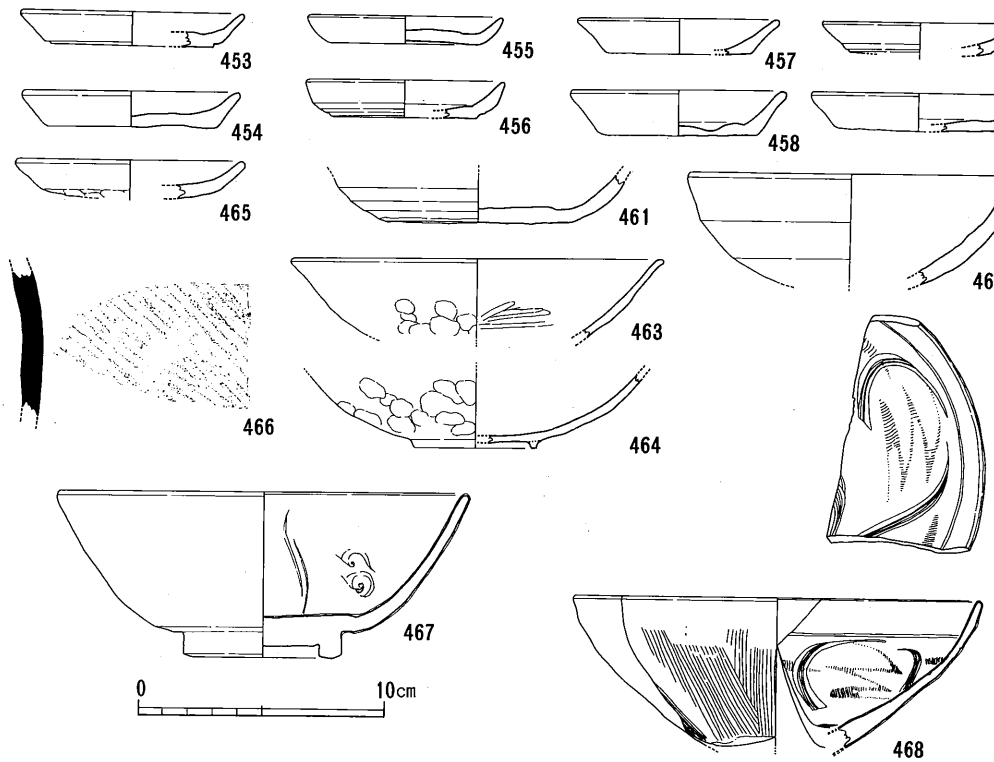


第90図　ＳＢ33平・断面図

SB33

SB33は、梁間1間×桁行4間（398×966cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅33.4cmを計り、柱間は、梁間で平均長398cm、桁行で平均長241.5cmを計る。主軸は、真北から7.7°西偏する。東西と南側に庇を持つものである。大型の建物である。

453～468はSB33を構成する柱穴より出土したもの（柱穴㋑出土遺物455、柱穴㋒出土遺物461、柱穴㋓出土遺物468、柱穴㋔出土遺物453・454・465、柱穴㋕出土遺物460、柱穴㋖出土遺物462、柱穴㋗出土遺物456・457・464・467、柱穴㋘出土遺物459、柱穴㋙出土遺物463、柱穴㋚出土遺物458、柱穴㋛出土遺物466）である。453～460は土師器の小皿である。453～458は底部がヘラ切りされており、体部は直線的に延びるもの・内彎するもの・外反するものの3タイプあるようである。459・460は底部が糸切りされているものである。461は土師器の坏である。底部はヘラ切りされている。462は瓦質土器椀である。体部は内彎気味に外上方に延びる。体部はやや厚手に作られている。463～465は畿内産の瓦器である。463・464は椀である。底部に断面方形の高台が付き、体部は内彎気味に延び、口縁端部は外方に屈曲させている。体部外面には指頭痕が、内面にはヘラ磨きが認められる。465は小皿である。底部に指頭痕が、内面にはヘラ磨きが顕著に施されている。466は須恵器の甕の体部である。外面に3×7㎜角の格子目叩きが施されている。467



第91図　ＳＢ33出土遺物実測図

・468は輸入陶磁器である。467は青磁碗である。高台は断面方形に削り出されており、体部は内彎気味に外上方に延びる。高台畳付け内を除く全面に淡青色の釉がかけられている。内面見込み部の周縁に沈線が、体部内面には縦方向の片彫と飛雲文が施されている。龍泉窯系青磁椀Ⅰ類－4に当たると思われる。468は青磁碗で、体部は下半部が直線的に、上半部が内彎気味に延びる。体部全面に黄味を帯びた緑色釉がかけられている。体部外面には縦方向の櫛目が、内面にはヘラによる片彫と櫛によるジグザグ文様が施されている。同安窯系青磁椀Ⅰ類－1・bに当たる。

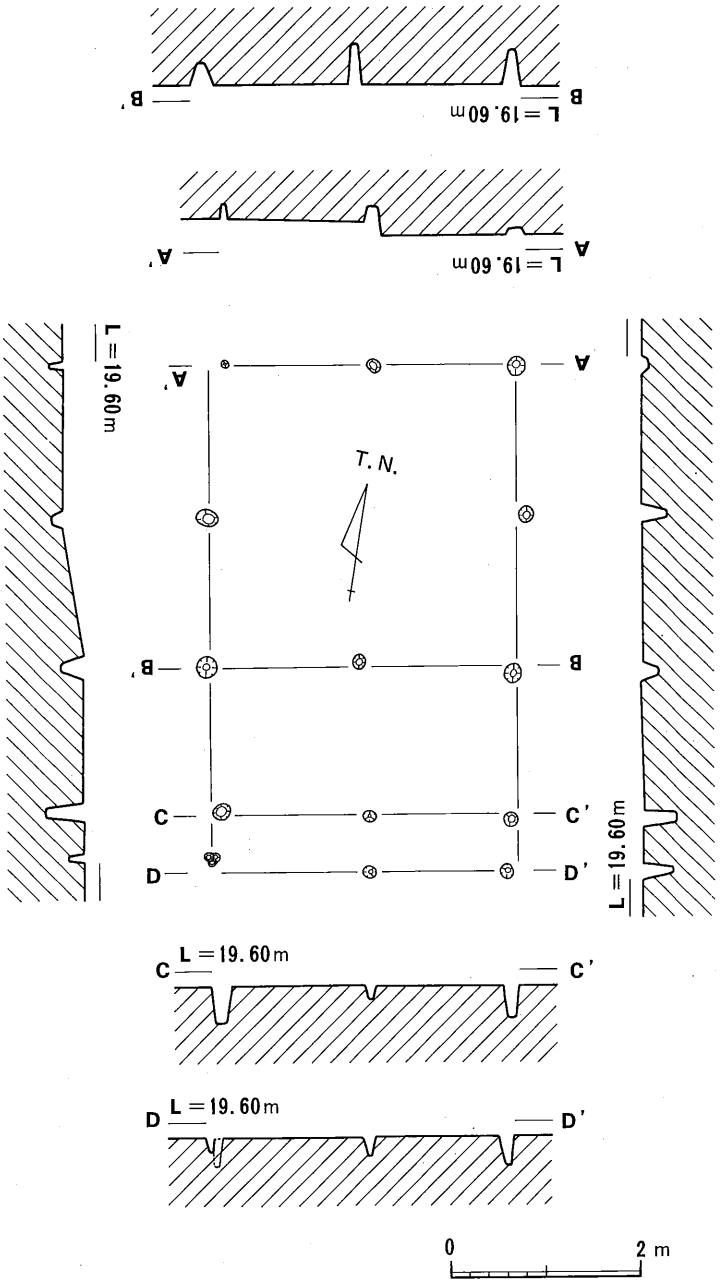
SB34

SB34は、梁間2間×桁行3間（305×477cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅21.3cmを計り、柱間は、梁間で平均長152.5cm、桁行で平均長159cmを計る。主軸は、真北から9.3°西偏する。南側に庇を持ち、南側から1間分のところに間仕切りの柱穴が認められる。

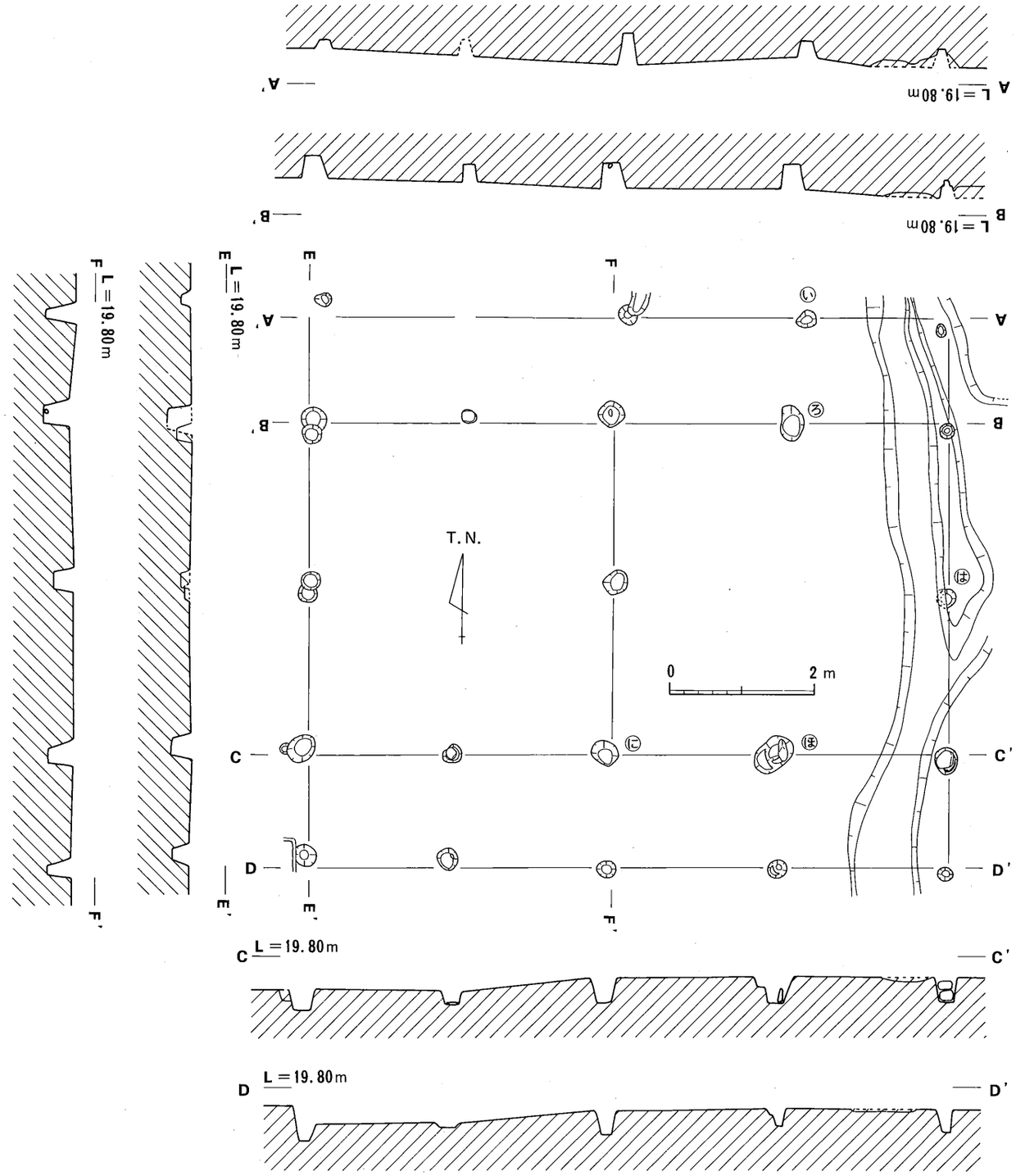
SB35

SB35は、梁間2間×桁行4間（442×880cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅31.2cmを計り、柱間は、梁間で平均長221cm、桁行で平均長220cmを計る。主軸は、真北を向いている。南北に庇が付いている。中央部には間仕切りの柱穴が認められる。

469～477はSB35を構成する柱穴から出土したもの（柱穴㋑出土遺物469、柱穴㋒出土遺物474・476、柱穴㋓出土遺物473、柱穴㋔

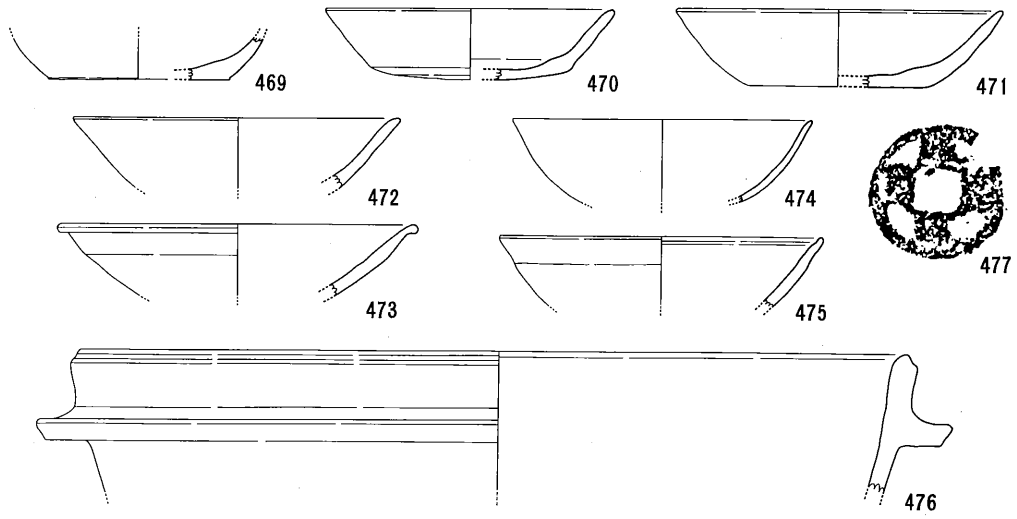


第92図　ＳＢ34平・断面図



第93図　ＳＢ35平・断面図

出土遺物472・475、柱穴㉞出土遺物470・471・477）である。469～471は土師器の坏である。底部は全てヘラ切りされている。469は体部が内彎気味に延びるが、470・471は直線気味に外上方に延び端部はシャープに終わらせるようである。472・473は土師器の椀である。473は体部が直線気味に外上方に延び口縁端部を外方に屈曲させている。474は黒色土器A類の椀である。475は黒色土器B類の椀で、口縁端部内面に沈線を施している。楠葉産の黒色土器であろうか。476は羽釜である。体部から口縁部にかけて直線的に外上方に延び、口縁下にしっかりした鍔が付いて

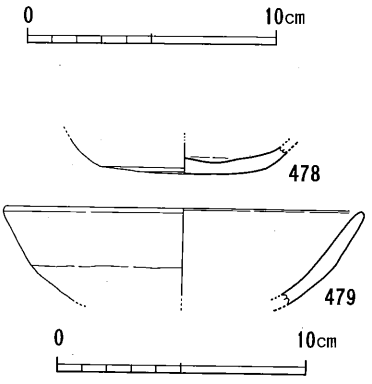


第94図　ＳＢ35出土遺物実測図

いる。477は銅銭である。描かれている文字は不明であるが直径がやや小さいため皇朝銭の可能性が考えられる。皇朝銭の「饒益神宝」（貞観元年 859）、「貞観永宝」（貞観12年 870）、「寛平大宝」（寛平２年 890）、「延喜通宝」（延喜７年 907）、「乹元大宝」（天徳２年 958）のいずれかと思われる。

SB36

SB36は、梁間２間×桁行４間（384×812cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅17.8cmを計り、柱間は、梁間で平均長192cm、桁行で平均長203cmを計る。主軸は、真北を向いている。



第95図　ＳＢ36出土遺物実測図

南北に庇が付いている。中央部に間仕切りの柱穴が認められる。

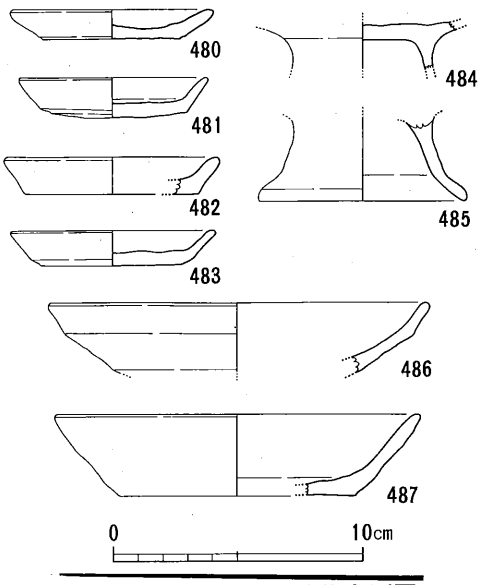
478・479はSB36を構成する柱穴より出土したもの（柱穴㋑出土遺物479、柱穴㋓出土遺物478）である。478は土師器の坏で底部はヘラ切りされている。479は土師器の椀である。体部は内彎気味に外上方に延びる。器壁はやや厚めに作られている。

SB37

SB37は、梁間２間×桁行３間（360×680cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅23.6cmを計

り、柱間は、梁間で平均長180cm、桁行で平均長226.7cmを計る。主軸は、真北から0.7°西偏する。南北梁間に庇が付いている。庇の柱間は南北で異なっている。南側に間仕切りの柱穴が認められる。

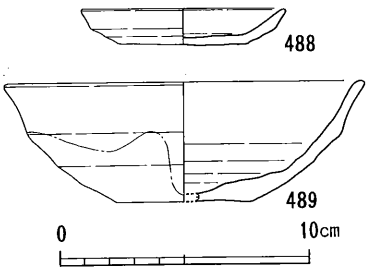
480～487はSB37を構成する柱穴から出土したもの（柱穴㋑出土遺物480～487）である。480～483は土師器の小皿である。480・481は底部ヘラ切りされており、483は糸切りである。484・485は脚付きの小皿と思われる。486は土師器の椀である。口縁部近くで小さな屈曲を持つ。487は土師器の坏である。底部は糸切りされており、体部は直線的に外上方に延びる。



第96図　ＳＢ37出土遺物実測図

SB38

SB38は、梁間２間×桁行３間（392×690cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅25.4cmを計り、柱間は、梁間で平均長196cm、桁行で平均長230cmを計る。主軸は、真北から7.5°西偏する。



第97図　ＳＢ39出土遺物実測図

SB39

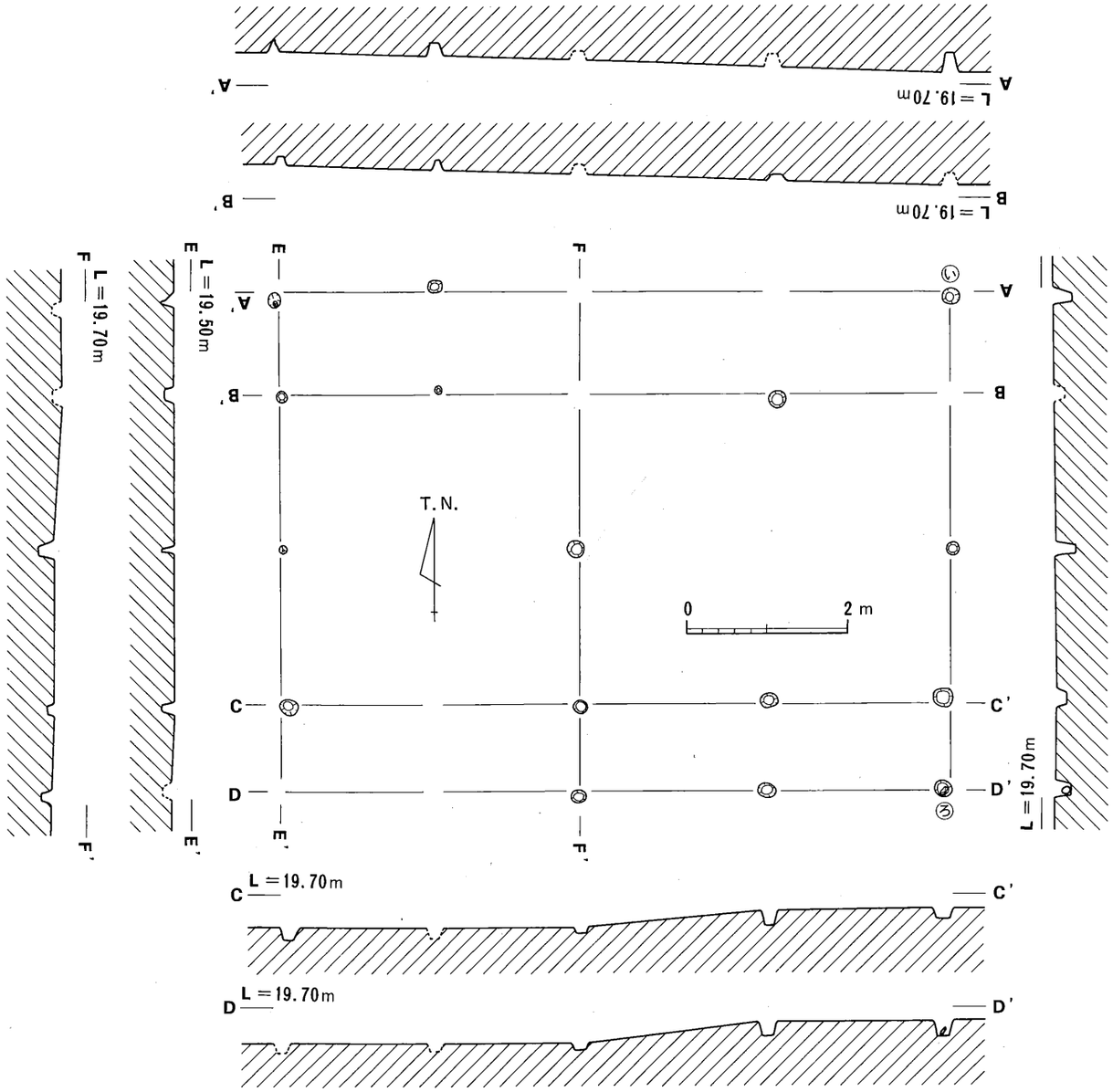
SB39は、梁間２間×桁行３間（335×628cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅20.2cmを計り、柱間は、梁間で平均長167.5cm、桁行で平均長209.3cmを計る。主軸は、真北から8.4°西偏する。南側１間分に間仕切りの柱穴が認められる。

488・489はSB39を構成する柱穴より出土したもの（柱穴㋑出土遺物488・489）である。488は土師器の小皿である。底部はヘラ切りされており体部は直線的に外上方に延びる。489は瓦質土器の椀である。底部に高台の付かないもので体部は内彎気味に外上方に延びる。口縁部外面には指ナデが施されている。器高がやや深く底径は小さい。

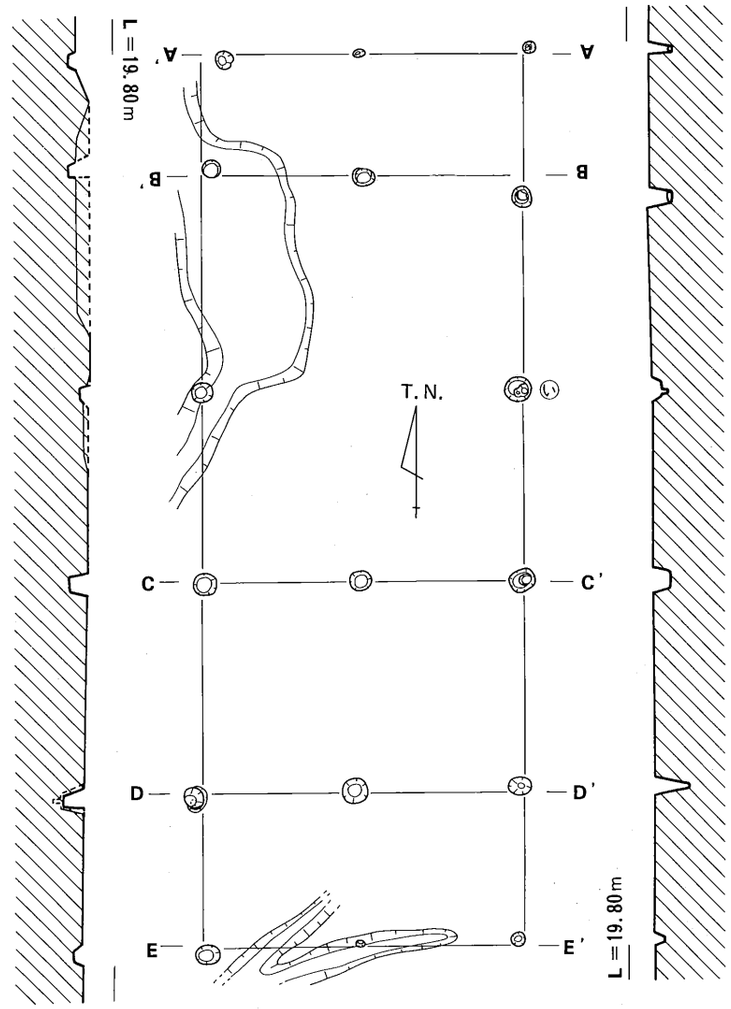
SB40

SB40は、梁間１間×桁行３間（392×720cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅28.3cmを計り、柱間は、梁間で平均長392cm、桁行で平均長240cmを計る。主軸は、真北から8.7°西偏する。

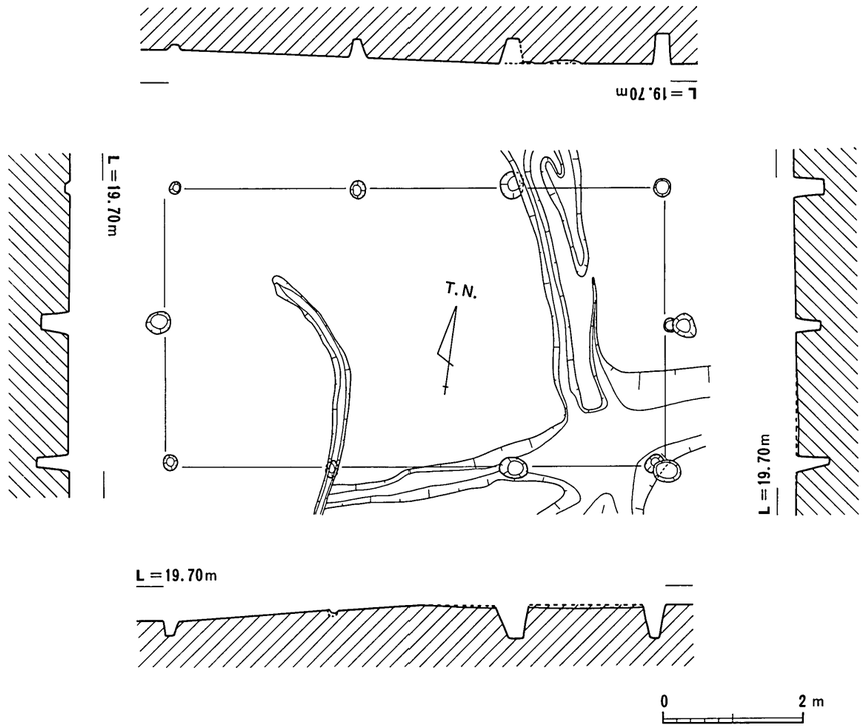
490～500はSB40を構成する柱穴から出土したもの（柱穴㋑出土遺物491・492・494～496・498～500、柱穴㋒出土遺物490・493・497）である。490～492は土師器の小皿である。底部はヘラ切りされている。490は直線的に外上方に細く延びる。491・492は体部がやや外反する。493はやや小型の土師器の坏である。底部はヘラ切りされており、体部はやや外反気味に外上方に延びる。



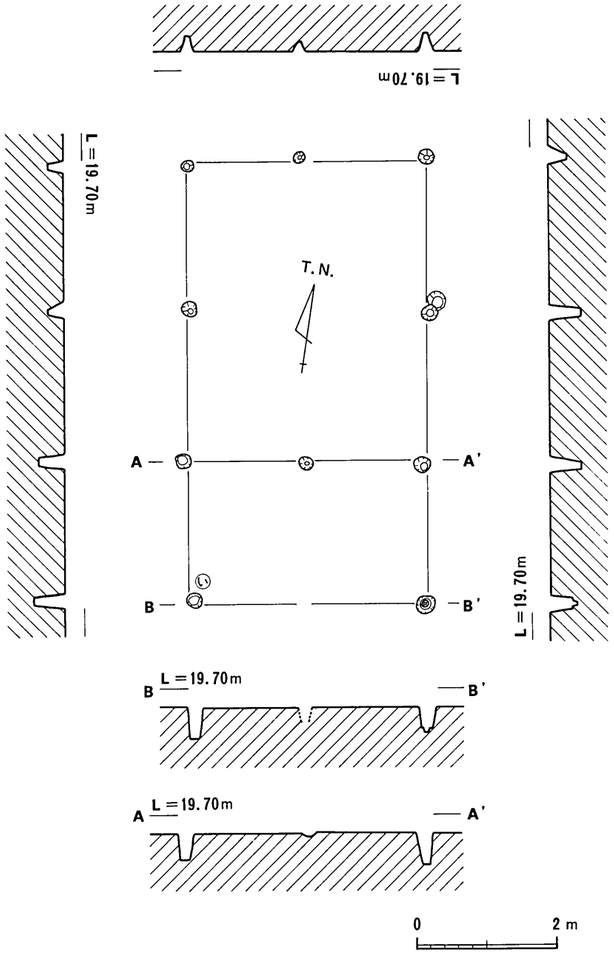
第98図　ＳＢ36平・断面図



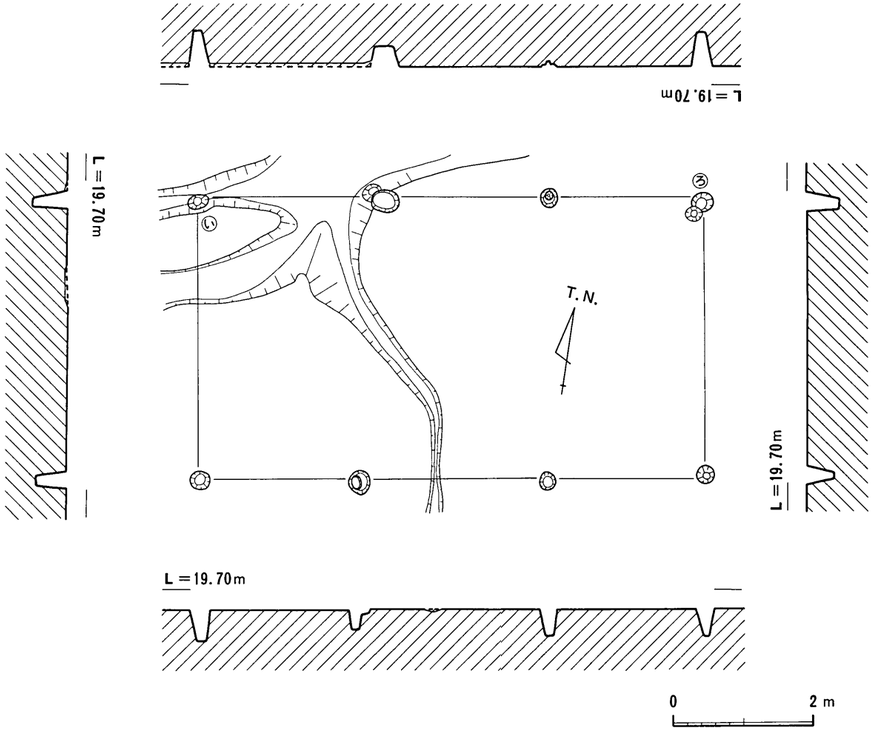
第99図　ＳＢ37平・断面図



第100図　ＳＢ38平・断面図

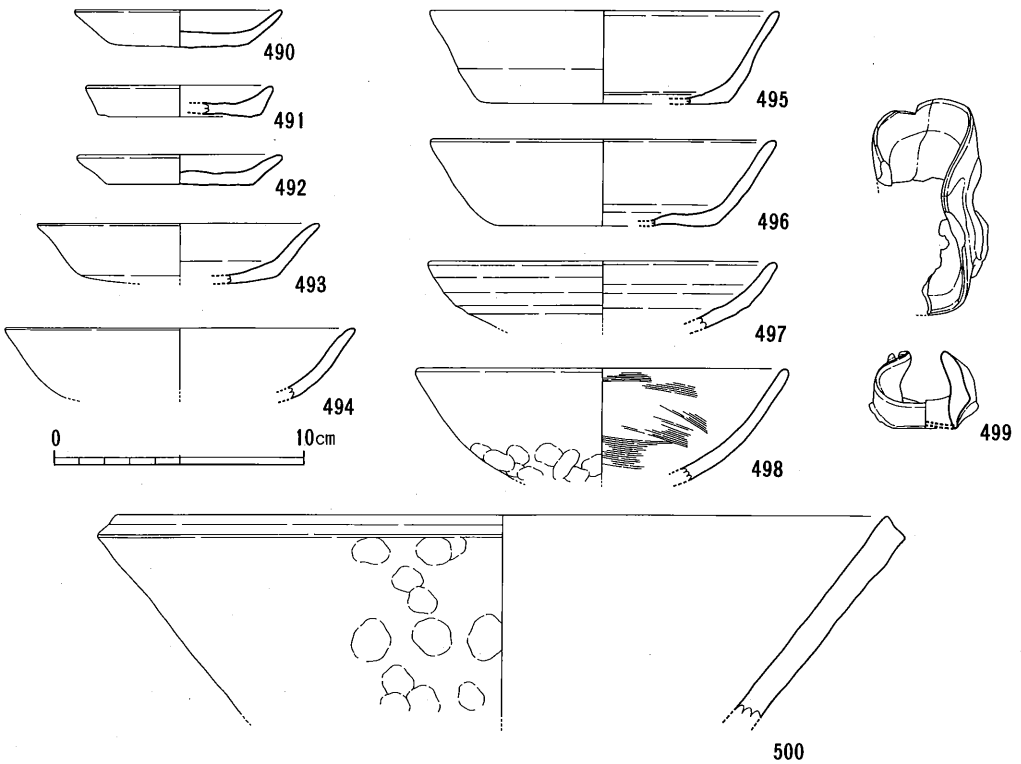


第101図　ＳＢ39平・断面図



第102図　ＳＢ40平・断面図

494・495は土師器の坏である。底部は糸切りされており、体部は直線的に外上方に延びる。496は瓦質土器椀である。体部内外面に指ナデ痕が顕著に認められる。497・498は土師器の椀である。497は体部が内彎気味に外上方に延び口縁端部を丸くおさめている。498は体部がやや内彎気味に外上方に延びるもので、体部外面下半に指頭痕が、内面に刷毛目が認められる。499は土師器の耳皿である。体部両側から指押えしている。500は瓦質土器のこね鉢である。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部をそのまま終わらせている。口縁端部外面を指ナデしている。体部外面には指頭痕が認められる。

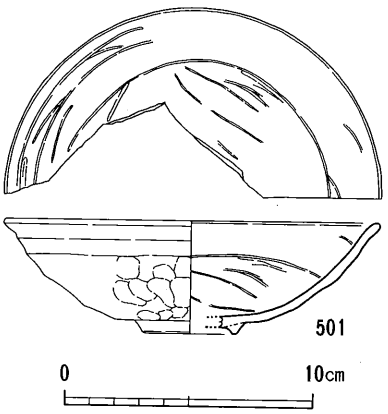


第103図　ＳＢ40出土遺物実測図

SB41

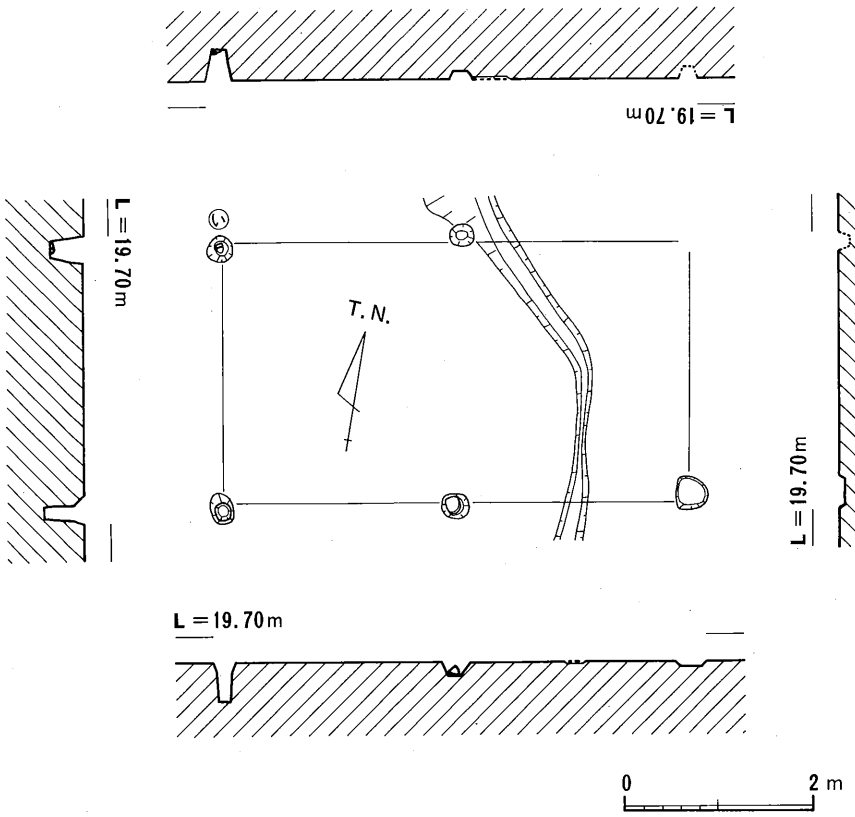
SB41は、梁間1間×桁行2間（278×492cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅28.4cmを計り、柱間は、梁間で平均長278cm、桁行で平均長246cmを計る。主軸は、真北から11.5°西偏する。

501はSB41を構成する柱穴から出土した畿内産の瓦器（柱穴㋑出土遺物501）である。底部に断面逆台形状の高台が付き、体部は内彎気味に外上方に延び、口縁端部は外方に屈曲させるものである。体部外面下半には指頭



第104図　ＳＢ41出土遺物実測図

痕が内面にはヘラ磨きが顕著に施されている。



第105図　ＳＢ41平・断面図

SB42

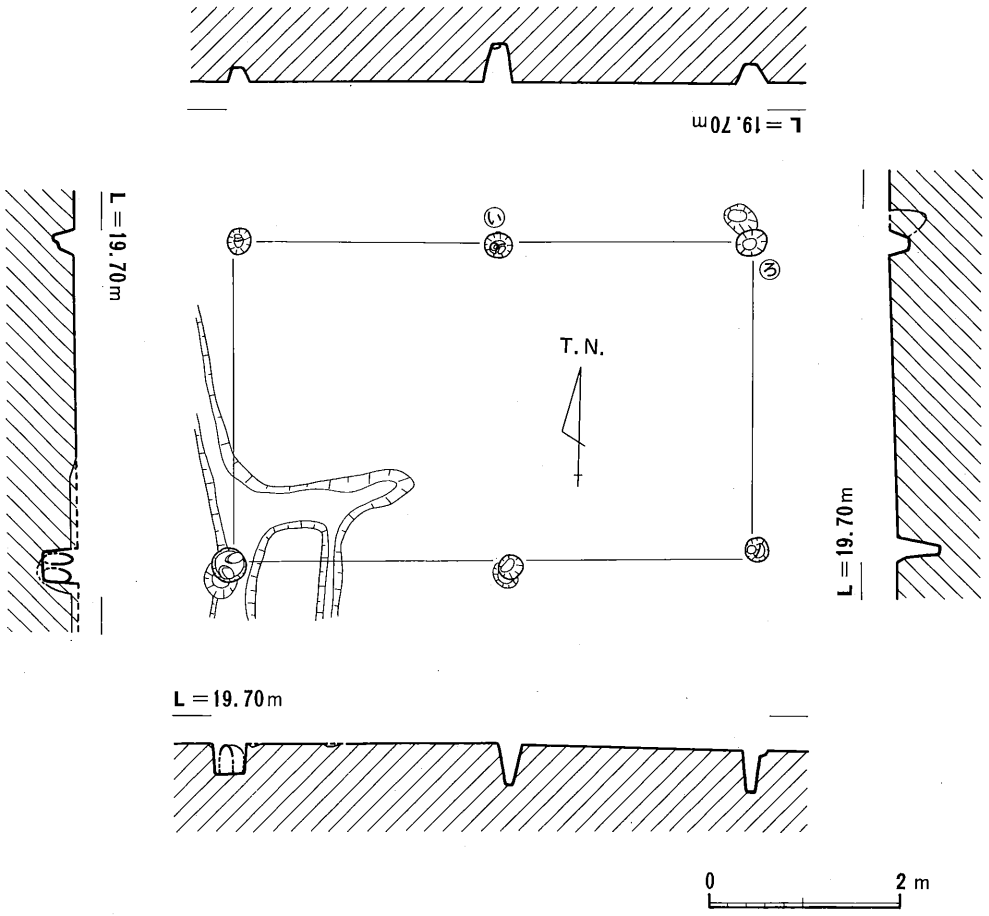
SB42は、梁間１間×桁行２間（332×545cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅28.3cmを計り、柱間は、梁間で平均長332cm、桁行で平均長272.5cmを計る。主軸は、真北から1.8°西偏する。

502・503はSB42を構成する柱穴から出土したもの（柱穴㋑出土遺物502、柱穴㋒出土遺物503）である。502は土師器の小皿である。底部は糸切りされており、体部は直線的に外上方に延びる。503は土師器の坏である。底部は糸切りされている。

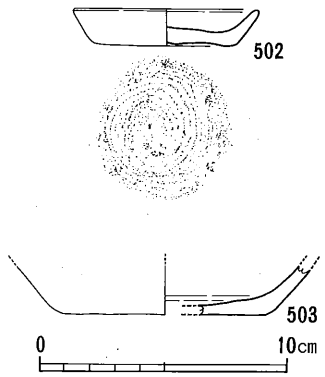
SB43

SB43は、梁間１間×桁行２間（354×528cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅30.7cmを計り、柱間は、梁間で平均長354cm、桁行で平均長264cmを計る。主軸は、真北から2.2°西偏する。

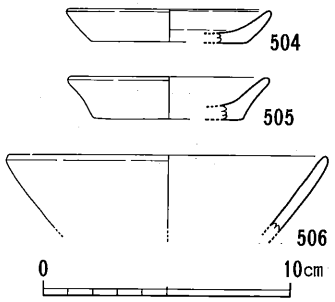
504～506はSB43を構成する柱穴から出土したもの（柱穴㋑出土遺物506、柱穴㋒出土遺物505、柱穴㋓出土遺物504）である。504・505は土師器の小皿である。504の底部はヘラ切りされている。体部は直線的に延びるもの（504）と外反するもの（505）がある。506は土師器の椀である。体部は直線的に外上方に延びる。



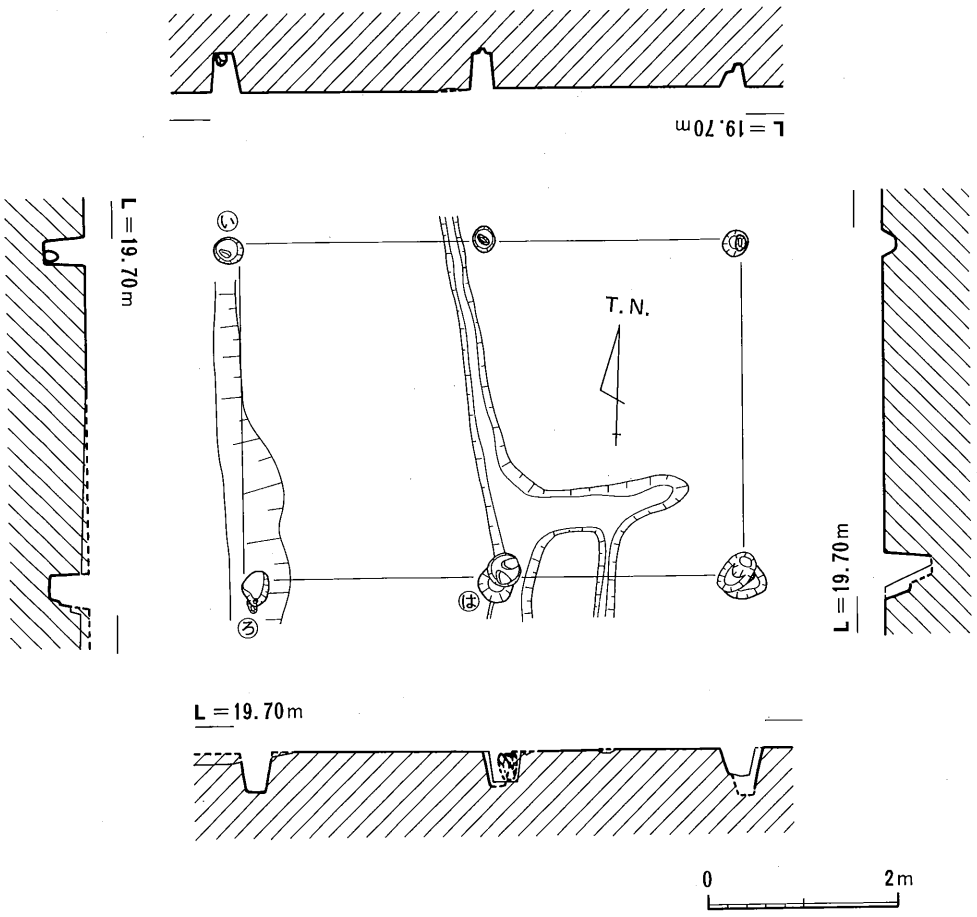
第106図　ＳＢ42平・断面図



第107図　ＳＢ42出土遺物実測図



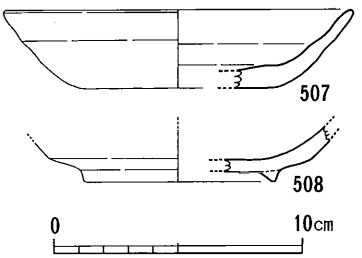
第108図　ＳＢ43出土遺物実測図



第109図　ＳＢ43平・断面図

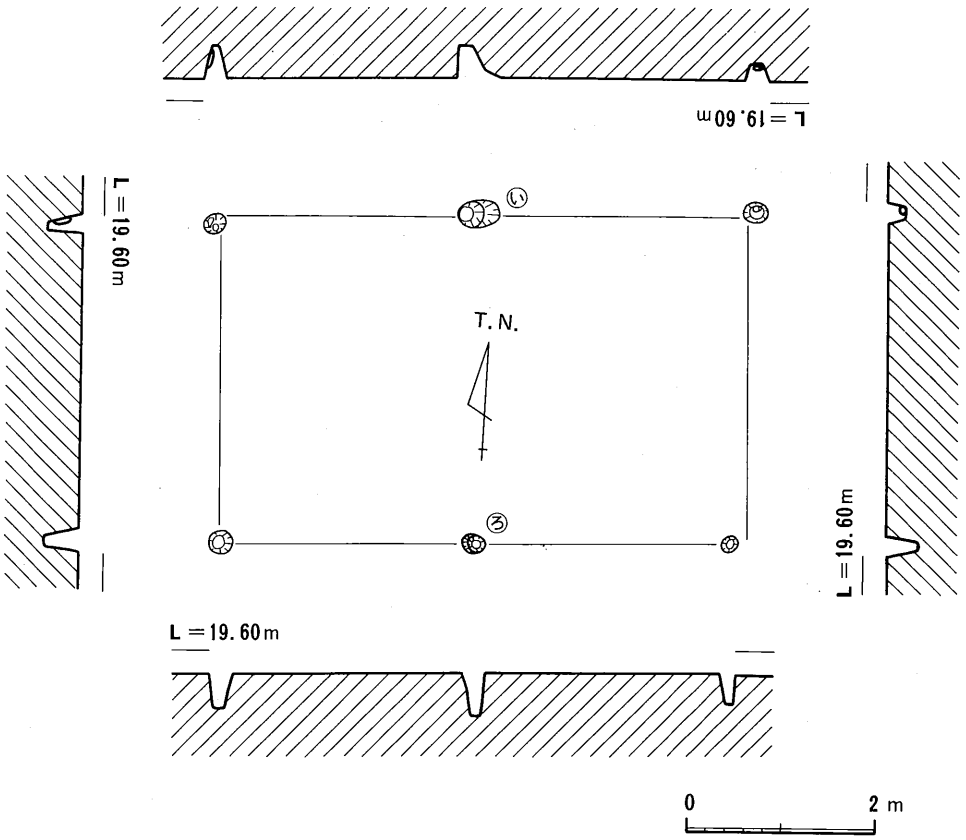
SB44

SB44は、梁間１間×桁行２間（339×554cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅26.3cmを計り、柱間は、梁間で平均長339cm、桁行で平均長277cmを計る。主軸は、真北から3.8°西偏する。



第110図　ＳＢ44出土遺物実測図

507・508はSB44を構成する柱穴から出土したもの（柱穴㋑出土遺物507、柱穴㋩出土遺物508）である。507は土師器の坏である。底部調整は不明である。体部は直線的に外上方に延びるものである。508は土師器の椀である。底部に断面三角形状の高台が付くものである。体部下半に屈曲部が認められる。広義の瓦質土器か。

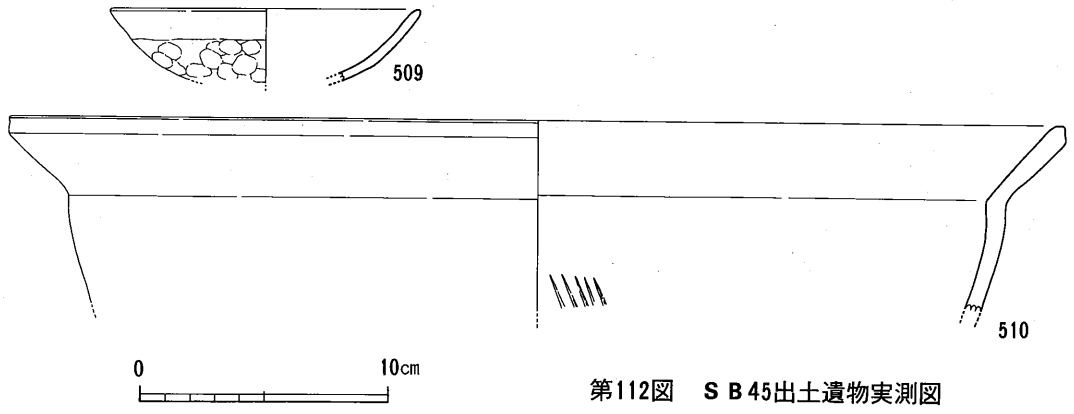


第111図　ＳＢ44平・断面図

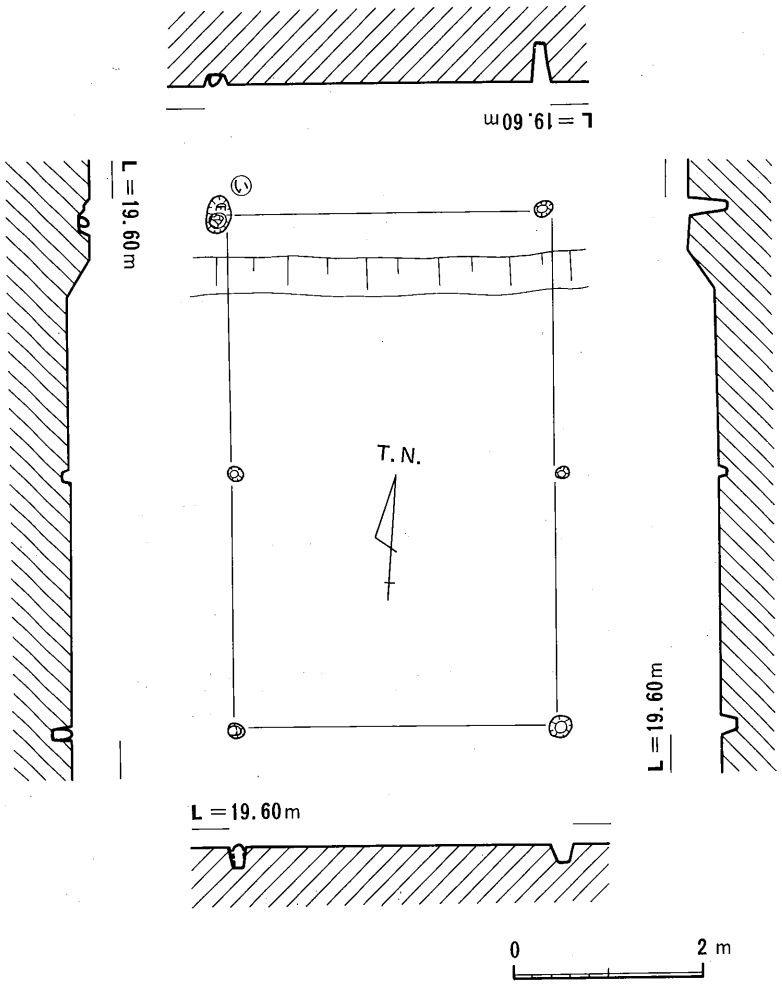
SB45

SB45は、梁間1間×桁行2間（342×541cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅19.7cmを計り、柱間は、梁間で平均長342cm、桁行で平均長270.5cmを計る。主軸は、真北から3.8°西偏する。

509・510はSB45を構成する柱穴より出土したもの（柱穴㋑出土遺物509・510）である。509は土師器の椀である。体部は内彎気味に外上方に延び、体部外面下半には指頭痕が顕著に施されている。510は土師質土器の土鍋である。口縁部が外方に屈曲する。



第112図　ＳＢ45出土遺物実測図



第113図　ＳＢ45平・断面図

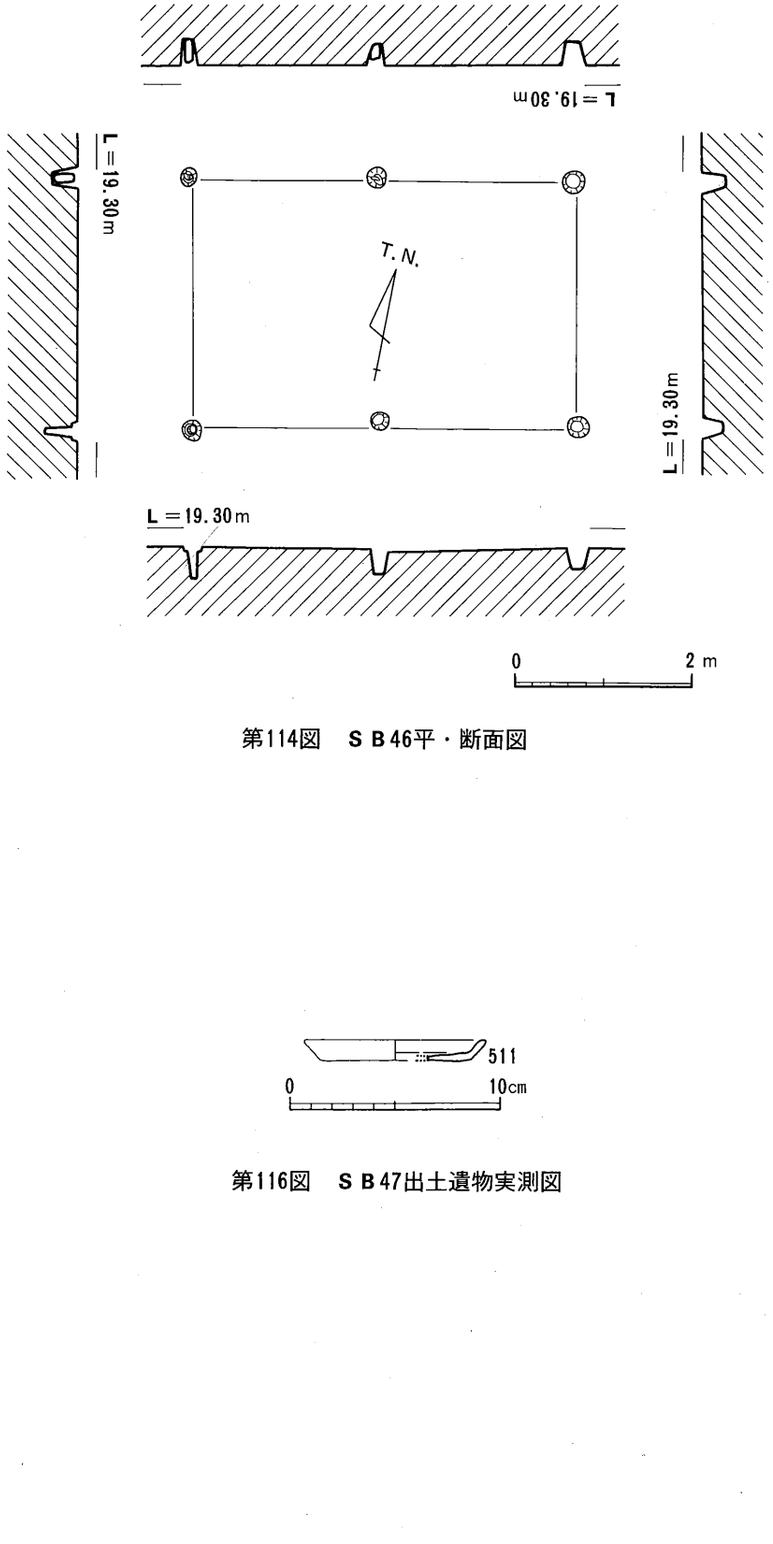
SB46

SB46は、梁間1間×桁行2間（281×435cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅21.0cmを計り、柱間は、梁間で平均長281cm、桁行で平均長217.5cmを計る。主軸は、真北から11.8°西偏する。

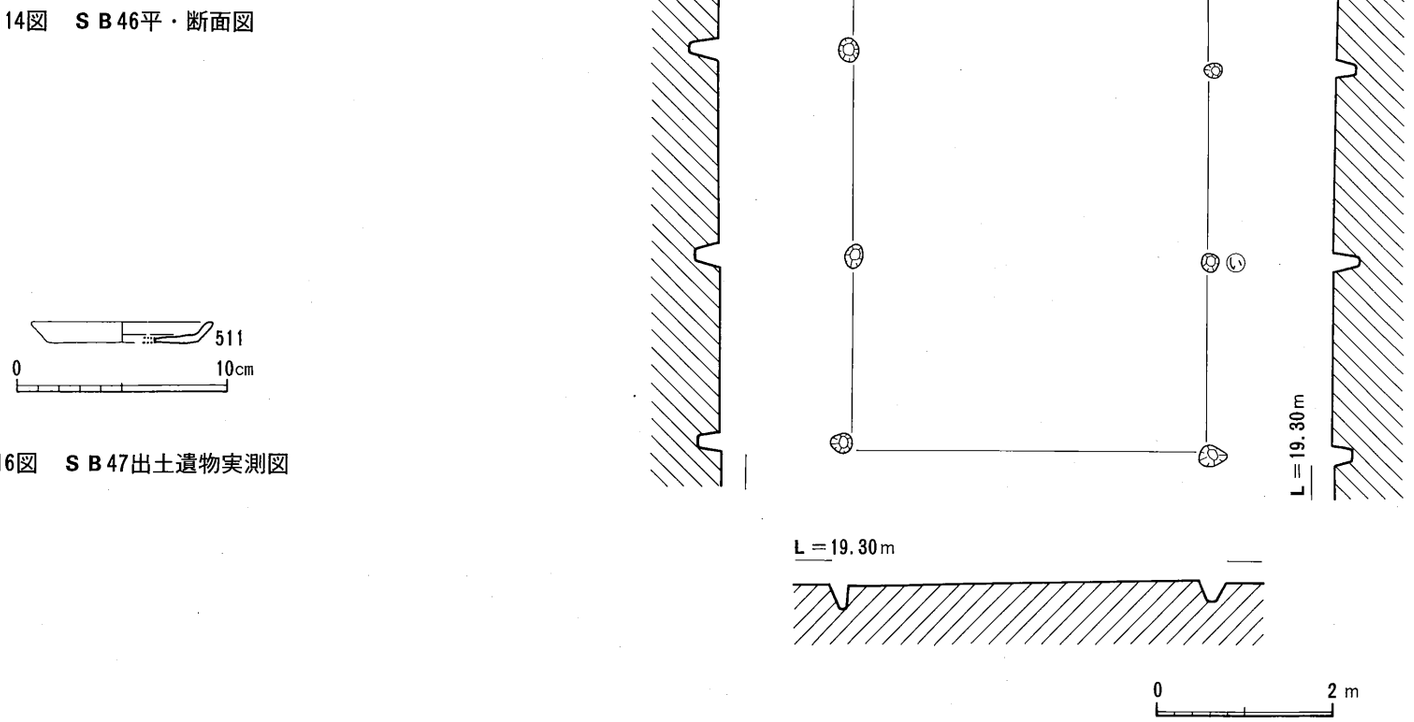
SB47

SB47は、梁間１間×桁行５間（402×1106cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅21.3cmを計り、柱間は、梁間で平均長402cm、桁行で平均長221.2cmを計る。主軸は、真北から5.6°西偏する。大型の建物である。

511はSB47を構成する柱穴より出土した土師器の小皿（柱穴㋑出土遺物511）である。底部はヘラ切りされている。



第114図　ＳＢ46平・断面図



第115図　ＳＢ47平・断面図

第116図　ＳＢ47出土遺物実測図

SB48

SB48は、梁間1間×桁行3間（288×469cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅21.5cmを計り、柱間は、梁間で平均長288cm、桁行で平均長156.3cmを計る。主軸は、真北から6.0°西偏する。

SB49

SB49は、梁間2間×桁行2間（360×420cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅16.4cmを計り、柱間は、梁間で平均長180cm、桁行で平均長210cmを計る。主軸は、真北から4.6°西偏する。

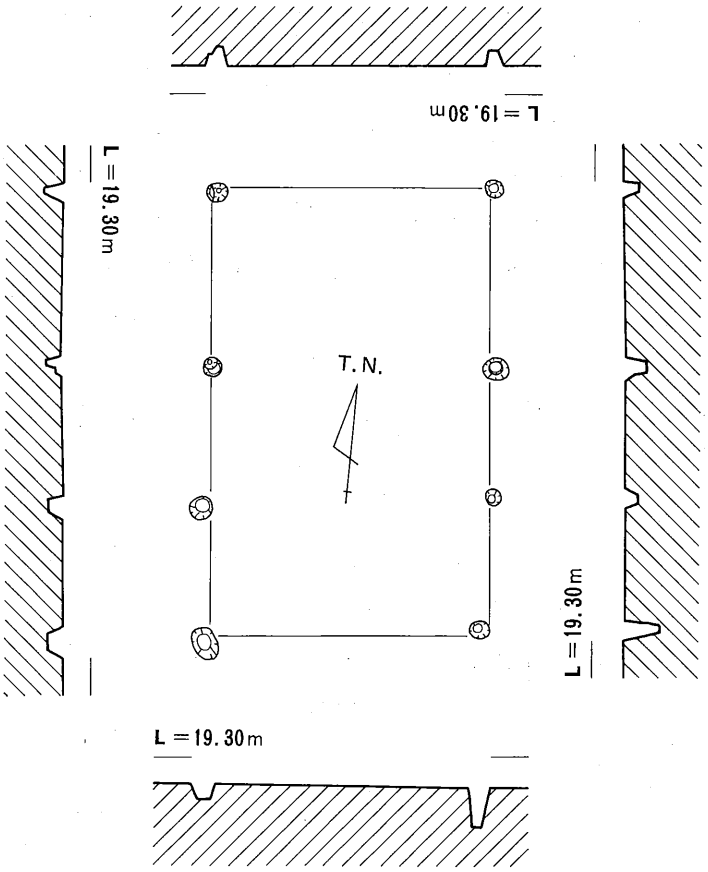
SB50

SB50は、梁間2間×桁行2間（411×404cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅26.6cmを計り、柱間は、梁間で平均長205.5cm、桁行で平均長202cmを計る。主軸は、真北から11.9°西偏する。中央部に間仕切りの柱穴が認められる。

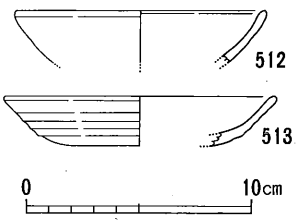
512・513はSB50を構成する柱穴から出土したもの（柱穴㋑出土遺物512・513）である。512は土師器の椀である。体部はやや内彎気味に外上方に延び、硬質に作られている。513は土師器の坏の可能性がある。体部と底部の境があまり無い。

SB51

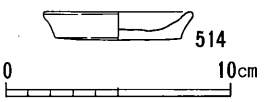
SB51は、梁間1間×桁行2間（402×530cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅43cmを計り、柱間は、梁間で平均長402cm、桁行で平均長265cmを計る。主軸は、真北から12°西偏する。



第117図　ＳＢ48平・断面図



第118図　ＳＢ50出土遺物実測図



第119図　ＳＢ51出土遺物実測図

514はSB51を構成する柱穴から出土した土師器の小皿（柱穴㈥出土遺物514）である。底部はヘラ切りされており、体部は直線的に外上方に延びる。

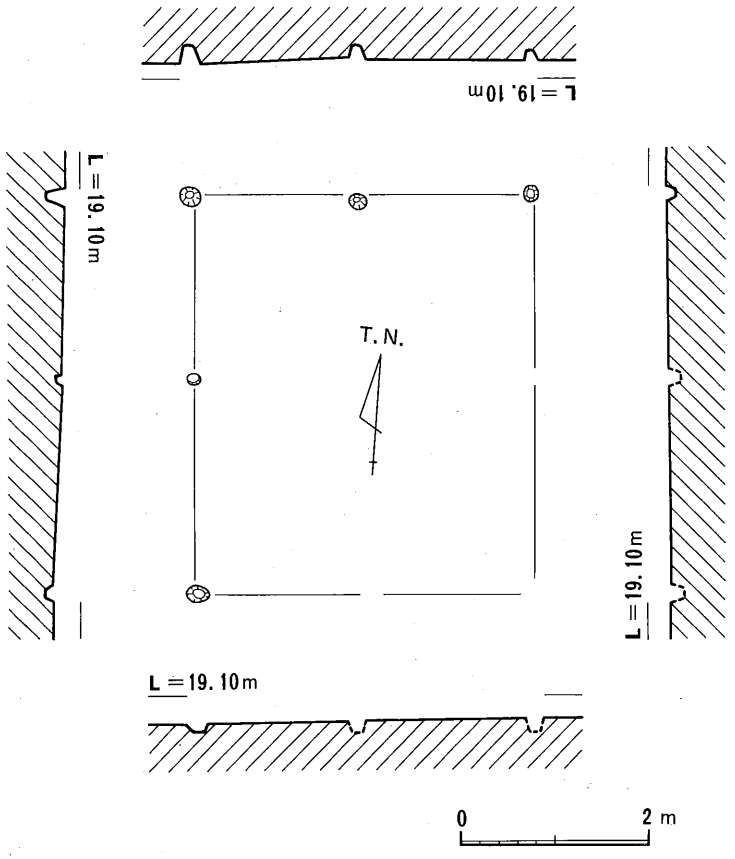
SB52

SB52は、梁間（3）間×桁行（4）間［(628) × (750) cm］の建物遺構である。柱穴は、平均幅（25.4cm）を計り、柱間は、梁間で平均長（208.7）cm、桁行で平均長（208）cmを計る。主軸は、真北から8.4°西偏する。北東部が調査区外に延びており、全容は不明である。

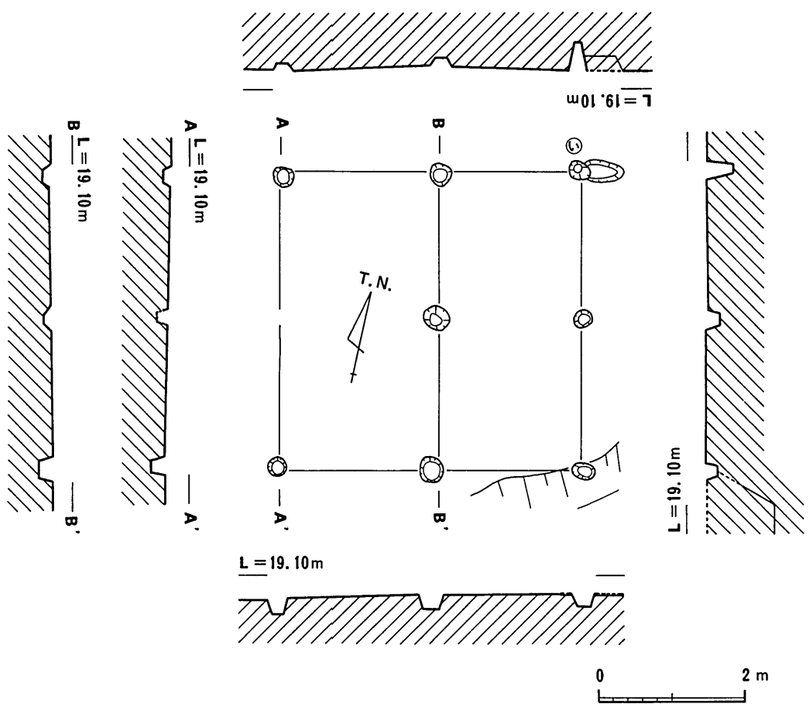
SB53

SB53は、梁間2間×桁行5間（440×1036cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅30.2cmを計り、柱間は、梁間で平均長220cm、桁行で平均長207.2cmを計る。主軸は、真北から4.8°西偏する。東西と南に庇が付いている。北西部が調査区外に延びており、全容は不明である。

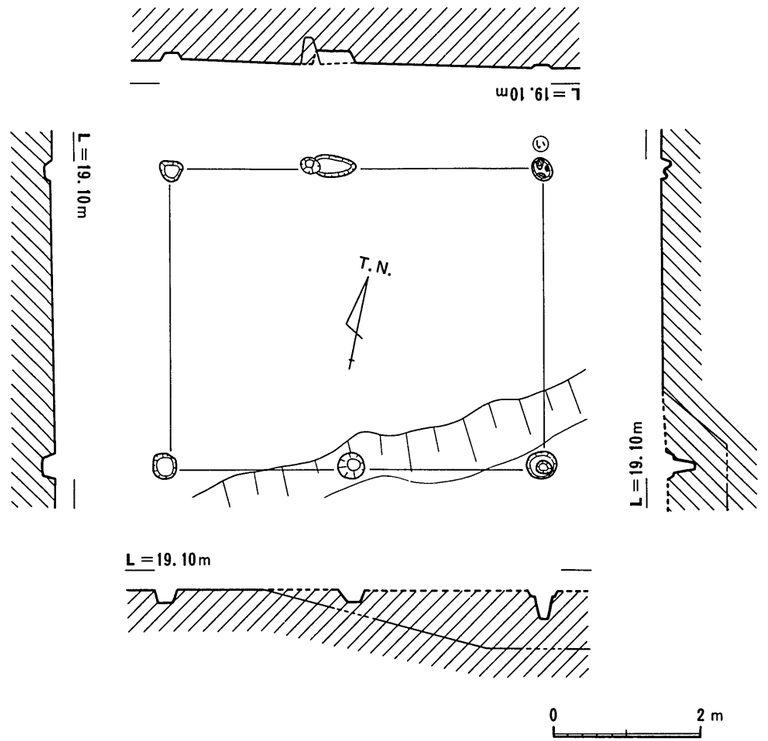
515～518はSB53を構成する柱穴から出土したもの（柱穴㈥出土遺物515・516・518、柱穴㈦出土遺物517）である。515は土師器の坏である。底部はヘラ切りされており、体部は直線的に延びる。516は土師器の坏である。底部はヘラ切りされており、やや内彎気味の体部を持つ。517は黒色土器A類椀の底部である。底部に外方に踏張る高台を持つ。体部内外面にヘラ磨きが顕著に施されている。518は土師質土器の土鍋である。口縁部が外方に屈曲する。



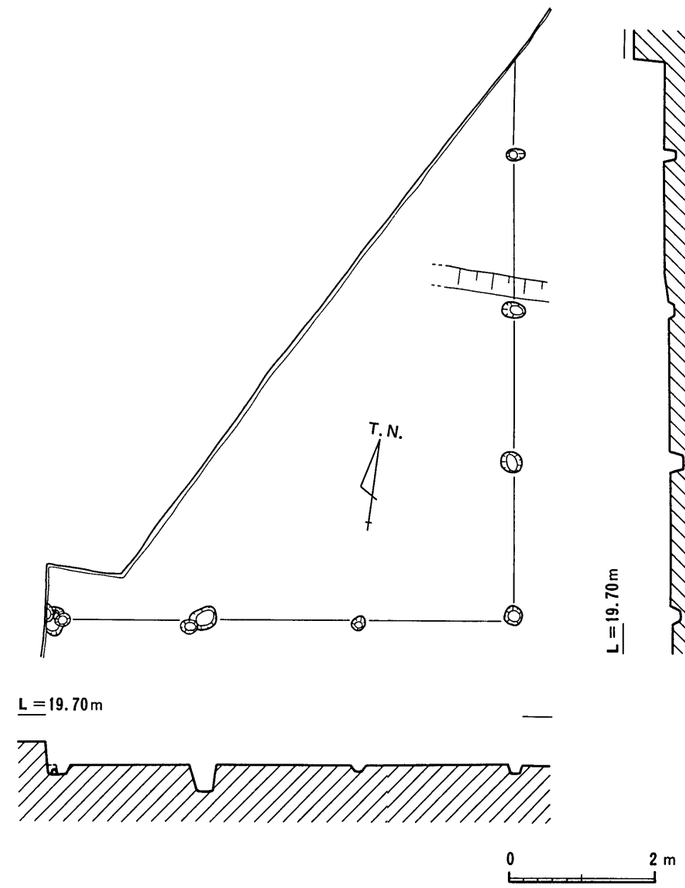
第120図　ＳＢ49平・断面図



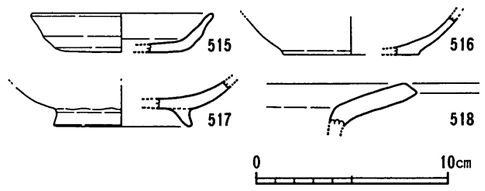
第121図　ＳＢ50平・断面図



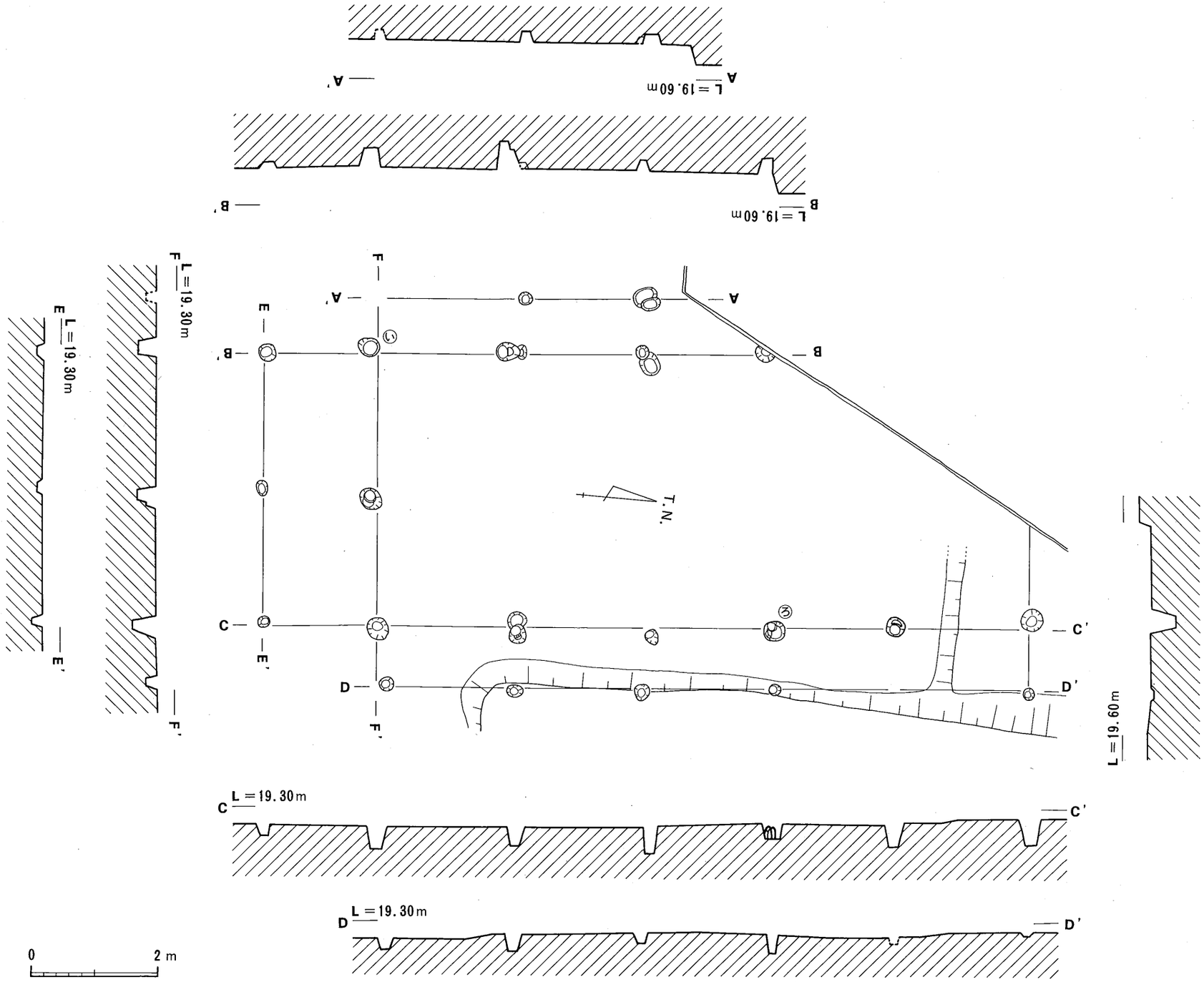
第122図　ＳＢ51平・断面図



第123図　ＳＢ52平・断面図



第124図　ＳＢ53出土遺物実測図

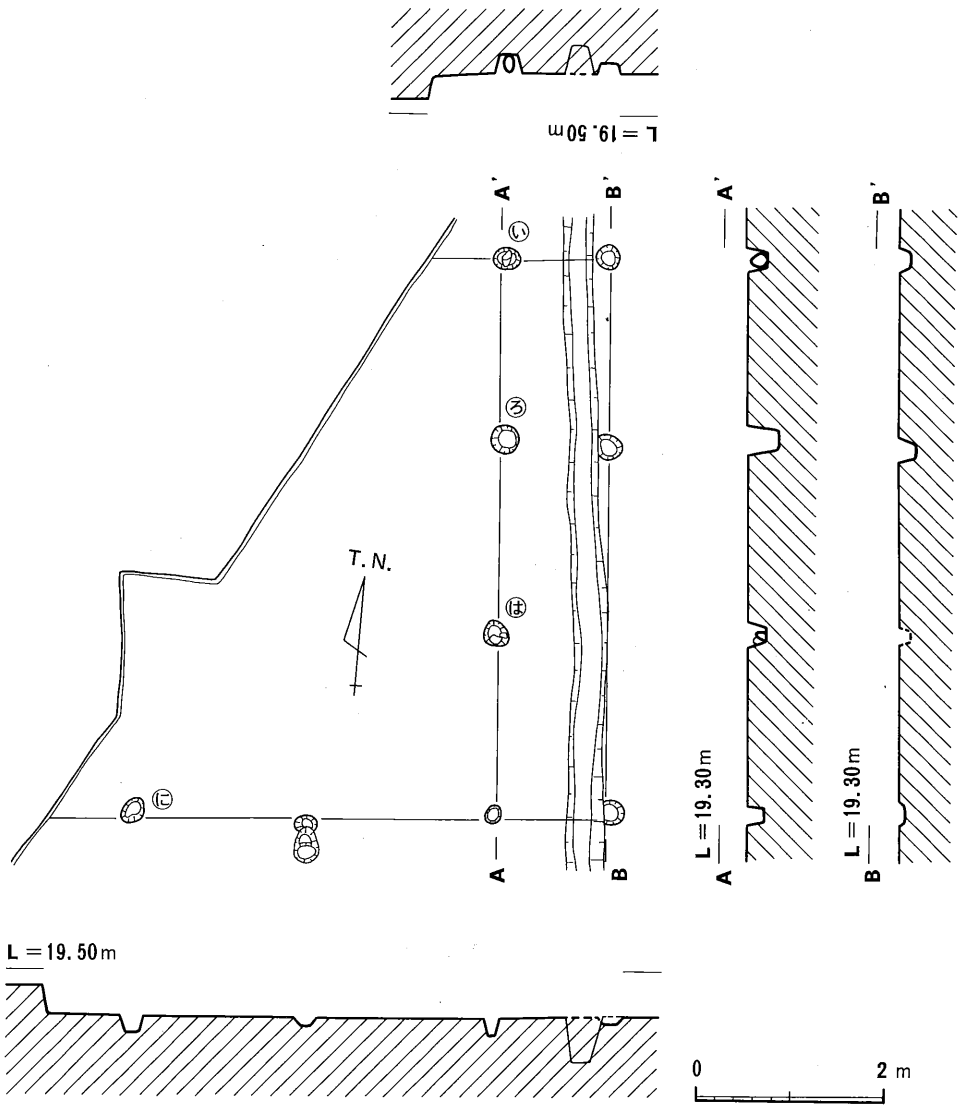


第125図　ＳＢ53平・断面図

SB54

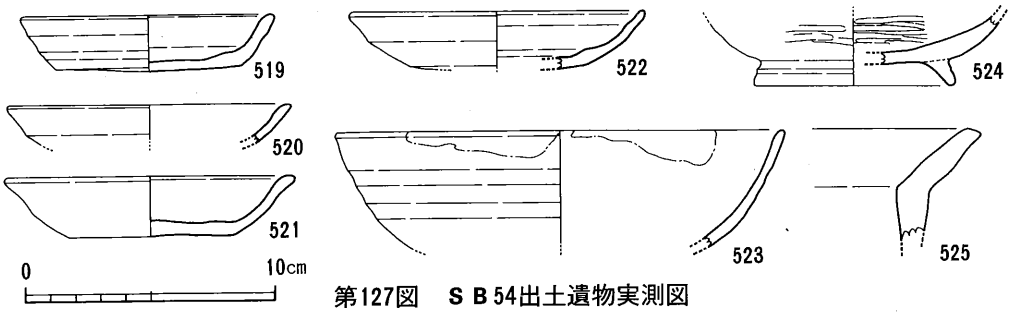
SB54は、梁間３間×桁行（３）間［586×（472）cm］の建物遺構である。柱穴は、平均幅（24.7）cmを計り、柱間は、梁間で平均長195.3cm、桁行で平均長（192）cmを計る。主軸は、真北から4.8°西偏する。東側に庇が付いている。西側が調査区外に延びており、全容は不明である。

519～525はSB54を構成する柱穴から出土したもの（柱穴㋑出土遺物521、柱穴㋺出土遺物519・520・525、柱穴㋩出土遺物522・524、柱穴㋭出土遺物523）である。519～522はやや小型の土師器の坏である。口径が10～12cmのもので底部はヘラ切りされている。523・524は黒色土器の椀である。523は口径がやや大きく18cmのもので体部は内彎気味に外上方に延びる。524は黒色土器A類で、体部外面には横ナデが顕著に見られる。底部に外方に踏張る高台を持つもので体部は内



第126図　ＳＢ54平・断面図

彎気味に外上方に延びる。525は土師質土器の土鍋である。口縁部が外方に屈曲する。



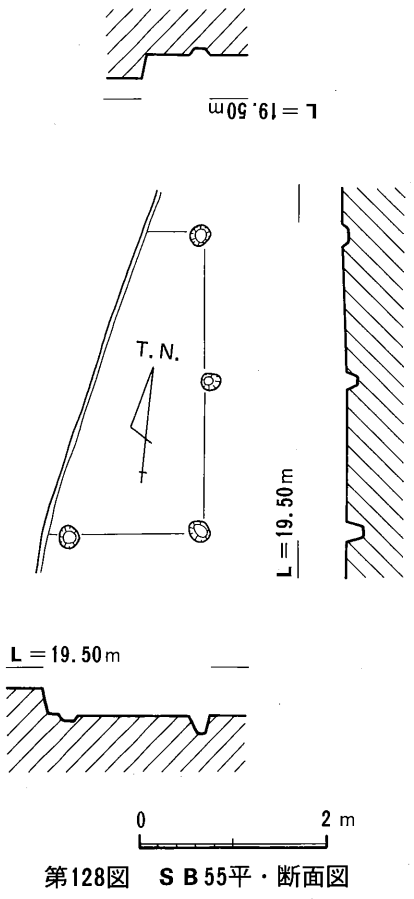
第127図　ＳＢ54出土遺物実測図

SB55

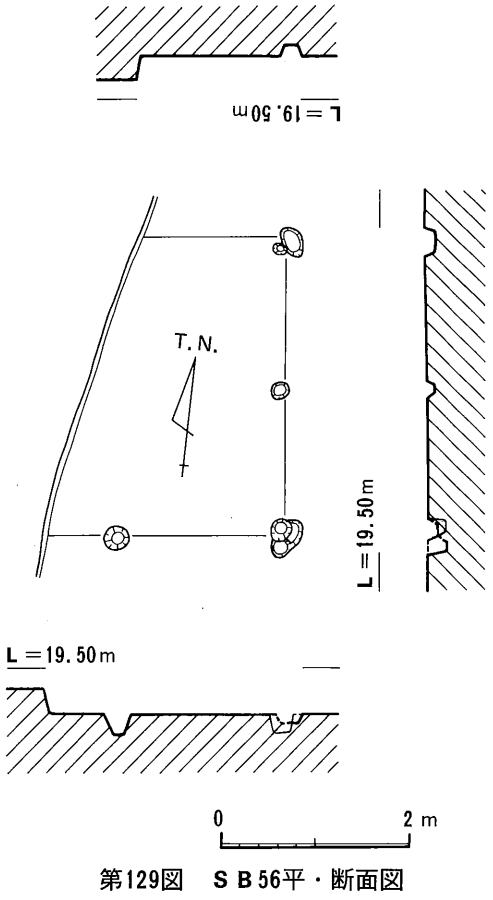
SB55は、梁間２間×桁行（２）間［312×（160）cm］の建物遺構である。柱穴は、平均幅（21.5）cmを計り、柱間は、梁間で平均長156cm、桁行で平均長（140）cmを計る。主軸は、真北から6.7°西偏する。西側が調査区外に延びており、全容は不明である。

SB56

SB56は、梁間２間×桁行（２）間［320×（256）cm］の建物遺構である。柱穴は、平均幅（25）cmを計り、柱間は、梁間で平均長160cm、桁行で平均長（170）cmを計る。主軸は、真北から6.5°西偏する。西側が調査区外に延びており、全容は不明である。



第128図　ＳＢ55平・断面図



第129図　ＳＢ56平・断面図

SB57

SB57は、梁間（２）間×桁行４間［(276) ×564cm］の建物遺構である。柱穴は、平均幅（31）cmを計り、柱間は、梁間で平均長（168）cm、桁行で平均長141cmを計る。主軸は、真北から6.4°西偏する。南１間に間仕切りの柱穴が認められる。西側が調査区外に延びており、全容は不明である。

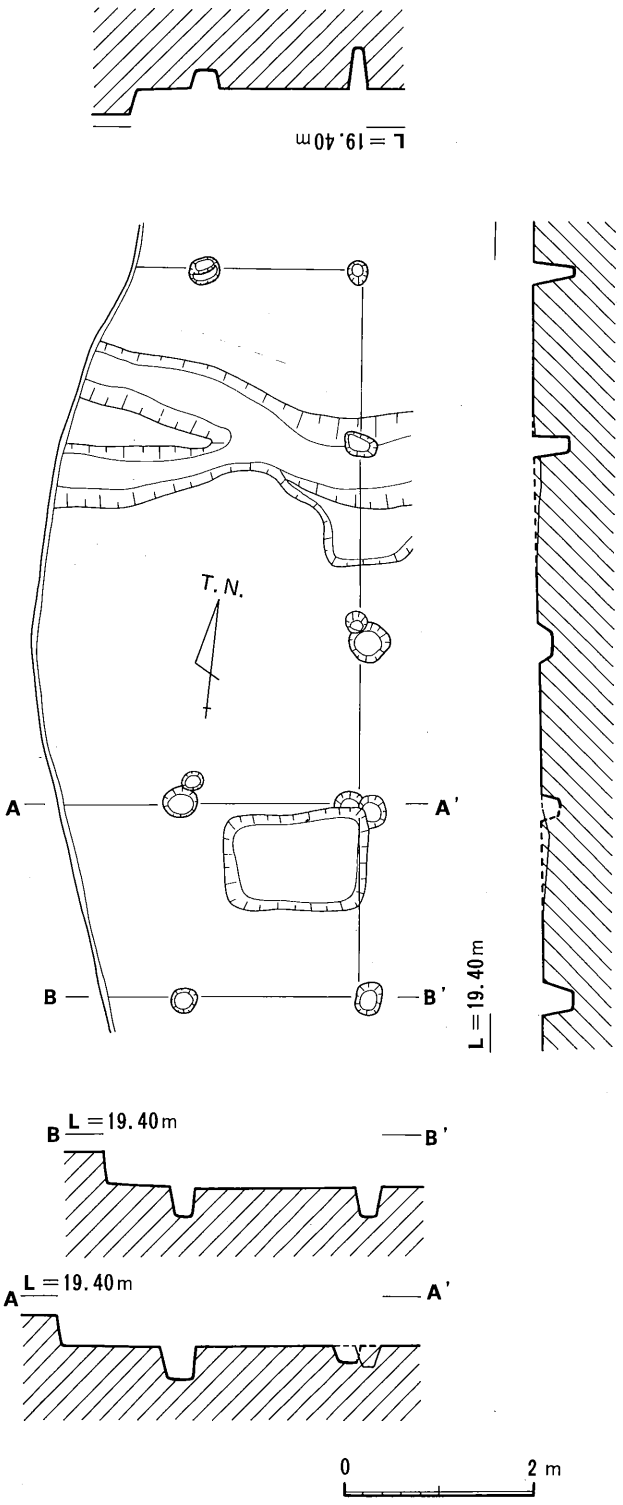
SB58

SB58は、梁間２間×桁行２間（354×364cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅27.8cmを計り、柱間は、梁間で平均長177cm、桁行で平均長182cmを計る。主軸は、真北から10.6°西偏する。

SB59

SB59は、梁間２間×桁行２間（354×497cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅23.1cmを計り、柱間は、梁間で平均長177cm、桁行で平均長248.5cmを計る。主軸は、真北から0.5°西偏する。

526はSB59を構成する柱穴から出土した土師器の椀（柱穴㋑出土遺物526）である。底部にしっかりした高台を持つ。

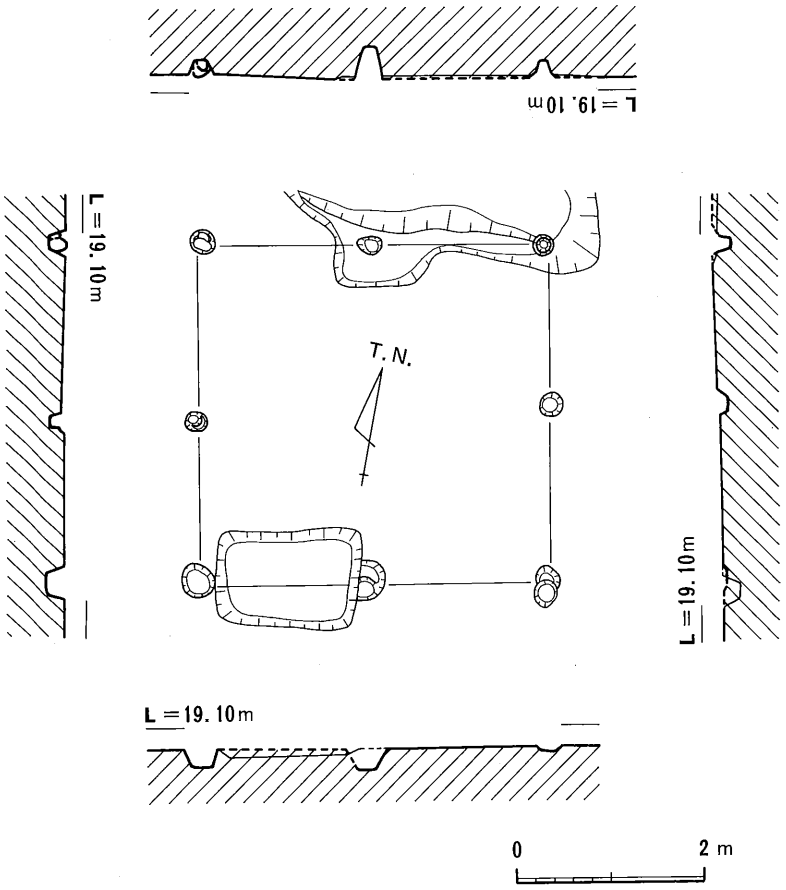


第130図　ＳＢ57平・断面図

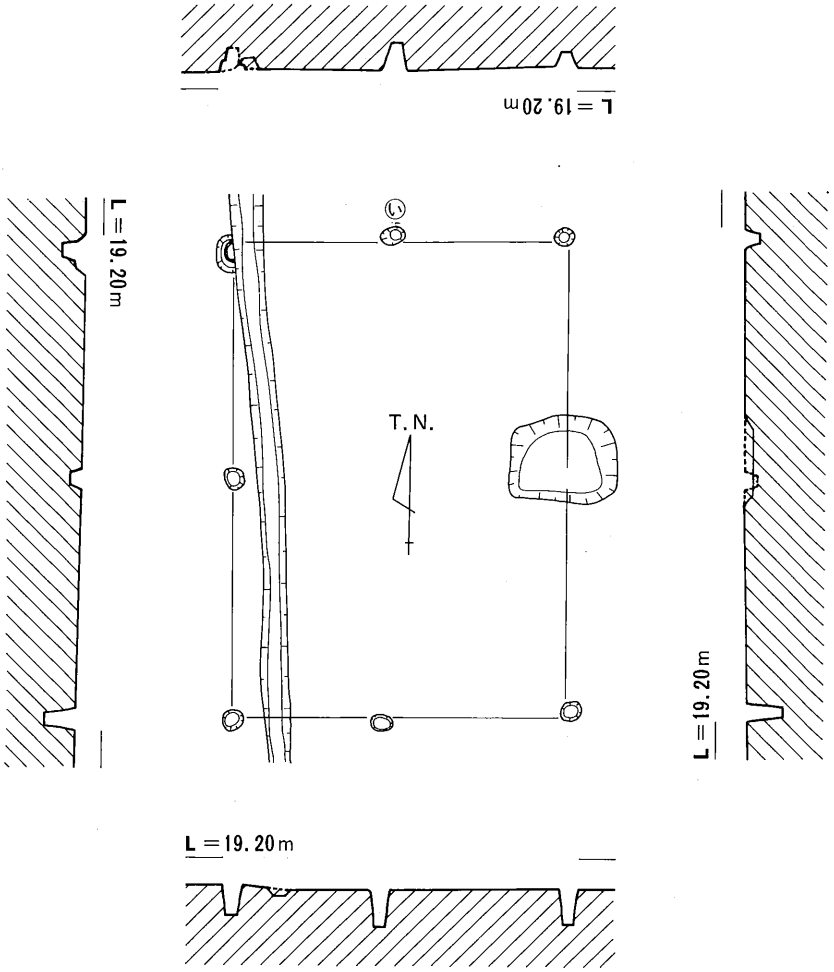
SB60

SB60は、梁間2間×桁行3間（424×592cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅20.4cmを計り、柱間は、梁間で平均長212cm、桁行で平均長197.3cmを計る。主軸は、真北から0.4°西偏する。東西にやや柱間の狭い庇が付いている。

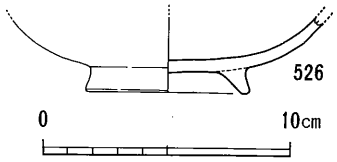
527～531はSB60を構成する柱穴から出土したもの（柱穴㋑出土遺物527、柱穴㋒出土遺物528～530、柱穴㋓出土遺物531）である。527・528は土師器の小皿である。底部はヘラ切りされている。528は体部がやや細身に作られており、外反気味に外上方に延びる。529～531は黒色土器である。530は体部がやや内彎気味に延びるもので、口縁端部はやや外方に屈曲させる。531は底部にしっかりした高台が付く黒色土器A類である。体部内外面にヘラ磨きが顕著に施されている。



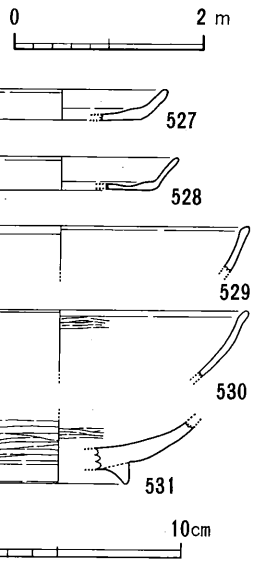
第131図　ＳＢ58平・断面図



第132図　ＳＢ59平・断面図



第133図　ＳＢ59出土遺物実測図



第134図　ＳＢ60出土遺物実測図

第135図　ＳＢ60平・断面図

まとめ

八反地地区では、掘立柱建物は主として調査区南半で検出された。主軸をほぼ南北に取るものであるが建物の重なり具合や柱穴出土遺物、主軸の方向によって細かく見れば、数時期の立て替えがあるものと思われる。

大別して掘立柱建物には古代末（10世紀後半～11世紀頃）のものと中世（13世紀後半～末頃）のものがある。古代末の建物は調査区南西隅で検出された一群で、南北長の両庇付の掘立柱建物を主屋として2重の柵列・溝等で区画されるものである。おそらく主体部は調査区西に延びると考えられる。中世の掘立柱建物はSD46・47・50・51・54などで区画されたものと区画溝が出現する前後の段階のものに分けられるようである。

第1時期目は区画溝が出現する前段階で1×4間の両庇の建物が主屋としてあり、それに付随するように2棟の建物が存在するようである。時期は、掘立柱建物を構成する柱穴から出土している畿内産瓦器および輸入陶磁器より13世紀後半頃であると思われる。第2時期目は1×3間の掘立柱建物に柵列を伴うものを主体として区画溝が伴う。第3時期目は2×5間の両庇付きの建物を主屋として3棟の建物が付随している。

(2) 溝状遺構

古代末～中世にかけての溝状遺構は八反地地区で12条検出された。主として調査区南半で検出されたもので、大きく分けて2時期あるものと思われる。ひとつは古代末～中世初にかけてのものである。調査区南西部で検出されたものでほぼ南北に流路を取り、その時期の掘立柱建物の東側を画する溝と思われる。溝の天幅がやや狭いが深さがあり、しっかりした掘り方を持つものである。もうひとつは中世（13世紀後半～末）頃のもので掘立柱建物を取り囲むように検出されたものである。掘立柱建物に立て替えはあるが溝はあまり変化がないようである。

SD47

SD47は掘立柱建物群を東側で画する溝で、天幅1.05mの割に深さが0.07mと浅いものである。この溝はほぼ南北に流路を取るものであるが中央付近で東に屈曲し北半はやや西に流路を変えるようである。この溝の底にくっついて多量の遺物が出土した。

532～561は土師器の小皿である。底部調整でヘラ切り、糸切りと2種類に分けられる。全体の総数から見ると糸切りに比べてヘラ切りの方が多く、約3倍になると思われる。底部ヘラ切りのなかには器高の深いものと浅いものがあり、体部の形態でもやや内彎するものと直線的なものと外反するものの3タイプに分けられる。このような細分は底部調整が糸切りである小皿についても言え、底部調整に関係なく体部の形態はほぼ3タイプになるようである。底部切り離しがヘラ切りのものは532～555で、糸切りのものが556～561までである。

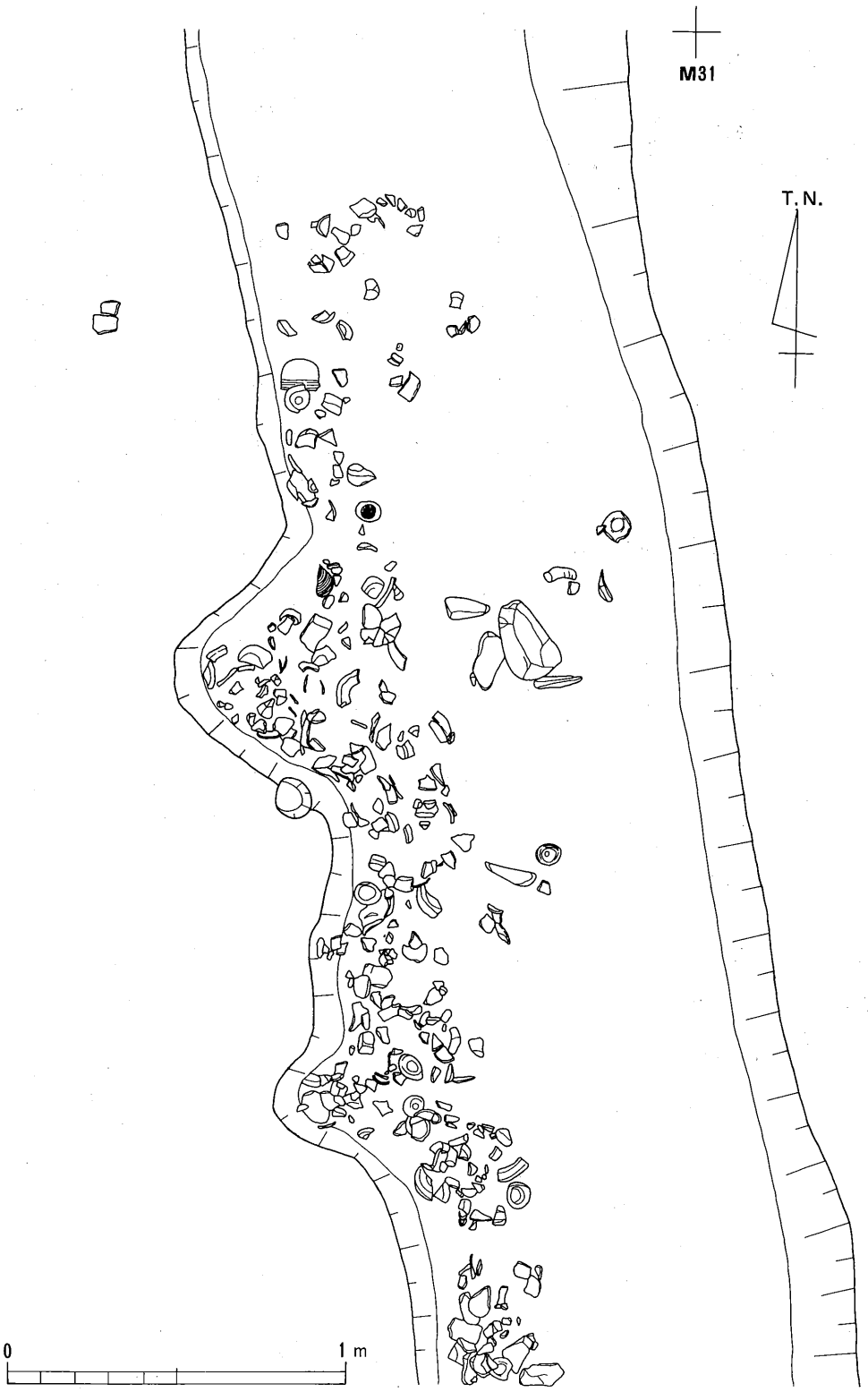
562は円盤状高台を持つ小型の小皿である。底部切り離し手法は糸切りで、体部は直線的に外上方に延びる。

563～575は土師器の坏である。底部切り離し手法で2種類に分けられる。563～572が糸切りで573～575がヘラ切りである。この土師器坏の底部切り離し手法による割合は土師器小皿とは逆にヘラ切りに比べて糸切りの方が多く約3倍くらいあるものと思われる。糸切り手法のものは底部と体部の境にきつい稜を持つもので、体部は外上方に直線的に延びるものが多いようである。底部ヘラ切り手法のものは体部と底部の境にきつい稜を残さず緩やかに底部から体部になるものである。

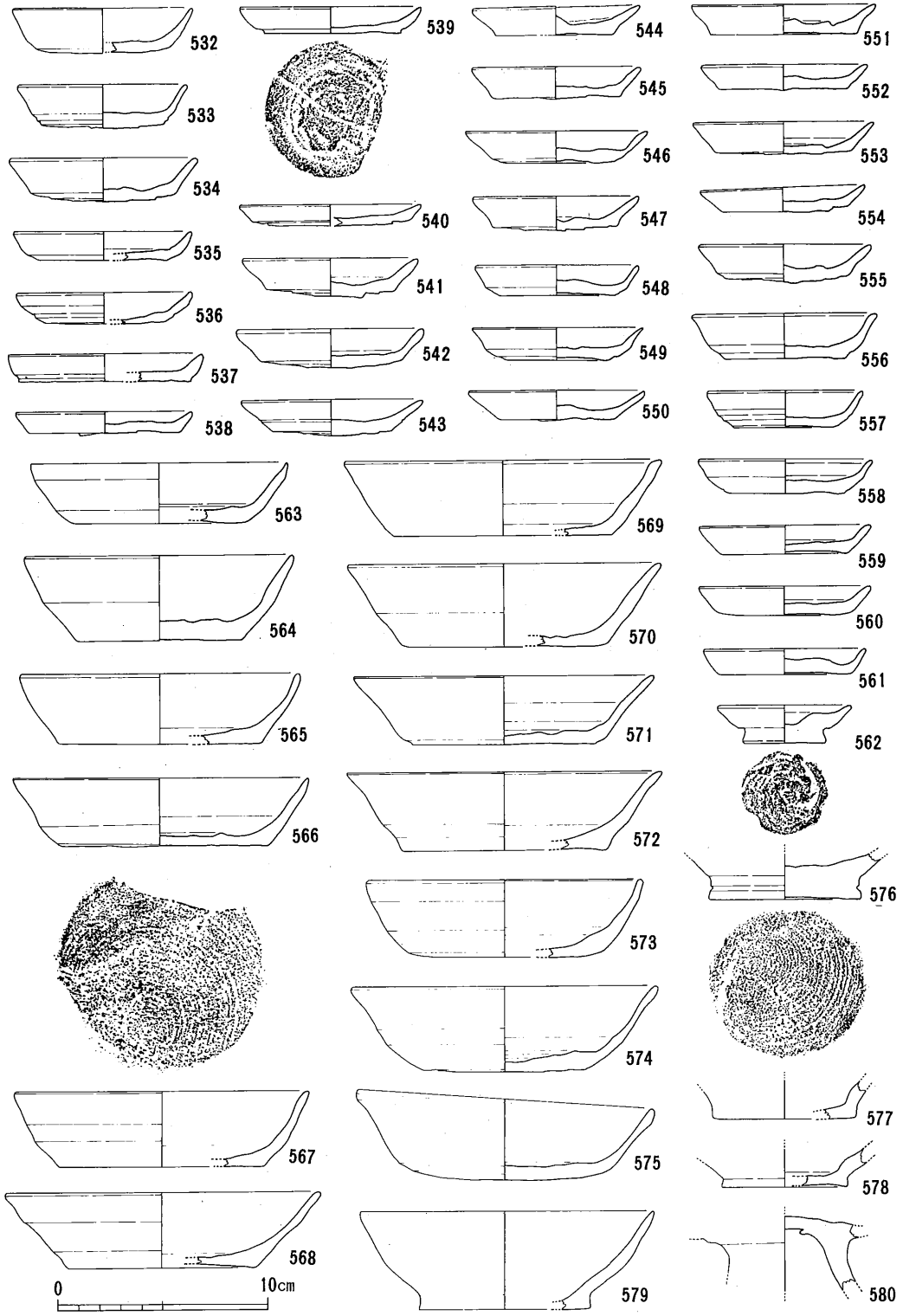
576～579は円盤状高台を持つもので全て底部は糸切りされており、体部はやや内彎気味に外上方に延びるようである。577・578は内底部に指ナデによる段を持つものである。579は内底部の段がやや退化したものと思われる。

580は土師器の小皿か坏に脚の付くものである。

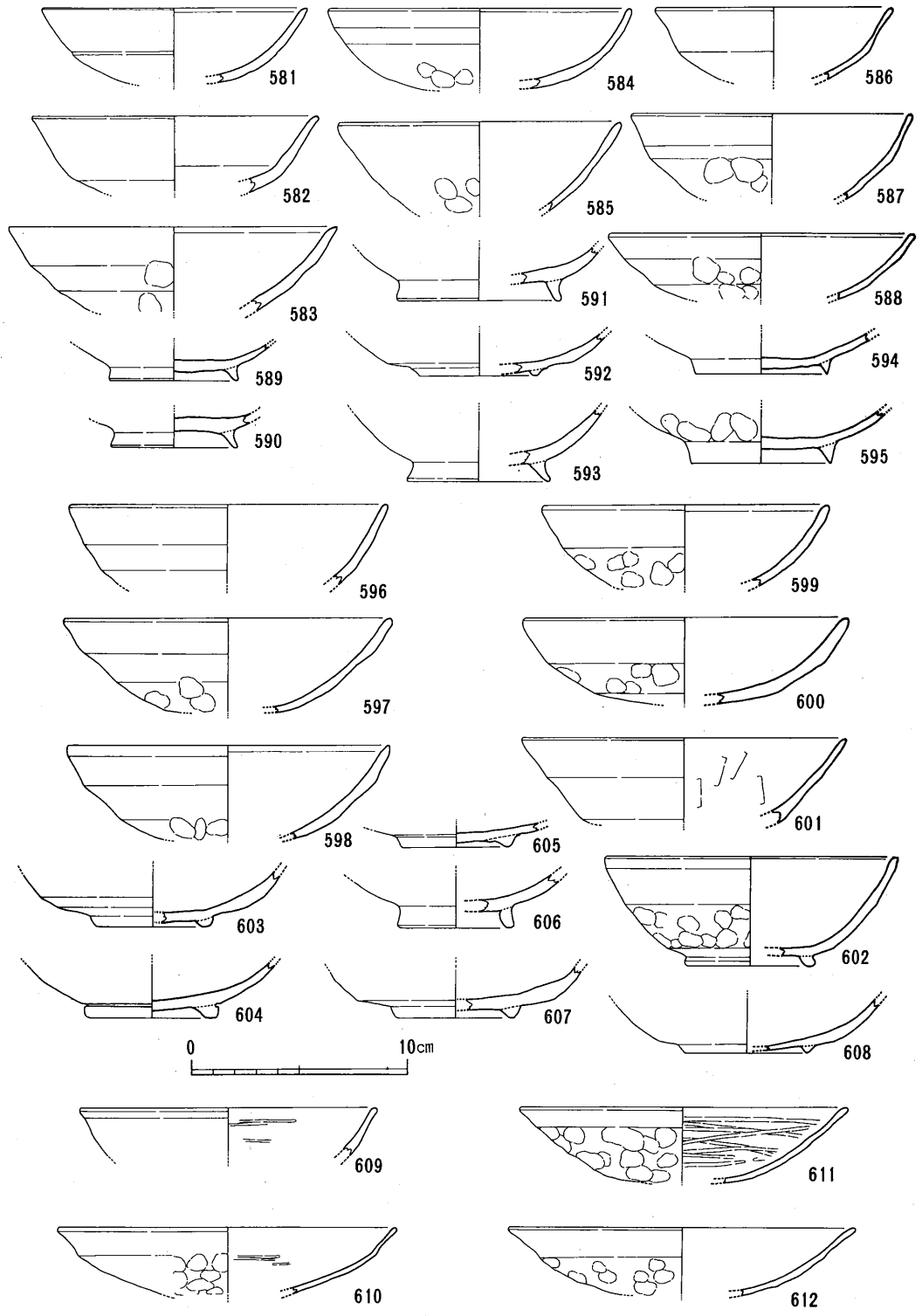
581～595は土師器の椀である。器壁がやや厚めに作られているものとやや薄めで硬質に作られているものの2種類ある。581～585はやや厚めの器壁を持つもので、体部はやや内彎気味に外上方に延びる。体部外面には部分的に指頭痕が施されているようである。口縁端部は丸くおさめられているものや尖り気味で小さく外反させるものがある。586・587は器壁が薄手でやや硬質に作



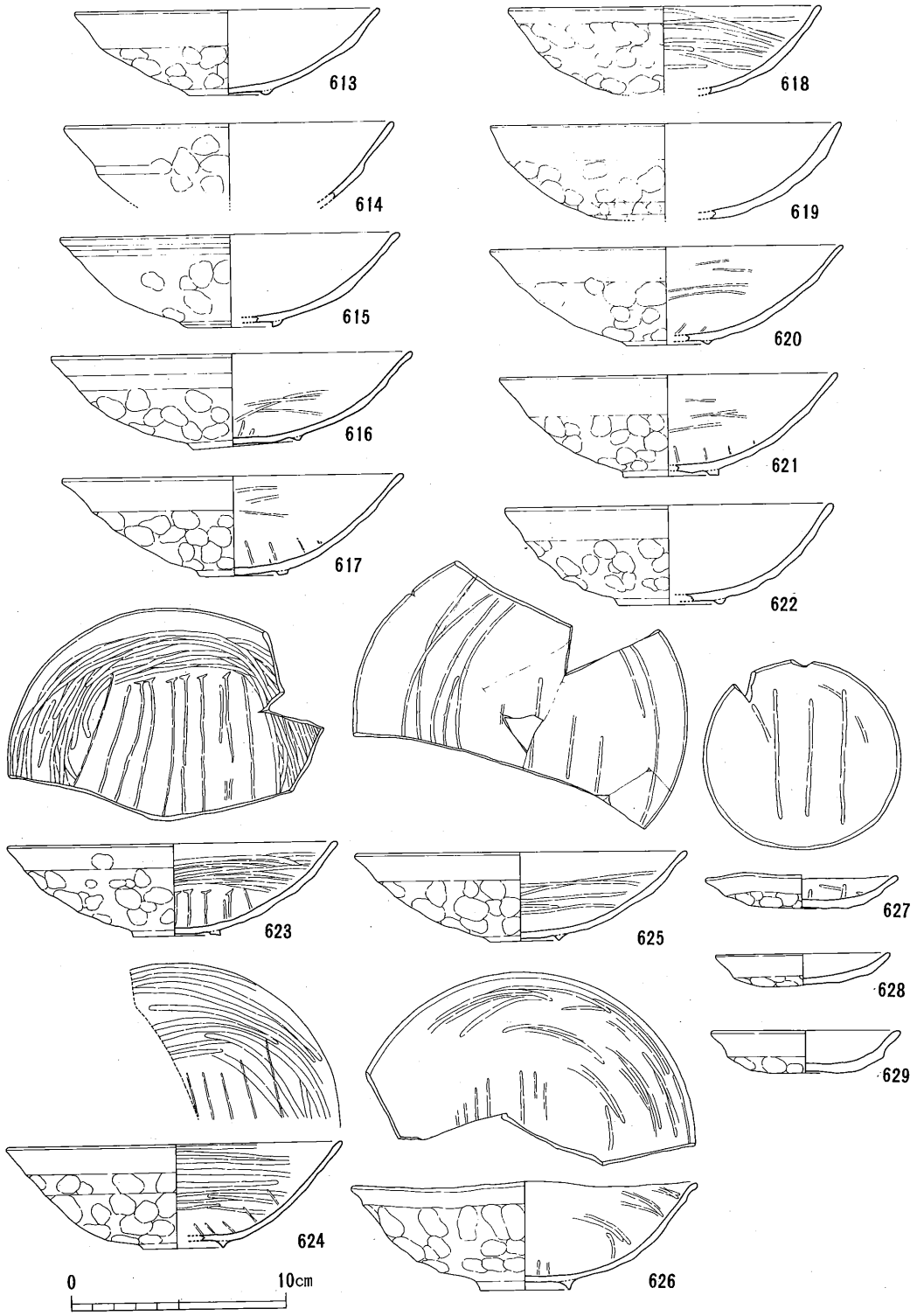
第136図　ＳＤ47平面図（土器集中箇所）



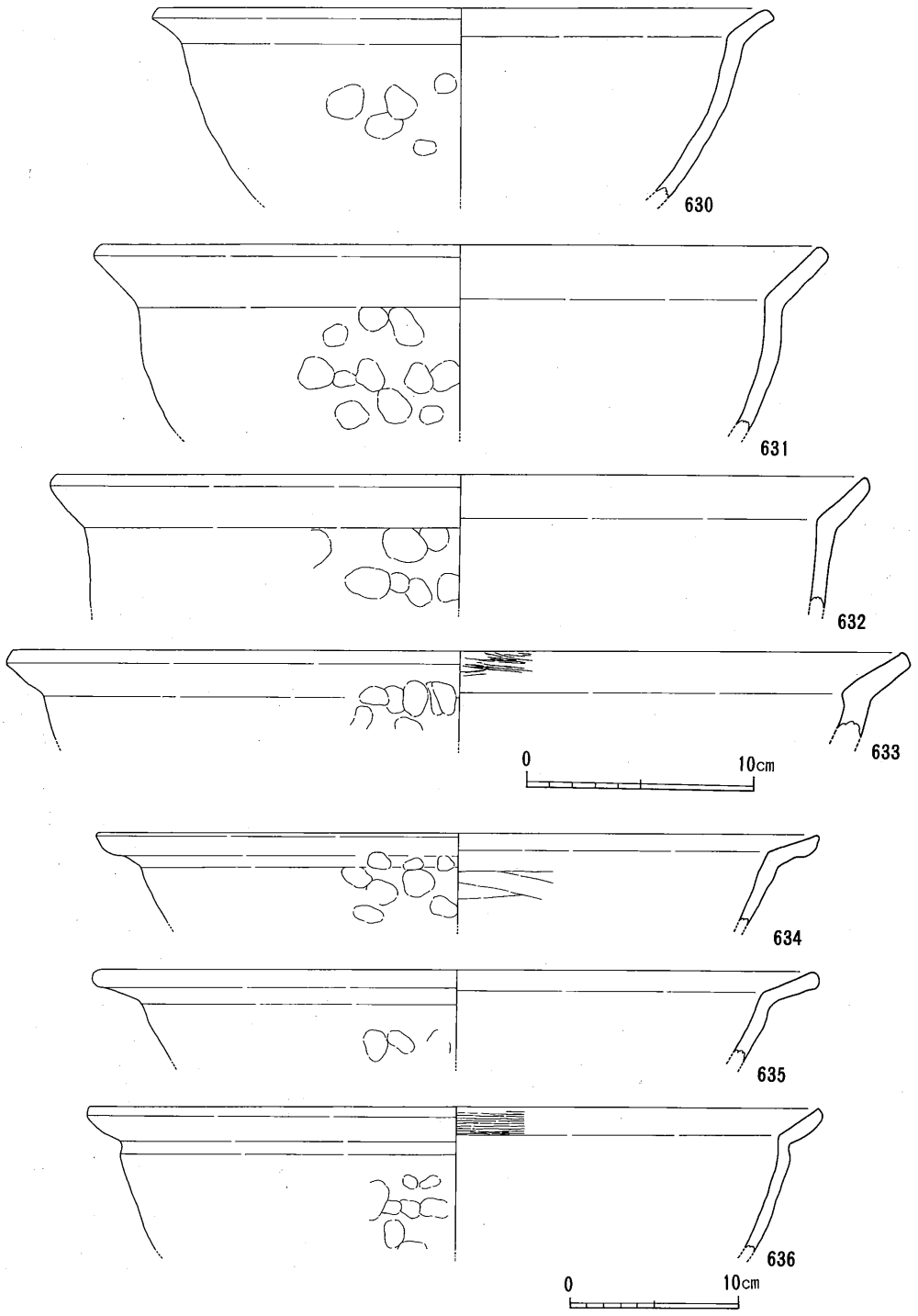
第137図　ＳＤ47出土遺物実測図①



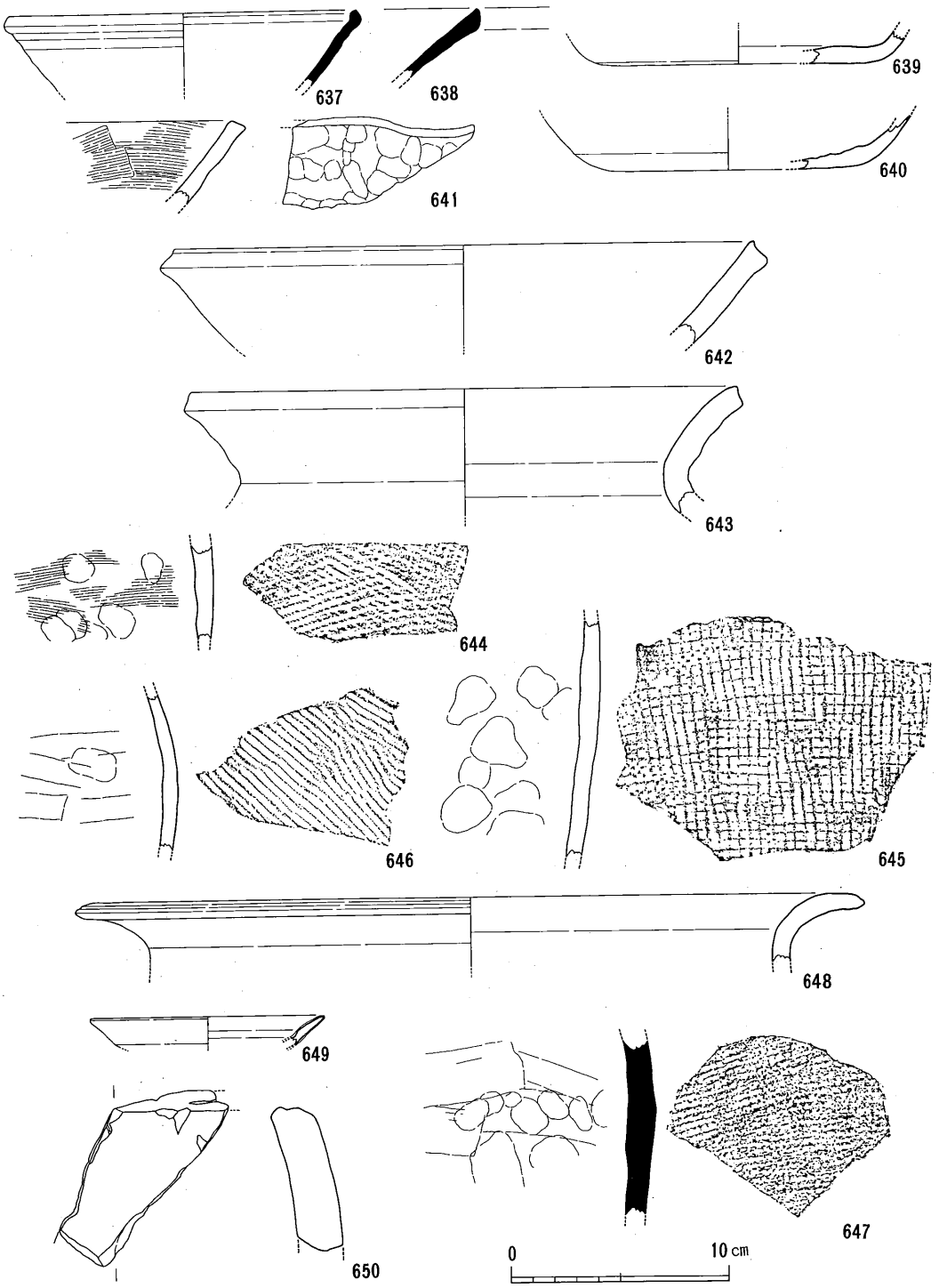
第138図　ＳＤ47出土遺物実測図②



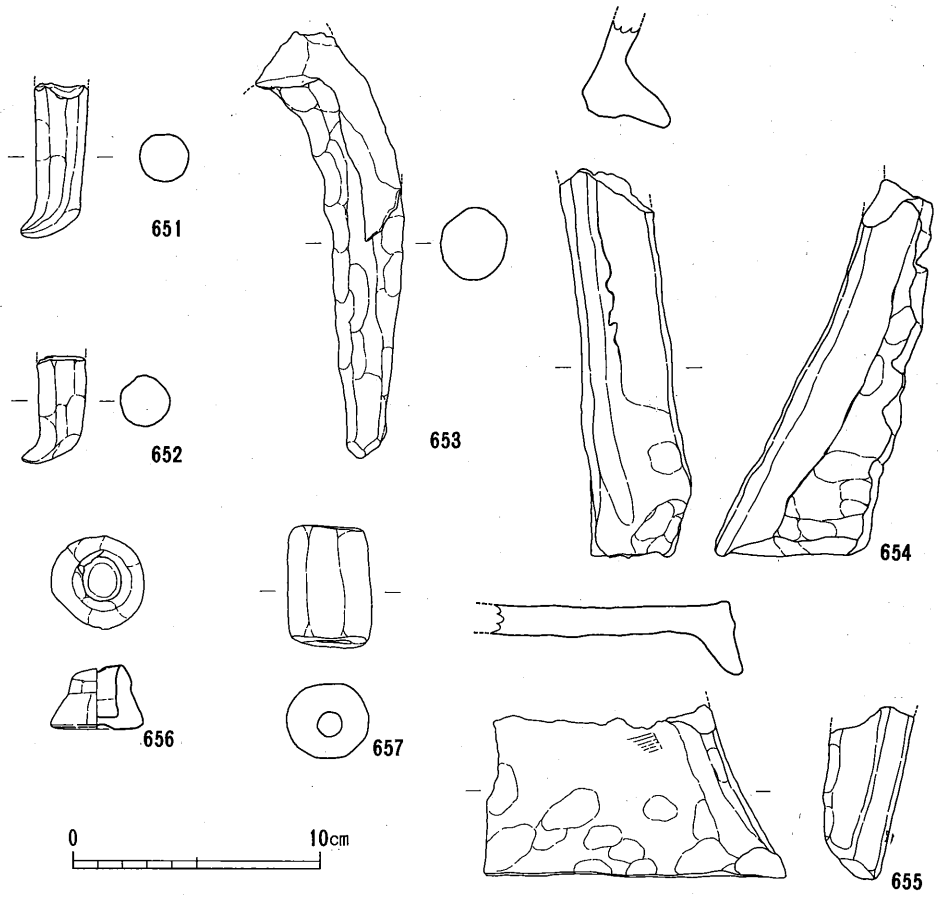
第139図　ＳＤ47出土遺物実測図③



第140図　ＳＤ47出土遺物実測図④



第141図　ＳＤ47出土遺物実測図⑤



第142図　ＳＤ47出土遺物実測図⑥

られているもので体部外面下半には指頭痕が顕著に見られる。この硬質に作られた土師器椀は所謂「早島式土器」と思われ、搬入品と考えられる。588は器壁が薄めで硬質に作られているが口径が大きく胎土が白灰色を呈していることなどから表面の炭素がのいた瓦器の可能性が考えられる。589～595は土師器椀の高台である。高台の形態は断面長方形状のものが外方にしっかり踏張るもの、断面三角形のもの、粘土紐を貼り付けただけのものなどの３種類に分けることができる。591の高台の形態は瓦質土器の形態に似ている。

596～608は瓦質土器である。器壁はやや厚めに作られており、体部はやや内彎気味に外上方に延び、口縁端部は丸くおさめられているものが多いようである。体部外面下半には指頭痕が顕著に見られる。高台は粘土紐を貼り付けただけのもので、半円形のものや分厚い長方形状のものなどがある。601は体部内面に板状工具による横方向のナデが施されている。

この瓦質土器は西村遺跡出土のものに似ており、おそらくそこからの搬入品であると考えられる。

609～629は畿内産の瓦器である。609～626は椀で体部外面には指頭痕が顕著に見られ、口縁部

外面には口縁部に沿って指ナデが施されている。体部内面には約10回程度の横方向のヘラ磨きが、見込み部分には平行ヘラ磨きが施されている。器高にはやや深いものと浅いものがあり、短期間ではあるが時期差ととらえられそうである。高台はかなり退化したものが多く断面長方形の低いものと断面三角形のものがある。前者は器高のやや高いものに多く、後者は器高の低いものに多い。

627～629は瓦器の小皿である。底部外面には指頭痕が顕著に見られ、口縁端部外面には口縁に沿って指ナデが施されている。内面見込み部分には平行ヘラ磨きが施されている。瓦器の時期は13世紀後半～末頃に比定されるものである。

630～636は土師質土器の土鍋である。体部はやや内彎気味で口縁は外方に屈曲するものである。体部外面には指頭痕が顕著に見られる。口縁部内面に刷毛目が施されているものもある。

637・638は東播系のこね鉢である。637は小型のもので直線的に外上方に延びる体部を持ち、口縁端部は内上方に短く折り曲げている。638は体部は直線的に外上方に延び口縁は内側を上方に摘み出すように終わらせている。時期は13世紀後半頃に比定される。

639・640は瓦質土器の鉢と思われる。炭素が外面にだけ付着している。底部には高台が付いていたと思われる痕跡があるが詳細は不明である。

641は瓦質土器のこね鉢である。体部は直線的に延び外側上面に面を持たせている。体部外面には指頭痕が顕著に見られ、内面には横方向の刷毛目が密に施されている。

642～645は瓦質土器でおそらく亀山焼であろうと思われる。642はこね鉢である。器壁が厚く、口縁部は外方に少し拡張させ、内方には少し摘み出されている。643は甕である。やや厚めの器壁を持ち、頸部はやや外反気味に立ち上がるが口縁部はこね鉢と同様におさめられている。

644・645は甕の体部と思われるものである。644は外面に平行叩きが重ねて施され、内面には指頭痕の後刷毛目が施されている。645は外面に5㎜角の格子目叩きが、内面には指頭痕が施されている。

646は瓦質焼成の甕の体部と思われる。外面には平行叩きが、内面には指頭痕の後横方向の板状工具によるナデが施されている。体部の平行叩き調整より東播系の甕と思われる。

647は須恵器の甕の体部と思われる。体部外面には3㎜角の格子目叩きが、内面には指頭痕の後横方向の板ナデが施されている。

648は常滑焼の甕である。口縁部はほぼ水平方向に外反し、口縁端部上端に1条の沈線を施している。口縁内面には自然釉（灰釉）がかかっている。

649は輸入磁器の青磁の皿である。青磁皿Ⅰ類に当たるものと思われる。

650は滑石製の硯と思われるものである。外面に煤が付着していることから滑石製の石鍋を転用して作られたものと思われる。

651～653は土師質土器の羽釜の脚と思われる。先端が折り曲げられているものや、そのまま細

く終わらせるものがある。

654・655は土師質土器の竈である。炊き口部の最下段と思われ側面には鰭状の突帯がついている。体部外面には指頭痕が、内面には刷毛目が顕著に施されている。

656は用途不明の土製品である。

657は土錘である。円柱状を呈するものである。

これらほとんどの遺物はSD47の北部で集中して出土したもので、供膳具である小皿・坏・椀、調理具である土鍋・擂鉢、貯蔵具である甕の各種類が出土している。

この溝の時期は畿内産の瓦器より13世紀後半～末頃のものと思われ、供伴遺物である東播系のこね鉢及び常滑焼とも時期は食い違わない。

SD48

SD48はSD47から東方に延びた溝である。SD47と同様に浅い溝で検出規模は天幅2.00m、深さ0.08mを計る。その延長方向に同時期と思われる井戸（SE04）があるが、かなり削平を受けているために溝と井戸の関係は不明である。

SD48からはあまり遺物が出土しておらず、実測可能な遺物も少量であった。

658～660は土師器の小皿である。底部が糸切りされているものとヘラ切りされているものがあり、体部形態はSD47で細分した3タイプのなかの内彎するものと直線的に延びるものが出土している。

661・662は土師器の坏である。底部は糸切りされており、体部はやや内彎気味に外上方に延び、上半で外反するものと外反気味に外上方に延びるものがある。

663・664は瓦器である。663は瓦器の小皿で底部外面に指頭痕が顕著に見られ、口縁部外面には口縁部に沿って指ナデが施されている。内面の調整は磨滅のため不明である。664は瓦器椀である。体部下半に指頭痕が見られ、口縁部外面には口縁端部に沿って指ナデが施されている。内面にはヘラ磨きが見られる。

SD48の時期は出土した瓦器椀より13世紀後半頃と思われる。

SD50

SD50は南北に流れるSD47が南側で東西に折れた溝である。SD47とは基本的に1本の溝であるが各遺構にやや時期差が見られることから各コーナーごとに出土遺物を見ていくことにした。SD50は中世の建物群を南側で画する溝である。検出規模は天幅0.94m、深さ0.061mを計るものである。この溝より出土した遺物は少量であった。

665～670は土師器小皿である。底部調整によって2種類（ヘラ切り、糸切り）に分けられ、体部の形態によってもやや内彎するものと直線的なものと外反するものの3タイプが認められるようである。

671・672は土師器椀である。671は体部が薄く作られ、やや硬質に焼成されている。体部外面

下半には指頭痕が顕著に見られ、上半には指ナデが施されている。所謂「早島式土器」であろうと思われる。

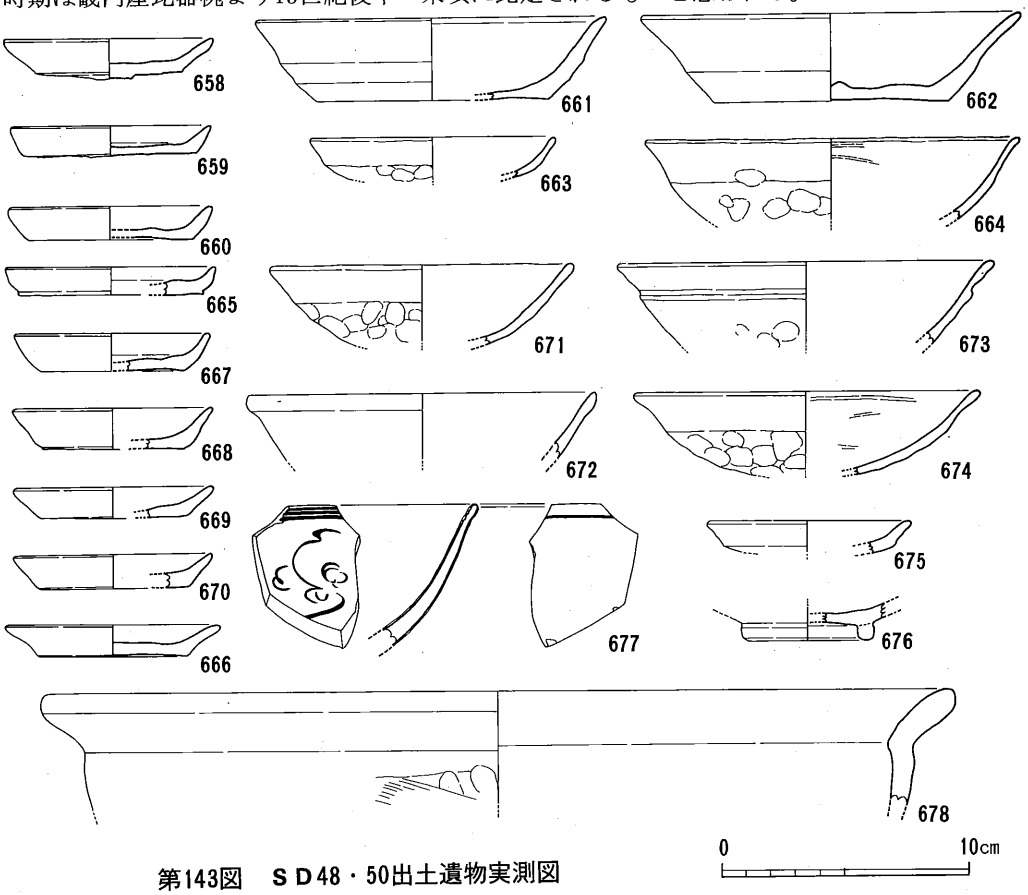
673～675は瓦器である。673・674は瓦器椀で体部はやや内彎気味に外上方に延び、口縁部外面には指ナデが施されている。675は瓦器の小皿である。底部外面には指頭痕が見られる。

676は瓦質土器の底部である。底部に断面方形を呈する高台が付いている。

677は輸入陶磁器である。体部は内彎気味に外上方に延び口縁部はやや外反する。外面口縁部下には片彫による圏線が見られ、体部内面には飛雲文が片彫されている。龍泉窯系青磁椀Ⅰ類－4に当たるものと思われる。

678は土師質土器の土鍋である。体部内面には指ナデの後刷毛目が施されている。

時期は畿内産瓦器椀より13世紀後半～末頃に比定されるものと思われる。



第143図　ＳＤ48・50出土遺物実測図

SD51

SD51はSD47とSD50に区画された溝の内側で検出された区画溝である。検出規模は天幅0.89m、深さ0.068mと天幅に比べて深さがなく浅い。二重に溝を廻らしている内側の溝である。また南東隅のコーナー部でSD51から派生した溝で小さい区画を持っている。この溝からはかなりの遺物が出土したが、SD47のように集中しては検出されなかった。

679～687は土師器の小皿である。底部切り離し手法によって2種類に分けられ、体部形態によっても内彎するもの、直線的に延びるもの、外反するものの3タイプに分けられるようである。

688～691は円盤状高台を持つもので、688～690は小皿で691は坏である。全て底部切り離し手法は糸切りである。688～690の小皿は内底部を凹ませる特徴がある。

692・693は土師器坏である。底部切り離し手法は糸切りで、体部は直線的に延び口縁部でやや内彎するものと、やや外反させるものが見られる。

694～696は土師器椀である。器壁は薄手で硬質に作られており、体部下半には指頭痕が顕著に見られる。高台は三角形状のしっかり外方に踏張ったものがついている。所謂「早島式土器」と呼ばれているものであろう。

697～700は瓦質土器である。器壁は厚手で内彎気味の体部を持ち口縁端部は丸くおさめられている。高台は粘土紐を貼り付けただけのようなつぶれた半円形をしている。おそらく西村遺跡で多量に出土している瓦質土器と同じものと思われる。

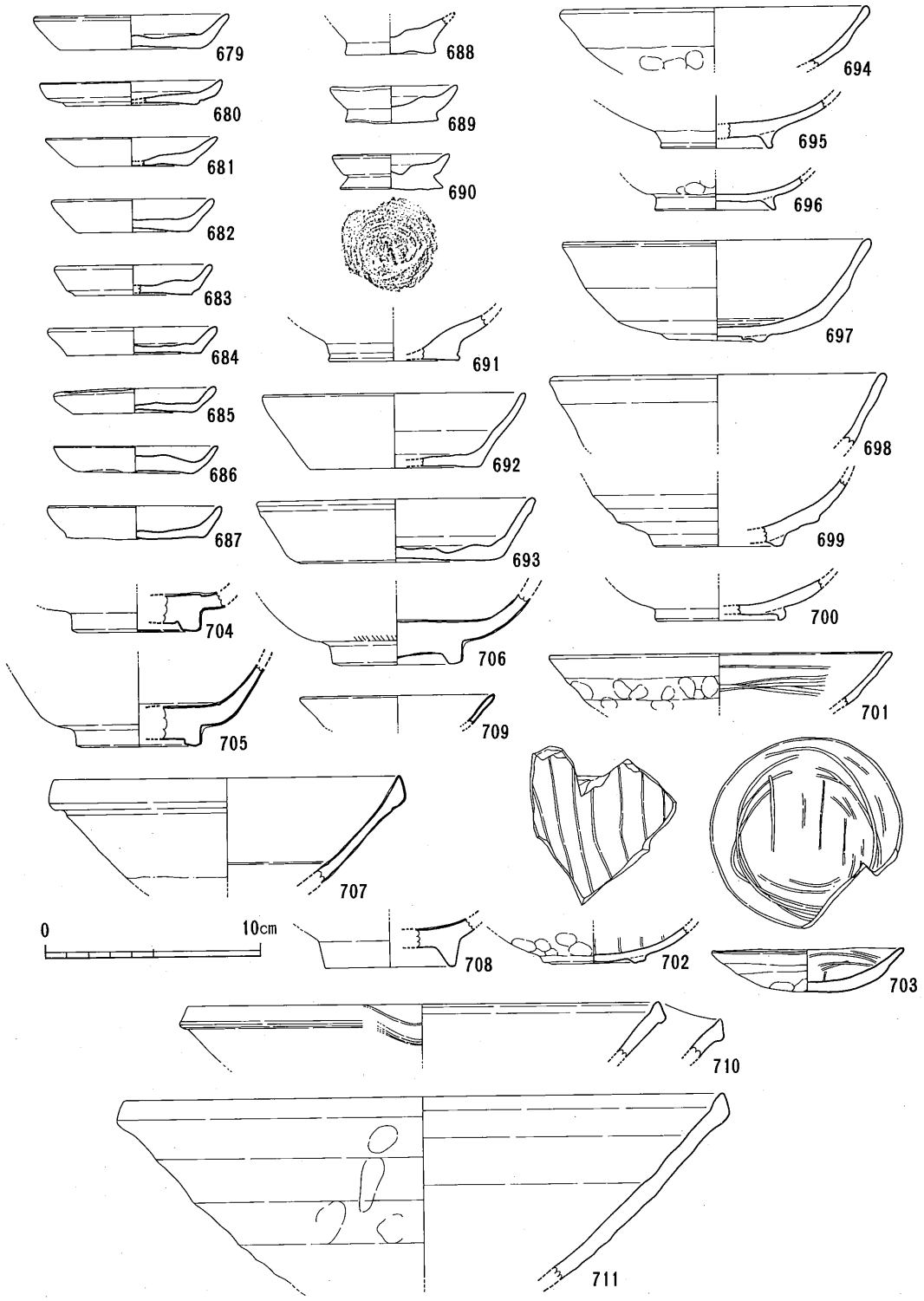
701～703は畿内産の瓦器である。701・702は瓦器椀で体部外面下半には指頭痕が、体部内面と見込み部分にはヘラ磨きが施されている。高台は断面長方形の低いものが付いている。703は瓦器の小皿である。底部外面には指頭痕が、体部内面には横方向のヘラ磨きが、見込み部分には平行ヘラ磨きが施されている。

704～709は輸入陶磁器である。704～706は青磁碗である。高台が太く低く削り出されており、見込み部分の器壁が厚いものである。釉は高台畳付けより内側を除く部分にかけられており、緑味を帯びた青色のもの（704)、黄味を帯びた緑色のもの（705)、濁緑色のもの（706）などがある。太宰府の分類で龍泉窯系青磁椀Ⅰ類－4に当たるものと思われる。707は白磁碗で体部は直線的に外上方に延び、口縁端部外面は玉縁状を呈するものである。釉は濁った透明釉が体部下半までかけられている。白磁椀Ⅳ類－1に当たると思われる。708は白磁碗の高台である。高台は細く高く削り出されている。釉は外面にはかけられておらず、内面だけである。白磁椀Ⅴ類と思われる。709は白磁の皿である。白磁皿Ⅷ類に当たるものと思われる。

710・711は東播系のこね鉢である。710は口径22cmとやや小型のもので、口縁部がやや上下に拡張している。711は体部が直線的に外上方に延び、口縁端部は上方をやや摘み出しているものである。体部内外面に回転ヨコナデ痕が顕著に見られる。

712・713は瓦質土器のこね鉢である。712は体部がやや内彎気味に外上方に延び、口縁端部内側をやや摘み出しているものである。713はやや小型のもので、口縁端部外側を外方に小さく摘み出している。

714・715は亀山焼の甕である。714は口縁部が外反し端部外側を引き出すものである。715は甕の体部下半部で外面には5㎜角の格子目叩きが施されている。内面には大きめの指頭痕状のものが施され、それを消すように板ナデが施されている。



第144図　ＳＤ51出土遺物実測図①

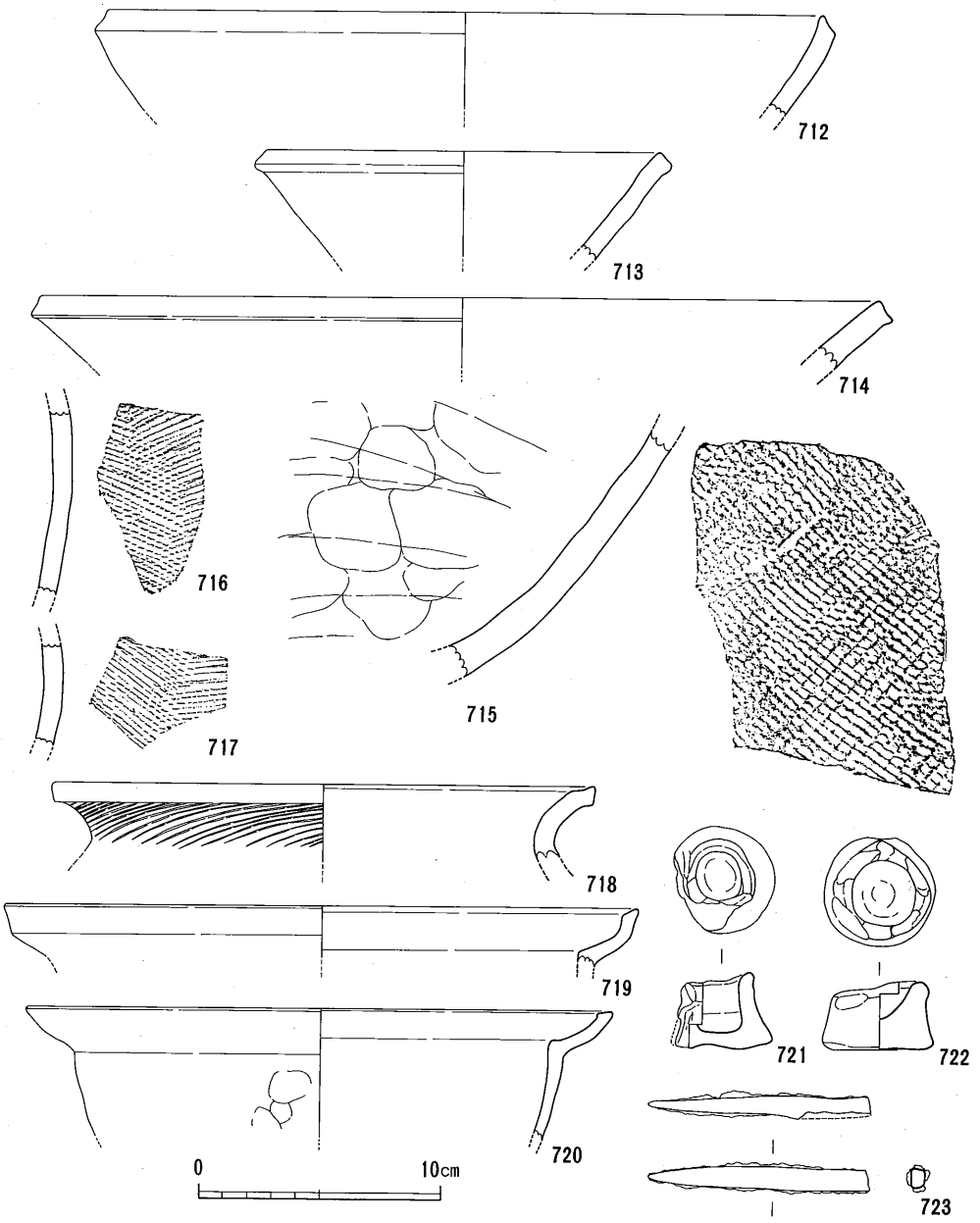
716・717は東播系の甕の体部である。体部外面に平行叩きが綾杉状に施されている。

718は十瓶周辺の製品と思われる。頸部は外反しながら延び、口縁端部をやや上方に摘み上げるようである。頸部外面には平行叩きが施されている。

719・720は瓦質土器の土鍋である。口縁部が「手」の字状に屈曲しているものである。

721・722は用途不明土製品である。

723は鉄製品である。形態から釘の可能性が考えられる。断面は約6㎜角の方形を呈しており、



第145図　ＳＤ51出土遺物実測図②

先端が尖っている。

この溝はSD47と同様に供膳具・調理具・貯蔵具が出土しており、同じ様相を呈しているが輸入磁器がSD47に比べて多量に出土しており、より中心となる建物を区画していた溝であることが判る。時期は畿内産の瓦器椀及び東播系のこね鉢より13世紀後半頃と考えられる。

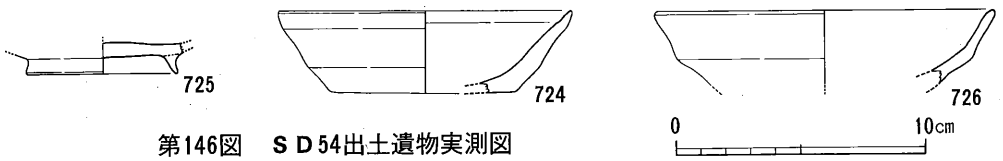
SD54

SD54は掘立柱建物を画する方形の溝の西側部分で、検出規模は天幅0.6m、深さ0.028mを計る。やはり深さはなく浅いものである。出土遺物はあまりなく、実測可能な遺物は少量であった。

724は土師器の坏である。底部は糸切りされており、体部は直線的に外上方に延びる。

725・726は土師器の椀である。器壁はやや厚めに作られており、高台は細いものが外方に踏張るように付けられている。

SD54とSD51によって区画されたところに掘立柱建物の中心があったものと考えられる。



第146図　ＳＤ54出土遺物実測図

SD66・67・69

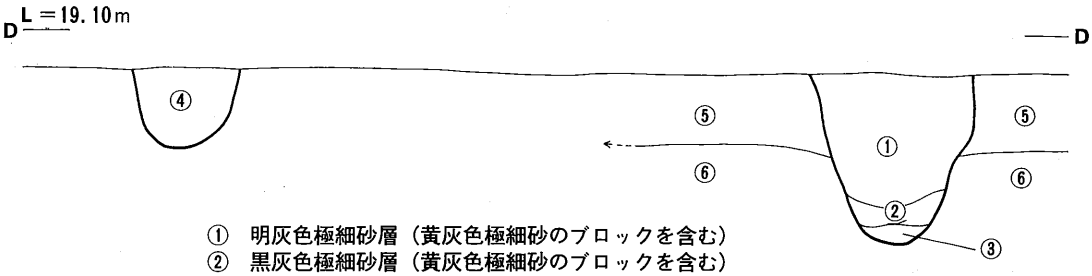
SD66・67・69は調査区南西部で検出された溝である。検出規模はSD66が天幅0.34m、深さ0.335m、SD67が天幅0.18m、深さ0.064m、SD69が天幅0.46m、深さ0.432mを計る。これらの溝は前述した掘立柱建物を画する溝とは違う性格のものと考えられる。SD66・67は北端で土坑状の遺構から流れ出しているような状況で検出され、それより北部へは延びていない。しかしSD66の延長と思われる溝が北部で検出されていることから削平のために検出できなかった可能性も考えられる。この南西部で検出された溝は全てほぼ南北に流路を取っており、特にSD69・70は天幅の割に深さがあり、南北に平行して流路を取っていることから建物域を区画していたと思われる。またSD66・67は柵列に直行しており、この溝を境としてまた西側及び北側に別の屋敷地があることが窺える。

727はSD66から出土した遺物である。土師器の底部で、断面三角形状の高台がやや外方に踏張る様に付いている。

728はSD67より出土した遺物である。土師器の椀で体部はやや内彎気味に外上方に延び、口縁端部はやや尖らせて終わらせている。体部外面下半にはヘラ削りが施されている。

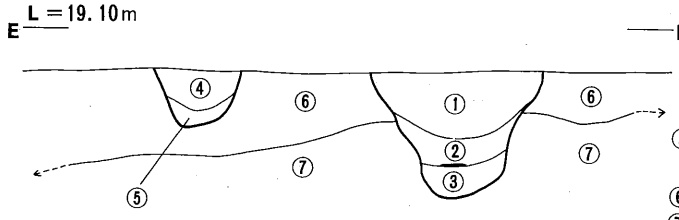
729～737はSD69より出土した遺物である。

729は土師器の小皿である。底部切り離し手法はヘラ切りのもので体部はやや内彎気味に外上方に延びている。



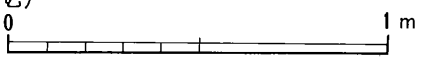
① 明灰色極細砂層（黄灰色極細砂のブロックを含む）
② 黒灰色極細砂層（黄灰色極細砂のブロックを含む）
③ 灰褐色中砂層（粗～極粗粒砂をも含む）
④ 暗灰色極細砂層（黄灰色極細砂及び淡黒色極細砂のブロックを含む）
⑤ 灰黄色極細砂層（こげ茶褐色粒を含む）
⑥ 茶灰色粘質土層（こげ茶褐色の鉄分を多く含む）

SD69 ①～③ SD70 ④

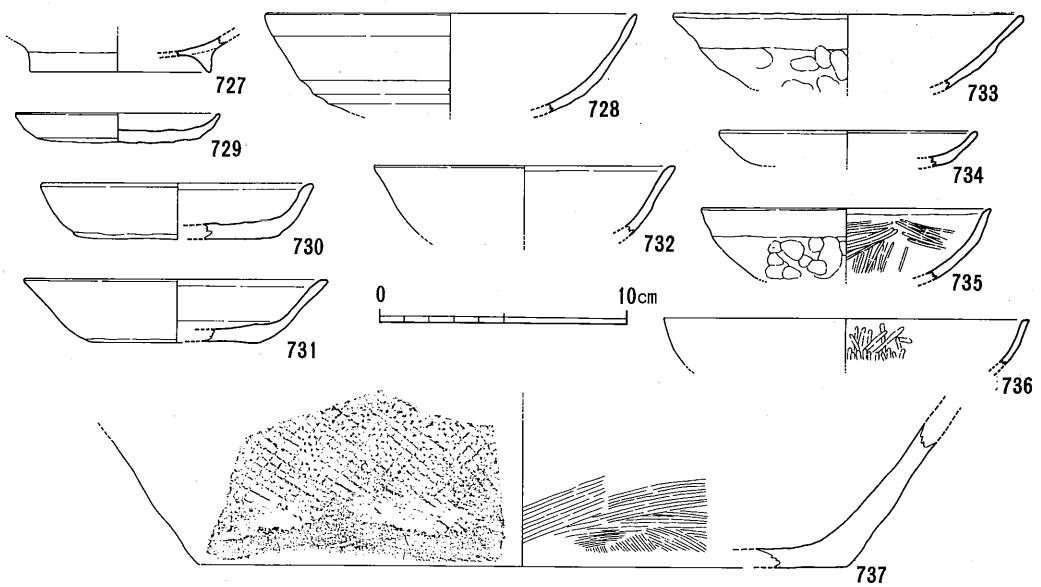


① 淡黒灰色極細砂層（黄灰色（地山）極細砂のブロックを含む）
② 茶灰黄色極細砂層（こげ茶褐色粒を少し含む）
③ 暗茶黄灰色極細砂層
④ 淡黒灰色極細砂層（黄灰色（地山）極細砂のブロックを含む）
⑤ 暗黄茶灰色極細砂層（こげ茶褐色粒を少し含む）
⑥ 灰黄色極細砂層(こげ茶褐色粒を含む)
⑦ 茶灰色粘質土層（こげ茶褐色の鉄分を多く含む）

SD66 ①～③ SD67 ④⑤



第147図 SD66・67・69土層断面図



第148図 SD66・67・69出土遺物実測図

730・731は土師器の坏である。底部はヘラ切りされており体部はやや内彎気味に延びるもの（730）と、直線的に延びるもの（731）がある。口縁部は外方にやや摘み出している。

732は土師器の椀である。体部はやや内彎気味に外上方に延びる。口縁端部は外方に摘み出している。

733・734は畿内産の瓦器である。733は瓦器椀で体部外面下半に指頭痕が顕著に見られ、内面にはヘラ磨きが施されている。口縁部外面には指ナデが施されている。734は瓦器の小皿である。

735・736は黒色土器である。２点とも内外面ともに炭素を吸着させた黒色土器Ｂ類である。735はやや小振りの黒色土器で体部外面に指頭痕が、内面には分割技法によるヘラ磨きが施されている。口縁端部はやや外方に摘み出されている。736は体部内面にはヘラ磨きが施されている。

737は瓦質土器の甕の底部である。体部下半外面には４㎜角の格子目叩きが施され、底部との境の体部最下部には横方向のヘラ削りが施されている。体部内面には刷毛目が施されている。

これらの溝は天幅の割に深さのあるしっかりしたものである。出土遺物の中に平安時代後期の黒色土器及び土師器坏が混じっているため、上限を平安時代後期、下限を畿内産の瓦器椀より13世紀後半頃とすることができる。

まとめ

八反地地区で検出された古代から中世の溝は掘立柱建物を区画する溝としての機能を持つものである。

古代（10世紀後半～11世紀）の溝（SD66・67）は調査区南西部で検出されたもので、ほぼ南北に流路を取っており、一旦ほぼ中央で途切れるが土坑状のものからまた流れ出すようである。この溝は古代の掘立柱建物群の東側を画するもので、その西側北部で２条の柵列がある。

中世（13世紀後半～末）の溝（SD47・50・51・54）はほぼ調査区中央部で検出されている。東側および南側を２重に廻らしており、西側は１条の溝で、北側は明確に溝は回ってないと思われる。検出規模は削平により天幅の割に深さがなく浅いものであった。SD47は北部でSK17に繋がっており、SD54は北部でSK18に繋がっている。

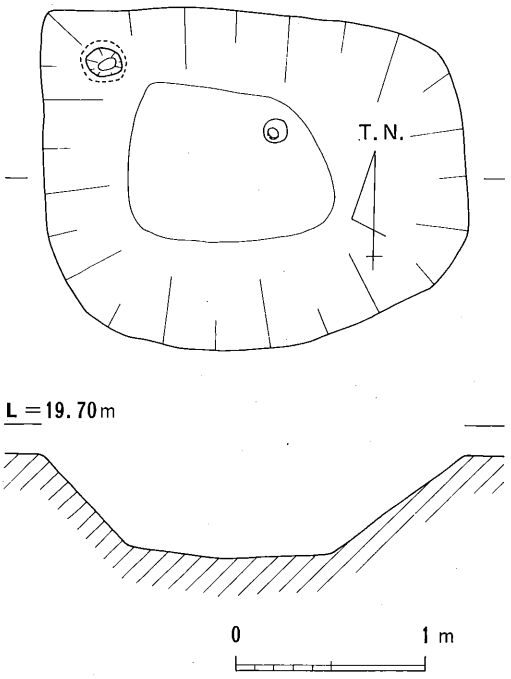
(3) 土坑

方形に区画された溝の一部に土坑が確認されている。SD47の北端部でSK17が、SD54の北端部でSK18が検出された。SK18は水溜め状の曲げ物を伴ったSE03と接しており、また溝SD54に接続していることなどから水溜めの機能を有していた土坑の可能性が考えられる。

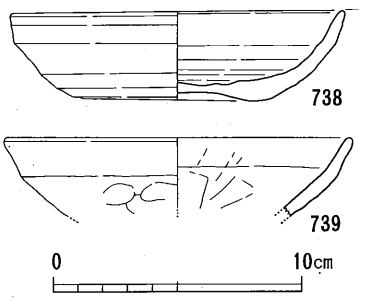
SK02

SK02は調査区北部で検出され、平面形態がほぼ隅丸方形を呈する。検出規模は長幅2.24m、短幅1.76m、深さ0.593mを計る。この土坑に伴って土坑3基（SK03・04・05）・井戸（SE01）・掘立柱建物が検出された。これらはほぼまとまりを持っているが西に延びる可能性があることから集落の南東部を検出したものと思われる。

この土坑からはほとんど遺物が出土しなかった。738は土坑の最下層から出土した土師器の坏である。底部は糸切りされており、体部は内彎気味に外上方に延びる。体部内外面に横ナデ痕が顕著に認められる。



第149図　SK02平・断面図



第150図　SK02・04出土遺物実測図

SK04

SK04はSK02の南西部で検出されたものである。平面形態がほぼ方形を呈しており、検出規模は長幅1.02m、短幅0.78m、深さ0.278mを計る。

この土坑からはほとんど遺物が出土していない。739は土師器の椀である。体部は内彎気味に

外上方に延びるもので口縁部外面には指ナデが、体部下半には指頭痕が内面には板状工具によるナデが施されている。

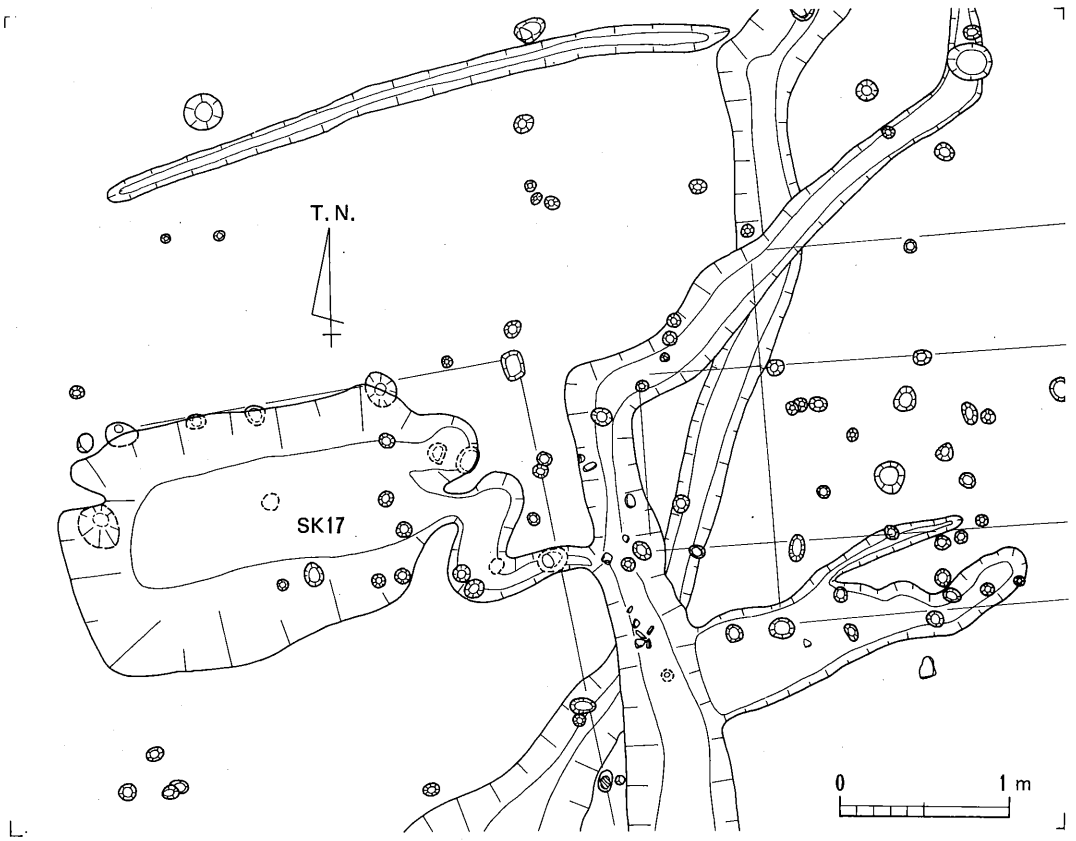
SK17

SK17はSD47の北端部の西側に細い溝で繋がって検出されたものである。検出規模は長幅約4.80m、短幅約3.0mを計るもので平面形は長方形状を呈している。深さは約0.2mで検出平面の大きさに比べるとやや浅いようである。そのためにあまり遺物が出土していない。

740～747は土師器の小皿である。底部切り離し手法にはヘラ切りと糸切りがあり、ややヘラ切りの方が多いようである。また器高でもそれぞれのなかで1.8cmとやや浅いものと、2.0cmとやや深いものがある。体部形態にもやや内彎するものと直線的に延びるものとやや外反するものの3タイプがあるようである。

748は円盤状高台を持つ小皿と思われる。底部切り離し手法は糸切りである。

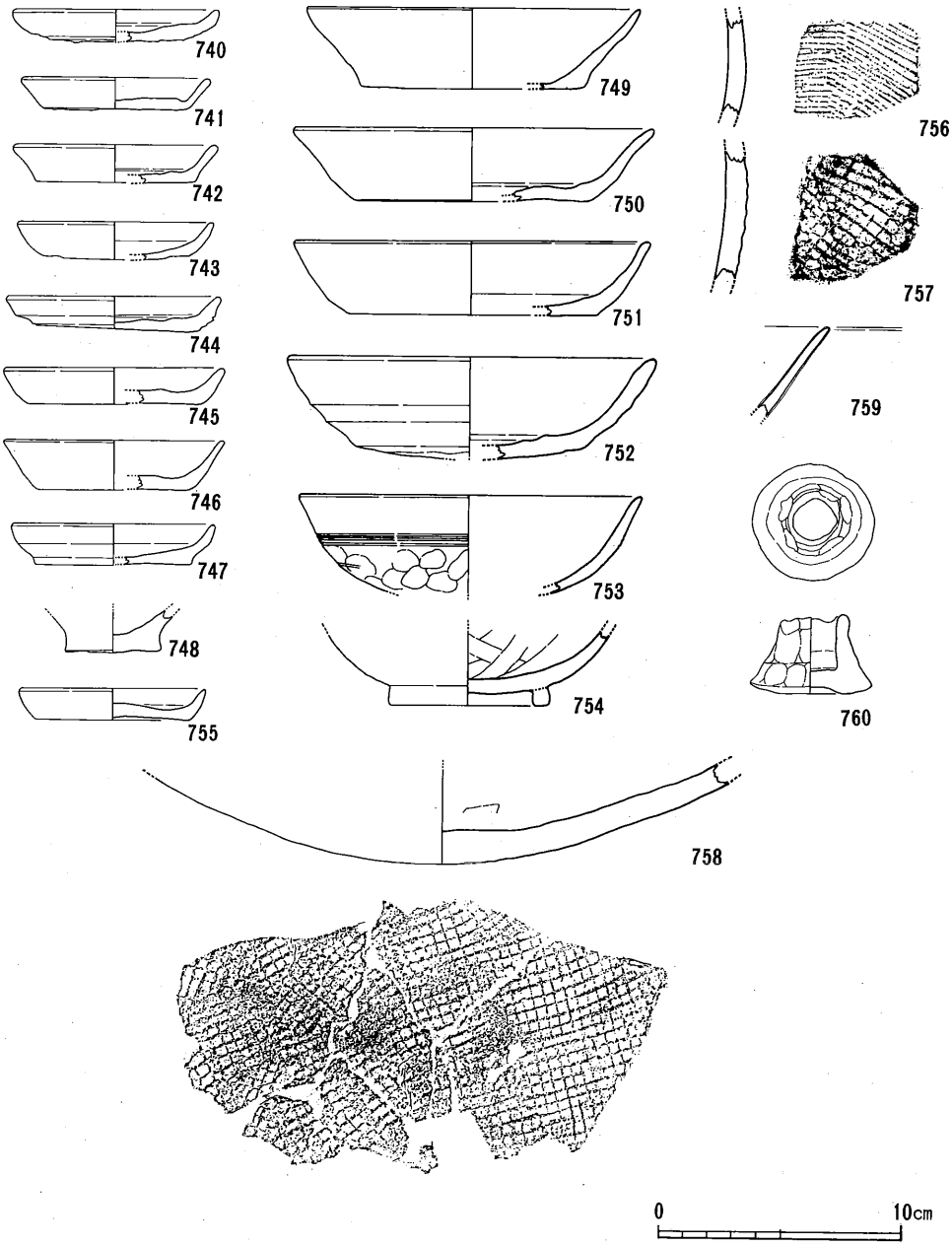
749～752は土師器の坏である。749～751は底部切り離し手法が糸切りで、752はヘラ切りである。いままでの土師器の坏に見られたように底部と体部の境がしっかりあるものは糸切りで、緩やかなものがヘラ切りの傾向がここでも見られるようである。体部形態にも3タイプ見られるようである。



第151図　SK17平面図

753～755は瓦質土器である。753・754は椀である。753は体部外面下半に指頭痕が施されている。754は底部に断面方形の高台が付き、体部は内彎気味に外上方に延びる。体部内面および見込み部分には板状工具によるナデが顕著に施されている。体部外面下半にはヘラ削りが施されている。755は底部ヘラ切りされた小皿である。体部はやや内彎気味に外上方に延びる。

756は東播系の甕の体部と思われる。細かい平行叩きの端を接し、綾杉状に施しているものである。



第152図　ＳＫ17出土遺物実測図

757・758は瓦質土器の甕である。おそらく亀山焼と思われる。体部外面と底部外面には5㎜角の格子目叩きが施されている。757は亀山焼の底部付近と思われ、丸底を呈している様である。

759は輸入陶磁器である。体部は直線的に外上方に延び、口縁はやや外反させるものである。全面に淡い緑味を帯びた透明釉がかけられている。太宰府の分類で龍泉窯系青磁椀Ⅰ類と思われる。

760は用途不明土製品である。

時期は瓦質土器及び青磁碗より13世紀後半頃と考えられる。

SK18

SK18はSD54の北端で検出された。天幅約3.0m、深さ約0.6mの規模を持ち、平面形態はいびつな円形を呈しているものである。この土坑の北に接するようにSE03が掘られている。埋土の堆積に時期差はなくほぼ同一時期に機能していたことが判る。また土坑の周辺部には柵状の杭列が見られる。この土坑からは多量の遺物が出土している。

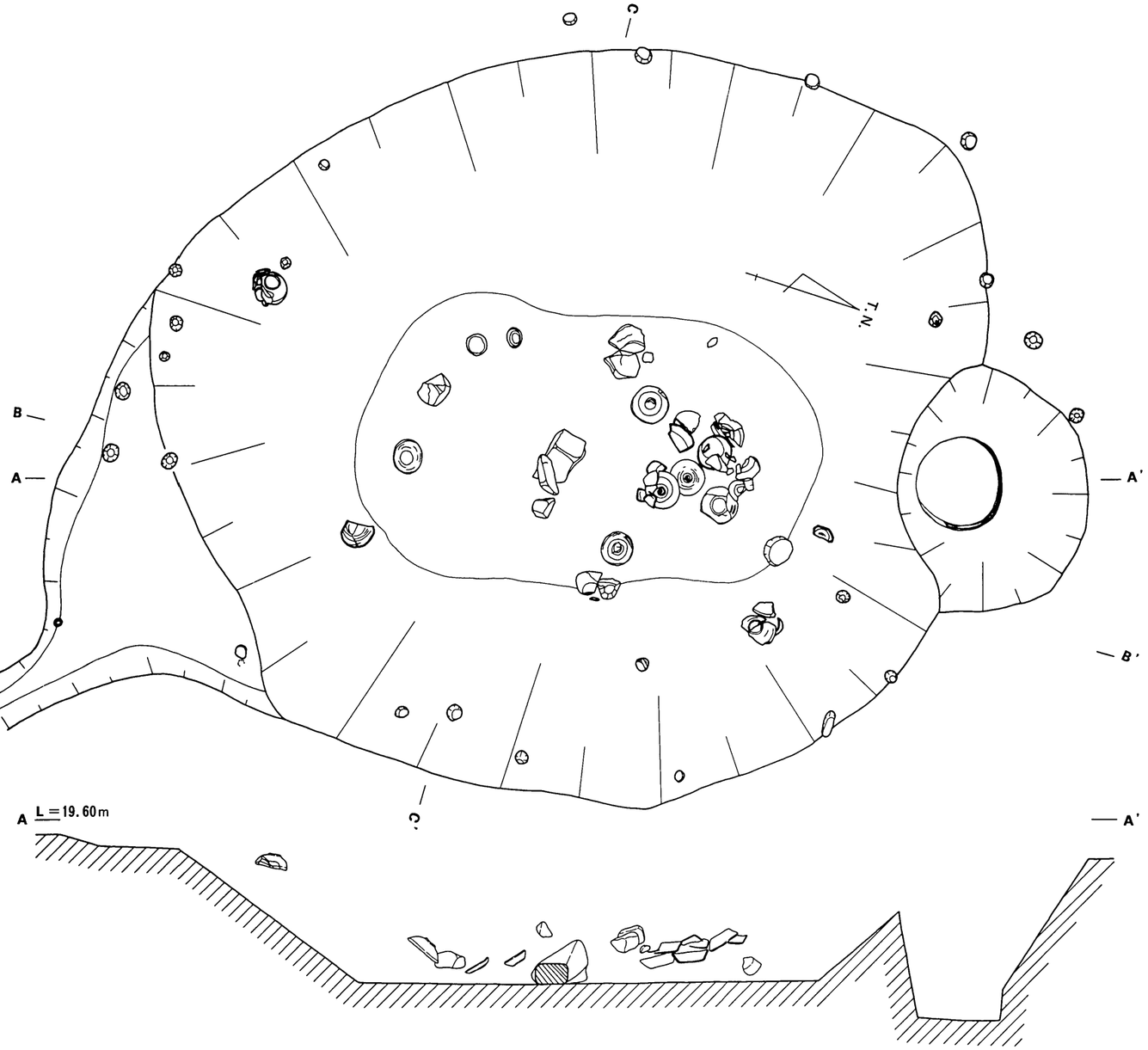
761～777は土師器の小皿である。底部切り離し手法で分けると761～773までが底部ヘラ切りで、774～777までが底部糸切りである。器高は1.5cmとやや浅目のものや、2.0cmとやや深目のものがあるがほとんどは前者の1.5cmくらいのものばかりである。体部形態はSD47で観察されたように体部がやや内彎するものや、直線的に延びるものや、やや外反するものなどが見られる。底部切り離し手法の糸切りは全て回転糸切りである。ヘラ切りと糸切りの全体の比率はおおよそ8割がヘラ切りであとの2割が糸切りであると思われる。

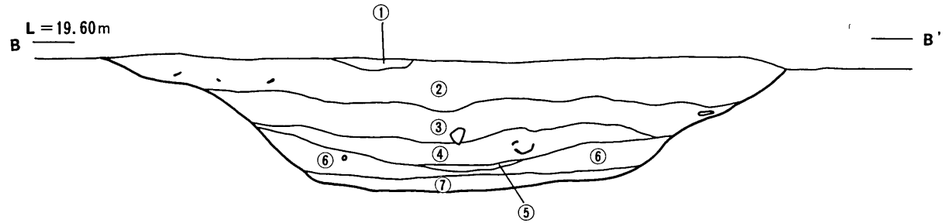
778～791は土師器の坏である。778は底部ヘラ切りである。やはりSD47で観察されたように底部と体部の境が糸切り底のものに比べるとやや緩やかなものと思われる。体部は内彎気味に立ち上がり口縁付近でやや外反する。779～791は糸切り底の坏である。体部は内彎気味に延びるものと直線的に延びるものとやや外反気味に延びるものの3タイプが認められる。底部切り離し手法は全て回転糸切りである。

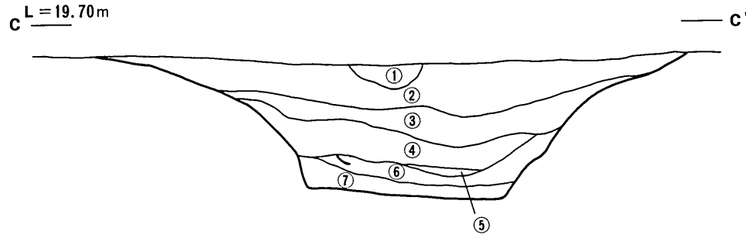
792は円盤状高台を持つ椀である。体部の内面と見込み部分の境に指ナデによる段が認められる。底部調整は不明である。

793～804は土師器の椀である。体部の器壁がやや厚手で高台もしっかりしたものが付くものと、やや薄手で高台がやや細目の外方に踏張ったものが付くものに大別できるようである。後者の方には胎土に3～5㎜程度の石英を少量含んでいるのが特徴である。おそらく前者が在地産で後者が所謂「早島式土器」と呼ばれているもので搬入品と考えられる。体部外面の調整は産地に関係なく指頭痕が顕著に認められる。801は体部内面に板ナデが施されている。804は断面三角形の高台の外面に指頭痕が顕著に残るものである。

805～811は畿内産の瓦器である。体部外面下半には指頭痕が顕著に見られ、体部内面には横方向のヘラ磨きが、見込み部分には平行ヘラ磨きが施されている。807は体部内面に螺旋状のヘラ







①暗褐灰色砂質土（炭化物を含む）に白黄色砂質土のブロックを含む
②暗褐灰色砂質土（炭化物を含む）
③褐灰色砂質土
④黄茶灰色粘質土
⑤黄白色砂質土
⑥明茶黄灰色砂質土
⑦白黄色砂質土

第153図　ＳＫ18平・断面図・土層図

磨きが施されている。当遺跡で出土している瓦器は体部内面に横方向のヘラ磨きが見込み部分には平行ヘラ磨きが施されているものが多いが、この一点は見込み部分の平行ヘラ磨きがなく螺旋状の磨きだけの特異な例である。

出土した瓦器椀には器高のやや浅いものと深いものが認められることから時期幅が考えられる。おそらく深いものは13世紀後半頃で浅いものは13世紀末頃と考えられる。

812～816は瓦質土器である。812～815は瓦質土器の椀である。812は断面長方形のしっかりした高台が付き、内面には粗い刷毛目が不定方向に施されている。814は底部に断面方形の高台が付き、体部はやや内彎気味に外上方に延びる。体部外面下半にはヘラ削りが施されている。体部内面および見込み部分には連結輪状のヘラ磨きが施されている。815は体部外面下半に指頭痕が認められる。816は瓦質土器の小皿である。体部はやや外反気味に外上方に延びる。底部切り離し手法は糸切りである。

817は輸入青磁の碗である。高台内面がやや深めに削り出されている。体部外面には櫛描が見られ、内面にはヘラによる片彫が施されている。釉は体部下半までかけられている。同安窯系青磁椀Ⅰ類－1に当たるものと思われる。

818～820は東播系のこね鉢である。口縁端部は上下に少し拡張するもので体部はやや薄く作られている。820はこね鉢の底部で回転糸切り痕が見られる。

821は瓦質土器の羽釜である。水平方向に小さい鍔が付き、立ち上がりはやや内彎気味に内方に延びる。口縁端部は内側を小さく摘み出している。

822は土師質土器の土鍋である。口縁部が外方に屈曲するもので体部外面には指頭痕が、屈曲部内面には刷毛目が施されている。

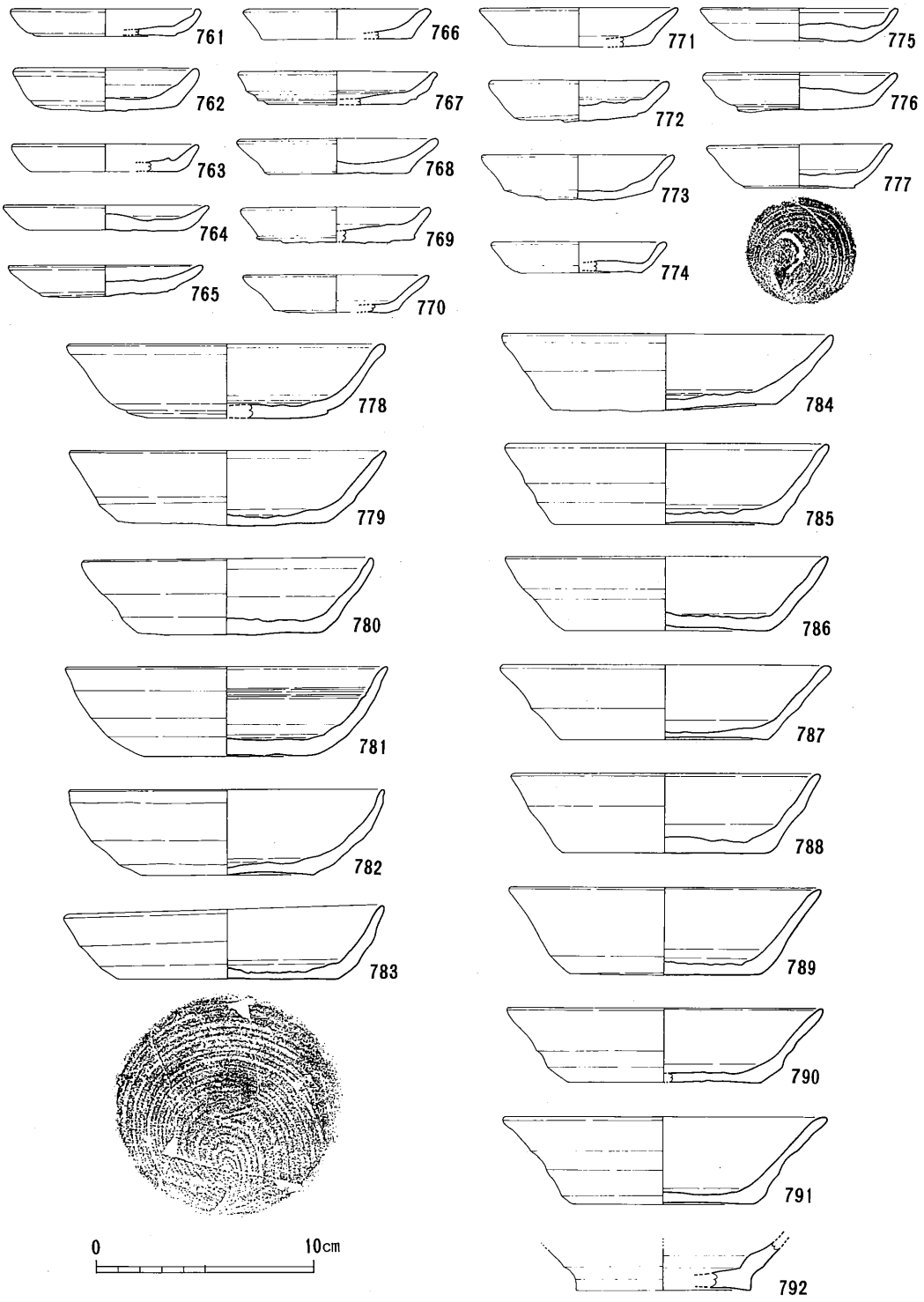
823は常滑焼の体部である。体部外面には部分的に平行叩きが施され、内面には指ナデが施されている。外面には緑味を帯びた自然釉（灰釉）がかかっている。

824は土師質土器の羽釜の脚と思われる。先端部が折り曲げられている。

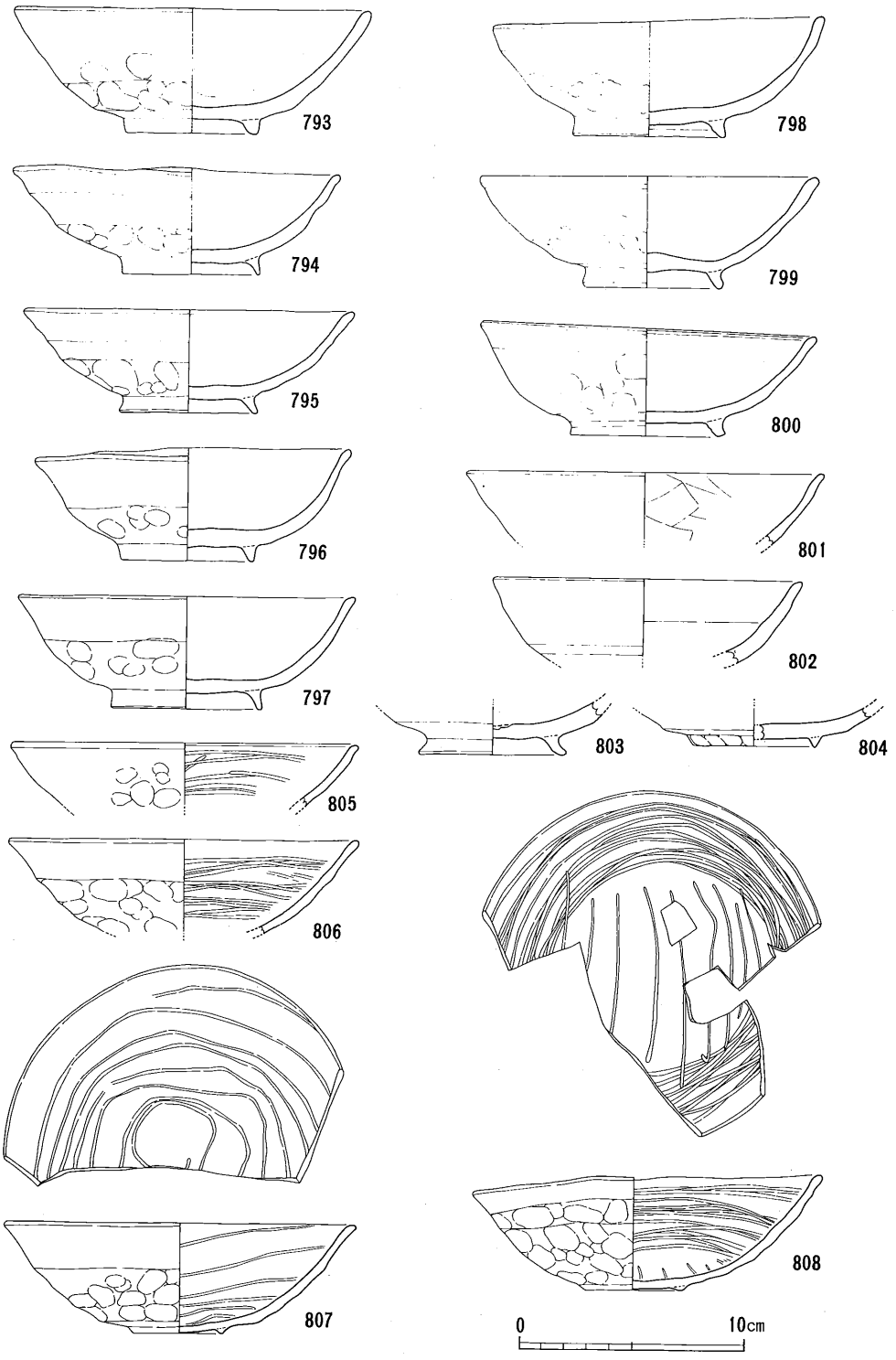
825は分銅型の土製品である。上部に釣り下げるための穿孔が認められる。

826は突帯文系土器である。口縁端部外面下に刻み目突帯が付けられている。また口縁端部上面にも刻み目が施されている。

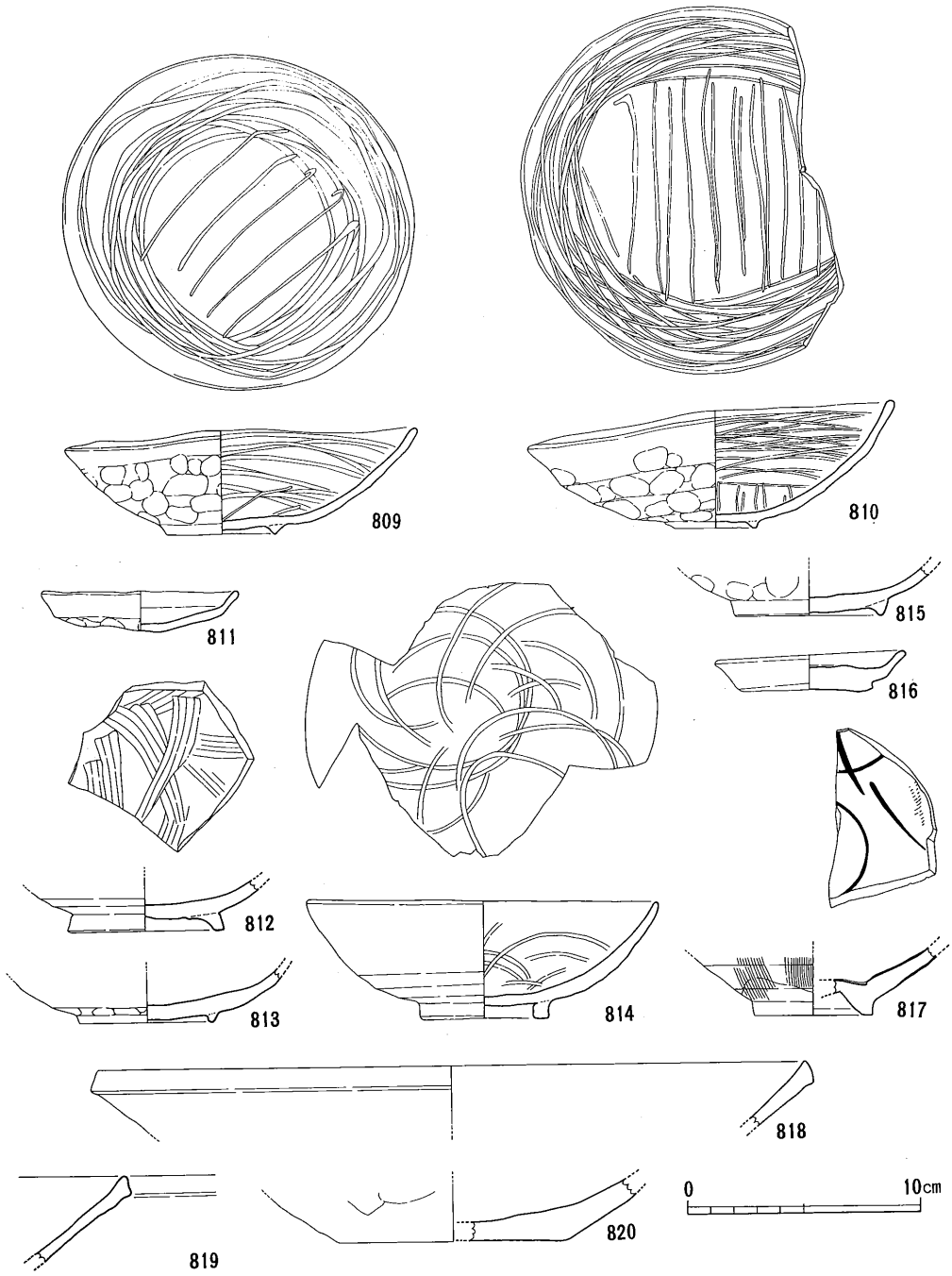
出土遺物（主に畿内産瓦器）からこの土坑が機能していた時期は13世紀後半～末頃と思われる。



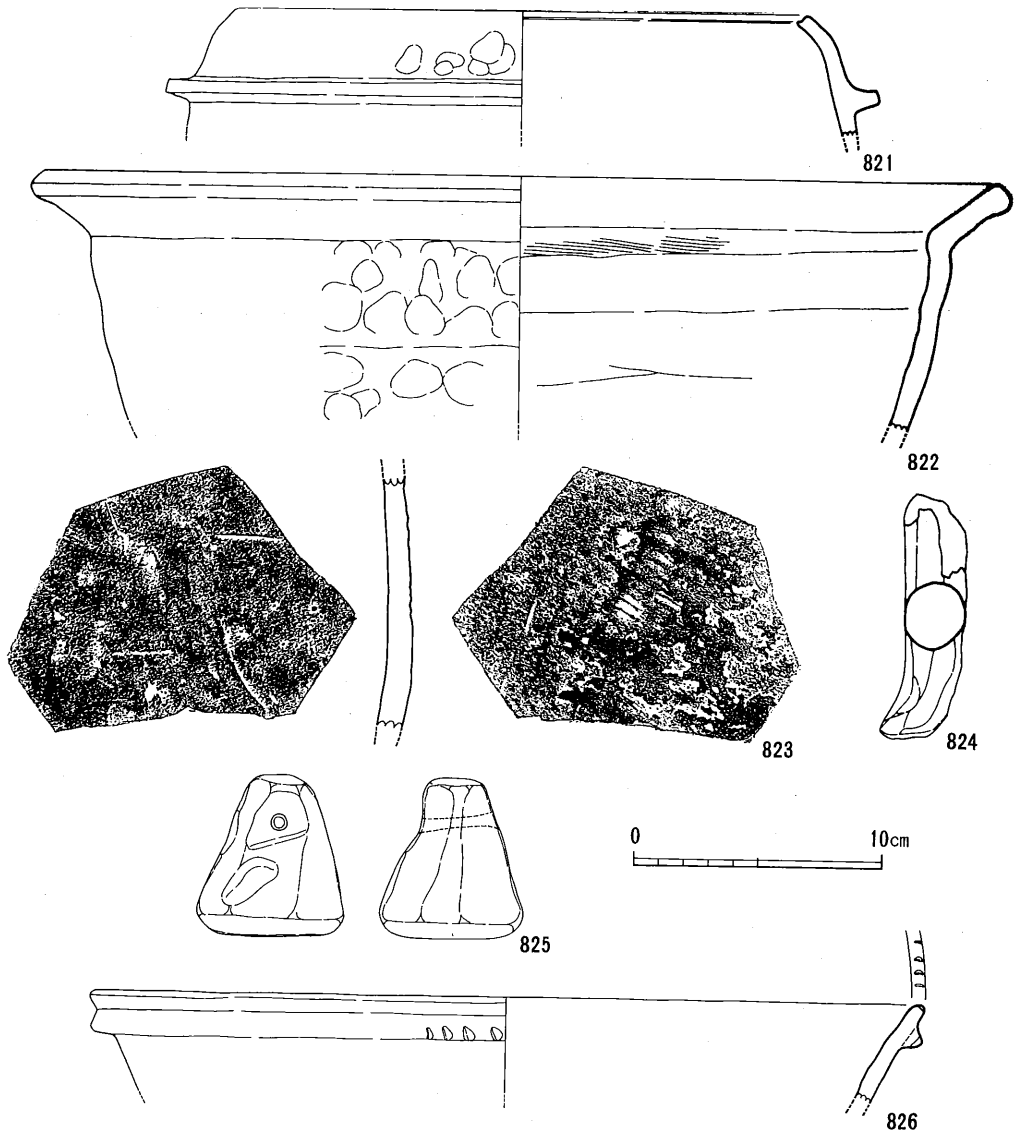
第154図　ＳＫ18出土遺物実測図①



第155図　ＳＫ18出土遺物実測図②



第156図　ＳＫ18出土遺物実測図③

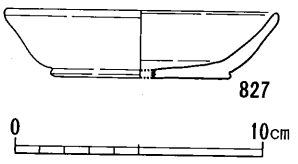


第157図　ＳＫ18出土遺物実測図④

SK25

SK25は調査区南東部で検出されたものである。平面形態は不定形で、すぐ西側の掘立柱建物SB30の雨落ち溝の可能性が考えられる。

827は土師器の坏である。底部はヘラ切りされており、体部はやや内彎気味に外上方に延びる。



第158図　ＳＫ25出土遺物実測図

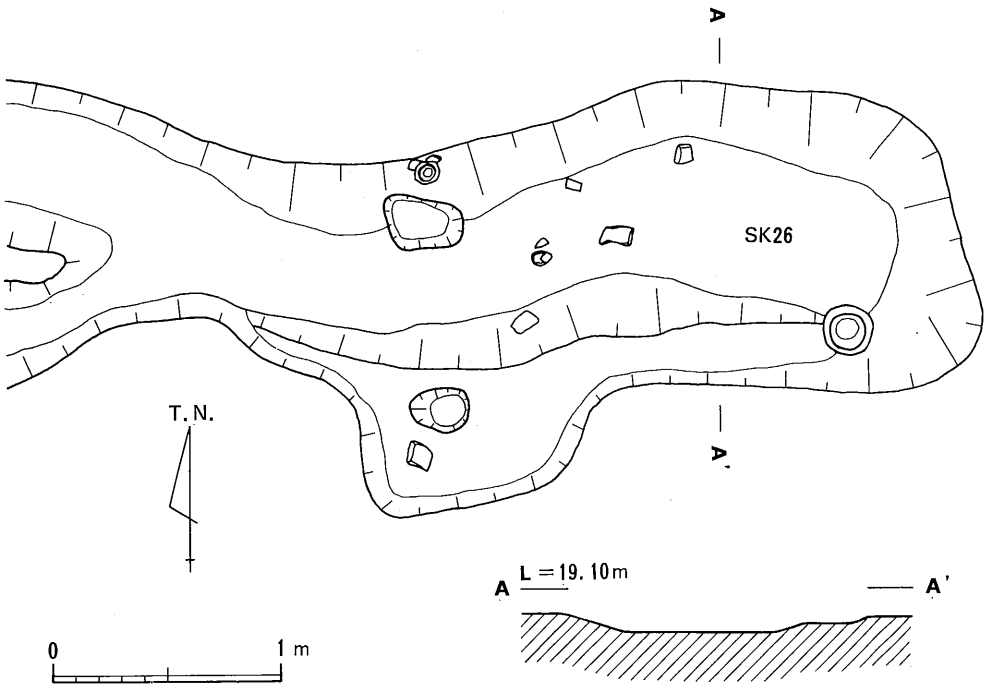
SK26

SK26は調査区南西部で検出されたものである。平面形態はほぼ方形であるが西方に溝として延びているものである。検出規模は長幅3.20m、短幅1.33m、深さ0.09mを計るものである。ここでは土坑と溝が継続していると考えて東側の部分から出土した遺物を紹介する。

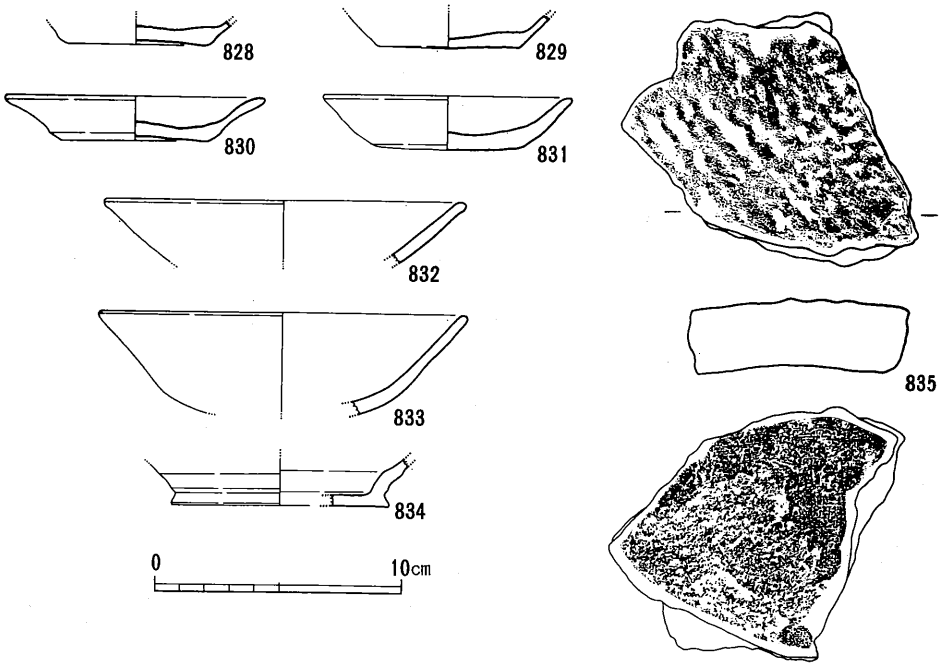
828・829は土師器の小皿である。底部は糸切りされているものである。830・831はやや小型の土師器の坏である。830は底部を糸切りし、体部は外反気味に外上方に延びる。831は底部をヘラ切りし、口縁端部はやや外方に屈曲させるものである。832・833は土師器の椀である。833は体部下半に屈曲部を持ち上半は直線的に延びるものである。834は底部に円盤高台を持つ土師器の椀である。底部調整は不明である。835は須恵質の瓦である。外面に叩き痕が内面に布目が認められる。

時期決定できるものが出土していないがやや小型の坏や円盤状高台を持つ椀が出土していることから古代末～中世初頃のものかと考えられる。

またこれらの土器に混じっておそらく猪の歯と思われるものが出土している。



第159図　ＳＫ26平・断面図



第160図　ＳＫ26出土遺物実測図

まとめ

八反地地区で検出された土坑は28基ある。

土坑単独であるものが主であるが、SK17・18は溝と繋がっており廃棄土坑としての機能より水溜め状の土坑の性格が強いようである。またSK18については北部にSE03を伴っており、清水溜めとしても機能を持っていたようである。

(4) 井戸

当遺跡において中世の井戸は4基（SE01～04）検出された。そのうち2基（SE03・04）は調査区南半で、掘立柱建物を画する溝に伴うように検出されたが、後の2基（SE01・02）は中央部と北部で検出され、それぞれ井戸に伴う遺構はほとんど検出されていない。

SE01に伴う同時期の遺構は調査区西に延びるものと思われる。

SE01

①概要

SE01は調査区北部で検出された。この井戸に伴う遺構はあまりなく、土坑が数基確認されただけであった。削平によって削られたか、或いは、調査区中央部で検出された居住域とは別の居住域が調査区西側に延びるのかもしれない。この井戸は曲げ物を3段重ねたものである。

②井戸の構造

SE01の検出規模は直径約2.68mのほぼ円形を呈している。掘り方は検出上面から3分の2まではロート状になり、それより下は円柱状の掘り方を呈している。ロート状部分までは深さ1.23mで、それより下は1.01mを計る。

ロート状部分で曲げ物を主体とする井戸が検出された。この井戸は掘り方の約半分程度（第14～18層）を埋め、それから造られたものと思われ、掘り方下半には青灰色粘質土を主体とする土層が堆積している。また地山における湧水層は第25層の淡青灰色砂質土層で井戸最下部とはかなり距離があることからこの井戸は湧き水を得るための井戸ではなく、水を蓄めるための井戸の可能性が考えられる。そのことは井戸の堆積埋土からも言え、下半部第14～18層は地山の第24・25層とほぼ同一ということから第25層の湧水層も良好に水が出るものではなかったようである。そのために下半部を埋めた後曲げ物を3段重ねた井戸を構築したと思われる。

③出土遺物

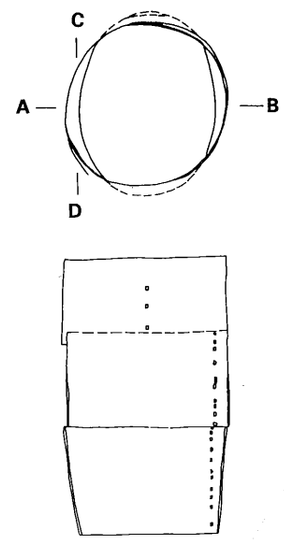
SE01は井戸枠内から出土した遺物はなく、全て掘り方内より出土したものである。また、井戸下部の第16層から木製の手桶が、第18層（最下層）から竹製のざるが出土している。

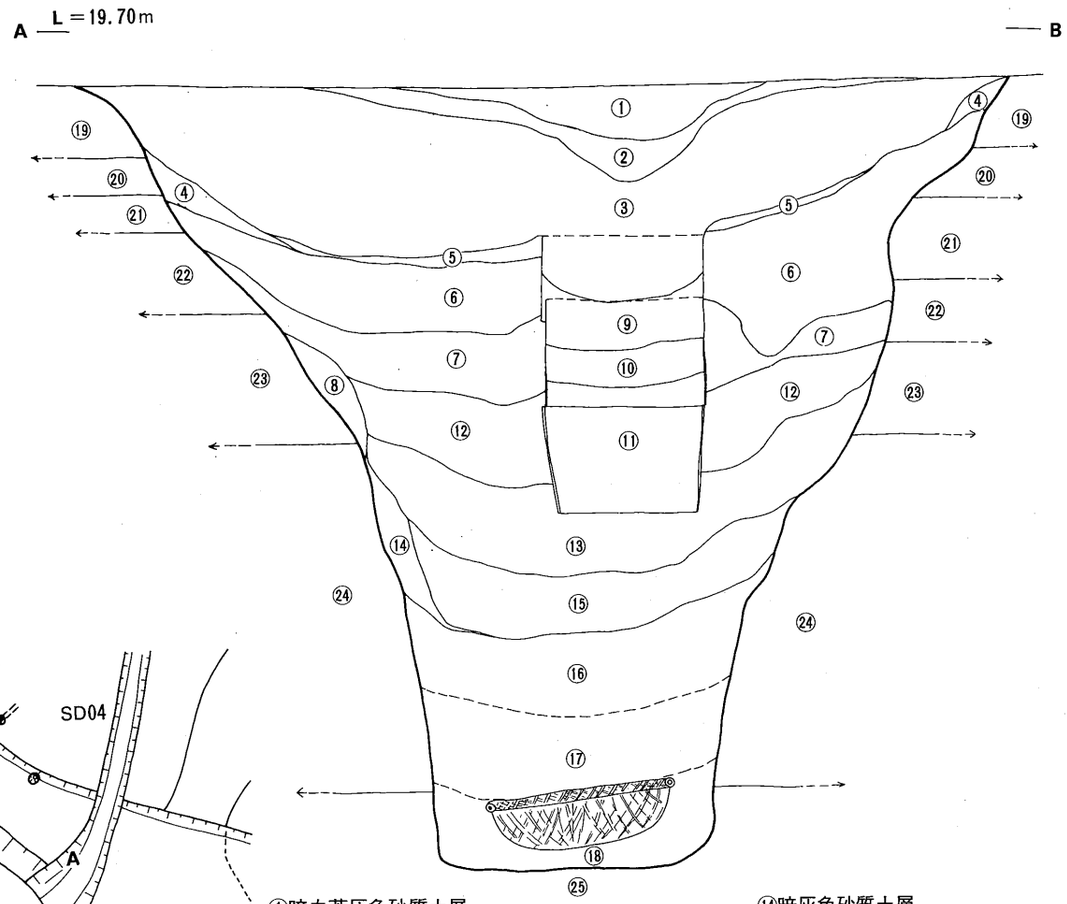
836～838は土師器の小皿である。836・837は底部がヘラ切りされており、838は糸切りされている。836・837とも器高がやや浅い。体部は直線的に外上方に延びる。

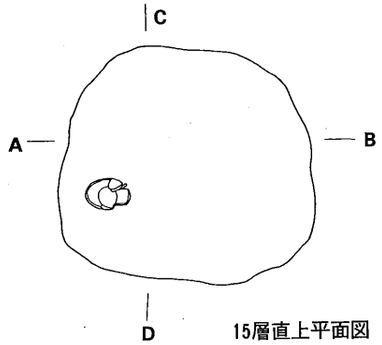
839・840は土師器の坏である。底部はヘラ切りされている。体部は直線的に外上方に延びる。

841～845は畿内産の瓦器である。底部に断面三角形状の高台を持つものと低い方形状の高台を持つものがある。体部外面には指頭痕が顕著に見られ、内面にはヘラ磨きが施されている。内面見込み部分のヘラ磨きは平行ヘラ磨きである。やや器高の深いものばかりである。

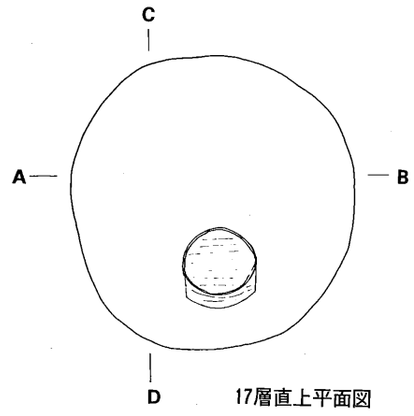
846は輸入磁器の碗である。体部は直線的に外上方に延び端部は丸くおさめている。体部内面



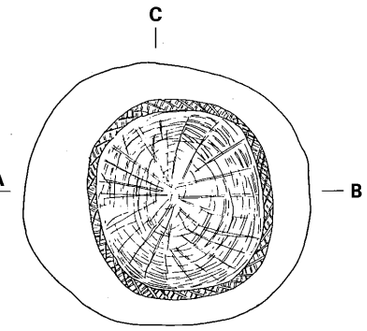




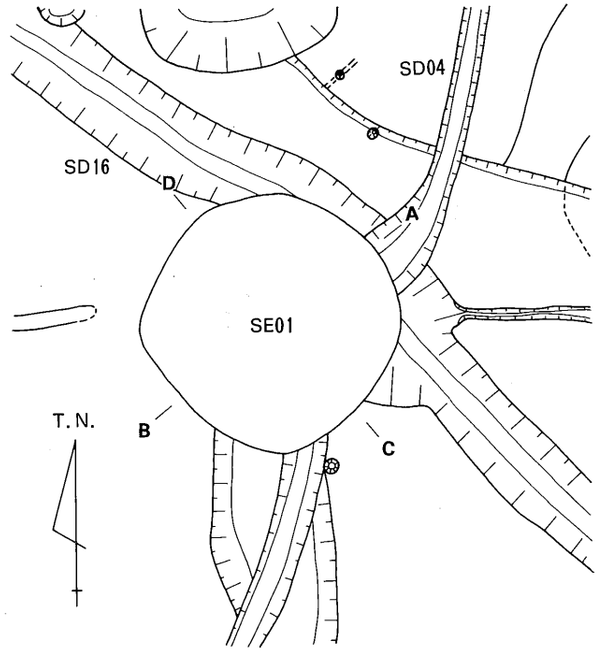
15層直上平面図



17層直上平面図



18層直上平面図



①暗白茶灰色砂質土層
②暗茶灰色砂質土層
③暗灰色砂質土層（こげ茶褐色粒及び茶白黄色粘質のブロックを含む）
④暗灰色砂質土層（こげ茶褐色粒を含む）
（粘性有）
⑤暗灰色粘土層
⑥淡黒灰色粘質土層（茶白黄色粘質のブロック及びこげ茶褐色粘質のブロックを含む）
⑦淡灰黒色粘質土層（濁白色粘質のブロックを含む）
⑧茶褐色粘質土層
⑨灰黒色粘土層に淡灰黒色砂土層が少しかんでいる
⑩灰黒色砂土層
⑪黒色粘土層
⑫淡灰黒色粘質土層（淡黄青色粘土のブロックを含む）
⑬暗青灰色粘質土層（黒色粘質土のブロックを含む）
⑭暗灰色砂質土層（黒色粘質土のブロックを少量含む）
⑮淡青灰色粘質土層（砂層との互層、黒色粘質土のブロックを含む）
⑯暗青灰色粘質土層（黒灰色粘質土のブロックを含む）
⑰暗黄青灰色粘質土層
⑱青灰色粘質土層
⑲灰黒色砂質土層（１㎜～３㎜程度の砂粒を含む）
⑳暗茶灰色粘質土層
㉑暗こげ茶褐色粘質土層
㉒褐茶色粘質土層
㉓褐茶白色粘質土層
㉔緑青灰色粘質土層
㉕淡青灰色砂質土層

0　1m

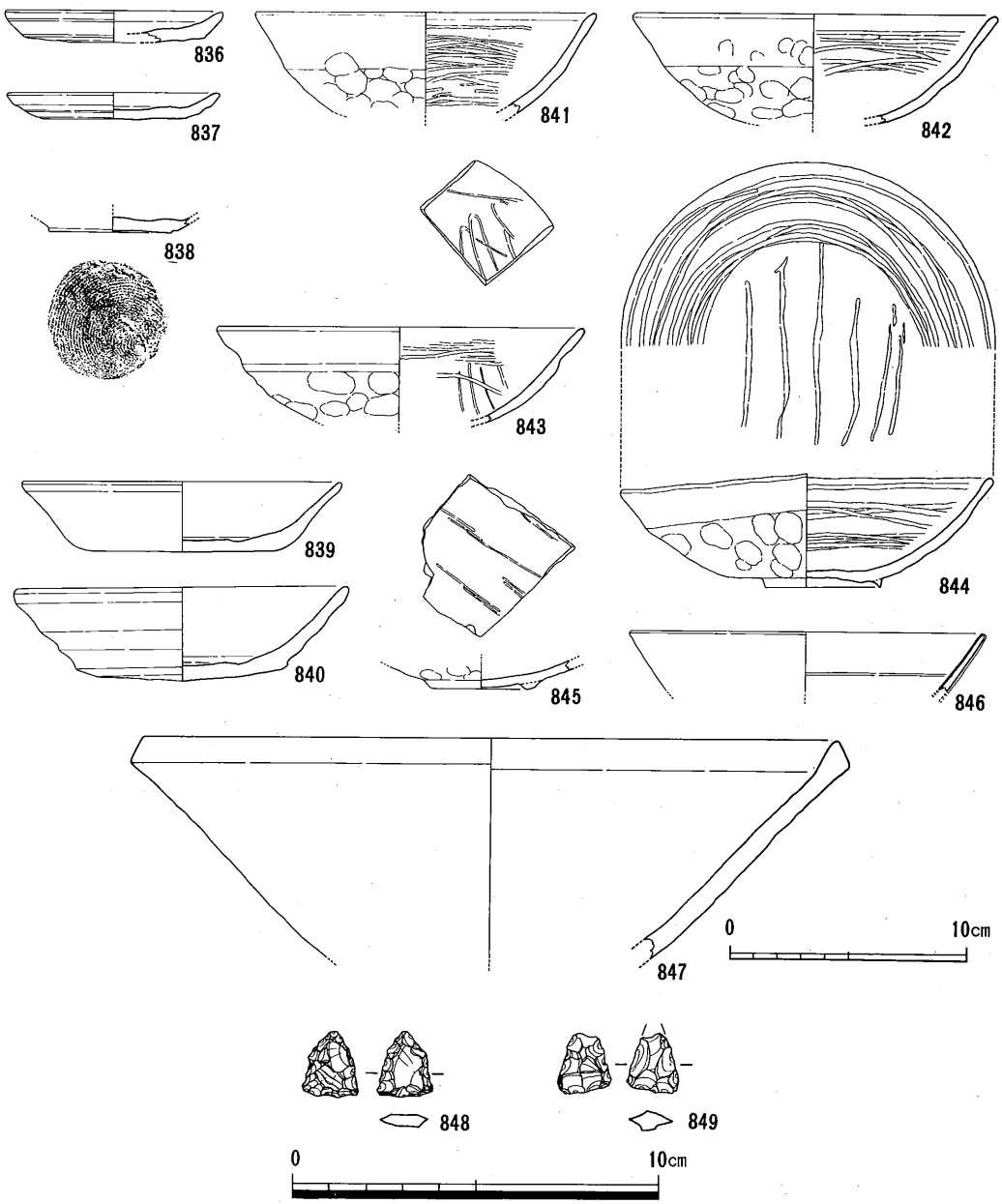
第161図　ＳＥ01平・断面図

には片彫による沈線が施されている。太宰府分類の白磁椀Ⅷ類－２に当たると思われる。

847は東播系のこね鉢である。体部は直線的に外上方に延び口縁端部はやや拡張気味に上方に摘み出している。

848・849は石鏃である。底部平基式のものである。

850は木製の手桶である。平面形は円形を呈しており、口径は21㎝、高さ10.5㎝を計る。底板



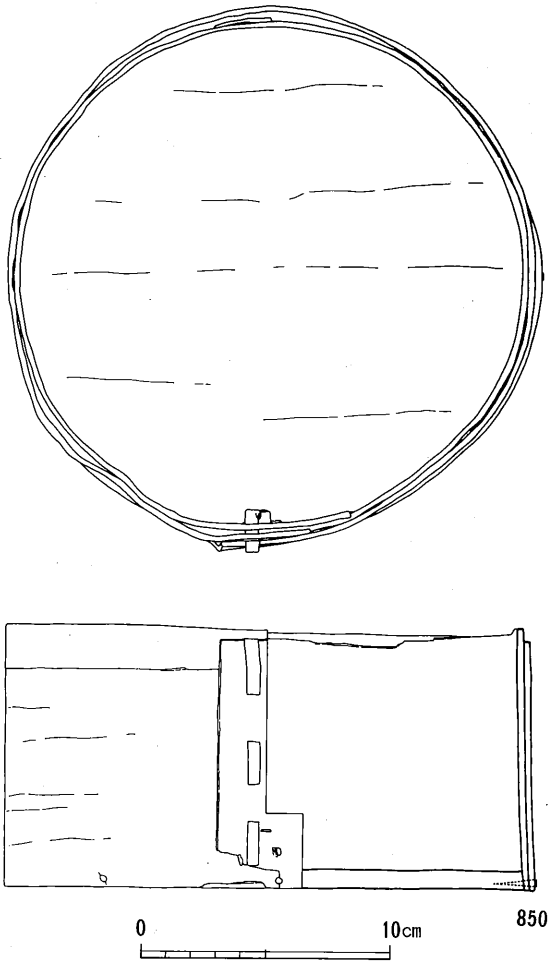
第162図　ＳＥ01出土遺物実測図①

には厚さ1㎝程度の板材を用いている。側板は0.2㎝の薄い板を二重にまいて作られている。接合部は三重に重ね合わせて桜の皮で編み込むように作られ、底板と側板の接合部には等間隔で木釘が打ち込まれている。

最下層より出土した竹製のざるは縁の部分を円く編み込んでおり、現在使用されているものとほとんど変わらないものであった。

844の瓦器は第15層直上より出土しており、この井戸が作られた時に投げ込まれたものであることが土層より言えるものである。

時期は畿内産の瓦器から13世紀後半頃のものと思われる。



第163図　ＳＥ01出土遺物実測図②

SE02

①概要

SE02は調査区のほぼ中央部東寄りで検出された。この井戸に伴う遺構は検出されなかった。

②井戸の構造

検出規模は幅0.95mのほぼ円形を呈している。検出面より0.35mをロート状に、それより下0.46mを円柱状に造るもので、掘り方の深さは0.81mを計るものである。

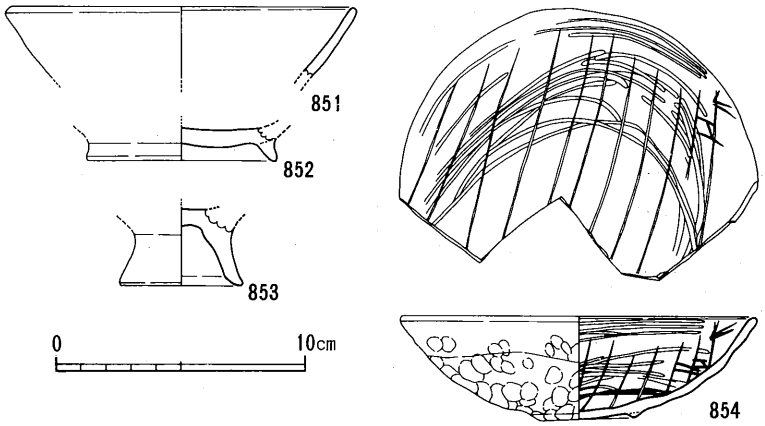
井戸は下部の円柱状部分の壁に添うように方柱状の河原石を立てて並べ、その下に高さ10㎝程度の曲げ物を持つ構造である。側辺の立石は明黄茶色粘質土を間に詰めるように造られており、掘削土層も粘質土であることから水溜めの井戸の可能性が考えられる。

③出土遺物

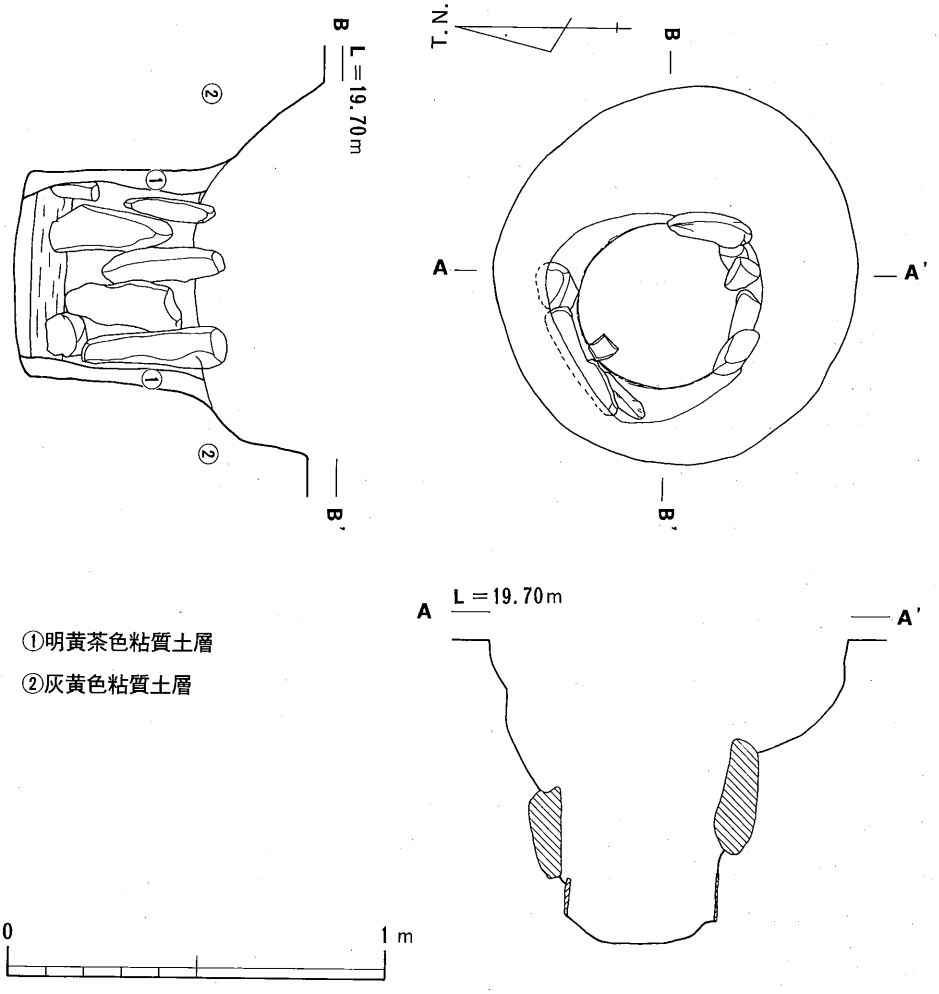
851・852は土師器の椀である。底部にしっかり外方に踏張る高台が付いている。

853は脚付きの小皿か坏と思われる。

854は畿内産の瓦器である。底部に断面三角形状の高台が付き、体部は内彎気味に外上方に延びるものである。体部外面には指頭痕が見られ、体部内面には横方向のヘラ磨きが、内面全体には平行ヘラ磨きが施されている。



第164図　ＳＥ02出土遺物実測図



第165図　ＳＥ02平・断面図

時期は、畿内産の瓦器より13世紀末頃と思われる。

SE03

①概要

SE03はSK18の北部に接するように検出された。堆積埋土よりSK18との切り合いは無く、ほぼ同時期に機能していたことが考えられるものである。

②井戸の構造

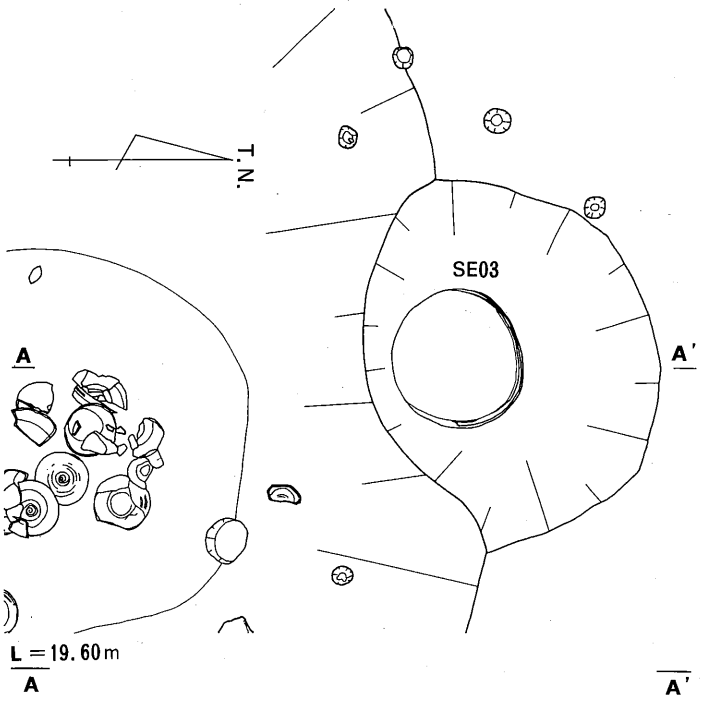
検出規模は幅0.36mの円柱状の掘り方を持つもので、最下部に曲げ物を持つものと思われる。曲げ物は検出されたときには腐食が著しく、詳細は不明である。

③出土遺物

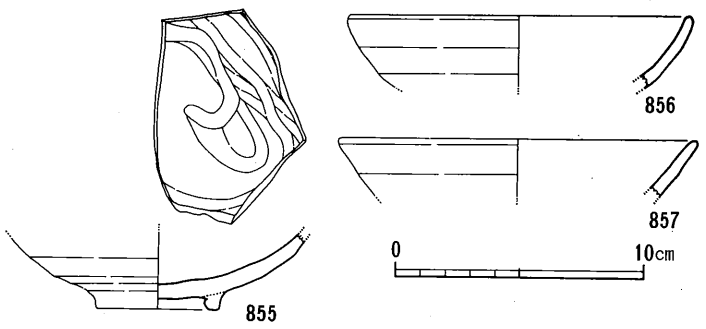
井戸枠内より少量遺物が出土している。

855は瓦質土器の椀である。底部に断面方形の高台が付き、体部はやや内彎しながら外上方に延びる。体部下半にはヘラ削りが、底部高台内面には糸切り痕が認められる。体部内面には幅5㎜程度のヘラ磨きが施されている。西村遺跡に多く見られる瓦質土器と思われる。

856・857は土師器の椀である。856は体部がやや内彎気味に延びるもので口縁端部は丸くおさめている。



第166図　ＳＥ03平・断面図



第167図　ＳＥ03出土遺物実測図

SE04

①概要

SE04は調査区南半のSD47から東方向に派生するSD45のほぼ延長上にある。

②井戸の構造

SE04は天幅2.6mのほぼ円形を呈している。土層断面から見て、遺構検出面より90cmはおそらく廃棄時に堆積したものと思われ、それを取り除くと刳り貫きの井戸枠を主体とする石組の井戸が検出された。

井戸の上部構造は不明であるが石組上部より加工板材が出土したことから何らかの施設があったことが窺える。井戸の主体部構造はまず中央に刳り抜きの井戸枠を置き、その回りに裏込め石の弾力材として6枚の板材を入れ、そして掘り方との間に人頭大の石を裏込めとして入れている。井戸の掘り方が天幅に比べて底幅が狭いため、裏込め石も井戸枠上半では多いが下半では少ないようである。なお、井戸枠に使われた木材はクスノキである。

③出土遺物

出土遺物は廃棄時の堆積層と井戸枠内埋土および裏込め埋土より出土している。しかし出土土層が不明のものもあり、ここではそれをまず説明する。

858～877はSE04出土の出土土層が不明のものである。

858～861は土師器の小皿である。底部はヘラ切りのもの(858・859)と糸切りのもの(860・861)がある。体部は直線的に外上方に延びるものとやや内彎するものがあるようである。

862・863は土師器の坏である。底部調整は糸切りで体部は直線的に外上方に延びる。

864～866は土師器の椀である。864はやや小振りに作られている。底部にはしっかりした高台が付き、体部はやや内彎気味に外上方に延び口縁端部は丸くおさめられている。体部外面下半には指頭痕が顕著に施されている。焼成がやや硬質で、胎土に石英が含まれることから所謂「早島式土器」と思われるものである。

867は黒色土器A類である。

868・869は瓦質土器である。体部はやや厚めに作られている。底部には粘土紐を貼り付けたような高台が付けられている。

870～872は畿内産の瓦器である。底部には断面三角形状の高台が付き、体部はやや内彎気味に外上方に延びる。体部外面下半には指頭痕が顕著に見られ、内面にはヘラ磨きが施されている。872は瓦器の小皿である。底部外面に指頭痕が見られ、内面にはヘラ磨きが施されている。

873～875は輸入磁器である。873は白磁皿で全面に釉が厚くかけられている。太宰府分類の白磁皿Ⅶ類－1に当たるものと思われる。874は白磁皿である。かなり薄手に作られており、口縁端部は外方に折り曲げられている。875は青磁碗である。内面に縦方向の片彫が見られる。全面に緑味がかった透明釉がかけられている。龍泉窯系青磁椀Ⅰ類－4に当たるものと思われる。

876は土師質土器の羽釜である。

877は瓦質土器のこね鉢である。体部は直線的に外上方に延び口縁端部は内側を上方に摘み出している。

878～896は廃棄後の埋土より出土した遺物である。廃棄後の埋土は5層に分けられ、各層より遺物が出土している。

878は第2層から出土した瓦質土器椀である。底部に断面方形の高台が付き、体部は内彎気味に外上方に延びる。体部外面下半にはヘラ削りが施されている。口縁部外面には帯状に炭素の吸着が認められる。

879～887は第4層から出土した遺物である。

879は土師器の小皿である。底部はヘラ切りで体部は直線的に外上方に延びるものである。

880～882は土師器の坏である。底部切り離し手法は全て糸切りである。

883～885は土師器椀である。883はやや厚手に作られている。884は底部にやや細身の断面三角形状の高台を持つものである。885は底部に低い断面方形のしっかりした高台を持つものである。

886は土師質土器の土鍋である。口縁部が外方に屈曲しているものである。

887は東播系のこね鉢である。口縁端部はやや上方に摘み上げておわらせている。

888～896は第5層から出土した遺物である。

888～890は土師器の小皿である。底部調整はヘラ切りである。体部はやや太めで端部を丸くおさめるものと細目でシャープにおさめるものがある。

891～893は土師器の坏である。891の底部がヘラ切りされる以外は全て糸切りである。893は体部が直線的に外上方に延び、口縁端部が内側に屈曲するものである。

894は土師器の椀である。体部は屈曲させ外上方に延び、口縁端部はやや外方に屈曲させるものである。

895は畿内産の瓦器である。器高がやや低いものである。

896は軒丸瓦である。

897～909は井戸枠内から出土したものである。井戸枠内にはおそらく井戸の上部構造に使用されていたであろう石が投げ込まれていた。埋土は黒色粘土層のほぼ単一土層で、その埋土より遺物が出土している。

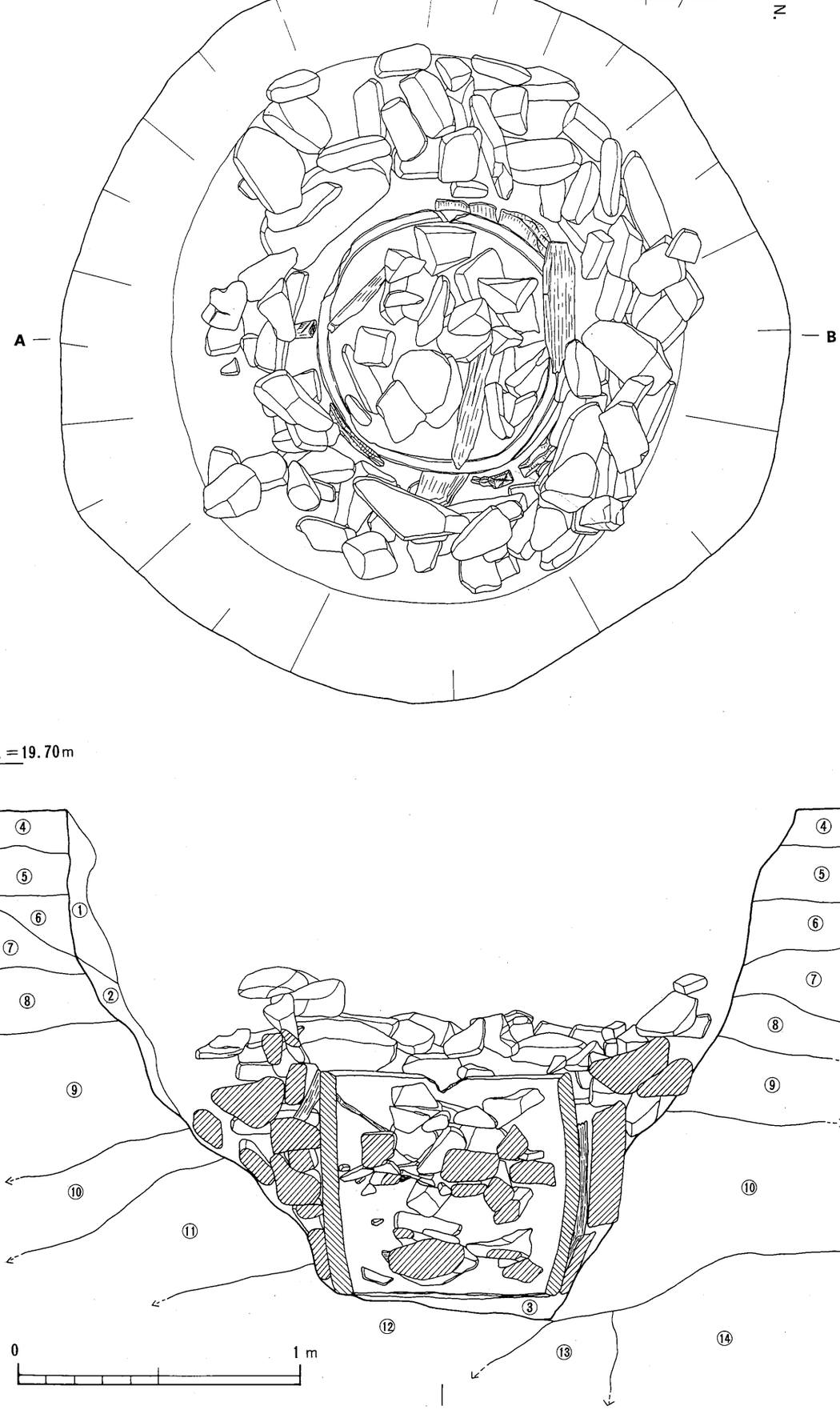
897～901は土師器の小皿である。底部切り離し手法はヘラ切りと糸切りが認められる。体部は直線的に延びるものが多いようである。

902は土師器の坏である。底部は糸切りされている。

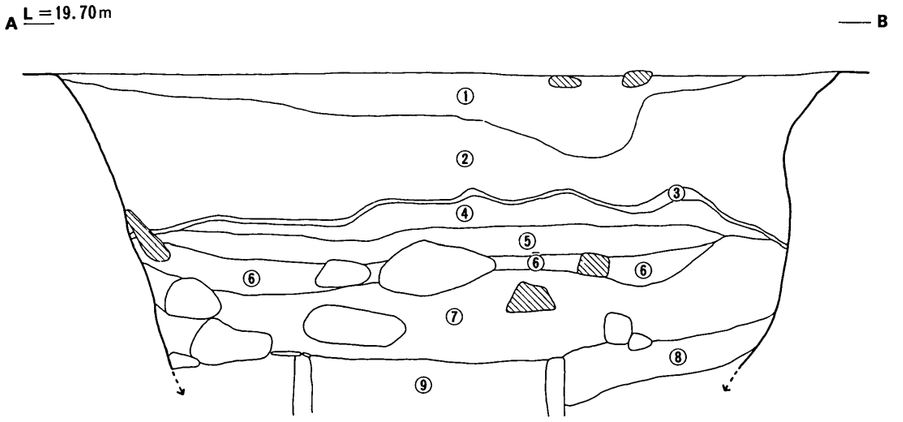
903は土師器の椀である。底部に断面三角形状のしっかりした高台が付けられている。

904は瓦質土器の椀である。底部に粘土紐を貼り付けたような高台が付いている。

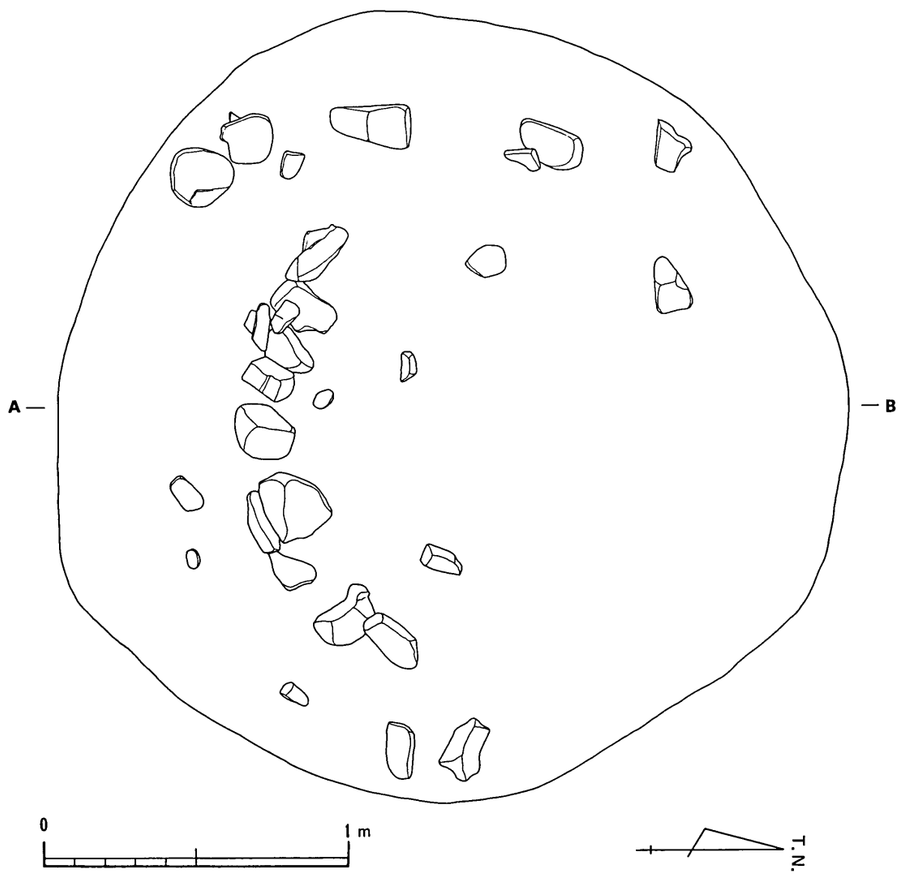
905は畿内産の瓦器である。底部に低い高台が付いている。内面見込み部分にはヘラ磨きが見

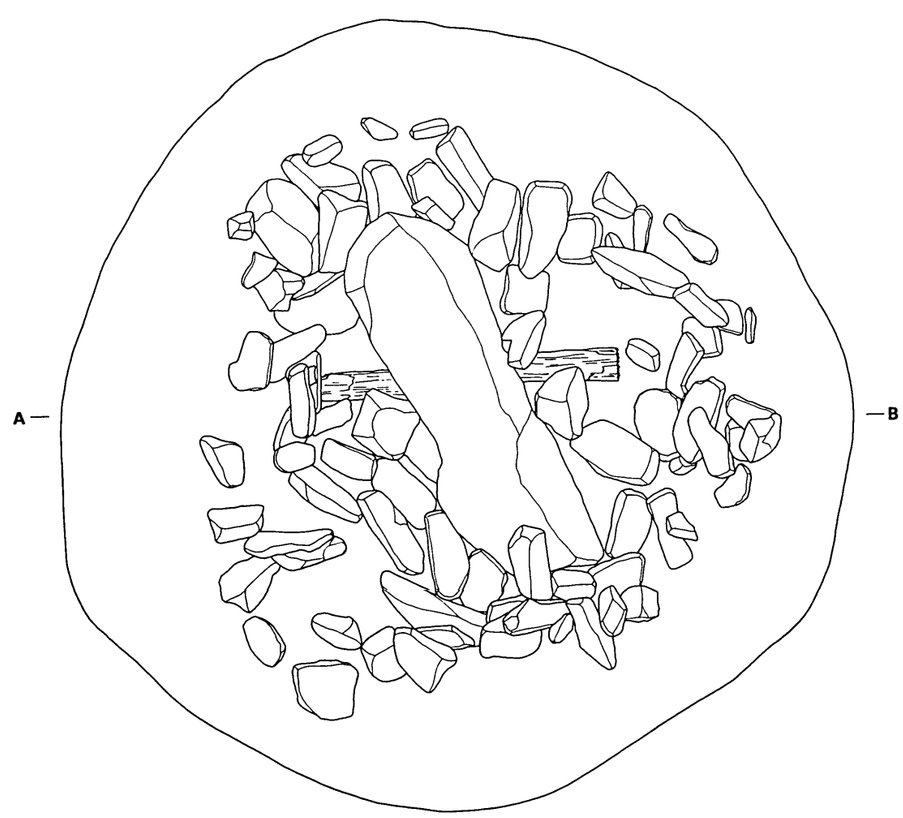


第168図　ＳＥ04平・断面図、井戸枠内最下部平面図



①黄灰色砂質土層（こげ茶褐色粒を少量含む）
②暗茶灰色砂質土層（こげ茶褐色粒を少量含む）
③暗褐色粘質土層
④暗灰色砂質土層
⑤淡黒灰色粘質土層
⑥淡茶灰黒色粘質土層（１～３㎜程度の砂粒を含む）
⑦淡灰黒色粘質土層
⑧灰黒色粘質土層
⑨黒色粘土層





第169図　ＳＥ04土層図・各平面図

られる。

906は輸入磁器の碗である。高台は畳付けより内部が浅く削り出されているがしっかりしたもので、見込み部分も体部もやや肉厚気味に作られている。内面見込み部分にヘラによる片彫が施されている。高台を除く全面に緑味を帯びた透明釉がかけられている。龍泉窯系青磁椀Ⅰ類－4に当たるものと思われる。

907～909は井戸枠内の最下層から出土したものである。全て胎土も焼成もよく他の土師器の小皿・坏に比べると精製されたものである。底部は全てヘラ切りされている。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部はシャープにおわらせている。

910～913は井戸裏込めより出土したものである。

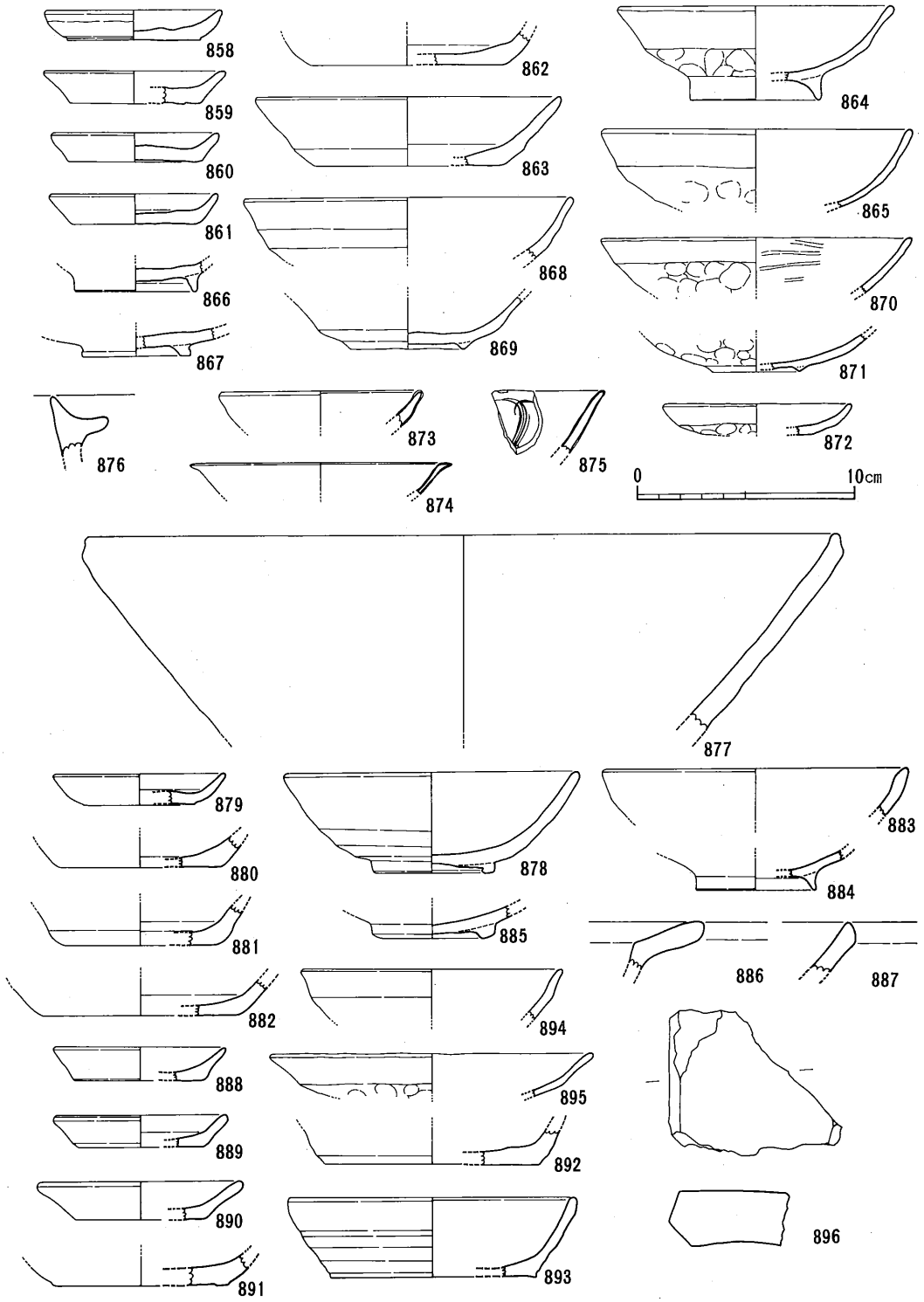
910は土師器の小皿である。底部はヘラ切りされている。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部はシャープに終わらせる。

911は土師器の坏である。底部は糸切りされている。体部は内彎気味に外上方に延びる。

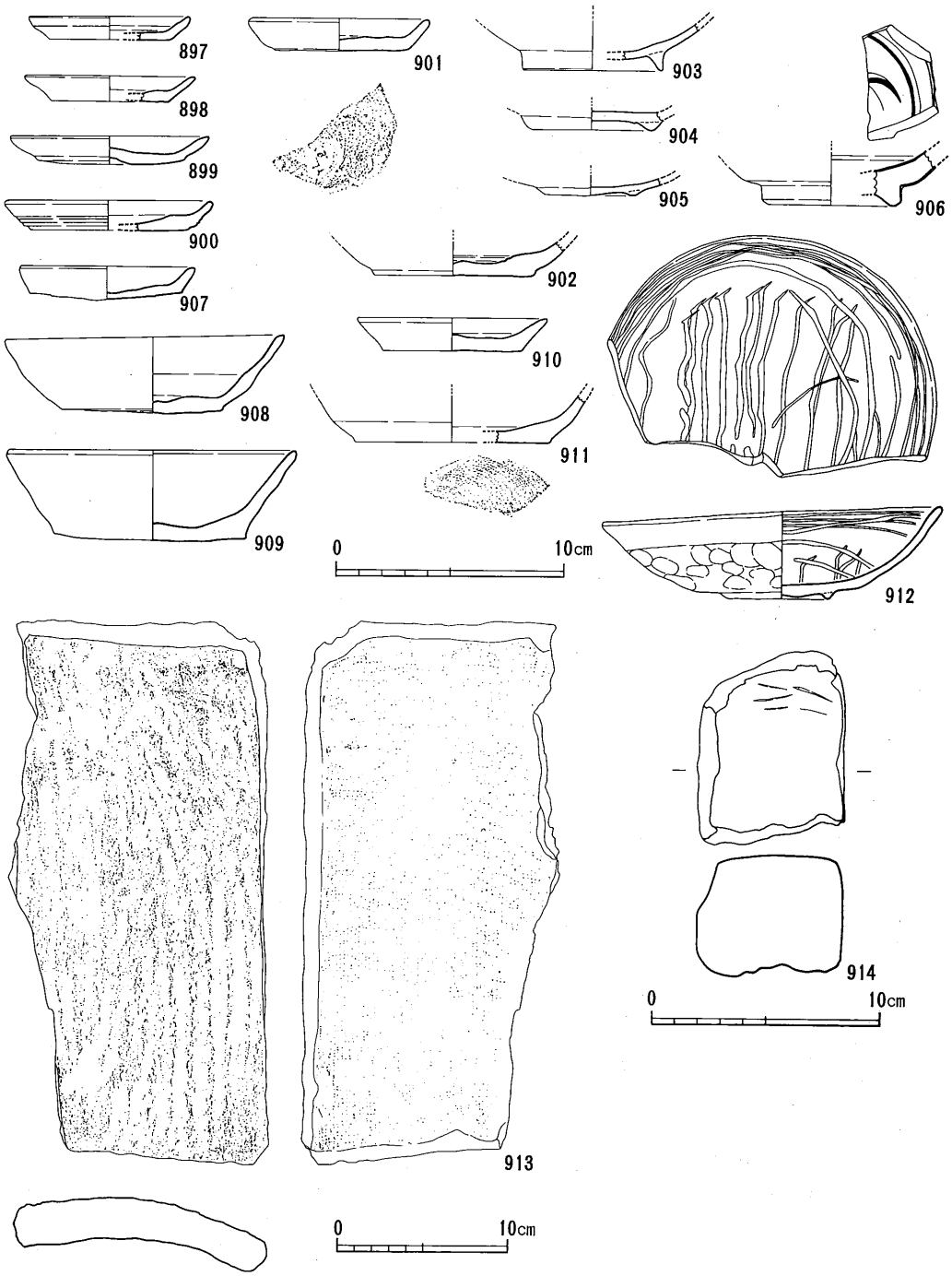
912は畿内産の瓦器である。底部に断面三角形状の高台が付き、体部は内彎気味に外上方に延びる。体部外面下半には指頭痕が顕著に見られ、内面には横方向のヘラ磨きが施され、内面見込み部分には平行ヘラ磨きが施されている。

913は軒平瓦である。外側には粗い叩きが施され、内側には布目が認められる。

914は石英粗面岩製の砥石である。



第170図　ＳＥ04出土遺物実測図①



第171図　ＳＥ04出土遺物実測図②

(5) 塚

現在の畦畔に伴い5基の集石が確認された。確認された集石を全て塚と仮定して南から1～5号塚と仮称する。1・2号塚は田圃の畦畔の途中にあるもので現状は南北に細長い形状を呈している。3号塚は田圃のコーナー部にあるものでいびつな楕円形を呈している。4号塚は1・2号塚と同様に畦畔の途中で検出されたもので細長い形状を呈している。5号塚は田圃のコーナー部で検出されたものでほぼ三角形状を呈している。

これら5基の塚の立地を見ると5号塚のように塚によって田圃の形状が変えられているものがみられる。

森1・2号塚

①概要

1・2号塚は畦畔の途中で検出されたもので、細長い形状を呈していた。1号塚の検出規模は東西約1m、南北約5.3mで、積み石の高さは約0.8mを計るものである。2号塚の検出規模は東西約1.6m、南北約4.7mで、積み石の高さは約0.74mを計るものである。使用されている石はほとんどが人頭大ほどの河原石である。

遺物は1・2号塚を構成する集石の中から多量に出土している。

②森1号塚集石出土遺物

915～917は土師器の小皿である。体部はすべて直線的に外方に延びるものばかりであるが、短く延びるもの（915）と長く延びるもの（916・917）があるようである。底部は全て糸切りされているが回転糸切りのもの（915）と静止糸切りのもの（916・917）に分けられる。体部が短く延びるものは回転糸切り、長く延びるものは静止糸切りと体部の長さ（口径に対する底径の比率）と底部切り離し手法に何らかの関係があることがわかる。915は口縁端部に沈線を施している。

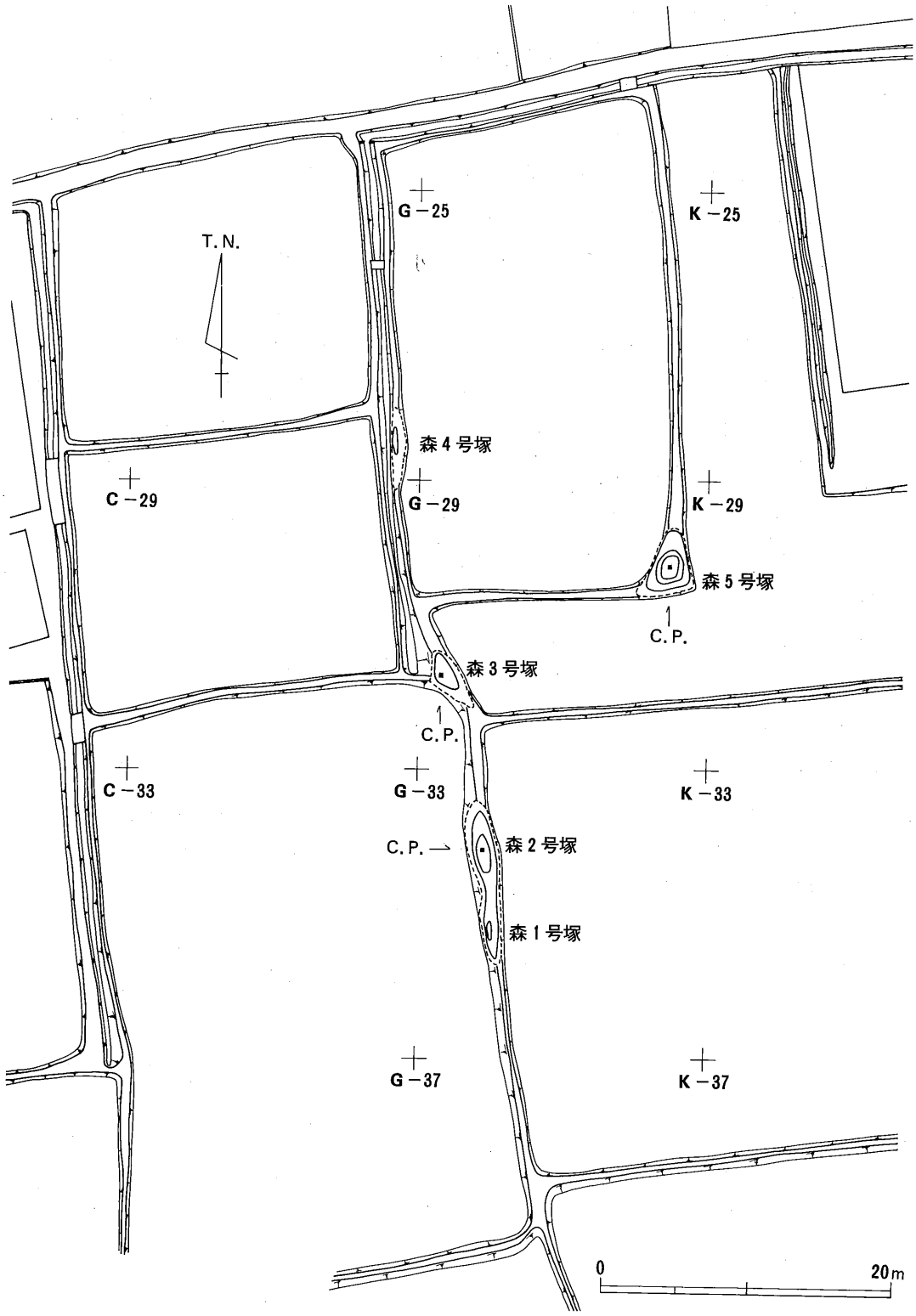
918は灰釉が部分的にかかっている陶器の皿であろうか。高台は細身で短く、体部は内彎気味に外方に延びる。内面には布目が見られる。

919は体部外面下半以外に緑味を帯びた透明釉を施した青緑釉皿である。高台は台形状に削り出され、施釉されていない。内面見込み部には蛇の目釉剝ぎが認められる。

920は備前焼の擂鉢である。口縁外面を拡張させ、2条の凹線を施す。内面には金具の櫛による12本一単位の条溝が少し間隔を開けて施される。口縁部の特長から17世紀後半頃である。

921は須恵器の甕の口縁部である。頸部はやや外反気味に延び、口縁端部外面は櫛描の後上半に2条の凹線、下半にも凹線を施し、その間に櫛の先端での左下がりの刺突文を施している。

922は土師質土器の土釜である。口縁部の立ち上がりはしっかりしているが鍔が形骸化し、ほとんど残っていないものである。中世後半頃のものであろうか。



第172図　森 1 ～ 5 号塚配置図

③森2号塚集石出土遺物

923～929は土師器の小皿である。体部は直線的に外方に短く延びるもの（923～925）と長く延びるもの（926～929）がある。923は体部が短いがほかのものとは胎土、焼成においてその他のものとは異なっている。924と927の口縁部内面には煤が付着しており、おそらく灯明皿として使用されていたことが窺える。929は体部下半で屈曲するが直線的に外方に長く延びる。

底部は体部の形態で分けられたように924・925は高台径が大きく体部が短いもので底部切り離し手法は回転糸切りで、926～929のように高台径が小さく体部が長いものは静止糸切りになるようである。

930は土師器の坏である。直線的に外方に延びる体部を持つ。底部は静止糸切りされている。

931・932は備前焼である。931は擂鉢で口縁外面を拡張させ、2条の沈線を施す。内面には12本一単位の金具の櫛による条溝が少し間隔を開けて施されている。外面拡張部下には重ね焼の痕跡が認められる。932は備前焼の壺である。短い頸部から口縁部は玉縁状に折り曲げられている。全面に自然釉が付着し、暗緑灰色を呈している。備前の擂鉢は口縁の特徴から17世紀後半頃と考えられる。壺は間壁編年によるⅣ期（15世紀頃）に当たると思われる。

④埋葬施設

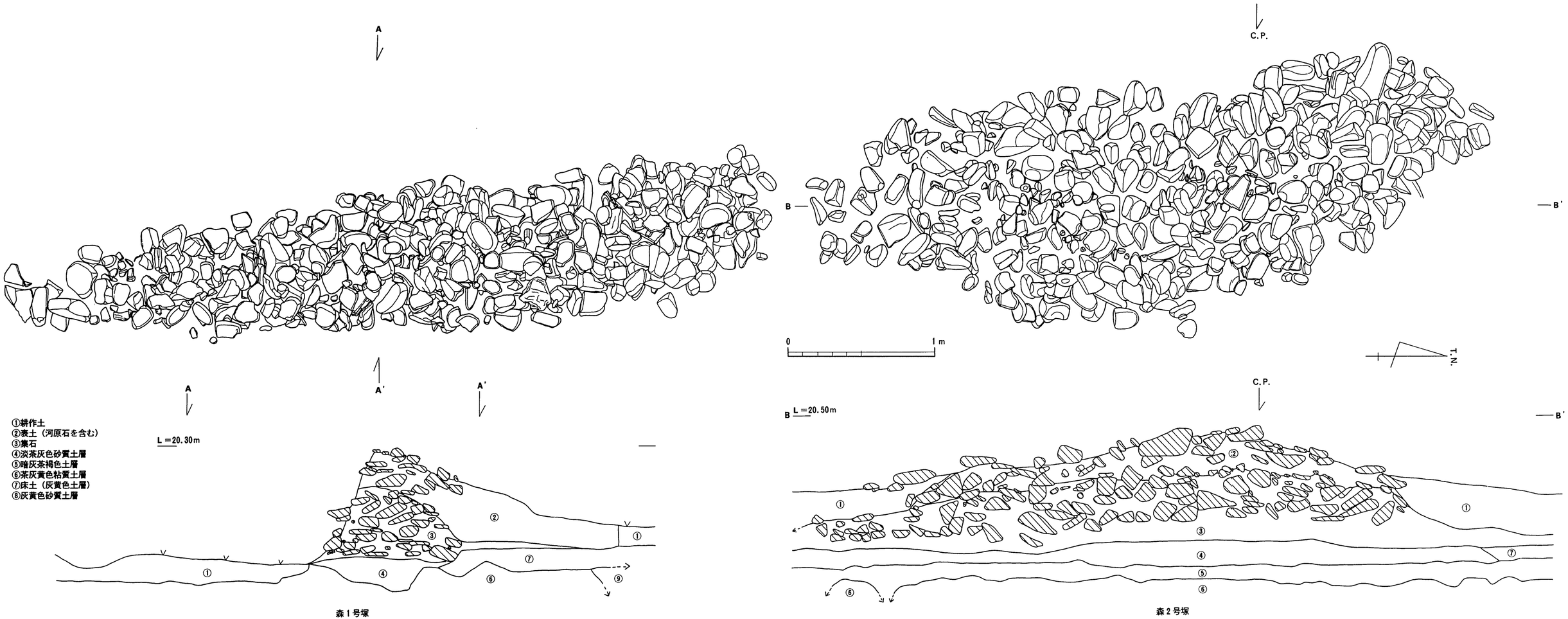
検出されなかった。

⑤墳丘

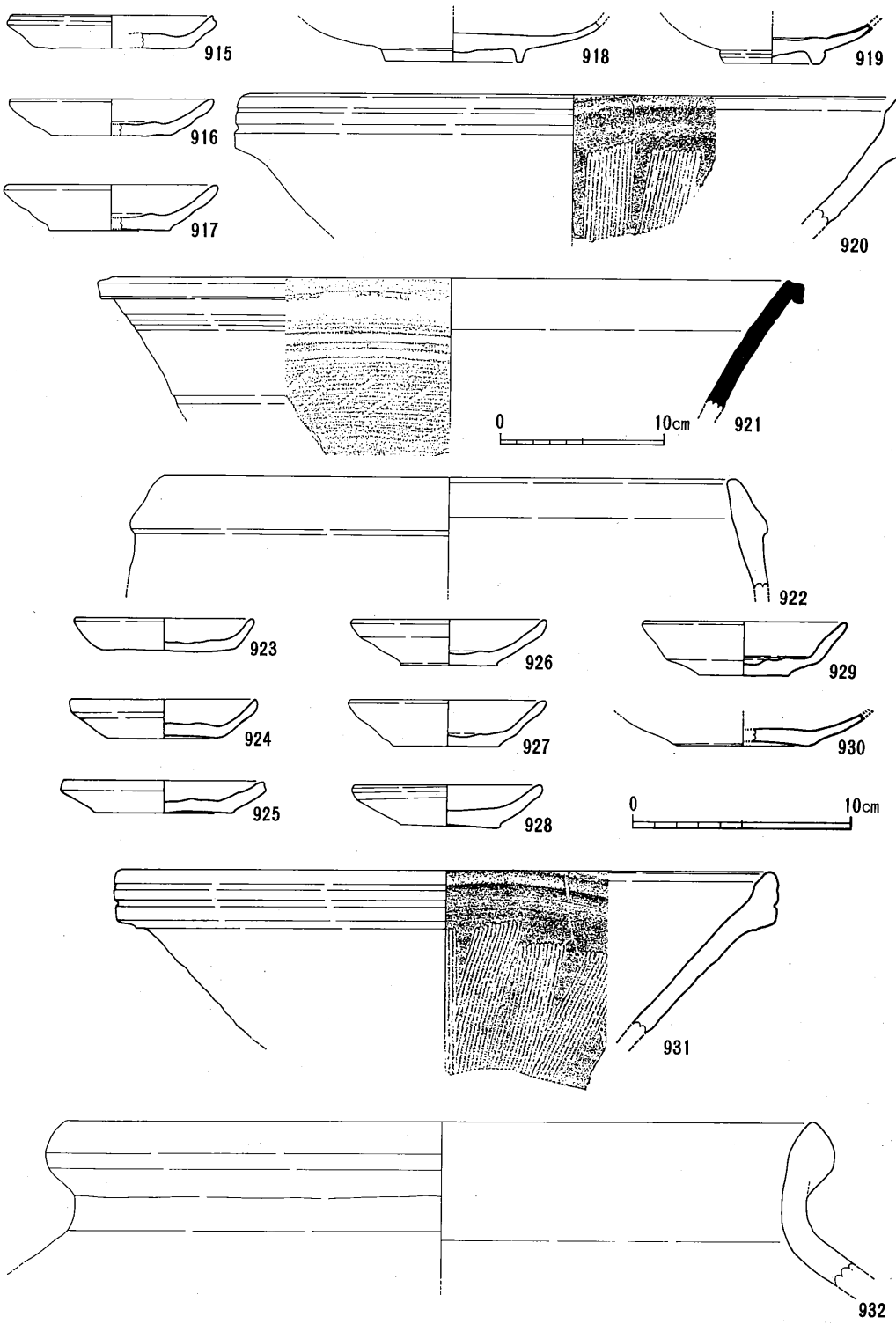
検出されなかった。

⑥まとめ

調査の結果、積み石除去後に墓壙が検出されなかったのでおそらく塚ではないものと思われる。また、出土遺物から見ると1点備前焼の壺で室町時代後半期と思われるものが出土しているが、その他の遺物は17世紀後半頃を主体とするものばかりであることが判る。



第173図　森1・2号塚平・断面図



第174図　森1・2号塚出土遺物実測図

森３号塚

①概要

３号塚は畦畔のコーナー部で検出されたもので、いびつな楕円形を呈している。検出規模は南北約1.5m、東西約2.1m、積み石の高さは約0.6mを計る。使用されている石はほとんどが人頭大の河原石である。

３号塚を構成する集石内と集石除去後検出された石室内より、多量に遺物が出土している。

②集石上層出土遺物

933～939は土師器の小皿である。体部がやや内彎気味に外方へ短く延びるもの（933・934）と、直線的に外方に延びるもの（935～939）の２形態がある。森１・２号出土の小皿と同様に底部調整が前者は回転糸切りで後者は静止糸切りである。935～939の口縁端部には２～３ヵ所に煤が付着していることから灯明皿として使用されていたことがわかった。

940は瓦質土器の鍋である。口縁を外方に直角に折り曲げている。

③埋葬施設

集石除去後に南西部が削られた状態で石室が検出された。

検出された石室の掘り方の現存長は長辺1.3m、短辺0.74m、深さ0.16mを計り、石室の内法は長軸1.07m、短軸0.45m、深さ0.14mを計る。

石室の構築方法は底部に10～30cm程度の平らな河原石を敷きつめて床面を作り、側壁は30cm程度の方柱状の河原石の片方を重ねるようにし、横に並べた状態で検出された。

④石室内出土遺物

約半分程残った石室縁辺部から鉄釘（941）と刀子（942）が出土している。

鉄釘はほぼ正方形で一辺４mm程度のもので上端がやや曲っている。打ち込む際に曲ったものであろうか。

鉄釘は石室床面の側辺部で検出された。おそらく木棺に使用されていたものと思われる。

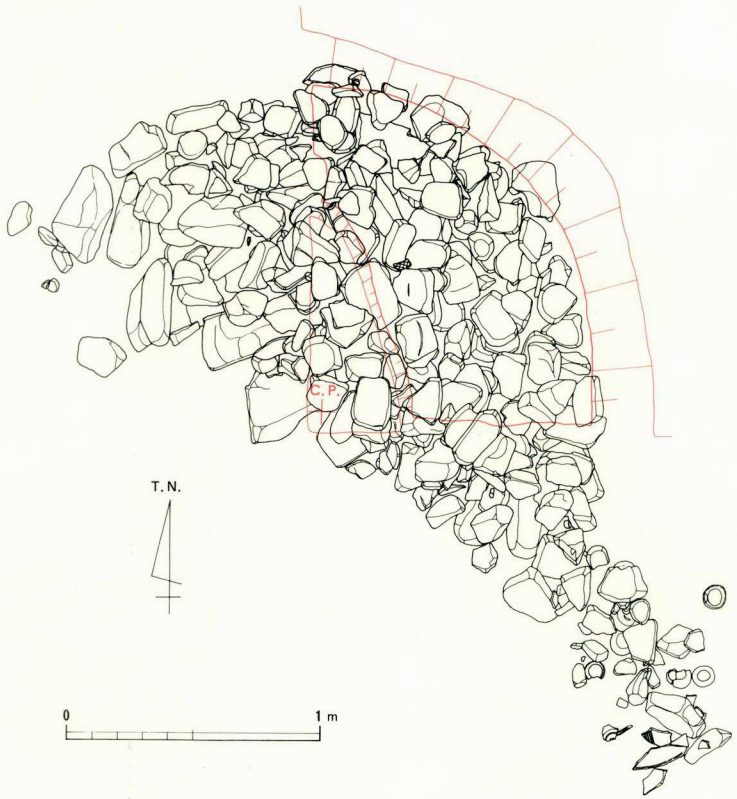
刀子は現長10.2cm（刃部8.2cm、柄部２cm）のものである。

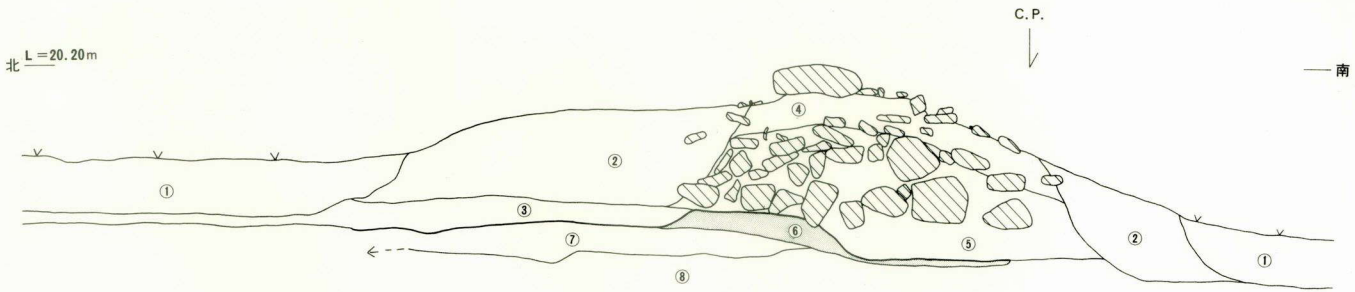
⑤墳丘

集石除去後検出された墳丘形態は、南西部が削られてはいるものの南北約2.2m、東西約2.2mのほぼ隅丸方形を呈している。墳丘は断ち割り断面より茶灰黄色粘質土の地山上に暗灰茶色粘質土と淡灰茶褐色粘質土の版築をし、墳丘としたことが窺える。墓壙は墳丘版築後掘られたようである。

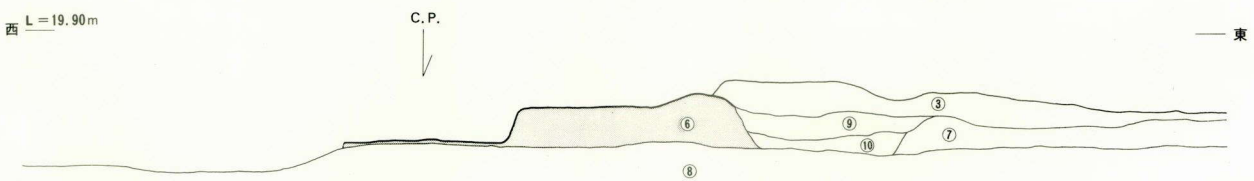
⑥まとめ

石室が半壊していることから集石はこの塚が壊されたときに一度取り除かれたことが判る。集石より出土した遺物は近世のものばかりである。石室から出土したものからは時期決定はできず、この塚の構築時期は不明である。





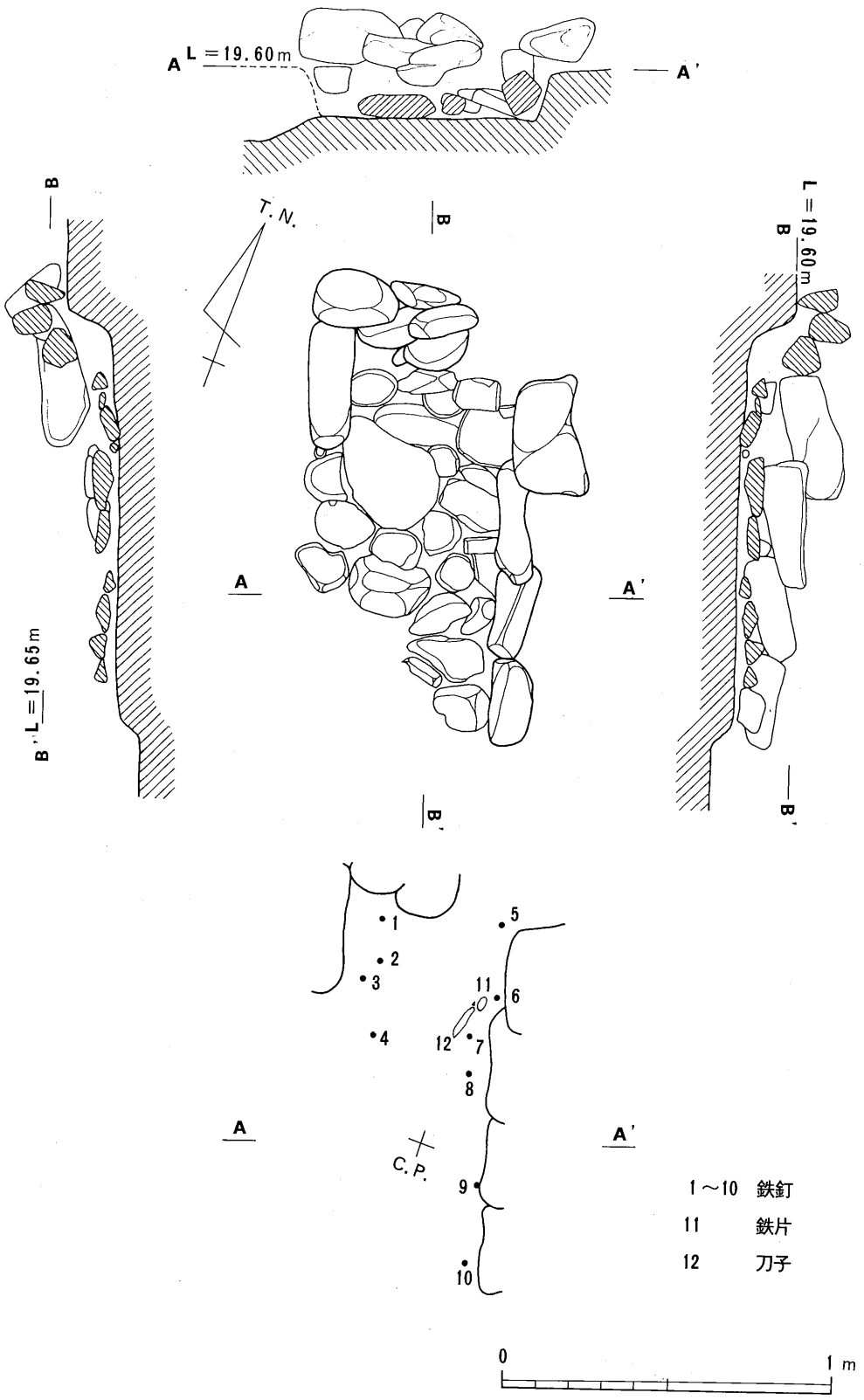
南北トレンチ



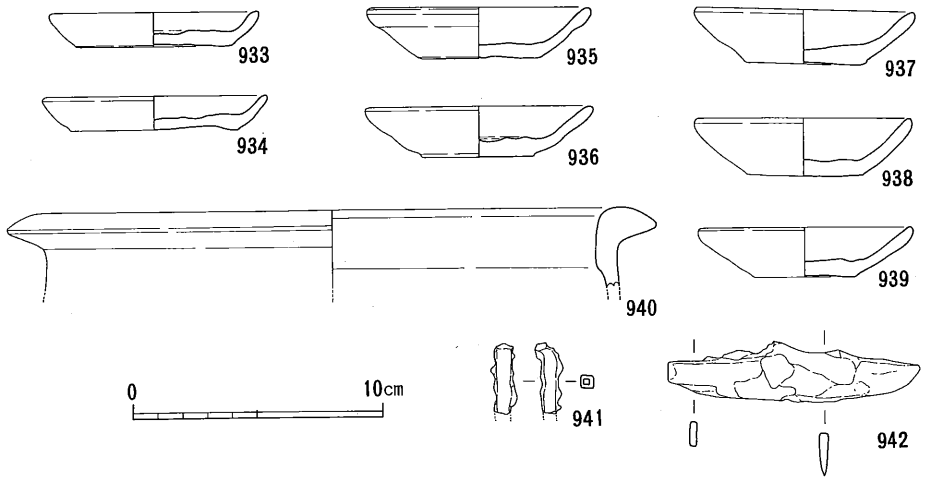
東西トレンチ

①耕作土
②灰黒色粘質土
③灰黄土層（床土）
④表土（河原石を含む）
⑤集石
⑥淡灰茶褐色土層（褐色粒を含む）
⑦暗灰茶褐色土層（1～2㎜程度の褐色粒を含む）
⑧茶灰黄色粘質土層
⑨茶灰色砂質土層
⑩茶灰色粘質土層

第175図　森3号塚平・断面図



第176図　森3号塚平・断面図、出土鉄製品位置図



第177図　森3号塚出土遺物実測図

森4号塚

①概要

4号塚は畦畔の途中で検出されたもので、細長い形状を呈している。調査の結果良好な集石は検出されなかったのでおそらく塚ではないと考えられる。

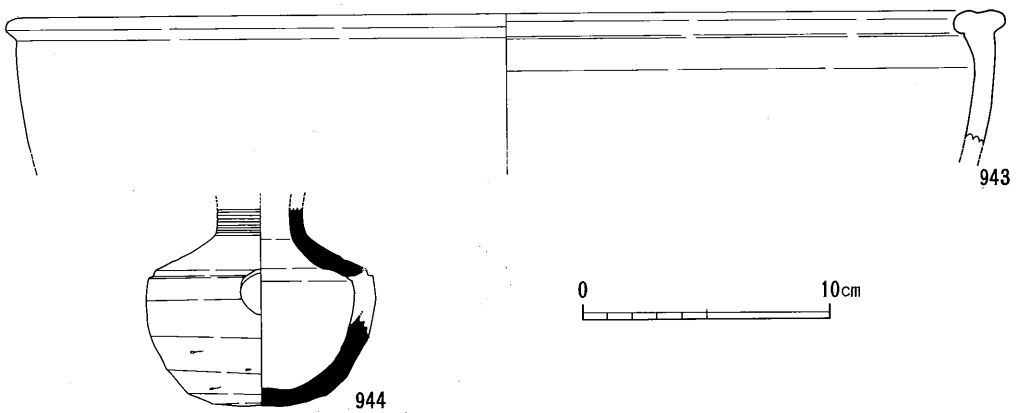
②集石出土遺物

集石より出土した遺物は近世のものばかりであった。

943は土師質土器の火鉢と思われる。口縁部が左右に拡張され、上面に平らな面を持っている。体部外面には篦先による刺突文が認められる。

944は須恵器の甕である。底部はヘラ削りされておりやや張った肩部を持つ。頸部には櫛描が施されている。

出土遺物は近世のものと古墳時代のものである。



第178図　森4号塚出土遺物実測図

③埋葬施設

検出されなかった。

④墳丘

検出されなかった。

森5号塚

①概要

5号塚は畦畔のコーナー部で検出されたもので、三角形状を呈している。集石検出規模は南北約2.8m、東西約2.6m、石積の高さ約1.45mを計る。使用されている石は10cm～30cm程度の河原石である。

5号塚を構成する集石および集石除去後検出された石室内、墳丘裾部より多量の遺物が出土している。

②集石出土遺物

森5号塚からは多数の遺物が出土している。945～952は表土および集石上層からのもので、953・954は石組攪乱部分からの出土である。955～960は石組南辺において集中して出土したもので、おそらく埋葬時に石組外部に副葬したものと考えられる。961～977は墓壙内から出土したものである。

945・946は土師器の小皿である。945は体部の立ち上がりが短く、底部が回転糸切りされている。946は口径に比べて高台径の小さいもので体部が長いのが特徴である。底部は静止糸切りされており、森塚1～3号で出土した土師器の小皿と同様な傾向を示している。

947・948・949は土師質土器である。947は羽釜で、立ち上がりはしっかりしているが鍔はかなり形骸化しており、少し痕跡を止める程度である。948は擂鉢で体部外面に指ナデが認められ、内面には櫛による条溝が単位間幅をかなりあけて施されている。内面見込み付近は器表面がかなり磨滅している。949は火鉢の底部と思われる。底部に楕円形状の高台が3ヵ所程付くものと思われる。

950・951は備前焼である。950は内面に突帯のない灯明皿で、底部は回転糸切りされた後口縁部近くまでヘラ削りされている。口縁部外面と内面に塗り土されており、口縁端部内面には煤が付着している。951は擂鉢である。口縁部外面を拡張させ2条の凹線を施す。内面には金具の櫛による条溝が密に施されており、上端はナデ消されている。全面に塗り土されている。

952は硯である。左右に土手を作り、底部には斜めに削られた高台を持つ。

953は龍泉窯系青磁碗である。高台は幅広に短く削り出されており、体部はやや内彎気味に上外方に延び、口縁端部は丸くおさめられている。体部外面には鎬蓮弁が片彫されている。高台畳付けおよびその内部を除く全面に青味を帯びた緑色の釉がかけられている。太宰府分類の龍泉窯

系青磁椀Ⅰ類－５・ｂに当たるものと思われる。

954～957は須恵器の壺と甕である。954は壺で、底部がしっかり作られており、体部は丸味を帯びて頸部に至るが、それ以上は欠損している。体部の最大径はほぼ中央にある。体部外面下半は縦方向のヘラ磨きが、上半は指ナデが施されている。内面は左上がりの指ナデが全面に施されている。色調は濁白色でやや軟質に焼成されている。出土した遺物のなかにこの壺に伴う口縁部がないことからはじめから打ち欠かれ、蔵骨器として使用されていた可能性が考えられる。955は壺でやや内彎する体部から「く」の字に頸部が外方に屈曲し、口縁端部外面に面を作る。体部外面には３㎜前後の叩きが施され、頸部にはかすかながら叩きの痕跡が認められる。おそらく円筒状のものを作り、外面に２×４㎜角程度の叩き調整を行ないながら外方に折り曲げ頸部を作り、頸部だけその後に指ナデ調整を施したものと思われる。体部内面は粗い指ナデ調整が施され、頸部内面にはヨコナデ調整が施されている。956は甕である。内彎気味の体部から「く」の字に頸部を折り曲げ、外反させながら口縁端部に至る。体部外面には４×３㎜程度の叩きが施され、頸部外面にもわずかに叩きが認められる。体部内面は粗い横方向の指ナデ調整が、頸部内面にはヨコナデ調整が施されている。頸部成形方法は955と同様である。957は甕で内彎気味の体部から緩やかに外方に曲がり頸部を作っている。体部外面には４×４㎜の叩きが施されており、頸部はヨコナデ調整されている。内面は全面にヨコナデが施されている。胎土は955・956に比べると１～４㎜程度の砂粒を多く含む。

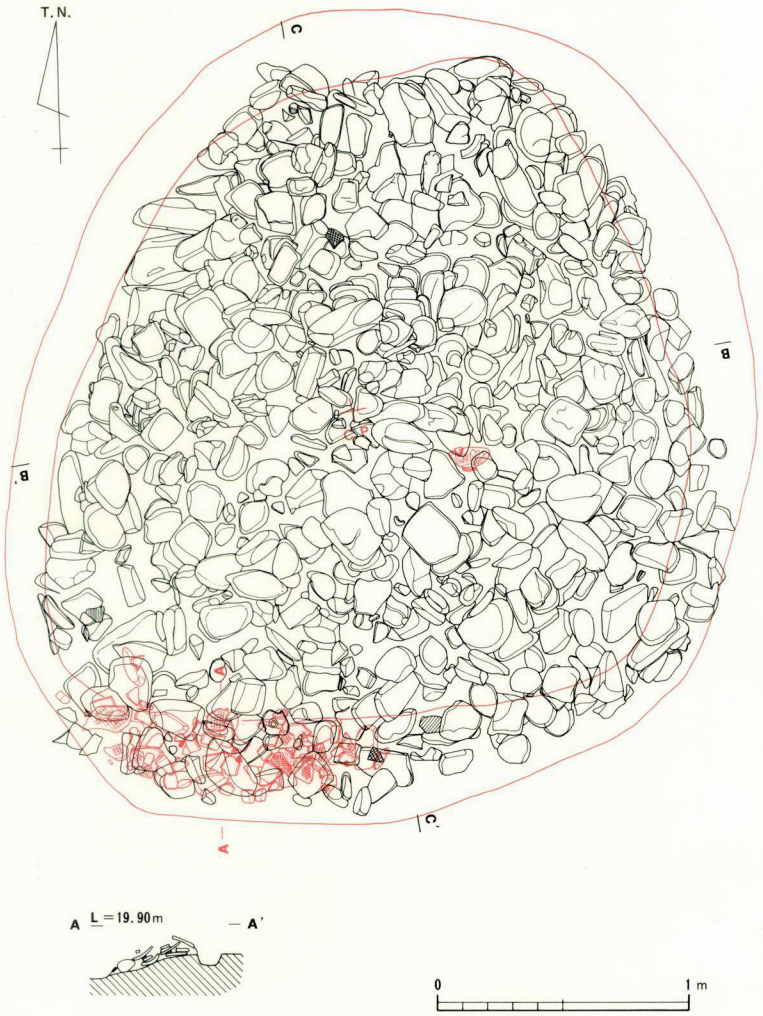
958・959は亀山焼の甕である。「く」の字に曲がり、直線的に延びる頸部を持ち、口縁端部をやや上下に摘み出している。体部外面には３㎜角の叩きを施し、頸部と内面はヨコナデ調整されている。959は頸部の屈曲が958に比べるとややきついようである。13世紀後半頃のものと思われる。

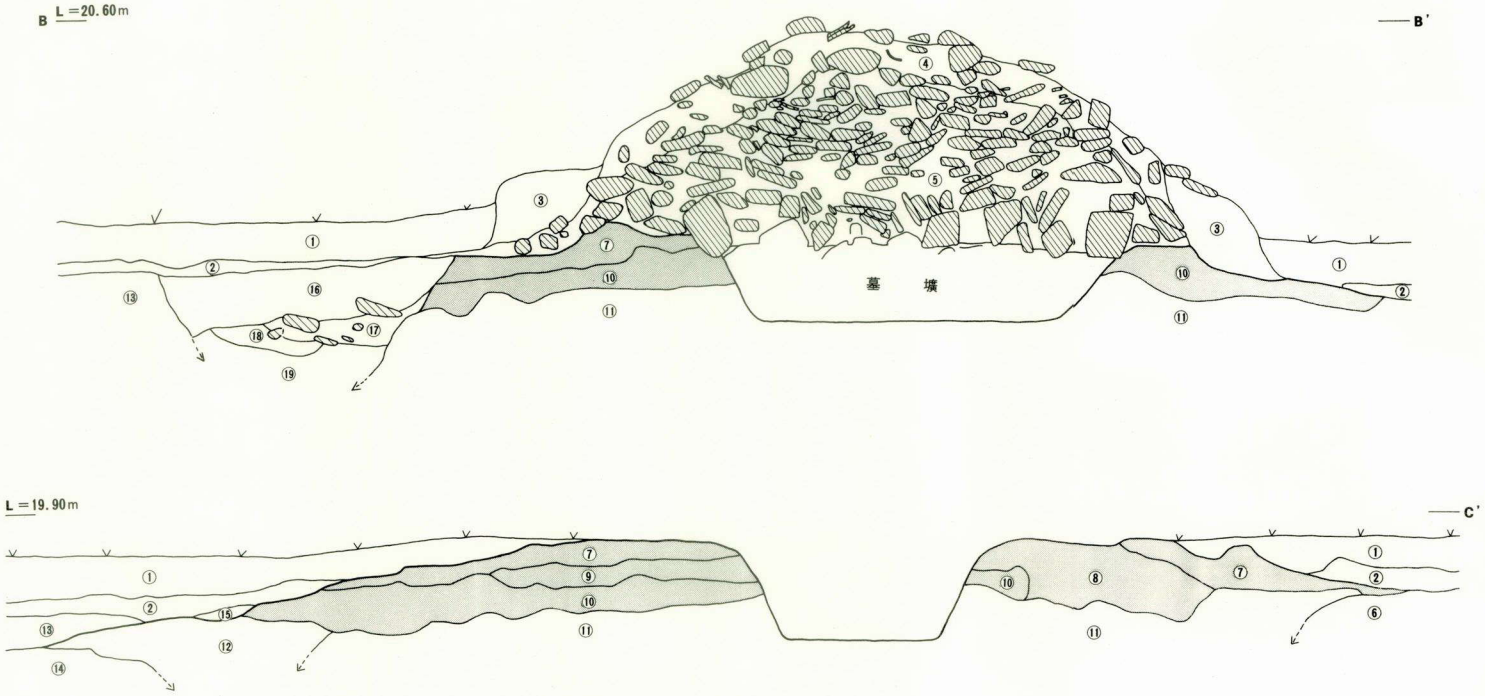
960は東播系の甕である。体部から頸部が短く外方に折れ曲がり、口縁部内面にやわらかい凹線を持つ。体部外面には２㎜間隔の平行叩きが施され、頸部外面と内面はヨコナデ調整されている。時期は13世紀頃のものと思われる。

③埋葬施設

集石除去後に上部が攪乱を受けたほぼ東西に長い長方形を呈する石室が検出された。検出された石室の掘り方は長辺1.68m、短辺0.95m、深さ0.33mを計り、石室の内法は長軸1.19m、短軸はやや西側の方が短く、東側で0.64m、西側で0.55mを計るものである。石室は短辺軸で真北より85°西偏している。

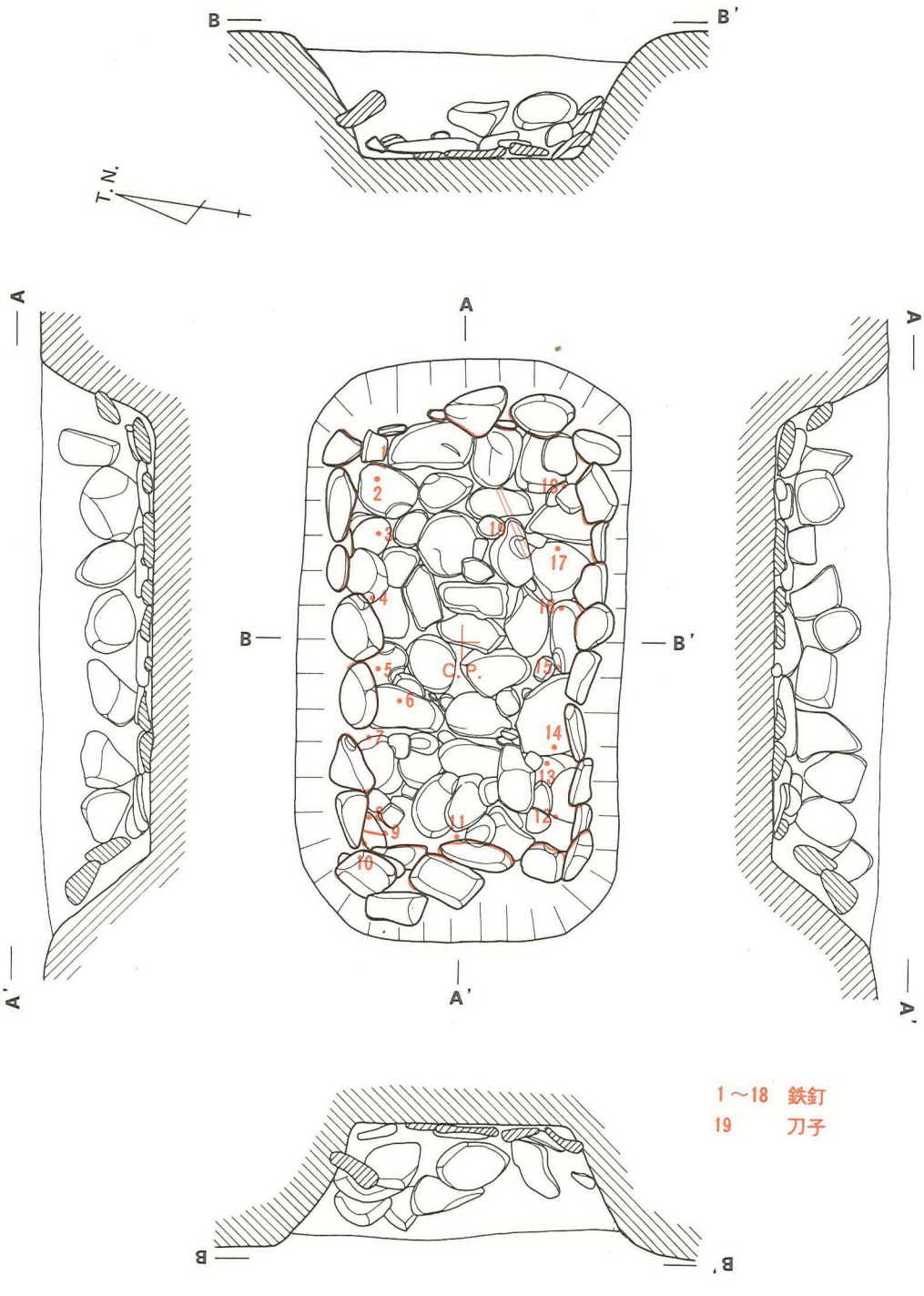
石室構築方法は底部に20㎝程度の平たい石を敷き並べ、10㎝以下の円礫で隙間を埋め床面を造っている。側壁は基底石としてやや長めの方柱状の石を直列に床面上に並べ、その上に20㎝程度の平らな石を積むという方法を取っている。検出時に残っていた側壁は一段だけであり、それ以上に詰まれていたかは不明である。しかし、掘り方の天場と側壁上端に差があることからもう一段積まれていた可能性も考えられる。





①耕作土
②淡灰茶色土層（床土）
③灰黒色粘質土
④表土（河原石を含む）
⑤集石
⑥淡灰褐色砂質土層（褐色粒を含む）
⑦明黄茶灰色粘質土層
⑧淡灰白色砂質土層（茶褐色粒を多く含む）
⑨暗黄白色粘質土層（褐色粒を含む）
⑩濁黄茶灰色粘質土層（細かい石粒を含む）
⑪明茶灰色砂質土層（褐色粒を含む）
⑫茶灰色砂質土層（細かい石粒を含む）
⑬暗灰黒茶色粘質土層（細かい石粒を含む）
⑭淡茶灰色砂質土層（細かい石粒を少し含む）
⑮淡茶灰色粘質土層
⑯淡茶灰色砂質土層（1㎝位の褐色粒を多く含む）
⑰暗茶灰色粘質土層
⑱茶灰色砂質土層
⑲灰茶色粘質土層

第179図　森5号塚平・断面図



第180図　森5号塚平・断面図、出土鉄製品位置図

④石室内出土遺物

961～977は墓壙から出土した鉄製品である。961～976は全て断面6㎜前後の方形を呈する鉄釘で、推定復原した全長は約10㎝前後のものと思われる。頭部は全て折れ曲っており、打ち込む際に曲ったものではないかと考えられる。977は刀子である。推定復元すると23㎝程度のものと考えられる。

⑤墳丘

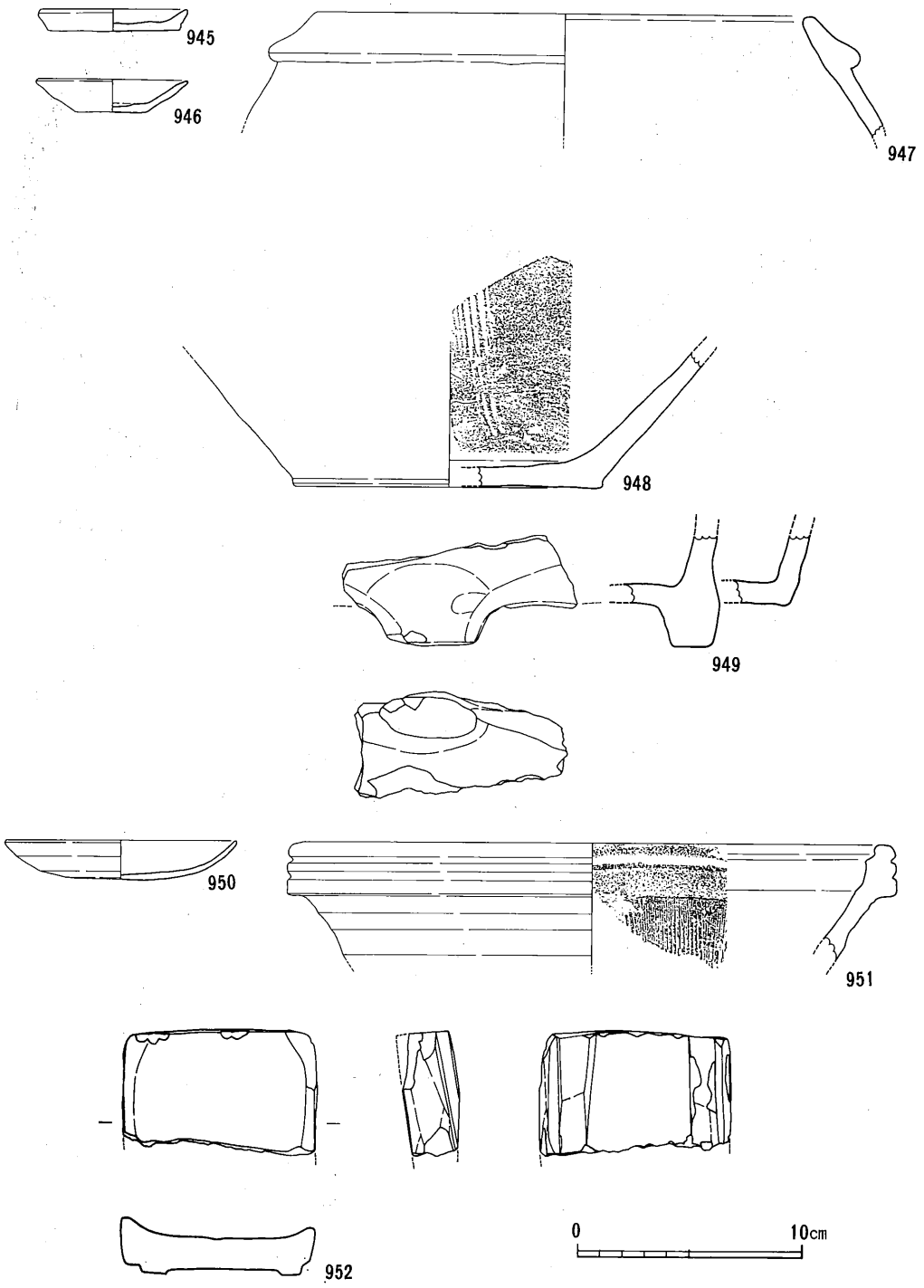
集石除去後確認された墳丘形態は北辺がいびつになっているものの、墳丘裾部で南北3.25m、東西2.9mの隅丸方形を呈しているものと思われる。

墳丘は断ち割り断面より明茶灰色砂質土の地山上に明黄茶灰色粘質土層と濁黄茶灰色粘質土層を版築土として墳丘を造ったことが窺える。

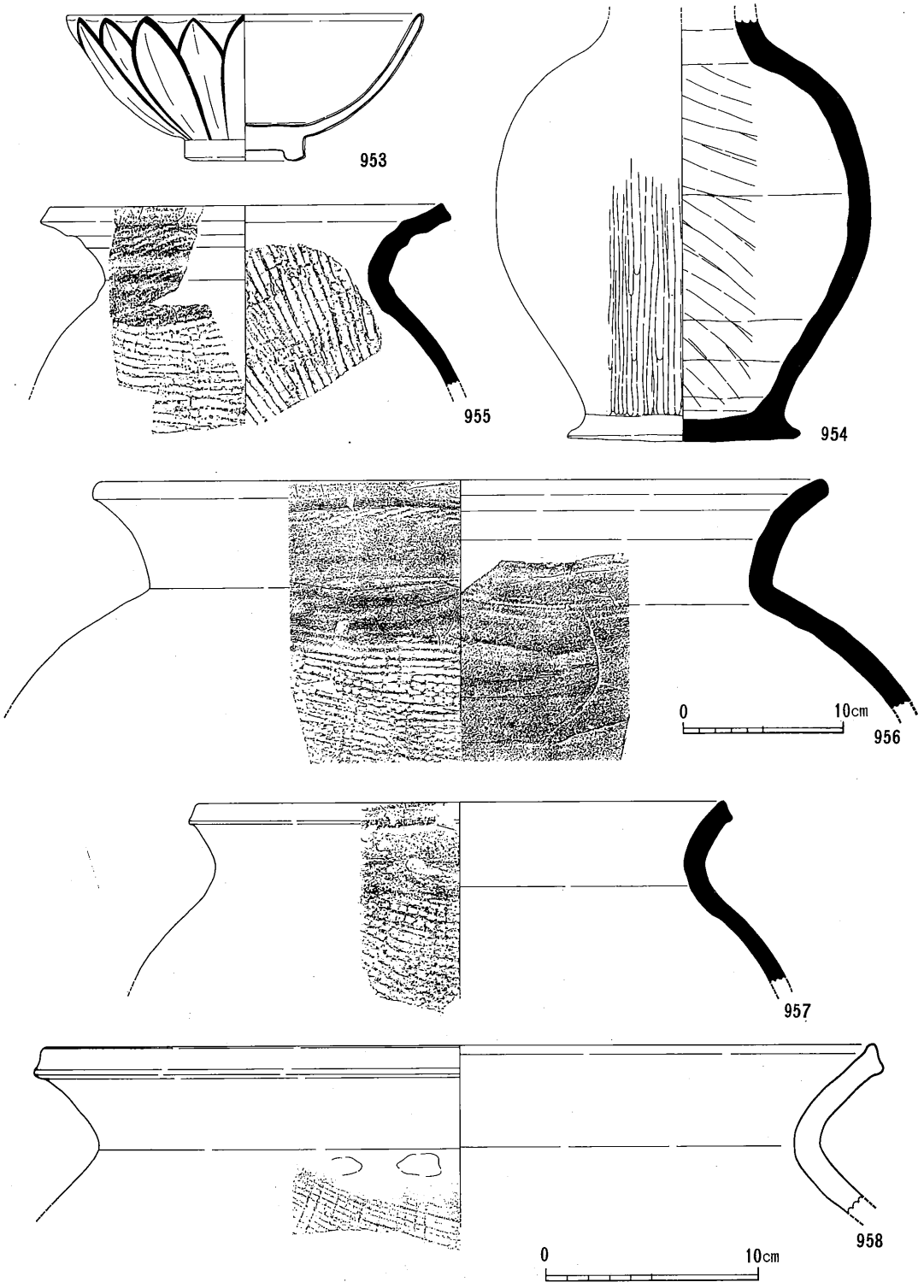
墓壙は墳丘版築後掘られたものと思われる。

⑥まとめ

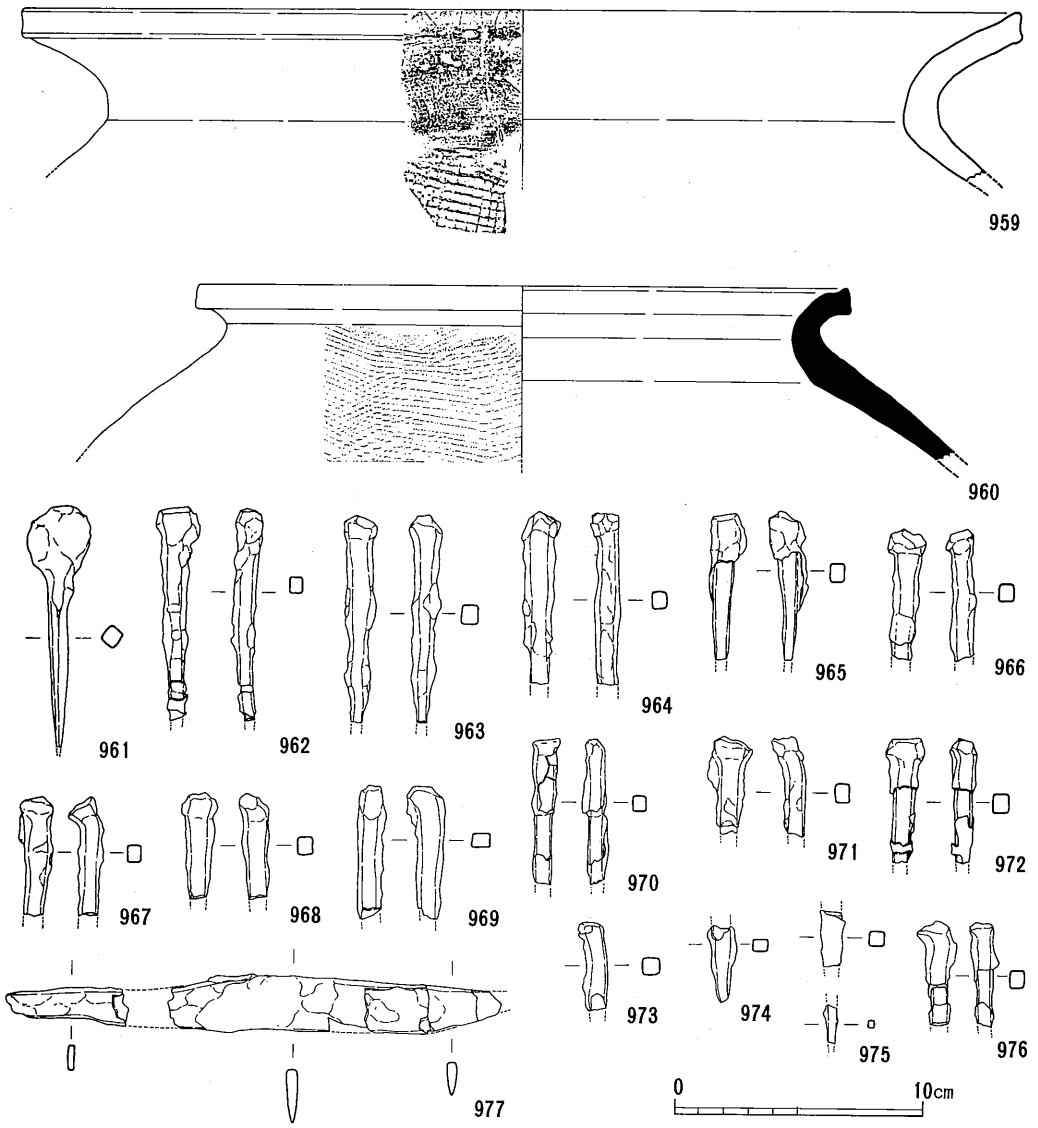
墳丘の高さは地山より0.14mと低いのでおそらく墓壙内に埋葬された木棺が少し墓壙より出ていた状態で上部に河原石を積み上げたものと思われる。石室内より出土した遺物からはこの塚の時期決定はできなかった。しかし、この塚に副葬されたと思われる墳丘裾部で出土した土器と石室に副葬されていたと思われる青磁碗から塚の築造時期は13世紀後半頃のものと考えられる。



第181図　森5号塚出土遺物実測図①



第182図　森5号塚出土遺物実測図②



第183図　森5号塚出土遺物実測図③

(6) 柵列状遺構

SA01～11

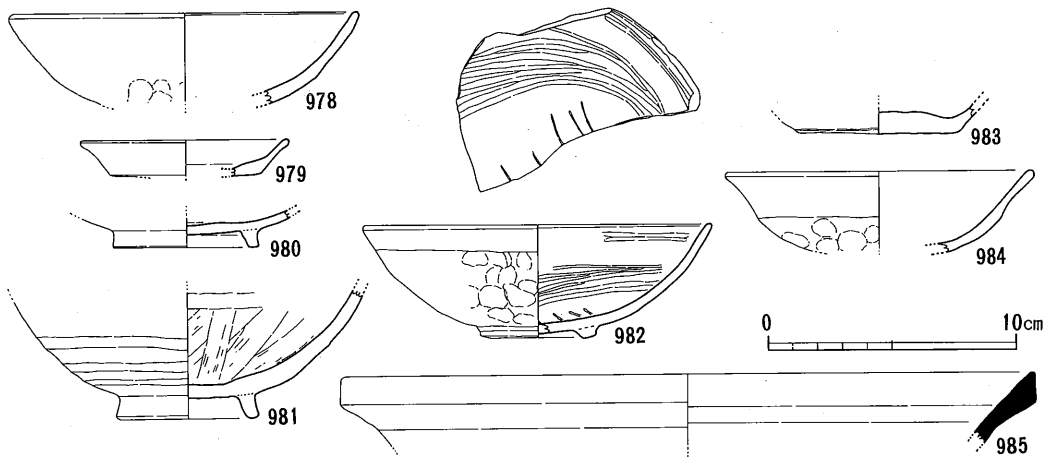
当遺跡で柵列状遺構は11検出された。大別して二つに分けられるものと思われる。ひとつは掘立柱建物に伴うもの（01～07・10・11）で、溝状遺構と同様掘立柱建物を区画するように検出された。もうひとつは掘立柱建物が集中している所謂居住域の端に造られたもの（08）である。またSA09は居住域からの排水溝を区切るもので目隠し塀のようなものと思われる。

SA01・02・05・07

SA01・02・05は掘立柱建物SB23および土坑SK17の東側を「コ」の字型に取り囲むように検出された柵である。また、SA07は掘立柱建物を区画する溝の南東部で検出された柵である。

978～985は柵を構成する柱穴から出土したものである。978はSA01から、979～982はSA02から983～985はSA07に伴うものである。

978は土師器の椀である。体部が内彎気味に外上方に延びるもので体部下半には指頭痕が認められる。979は土師器の小皿である。底部は糸切りされており、体部は直線的に延びるものである。980は土師器の椀である。底部に断面方形のしっかりした高台がついているものである。981は瓦質土器椀である。底部に断面方形のしっかりした高台がつくもので体部は内彎気味に延びるものである。体部外面には横ナデ痕の後横方向の太いヘラ磨きが、内面には板状工具によるナデが施されている。982は畿内産の瓦器である。底部に断面方形の小さい高台が付くもので体部は内彎気味に延びる。体部外面には指頭痕が、内面にはヘラ磨きが顕著に認められる。内面見込み部分は平行ヘラ磨きである。983は土師器のやや小型の坏である。底部は糸切り調整である。984は所謂「早島式土器」の土師器椀で、やや小型である。985は東播系のこね鉢である。口縁端部は肥厚され、上方に引き出されている。

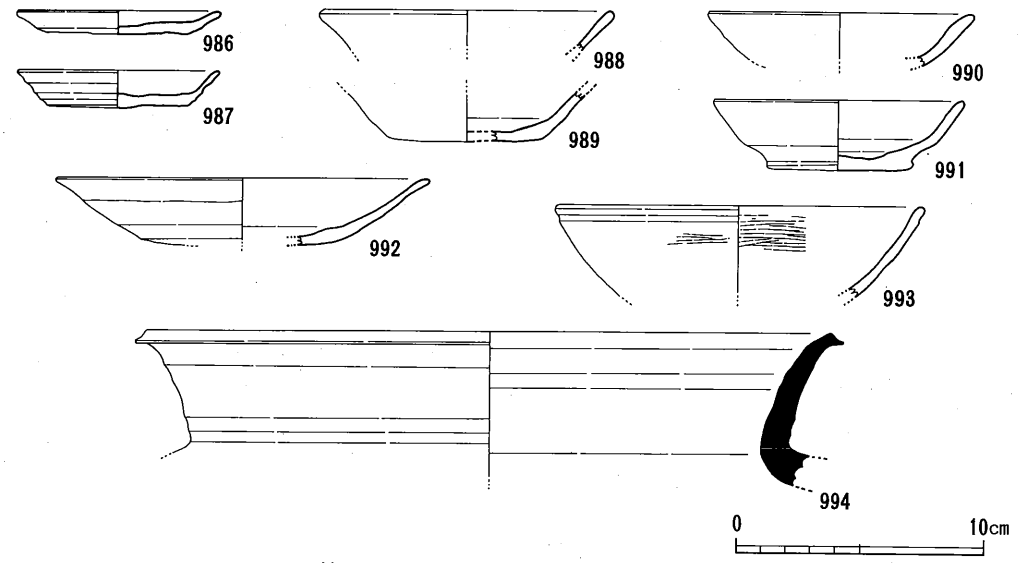


第184図　ＳＡ01・02・07出土遺物実測図

SA08

SA08は調査区南西部で検出された。検出規模は長さ6.10mを計り、幅約0.50mの間隔を開けて二列検出された。これらは古代末～中世初にかけての掘立柱建物に伴うもので、居住域の東端を画するものと思われる。

986～994は柵を構成する柱穴より出土した。986・987は土師器の小皿である。底部はヘラ切りされており体部はほぼ直線的に延びる。988～991はやや小型の土師器の坏である。底部はヘラ切りされており、体部は下半に屈曲部を持ち、上半は直線的に外上方に延びる。992は土師器の坏である。底部調整は不明である。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部で外方に小さく屈曲する。器高はやや低い。993は黒色土器A類の椀である。体部はやや内彎気味に外上方に延び、口縁端部は丸くおさめている。口縁端部外面には1条の沈線が施されている。また体部内外面にはヘラ磨きが顕著に施されている。994は須恵器の甕である。直線的に延びる口縁を持つもので口縁端部は外側を水平方向に摘み出し、シャープにおわらせている。小型の坏が多く、底部調整に糸切りが認められないことから古代末～中世初にかけての時期を設定した。黒色土器もほぼ同時期のものと思われる。



第185図　ＳＡ08出土遺物実測図

(7) 柱穴出土遺物

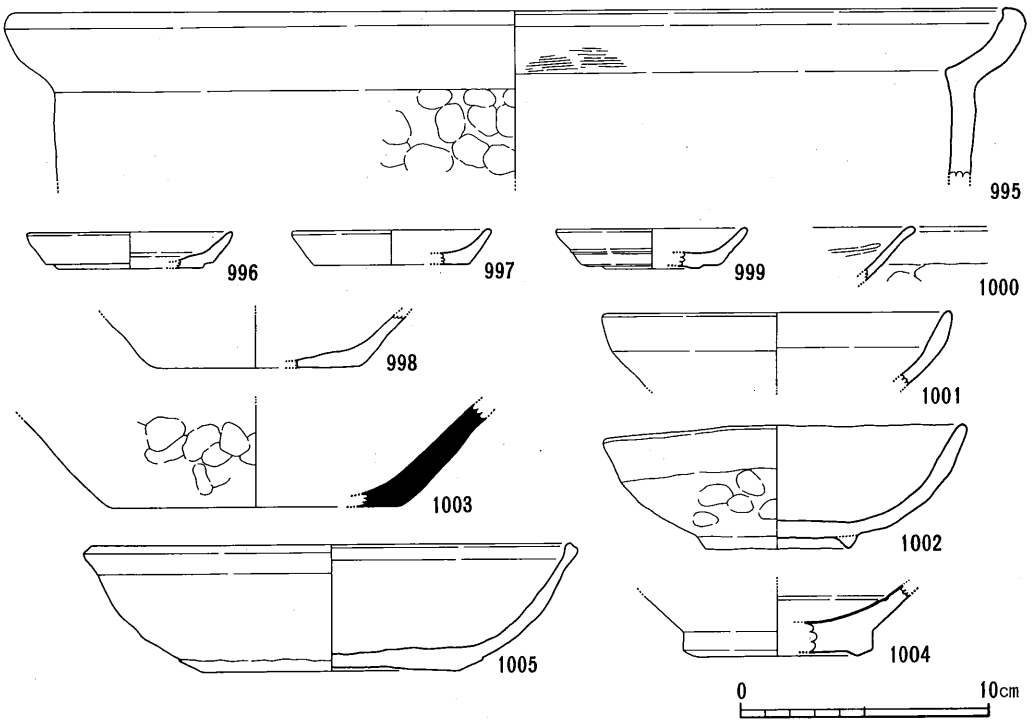
SP01～24

八反地からは多数の柱穴が検出されている。それらの中には掘立柱建物を構成する柱穴や柵列を構成する柱穴等が見られるがほとんどはそれらに伴わないものであった。しかし掘立柱建物および柵列に伴わない柱穴からも多数の遺物が出土しているのでここに紹介する。

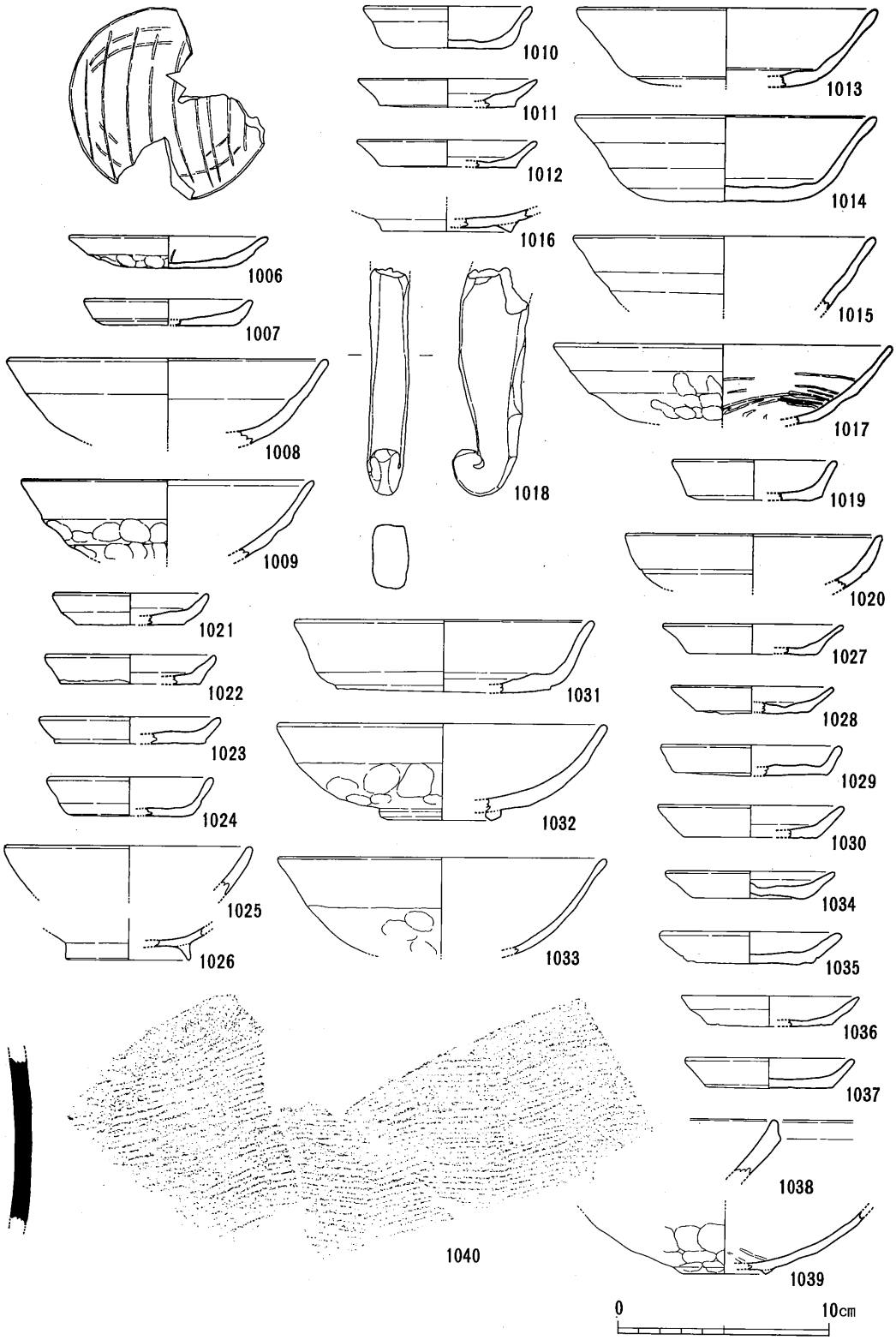
各グリッドごとに説明するが、グリッドは20×20mの大区画でとらえ、その北西の小グリッドの番号で呼んでいる。

SP01はK－13で検出されたもので、SP02～07はG－29で検出されたもので、SP08～19はK－29で検出されたもので、SP20～24は調査区南西部の各グリッドから検出されたものである。

995はSP01から出土した土師質土器の土鍋である。ほぼ垂直に延びる体部を持ち、口縁部は「て」の字状に屈曲させ、口縁端部を丸くおさめるものである。体部外面に指頭痕が内面には一部に刷毛目が認められる。996はSP02から出土した土師器の小皿である。底部はヘラ切りされており、体部は直線的に外上方に延びる。997・998はSP03から出土したものである。997は土師器の小皿である。底部は糸切りされており、体部は直線的に外上方に延びる。998は土師器の坏である。底部は糸切りされている。999～1003はSP03から出土したものである。999は土師器の小皿である。底部はヘラ切りされている。1000は畿内産の瓦器椀である。1001・1002は土師器の椀である。1002は底部に断面三角形の高台が付いている。体部は内彎気味に外上方に延び、器壁はやや厚め

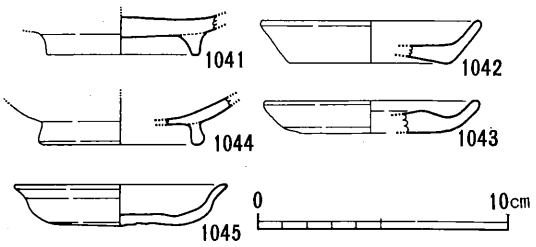


第186図　柱穴出土遺物実測図①



第187図　柱穴出土遺物実測図②

に作られている。体部下半に指頭痕が施されている。1003は須恵器の甕かこね鉢の底部であろうか。1004はSP05から出土した輸入磁器の白磁碗である。高台内面の削りが浅いために見込み部分はやや厚めになっている。高台はやや外方に張り出すように削り出されている。体部内面下半に1条の沈線が認められ、釉は内面にのみ認められる。白磁碗Ⅳ類－1に当たるものと思われる。1005はSP06から出土したやや大型の土師器の坏である。底部は糸切りされており、体部は内彎気味に外上方に延び、口縁端部は内方に摘み出している。1006はSP07から出土した畿内産の瓦器小皿である。底部に指頭痕が顕著に施されており、内面には同心円状のヘラ磨きと平行ヘラ磨きが施されている。1007～1009はSP08から出土したものである。1007は土師器の小皿である。底部はヘラ切りされている。1008は土師器の椀である。体部は内彎気味に外上方に延び、口縁端部は丸くおさめられている。1009は畿内産の瓦器椀である。1010～1018はSP09から出土したものである。1010～1012は土師器の小皿である。1010はやや深手のもので底部調整は不明である。1011・1012は底部がヘラ切りされており、体部は外上方に直線的に延びる。1013・1014は土師器の坏である。底部調整は不明であるが、体部と底部の境が緩やかなことからヘラ切りの可能性がある。体部は直線的に延びる。1015・1016は土師器の椀である。底部に断面三角形状の高台が付き、体部は直線的に延びる。1017は畿内産の瓦器椀である。体部外面には指頭痕が、内面にはヘラ磨きが施されている。1018は土師質土器の脚である。先端部を内方に折り曲げている。盤の脚であろうか。1019・1020はSP10から出土したものである。1019は土師器の小皿である。底部は糸切りされており、体部は直線的に延びる。1020は土師器の椀である。やや小振りの椀で体部外面に沈線が施されている。1021～1026はSP11から出土したものである。1021～1024は土師器の小皿である。1021・1023・1024が底部糸切りで1028は底部ヘラ切り調整されている。1025・1026は土師器の椀である。底部に細長い高台がついている。1027～1033はSP12から出土したものである。1027～1030は土師器の小皿である。1028・1030が底部ヘラ切りで、1029が糸切り調整されている。1031は土師器の坏である。底部は糸切りされており体部はやや外反気味に外上方に延びる。1032は瓦質土器の椀である。底部に粘土紐を貼り付けたような高台が付くもので体部は内彎気味に延びる。体部外面下半には指頭痕が施されている。1033は畿内産の瓦器椀である。1034はSP13から出土した土師器の小皿である。底部はヘラ切りされている。1035はSP14から出土した土師器の小皿である。底部はヘラ切りされている。器厚はやや厚めにつくられている。1036はSP15から出土した土師器の小皿である。底部はヘラ切りされている。1037はSP16から出土した土師器の小皿である。底部は回転糸切りされている。1038はSP17から出土した瓦質土器のこね鉢である。口縁端部を上方に丸く摘み出している。1039はSP18から出土した畿内産の瓦器椀である。底部に



第188図　柱穴出土遺物実測図③

断面三角形状の小さい高台が付く。体部外面には指頭痕が、内面にはヘラ磨きが施されている。1040はSP19から出土した東播系の甕である。体部外面に綾杉状の叩きが施されている。1041はSP20から出土した土師器の椀である。底部に断面長方形のしっかりした高台が付くものである。1042はSP21から出土した土師器の小皿である。底部は糸切りされている。1043はSP22から出土した土師器の小皿である。底部はヘラ切りされている。1044はSP23から出土した黒色土器の椀である。内面だけを黒色化するA類と思われる。1045はSP24から出土した土師器の小皿である。底部はヘラ切りされており、体部は外反気味に外上方に延びる。

(8) 包含層出土遺物

須恵器

1046～1049は須恵器である。1046は坏身で底部にヘラ切りの痕跡を残し、体部下半をヘラ削りしている。受部も立ち上がりもかなり退化している。6世紀末～7世紀初等頃のものか。1047は坏蓋で口縁部が下方に短く屈曲するものである。9世紀頃のものである。1048は坏身で底部に長方形の高台を持ち、体部は直線的に外上方に延び口縁端部をやや外方に折り曲げおわらせている。時期は9世紀頃のもので1047の坏蓋とセットになるものと思われる。1049は無高台の坏で、底部はヘラ切りされており、体部は直線的に外上方に延びる。

土師器

1050～1072は土師器である。

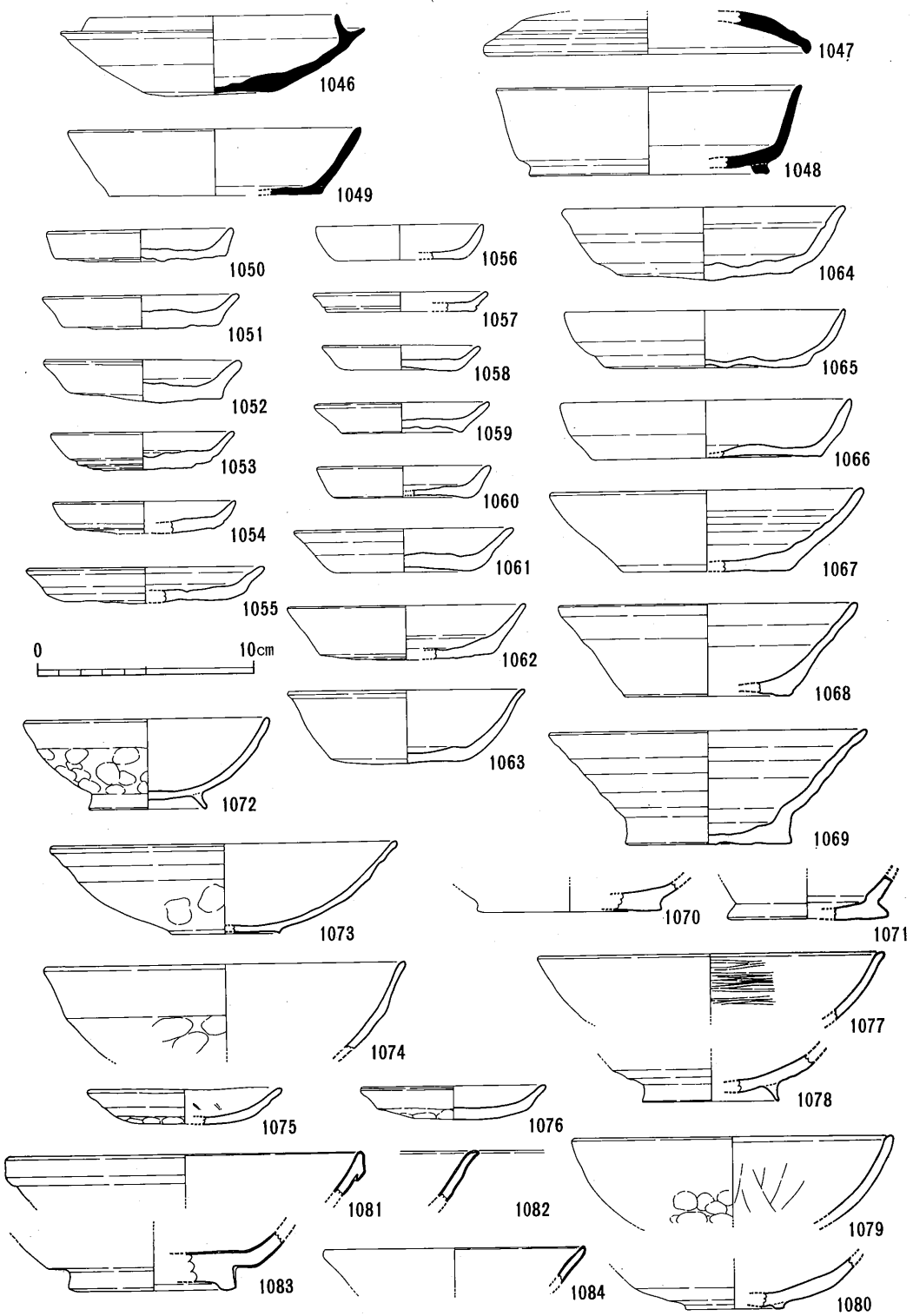
1050～1061は小皿である。底部がヘラ切りされているものと糸切りされているものがある。しかし、体部形態は底部調整の如何にかかわらず、やや内彎気味に延びるものと直線的に延びるもの、外反するものの3パターンあるようである。1055はややや口径の大きい皿である。底部はヘラ切りされている。

1062・1063は小皿よりやや大きめの坏である。底部はヘラ切りされている。1062は少し深目のものでやや内彎気味の体部を持ち口縁部は外反する。

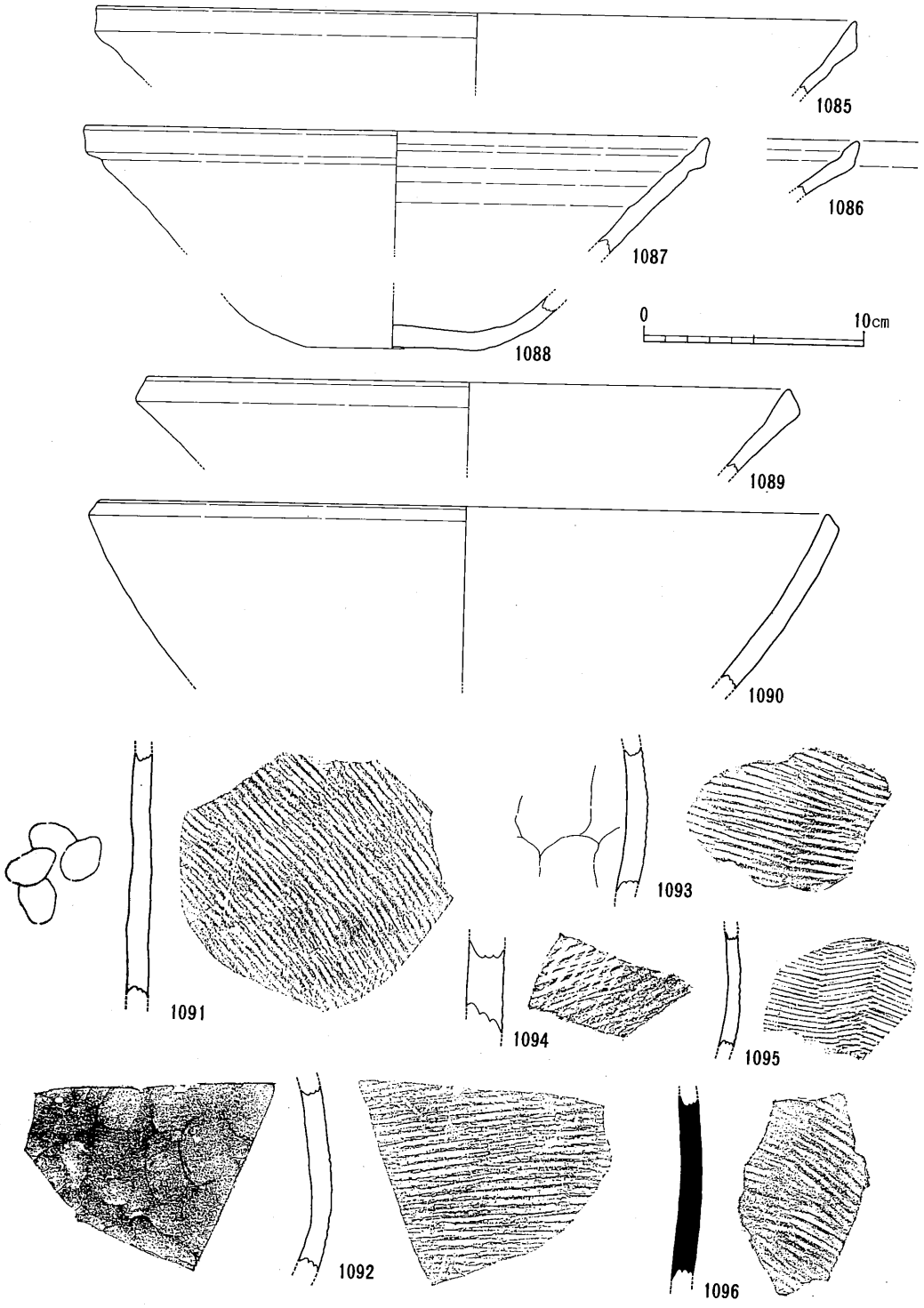
1064～1068は坏である。底部調整は糸切りとヘラ切りがあるが、体部と底部の境が、糸切りに比べヘラ切りの方が稜を持たず緩やかに底部から体部に延びていると思われる。

1069～1071は円盤状高台を持つ椀である。1069は円盤状高台の立ち上がりが1㎝程度あり、体部は直線的に外上方に延びる。内面見込み部分は外面の立ち上がりと同じように凹みを持たせている。

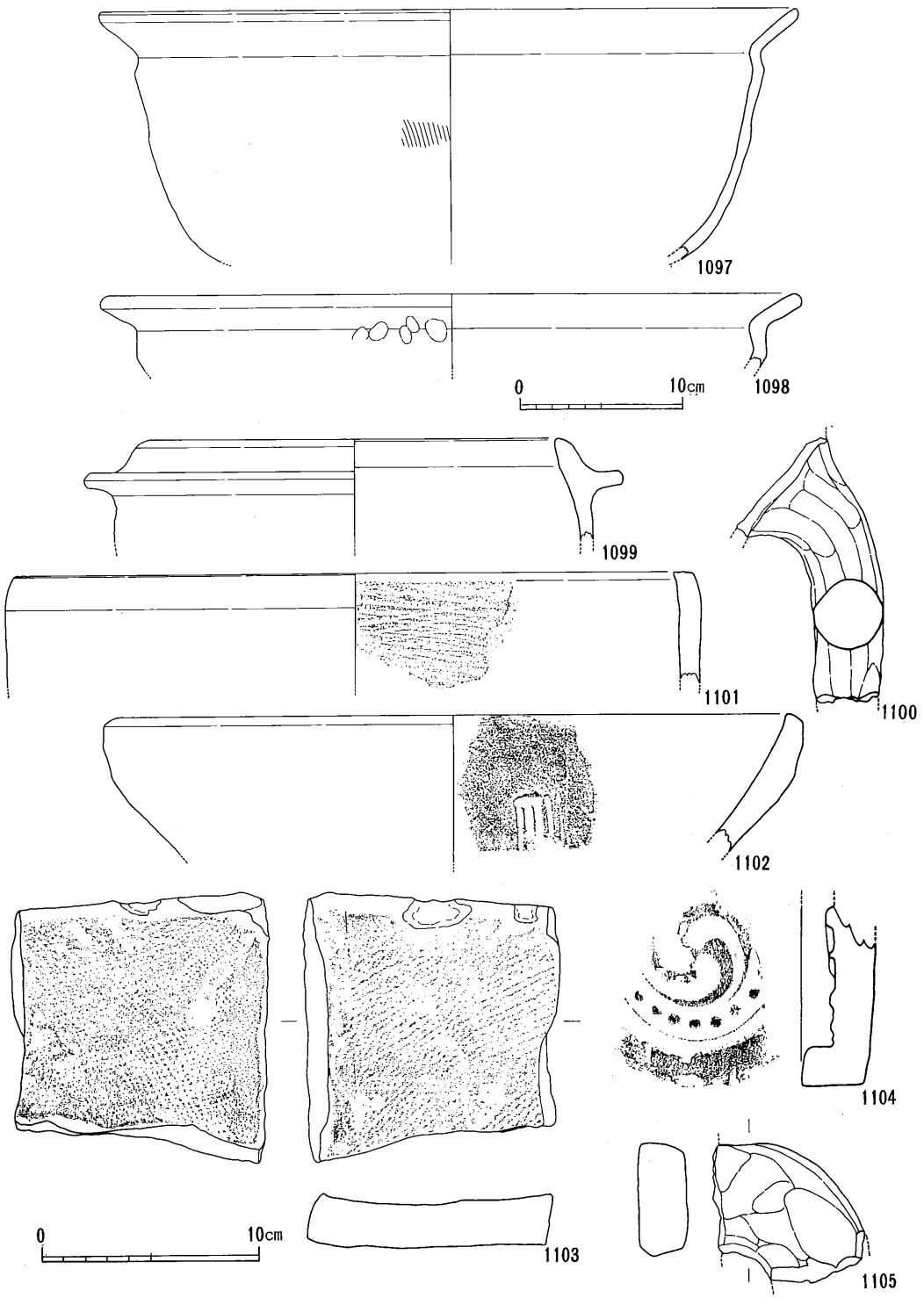
1072はやや小振りの椀である。器厚は薄く硬質に焼成されており、体部外面には指頭痕が顕著に見られる。高台はしっかりしたものが付いている。吉備系の土師器椀と思われ、おそらく搬入品であろう。時期は13世紀末～14世紀初頭頃と思われる。



第189図　包含層出土遺物実測図①



第190図　包含層出土遺物実測図②



第191図　包含層出土遺物実測図③

瓦器

1073～1076は瓦器である。

1073・1074は椀である。1073は底部に小さい三角形状の高台があり、体部外面には指頭痕が見られ器厚は薄く作られている。調整は全て器表面が磨滅しており、ヘラ磨きは確認できなかった。13世紀末頃のものと思われる。1074はやや深めの瓦器椀である。

1075・1076は小皿である。底部に指頭痕が顕著に見られる。

黒色土器

1077・1078は椀である。内面だけに炭素を吸着させたA類で、内面にはヘラ磨きが確認できる。底部にはやや細目の高台が外方に踏張るように付いている。

瓦質土器

1079・1080は瓦質土器である。器厚がやや厚めに作られており底部には粘土紐を貼り付けただけの高台を持つ。体部外面下半には指頭痕が見られ、内面には板状のものでナデた痕が確認できる。西村産の瓦質土器と思われ、内面に板状工具によるナデが出現するのが13世紀になってからであるので、ほぼこの頃のものと思われる。

輸入磁器

1081～1084は輸入磁器である。1081は口縁部外面を玉縁に作る白磁碗である。太宰府分類の白磁椀Ⅳ類－2に当たる。1082は口縁端部を外方に短く屈曲させる白磁碗である。白磁椀Ⅴ類－4に当たる。1083は断面方形の高台で、高台内面の削りが浅いため見込み部分の器厚が厚い。釉は高台内部と畳付けを除く以外に青味を帯びた釉がかけられている。龍泉窯系青磁椀Ⅰ類に当たるものと思われる。1084は青磁の皿である。龍泉窯系青磁皿Ⅰ類に当たるものと思われる。

こね鉢

1085～1089は東播系のこね鉢である。1085～1087は口縁部を拡張させ、口縁端部を上方に摘み上げているものである。1088はこね鉢の底部である。回転糸切り痕が残っている。1089は口縁部を三角形状に肥厚させ、やや上端を摘み上げるものである。

1090は瓦質土器のこね鉢である。体部はやや内彎気味に外上方に延び、口縁部はそのままで少し内側に摘み出している。内外面に炭素を吸着させるもので胎土は瓦器と同じように灰白色に焼成されている。亀山焼であろうか。

体部

1091～1096は体部である。1091・1092は3×6㎜角の外面格子叩きで内面には指ナデが施されている。1093～1096は平行叩きである。1095は平行叩きの方向を変える綾杉状を呈するもので東播系の甕の体部と思われる。

土師質土器

1097～1103は土師質土器である。

1097・1098は土鍋である。内彎気味の体部を持ち、口縁部は外方に屈曲させるもので、体部外面には部分的に刷毛目が施されている。胎土には砂粒を多量に含み、器厚は薄手に作られている。

1099～1101は土釜である。1099は水平方向にしっかりした鍔を持ち、立ち上がりが内方向に延びる。1100は1099の脚であろうか。1101はおそらくしっかりした鍔を持つ土釜の立ち上がりの部分であると思われる。内面には粗い刷毛目が施されている。

1102は擂鉢である。内面に5本単位の条溝がかなり間隔を開けて施されている。

瓦

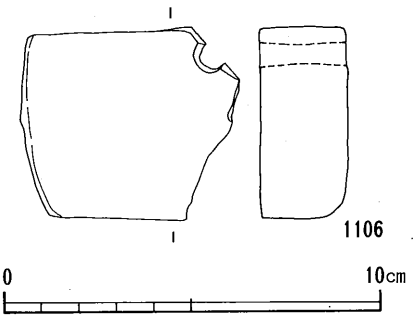
1103・1104は瓦である。1103は須恵質の平瓦で外面には布目の跡が、上面には叩きが施されている。1104は須恵質の軒丸瓦である。中央に頭のくっついた尾の長い巴を配し、そのまわりに珠文を施している。

土製品

1105は不明土製品である。左辺に半円状と思われる接合痕が見られる。

石製品

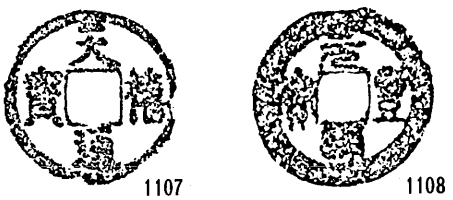
1106は石英粗面岩製の砥石である。磨ぎ面を四方に持ち、端の方に釣り下げ用と思われる穴が開けられている。



第192図　包含層出土遺物実測図（石製品）

金属製品

1107・1108は輸入銅銭である。1107は「天禧通寶」（北宋銭・1017）である。1108は「元豊通寶」（北宋銭・1078）である。



第193図　包含層出土遺物実測図（銅銭）

4．近世の遺構・遺物について

近世の遺構は調査区中央で検出された。中央には現在まで家屋が立っており、その敷地部分を囲むように溝・土坑が検出された。おそらく近世の遺構は現在の建物とほぼ同じ位置にあると考えられる。検出された遺構は溝状遺構・土坑・井戸・柱穴などである。南北に走る溝は南西部でコーナーを作り、東西方向に曲がり井戸の辺りでおわるようである。南側の溝状遺構SD30・32で画された部分では掘立柱建物が検出された。溝に囲まれた外側には土坑が数基あるのみで、この溝を境として外側には遺構はあまりなかったものと考えられる。内側には溝との距離を少しあけて土坑および柱穴が検出された。中心となる建物があったと思われる場所は現在の攪乱により調査ができなかった。また後世の削平のために遺構の残りが悪く、遺構の検出は困難をきわめた。

(1) 溝状遺構

SD30・31

SD30・31は近世の遺構の西側を画する溝で、ほぼ南北に流路を取る。約40mほど検出された。

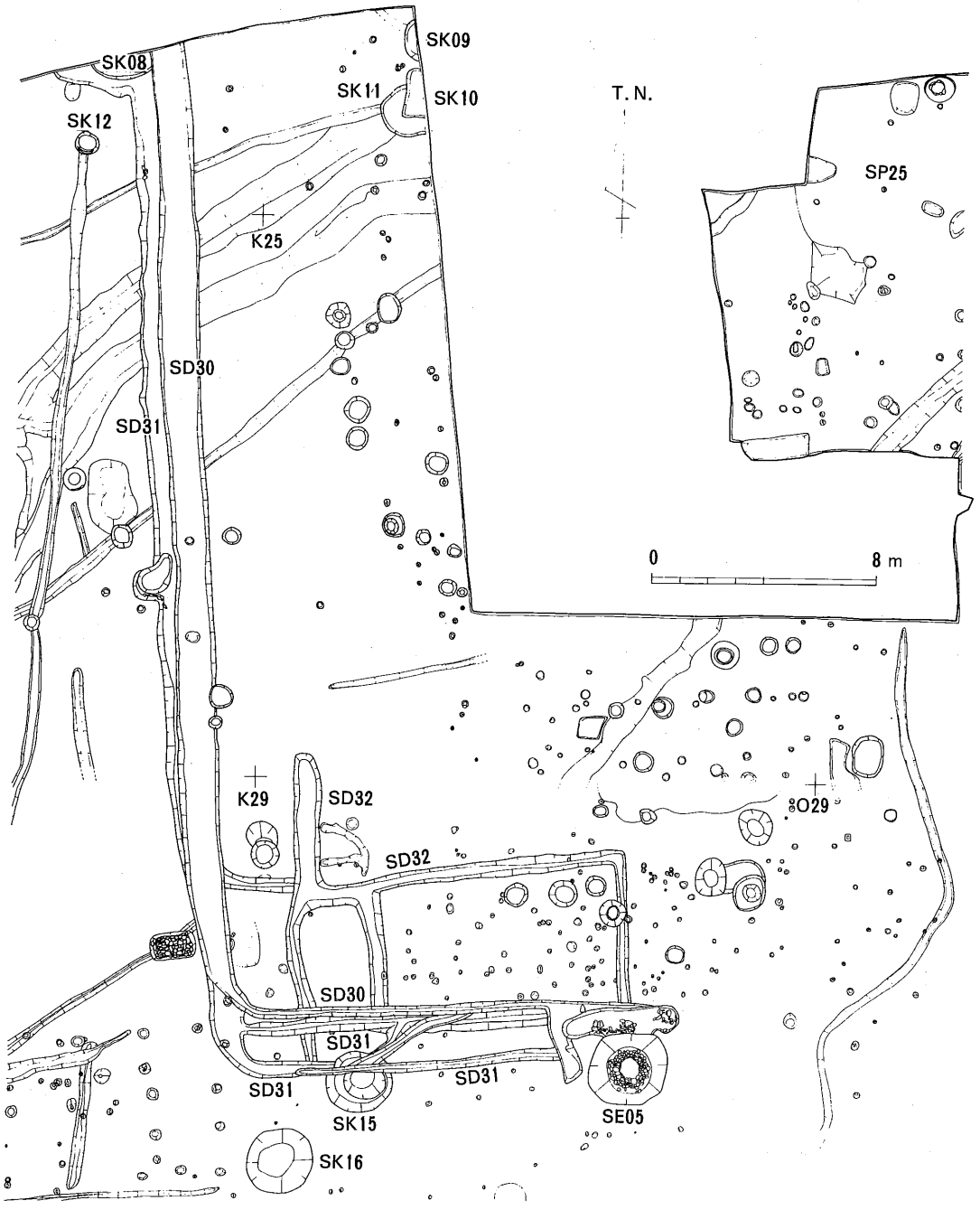
1109～1111はSD30から出土した遺物である。全て備前焼で1109・1110は灯明皿で、1111は擂鉢である。1109は内面に突帯のない灯明皿で体部は薄く作られ、底部外面は口縁近くまでヘラ削りされている。口縁部内面には煤状のものが付着している。体部前面に塗り土されている。1110は内面に突帯のある灯明皿で、突帯には3ヵ所に灯芒受けの凹みを持つ。底部は糸切りの後口縁部近くまでヘラ削りされている。全面に塗り土されている。1111は備前焼の擂鉢で口縁部があまり肥厚せず外面の拡張もあまりない。拡張部には3条の沈線が、内面には櫛による条溝が一単位間を少しあけて施されている。全面に塗り土されているようで褐茶色を呈している。間壁編年のV期－B（17世紀前半頃）に当たるものと思われる。

1112～1139はSD31から出土した遺物である。

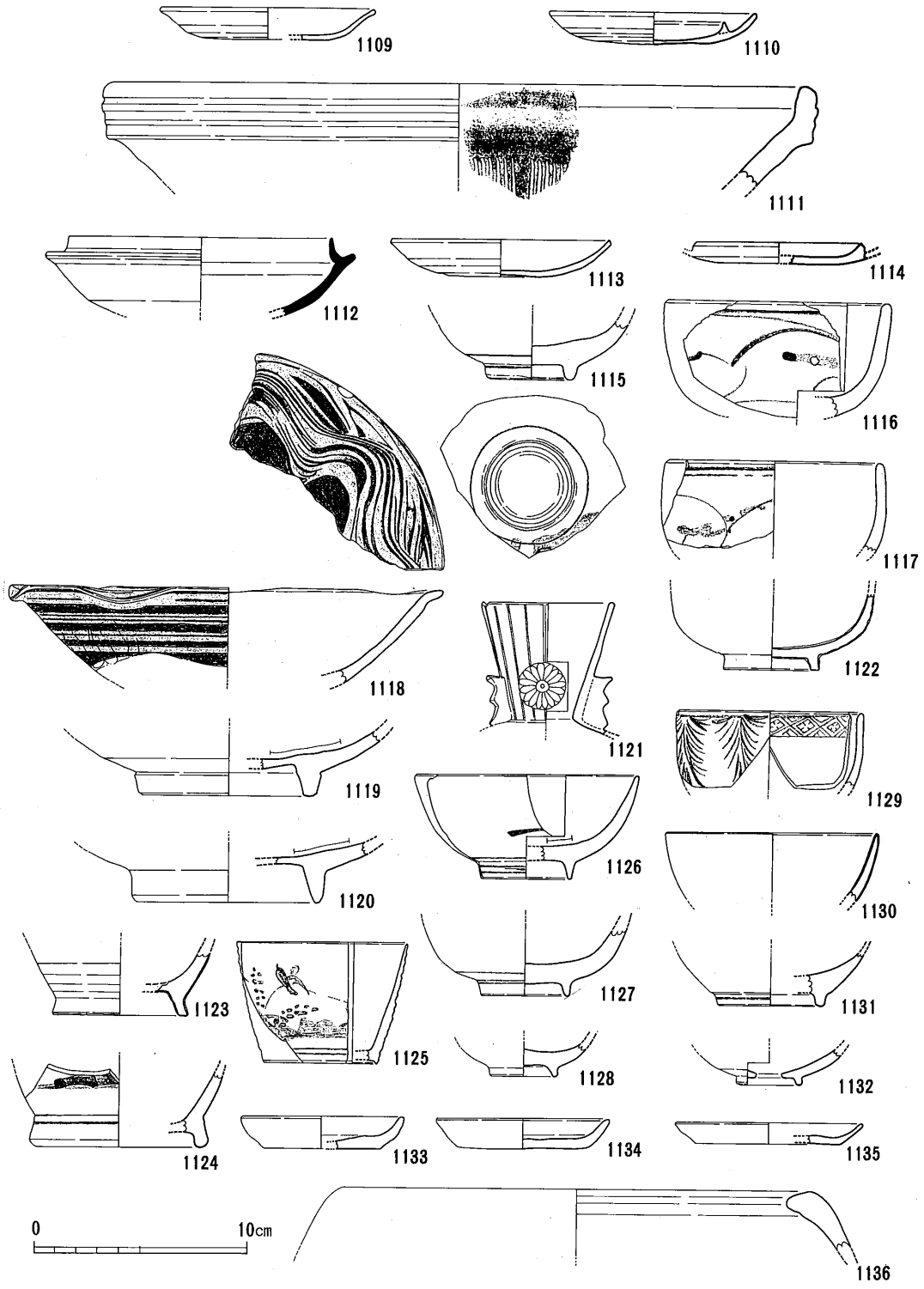
1112は須恵器の坏身で立ち上がりのやや退化しかけたもので6世紀末頃のものと思われる。

1113・1114は備前焼の灯明皿である。1113は内面に突帯を持たないもので、底部が糸切りの後体部外面中程までヘラ削りされている。体部外面上半と内面に刷毛による塗り土が施されている。口縁部内面には煤の付着が認められる。1114は内面に突帯を持つもので灯芒受けの凹みを持つ。底部はヘラ削りされており全面に塗り土されている。

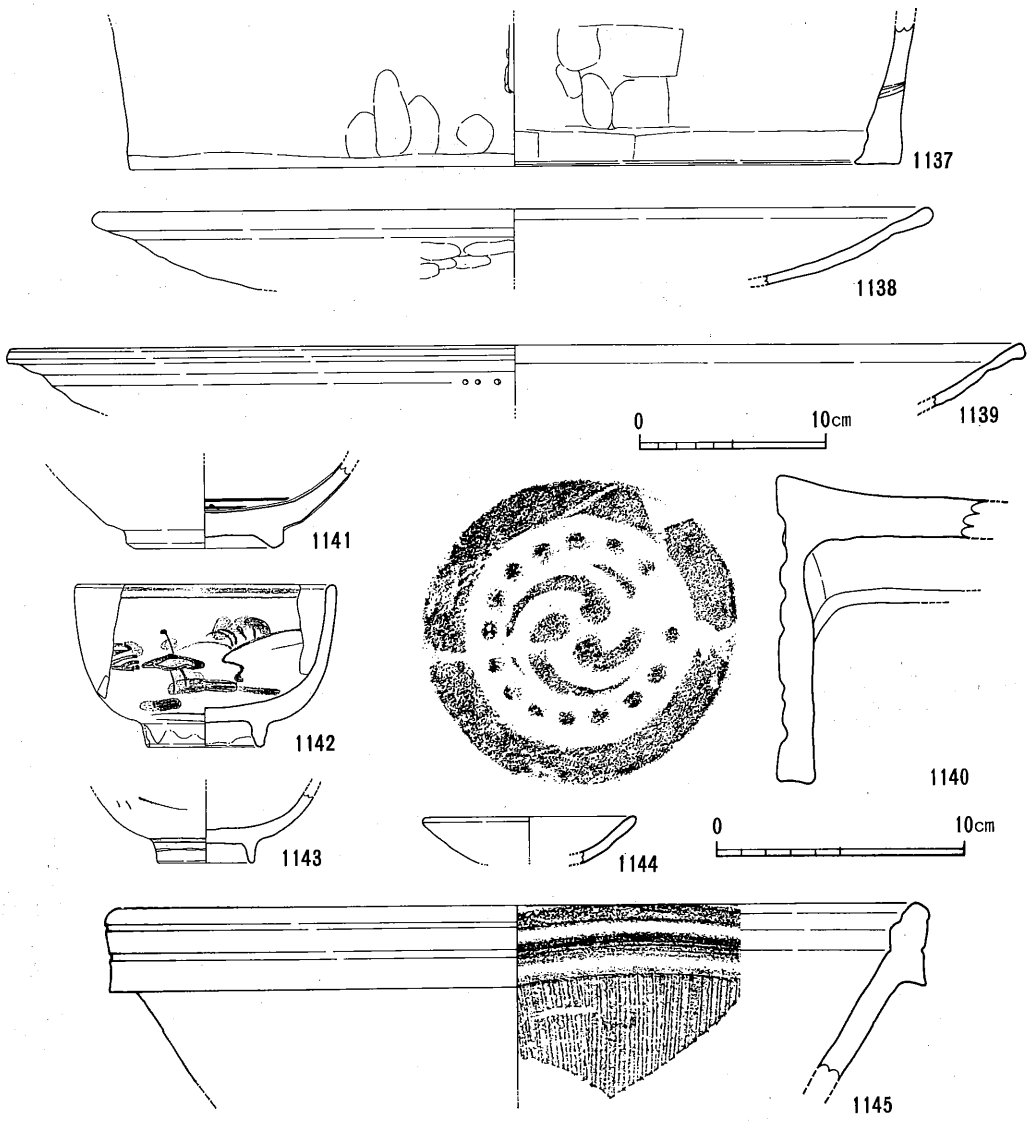
1115～1117は陶胎染付である。1115は端部が丸く短い高台が付き、高台畳付け以外全面に青味を帯びた白色釉を施している。貫入が著しい。呉須の発色は悪く濁った青色を呈している。1116は体部が底部から直角に曲がり、直線的に上方に延びるもので、全面に青味を帯びた白色釉を施している。器表面全体に貫入が著しい。体部外面には唐草文が描かれているが呉須の発色が悪いために暗青色を呈している。胎土は暗灰色である。1117は濁白色釉がかかっており器表面全体に貫入が著しい。体部外面には唐草文が描かれているが呉須の発色が悪いために暗青色を呈してい



第194図　近世遺構全体図



第195図　ＳＤ30・31出土遺物実測図



第196図　ＳＤ31・32出土遺物実測図

る。胎土は暗灰色である。

1118～1120は唐津系刷毛目の中皿である。1118は体部がやや内彎気味に外上方に延び、端部は外方に屈曲し、口縁部は輪花状に指押さえしている。体部外面下半はヘラ削りしている。暗黄色を呈した釉は体部外面上半と内面に施されている。1119・1120は唐津系刷毛目皿の高台である。太くしっかり削り出されているもの（1119）と細身で高く削り出されているもの（1120）がある。内面見込み部分は輪状に釉が掻き取られており、砂目の痕跡を残すもの（1120）もある。

1121は磁器で、頸部に菊の文が入る瓶の口である。

1122は瀬戸・美濃系陶器である。高台は断面長方形のしっかりしたものが付き、体部は直角気

味に屈曲し、上方に延びる。外面に鉄釉、内面に灰釉がかけられている掛け分け碗である。時期は18世紀後半～19世紀前半頃のものと思われる。

1123～1131は肥前系の磁器である。1123・1124は瓶の底部である。1123は外面と高台内面に緑味を帯びた釉を施しており、高台畳付け部分は無釉で砂粒が付着している。1124は外面と高台内面に青味を帯びた透明釉が施され、高台畳付け部分と内面は無釉である。呉須は暗青色に発色している。1125は肥前系の猪口と思われる。体部は直線的に外上方に延び、口縁端部はシャープに作られている。釉の発色が悪く濁白色を呈している。体部外面には草花文が描かれており、呉須は暗青色に発色している。1126は高台畳付けを除く前面に青味を帯びた透明釉を施した小碗である。内面見込み部分は蛇の目釉剝ぎされており、高台畳付け部分には砂粒が付着している。体部最下部と高台外面に圏線が描かれており、呉須は緑がかった青色を呈している。1127は緑味を帯びた透明釉が高台畳付け以外全面に施された小碗である。高台畳付け部分には砂粒が付着している。体部下半と高台の境部分には圏線が施されており、呉須は淡青色を呈している。1128は高台径の小さい小碗である。高台畳付けを除く全面に緑味を帯びた白色釉が施されており、高台畳付けには砂粒が付着している。1129は外面に草花文が、口縁部内面には四方襷文が描かれており、呉須は青色を呈している。1130は全面に白色釉が施された小碗である。1131は外面と高台内面に緑味を帯びた透明釉がかかる赤絵瓶の底部である。高台畳付け部分には砂粒が付着している。高台外面には焼成後に赤色の圏線が施されている。

1132は内面と体部下半まで施釉された小碗で、高台は細く短く削り出されている。器表面には貫入が著しい。見込み部分に焼成後の穿孔が認められる。京都系のものか。

1133～1135は土師器の小皿である。1133・1135は底部回転糸切りされており、口縁端部内面には灯明皿として使用したと思われる煤が付着している。1134の底部調整は不明である。

1136～1139は土師質土器である。1136は擂鉢と思われる。口縁端部は内側に屈曲しており端部は丸くおさめている。1137は火鉢の底部であろうか。下半部に方形と思われる透かしがあけられている。1138・1139は焙烙である。浅い盤状を呈しており、口縁端部は面を作るものと丸くおさめるものがある。

1140は瓦質の軒丸瓦である。中央に頭の大きい三つ巴を配し、そのまわりに16の珠文を配している。

1141は龍泉窯系の青磁碗である。高台は外方に張り出すようにしっかりしたものが削り出されており、体部はやや内彎気味に立ち上がる。高台を除く全面に緑味を帯びた透明釉が施されている。体部内面と見込み部分の境には沈線が、見込み部分にはヘラ描による模様が施されている。太宰府の分類によるところの龍泉窯系青磁椀Ⅰ類－4に当たるものと思われる。

SD32

1142は陶胎染付である。高台畳付けを除く全面に青味を帯びた透明釉が施されており、器表面には貫入が著しい。体部外面には山水文が描かれており、呉須は発色が悪く暗緑色を呈している。

1143は肥前系の染付碗である。高台畳付けを除く全面に青味を帯びた透明釉がかけられ、内面見込み部分は輪状に釉が掻き取られている。高台畳付け部分には砂粒が付着している。体部と高台の境部分には淡青色に発色した圏線が施されている。

1144は土師器の小皿である。直線的に外上方へ延びる体部を持ち口縁端部は丸くおさめられている。口縁端部には煤が付着しており、灯明皿として使用されたものと思われる。

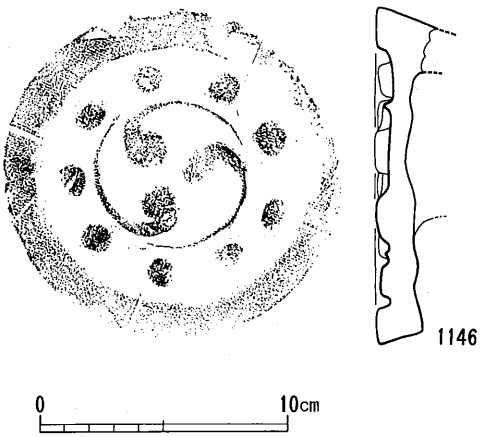
1145は備前の擂鉢である。口縁外面を拡張させ2条の沈線を施し、下部をシャープに摘み出している。内面には金具の櫛による条溝が密に施されており、上端を指ナデによりきれいに揃えている。18世紀頃のものと思われる。

(2) 土坑

近世の土坑は、井戸に伴う施設の周辺部と南北に流れる溝とやや距離をおいた場所に数基確認されている。何に使用されていたものかは検出状況からは確認できにくかった。しかし溝に沿って5基並ぶ土坑は排泄物の処理に使用されていたものかと推測される。

SK11

1146は瓦質の軒丸瓦である。中央に頭の大きい三つ巴文を配し、そのまわりに9個の珠文を配する。

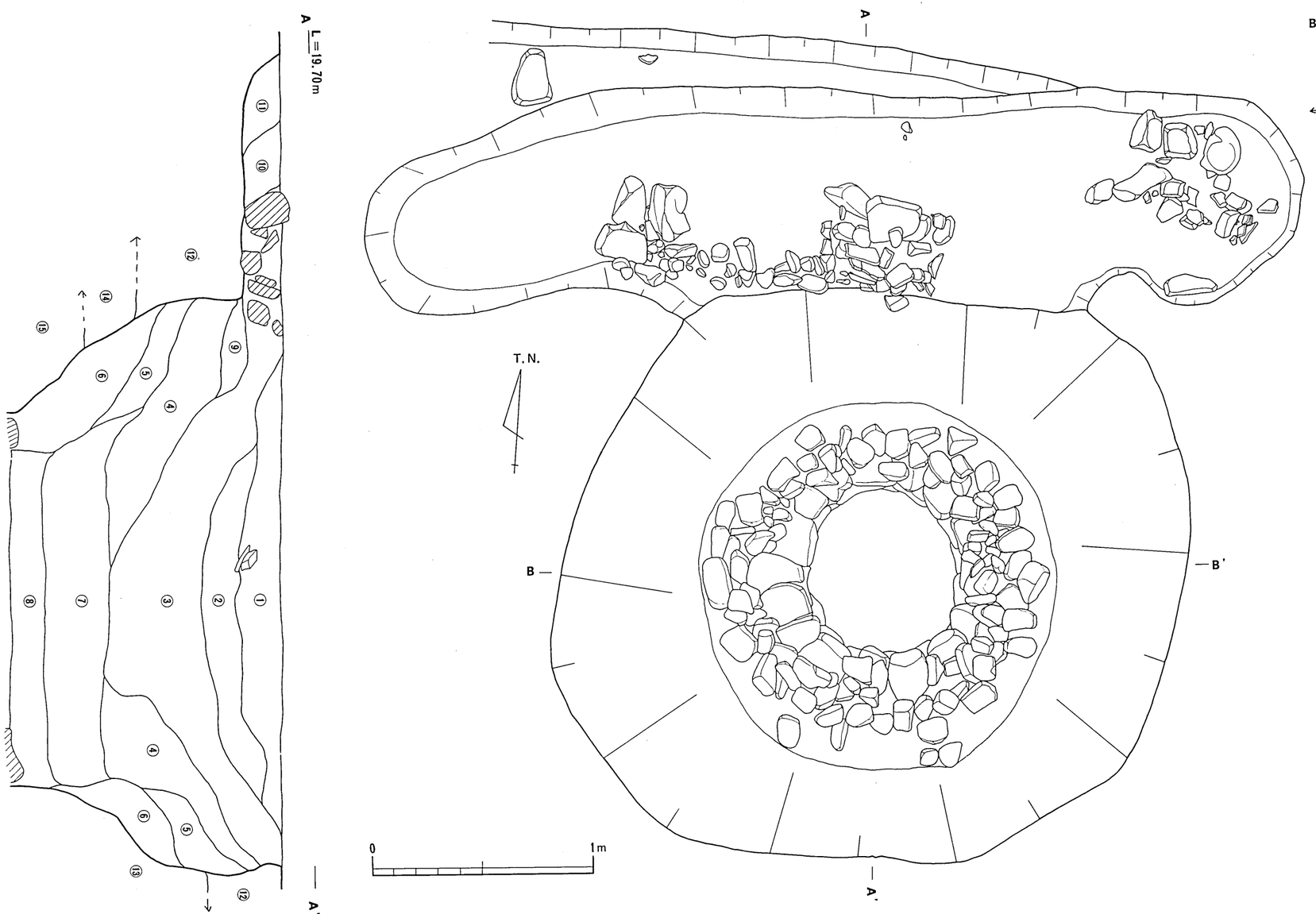


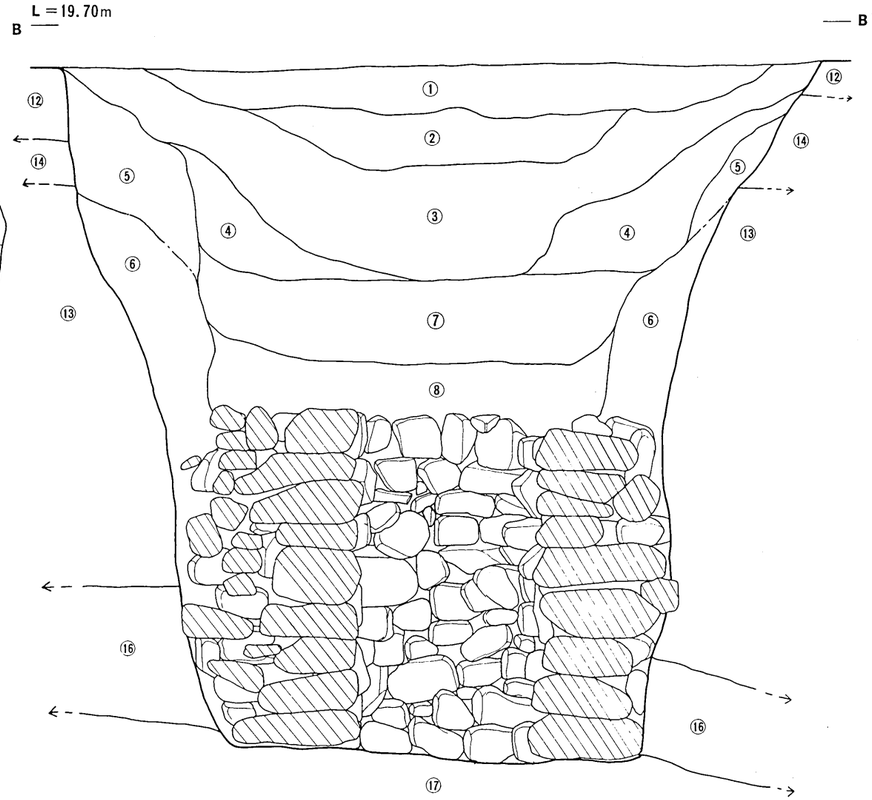
第197図　ＳＫ11出土遺物実測図

(3) 井戸

SE05

溝状遺構の先端部で土坑状の落ち込みに伴い井戸が検出された。この土坑状の落ち込みは10～40cm程度の礫が部分的に敷かれた状態で検出された。おそらく溝と井戸とを繋ぐような遺構と思われる。井戸は天幅2.85mで深さ2.50mの掘り方を持つ。最下部から約1.20mまで石組されており、上部は廃棄に伴う埋土で堆積していた。そのために上部構造については不明である。石組は内法約65cmくらいの円形のもので30～60cm程度の扁平な石をほぼ楕円形状に積み上げている。この井戸の断ち割り土層から、最下部が青色粘土層でその上2層が砂質土層で湧水層となっていることが判る。





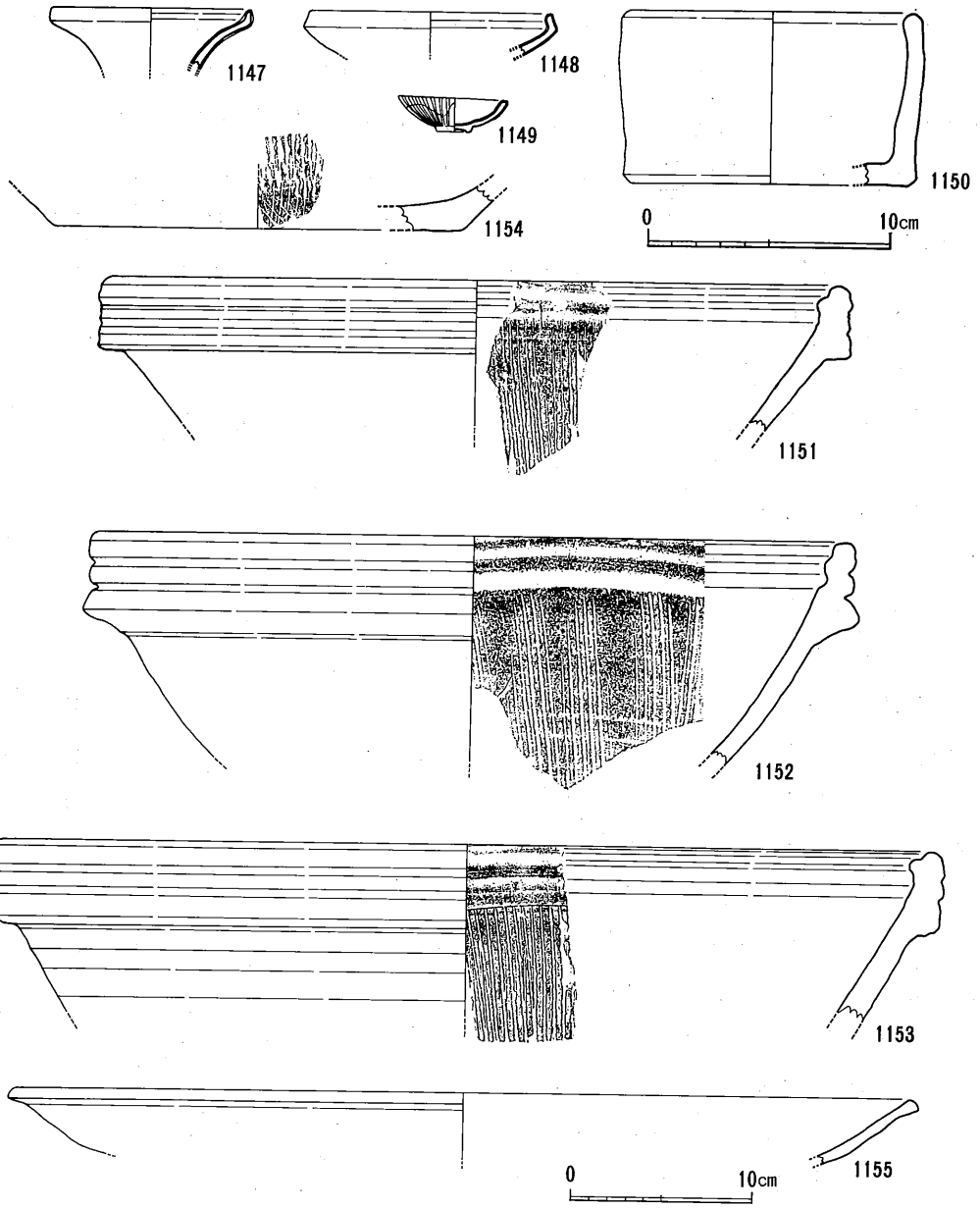
①暗灰色砂質土層（こげ茶褐色粒を含む）
②灰褐黒色粘質ブロックと茶黄色粘質ブロックだけの層
③暗灰色砂質土層（②のブロックを含む）
④　〃　（1㎜前後の砂粒を含みさくっぽい②のブロックを多量に含む）
⑤灰色砂土層（黄茶色粘質土のブロックを含む）
⑥　〃　（淡灰黒色粘質土のブロックを含む）
⑦灰茶色砂質土層
⑧青灰色砂質土層
⑨暗褐灰色砂質土層（淡褐黄色砂質土のブロックを含む）
⑩濁黄白色粘質土層
⑪濁茶黄色粘質土層
⑫灰こげ茶色粘質土層
⑬灰色砂土層
⑭茶黄色砂質土層
⑮黄灰色砂土層（1㎜以下の微砂粒）
⑯灰黒色砂質土層（葉っぱ、流木などを含む）
⑰青色粘土層

第198図　ＳＥ05平・断面図

遺物について

SE05からはあまり遺物が出土していない。出土遺物は廃棄埋土と石組内の使用時埋土の２つに分けられる。

その中で井戸の廃棄埋土中より２個の青磁瓶が出土している。1147は頸部が外反気味に延び、口縁を上方に屈曲させたもので、全面に緑味を帯びた透明釉が施された青磁瓶である。1148はやや内彎した頸部を持っており、口縁端部は1147と同様に上方に屈曲する。全面に緑味を帯びた透明釉が施されている。



第199図　ＳＥ05出土遺物実測図

また土師質の焙烙（1155）も出土している。浅い盤状を呈しており、口縁端部は面を持っておわっている。

石組内からは白磁の紅皿と備前焼が出土している。

1149の紅皿は体部外面下半部を除く全面に透明釉が施されている。体部外面には連弁状の模様が施されている。

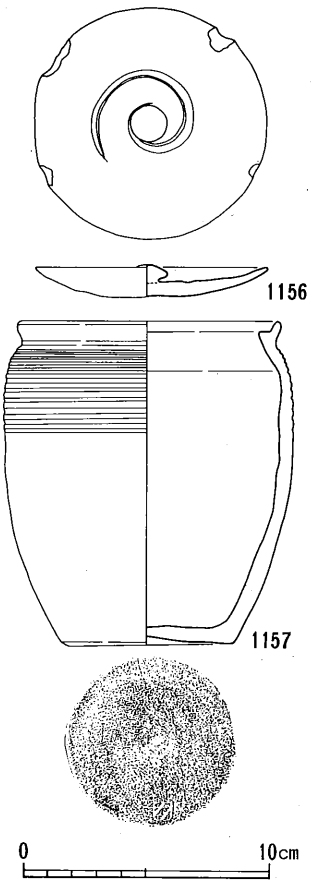
1150～1154は備前焼である。1150は筒状深鉢で、やや内彎気味の体部が上方に延び、口縁端部は丸くおさめている。1151～1153は擂鉢である。1151は口縁外面を拡張させ、2条の凹線を施している。内面には金具の櫛による条溝を施し、その上端を指ナデしている。外面拡張部下で色調の変化が見られる。1152は口縁部外面を拡張させ、2条の凹線を施している。内面には金具の櫛による8本一単位の条溝が少し間隔を開けて施されている。外面拡張部下で色調の変化が見られる。全面に塗り土が見られる。1153は口縁外面を拡張させ、2条の凹線を施す。内面は金具の櫛による条溝が密に施され、上端を指ナデしている。外面のヘラ削りが口縁近くまで施され、拡張部下に色調の変化が見られないことや口縁部の形態から、堺産の擂鉢の可能性が考えられる。1154は擂鉢の底部である。内面に金具の櫛による条溝が密に施されている。

1151・1152は18世紀前半頃のものと思われる。

(4) 柱穴出土遺物

SP25

1156・1157は柱穴より出土した備前の蓋と小甕である。1156は蓋で体部を上方に反り返らせたもので、外面中央に宝珠状のつまみを持つ。またその宝珠のまわりに渦巻き状のヘラによる片彫が見られる。内側はヘラ削りされており、全面に塗り土が施されている。1157は水屋甕の系統の小甕で緩やかに内彎する体部を持ち、口縁端部をそのまま上方に摘み出している。内面には蓋を受ける受部がある。体部上半には櫛描による沈線が見られる。外面には塗り土が施されており、焼成時の火襷きも認められる。底部には作者の刻印が押されている。蓋は18世紀後半～幕末までの時期で小甕は幕末の写しでなければ17世紀後半～18世紀前半頃と思われる。柱穴からの出土状況から塩壺か、地鎮祭に伴うものと考えられる。



第200図　柱穴出土遺物実測図

(5) 包含層出土遺物

肥前系陶胎染付

1158・1159は肥前系の陶胎染付碗である。(第201図) 体部は下半部でほぼ直角に曲がり、直線的に上方に立ち上がる。高台径はあまり大きくなく、しっかりしたものが付く。釉は高台畳付け以外全面に施され、貫入が著しい。釉の色調は白味を帯びた灰色釉のもの (1159) と青味を帯びた灰色釉のもの (1158) がある。1159の灰色釉のものは発色が悪いものと思われる。体部外面には唐草文が描かれている。呉須の発色は悪く、青色を呈するもの (1158) や黒色を呈するもの (1159) がある。時期は18世紀前半～中葉頃である。

肥前系染付

1160～1162は肥前系の磁器である。1160～1161は染付碗である。1160は体部が内彎気味にやや外方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめられている。釉は青味を帯びた透明釉が施されており、口縁端部のみ剝げている。体部外面に井桁状の模様があり呉須は青色に発色する。18世紀頃のものと思われる。1161は体部下半部で丸く上方に立ち上がり、高台は細目の短いものを持つ小碗である。畳付け以外に緑味を帯びた透明釉が施されている。体部外面に草花文が内面見込み部の端には二重の圏線が施されている。呉須の発色は悪く濃緑色を呈している。18世紀中葉頃のものである。1162は伊万里染付瓶である。丸味を帯びた体部から頸部が細く、長く上方に延び、口縁は外反する。釉の発色が悪く、全面に緑味を帯びた白色釉が施されている。胎土は濁った灰色である。体部外面に唐草文が施されている。釉の発色が悪いために呉須は暗緑色を呈している。時期は18世紀頃のものである。

陶器

1163は口縁端部外面と内面に鉄釉が施された掛け分け碗である。体部は下半部で直角に上方に曲がり、直線的に立ち上がる。高台は細身で長方形のものが削り出されている。体部外面には転がし手法による模様が施されている。瀬戸・美濃系である。1164は外面に白味を帯びた透明釉を施した蓋である。内面に細く長い返りが付く。胎土は茶味を帯びた白色である。京都系のものと思われる。1165は内面に緑味を帯びた透明釉を施した灯明皿である。内面に突帯を持つ。京都系のものと思われる。1166は内外面に緑味を帯びた透明釉を施した陶器の鉢である。直線的に外方に延びる体部をもち、口縁は玉縁状に外方に肥厚する。1167は三島唐津鉢である。体部は内彎しながら外方に立ち上がり、口縁で外方に屈曲する。体部上半と内面に緑味が強い透明釉を施す。内面には三島暦手と呼ばれる印花技法が施される。これは李朝の三島暦手を写したもので肥前の草野窯か小田志窯の製品と思われる。

輸入磁器

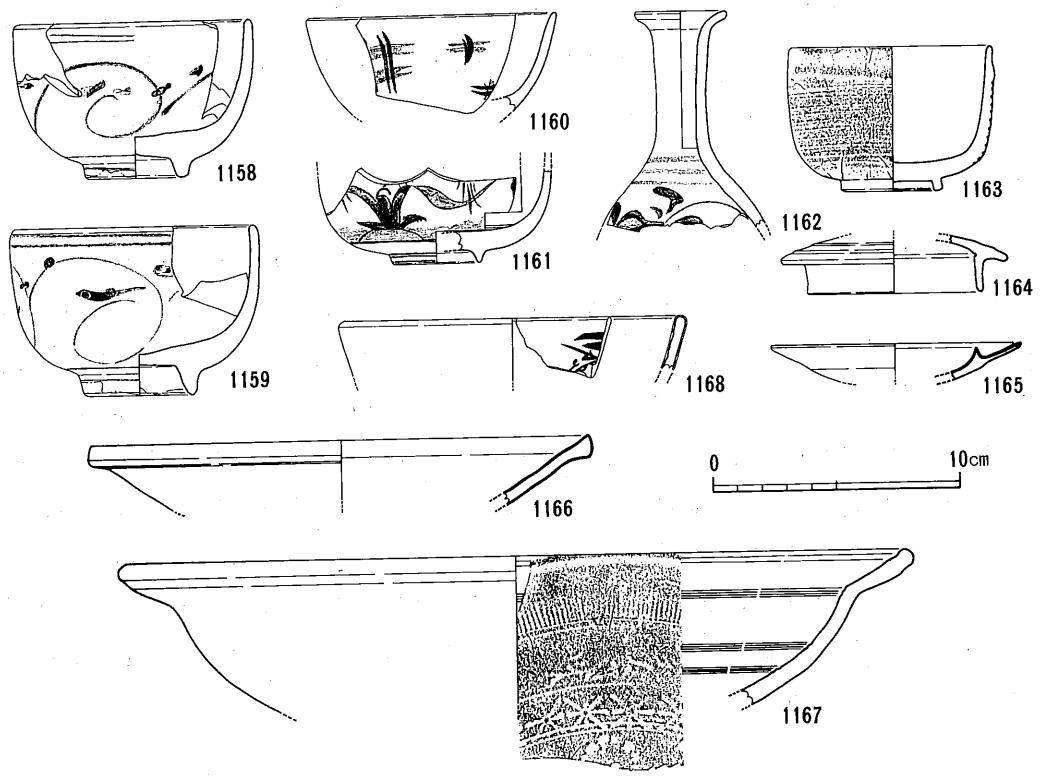
1168は輸入青磁碗である。体部は直線的に外方に延び、口縁は丸くおさめられている。胎土は灰色で緑味を帯びた透明釉がかかっている。体部内面には唐草文のような模様が描かれている。

備前焼

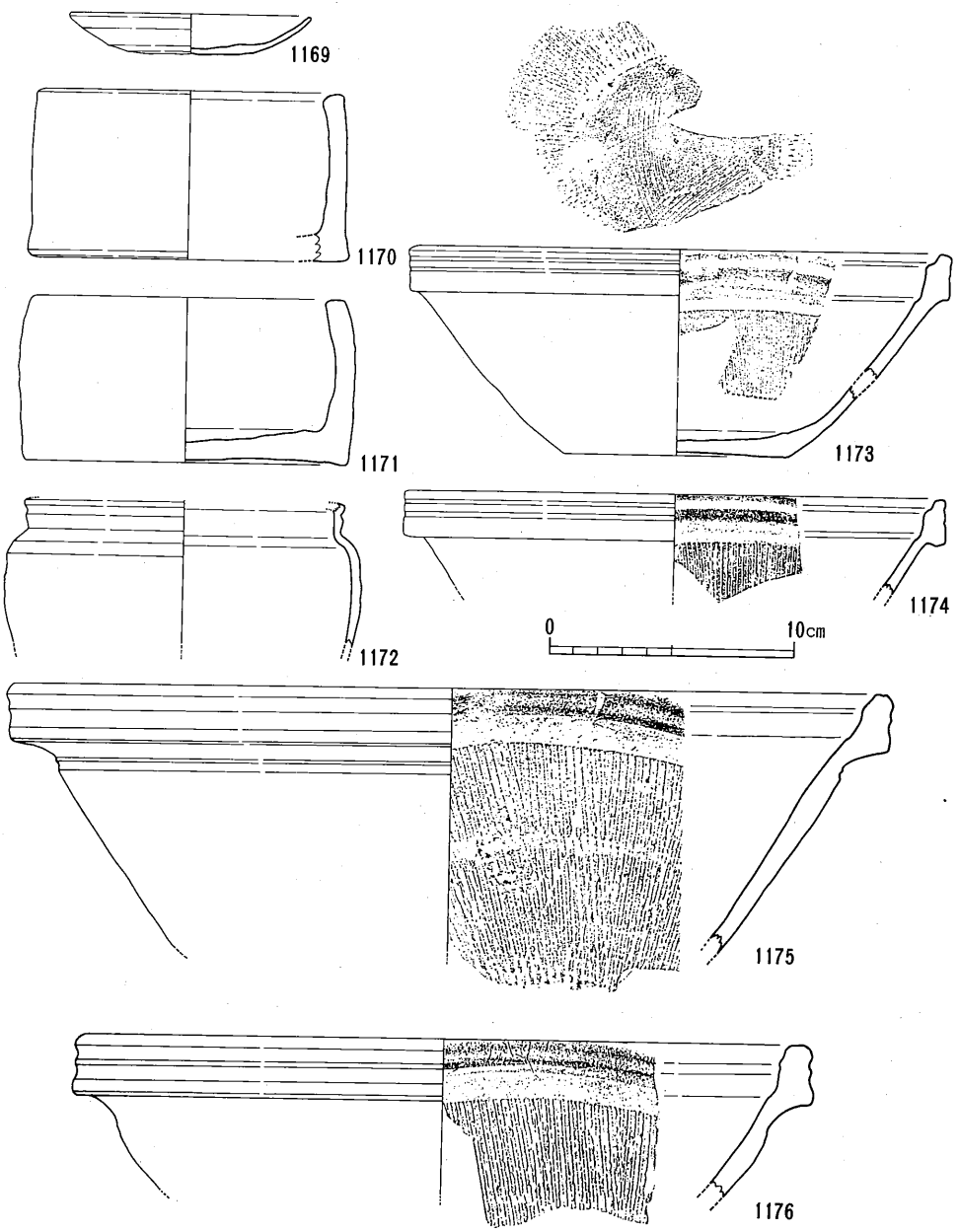
1169は内面に突帯を持たない灯明皿である。外面は口縁部近くまでヘラ削りされており、器表面には塗り土が行なわれている。1170・1171は筒状深鉢である。2点とも体部は内彎気味に上方に立ち上がる。器表面には塗り土されており、焼成もよい。1172は伊部手小壺である。張りのある肩部を持ち頸部は直線的に上方に延び、口縁端部は内側に摘み出す。頸部外面には凹線状のものが施されている。器表面は塗り土されている。1173～1178は擂鉢である。口縁部外面がかなり拡張されそこに沈線が施されるもの（1173・1174）と凹線が施されるもの（1175・1176）がある。内面には金具の櫛による条溝が密に施されており、条溝の上端はナデ消されている。条溝は体部内面と見込み部で区別されるもの（1173・1177）とされないもの（1178）がある。1173は内面見込み部に三角形状の条溝が見られる。口縁部外面の拡張部下は摘み出されている。内面に施されたウールマーク状の条溝から堺産の擂鉢と考えられる。1174は黒伊部手と呼ばれるもので塗り土が高熱によって釉化し、光沢のある釉ぐすりをかけたような器表に焼成されたものである。[註1]

1175・1176は内面に金具による条溝が密に、外面は口縁拡張部まで粗いヘラ削りが施されている。1177・1178は底部縁辺部に円形状の窯道具の痕跡が認められる。

時期は阿坂古墳前庭部出土資料に似ていることからおそらく18世紀前半頃と思われる。



第201図　包含層出土遺物実測図①



第202図　包含層出土遺物実測図②

1174の擂鉢は黒伊部手手法[註2]から17世紀中葉頃と思われる。

これら擂鉢のなかには口縁外側の拡張部下に重ね焼の痕跡およびそれを境として色調の変化が見られないものがある。また、底部には輪状に焼台の圧痕が残っており、内面見込み部にはウールマーク状の条溝が見られることなどから堺産の擂鉢の可能性[註3]が考えられるもの（1173・1177・1178）がある。

土師質土器

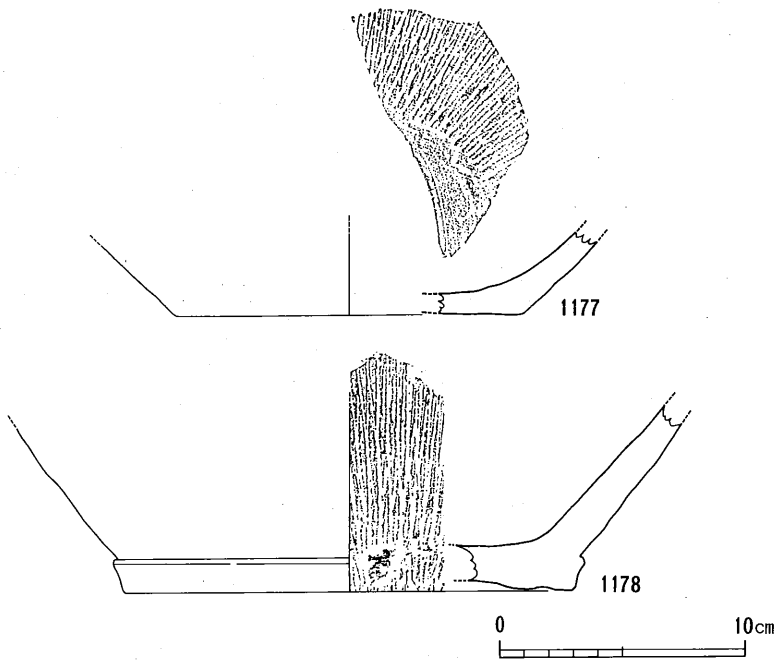
1179は釜と思われる。口縁端部が短く上方に延びる。1180～1183は火鉢である。体部はやや内彎気味に外方に延び、口縁は左右にやや拡張される。器高の高いもの（1180・1181）と低いもの（1182）があり、底部に脚の付くもの（1180）も認められる。内面は刷毛調整されるもの（1182）と板ナデされるもの（1181）などがある。口径は21.5cmの小振りのもの（1181）から33.4cmもの（1183）まである。1184は焙烙である。体部はやや外反しながら外方に延び、口縁端部を丸くおさめている。底部外面は横方向のヘラ削りが施されており、煤の付着が著しい。

土製品

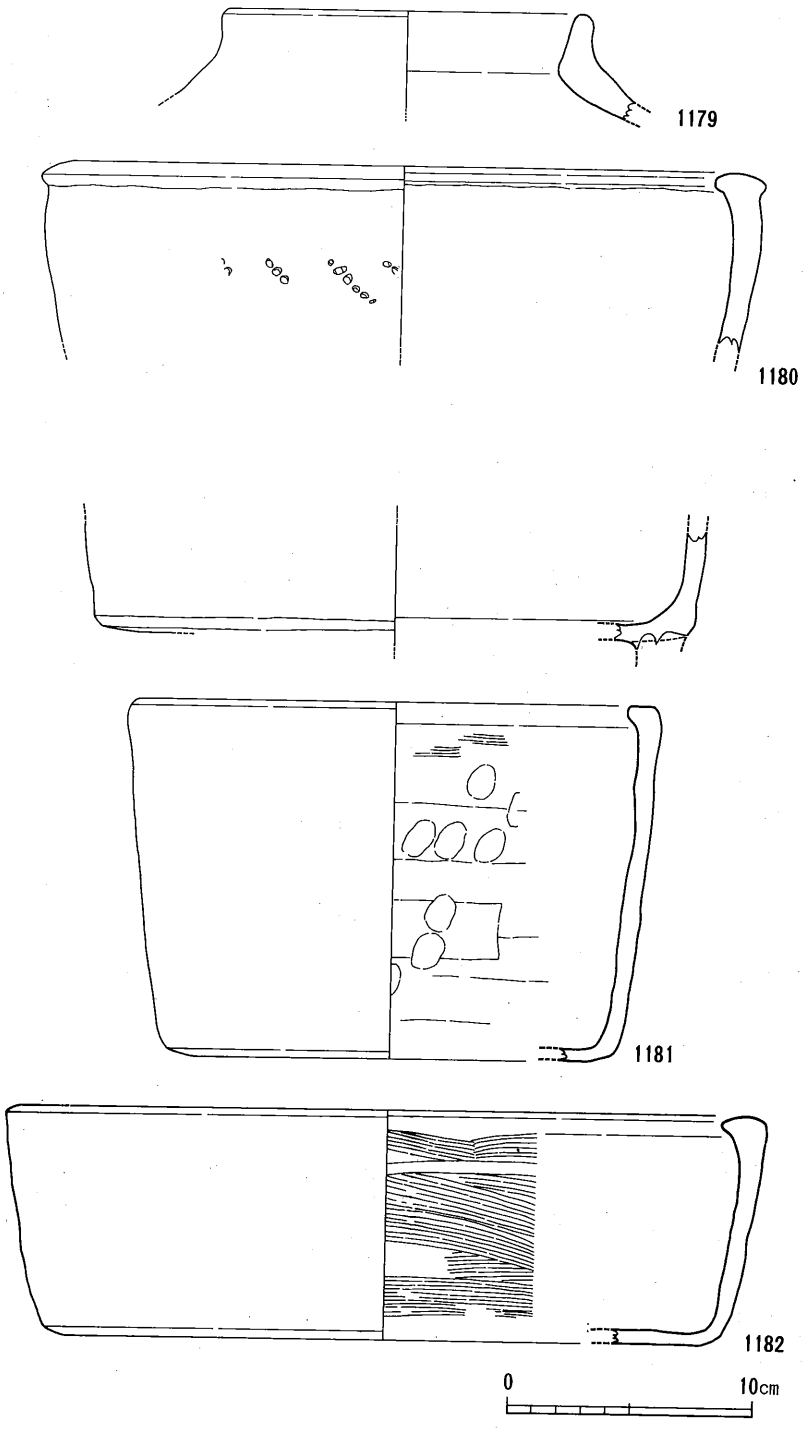
1185は土師質土器の土錘である。ほぼ長方形状を呈しており、かなり大きい穿孔がみられる。

瓦

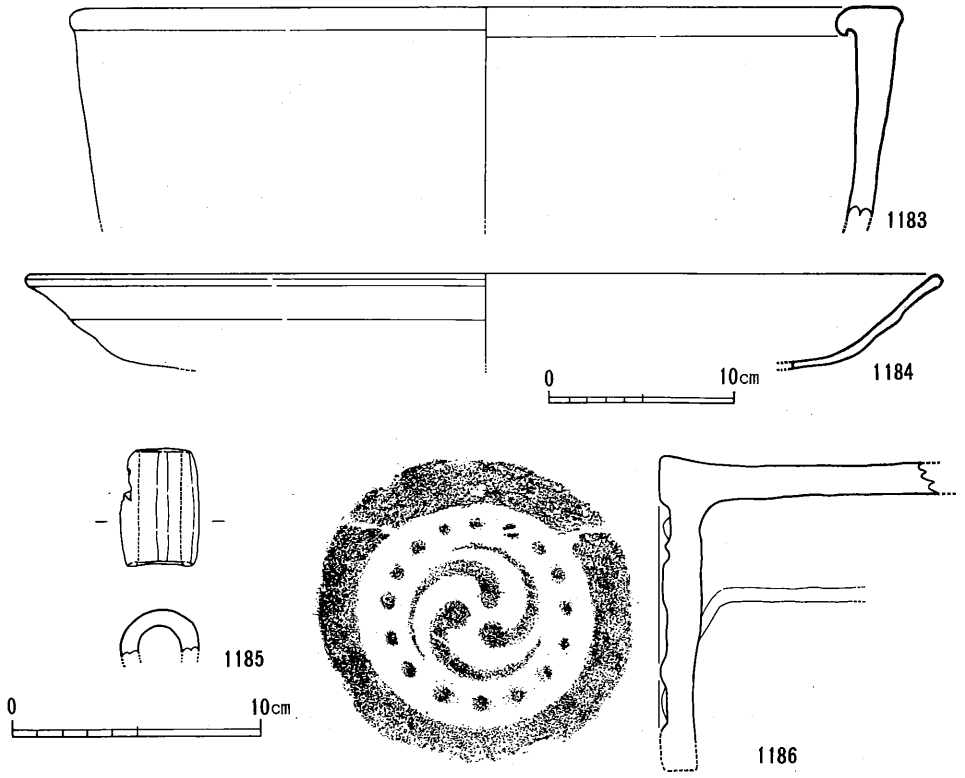
1186は瓦質焼成の軒丸瓦である。頭の大きい三巴文を中央に配し、そのまわりに16の珠文を配している。



第203図　包含層出土遺物実測図③



第204図　包含層出土遺物実測図④



第205図　包含層出土遺物実測図⑤

註１　根木修　近世備前焼の変遷と年代観　「木村コレクション　古備前図録」岡山市教育委員会1985

註２　註１に同じ

註３　白神典之　第５章　堺擂鉢について　「堺市文化財調査報告第37集」堺市教育委員会

(6)　近世のまとめ

このように近世遺構の検出状況は、中心になる主屋を除きそれを画する溝と主屋に付属する炊事場と思われるものが検出されただけであった。このことから近世の遺構は現在の構築物とほぼ同じ場所に位置しており、今回検出された遺構はそれを取り囲む外部施設であることが考えられる。溝状遺構は炊事場と密接な関係にあったことがこの遺構から判り、内部と外部を画する溝状遺構は排水施設としても機能していた。

5．小結

八反地地区では縄文時代晩期から近世に至るまでの遺物が出土したが明らかに遺構に伴うと思われるものは弥生時代後期からと思われる。そのためここでは遺構と遺物に分けてまとめてみたい。

延命遺跡で検出された遺構は縄文時代晩期から近世までである。それらを各時期ごとに細分すると突帯文系土器＋弥生時代前期（Ⅰ期）、弥生時代後期（Ⅱ期）、古代末（Ⅲ期）、中世（Ⅳ～Ⅵ期）、近世（Ⅶ期）の7つの時期に分けられる。

－Ⅰ期－

遺構

Ⅰ期は縄文時代晩期の突帯文系土器を出土する土坑SK01と微地形復原で検出された尾根筋に並走する砂層を基本土層序とする溝の時期である。SK01が検出されたところは谷筋部にあたり、遺構が形成された時期には湿地状を呈していたと思われる。そのため土坑の平面形態は不定形を呈しており、掘り方もしっかりしたものではなかった。このような土坑が調査区北西部では7基ほど検出されている。このようなことからこれらの土坑は湿地状地形の落ち込み部の可能性が考えられ、遺構の可能性も薄いものである。また尾根筋に並走する溝状遺構は5条検出されているが遺物はほとんど出土しておらず、おそらく自然のものの可能性が高い。

このようにⅠ期の遺構としては、明確なものは検出されていない。

遺物

Ⅰ期の遺物としては土坑および溝状遺構から縄文時代晩期の突帯文系土器と弥生時代前期の土器が出土している。また溝状遺構の検出された遺構面を形成する土層から、多量の突帯文系土器と弥生時代前期中段階の土器そして少量ではあるが縄文時代後期（彦崎ＫⅠ式期）の土器が出土している。このことから延命遺跡の遺構面を形成する土層が形成された時期は弥生時代になってからのものと考えられる。突帯文系土器については従来より弥生時代前期に並行する地域があることは言われており、矛盾するものではない。

－Ⅱ期－

遺構

Ⅱ期は調査区北部で弥生時代後期の溝状遺構と掘立柱建物が検出されている。溝状遺構はⅠ期で検出された尾根に並走する溝状遺構に直行するように検出されており、おそらく人為的に作られたものと考えられる。掘立柱建物は2棟検出されたがその他の遺構を伴っておらず、湿地状の谷筋を流れていたであろうSD03～05の際で検出されている。溝状遺構からは多量の遺物が出土しており、あまり磨滅していない状況から弥生時代の生活域はさほどこの調査区から離れていないことが窺える。おそらくこれらの溝は生活域からの排水溝と考えられる。

遺物

溝状遺構より出土した遺物は、手捏の鉢を含む鉢類が非常に多く、また甕においては、胴長の底部丸底化したものが多い。壺・高坏類は非常に少ないのが目に付くものである。搬入品の酒津甕と西瀬戸内系といわれる壺が出土しているようである。

Ⅱ期の時期は遺物から弥生時代後期の終末（庄内併行期新段階）～古墳時代初頭（布留古段階）頃と考えられる。

－Ⅲ期－

Ⅲ期の遺構は主として調査区南部で検出された。庇付きの建物を主屋とするとSB35の庇付きの建物が1棟離れてあるが、南西部と南東部にまとまりを持つようである。南西部では二重の柵と溝状遺構によって区画された掘立柱建物群が検出された。2×5間の東・西・南に庇の付く建物を主屋とするが調査区西に建物群の中心はあるものと思われ、全容は不明である。また、南東部のまとまりは1×5間の東西に庇の付く建物を主屋とするもので、1×2間の建物を西に配しているが調査区東部に中心を持っているようである。

遺物

Ⅲ期に伴う遺物としては柱穴より黒色土器とやや小型の坏が出土している。黒色土器はA類のものを主体とするが口縁部内面に沈線を持つB類も出土している。黒色土器B類はおそらく楠葉産のものと思われる。土師器の坏は底部ヘラ切り調整のもので体部は内彎気味に口縁部で外反するものが主体である。また包含層より近江産の緑釉片が出土しており、黒色土器および緑釉から10世紀後半～11世紀にかけての時期と思われる。

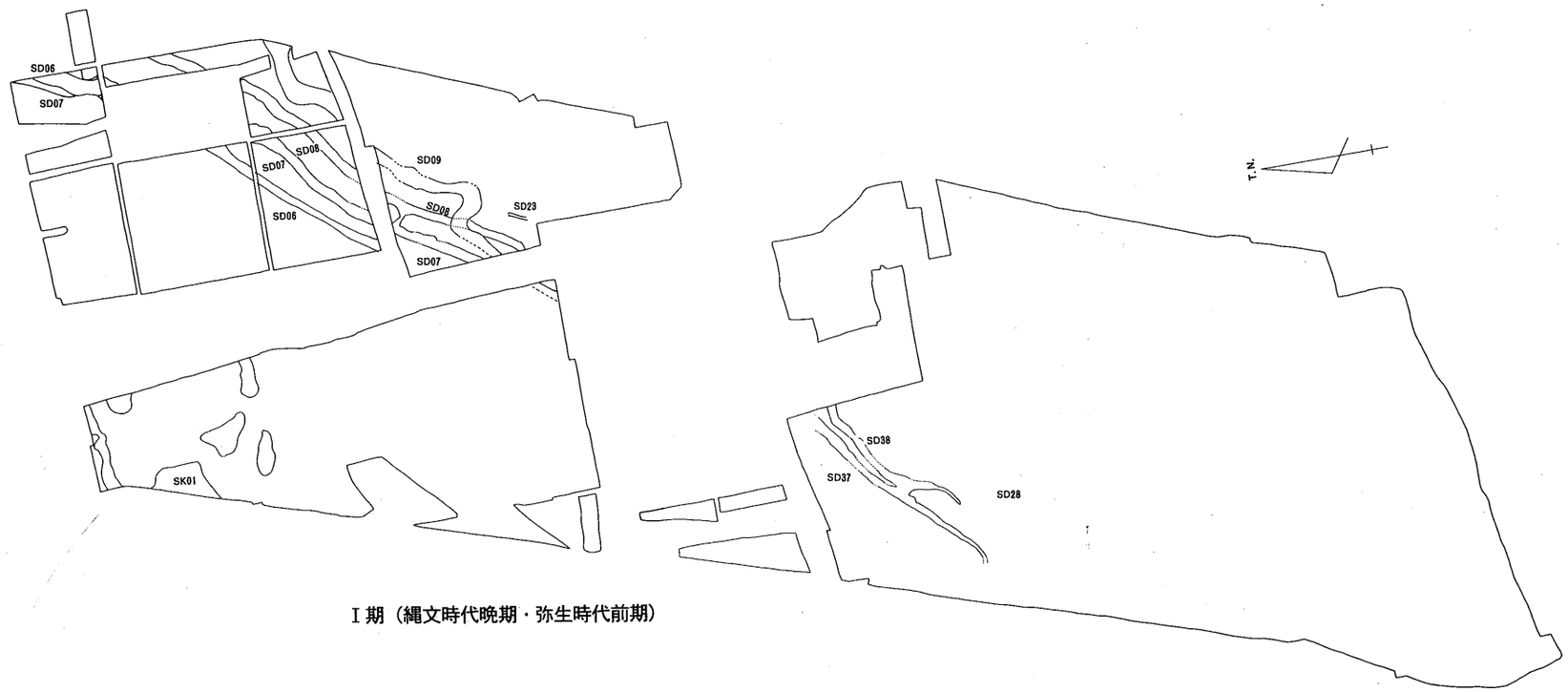
－Ⅳ～Ⅵ期－

Ⅳ～Ⅵ期の遺構は主として調査区南半中央部で検出された溝に区画された建物群である。庇付きの掘立柱建物は2棟であるが、主軸および切り合いから3時期の建て替えがあるものと考えられる。また、検出された遺構から多量の中世遺物が出土している。供膳形態としての椀類は土師器・瓦器・瓦質土器がほぼ同等量出土しており、坏類は口径15～16cm程度のものであと土師器の小皿が伴うものである。また、貯蔵具としては東播系の甕および常滑焼が少量出土している。煮沸具としては土師器の土鍋が少量出土している。調理具としては東播系のこね鉢が主として出土している。このように中世の遺構に伴って出土した土器は供膳形態を主として出土しており溝によって区画された掘立柱建物群の性格に少なからず関係があるものと思われる。建物を構成する柱穴から出土した畿内産の瓦器および東播系のこね鉢などから13世紀後半頃から13世紀末頃の時期が確認され、切り合いおよび主軸で推定された3時期の建て替えが裏付けられるものとなった。

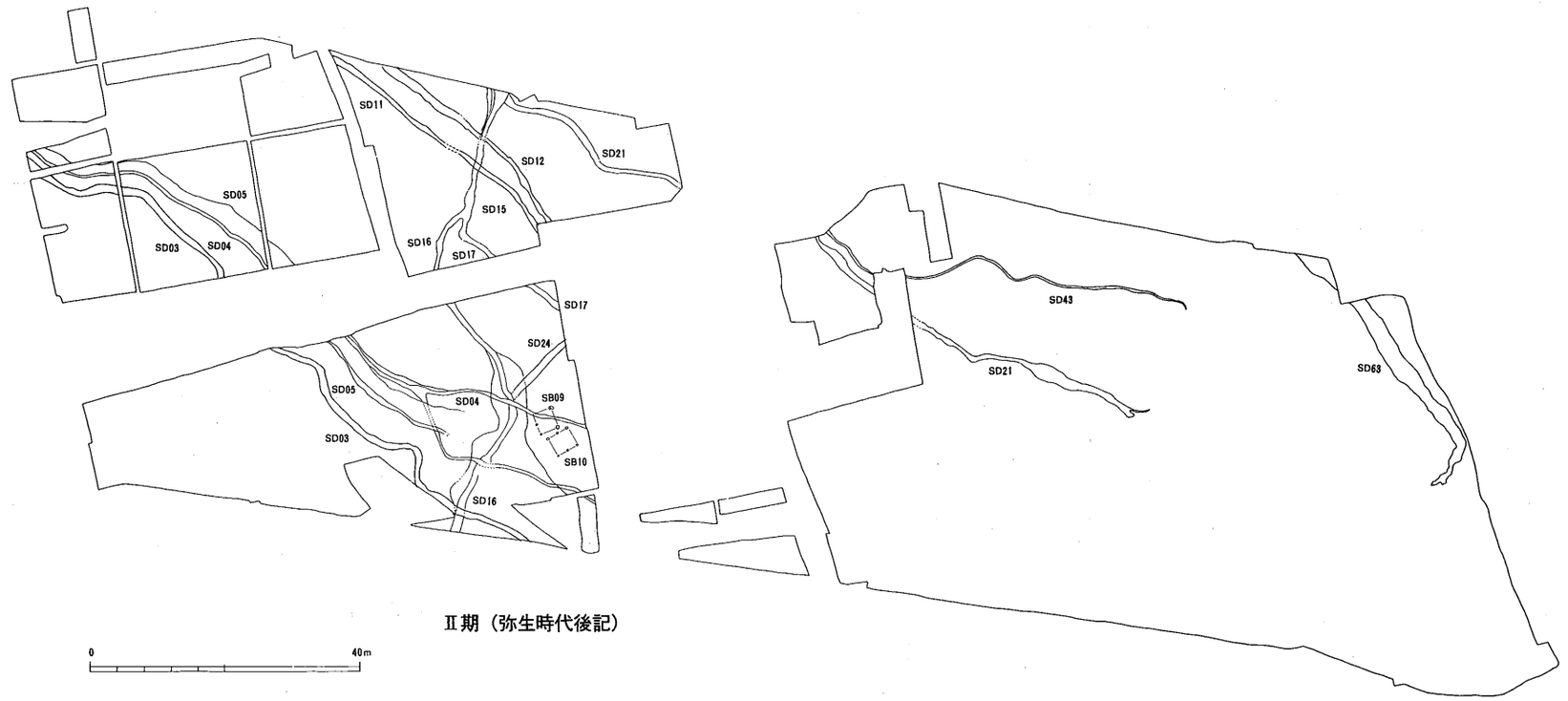
Ⅳ期

遺構

南北に庇の付く建物SB33を主屋とする建物群である。これら建物群は区画溝が伴うもので西

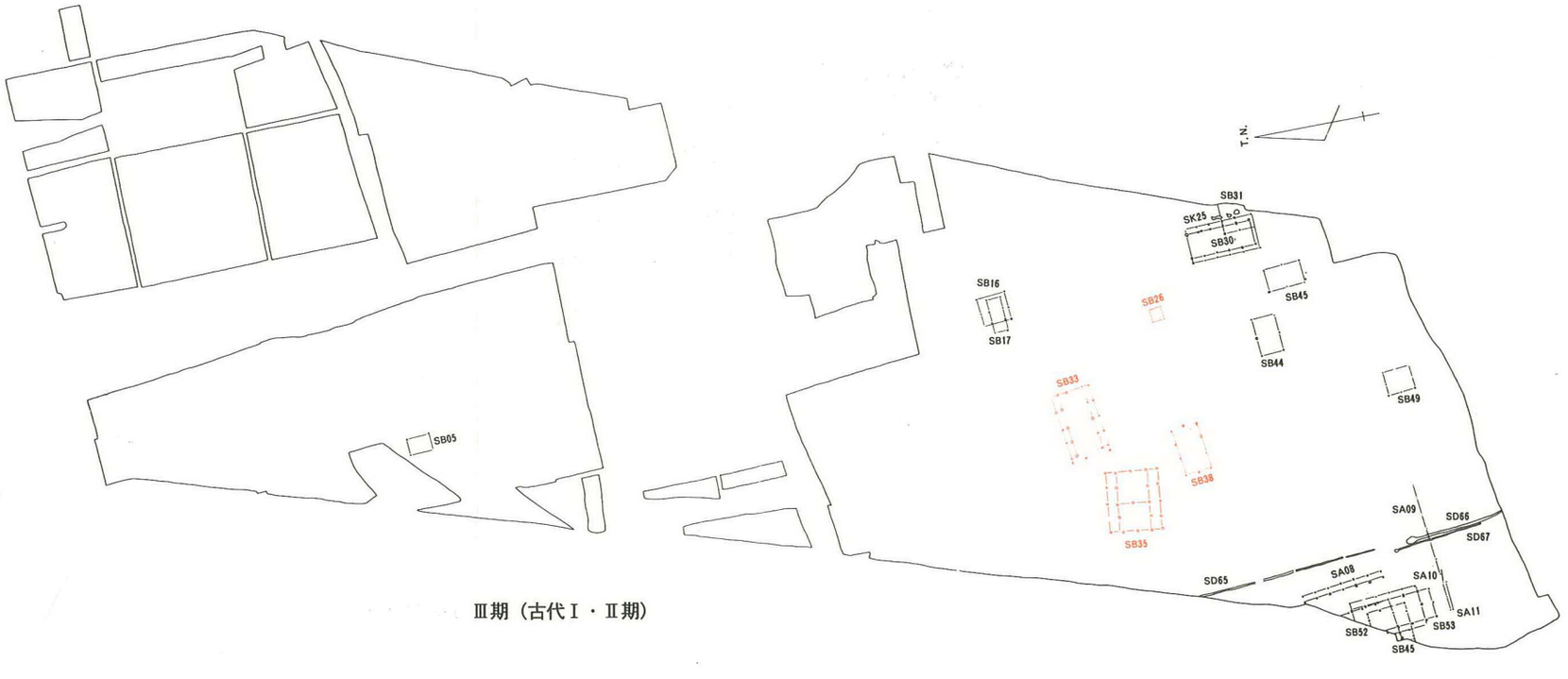


Ⅰ期（縄文時代晩期・弥生時代前期）

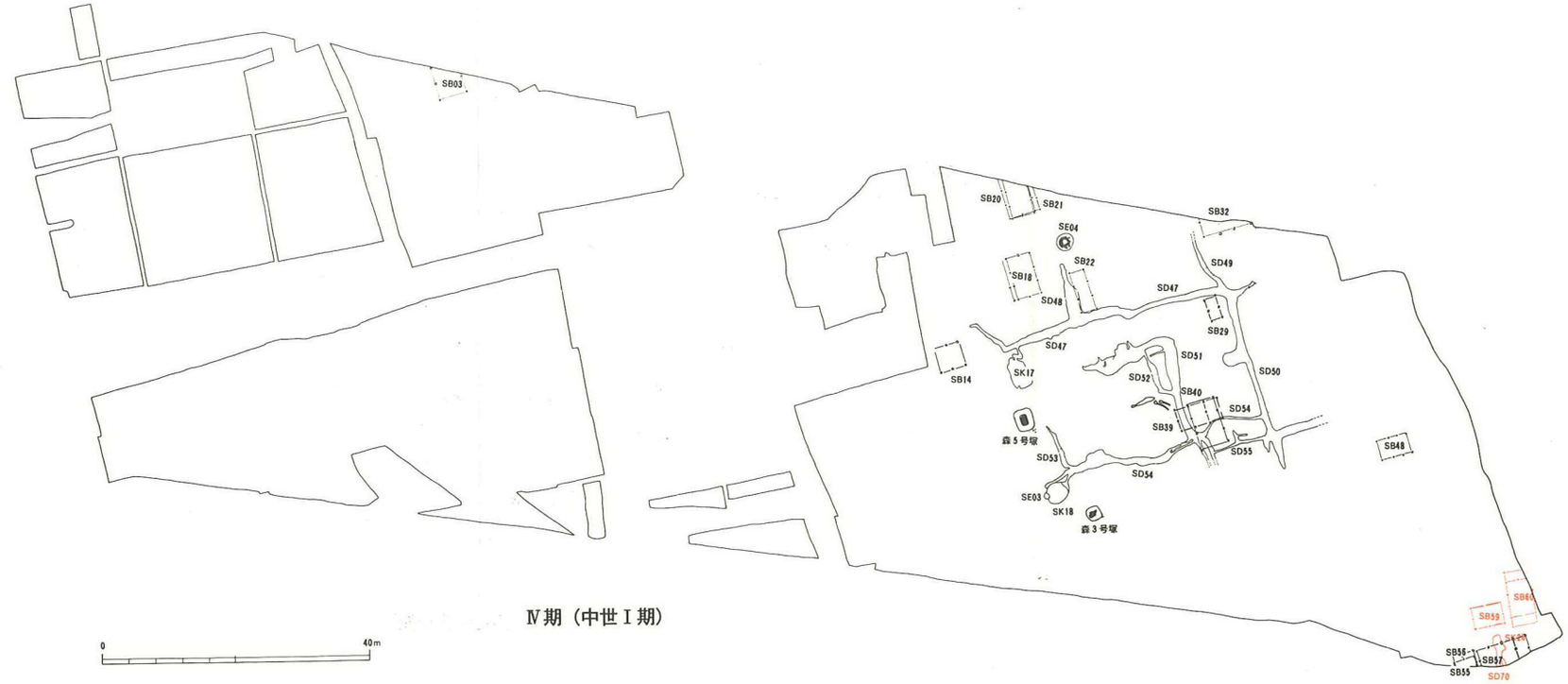


Ⅱ期（弥生時代後記）

第206図　八反地地区遺構変遷図①

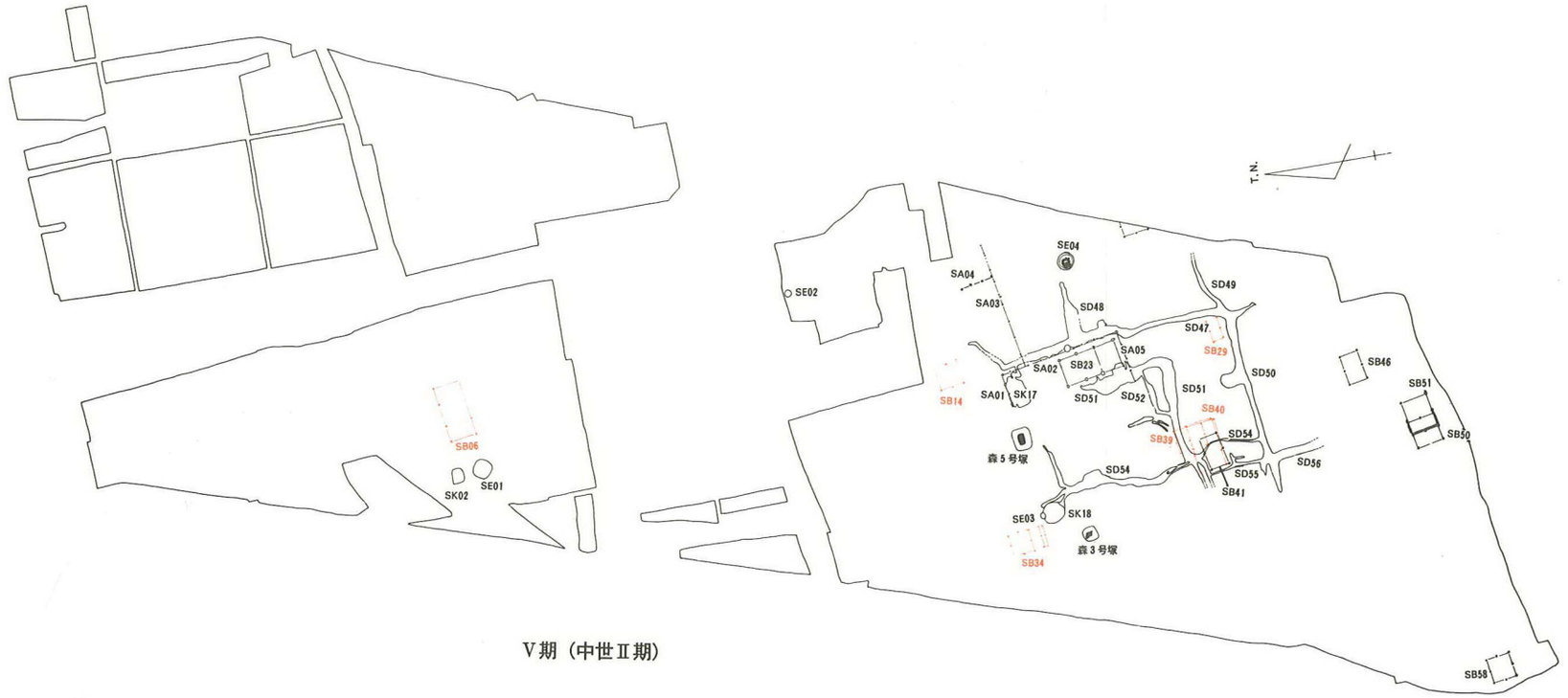


Ⅲ期（古代Ⅰ・Ⅱ期）

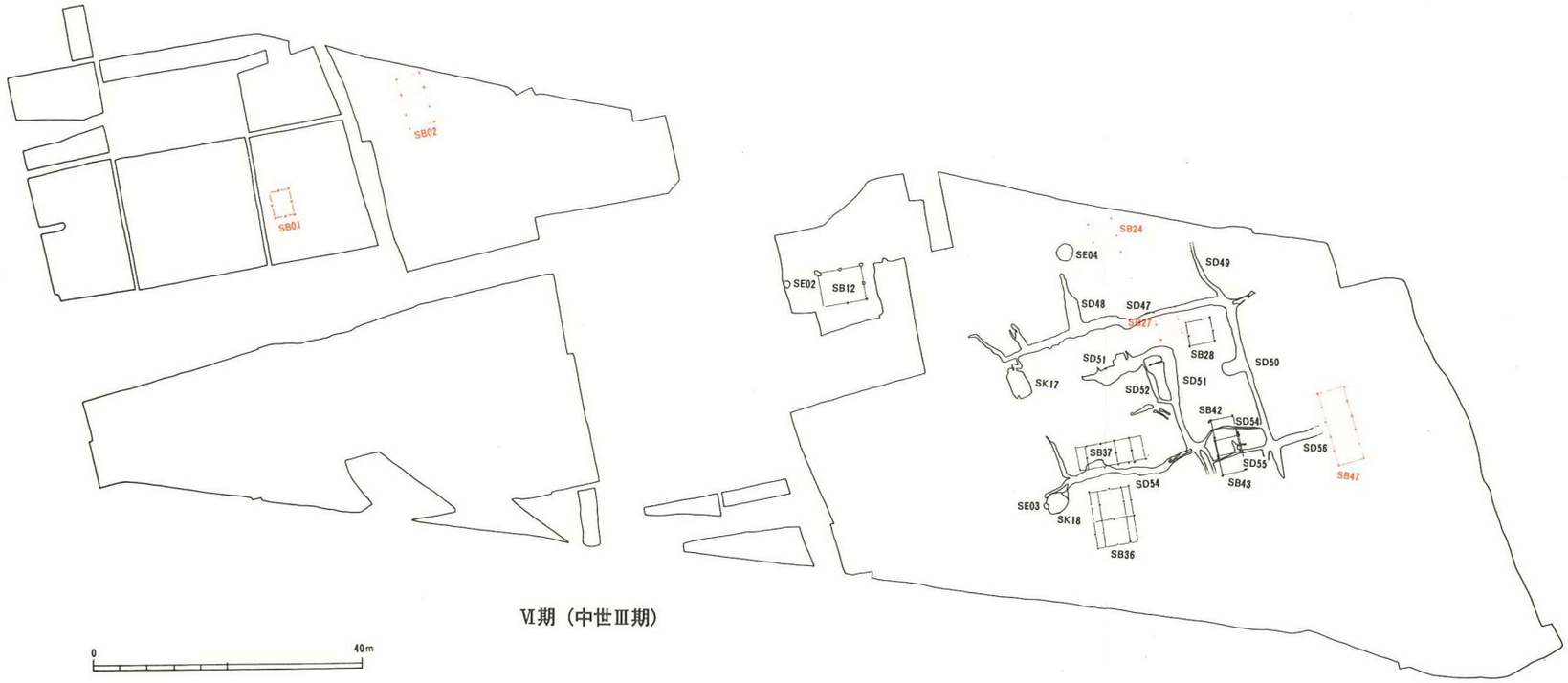


Ⅳ期（中世Ⅰ期）

第207図　八反地地区遺溝変遷図②

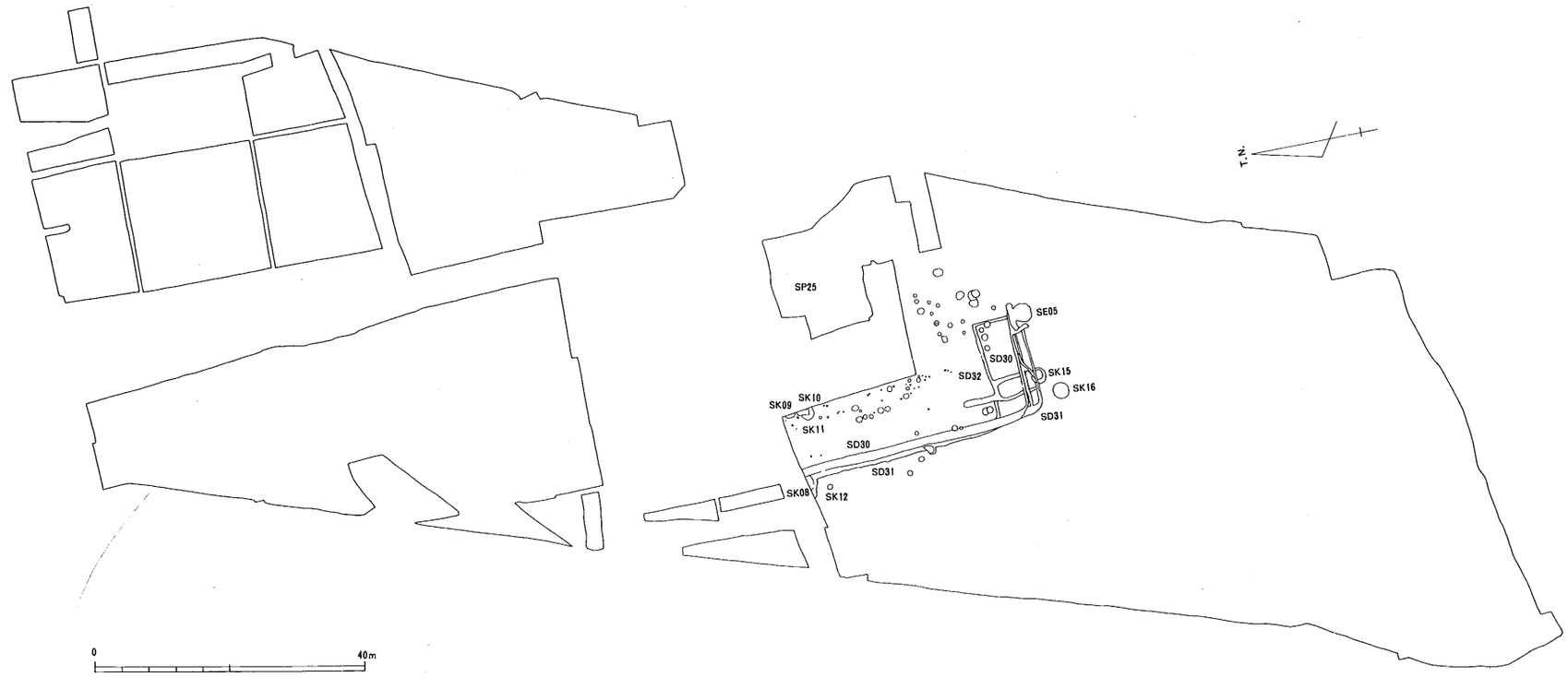


V期（中世Ⅱ期）



Ⅵ期（中世Ⅲ期）

第208図　八反地地区遺溝変遷図③



第209図　八反地地区遺構変遷図④

に広がりを持っている。また区画溝の北西外には集石による墓が造られており、居住域と墓域の境はつけているが、あまり距離をおいていないことが窺える。

遺物

建物を構成する柱穴から畿内産の瓦器椀、瓦質土器椀、土師器椀等が出土していることから時期は13世紀後半頃と思われるものである。

Ⅴ期

Ⅴ期は庇付きの建物がない時期である。しかし、その代わりに柵SA01～05を伴う建物SB23を主屋とする。柱穴出土遺物を見ると13世紀後半～末頃のものが出土しており、Ⅳ期あるいはⅥ期に重複する可能性が考えられるが、主軸から見るとⅣ期に重複する可能性が強い。

Ⅵ期

遺構

Ⅵ期は南北に庇を持つ２×４間の建物SB36を主屋とするものでⅣ期から継続する区画溝を持っている。主軸はほぼ南北を取っている。Ⅵ期の主屋は区画溝の外側に建てられていることから、併存するⅣ・Ⅴ期の主屋が区画内に建っていた可能性が考えられる。

遺物

建物および区画溝から多数の畿内産の瓦器椀、瓦質土器椀、土師器椀等が出土しており、それらから時期は13世紀末頃に比定される。

－Ⅶ期－

遺構

Ⅶ期の遺構は調査区ほぼ中央部で検出されたもので主体となる部分は検出できなかったが、それを区画する溝および溝に関係する施設が検出された。溝は南西隅にコーナーを作り南側には炊事場的な機能を持つ掘立柱建物および井戸が検出された。

遺物

これら遺構から出土した遺物は染付類を主体として備前焼・土師質土器の焙烙などが出土しており、時期は18世紀頃と考えられる。

第3節　城　岡　地　区

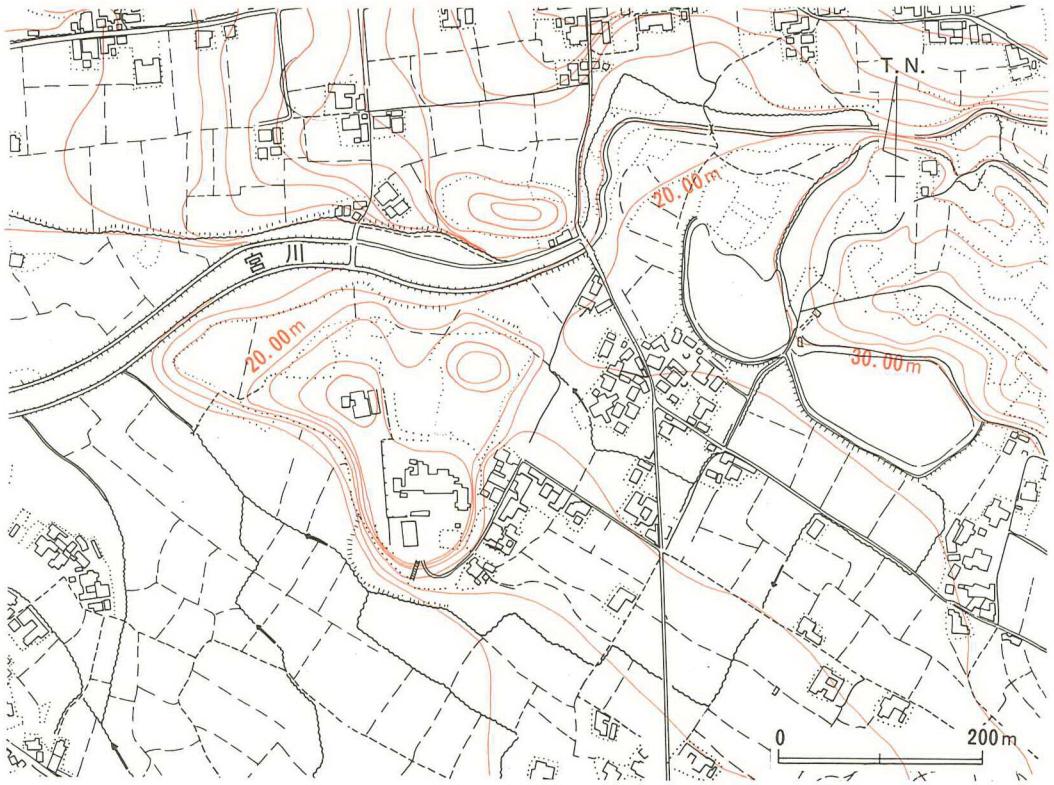
1．遺跡の概要

(1)　地形

城岡地区は三豊郡山本町の知行寺山から北西に派生する連山から延びる尾根筋の先端部、延命の岡に位置している。また、20mの等高線を見るとほぼこの丘陵上を回るように確認でき、知行寺山から派生した丘陵の延長部とはこの20m等高線を境として独立していたことが判る。

これら連山には古墳時代後期の古墳が多数存在し、群集墳を形成している。この城岡地区のある独立低丘陵上にも後期の古墳2基が確認されており、古くから遺跡の存在が確認されていた。

現在の延命の独立低丘陵は南側を財田川の氾濫で急斜面に削られており、北側を宮川によって河岸段丘上に削られている。しかし今回の調査の結果から推定すると中世頃まで宮川は現在のように大きくはなかったようでおそらく小さな小川であったと思われる。そのため八反地地区で確認された遺構とは、中世以前は一つのまとまりを持った遺跡であったと考えられる。



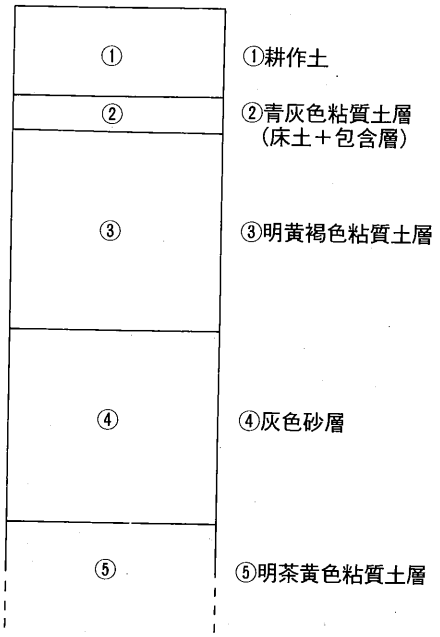
第210図　城岡地区周辺遺跡範囲図

第211図　調査区微地形復原・グリッド配置図

(2) 土層序

城岡地区で検出された遺構は延命の岡（独立低丘陵）と陣山から派生する尾根によって挟まれた部分に堆積した沖積層上にのっており、基本的には八反地地区と同様な土層序になっている。

耕作土と床土を除去するとすぐ遺構面になり、その遺構面を形成する土層は第3層（明黄褐色粘質土層）であり、この層が調査区全域に広がっているものである。この遺構面を形成する土層下には八反地地区と同様に灰色砂層が存在すると思われる。第5層の明茶黄色粘質土層（延命の岡を形成する土層）は延命の岡から延びるもので、宮川になるにつれ第4層が厚くなるようである。



第212図　城岡地区土層模式図

2．弥生時代の遺構・遺物について

SD19・20・24は環濠の一部と思われ、全て延命山の岡の北東部で検出されたものである。環濠として最後まで機能していたのはSD19だけである。SD20はSD19とほぼ重なった場所に掘られていたと思われる。またSD24はSD19・20の内側で確認された。出土遺物及び土層からSD19に先行する溝であると思われる。SD21～23はSD19を横切るように流路を取っており、SD24に埋没したあとに機能していた溝で、その埋没後にSD19が掘られたと考えられる。

(1) 溝状遺構

SD19

SD19はこの延命山の北東部で検出された環濠の中で一番新しい。しっかりしたV字溝を呈している部分があるが、遺物が多量に出土した部分はやや広めのU字溝を呈している。環濠が広くなったり深くなったり浅くなったりしながら最後まで残る溝である。この溝は土層より大別して4時期に徐々に堆積したことがわかる。第一期はこの溝の埋没後のやや凹み状の部分に堆積したもので、中世の遺物が含まれていた。第二～四期の堆積は層位毎に取り上げたものであるが出土遺物から見るとかなり時期幅があるものと思われる。

第二期（第3～7層）

1～7は甕である。頸部の屈曲が、稜を持ちきついものと緩やかなものが認められる。口縁端部形態を上方に小さく摘み出すものもあるようである。体部は胴張りぎみのものとそうでないものがある。8は小型の甕である。口縁部が外方に屈曲するもので、口縁部を上方に小さく摘み出している。

9～12は壺である。9は長頸壺と思われる。口縁部が緩やかに外反する。口縁端部を外方に摘み出している。11・12は口縁端部を上下に拡張し、外側の面に凹線を施すものである。13～20は底部である。底部にしっかりした平底を残す。17は体部外面に刷毛目が内面にはヘラ削りが施されている。20は丸底気味の底部を持つもので体部外面には叩きが、内面には刷毛目が施されている。21は器台の脚部である。脚部にはランダムに穿孔が認められる。

第三期（第8～13層）

22は鉢である。体部は内彎気味に外上方に延び、内面は指頭痕が顕著に見られる。

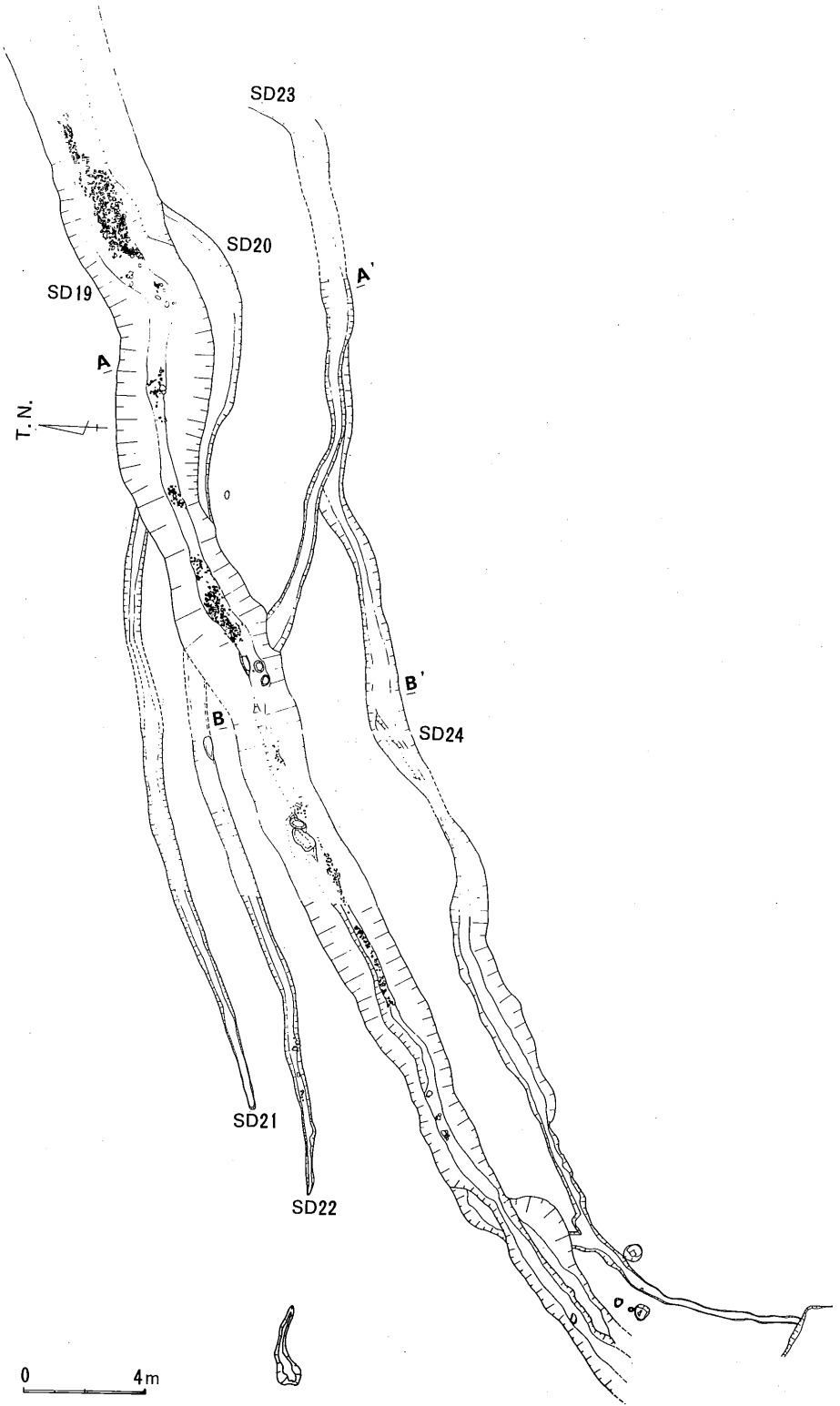
23・24は甕である。23は頸部に稜を持たせ、屈曲させるもので、体部は内彎気味に延びる。体部内面にはヘラ削りが施されている。24は口縁端部を上方に小さく摘み上げている。

25・26は壺である。25は長頸壺である。口縁部はほぼ水平に屈曲し、端部は拡張され3条の沈線が施されている。頸部外面下半に櫛先による刺突がみられる。

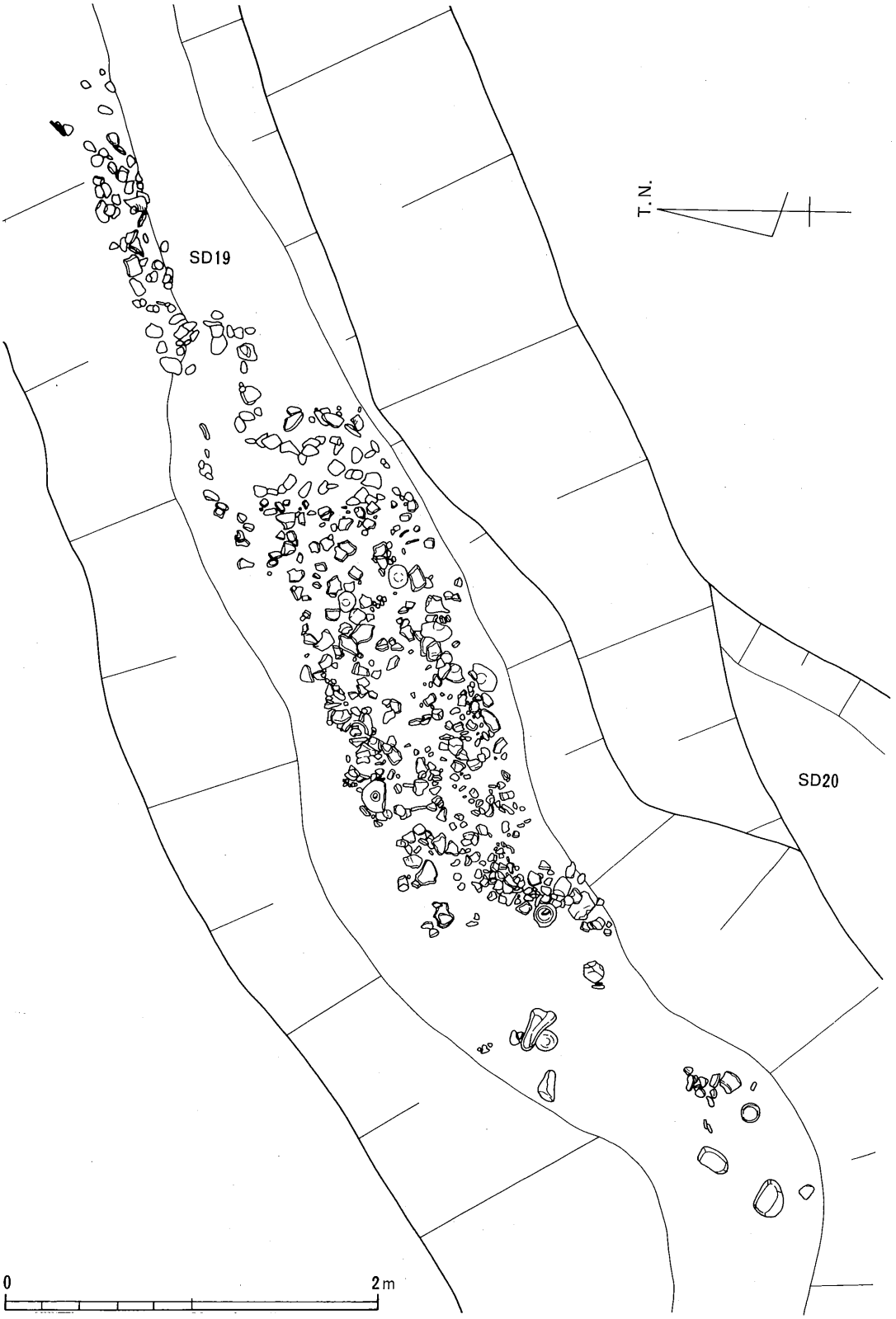
27は高坏である。脚部は大きく開くもので破片のために脚部穿孔は確認できなかった。

28～31は底部である。底部にしっかりした平底を持つものとやや丸底気味のものが見られる。

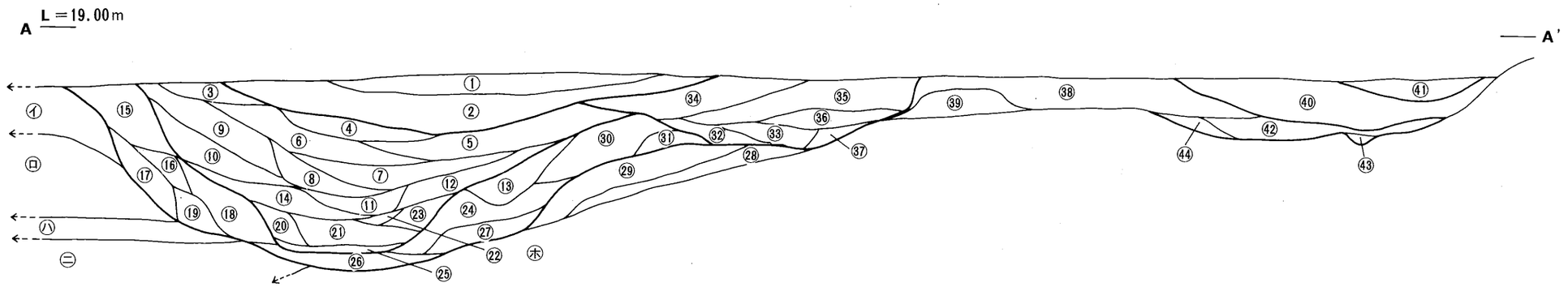
29・30は体部外面に刷毛目が、内面には指ナデが施されている。31は体部内面にヘラ削りが施



第213図　構状遺構平面図



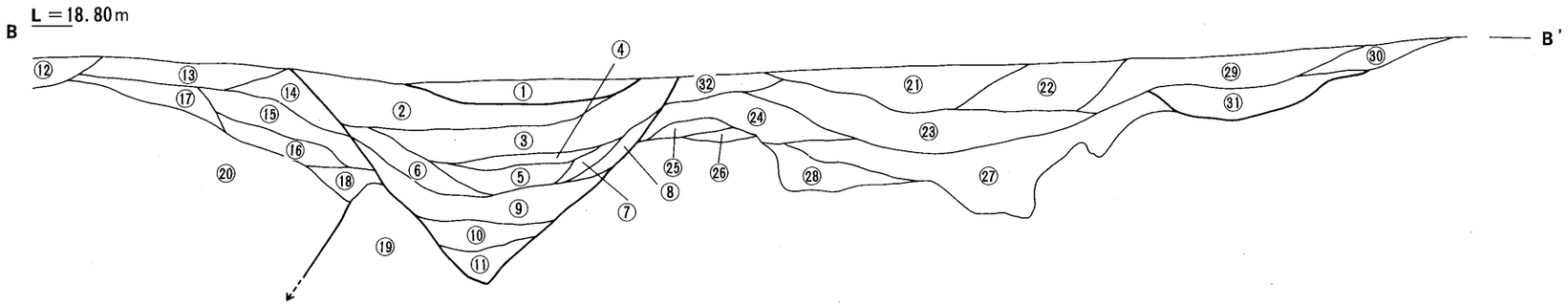
第214図　ＳＤ19遺物出土状況図



①黄褐茶色粘質土層（0.2～3㎜程度の砂粒を含む）
②暗褐灰色粘質土層（　　〃　　）
③明黄灰色粘質土層
④暗灰黄色粘質土層
⑤暗黄灰色粘質土層
⑥④より少し淡い
⑦黒灰色粘土層
⑧淡黒灰色粘質土層
⑨暗灰褐色粘質土層
⑩暗褐灰色粘質土層
⑪淡黒灰色粘質土層（砂っぽい）－土器を含む
⑫暗褐灰色粘質土層（砂っぽい）
⑬暗褐灰色粘質土層（砂っぽい、暗黄白色のブロックを含む）
⑭暗褐灰色粘質土層（砂っぽい）
⑮暗黄褐灰色粘質土層
⑯暗黄褐灰色粘質土層（砂っぽい）
⑰暗黄白灰色粘質土層（砂っぽい）
⑱暗白灰色砂質土層
⑲暗黄灰色粘質土層（砂っぽい）
⑳淡灰黒色粘質土層（砂っぽい）
㉑淡黒灰色砂質土層（2～3㎜の砂粒を少量含む）
㉒暗灰色砂質土層
㉓暗黒灰色砂質土層（0.1～3㎜程度の砂粒を含む）
㉔暗黒灰色砂質土層
㉕淡灰黒色砂質土層
㉖暗灰色砂質土層（礫を含む）－多量の土器を含む
㉗㉔より砂粒が大きい
㉘淡黒色粘土層
㉙黄白色粘質土層（砂っぽい）
㉚黄白色粘質土層（2～3㎜の砂粒を含む）
㉛暗白色砂質土層（2～3㎜の砂粒を含む）
㉜暗白灰色粘質土層（砂っぽい）
㉝暗白灰色砂質土層
㉞暗灰褐色粘質土層
㉟淡黄灰色砂質土層
㊱暗黄灰色砂質土層（2～3㎜の砂粒を含む）
㊲暗灰黄色砂質土層
㊳明黄灰色粘質土層（砂っぽい）
㊴淡青黄灰色粘質土層（砂っぽい）
㊵暗褐灰色砂質土層（2㎜程度の砂粒の間層を含む）
㊶黒色粘質土層（砂っぽい）
㊷暗灰黄色砂質土層（礫を含む）
㊸淡黒灰色砂質土層（粘質っぽい）
㊹明黄灰色粘質土層

イ暗黄灰色粘質土層（砂っぽい）
ロ黄灰色砂質土層（0.5～3㎜の砂粒を含む）
ハ淡黒灰色砂質土層（　　〃　　）
ニ淡黒灰色砂質土層（2～3㎜の砂粒を含む）
ホ明黄白色粘質土層

SD19
第二時期　③～⑦
第三時期　⑧～⑫、⑭
第四時期　⑳～㉓、㉕



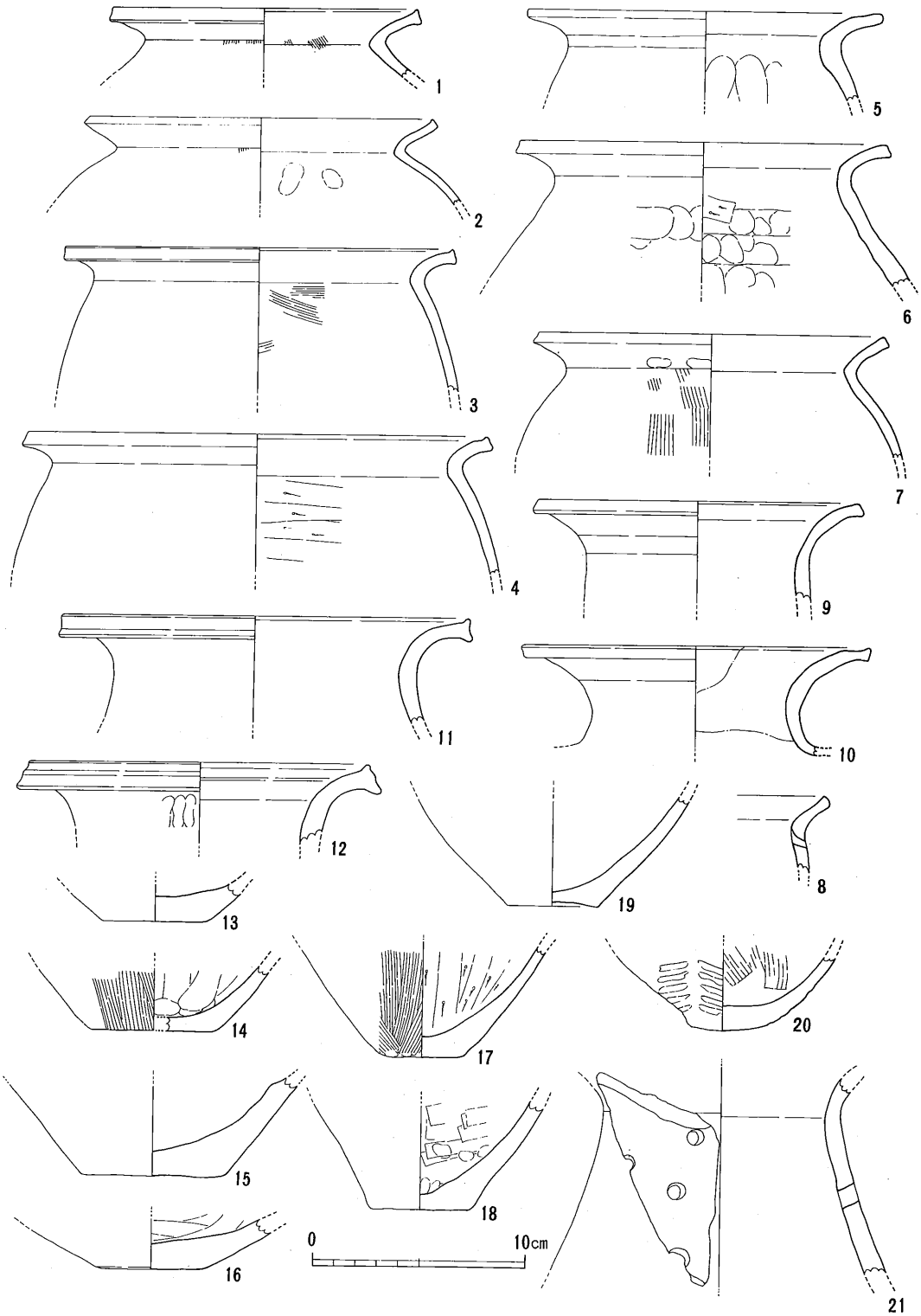
①黄褐茶色粘質土層（0.2～3㎜程度の砂粒を含む）
②暗褐灰色粘質土層（　　〃　　）
③淡黒灰色粘質土層
④暗茶褐色粘質土層
⑤黒褐色粘土層
⑥淡黒褐灰色粘質土層
⑦暗茶褐色粘質土層
⑧暗黄灰色粘質土層
⑨淡黒灰色砂質土層
⑩暗灰色砂質土層（粘質っぽい）
⑪暗灰色砂質土層（黄白色粘土をブロックとして含む）
⑫SD22
⑬黄茶褐灰色粘質土層
⑭暗茶褐灰色粘質土層
⑮暗茶灰色粘質土層
⑯暗褐灰色粘質土層
⑰暗灰褐茶色粘質土層
⑱暗灰色砂質土層（1～3㎜の砂粒を含む）
⑲黄白色粘質土層
⑳明茶黄色粘質土層
㉑暗黄茶色粘質土層
㉒暗茶灰色粘質土層（1～3㎜の砂粒を含む）
㉓茶灰色粘質土層
㉔暗茶灰色粘質土層（砂っぽい）
㉕暗灰色砂質土層（1～3㎜の砂粒を含む）
㉖暗褐灰色砂質土層
㉗暗灰色砂質土層（1～3㎜の砂粒を含む）
㉘淡黒灰色砂質土層（　　〃　　）
㉙黄灰色粘質土層
㉚暗黄灰色粘質土層
㉛淡黒灰色砂質土層（1～3㎜の砂粒及び礫を含む）
㉜黄褐灰色粘質土層

SD19
第二時期②～⑤
第三時期⑥～⑧
第四時期⑨～⑪

SD24　㉛

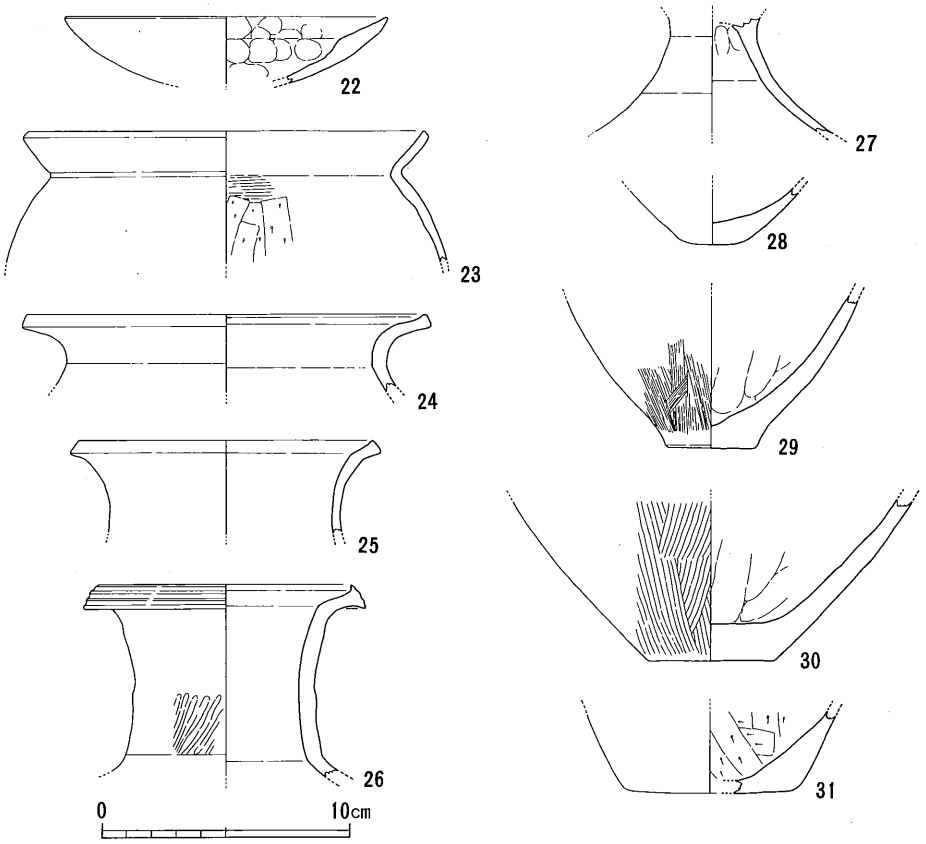
0　2m

第215図　ＳＤ19～24土層断面図



第216図　ＳＤ19出土遺物実測図（第二期）

されている。



第217図　ＳＤ19出土遺物実測図（第三期）

第四時期（第14～18層）

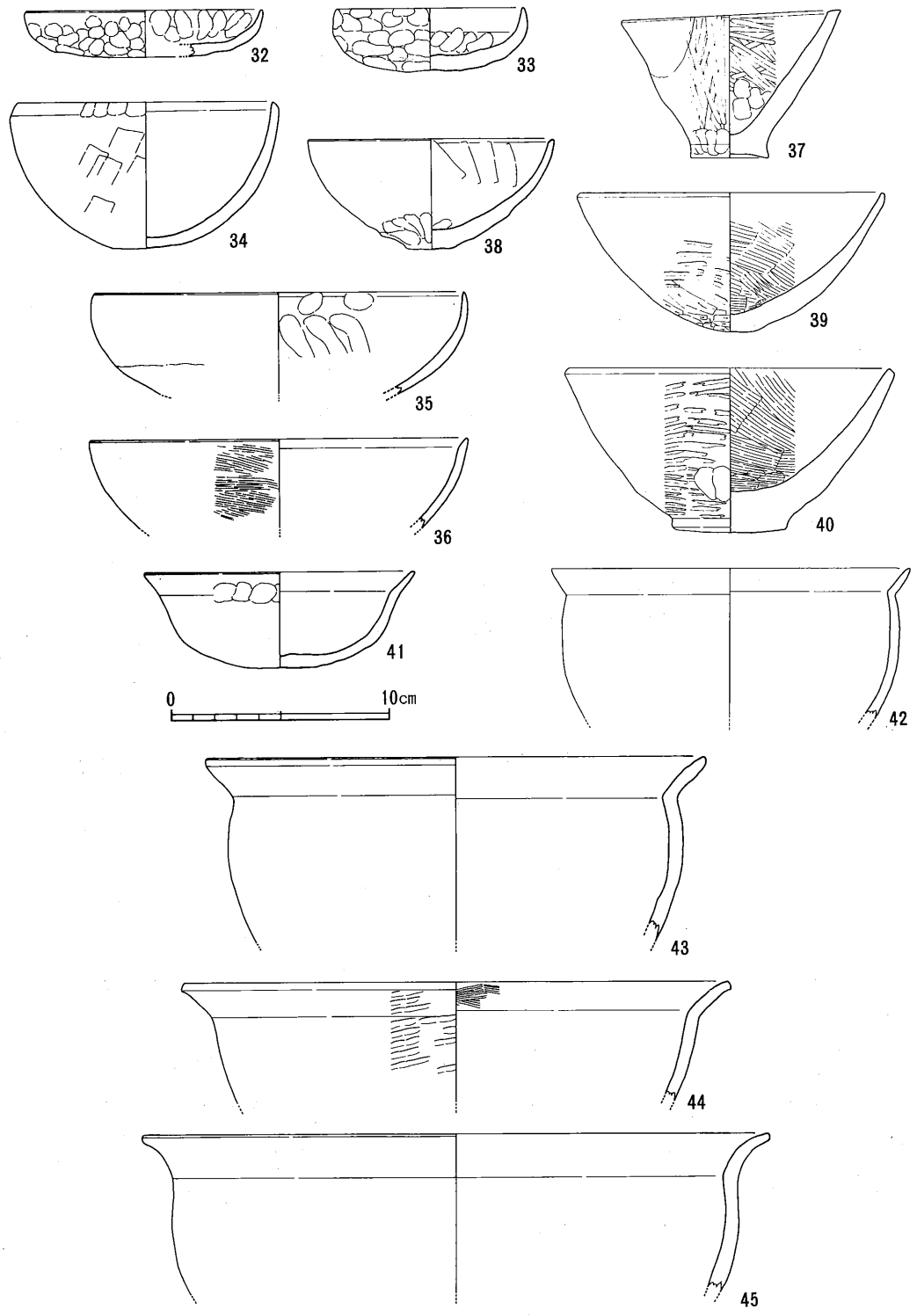
32・33は皿である。内外面に指頭痕が顕著に見られる。

34～48は鉢である。小型の手捏のものや中型のボール状のものや底部に円盤状高台を持つものがある。口縁部は内彎するものや外方に屈曲するもの直線的に延びるものなどがある。34～36は体部が内彎気味に上方に延びる。37は底部が平底で、体部は直線気味に外上方に延び、口縁端部は上方に面を作る。体部内外面にはヘラ磨きが顕著に施されている。体部外面最下段には指頭痕が見られる。38は底部に小さい平底を持つ。体部は内彎気味に延び口縁端部を丸くおさめる。体部最下段外面には指頭痕が、内面には板状工具によるナデが施されている。39は底部がヘラ削りによって尖り気味の丸底を呈し、体部は内彎気味に延びる。底部外面には不定方向のヘラ削りが見られ、体部外面には叩きが内面には刷毛目が施されている。40は底部に円盤状の高台を持つも

ので体部の形態や器面調整はほぼ39と同じである。41～47は口縁が外方に屈曲するものである。41は丸底の底部を持つ小型の鉢である。46は口縁部をやや肥厚させて外面に2条の沈線を施すものである。48は口縁部がほぼ直線的に外方に延びるもので、口縁部外面に2条の退化凹線を施している。

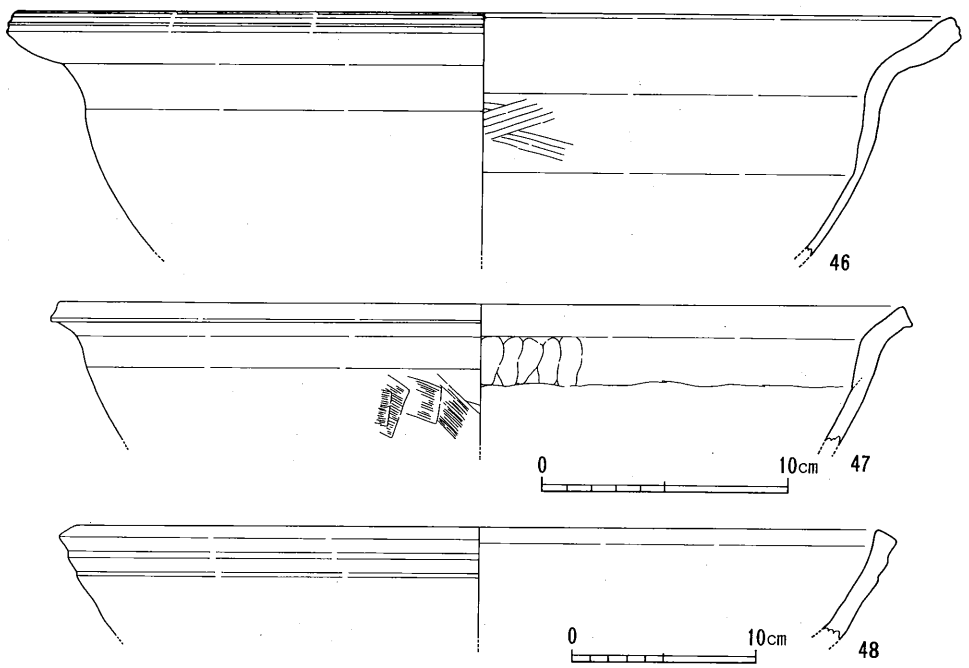
49～69は甕である。甕には大型のものと小型のものがあり、前者は最大径が体部上半にあり胴長で、後者は最大径がほぼ中央かやや上半にある。口縁部形態には頸部できつく折れ曲がるものと緩やかなものがあり、口縁も直線的に外上方に延びるものと外反しながら延びるものがある。口縁端部外面には退化した凹線が認められる。底部は大型のものは平底を持つようで、小型のものは尖り底かやや小さい平底を持つ。49は頸部が内側に稜を残し屈曲し、口縁途中で外方に屈曲させる。口縁端部は小さく上方に摘み上げている。体部外面には叩きの後刷毛目が内面には指ナデが施されている。50・51は頸部内側に稜を持ち、口縁は直線的に外上方に延びる。55は口縁部が短く外方に屈曲し、口縁端部を上方に小さく摘み上げている。体部内面には下方からのヘラ削りが施されている。57は小型の甕である。底部に小さい平底を持ち体部はやや胴長のものである。体部外面には叩きの後刷毛目が、内面には下方からのヘラ削りが施されている。58は小型の甕で胴長の体部を持つ。底部は指頭痕により尖り底を呈している。体部外面には叩きが、内面には刷毛目が施されている。口縁部外面と屈曲部内面と底部内面に指頭痕が顕著に認められる。59は胎土がチョコレート色を呈した甕で口縁部は水平に近く屈曲しており、口縁端部は小さく上方に摘み上げている。体部外面には刷毛目が、内面には指ナデが顕著に施されている。65は底部に平底を残し、体部上半に最大径を持つ甕で口縁部は緩やかに外方に屈曲する。体部外面の調整は磨滅のために不明であるが、内面は下方からのヘラ削りが施されている。体部最下部には指頭痕が見られる。66～69は小型の甕である。66・67は体部がほぼ球形を呈しており、口縁部は外方への屈曲が緩やかなもの（66）ときついもの（67）とがある。67は体部外面に板状工具によるナデの後ヘラ磨きが、内面には板ナデと指ナデが顕著に施されている。68は口縁部が短く外方に屈曲するものでやや胴長の小型の甕である。体部外面には刷毛目、内面にはヘラ削り、上端部には指ナデ、口縁部内面には刷毛目が施されている。

70～117は壺である。大型のものと小型のものがある。前者は底部に平底を残すものとそうでないものがあり、体部最大径もほぼ中央にあるものとやや上半にあるものがある。後者は底部が丸底のものが多いようである。口縁部の形態は頸部がほぼ上方に延び外反するものと、朝顔型に開くものと二重口縁を呈するものがある。壺の口縁部には凹線や波状文・鋸歯文等の装飾が施されている。また頸部最下段にも刻みの施された突帯が付けられているものがある。このようにSD19第4層より出土した壺には口縁部形態にバリエーションがあり、頸部および口縁部に装飾を施すものが多い傾向がある。70は小型の短頸壺である。底部は丸底を呈し、体部上半に最大径（屈曲部）を持ち、口縁は上方に短く延びる。71～73は頸部が短く外方に延びるものである。71



第218図　ＳＤ19出土遺物実測図（第四期）①

は体部と頸部外面には縦方向の刷毛目が、頸部内面には横方向の刷毛目が施されている。72・73は口縁端部外面には1～2条の退化凹線が施されている。73の頸部下方にはヘラ先による刺突状の刻み目が施されている。体部内面にはヘラ削りもあるようであるが指ナデが顕著に施されているものが多いようである。75～79は頸部がほぼ垂直に延び口縁が外方に屈曲するものである。76は体部がほぼ球形で頸部が上方に延びるものである。底部は尖り気味の丸底を呈している。体部外面には刷毛目が施され、内面には最下部に指ナデが中央部には細かい刷毛目が施されている。77は頸部がやや内傾するもので、口縁が水平に近く屈曲する。口縁端部は上下に小さく摘み出されており、外面に凹線状のくぼみを有している。78は外方に屈曲した口縁が三角形状に肥厚しているものである。80は口縁が外反しながら外上方に延びるもので口縁端部内面に指ナデによるくぼみが施されている。81はほぼ球形の体部を持つもので内外面に刷毛目が顕著に施されている。82～86は大型の壺で口縁部が朝顔型に外上方に延びる。口縁端部は細く、上端を小さく摘み上げるものや端部外面に2条の沈線を施すものがある。82は頸部外面に縦方向の太いヘラ磨きが、内面には刷毛目が施されている。83～86の頸部外面と体部には刷毛目が顕著に施されており、体部内面には指ナデが施されている。底部は丸底を呈している。87は胴張りの卵形を呈する体部を持つもので、外面には横方向の刷毛目が施され、内面には縦方向の指ナデが施されている。88・89は長頸壺である。89は体部が球形を呈し、やや内傾気味の頸部を持つもので口縁部は緩やかに外方に屈曲する。頸部と体部外面には刷毛目が施され、頸部と体部内面上半には指ナデが、下半に



第219図　ＳＤ19出土遺物実測図（第四期）②

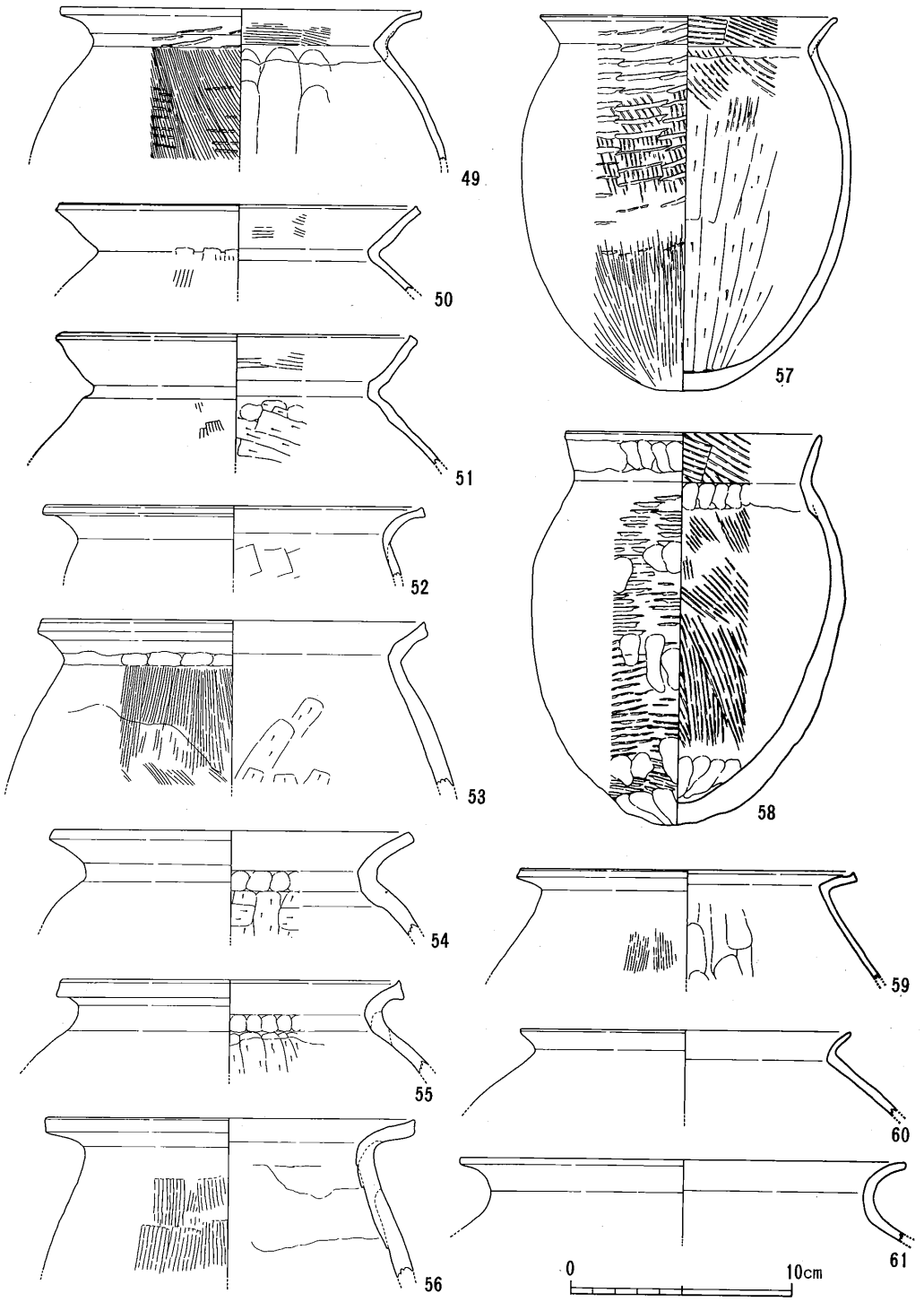
はヘラ削りが施されている。90は小型の長頸壺と思われる。91は底部に平底を持ち、最大径を体部中央に持つもので頸部は外反しながら延びる。体部外面には叩きの後刷毛目が顕著に施されており、内面にも指ナデと併用して刷毛目が施されている。底部外面にも叩きが見られる。92は体部が卵形を呈するもので口縁部は朝顔型に外方に延びる。体部外面には叩きの後刷毛目が、内面には指頭痕が顕著に施されている。93～115は口縁端部外面を拡張させ装飾を施すものと、頸部最下部に突帯を持つものである。93は口縁端部外面を上下に拡張し、3条の凹線を施す。63は口縁端部外面に3～4条の沈線を施し、その上に円形浮文を貼り付けている。95は口縁端部をやや肥厚させたもので外面に鋸歯文を施している。96は口縁端部を三角形状に肥厚させたもので外面に波状文が施されている。97は口縁端部を下方に少し摘み出したもので、外面に斜め方向の刻み目を施している。98～101は口縁端部を上下に拡張させたもので外面に波状文や鋸歯文を施している。98は波状文風のもので櫛の上下を交互に動かして付けられたものである。101の鋸歯文内部は格子である。102～104は口縁端部を上方に拡張したもので外面に円形浮文や波状文を施している。107は頸部が上方に延びほぼ水平方向に口縁部を屈曲させたもので、口縁端部は上方に拡張部を付けたものである。口縁端部外面には鋸歯文が頸部外面には刷毛目が施されている。頸部最下部には刻み目の付けられた突帯が貼り付けられている。108～110は頸部最下部に刻み目のついた突帯が貼り付けられている。111は頸部最下部に櫛先による刺突文が施されている。112～115は口縁端部の上端に拡張部を持つもので所謂西瀬戸内系の二重口縁壺である。拡張部外面には鋸歯文や波状文が施されている。113は沈線間に鋸歯文を配している。115は上部に突帯を下部に沈線を施し、その間に波状文を施すものである。116は二重口縁の壺である。頸部を上方に延ばし、ほぼ水平状に外反させ、口縁部が外上方に延びるものである。117は二重口縁壺か器台と思われ、下部には下方に延びる突帯が付けられている。

118～154は底部である。底部に平底を残すものと丸底気味の平底を持つものがある。小型のものには尖り底をもつものや丸底も少量ある。体部外面には叩きや刷毛目が施されており、内面にはヘラ削りが多く刷毛目や指ナデも認められる。136は体部外面下半から底部にかけてヘラ削りされ、丸底になっている。内面には刷毛目が顕著に施されている。143～148は甑である。あまり大きくない平底の底部に穿孔が見られる。148は尖り底の底部に4穴穿孔されたものである。149～154はやや突出した平底を持つものである。149～152は体部最下部外面に指頭痕が施されているもので、152はやや上げ底状になっている。

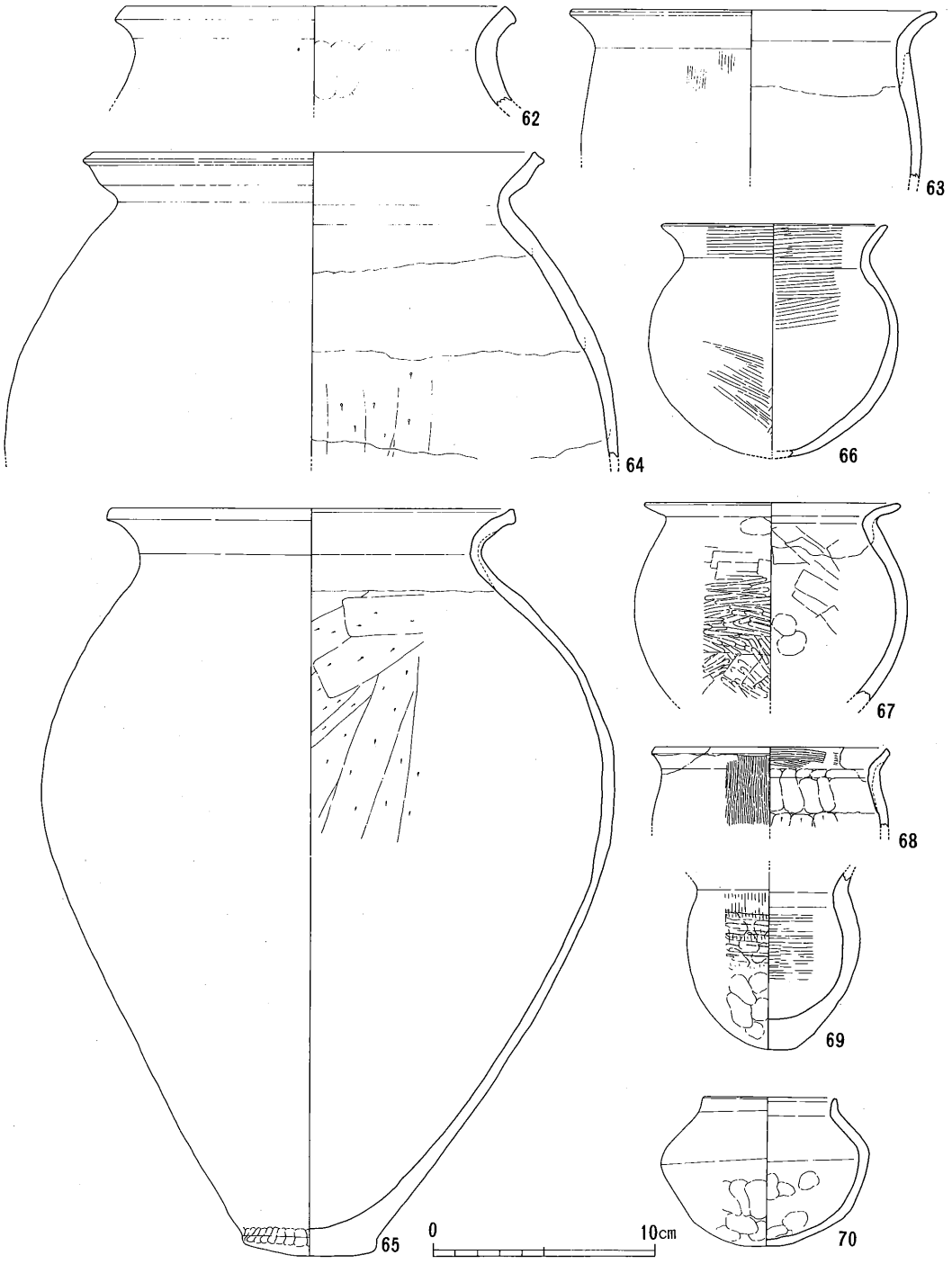
155は製塩土器の底部である。脚部外面に指頭痕が顕著に施されている。

156～159は脚付きの鉢である。内彎する体部を持ち、脚部はあまり長くなく、広がるものである。158は短い脚の付く鉢で体部外面に叩きが内面には指ナデが施されている。

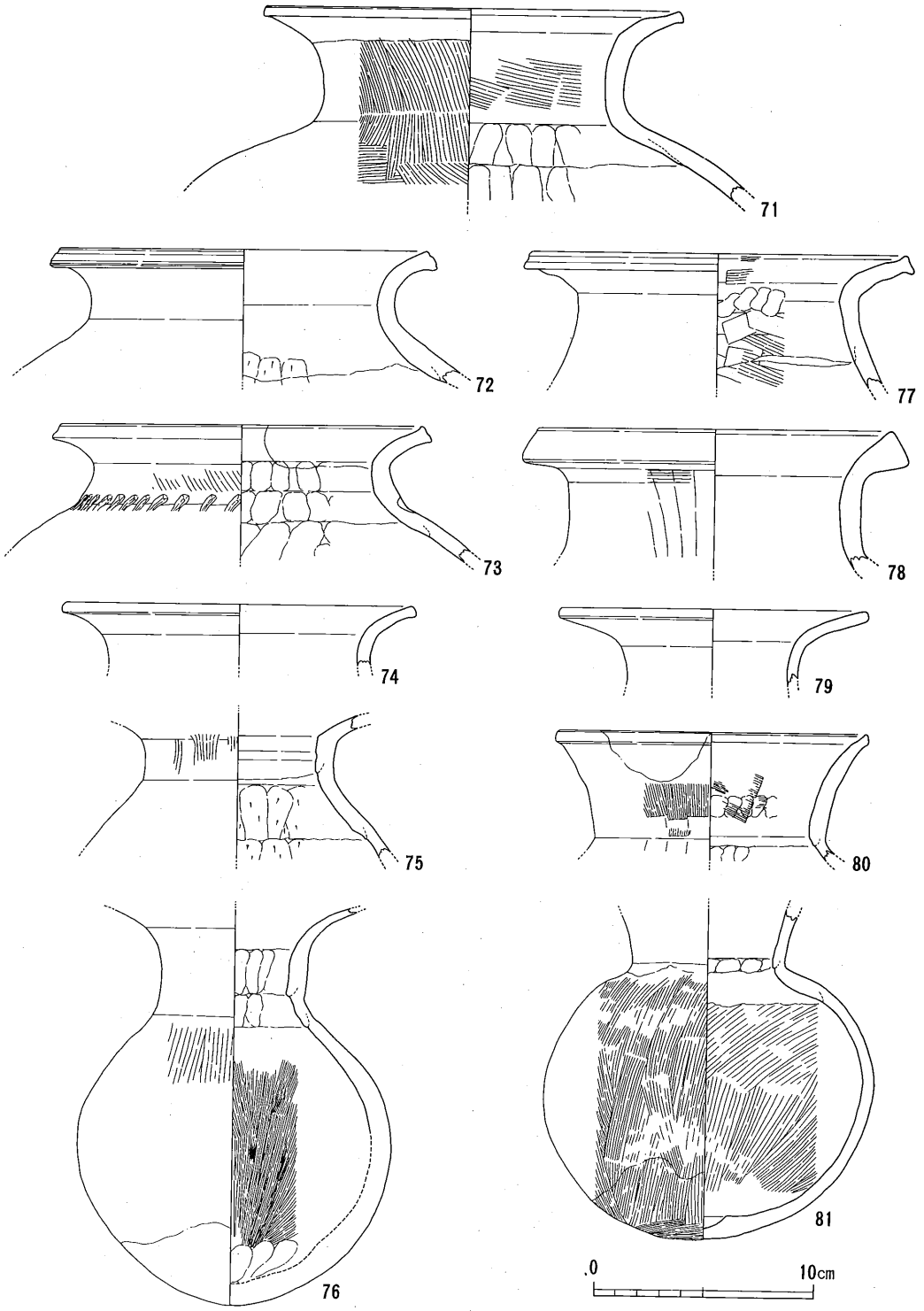
160は小型器台である。短く外上方に延びる坏部と直線気味に広がる脚部を持ち、坏部内面と脚部内面には板ナデが、脚部外面には縦方向のヘラ磨きが顕著に施されている。



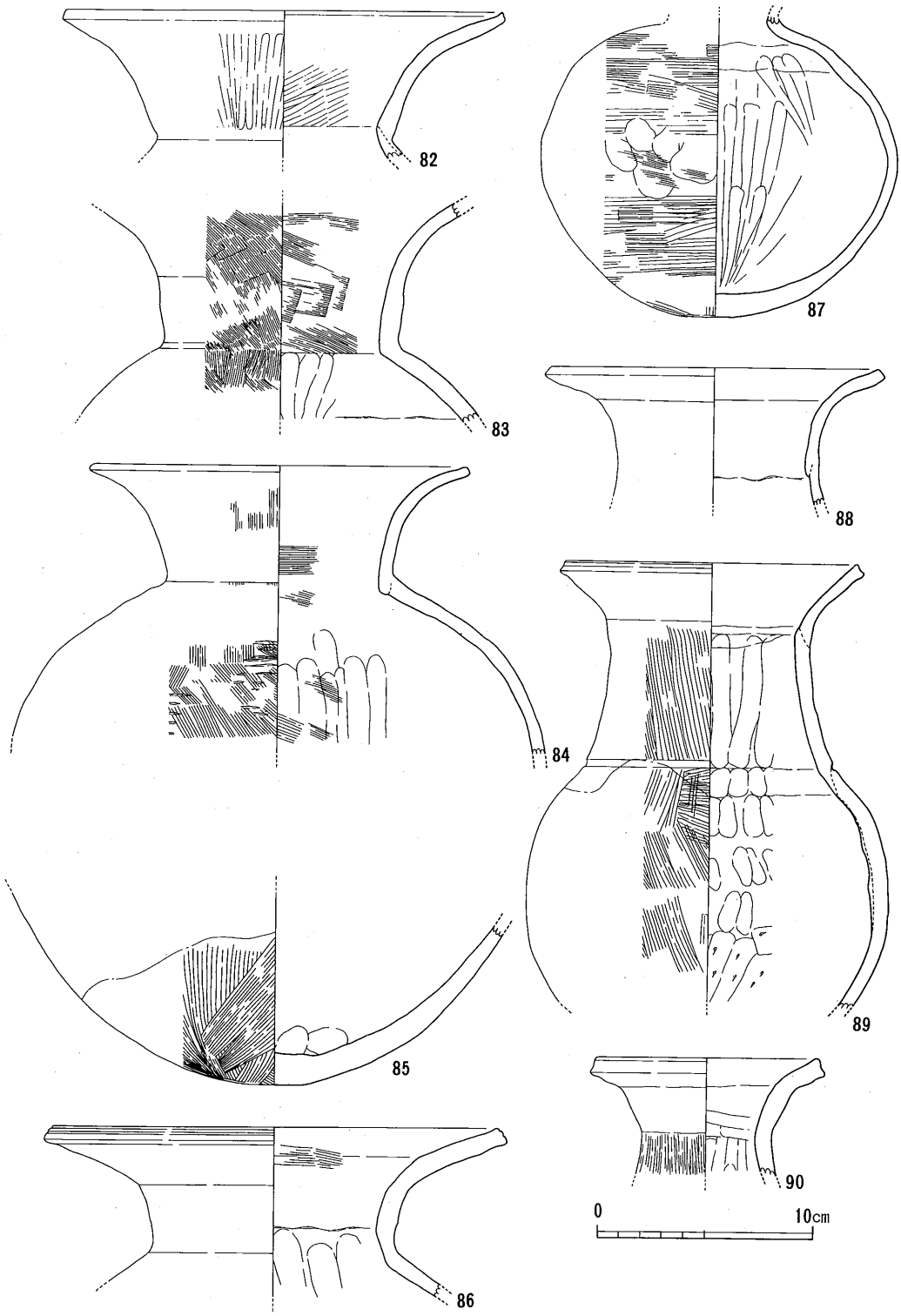
第220図　ＳＤ19出土遺物実測図（第四期）③



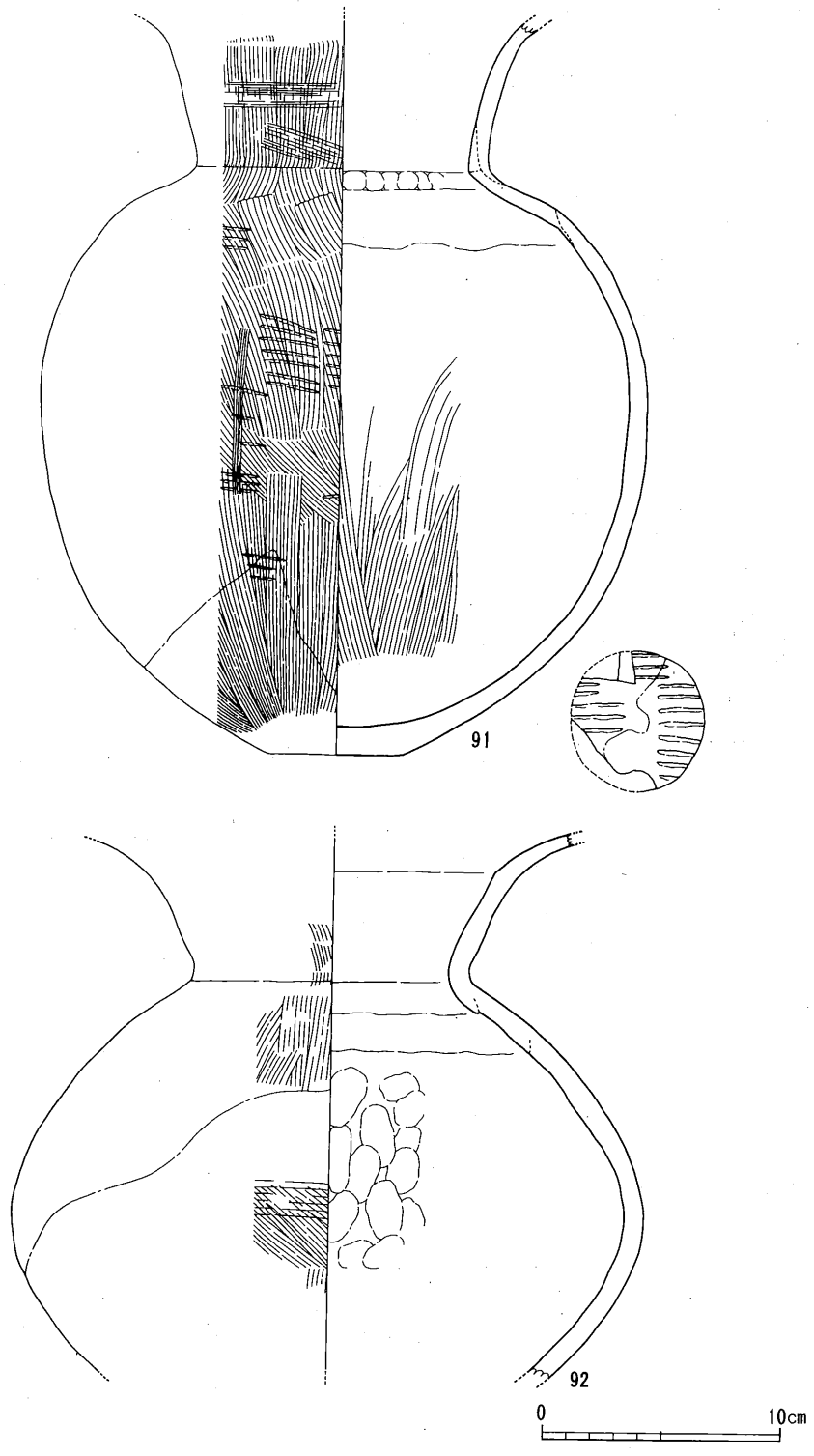
第221図　ＳＤ19出土遺物実測図（第四期）④



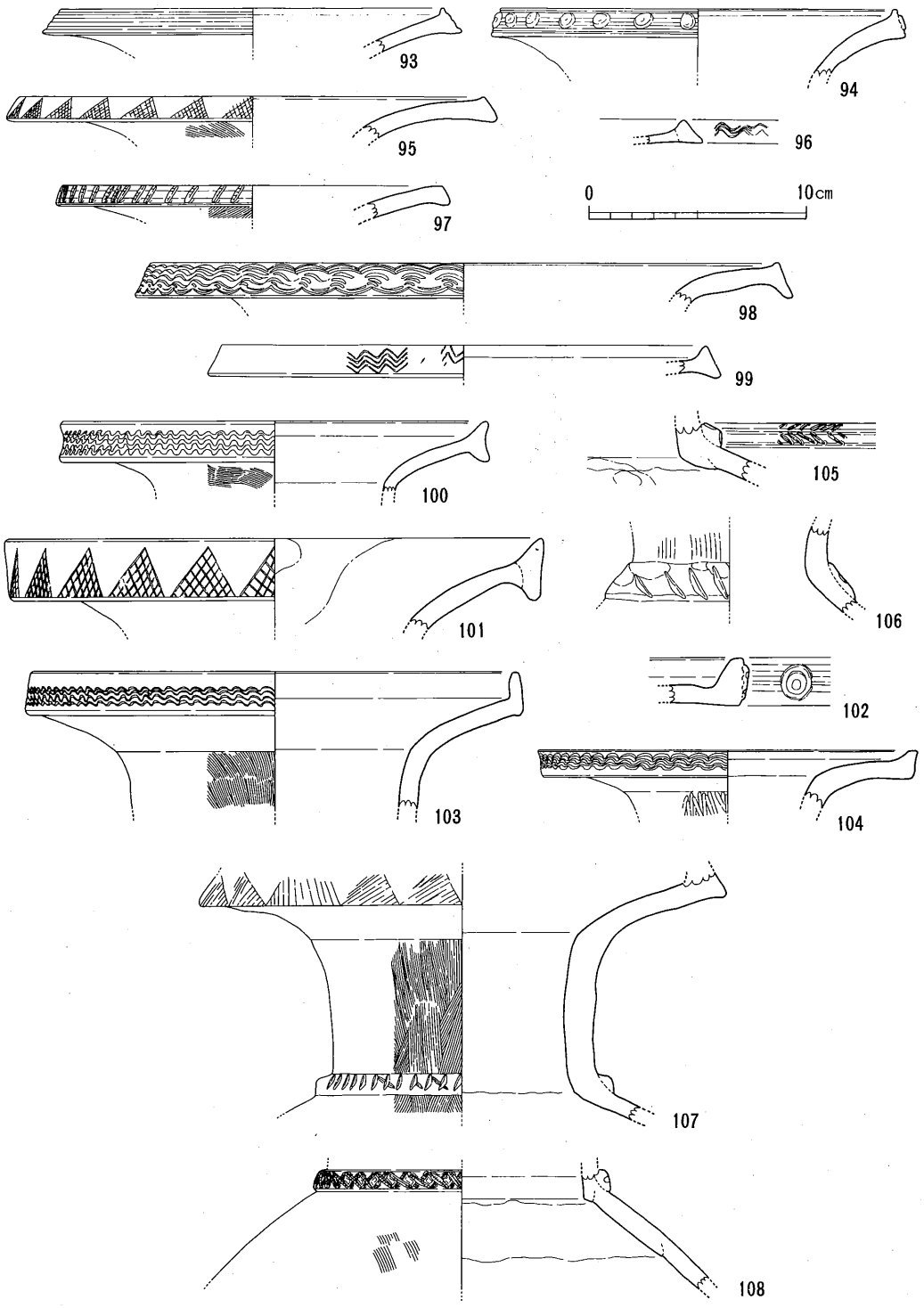
第222図　ＳＤ19出土遺物実測図（第四期）⑤



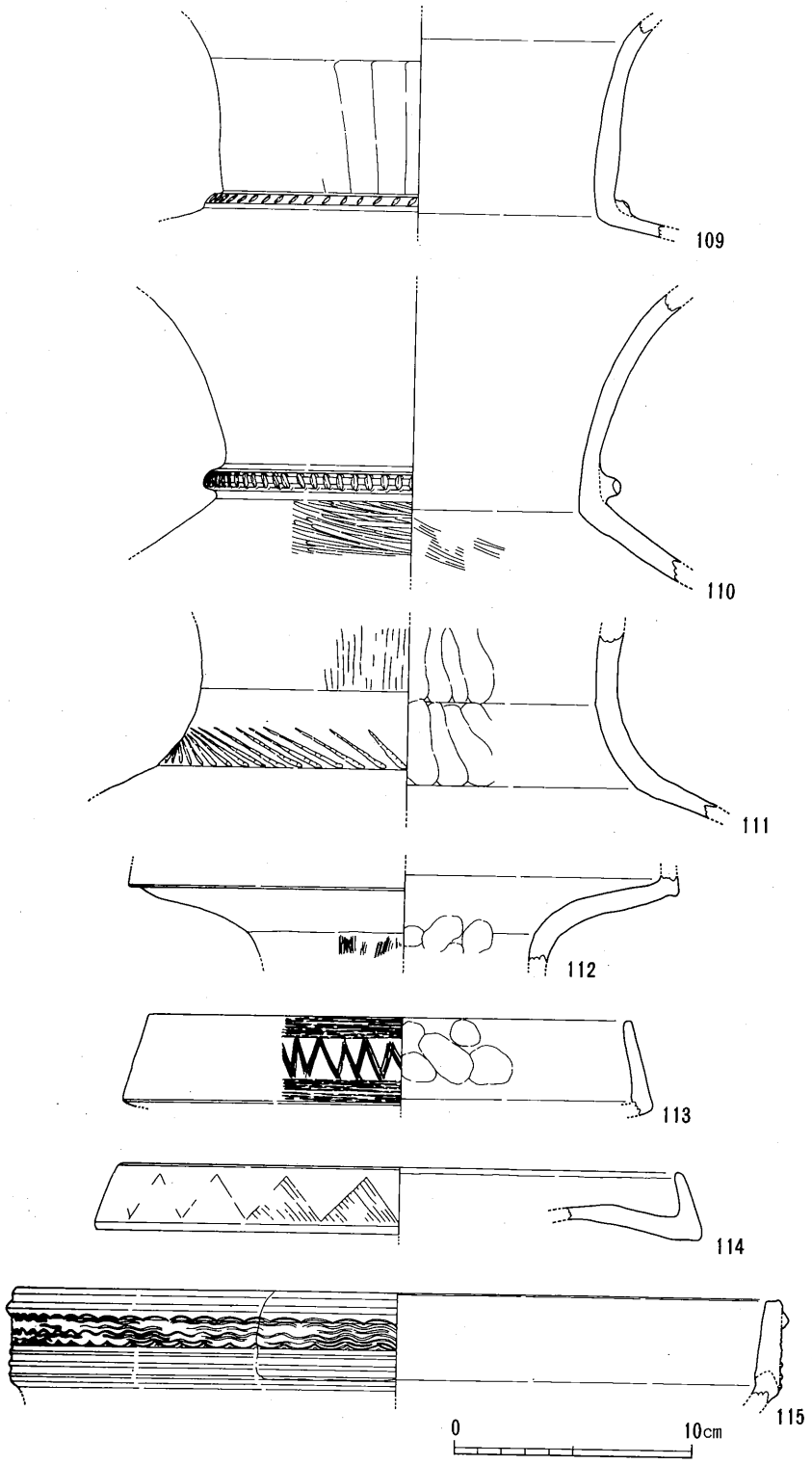
第223図　ＳＤ19出土遺物実測図（第四期）⑥



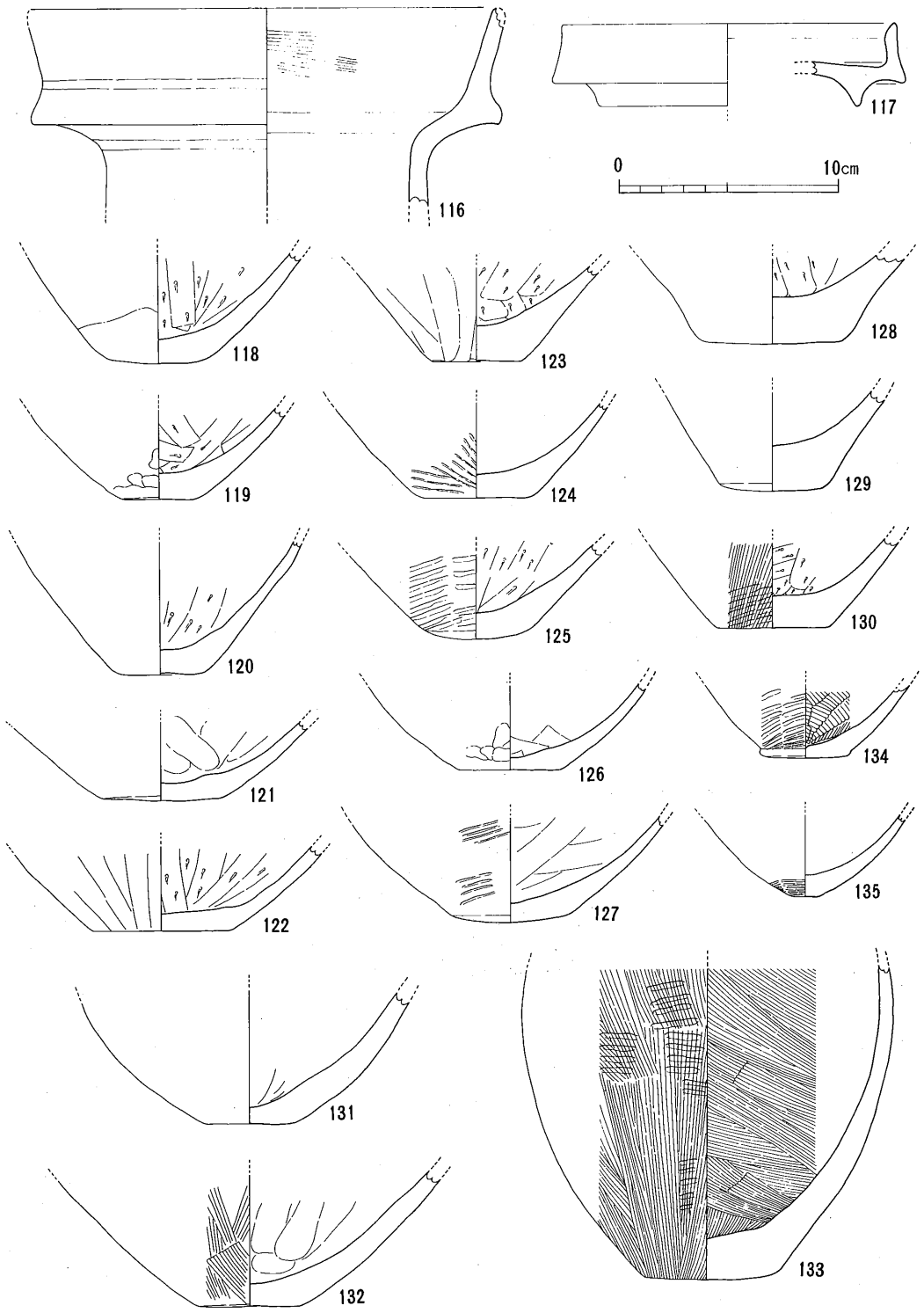
第224図　ＳＤ19出土遺物実測図（第四期）⑦



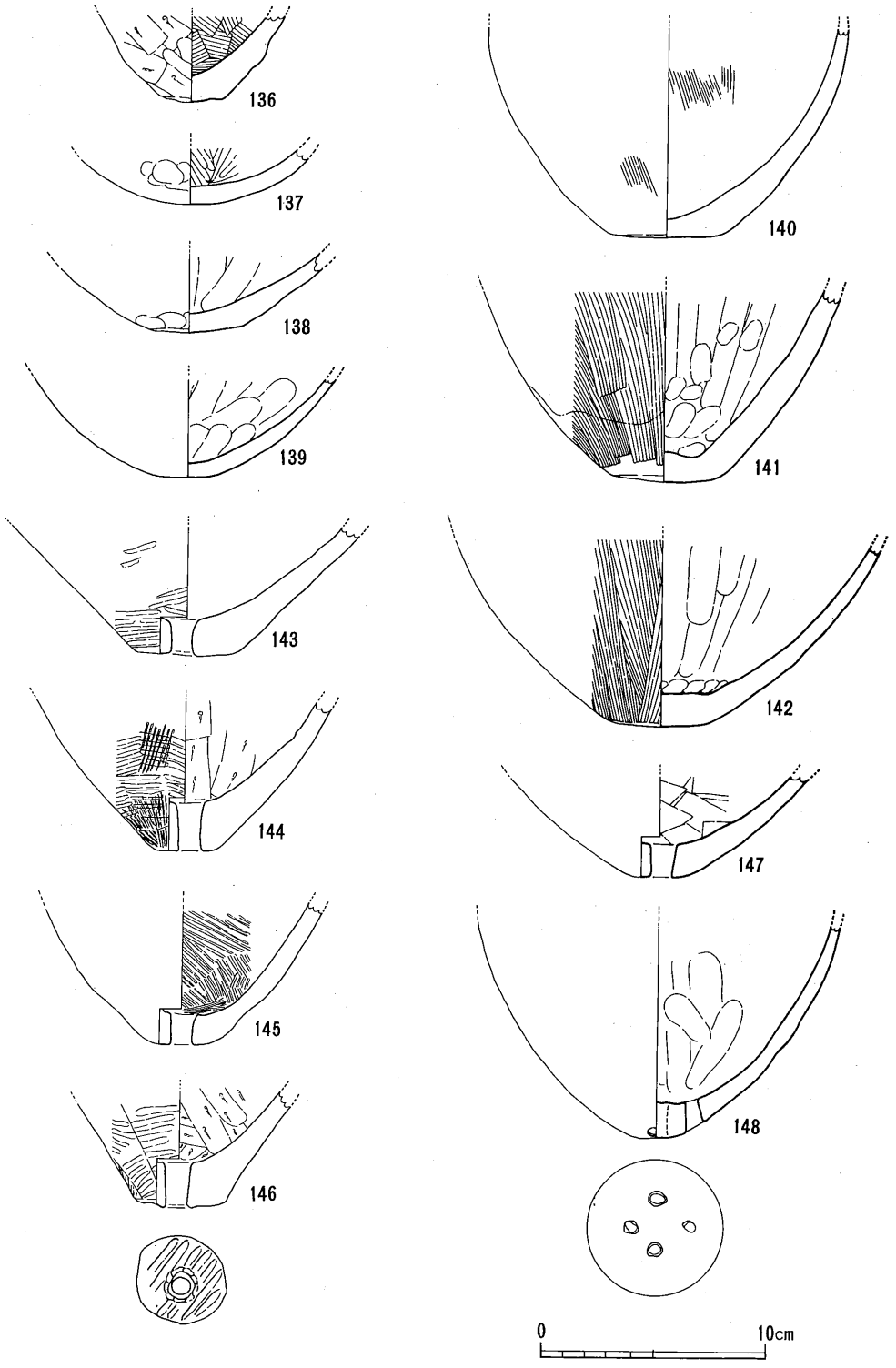
第225図　ＳＤ19出土遺物実測図（第四期）⑧



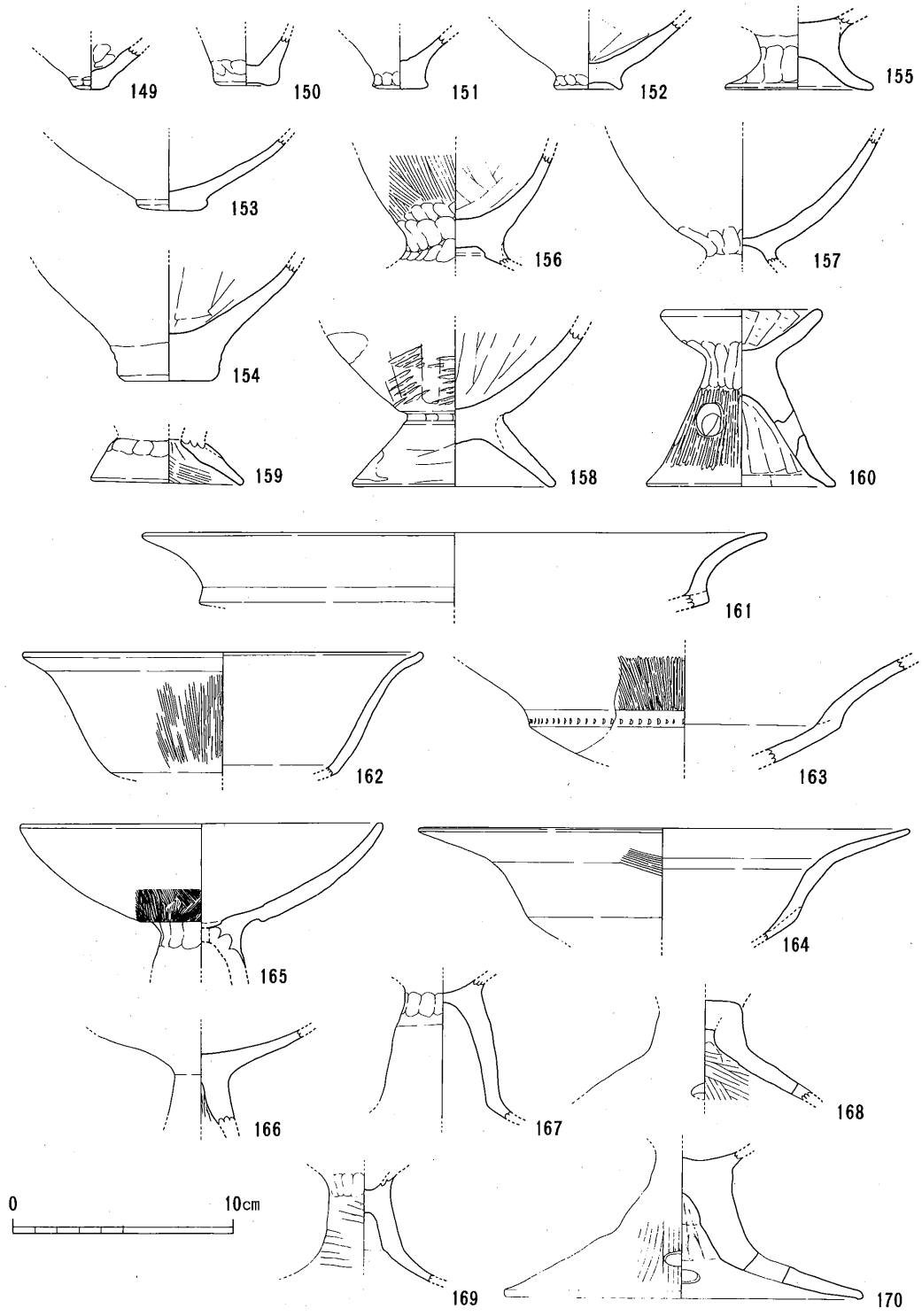
第226図　ＳＤ19出土遺物実測図（第四期）⑨



第227図　ＳＤ19出土遺物実測図（第四期）⑩



第228図　ＳＤ19出土遺物実測図（第四期）⑪

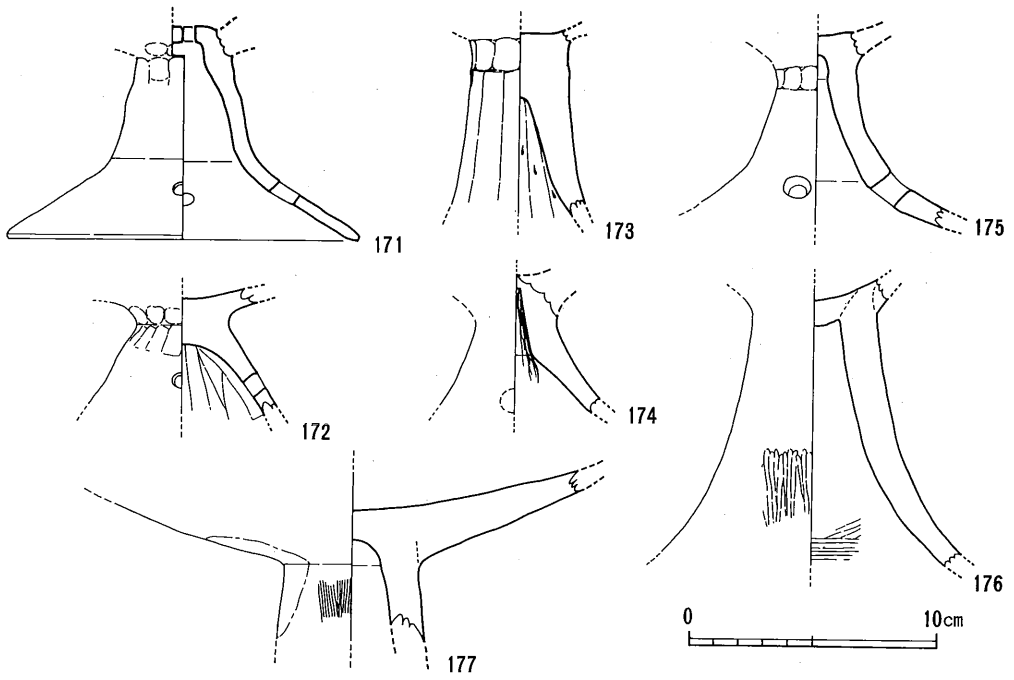


第229図　ＳＤ19出土遺物実測図（第四期）⑫

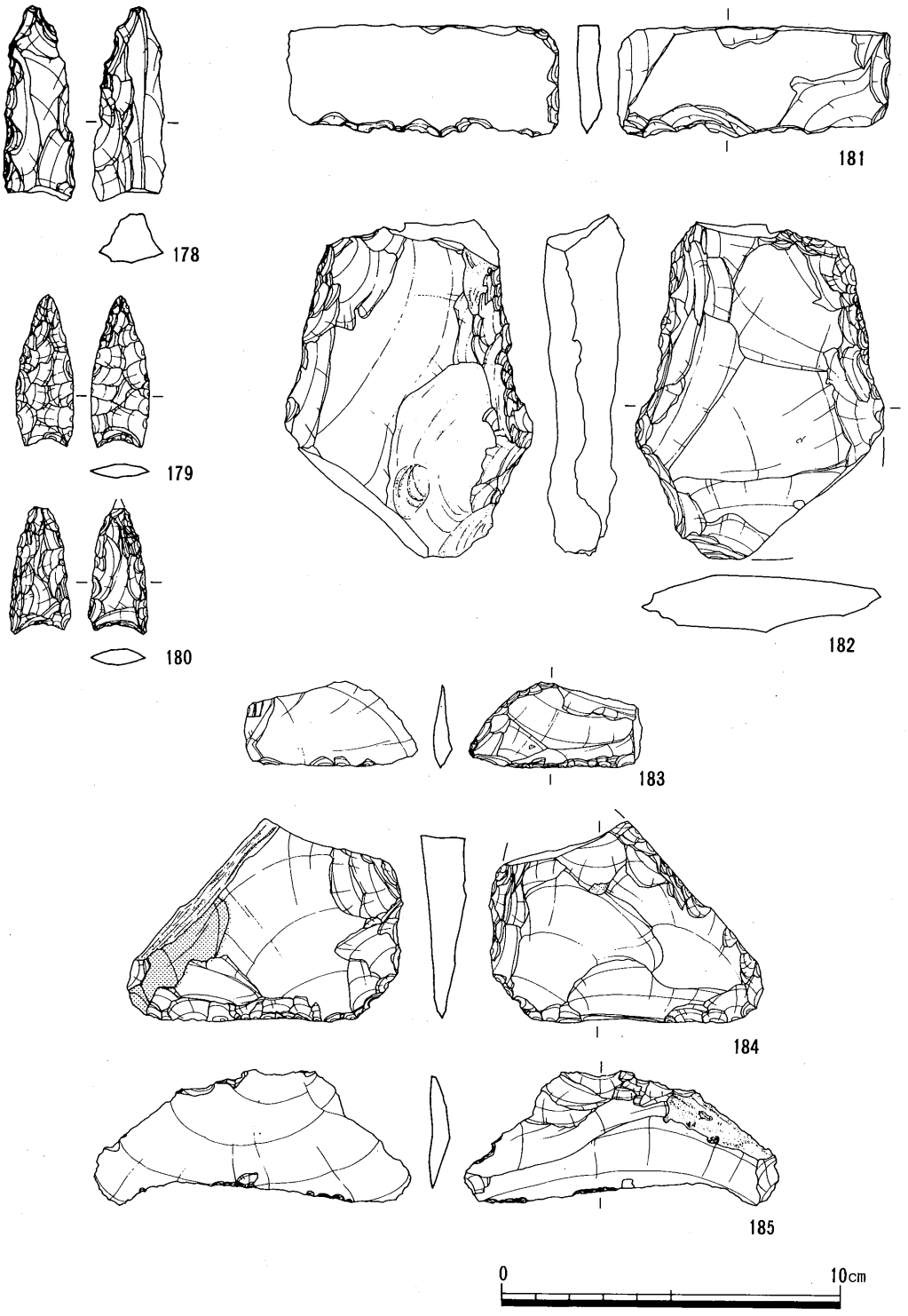
161～177は高坏である。161は坏部の屈曲が大きいもので、屈曲部を境として上半より下半の方が長い。162～164は屈曲部が外面に稜を残すがあまりきつくないもので、屈曲部を境として上半と下半の関係はやや上半が長いかほぼ同じものである。163の外面屈曲部には刺突文が見られる。165は坏部が屈曲部を持たず内彎気味に外上方に延びるものである。下半には接合痕が見られ、外面に刷毛目が施されている。

167は脚部上半がやや脹らむもので下半で屈曲させ外方に延びる。169は脚部外面に叩きが施されている。168・170～172の脚部には4ヵ所に穿孔が認められる。171は脚部中程で屈曲するもので穿孔は広がった部分に施されており、坏部中央部にも穿孔が認められる。この高坏は全面に赤色顔料が塗られている。祭祀に使用されたものであろうか。175は脚部に3ヵ所の穿孔が認められる。176・177は大型の高坏である。176の脚部外面には縦方向のヘラ磨きが認められる。

178～185は石製品である。178は舟底状石器であろうか。179・180は石鏃である。やや大型のもので底部は凹基式を呈している。181は結晶片岩製の石包丁である。縁部に調整が施されている。182は打製石斧である。先端と基部を欠損している。183～185はスクレイパーである。縁辺部には細かい調整が認められる。



第230図　ＳＤ19出土遺物実測図（第四期）⑬



第231図　ＳＤ19出土遺物実測図（第四期）（石製品）

SD20

SD20はSD19の下部で検出された溝である。SD19に先行する溝で埋土の状態は不明であるが土層の左側（北側）は暗黄褐灰色を主体とするものである。SD19・20に遺物の時期差があまりないことから堆積層の違いだけの同一溝として考えることも可能と思われる。

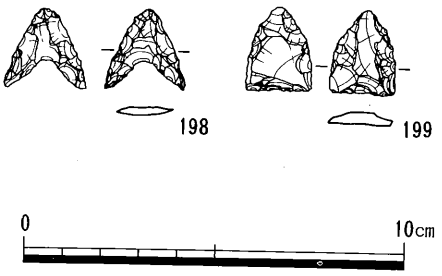
186は鉢である。体部は内彎気味に延び口縁部が外方に屈曲する。体部内外面に刷毛目が施されている。外面の刷毛目は横方向である。

187～190は甕である。187は口縁部が外方に短く外反し、体部の最大径は下方にある。体部外面には縦方向の刷毛目が見られ内面には指ナデが顕著に見られる。188は体部がほぼ球形を呈するもので口縁部は外方に屈曲する。体部外面に叩きが施されている。内面には粘土紐の繋ぎ目痕が認められる。189は体部がほぼ球形を呈するもので、口縁部は外方に短く延びる。体部及び頸部外面には叩きが密に施され、内面にはヘラ削りが認められる。

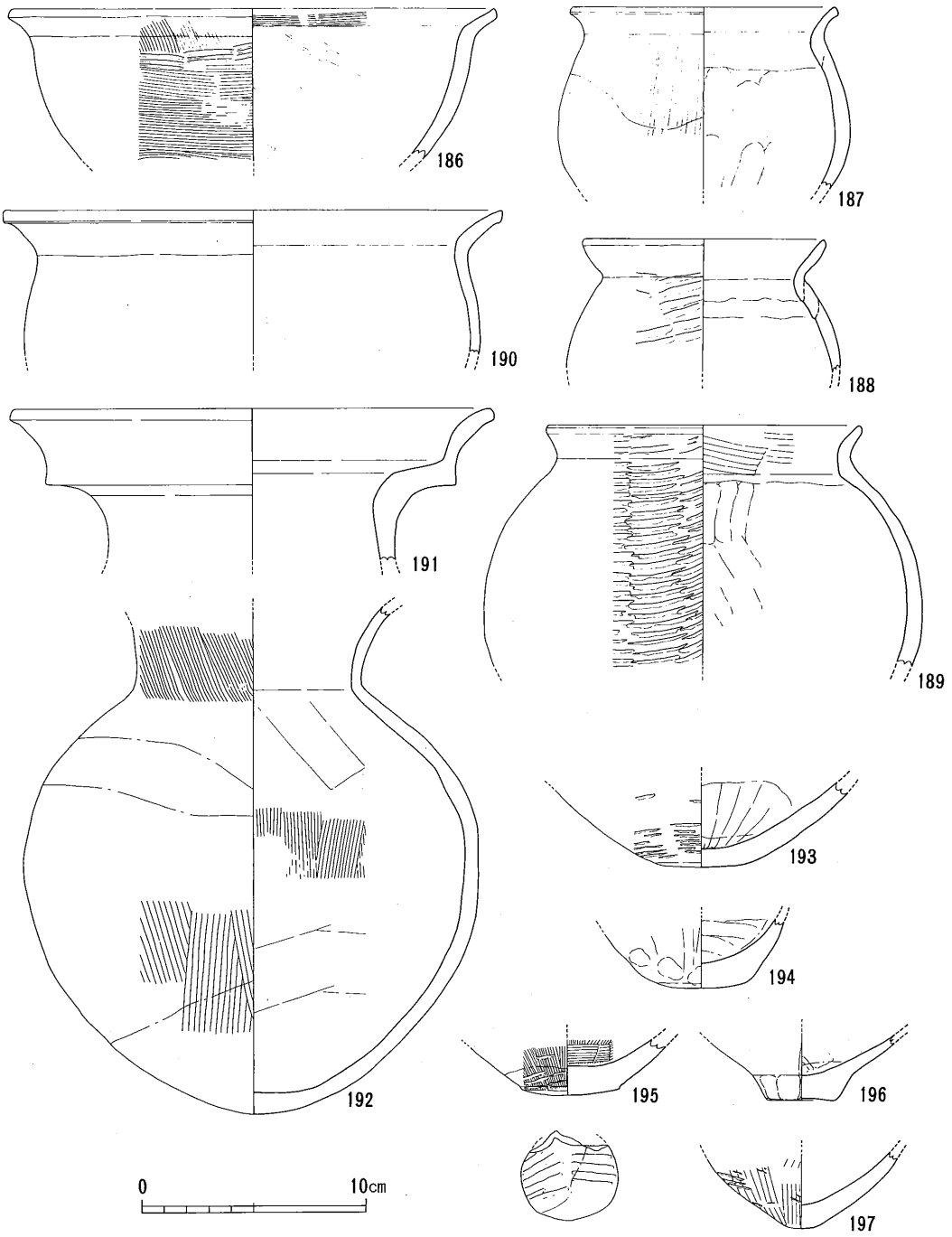
191・192は壺である。191は二重口縁を持つものである。192は体部がほぼ球形を呈しており底部はやや尖り気味の丸底を持つものである。頸部は朝顔状に開き、体部外面と頸部外面に刷毛目が施されている。

193～197は底部である。193は内外面の調整がほぼ同じことからおそらく189の底部と思われる。底部はやや丸底気味の小さい平底を呈している。195は底部が丸底状の平底を持つもので、体部外面には叩きの後細かい刷毛目が、底部外面には叩きが施されている。196は突出気味の平底を持つものである。体部最下部には指頭痕が見られる。197は尖り底を持つもので体部外面には叩きの後刷毛目が施されている。

198・199は石鏃である。198は基底部の抉り込みが深い凹基式のものである。199は平基式の石鏃である。



第232図　ＳＤ20出土遺物実測図（石製品）



第233図　ＳＤ20出土遺物実測図

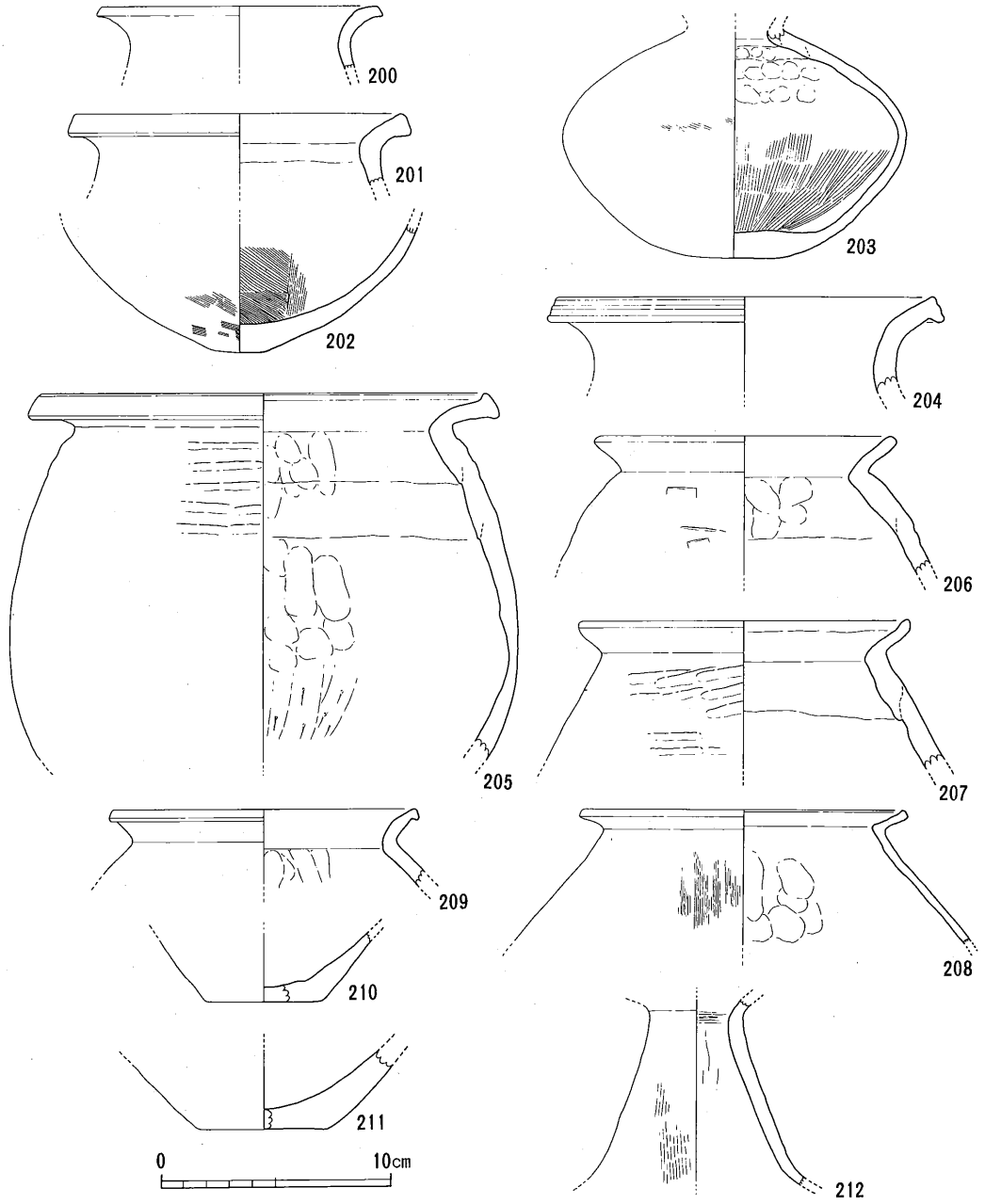
SD21～23

SD21～23は調査区南端で検出されたものである。SD19・20・24が丘陵を取り囲むように流路を取るのに対してSD21～23はほぼ東西方向に流路を取っており、調査区東から西に流れていたものと思われる。SD19土層断面（第215図）から溝の堆積状況を見るとSD19とSD24には堆積の時期差が見られ、SD24が埋没した後にSD21～23が形成され最後にSD19に切られたものと考えられる。おそらくSD21～23は延命の岡を取り囲むように形成された環濠の機能を持つSD24が埋没し、やや期間を開けてもう一度環濠としてのSD19が形成されるまでの間に機能していたと考えられる。

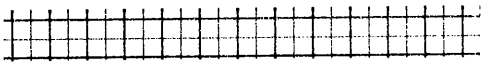
200～202はSD21から出土したものである。200・201は壺である。200は口縁部が緩やかに外方に屈曲するもので口縁端部は下方に摘み出している。長頸壺かと思われる。201は口縁部の屈曲がややきつく、厚めに作られているもので口縁端部は三角形状に作る。202は壺の底部である。底部に小さい平底を残し体部は内彎気味に外上方に延びる。体部内外面に細かい刷毛目が施されている。

203～208はSD22から出土したものである。203・204は壺である。203は頸部が細くしまった長頸壺と思われる。底部には平底を残し、体部は算盤状を呈している。体部内面上半には指頭痕が、下半には刷毛目が顕著に施されている。204は頸部が緩やかに外反するもので口縁端部を下方に拡張し、外面に2条の凹線を施すものである。205～208は甕である。205は口縁部をきつく外方に屈曲させるもので口縁端部は上下に拡張させている。体部は丸味を帯び、やや胴長状を呈している。体部外面には叩きが、内面には上半に指頭痕が下半に下方からのヘラ削りが施されている。体部内面上半には粘土紐の接合痕が認められる。206は口縁部を外方に短く屈曲させるものである。体部外面にはわずかに叩きが見られ、内面には指頭痕が施されている。207は口縁部を外方に屈曲させ、口縁端部を上方に摘み上げるものである。体部外面に叩きが、内面に粘土紐の接合痕が見られる。208は口縁部が短くきつく外反するもので、屈曲部内外面に明瞭に稜が残る。器壁は薄く作られており胎土は金雲母が含まれ、色調はチョコレート色を呈している。体部外面には細かい刷毛目が、内面には指頭痕が顕著に施されている。所謂播磨系の土器であろうか。

209～212はSD23から出土したものである。209は甕である。口縁部を外方に屈曲させ端部を下方に摘み出している。体部内面には指頭痕が施されている。210・211は底部である。しっかりした平底を持つ。212は高坏の脚である。脚部外面には刷毛目が内面には絞り目が見られる。



第234図　ＳＤ21～23出土遺物実測図



SD24

SD24は上部を削平されているため正確な規模は判らないが、現在確認されているものは最大で天幅1.74m、深さ0.13mである。埋土は第一層が暗灰黄色砂質土層（礫を含む）で、第二層が淡黒灰色砂質土層（1～3㎜の砂粒と礫を多量に含む）で、遺物はほとんど第二層より出土している。

213は突帯文系の土器である。口縁部外面下に刻み目突帯が貼り付けられている。

214～220は鉢である。214・215は体部が内彎気味に外上方に延び、口縁端部外面下に指ナデが施されている。216～220は鉢の口縁部で外方に屈曲している。口縁端部はそのまま丸くおわらせるもの（216）と端部をやや拡張して凹線を施すもの（218・219）が見られる。217は口縁端部を上方に摘み上げ、三角形状にしている。器壁は磨滅しているものが多く調整は不明であるが、体部外面にわずかに刷毛目が施されているものが見られる。

221～237は甕である。体部形態は胴張り状を呈しているものやあまり胴が張らずに胴長になるものがある。口縁形態は頸部の屈曲が内外面に稜を持ち屈曲するものや緩やかに外反するものが見られる。口縁端部は拡張させて凹線状のくぼみを持つものと拡張させずそのまま終わらせるものが見られる。器面調整は体部外面には刷毛目を多用し内面には下方からのヘラ削りが頸部屈曲部まで施されている。231・232は口縁が短く外方に屈曲し、端部上端を上方に摘み出しているものである。体部外面には刷毛目が、内面にはヘラ削りが施されている。237は体部があまり張らずに胴長のもので底部は平底を呈している。体部外面には刷毛目が内面には下方からのヘラ削りが施されている。

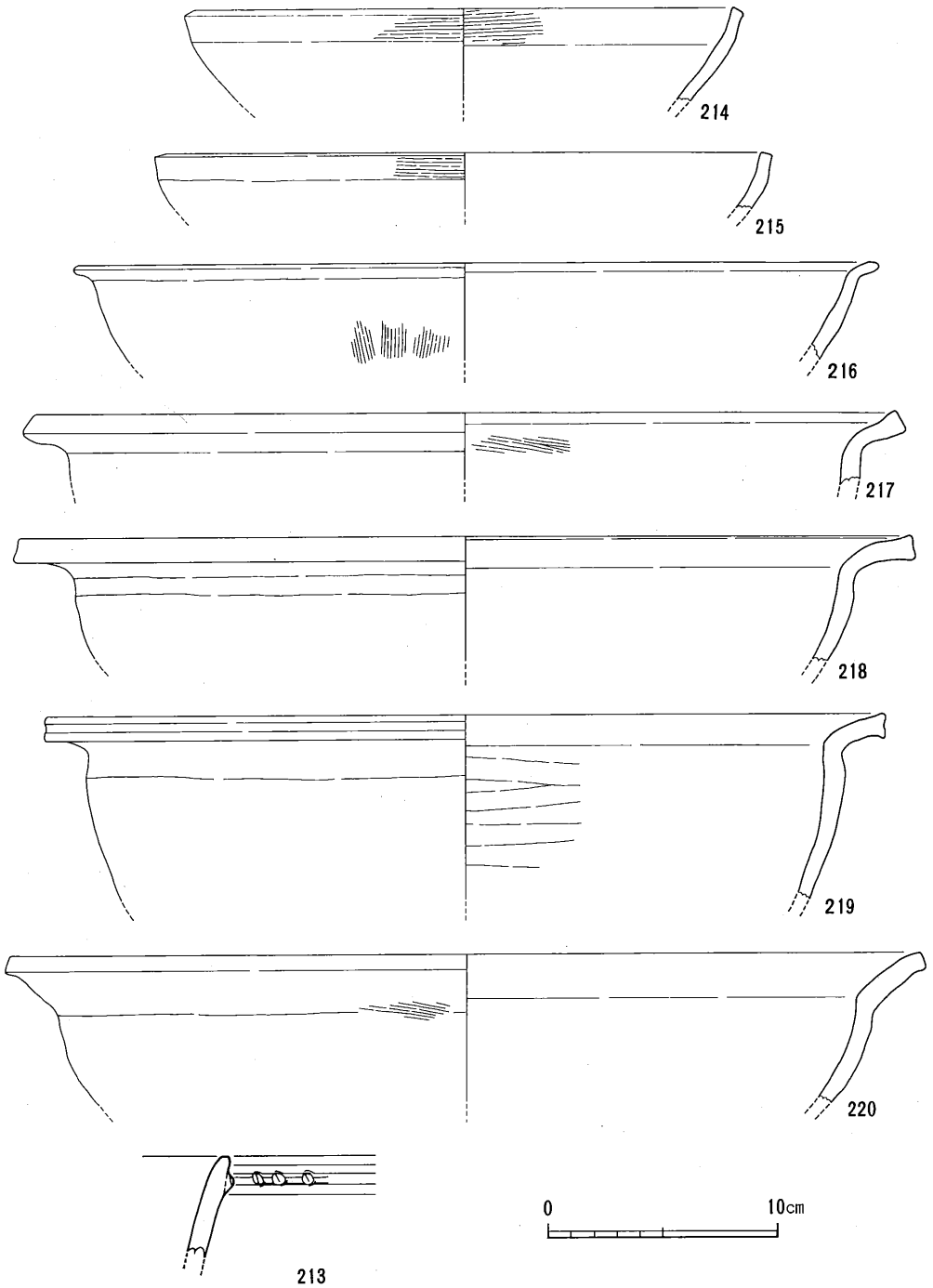
238～247は壺である。238～240は器壁がやや厚めに作られており、口縁端部が上下に拡張され外面に3条の凹線が施されている。240は凹線上に4本の貼付浮文が付けられている。241は頸部が上方に短く延び口縁部が外反する。口縁端部は上方に摘み出している。243・244は長頸壺である。243は頸部が長く延びるもので口縁部が外上方に屈曲する。器表面は磨滅して調整は不明である。245～247は小型の壺である。口縁部は短く外方に屈曲する。底部は小さい平底を呈す。246は体部外面に刷毛目が、内面に指頭痕が施されている。

248～254は底部である。248～251は底部が平底のもので249・250は体部最下部に指頭痕を廻らせている。250は体部内面最下部にも指頭痕を施し、上部は刷毛目が施されている。252は尖り気味の丸底を持つものである。252は輪高台状の底部を持つものである。

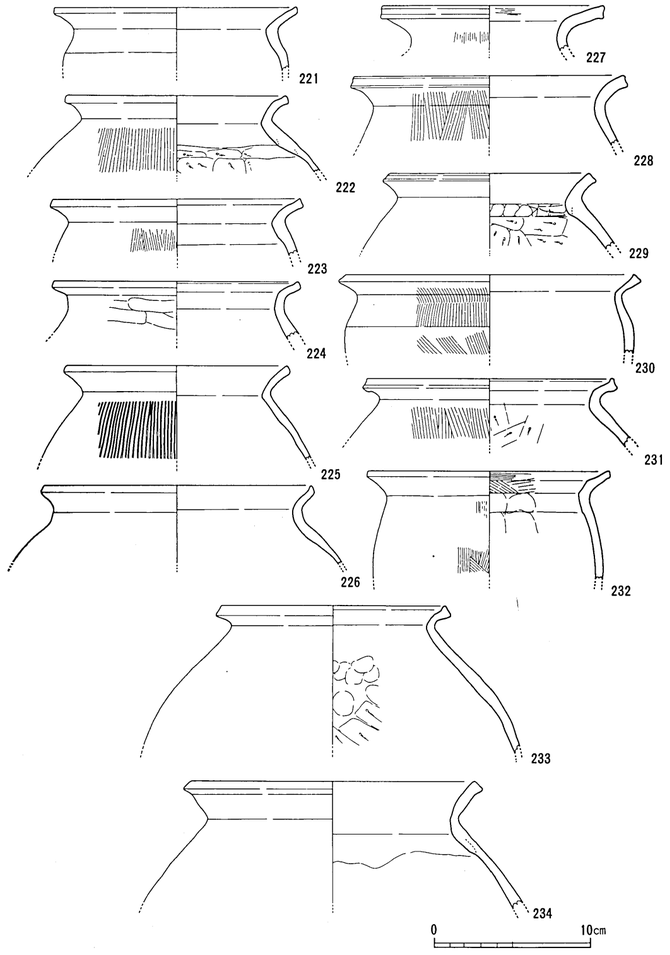
255は脚付きの鉢と思われる。

256は高坏の脚部である。脚部の円盤充填が剝がれたものと思われる。

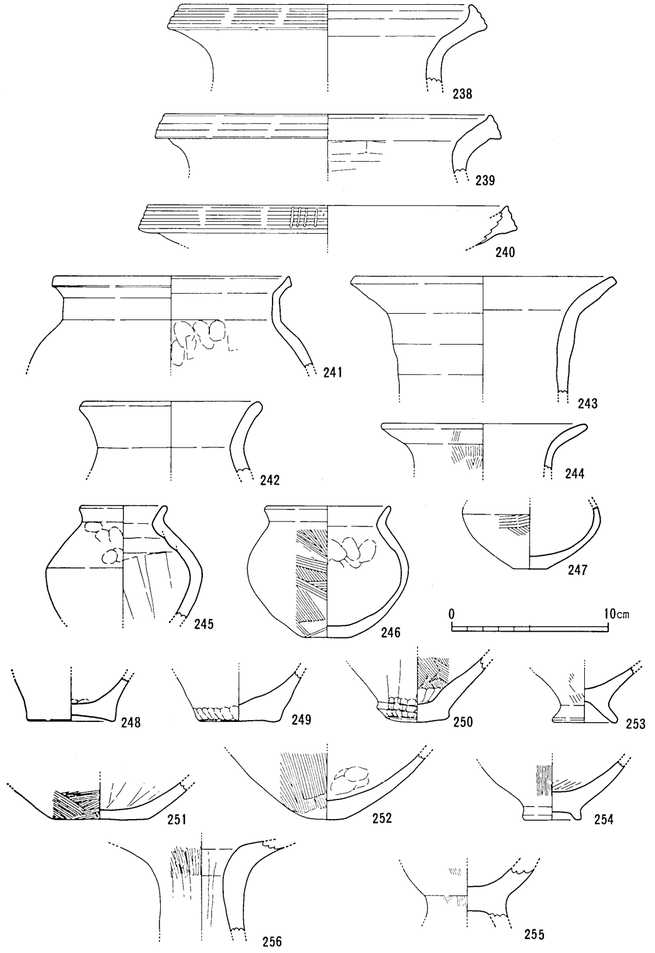
257～259は石製品である。257は安山岩製の磨石である。側辺四方に磨り痕が認められる。258・259はスクレイパーである。縁辺部に細かい調整が施されており、刃部としている。



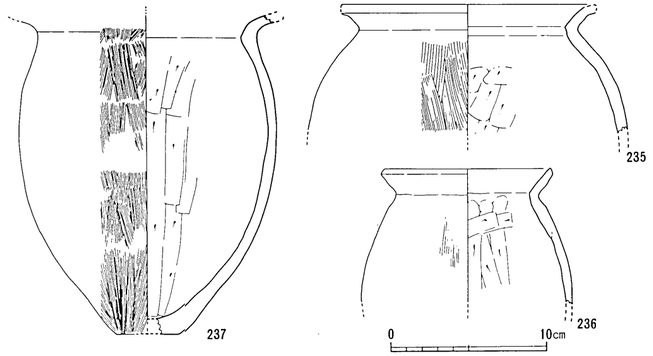
第235図　ＳＤ24出土遺物実測図①



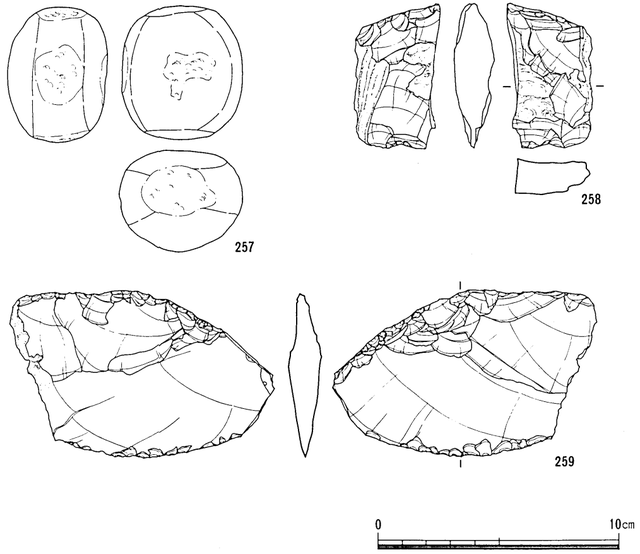
第236図　ＳＤ24出土遺物実測図②



第238図　ＳＤ24出土遺物実測図④



第237図　ＳＤ24出土遺物実測図③

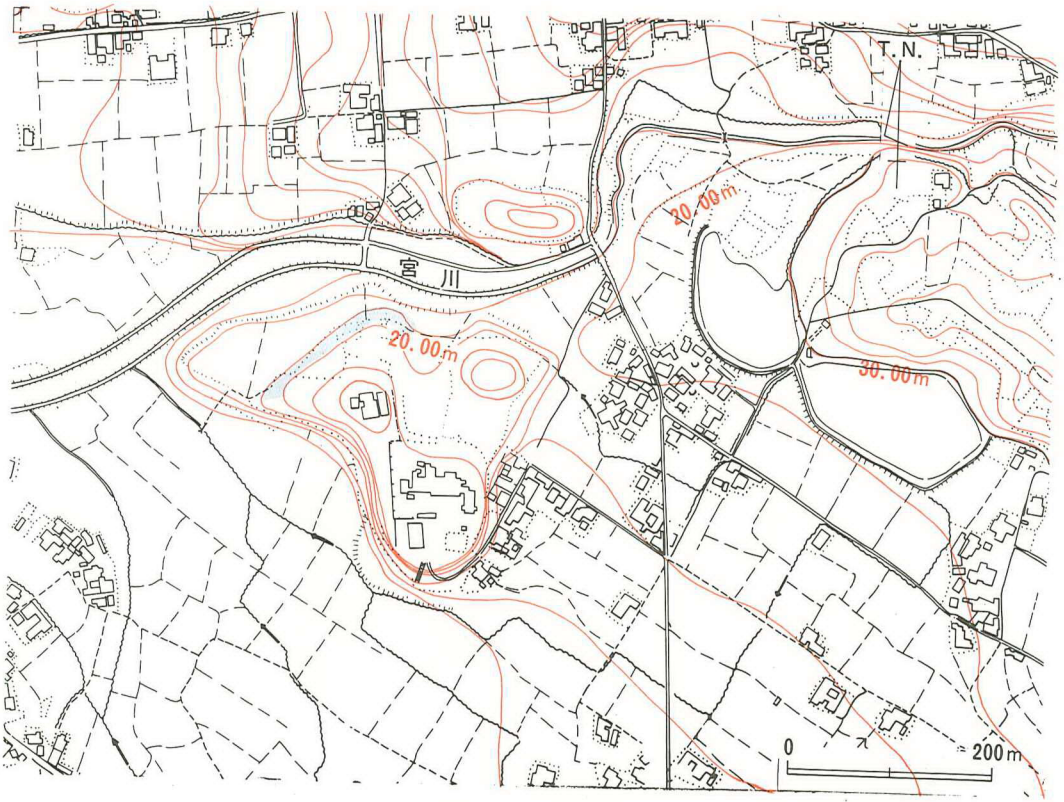


第239図　ＳＤ24出土遺物実測図（石製品）

(2)　弥生時代のまとめ

弥生時代の遺構は延命の岡を取り囲むように検出された溝状遺構（環濠）のみであった。その環濠は大別して２時期の付け替えが確認された。SD19は土層堆積状況から４時期の堆積が確認されている。

延命の岡の北西部で検出された環濠は20m等高線で北部と東部に続くものと思われ、南側は財田川によって削られており急斜面を形成していることからおそらく自然の地形上では環濠が回らないものと考えられる。居住域は現在延命院および豊姫神社が建っている丘陵上にあるものと思われる。また、八反地地区で検出された弥生時代の溝は城岡地区で検出された溝よりやや後出するもので場所は移るが継続性のあるものと考えられる。



第240図　環濠推定図

発掘作業風景

発掘作業風景

3．中世の遺構・遺物について

城岡地区では、掘立柱建物は中央に南北に流路を取る溝状遺構を挟んで西半分と東半分において29棟検出された。西半分で検出されたものは南半部に密集しており、調査区外に延びることが窺える。東半分で検出されたものは中央の溝と北部の溝に区画されるように検出されている。その中で特異なものとしてSB29は3×6間のもので、柱穴掘り方が0.5mとその他の掘立柱建物群とは違うことが判る。柱穴から遺物が出土していないので時期は不明であるが、SD02・06に切られているので中世後半期よりは古いと考えられる。

(1) 掘立柱建物

SB01

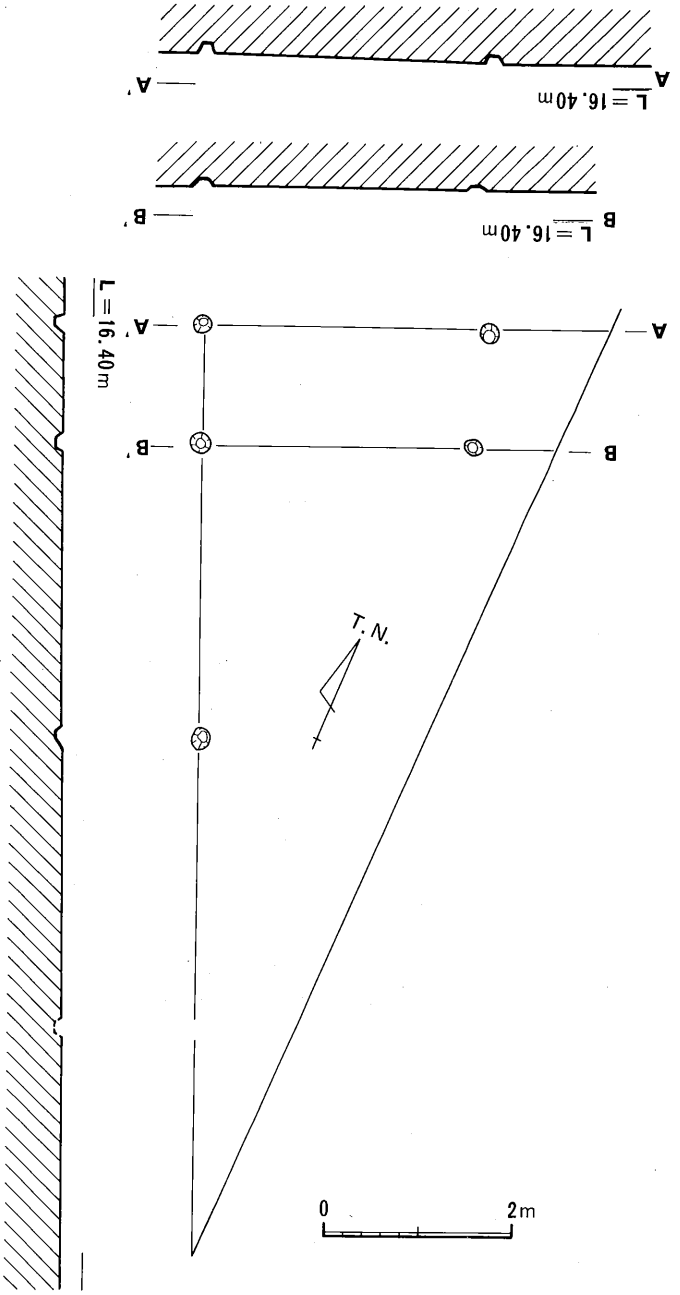
SB01は、梁間(2)間×桁行(3)間［(372)×(852)cm］の建物遺構である。柱穴は、平均幅(20.7)cmを計り、柱間は、梁間で平均長(426)cm、桁行で平均長(308)cmを計る。主軸は、真北から23°西偏する。北側に庇が付くものである。東半は調査区外に逃げており全容は不明である。

SB02

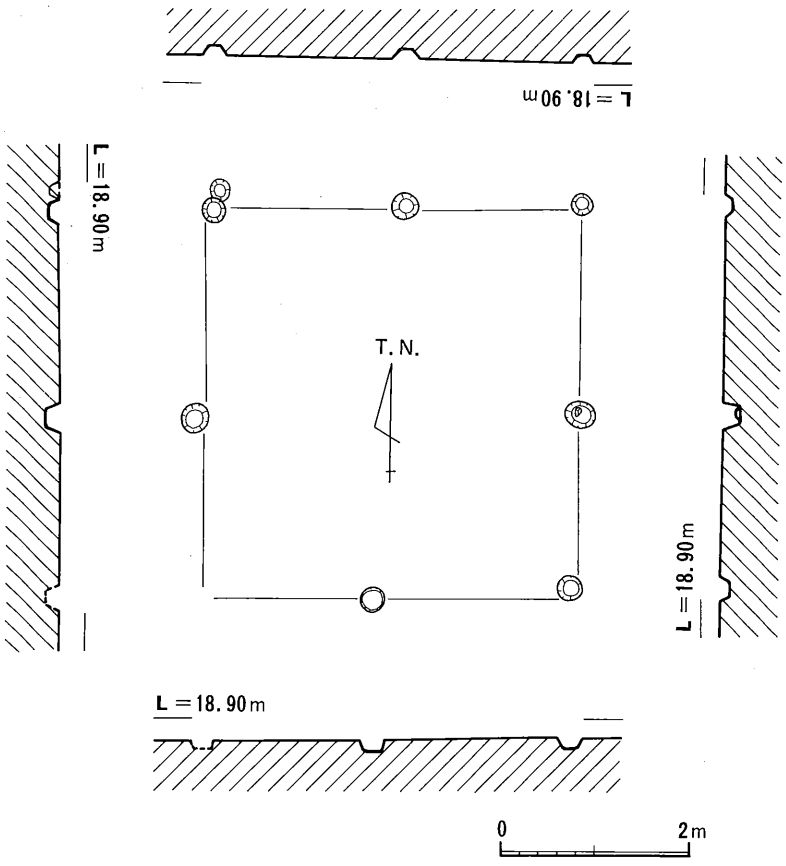
SB02は、梁間2間×桁行2間(388×404cm)の建物遺構である。柱穴は、平均幅26cmを計り、柱間は、梁間で平均長194cm、桁行で平均長202cmを計る。主軸は、真北を向いている。

SB03

SB03は、梁間1間×桁行2間(312×366cm)の建物遺構である。柱穴は、平均幅28cmを計り、柱間は、梁間で平均長312cm、桁行で平均長183cmを計る。主軸は、真北から2.5°東偏する。



第241図　SB01平・断面図



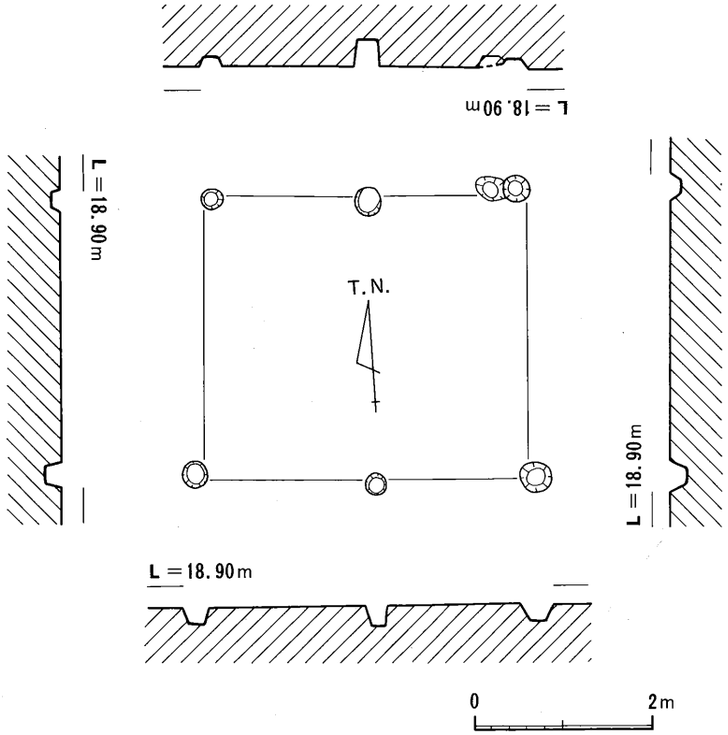
第242図　ＳＢ02平・断面図

SB04

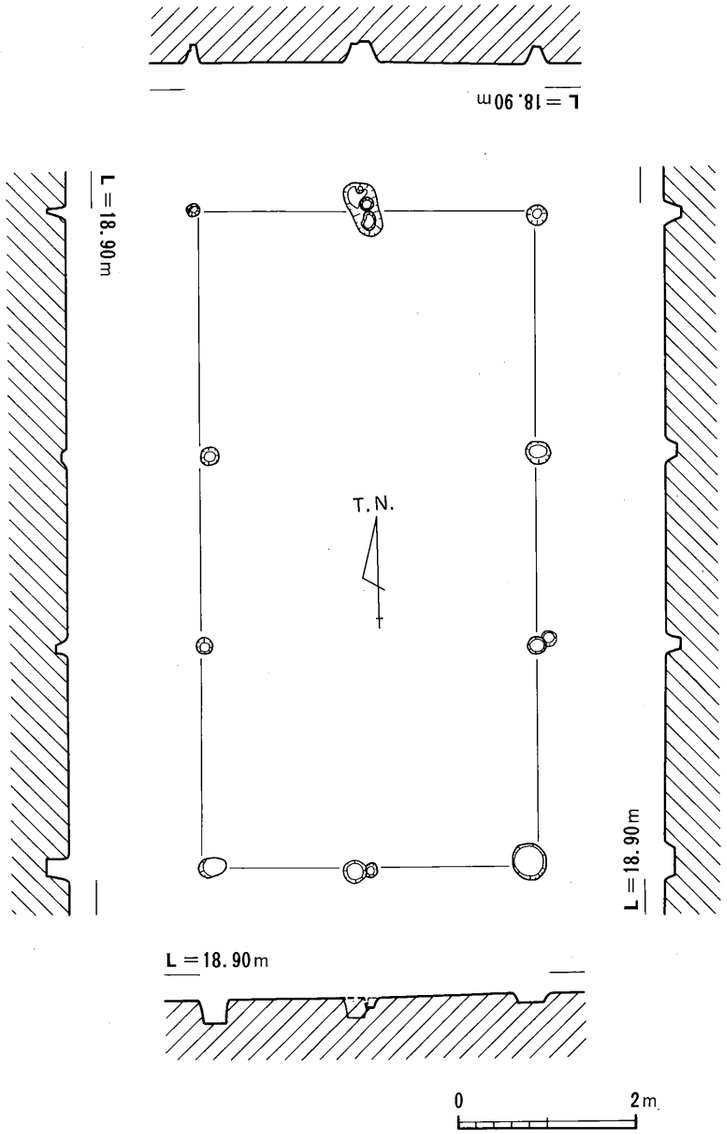
SB04は、梁間２間×桁行３間（372×740cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅26.8cmを計り、柱間は、梁間で平均長186cm、桁行で平均長246.7cmを計る。主軸は、真北を向いている。

SB05

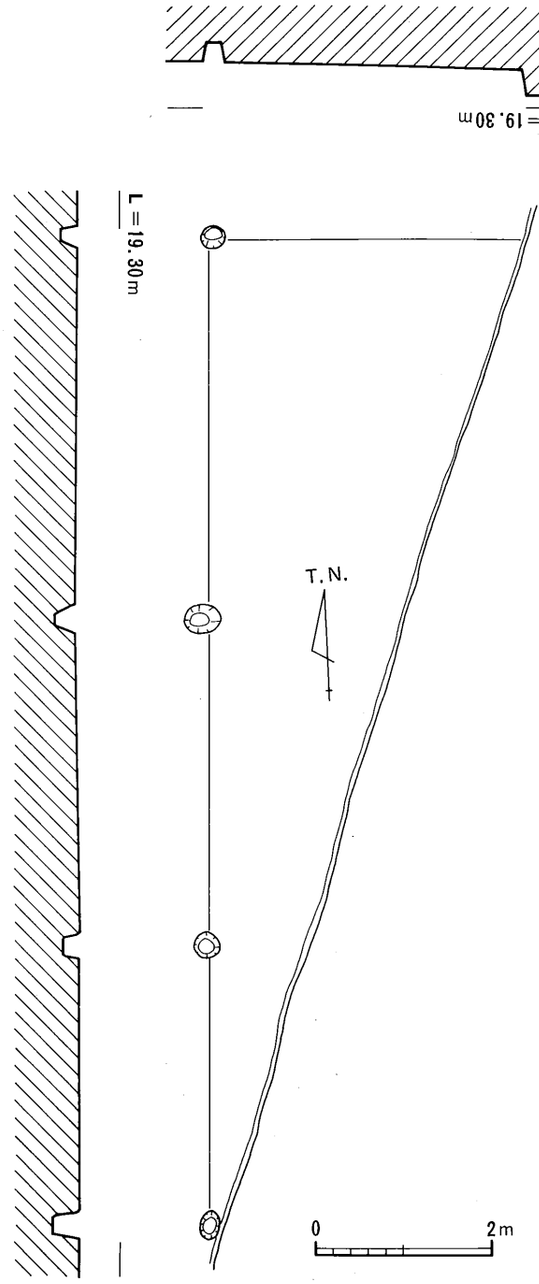
SB05は、梁間(1)間×桁行(3)間［(352) × (1140) cm］の建物遺構である。柱穴は、平均幅 (31) cmを計り、柱間は、梁間で平均長 (352) cm、桁行で平均長 (373.3) cmを計る。主軸は、真北から2.5°東偏する。東半は調査区外に逃げており全容は不明である。



第243図　ＳＢ03平・断面図



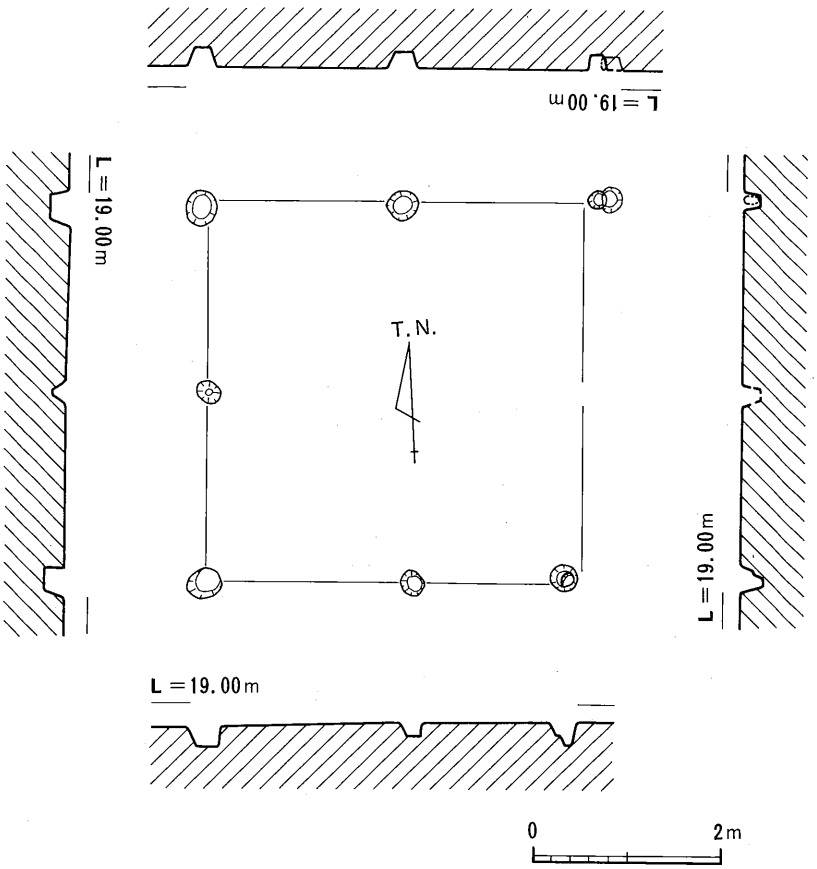
第244図　ＳＢ04平・断面図



第245図　ＳＢ05平・断面図

SB06

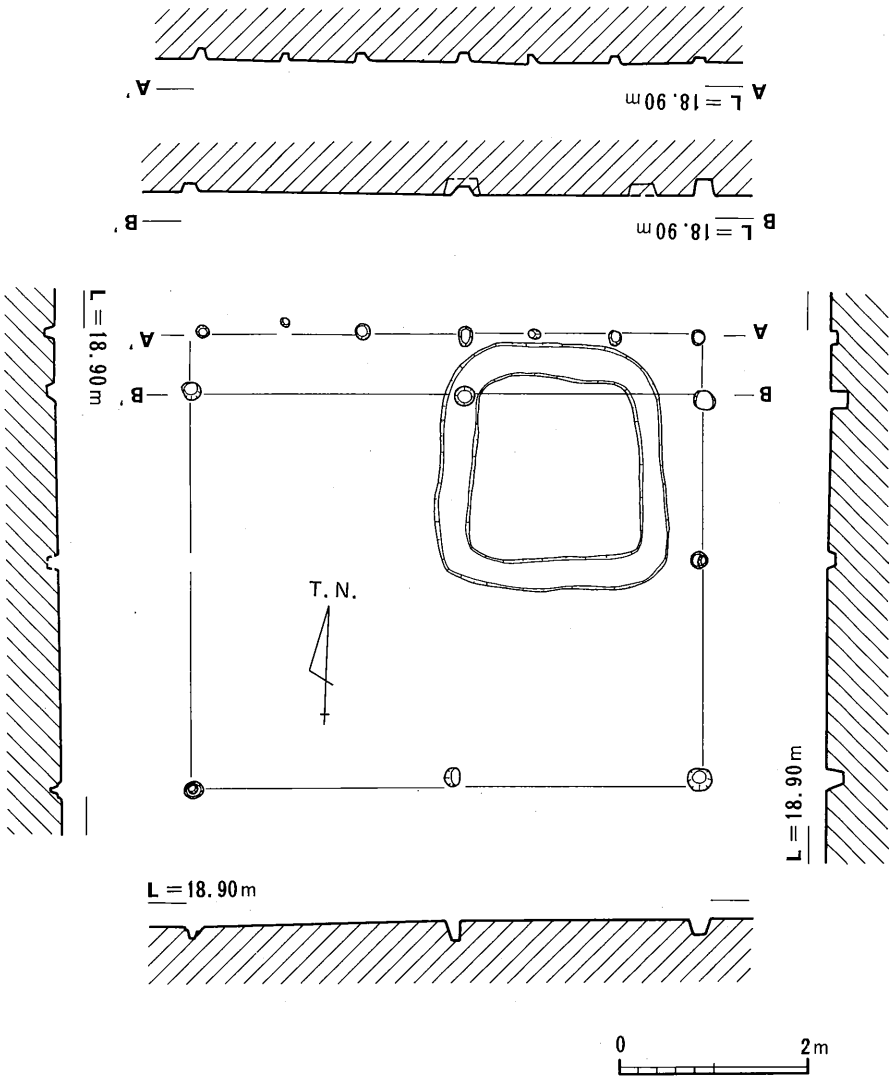
SB13は、梁間２間×桁行２間（398×398cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅26.6cmを計り、柱間は、梁間で平均長199cm、桁行で平均長199cmを計る。主軸は、真北から2.5°東偏する。



第246図　ＳＢ06平・断面図

SB07

SB07は、梁間２間×桁行２間（409×537cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅20cmを計り、柱間は、梁間で平均長204.5cm、桁行で平均長268.5cmを計る。主軸は、真北から2.5°西偏する。溝に区画された掘立柱建物で北側に庇があり、庇は１間に２個の柱穴を持つ。



第247図　ＳＢ07平・断面図

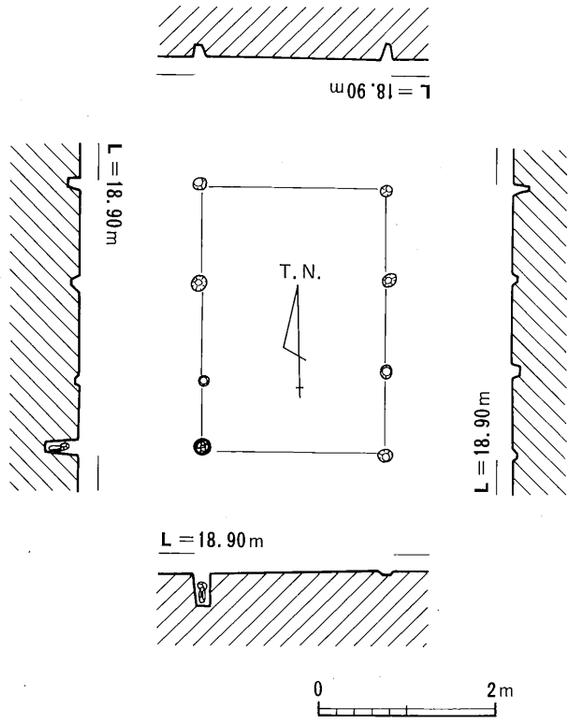
SB08

SB08は、梁間１間×桁行３間（212×300cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅14.3cmを計り、柱間は、梁間で平均長212cm、桁行で平均長100cmを計る。主軸は、真北から1.5°東偏する。

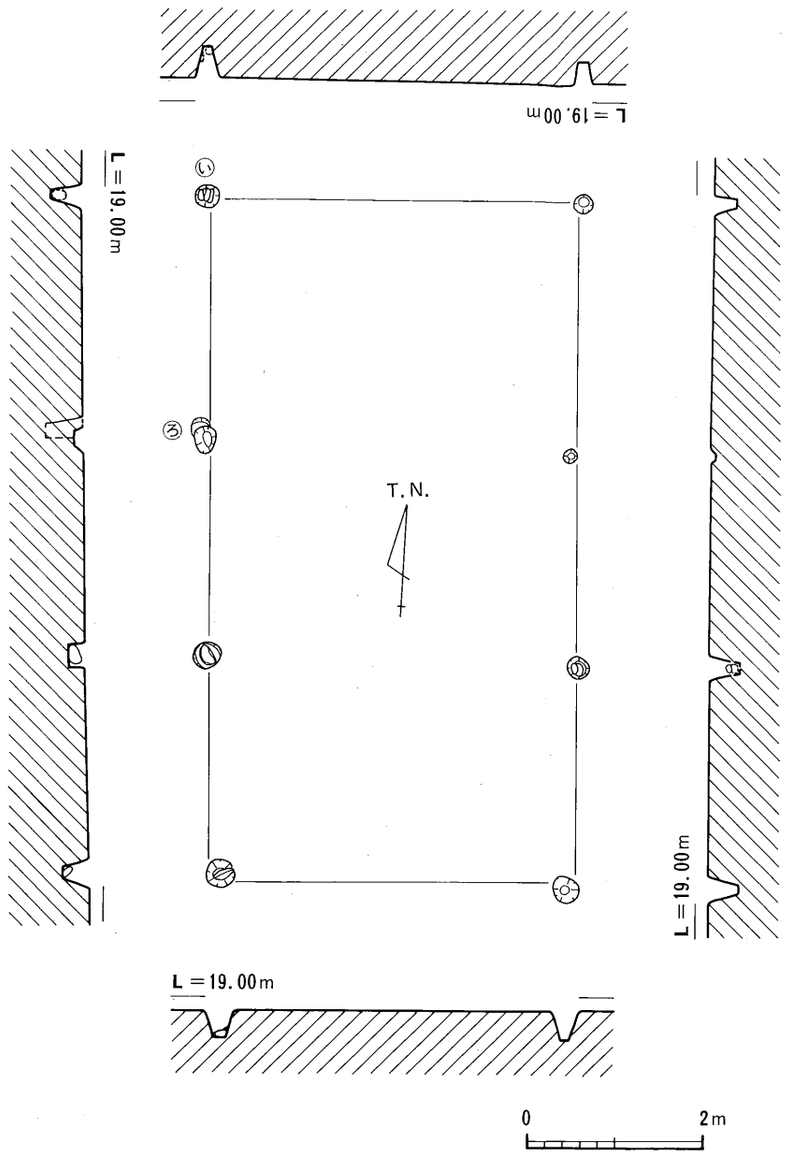
SB09

SB09は、梁間１間×桁行３間（408×772cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅26cmを計り、柱間は、梁間で平均長408cm、桁行で平均長257.3cmを計る。主軸は、真北から3°西偏する。

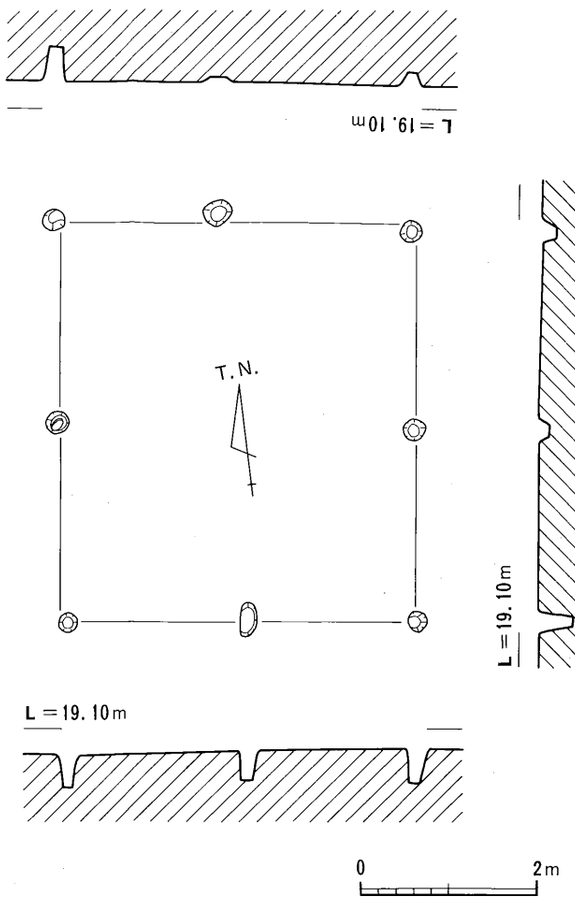
260～265はSB09より出土したもの（柱穴㋑出土遺物260、柱穴㋒出土遺物261～265）である。260～264は土師器の小皿である。260・261が底部ヘラ切りされており、262～264が糸切りである。体部は直線的に延びるものが多く、やや太めに造られているもの（262・263）がある。265は滑石製の硯である。おそらく滑石製の石鍋を転用して作られたものと思われる。



第248図　ＳＢ08平・断面図



第249図　ＳＢ09平・断面図



第250図　ＳＢ10平・断面図

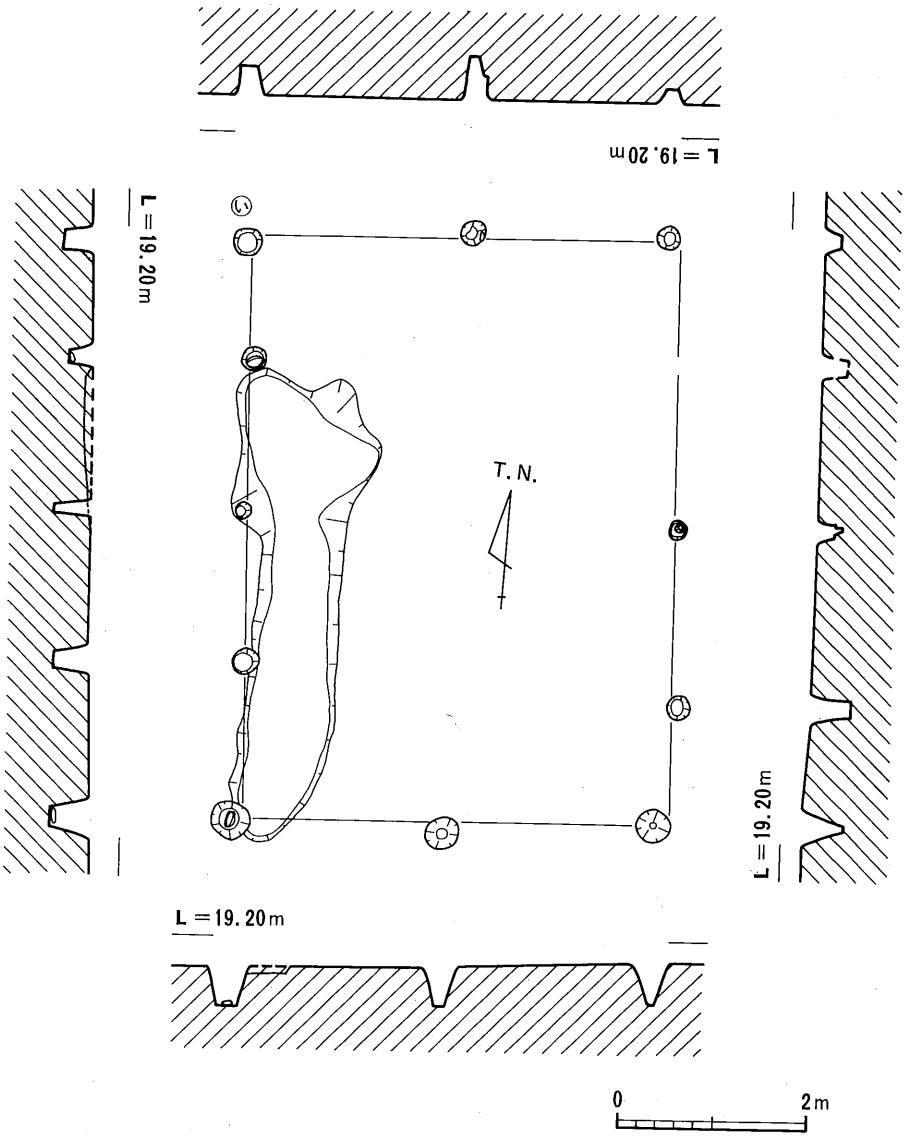
SB10

SB10は、梁間２間×桁行２間（396×446cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅26cmを計り、柱間は、梁間で平均長198cm、桁行で平均長223cmを計る。主軸は、真北から7.5°東偏する。

SB11

SB11は、梁間２間×桁行４間（446×614cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅27.6cmを計り、柱間は、梁間で平均長223cm、桁行で平均長153.5cmを計る。主軸は、真北から４°西偏する。

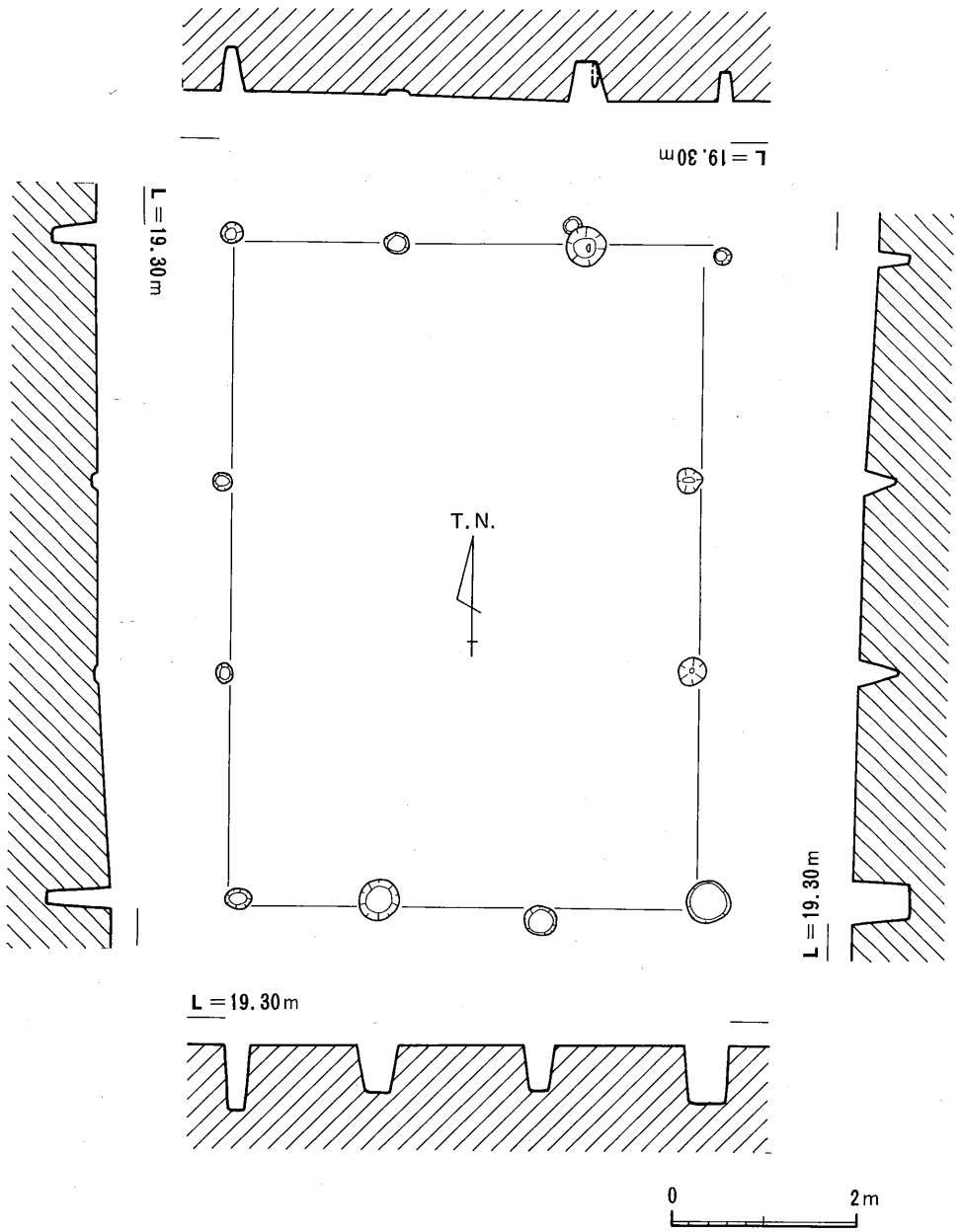
266はSB11より出土した土師器の坏（柱穴㋑出土遺物266）である。266は底部糸切りされており体部は下半が内彎気味に延びるが上半はやや外反する。



第251図　ＳＢ11平・断面図

SB12

SB12は、梁間３間×桁行３間（512×702cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅28.5cmを計り、柱間は、梁間で平均長170.7cm、桁行で平均長234cmを計る。主軸は、真北を向いている。



第252図　ＳＢ12平・断面図

SB13

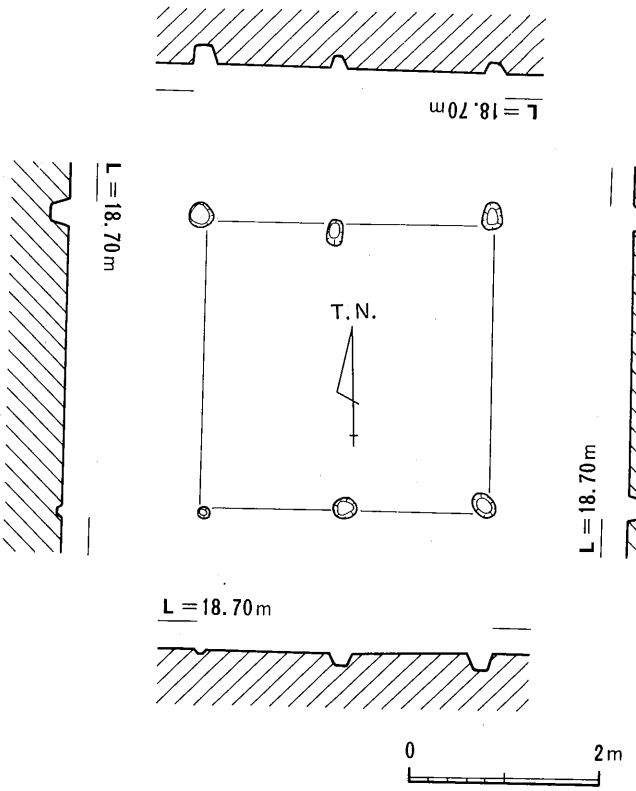
SB13は、梁間1間×桁行2間（308×302cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅20.7cmを計り、柱間は、梁間で平均長308cm、桁行で平均長151cmを計る。主軸は、真北から2°東偏する。

SB14

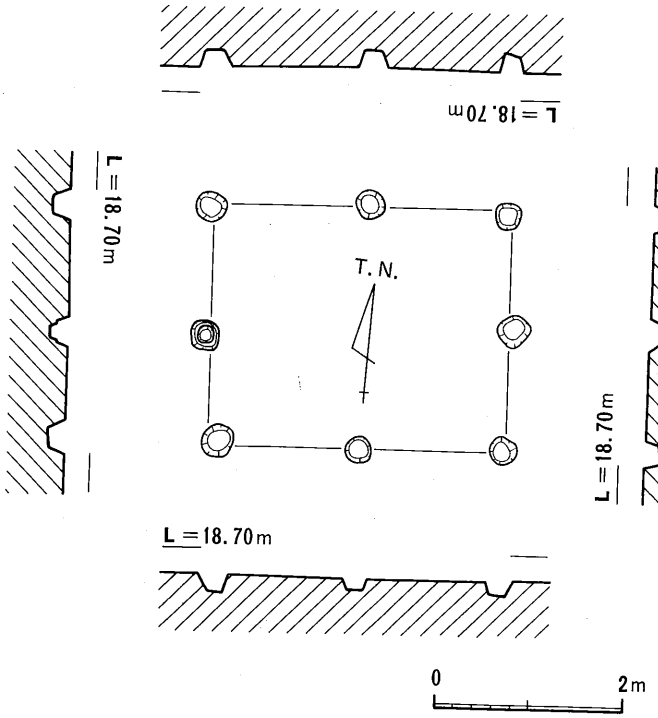
SB14は、梁間2間×桁行2間（248×308cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅28.3cmを計り、柱間は、梁間で平均長124cm、桁行で平均長154cmを計る。主軸は、真北から4°西偏する。

SB15

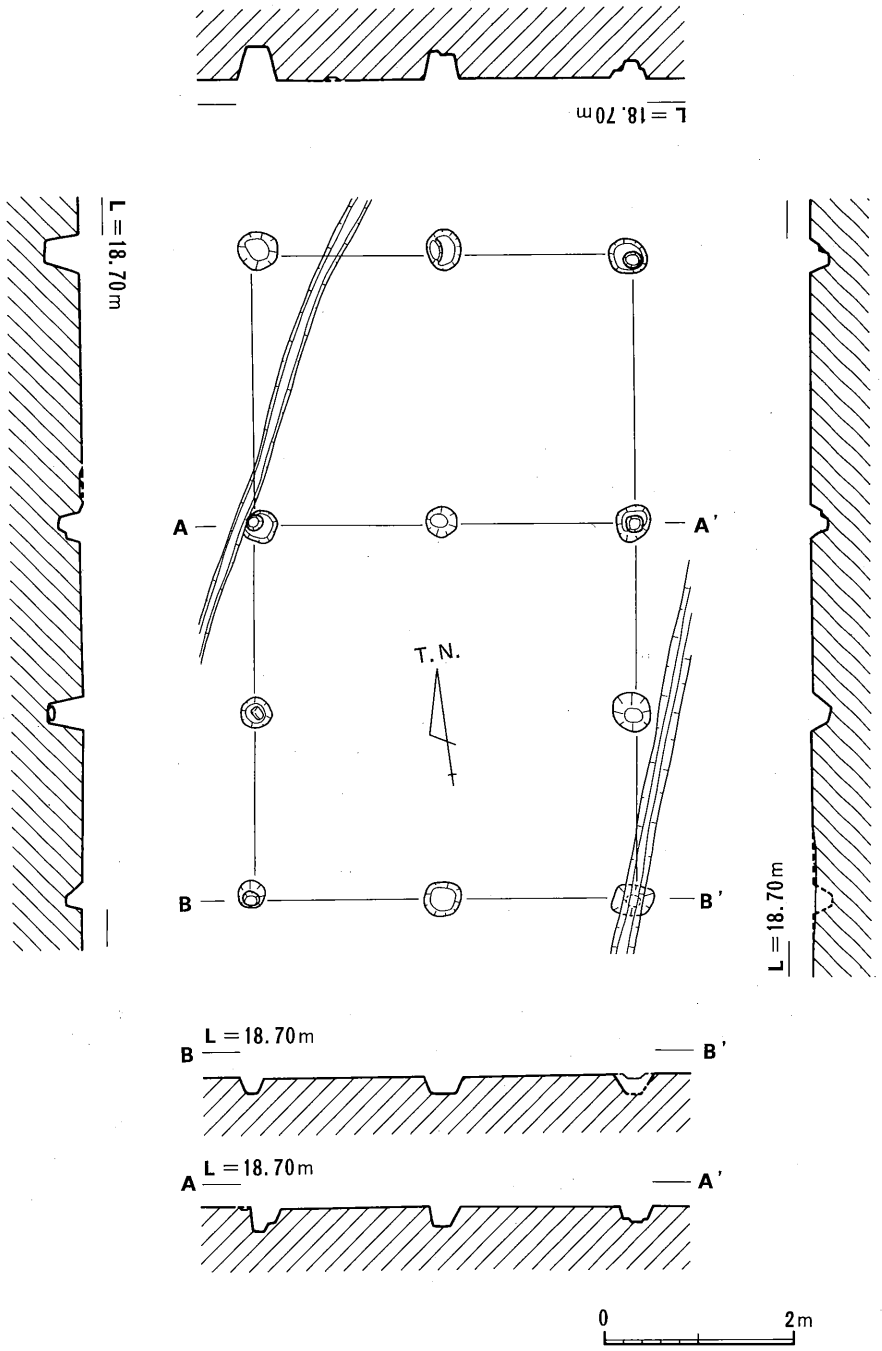
SB15は、梁間2間×桁行3間（396×682cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅35.8cmを計り、柱間は、梁間で平均長198cm、桁行で平均長227.3cmを計る。主軸は、真北から7.5°東偏する。北側1間目に間仕切りの柱穴を持つ。



第253図　ＳＢ13平・断面図



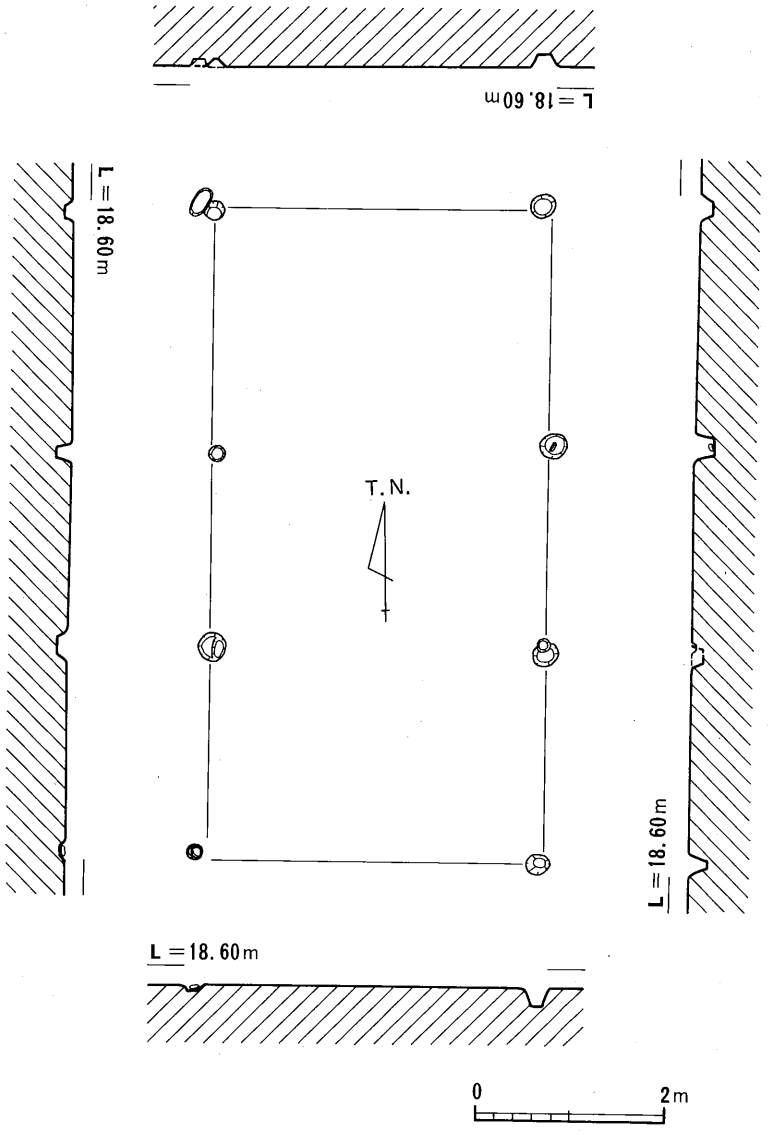
第254図　ＳＢ14平・断面図



第255図　ＳＢ15平・断面図

SB16

SB16は、梁間１間×桁行３間（353×683cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅21cmを計り、柱間は、梁間で平均長353cm、桁行で平均長227.7cmを計る。主軸は、真北から1.5°東偏する。

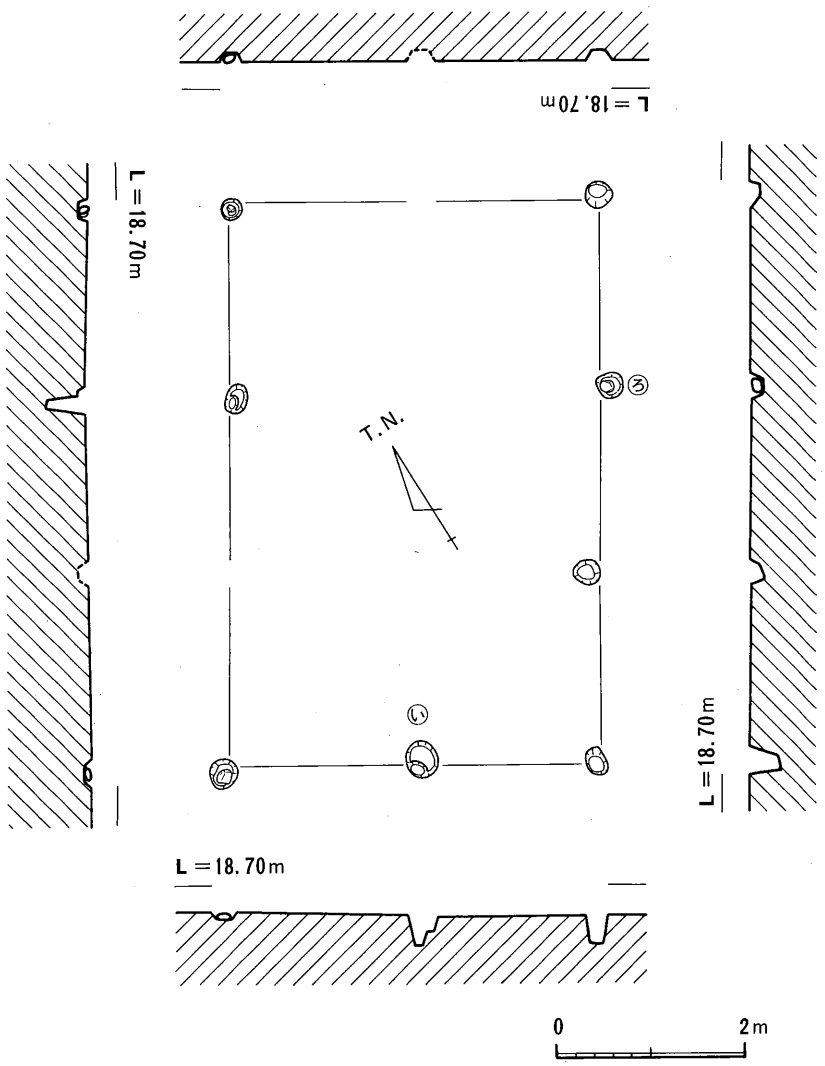


第256図　ＳＢ16平・断面図

SB17

SB17は、梁間２間×桁行３間（392×600cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅29.3cmを計り、柱間は、梁間で平均長196cm、桁行で平均長200cmを計る。主軸は、真北から32°東偏する。

267はSB17を構成する柱穴から出土した土師器の小皿（柱穴㋑出土遺物267・273、柱穴㋩出土遺物268）である。267は底部糸切りされており、体部は直線的に延びる。268は輸入磁器である。体部中程に屈曲部があり、上半は外反気味に延びる。同安窯系青磁皿Ⅰ類に当たるものと思われる。273は石英粗面岩製の砥石である。全面を磨ぎ面としているものである。

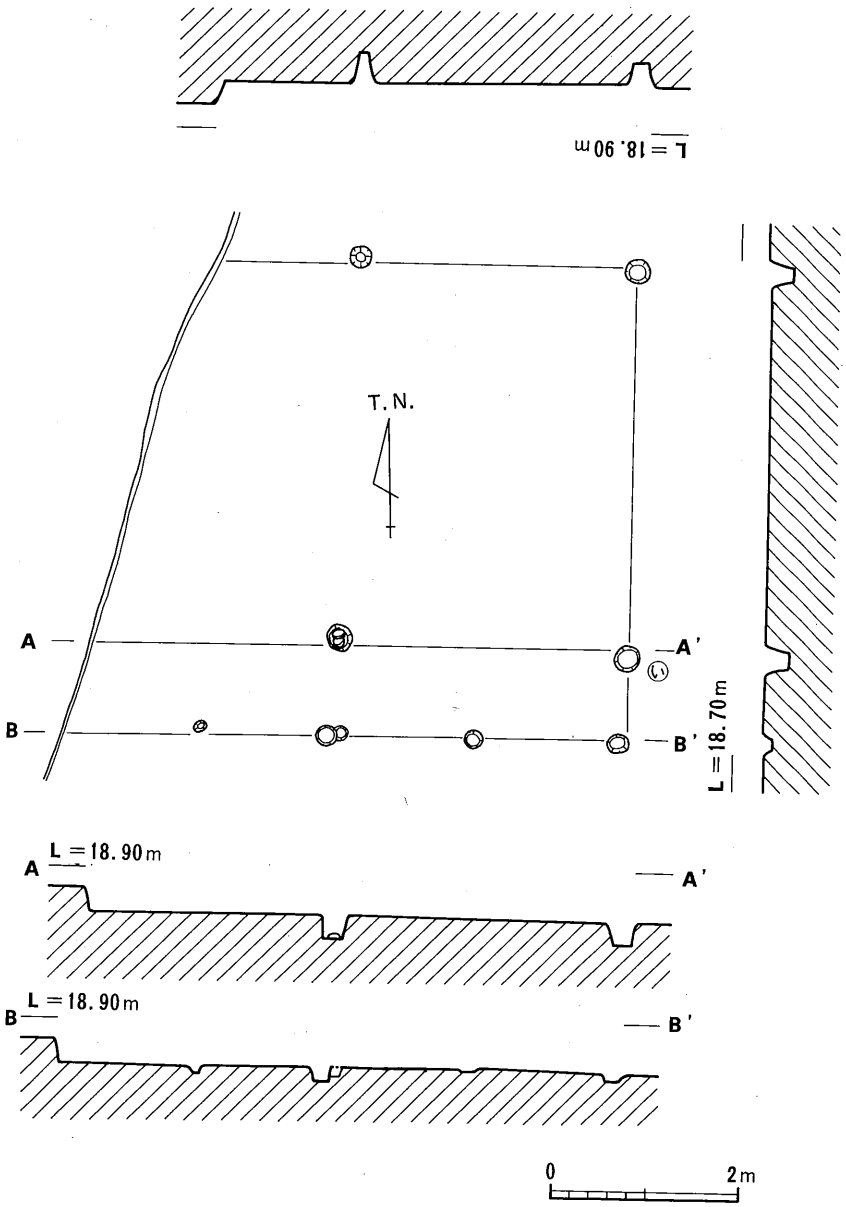


第257図　ＳＢ17平・断面図

SB18

SB18は、梁間1間×桁行(2)間［408×（566）cm］の建物遺構である。柱穴は、平均幅（24.5）cmを計り、柱間は、梁間で平均長408cm、桁行で平均長（299）cmを計る。主軸は、真北から1.5°東偏する。南側に庇を持つものである。庇は一間に1個の柱穴を持っている。西半が調査区外のため全容は不明である。

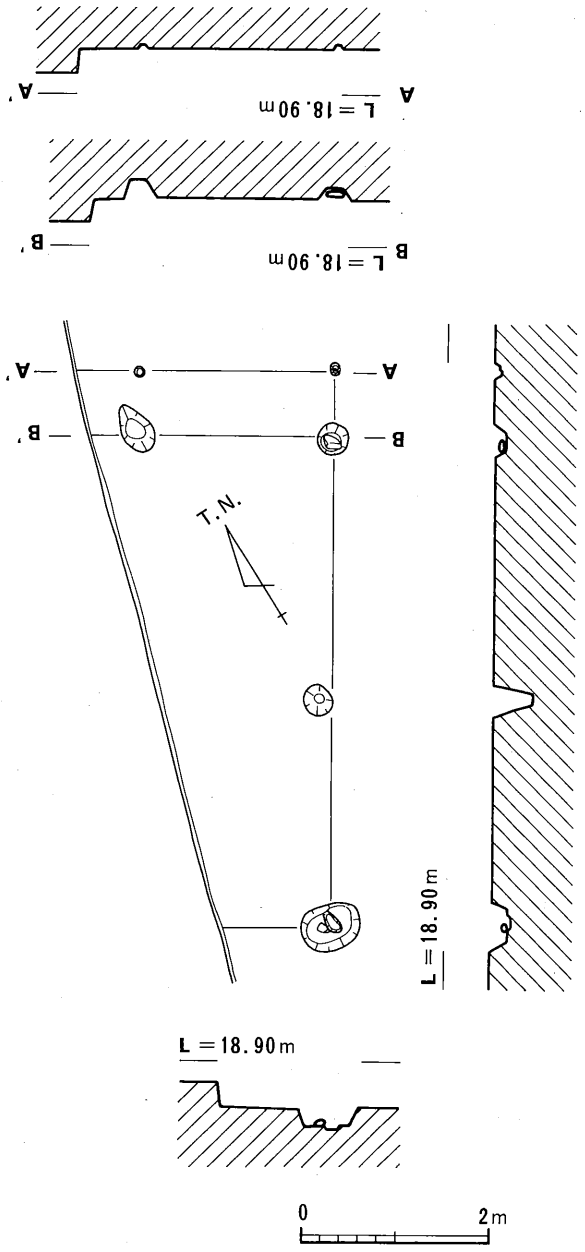
269はSB18を構成する柱穴より出土した陶器（柱穴㋑出土遺物269）である。269は内彎気味の体部を持ち、口縁端部は玉縁状におさめるものである。全面に緑色の釉が施されている。



第258図　ＳＢ18平・断面図

SB19

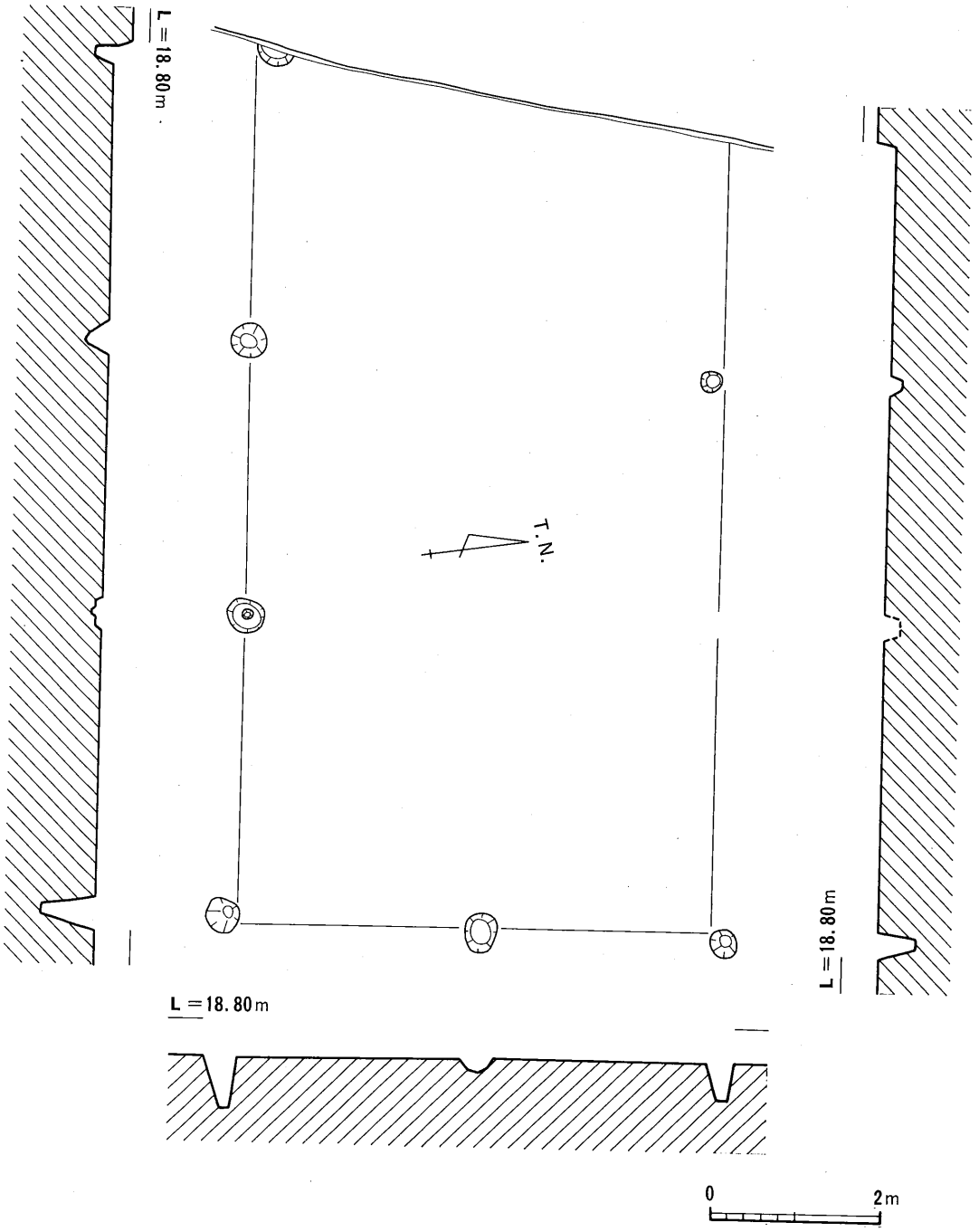
SB19は、梁間２間×桁行(2)間［520×（252）cm］の建物遺構である。柱穴は、平均幅（40）cmを計り、柱間は、梁間で平均長210cm、桁行で平均長（208）cmを計る。主軸は、真北から32°東偏する。北側に庇を持つ。西半は調査区外のため全容は不明である。



第259図　ＳＢ19平・断面図

SB20

SB20は、梁間２間×桁行(3)間［580×（1014）㎝］の建物遺構である。柱穴は、平均幅（36.7）㎝を計り、柱間は、梁間で平均長290㎝、桁行で平均長（335.3）㎝を計る。主軸は、真北から8.5°東偏する。西半が調査区外に延びているため全容は不明である。



第260図　ＳＢ20平・断面図

SB21

SB21は、梁間２間×桁行２間（276×332cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅17.3cmを計り、柱間は、梁間で平均長138cm、桁行で平均長166cmを計る。主軸は、真北から32.5°東偏する。溝に囲まれた掘立柱建物である。西側には１間分の張り出しが認められる。

SB22

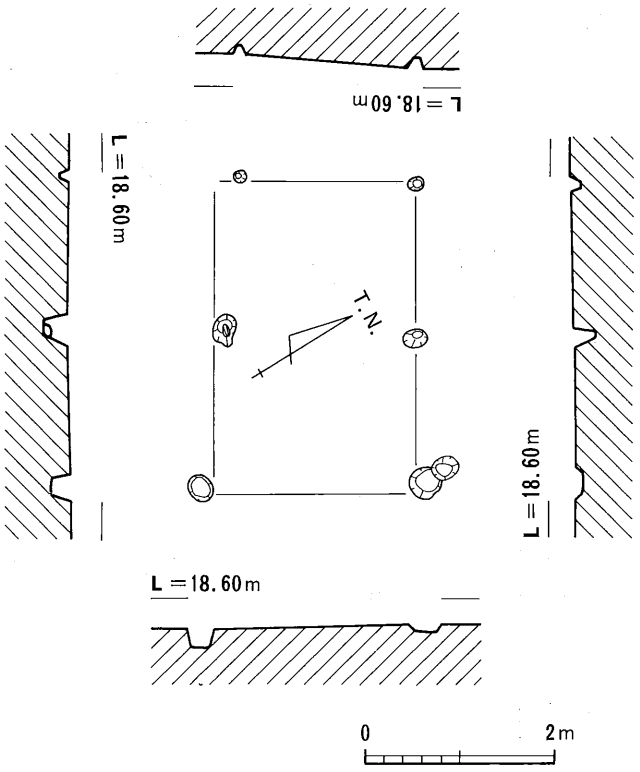
SB22は、梁間１間×桁行２間（213×322cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅23.3cmを計り、柱間は、梁間で平均長213cm、桁行で平均長161cmを計る。主軸は、真北から32°東偏する。

SB23

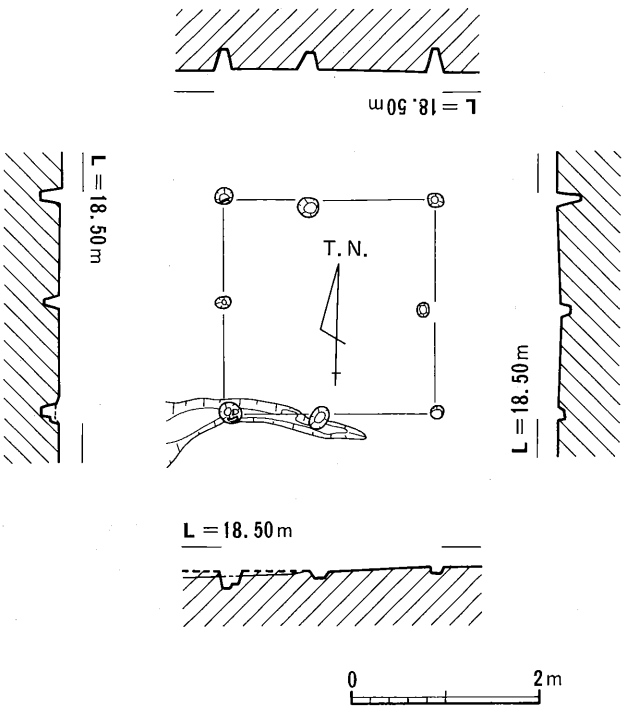
SB23は、梁間２間×桁行２間（224×220cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅17.5cmを計り、柱間は、梁間で平均長112cm、桁行で平均長110cmを計る。主軸は、真北から1.5°西偏する。

SB24

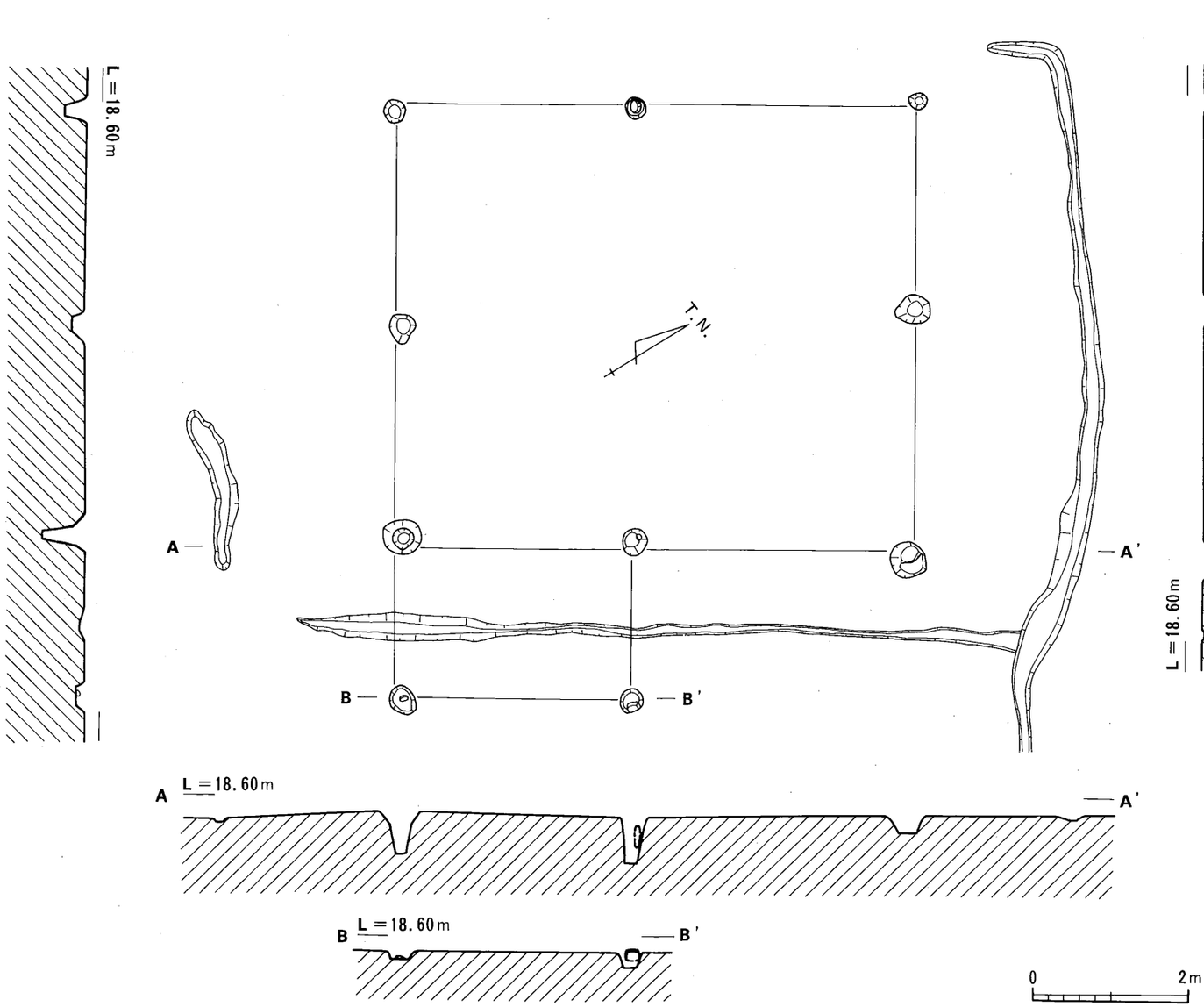
SB24は、梁間２間×桁行３間（600×972cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅36cmを計り、柱間は、梁間で平均長300cm、桁行で平均長324cmを計る。主軸は、真北から5.5°西偏する。



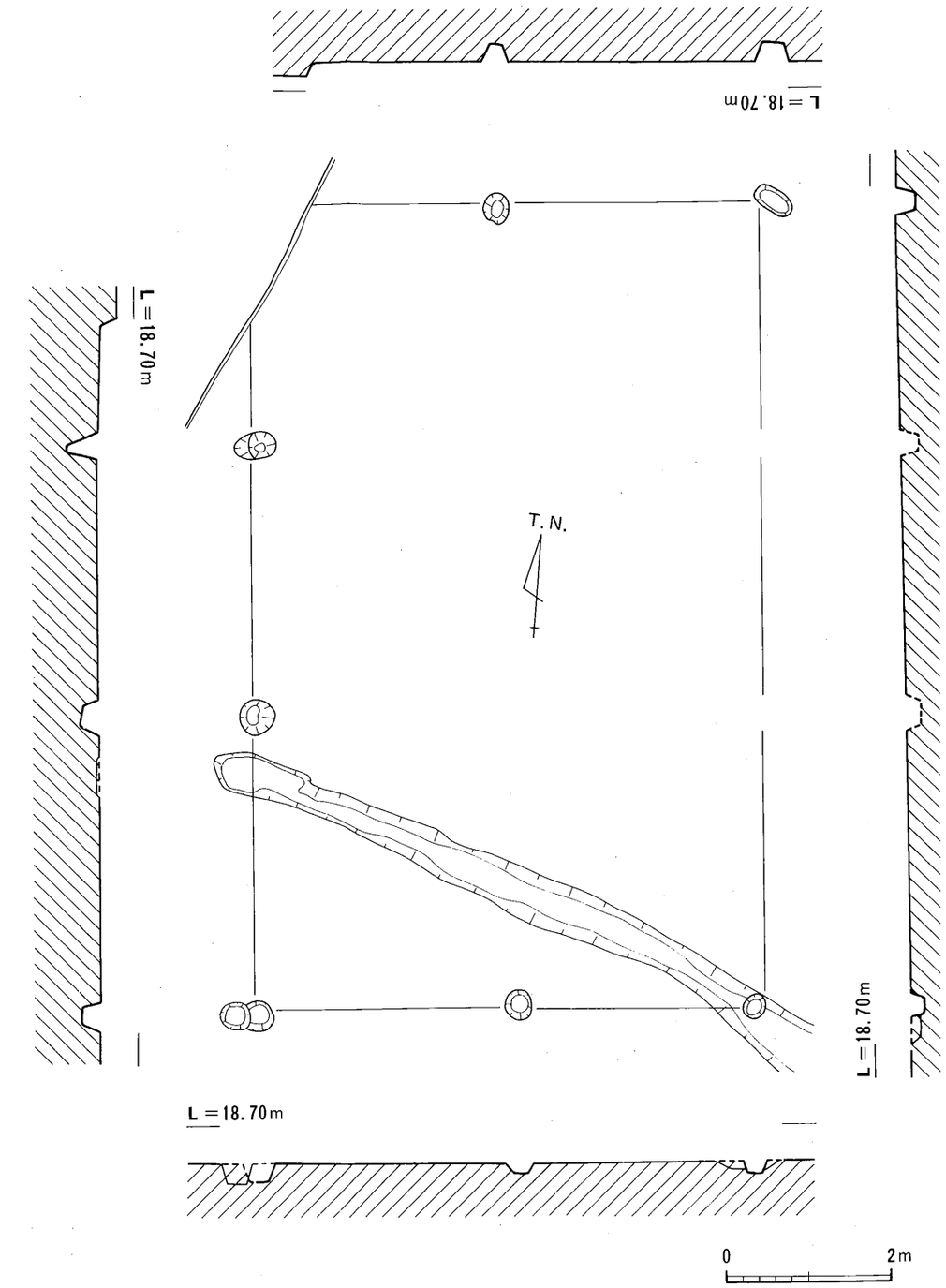
第261図　ＳＢ22平・断面図



第262図　ＳＢ23平・断面図



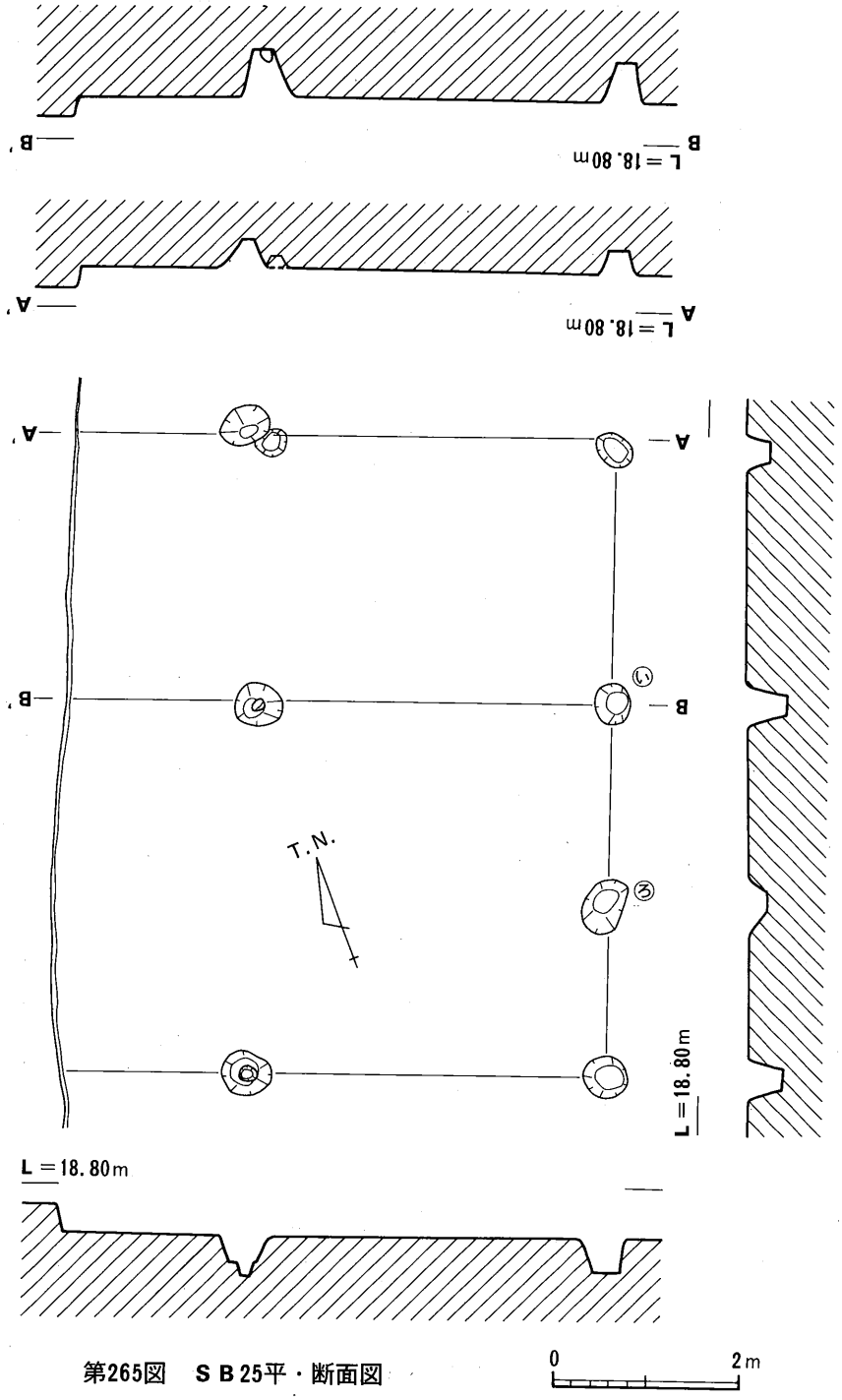
第263図　ＳＢ21平・断面図



第264図　ＳＢ24平・断面図

SB25

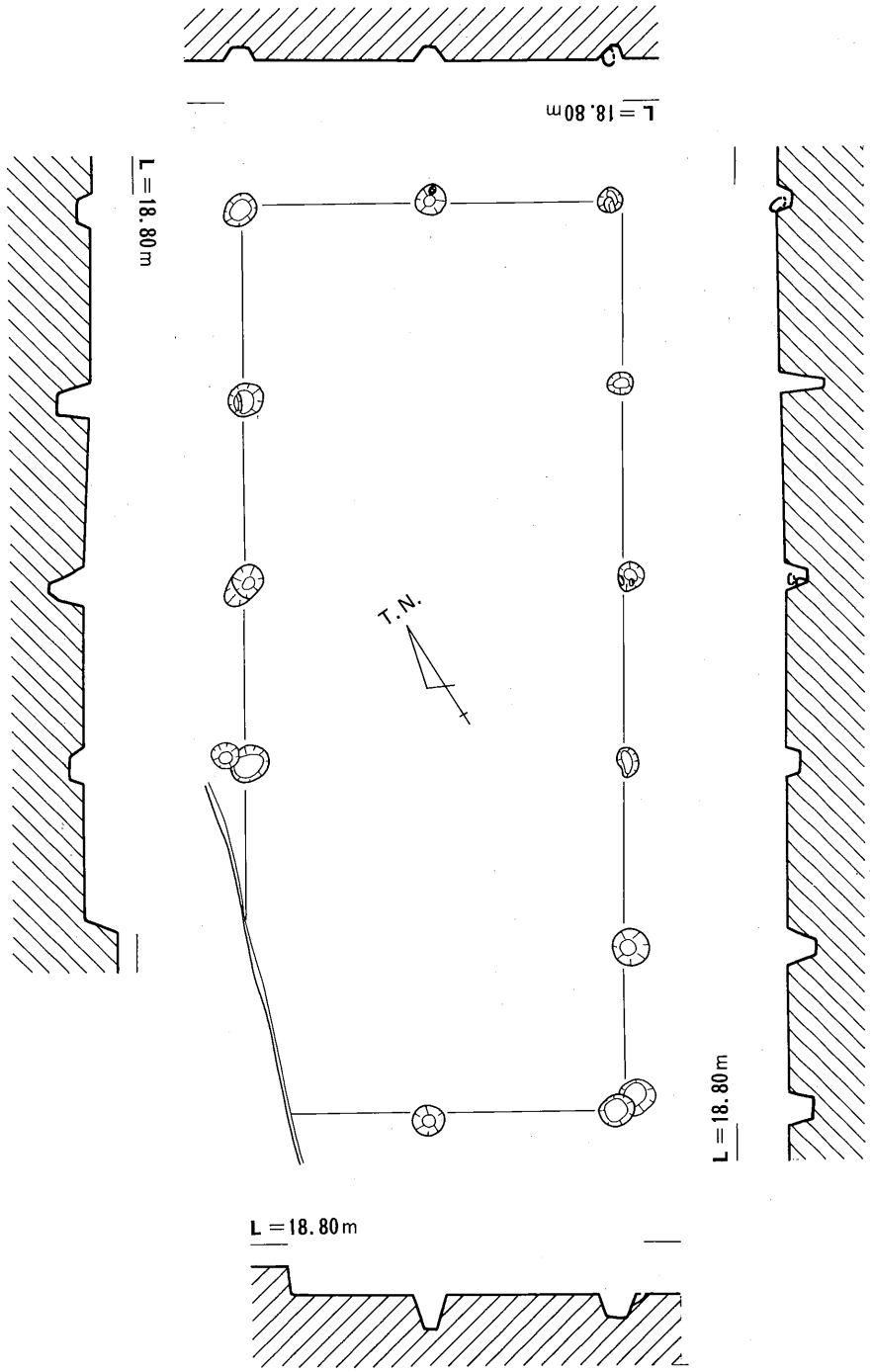
SB25は、梁間３間×桁行(2)間［684×（572）cm］の建物遺構である。柱穴は、平均幅（46）cmを計り、柱間は、梁間で平均長224cm、桁行で平均長（392）cmを計る。主軸は、真北から21.5°東偏する。北側１間分で間仕切りの柱穴が見られる。西半は調査区外に逃げているため全容は不



第265図　ＳＢ25平・断面図

明である。

270・271はSB25を構成する柱穴から出土したもの（柱穴㋑出土遺物271、柱穴㋒出土遺物270）である。270は土師質土器の擂鉢で内彎気味の体部を持ち、口縁部はやや内方に屈曲させるもの



第266図　ＳＢ26平・断面図　0　2m

である。271は小型の土師器の坏である。底部は糸切りされており、体部は直線的に延びるが口縁端部で外方に少し屈曲させるものである。

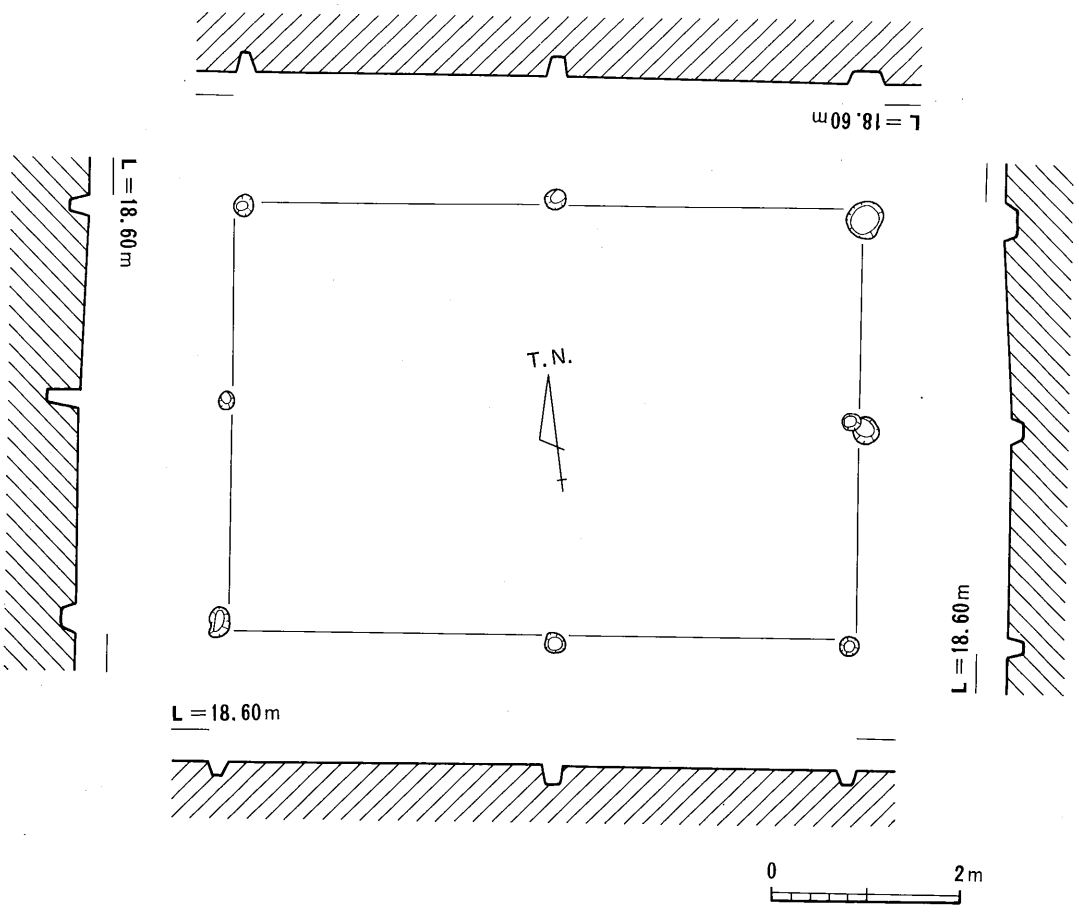
SB26

SB26は、梁間２間×桁行５間（404×970cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅31.6cmを計り、柱間は、梁間で平均長202cm、桁行で平均長194cmを計る。主軸は、真北から32.5°東偏する。南西部が調査区外に逃げているため全容は不明である。

272はSB26を構成する柱穴より出土した金銅製品（柱穴㋑出土遺物272）である。楕円形状を呈しており、刀金具の一部かと思われる。

SB27

SB27は、梁間２間×桁行２間（442×663cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅23.3cmを計り、柱間は、梁間で平均長221cm、桁行で平均長331.5cmを計る。主軸は、真北から8.5°東偏する。



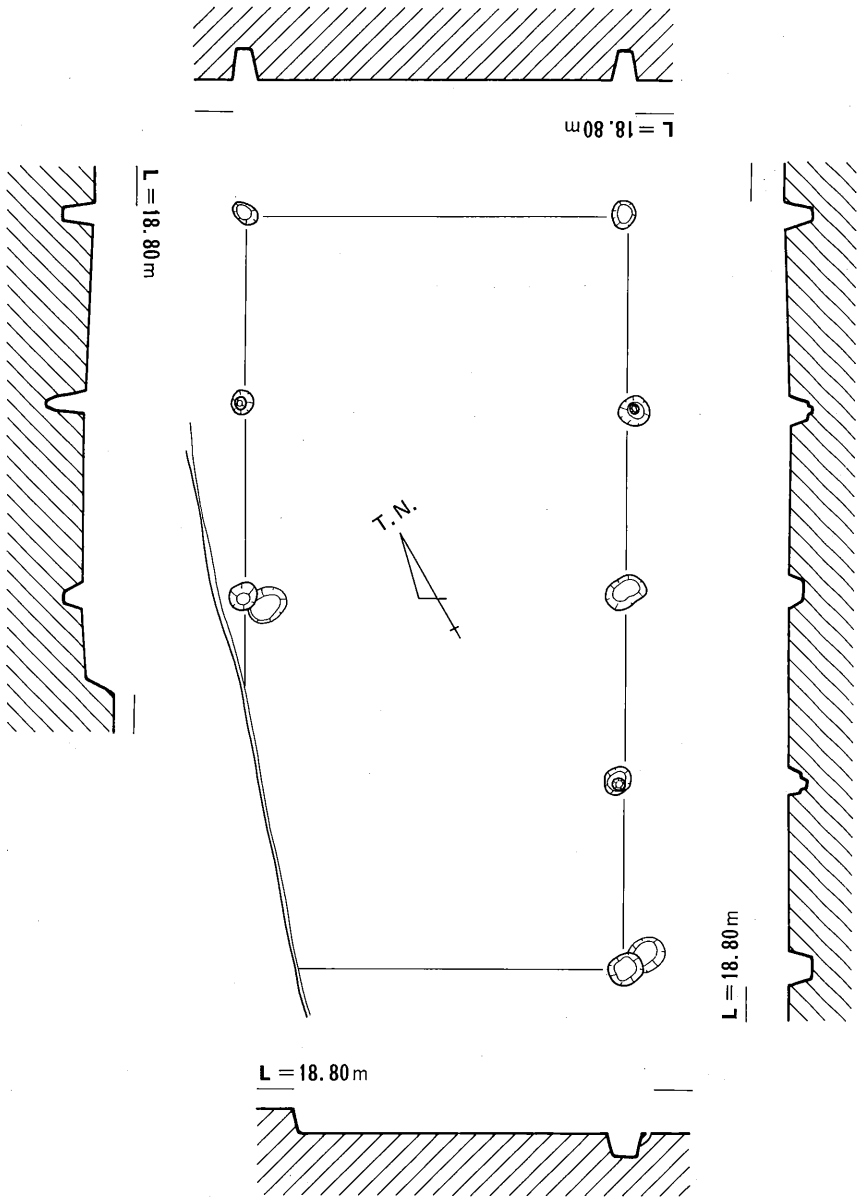
第267図　ＳＢ27平・断面図

SB28

SB28は、梁間1間×桁行4間（404×792cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅29cmを計り、柱間は、梁間で平均長404cm、桁行で平均長198cmを計る。主軸は、真北から31°東偏する。南西部が調査区外に延びている。

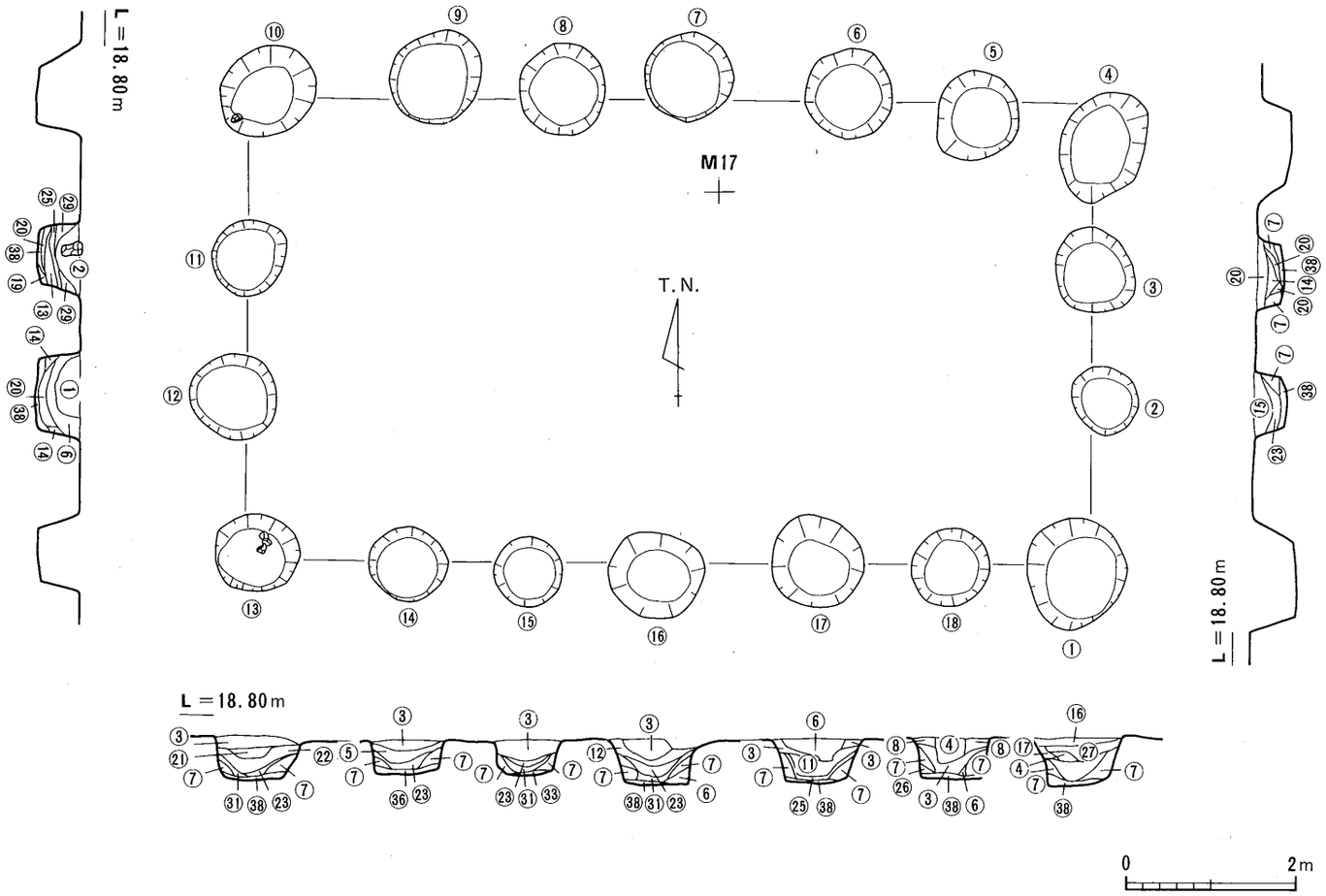
SB29

SB29は、梁間3間×桁行6間（526×974cm）の建物遺構である。柱穴は、平均幅97.6cmを計り、柱間は、梁間で平均長175.3cm、桁行で平均長162.3cmを計る。主軸は、真北を向いている。やや大きめの掘り方を持つ。



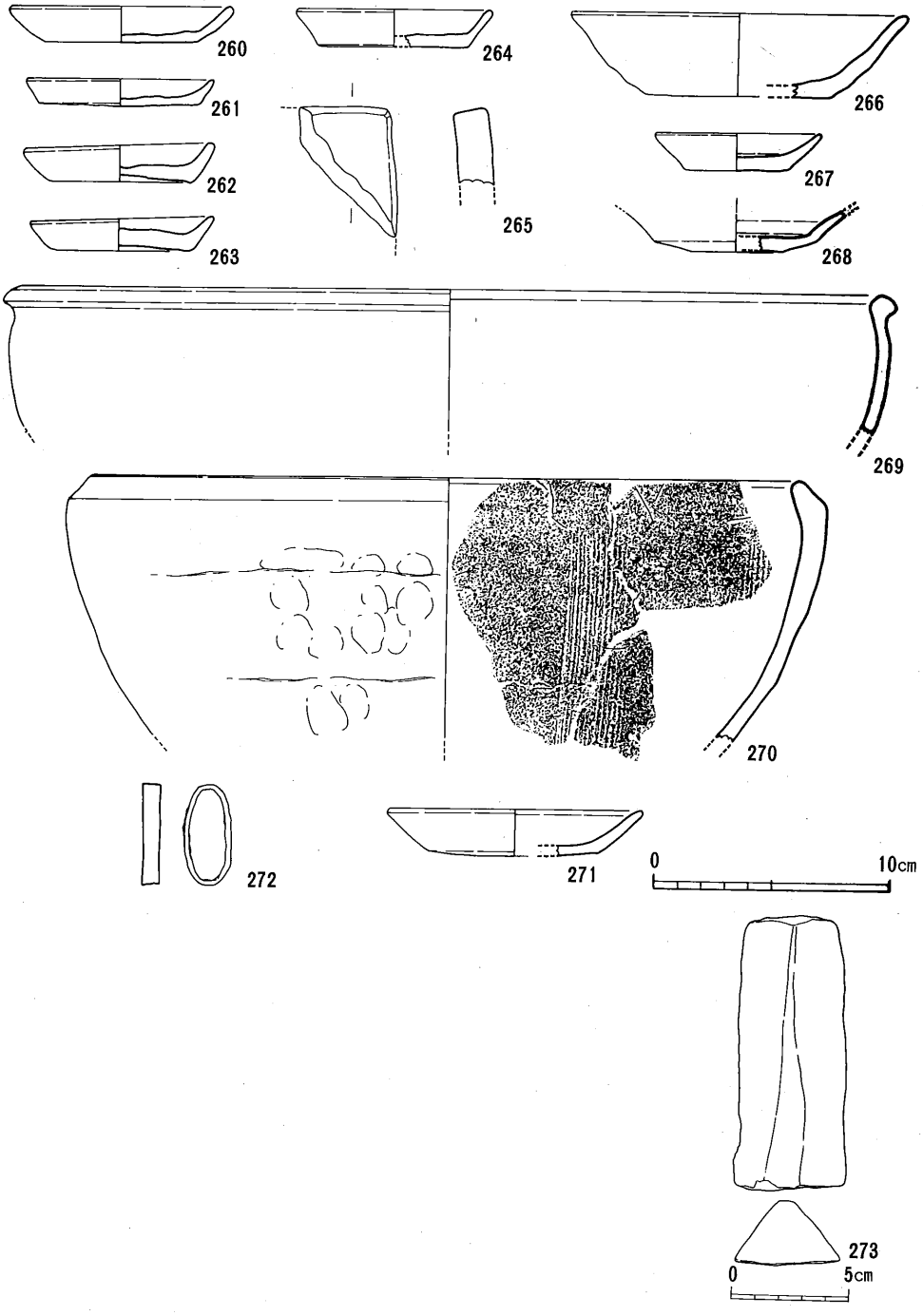
第268図　S B 28平・断面図

0　2m



①暗黒黄灰色粘質土層
②暗黒黄灰色粘質土層（こげ茶色粒を含む）
③黒黄灰色粘質土層（こげ茶色粒を含む）
④淡黒黄灰色粘質土層
⑤淡黒黄灰色粘質土層（こげ茶色粒を含む）
⑥暗灰黄色粘質土層
⑦暗灰黄色粘質土層（砂っぽい）
⑧暗灰黄色粘質土層（こげ茶色粒を含む）
⑨暗灰黄色粘質土層（⑧よりもっと暗い）
⑩暗灰黄色粘質土層（淡黒灰色のブロックを含む）
⑪明黄灰色粘質土層
⑫明黄灰色粘質土層（こげ茶色粒を含む）
⑬黄灰色粘質土層
⑭黄灰色粘質土層（砂っぽい）
⑮黄灰色粘質土層（こげ茶色粒を含む）
⑯黄灰色粘質土層（褐色粒を含む）
⑰黄灰色粘質土層（⑯よりもっと黒っぽい）
⑱黄灰色粘質土層（淡黒灰色のブロックを含む）
⑲黄灰色粘質土層（２～３㎜程度の砂粒を含む）
⑳淡黒灰色粘質土層
㉑淡黒灰色粘質土層（こげ茶色粒を含む）
㉒淡黒灰色粘質土層（黄褐灰色粘質土のブロックを含む）
㉓黒灰色粘質土層
㉔黒灰色粘質土層（黄灰色のブロックを含む）
㉕暗黄灰色粘質土層
㉖暗黄灰色粘質土層（砂っぽい）
㉗暗黄灰色粘質土層（褐色粒を含む）
㉘暗黄灰色粘質土層（２～３㎜程度の砂粒を含む）
㉙淡黄灰色粘質土層
㉚淡黄灰色粘質土層（砂っぽい）
㉛灰黒色粘質土層
㉜淡灰黒色粘質土層
㉝淡灰黒色粘質土層（黄褐色のブロックを含む）
㉞暗黒灰色粘質土層
㉟暗黒黄色粘質土層
㊱暗灰色粘質土層
㊲灰黄色粘質土層
㊳暗灰白色粘質土層
㊴暗灰白色粘質土層（黄褐色のブロックを含む）

第269図　ＳＢ29平・断面図



第270図　掘立柱建物出土遺物実測図

(2) 溝状遺構

SD02～06

これらの溝は調査区中央で検出されたものでほぼ南北に流路を取る。かなり削平を受けているため天幅に比べ浅いものばかりで、東方および南方になるに従い消滅するようである。SD02～04・06はほぼ平行に検出され、それに直行するようにSD05が検出された。これらの溝は同時期に機能していたと思われ、並走するSD02～04・06はそれぞれの溝間に柱穴が検出されないことから道路の側溝と考えられる。またこれらの溝に直行する溝は掘立柱建物を区画する溝と思われる。

SD02

274は土師質土器の釜である。口縁部が短く上方に延びる。おそらく体部上半に穿孔を持つものと思われる。

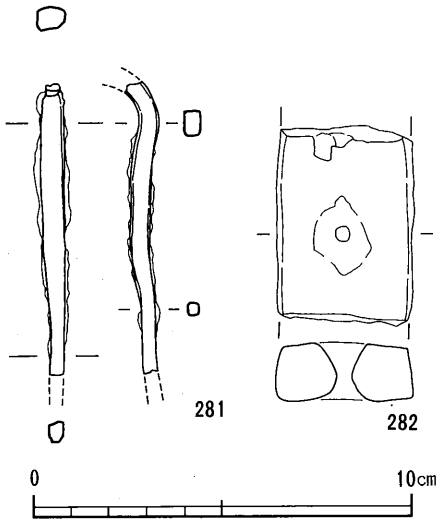
275は土師質土器の擂鉢である。口縁部がやや内方に屈曲する。

276～279は土師質土器の土鍋である。口縁部が内方に屈曲するものと外方に屈曲するものがある。

280は火鉢の口縁部と思われる。口縁部を肥厚させ、上方に面を作る。

281は鉄釘と思われる。頭部はやや折れ曲っており、断面は頭部付近が7×5㎜の長方形で先部になるにつれて3㎜角の方形になるようである。

282は石英粗面岩の砥石である。中央に穿孔が認められ、釣り下げていたものと思われる。



第271図　SD02出土遺物実測図（石・鉄製品）

SD03

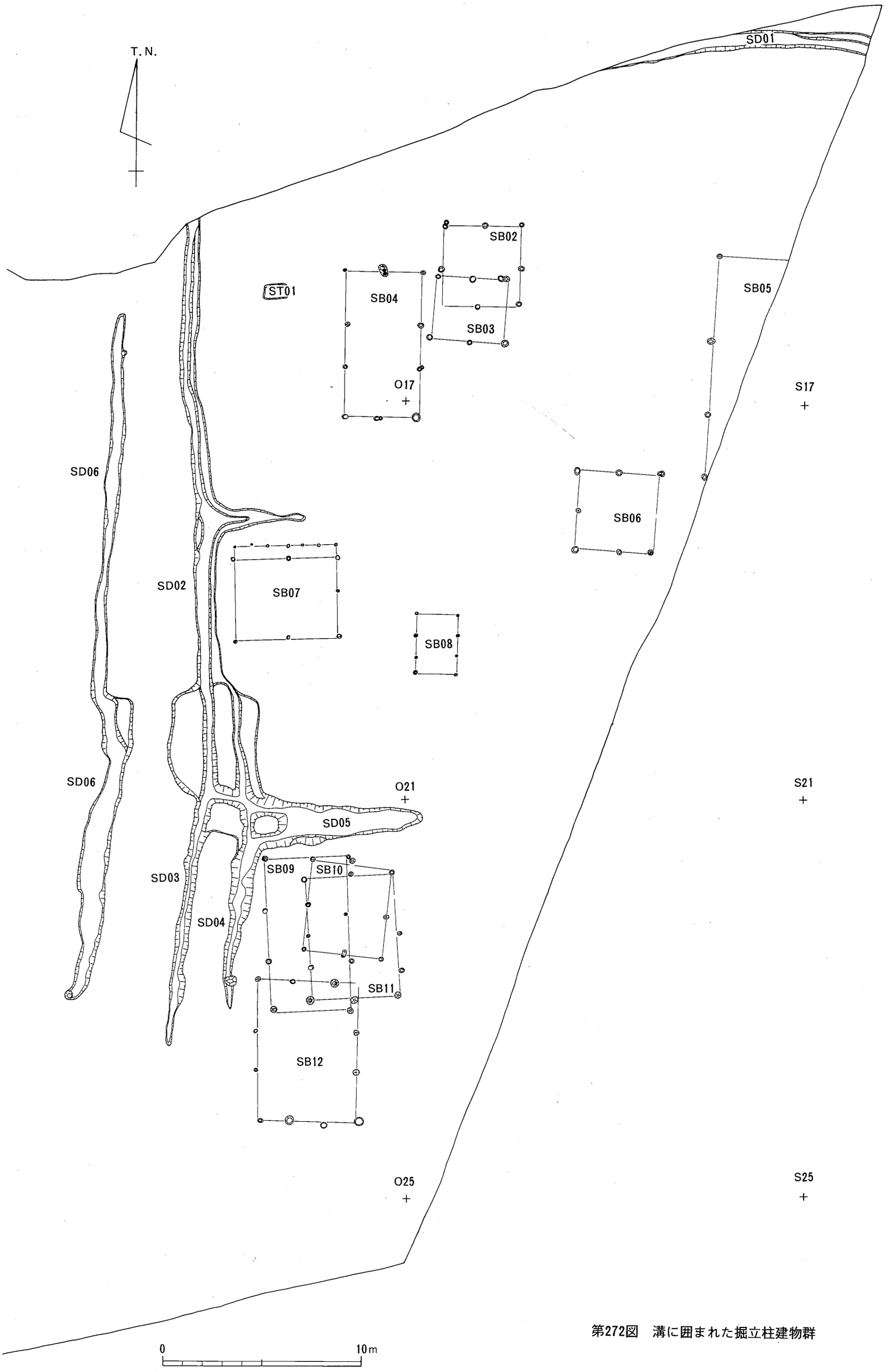
283・284は土師器の小皿である。底部はヘラ切りされており体部は直線的に外上方に延びる。

285は土師器の坏である。底部は糸切りされており、体部は内彎気味に延び口縁端部はやや外反している。

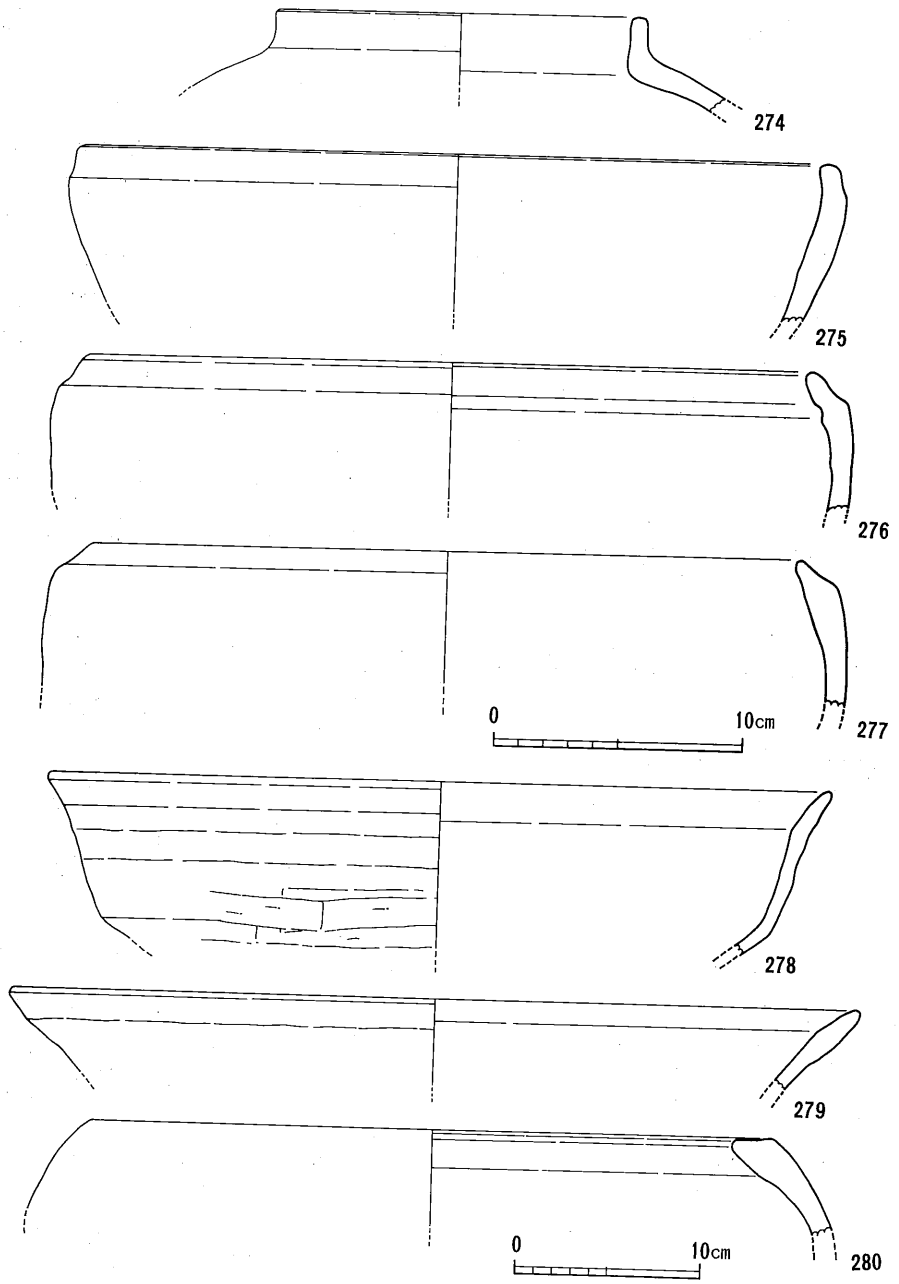
286は畿内産の瓦器である。体部は内彎気味に外上方に延びる。体部外面に指頭痕が顕著に施されている。

287～291は土師質土器の土鍋である。287・288は体部が内彎気味に上方に延び、口縁部が内側に屈曲する。289はそれに伴う脚であろうか。290・291は体部が内彎気味に外上方に延び口縁部が外方に屈曲するものである。

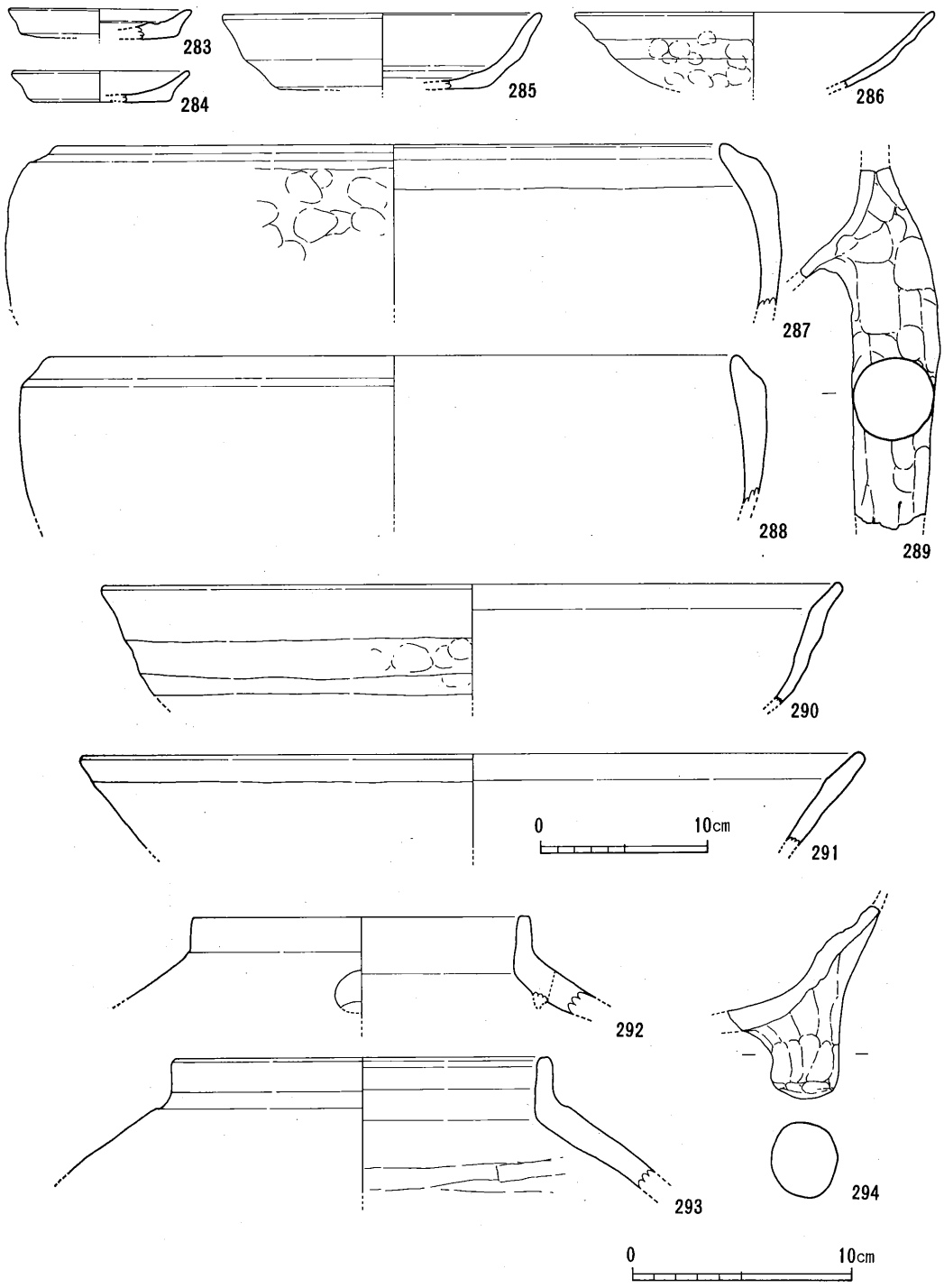
292・293は口縁が短く上方に延びる釜である。体部上半に穿孔が認められる。



第272図　溝に囲まれた掘立柱建物群



第273図　ＳＤ02出土遺物実測図

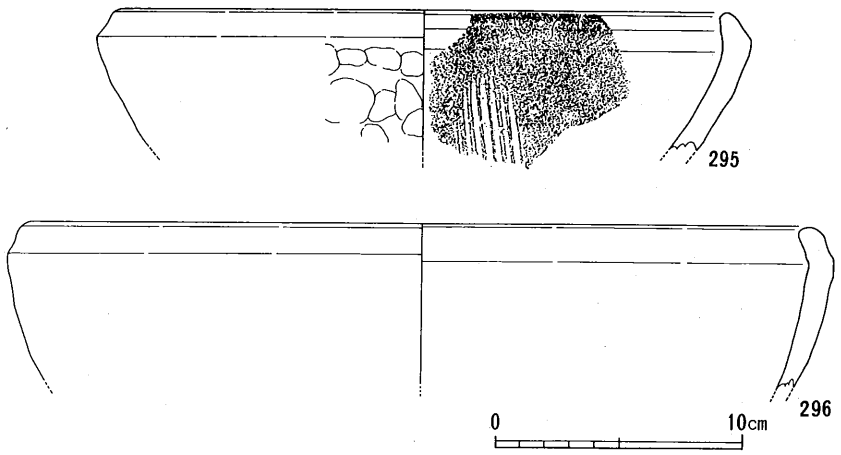


第274図　ＳＤ03出土遺物実測図①

294は火鉢の脚である。

295・296は土師質土器の擂鉢である。体部が内彎気味に外上方に延び口縁部を内側に屈曲させている。体部外面には指頭痕が見られ、内面には7本一単位の条溝が施されている。

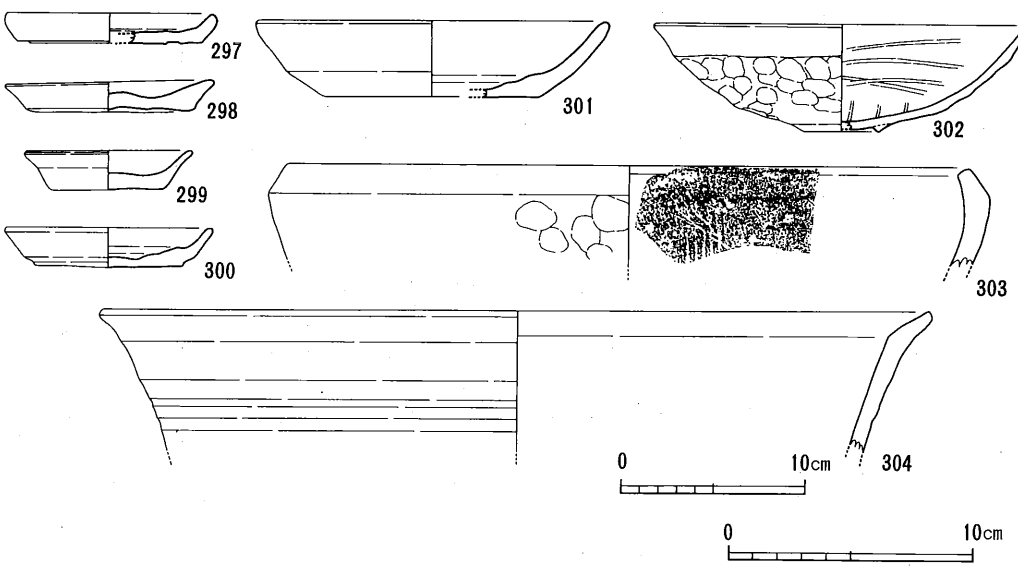
時期は畿内産の瓦器から3世紀後半とも考えられるが、その他の遺物より中世後半頃としたい。



第275図　ＳＤ03出土遺物実測図②

SD04

297～300は土師器の小皿である。底部切り離し手法にはヘラ切りと糸切りがある。体部形態には他の小皿と同様に口縁部が内彎するもの、直線的に延びるもの、外反するものの3タイプがあると考えられるが、体部がヘラ切りのものはやや分厚めで、糸切りのものは細めの傾向が見られる。



第276図　ＳＤ04出土遺物実測図

301は土師器の坏である。体部はやや内彎気味に外上方に延びる。底部調整は糸切りである。

302は畿内産の瓦器である。底部に断面三角形の小さい高台が付き体部は内彎気味に外上方に延びる。体部外面下半には指頭痕が顕著に見られ、口縁部下には指ナデが見られる。体部内面には横方向に、見込み部分には平行ヘラ磨きが見られる。

303は土師質土器の擂鉢である。口縁部は内方に屈曲する。内面には条溝が見られる。

304は土師質土器の土鍋である。口縁部は外方に屈曲する。

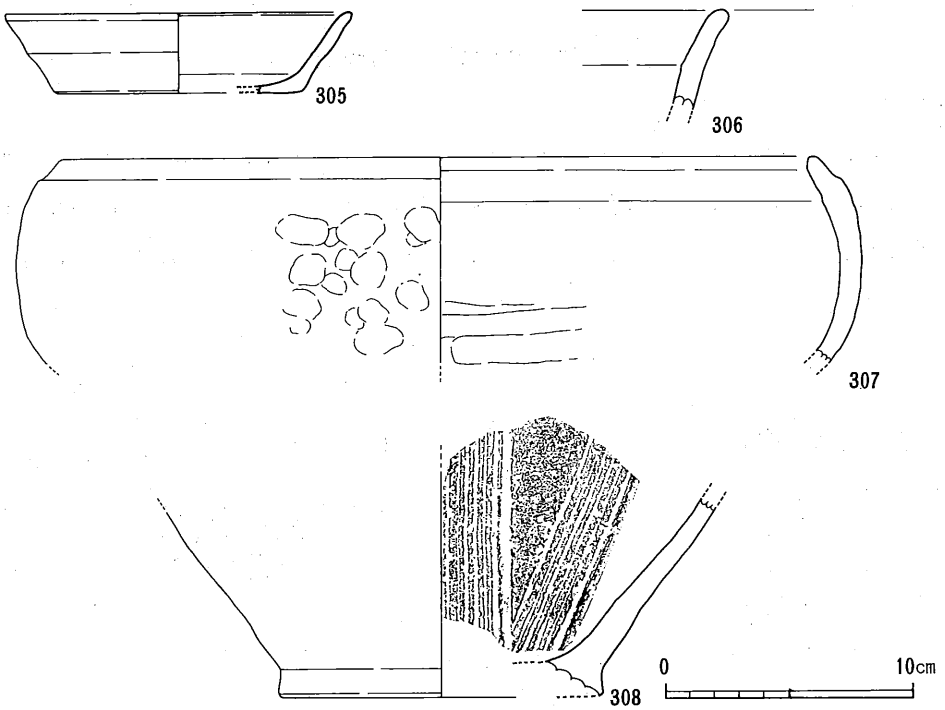
時期は畿内産の瓦器から13世紀後半頃とも考えられるが、その他の遺物から中世後半頃としたい。

SD05

305は土師器の坏である。底部は糸切りされている。

306・307は土師質土器の土鍋である。口縁部が内方に屈曲するものと外方に屈曲するものがある。

308は土師質土器の擂鉢である。内面に7本一単位の条溝が認められる。



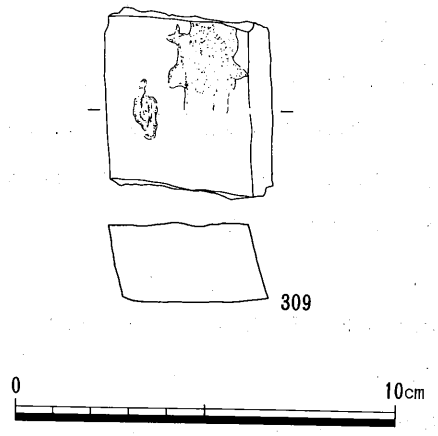
第277図　ＳＤ05出土遺物実測図

SD06

SD06はSD02～04から約4.40m程の距離を開けてほぼ南北に検出された溝状遺構である。天幅は約1.08mで深さは0.07mを計る。

309はSD06から出土した石英粗面岩製砥石である。全面を磨ぎ面としている。

並走するSD02～04・06は道路の測溝と考えられ、SD03から東に延びる溝は建物を区画する溝であることが判るものである。時期は出土遺物から中世後半頃と考えられる。



第278図　ＳＤ06出土遺物実測図（石製品）

まとめ

城岡地区では、中世の溝状遺構が8条検出された。溝の性格は掘立柱建物を区画する溝と現地形の畦畔に則するものの2種類が見られる。掘立柱建物を区画する溝はSD01・02・03・04・05・06・11・12の8条検出された。そのなかでSD02～06はほぼ南北方向に流路を取り等間隔で形成されていることから、道路としての機能を有していたものと考えられる。またSD01は東半分で検出された掘立柱建物群の北限を区切っている。このように城岡地区で検出された中世の掘立柱建物群は、推定南北約38mの溝に囲まれた中世集落の東半分の可能性が考えられる。延命の中世集落は北はSD01に画され、南は自然の延命の岡によって画されていたと考えられる。

(3) 土坑

城岡地区で検出された土坑は、ほとんどが調査区南半で検出された。SK07・08は溝状を呈していて、細長い楕円形状のものが2列に並んだ状態で検出された。また他のものは土坑内に河原石を主体として五輪などのやや大きめの河原石が廃棄されており、廃棄土坑としての機能を持つものであることが判る。

SK03

SK03は調査区ほぼ中央で検出された。検出された遺構は浅い土坑状のものである。形状は不明である。

SK03からは土師質土器が多量に出土している。

310～312は口縁部が内方に屈曲する土鍋である。屈曲の形態にも310のように内方に摘み出すものと、体部を内彎させながら口縁部外面に指ナデを施したものがある。

313～315は口縁部が外方に屈曲する土鍋である。体部が直線的なものとやや内彎するものがある。

316は火鉢の口縁部である。体部は内彎しながら口縁部に至り、口縁端部は上方に面を持っている。

317は擂鉢である。体部は直線的に外上方に延びる。体部外面には指頭痕が顕著に見られ、内面には9本一単位の条溝が間隔を開けながら施されている。

SK03からは煮沸具が多く出土しており、供膳具としての椀・坏類が少ないのが特徴がある。時期は供膳具としての椀が無くなる中世後半頃と思われる。

SK04

SK04は調査区南半のほぼ中央で検出された。規模は東西2.94m、南北4.5m、深さ0.56mの土坑で拳大～人頭大の河原石が多量に検出された。それに混じって土器および石塔・石臼が出土している。廃棄土坑の可能性があるものである。

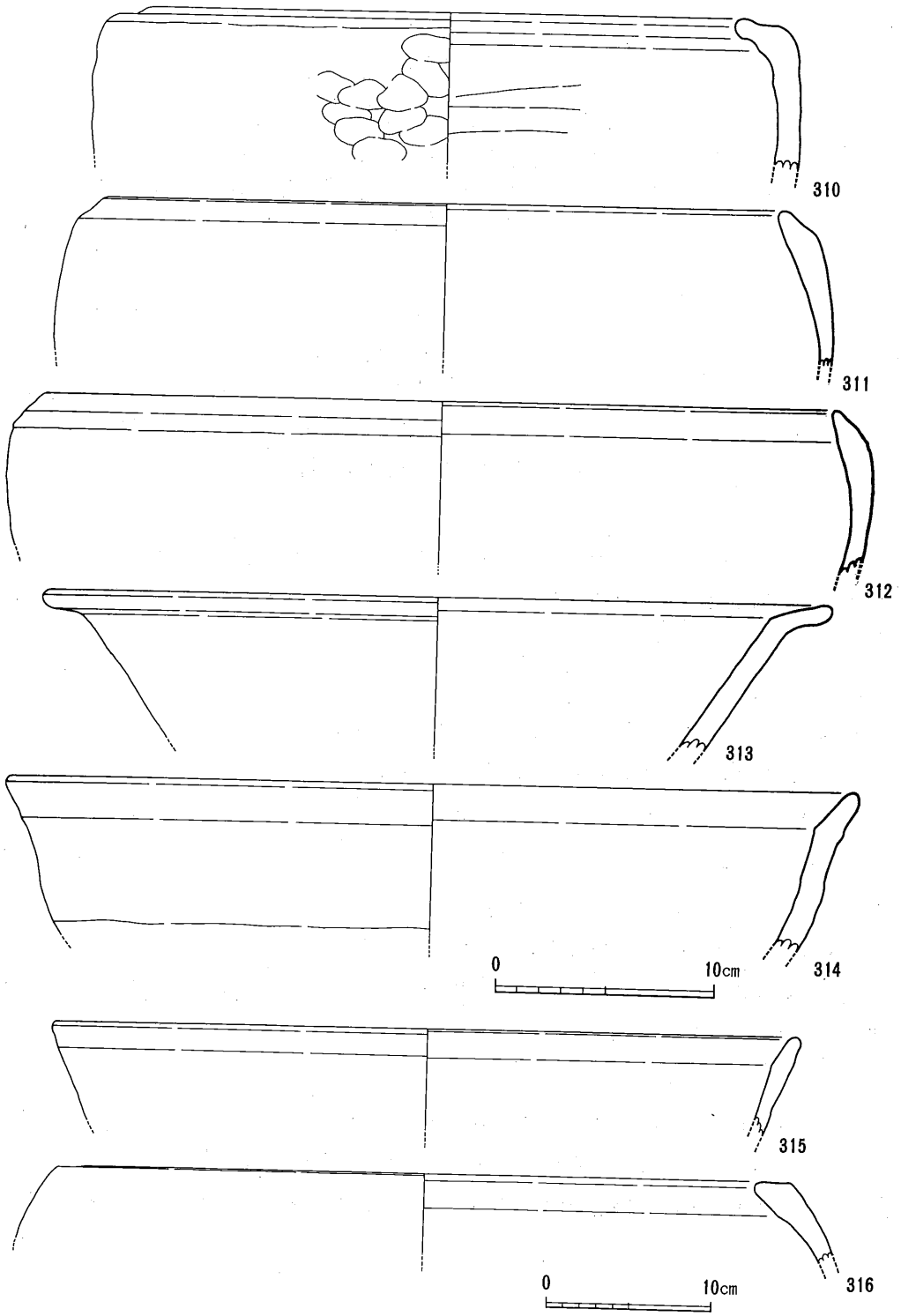
318は土師器の坏である。底部は糸切りされており、体部はやや内彎気味に外上方に延びるものである。

319は瓦器の小皿である。底部外面に指頭痕が顕著に施されている。

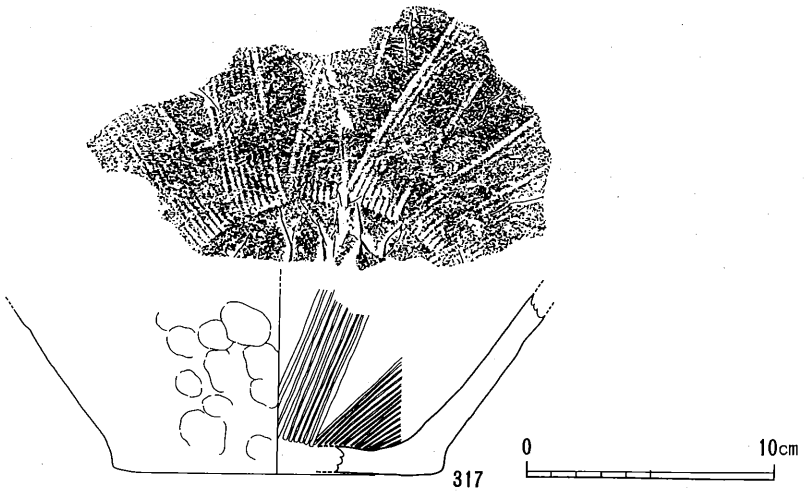
320は土師質土器の壺と思われる。底部はしっかりした平底を呈し、体部は直線的に外上方に延び上端で内方に屈曲させ、肩部を作っている。

321は東播系のこね鉢の底部である。底部は糸切りされている。

322～330は土師質土器の土鍋である。322・323は口縁部に穿孔のある土師質の土鍋である。324・325は口縁部が内方に屈曲するもので体部は内彎するものである。体部外面に指頭痕が顕著に見られる。326～330は口縁部が外方に屈曲するもので体部はやや内彎気味に外上方に延びる。このように土鍋には口縁部形態が3タイプ認められる。



第279図　ＳＫ03出土遺物実測図①



第280図　ＳＫ03出土遺物実測図②

331～335は土師質土器の擂鉢である。体部はやや内彎しながら外上方に延び、口縁部は内方に屈曲する。内面には７～９本を一単位とする条溝がみられる。体部外面には指頭痕が顕著に認められる。

336は口縁部が短く上方に延びる釜である。

337は火鉢の口縁部と思われる。338はその脚部と思われる。

339は丸瓦である。内面に布状の圧痕が認められる。

340は鉄製品である。おそらく矢の先端部に装着するもので、カリマタと思われる。

341～346は石臼である。341・342・344・345は上臼である。342は中央に穿孔が認められ、側縁部に突帯状のものを持つ。体部中央には枘穴がみられる。

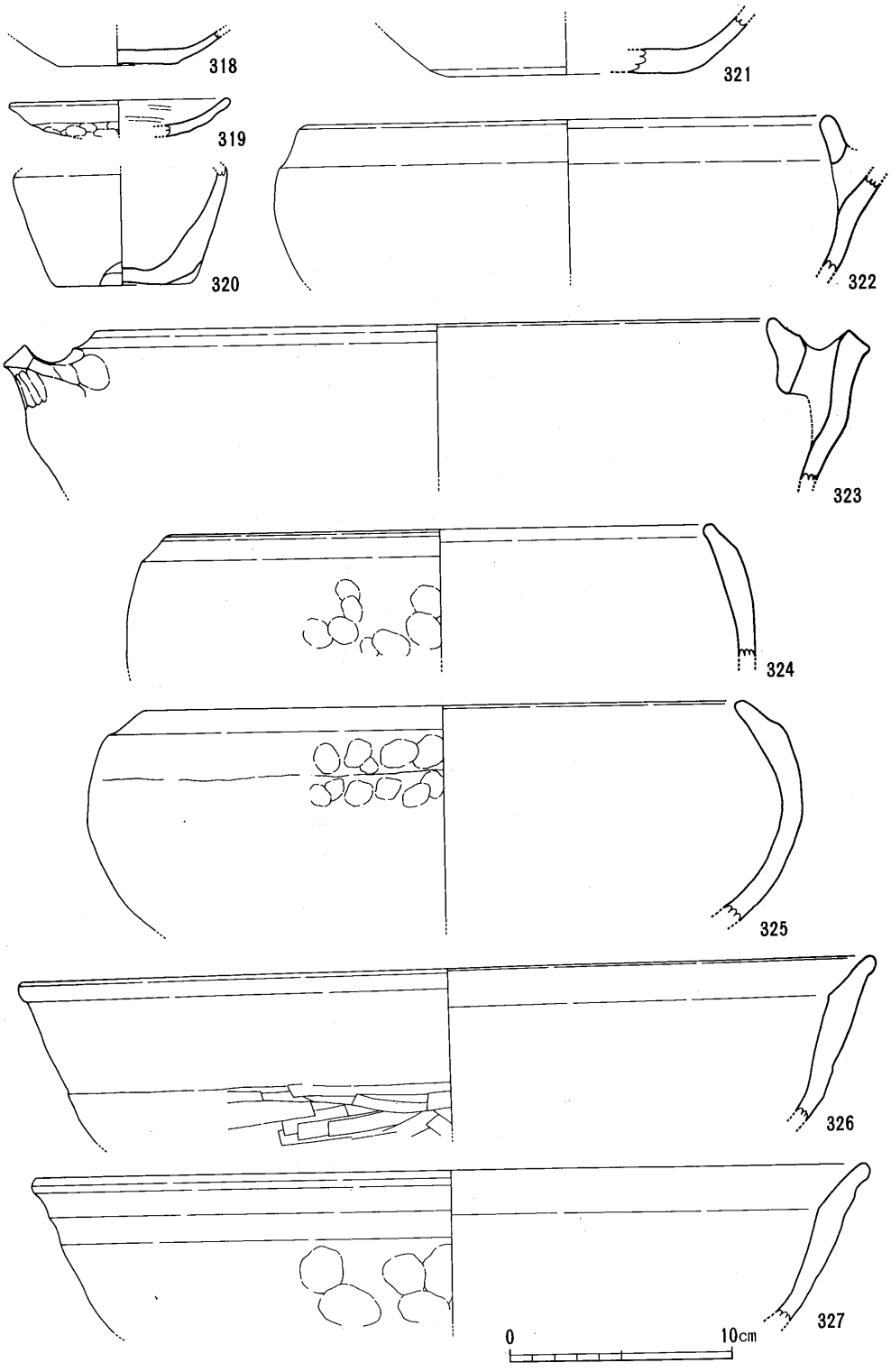
343・346は下臼である。343は上部に切り目を入れている。

347・348は砥石である。347・352は砂岩製の砥石で、磨ぎ面が上面と左側面に残っている。上面には溝状の凹みも見られ、鋭利なもののための砥石と考えられる。348は砂岩製の砥石で全面に磨ぎ面を持っている。

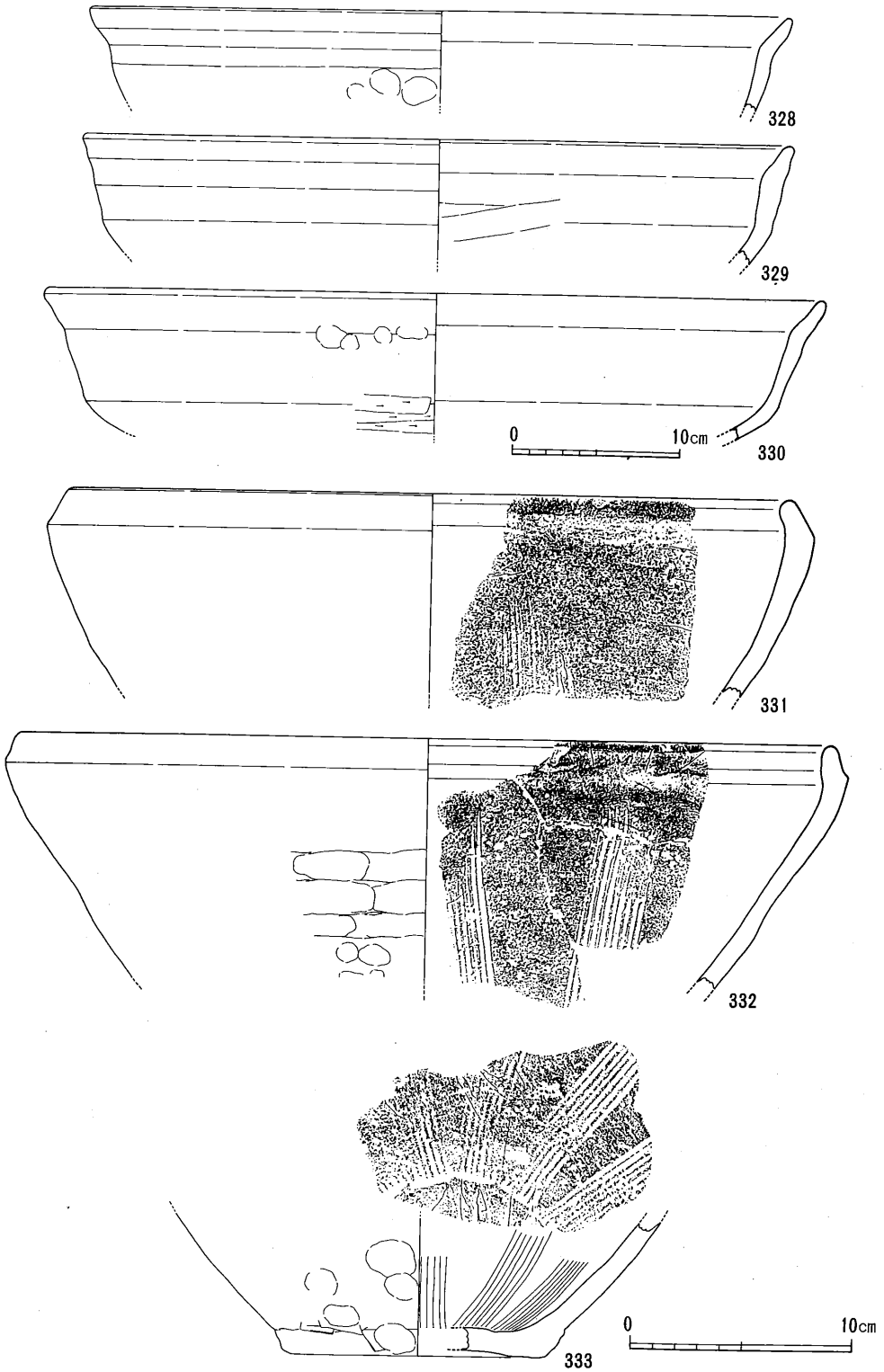
349～355は石塔である。349が砂岩製で、その他は角礫凝灰岩製である。

SK04の時期は瓦器の小皿から13世紀後半～末頃に比定されるが、供膳具としての椀坏類が非常に少なく調理具としての鍋・擂鉢類が多いことから中世後半頃のものかと思われる。

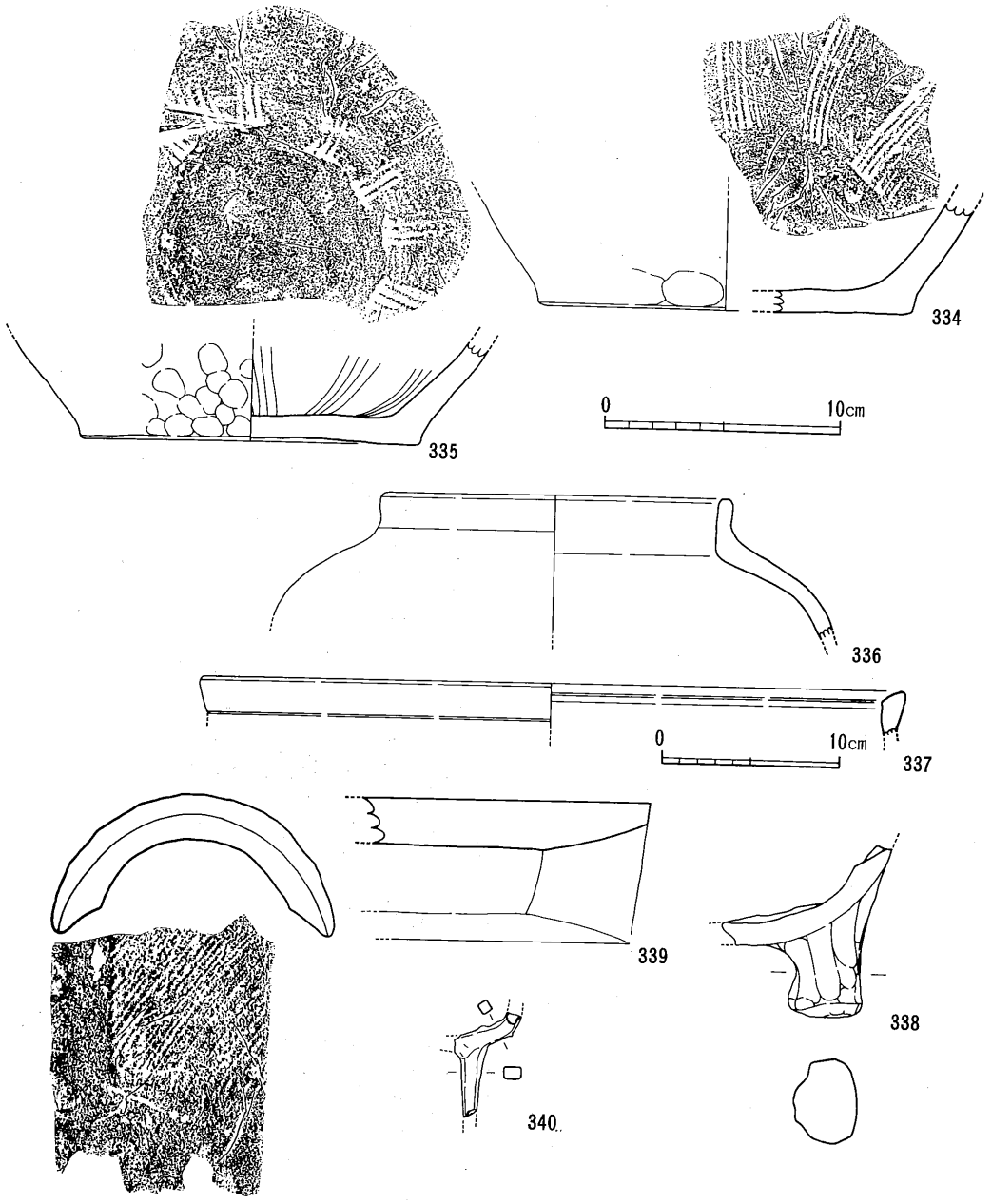
第281図　ＳＫ04平・断面図



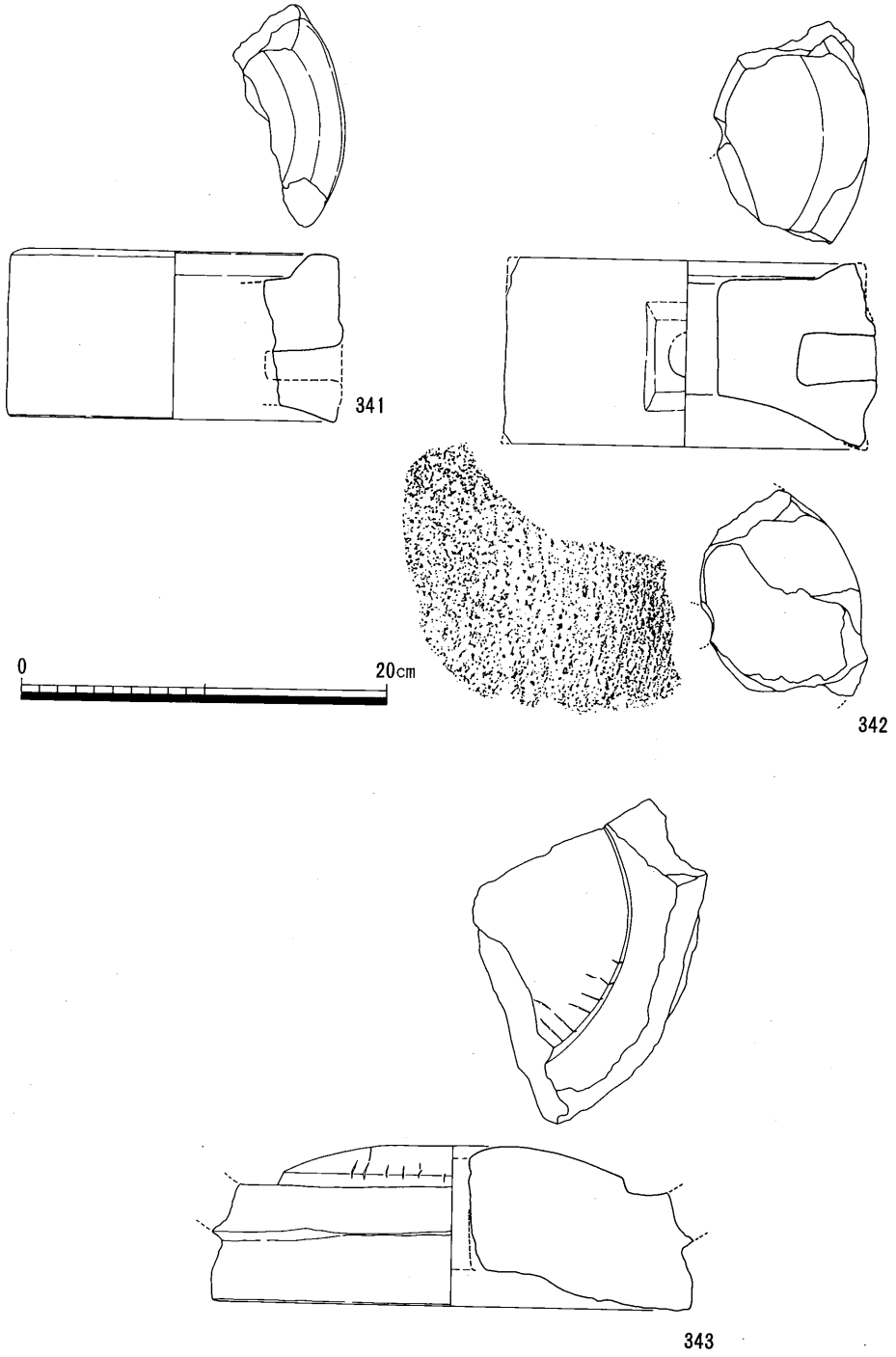
第282図　ＳＫ04出土遺物実測図①



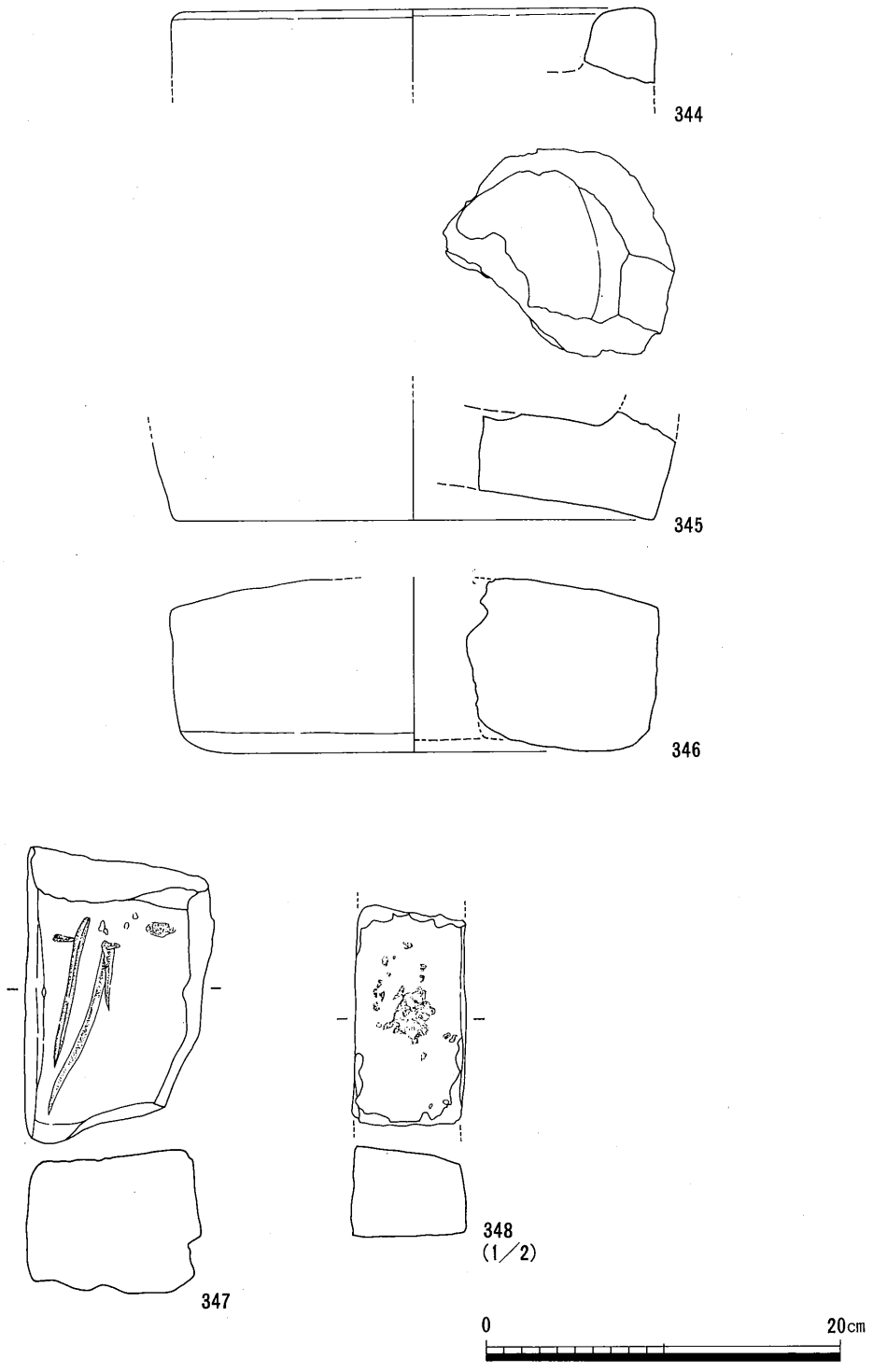
第283図　ＳＫ04出土遺物実測図②



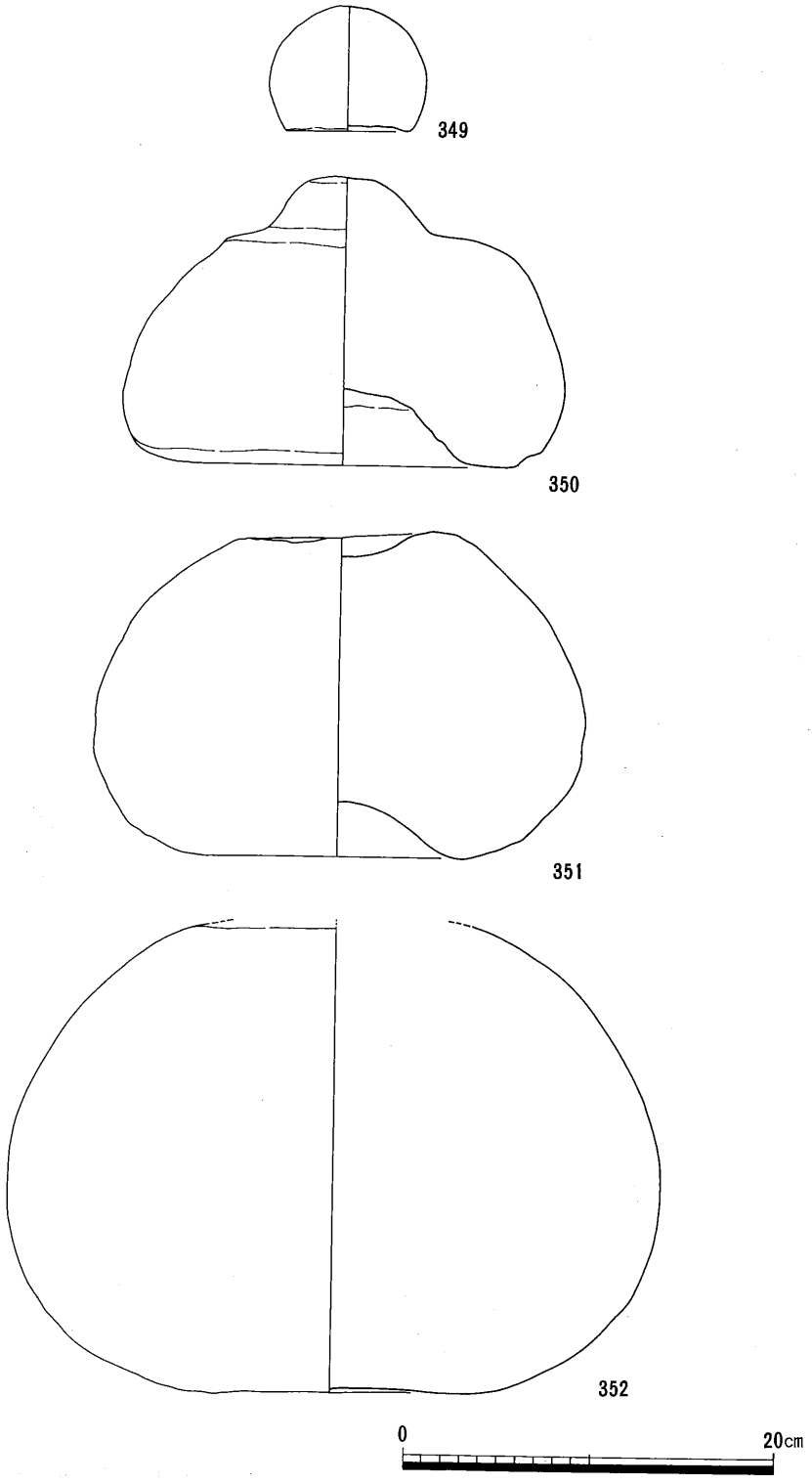
第284図　ＳＫ04出土遺物実測図③



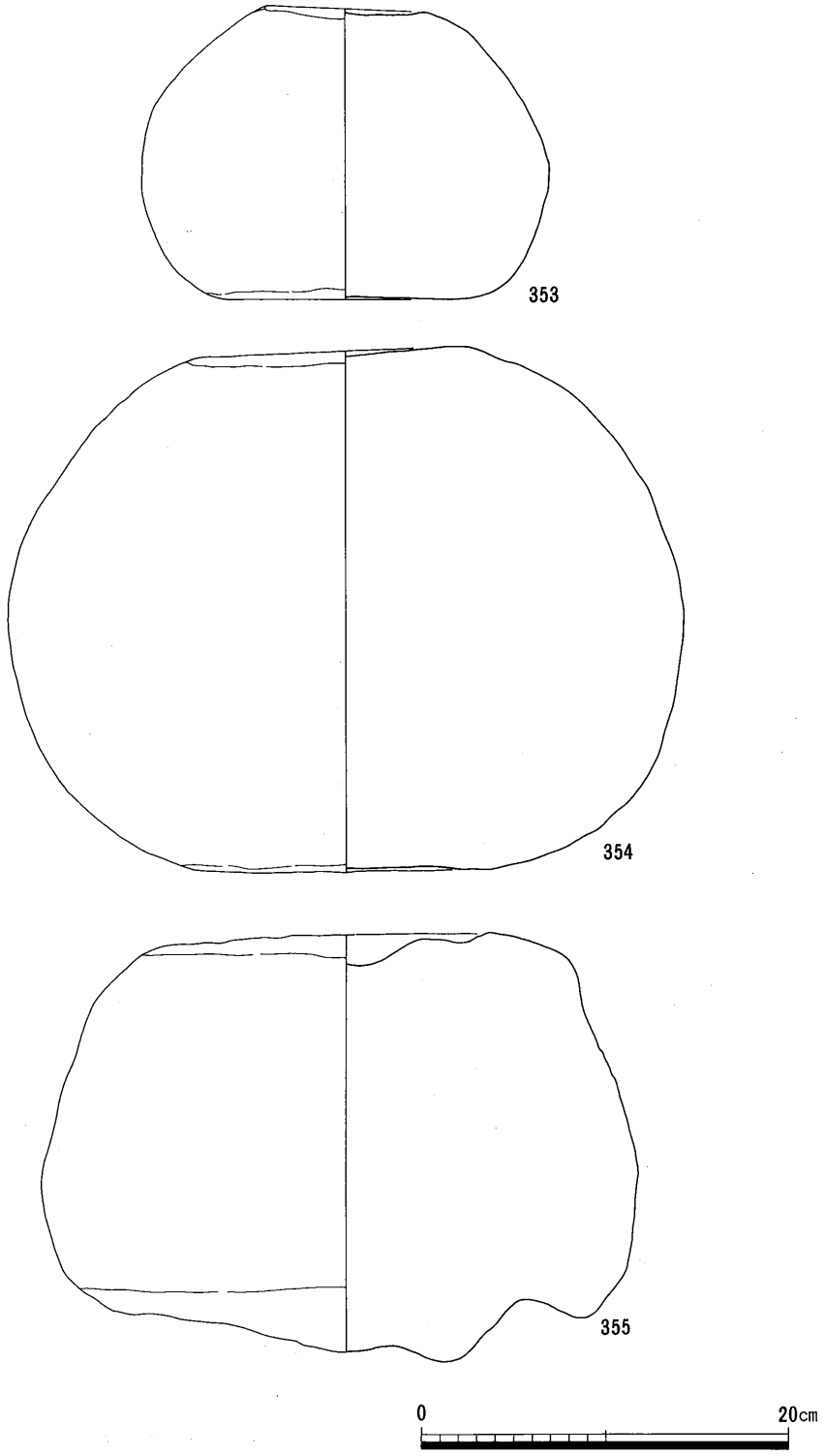
第285図　ＳＫ04出土遺物実測図（石製品）①



第286図　ＳＫ04出土遺物実測図（石製品）②



第287図　ＳＫ04出土遺物実測図（石製品）③



第288図　ＳＫ04出土遺物実測図（石製品）④

SK05

SK05は調査区南部で検出された。東西に長い土坑である。規模は東西約7.3m、南北約3.3m、深さ0.27mのもので、拳大～人頭大の河原石が少量検出された。出土遺物は土師質土器を主体としているが出土量はあまり多くない。

356は土師器の椀である。底部に断面長方形の高台が付いており、体部はやや内彎気味に外上方に延びる。

357は東播系のこね鉢である。口縁部を肥厚させ、上下にやや拡張する。

358・360は土師質土器の羽釜である。358は鍔がかなり退化しているが立ち上がりは内上方にしっかり延びている。360は羽釜の脚である。

359・361～364は土師質土器の擂鉢である。口縁部が内方にかなり屈曲するものとあまり屈曲しないものがある。5～12本を一単位とする条溝が間隔を開けて内面に施されている。体部外面には指頭痕が顕著に見られる等の特徴がある。361は体部がやや内彎気味に外上方に延び、口縁部が内方にかなり屈曲するものである。体部内面には13本一単位の条溝が間隔を開けて施されている。外面には体部最下部に板ナデが、それ以外には指頭痕が顕著に認められる。

SK05は東播系のこね鉢より14世紀前半頃のものと思われる。

SK06

SK06は調査区南東部で検出された土坑である。規模は東西3.52m、南北2.92m、深さ0.48mのもので、拳大～人頭大の河原石が多量に検出された。

365～369は土師器の小皿である。底部は糸切りされているものとヘラ切りされているものがある。体部は直線的かやや内彎気味に外上方に延びる。

370～373は土師器の坏である。底部は糸切りされているようである。体部は直線的に外上方に延びる。法量にやや差が認められる。

374・375は土師器の椀である。底部に断面三角形状の高台が付くものと粘土紐を貼り付けたような高台が付くものがある。後者は瓦質土器の可能性が考えられる。

376・377は畿内産の瓦器椀である。377は底部に断面方形の高台を持つ。

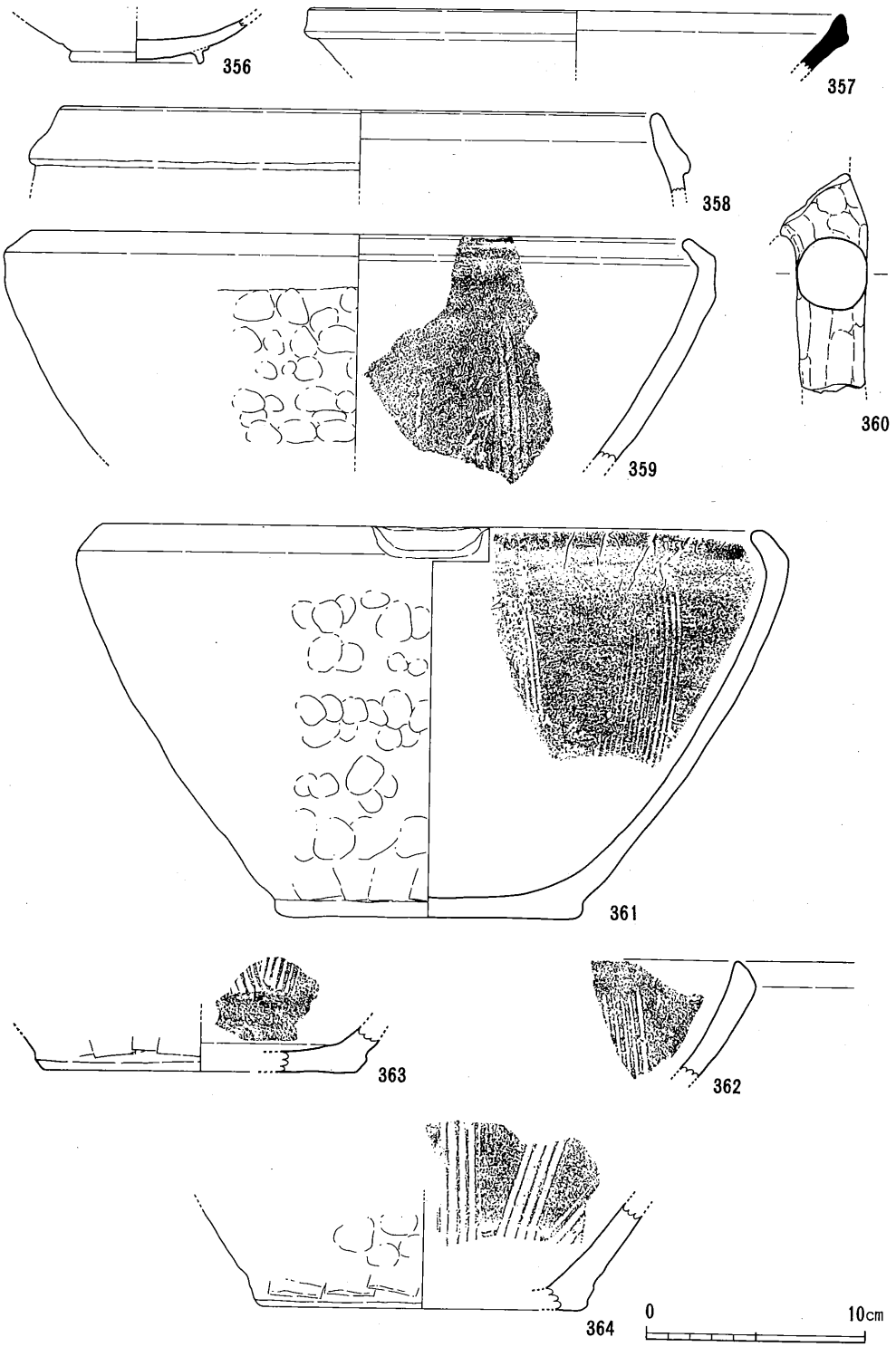
378・379は東播系のこね鉢である。口縁部はやや肥厚させ、上部は小さく摘み出す。体部は直線的に外上方に延びる。

380は土師質土器の擂鉢である。内面に10本一単位の条溝が間隔を開けて施されている。体部外面最下部にはヘラ削りが認められる。

381は土師質土器の羽釜の脚である。

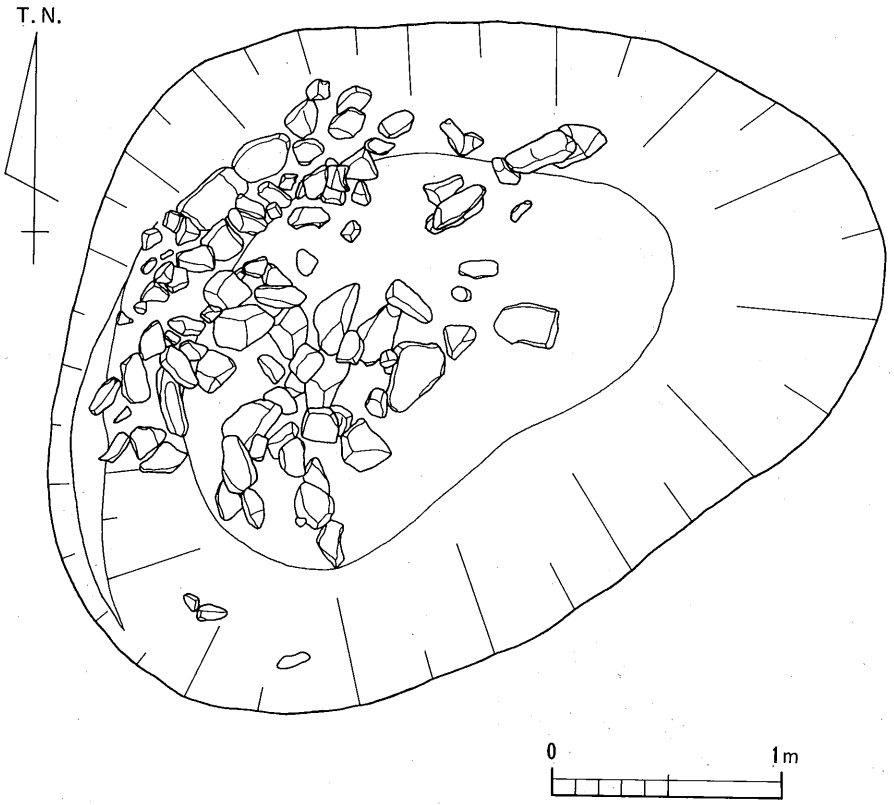
382は土錘である。紡錘形を呈しており、外面には指ナデが顕著に認められる。

SK06は畿内産の瓦器椀より13世紀末頃と考えられる。

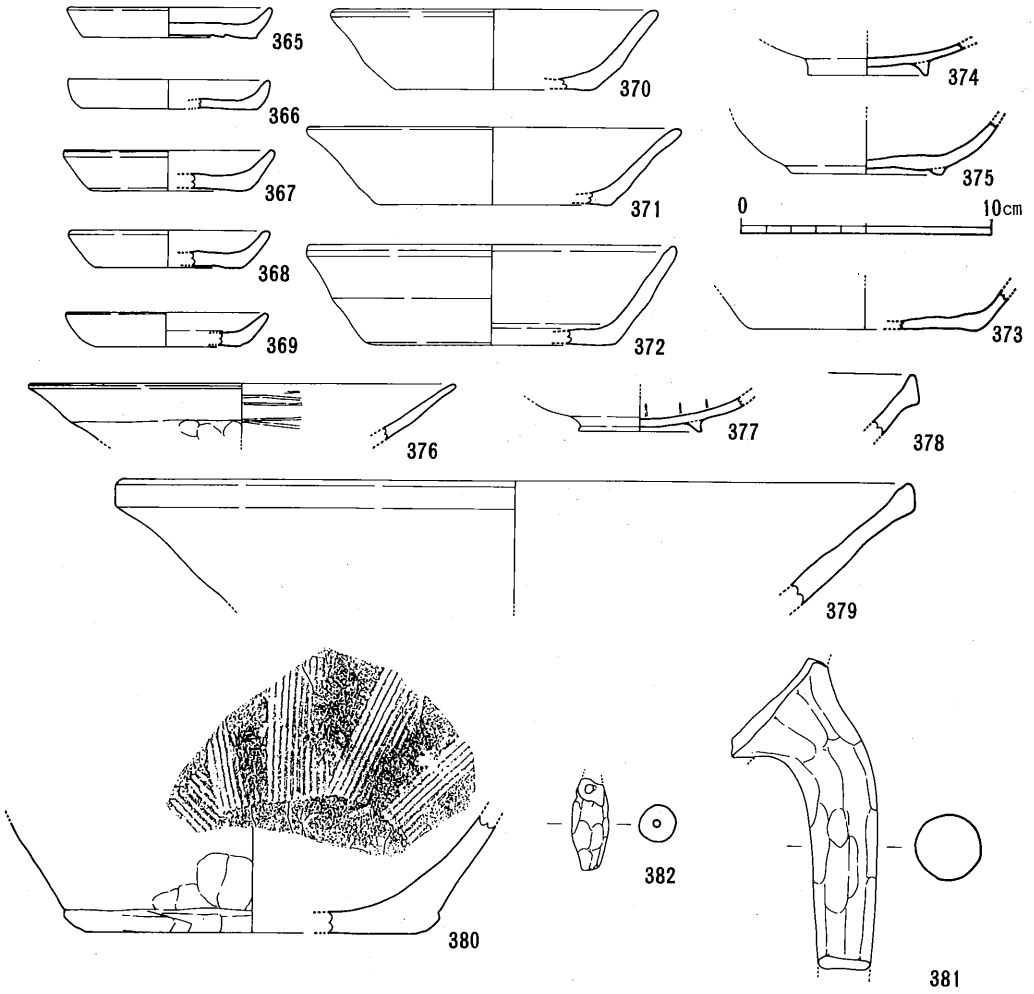


第289図　ＳＫ05出土遺物実測図

第290図　ＳＫ05平面図



第291図　ＳＫ06平面図



第292図　ＳＫ06出土遺物実測図

SK07・08

SK07・08は調査区南西部で検出されたものである。規模は溝状の細長い土坑で南北にほぼ平行して検出された。あまり深いものではないが多量の遺物が出土している。

SK07

383～388は土師器の小皿である。底部調整にはヘラ切りと糸切りが認められる。体部の形態には３タイプがあるようである。

389～394は土師器の坏である。底部は全て糸切り調整されている。体部の形態は口縁端部がやや外反するものが多いようである。

395～397は土師器の椀である。395・396は断面三角形状の高台を持ち、397は断面方形の高台を持つものである。

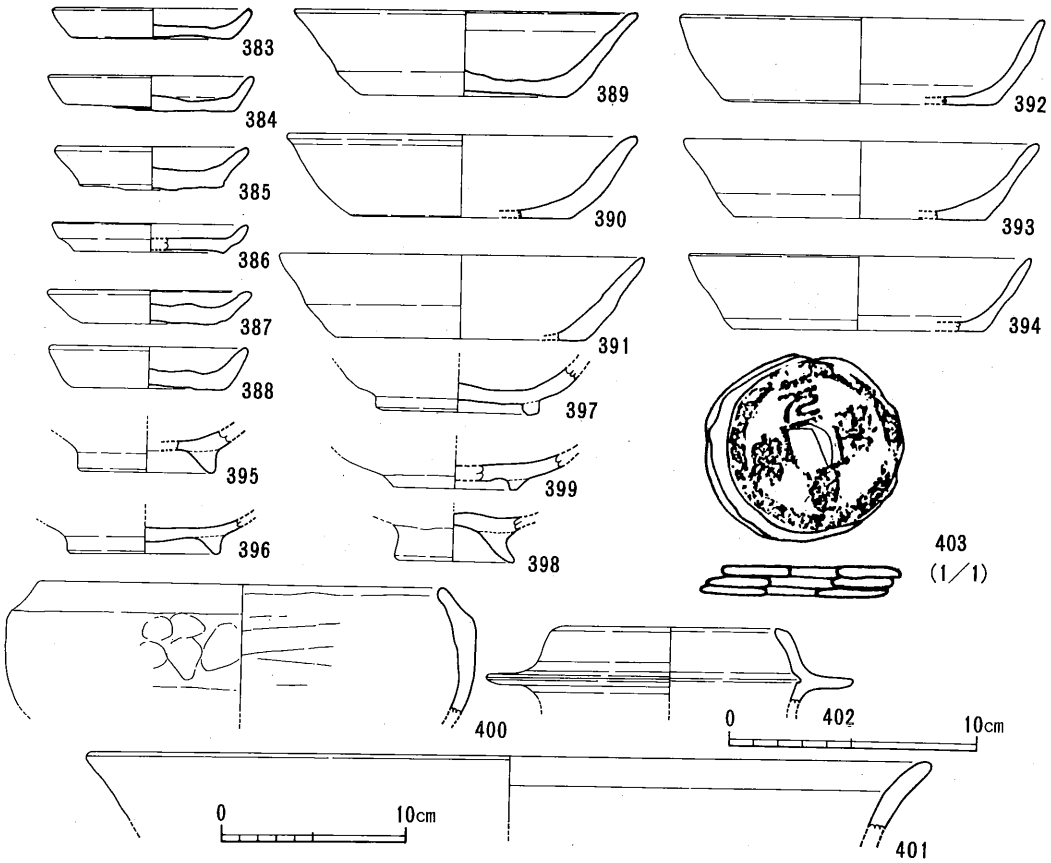
398は脚付きの小皿と思われる。底部に外方に踏張るしっかりした高台が付く。

399は瓦質土器の椀である。底部に低い高台が付く。

400・401は土師質土器の土鍋である。口縁が内方に屈曲するものと外方に屈曲するものがある。

402は瓦質土器の羽釜である。小型のもので、外方にしっかりのびる鍔とやや内傾する立ち上がりが付く。

403は銅銭である。3枚重なって出土した。その内2枚は錆により癒着したままで、「○平元寶」、「元豊○寶」（北宋銭・1078年）と読むことができ、宋銭であることがわかる。



第293図　ＳＫ07出土遺物実測図

SK08

404～410は土師器の小皿である。底部調整にヘラ切りと糸切りが見られる。体部形態にも3タイプあるようである。

411・412は脚付きの小皿である。底部に外方に踏張った脚が付いている。

413～420は土師器の坏である。底部は413以外は全て糸切りされている。体部はやや外反するものが多い。

421は土師器の椀である。底部に断面方形の高台が付いている。

422～424は畿内産の瓦器である。422は小皿で底部外面に指頭痕が顕著に見られる。椀は底部

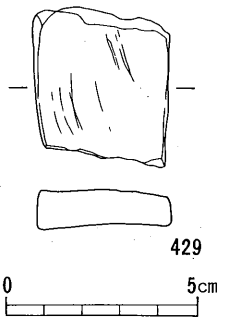
に断面三角形状の小さい高台が付く。423はやや深目の椀で体部外面に指頭痕が内面にはヘラ磨きが施されている。

425は東播系のこね鉢である。口縁部をやや肥厚させて上部を小さく摘み出すものである。

426・427は土師質土器の土鍋である。426・427とも口縁部が内方に屈曲するが427は口縁部下に穿孔が施されている。体部外面には指頭痕が施されている。

428は刀子である。先端部が欠損しているため全長は不明である。

429は砂岩製の砥石である。全面を磨ぎ面としている。

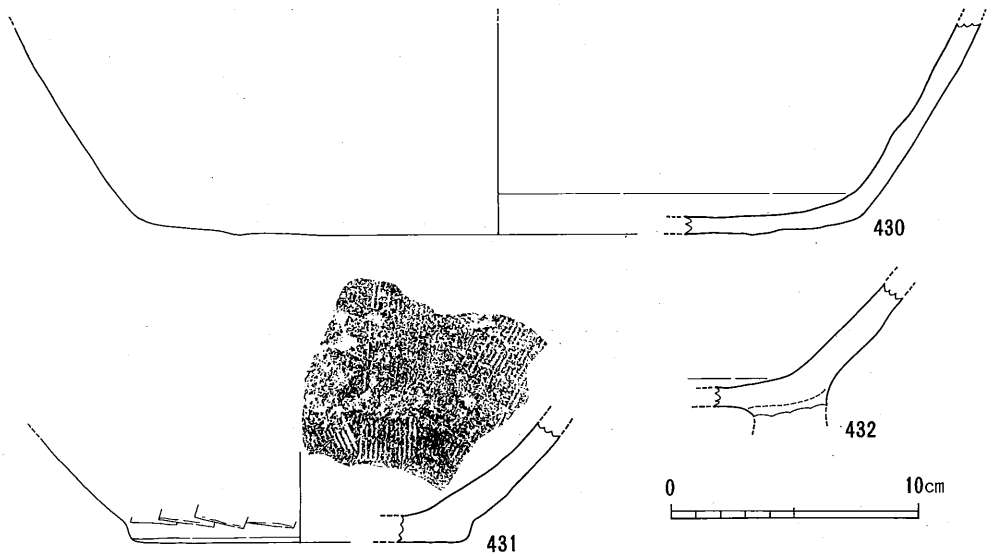


第294図
SK08出土遺物実測図（石製品）

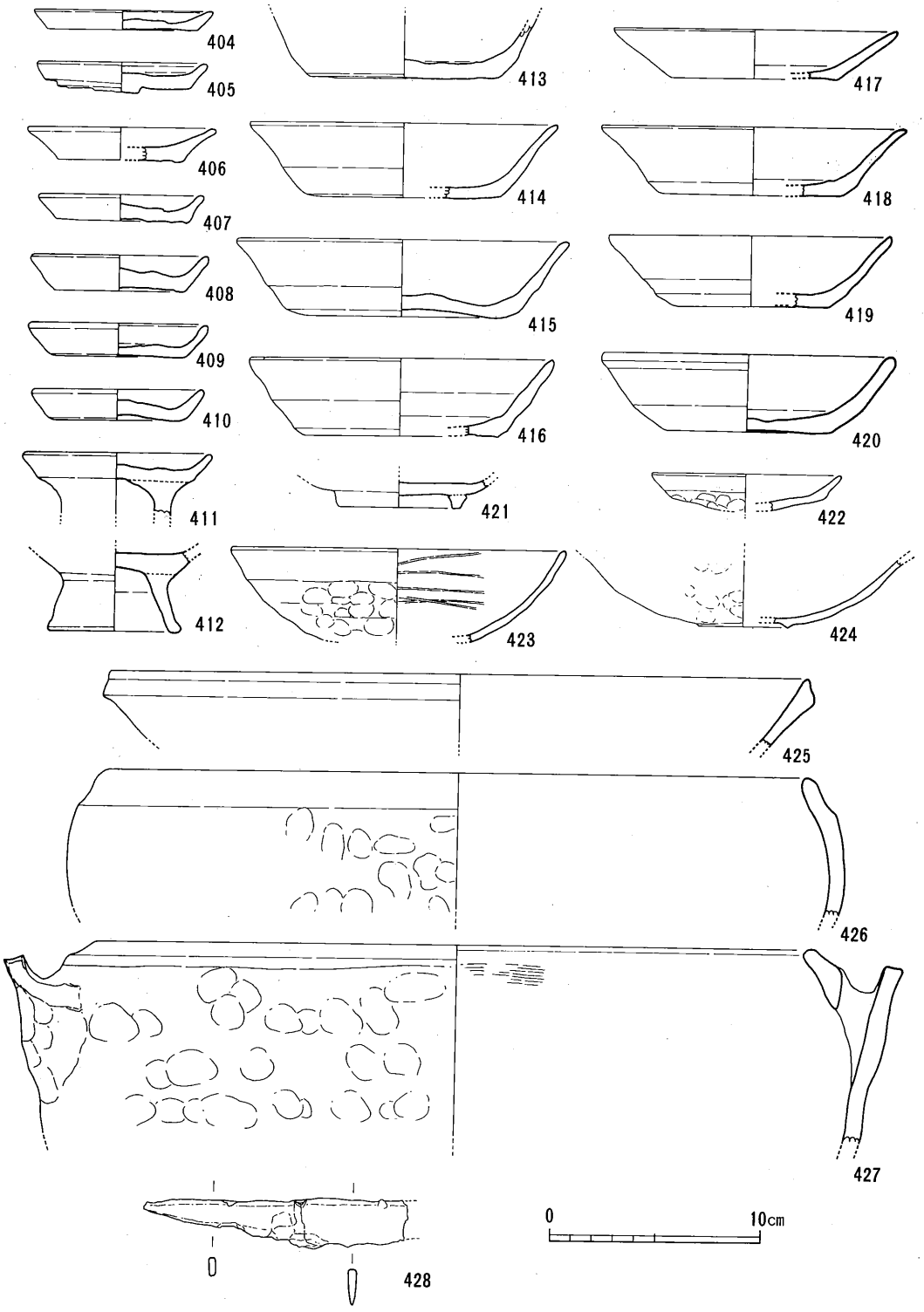
SK10・11

SK10・11は城岡地区の丘陵部の調査区から一段下がった調査区（O－8）で検出された土坑である。検出規模はSK10が直径0.8mのほぼ円形を呈し、深さは0.19mを計る。SK11はSK10に北部を切られてはいるが長幅1.46m、短幅1.0mの楕円形を呈し、深さ0.26mを計る。

430はSK10から出土した土師質土器のおそらく火鉢の底部と思われる。底部はほぼ平らに作られており体部は直線的に外上方に延びるものである。431・432はSK11から出土したものである。431は土師質土器の擂鉢の底部である。体部外面最下段には板ナデ痕が顕著に見られ、内面には櫛描による条溝が施されている。432は土師質土器の火鉢の底部と思われる。底部の縁辺部に脚が付くようである。



第294図　ＳＫ10・11出土遺物実測図

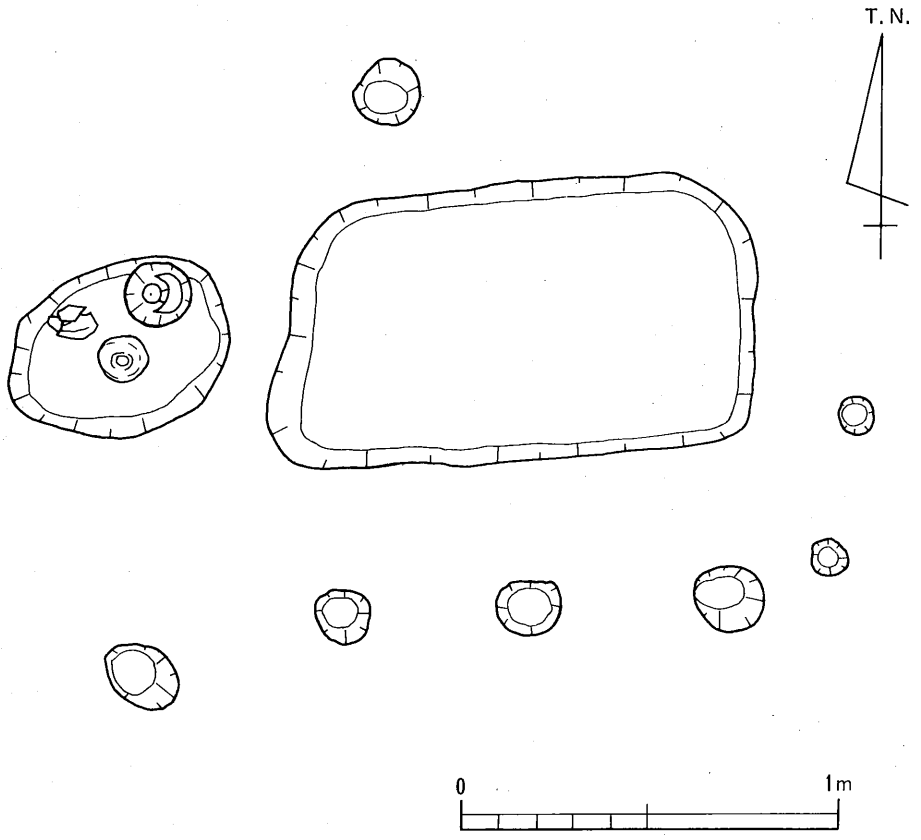


第296図　ＳＫ08出土遺物実測図

(4) 土壙墓

ST01

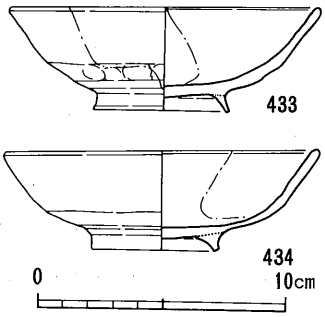
調査区北部で検出された。ST01は0.74×1.24mの長方形状を呈しており、すぐ西側に供献土坑を伴っていた。また南側と東側では土壙墓を画するかのように柵列が検出され、同時期と思われる掘立柱建物が建っていたと思われる。



第297図　ＳＴ01平面図

433・434は土師器の椀である。433は底部に細い高台が付き、体部は内彎気味に外上方に延びるもので口縁端部は丸くおさめている。体部外面下半に指頭痕が顕著に施されている。434は底部に断面三角形の高台が付き体部は中央で外上方に屈曲する。2点とも薄手で硬質に作られており、所謂吉備系土師質土器（早島式土器）と思われる。

時期は13世紀末～14世紀初頭頃のものと考えられる。

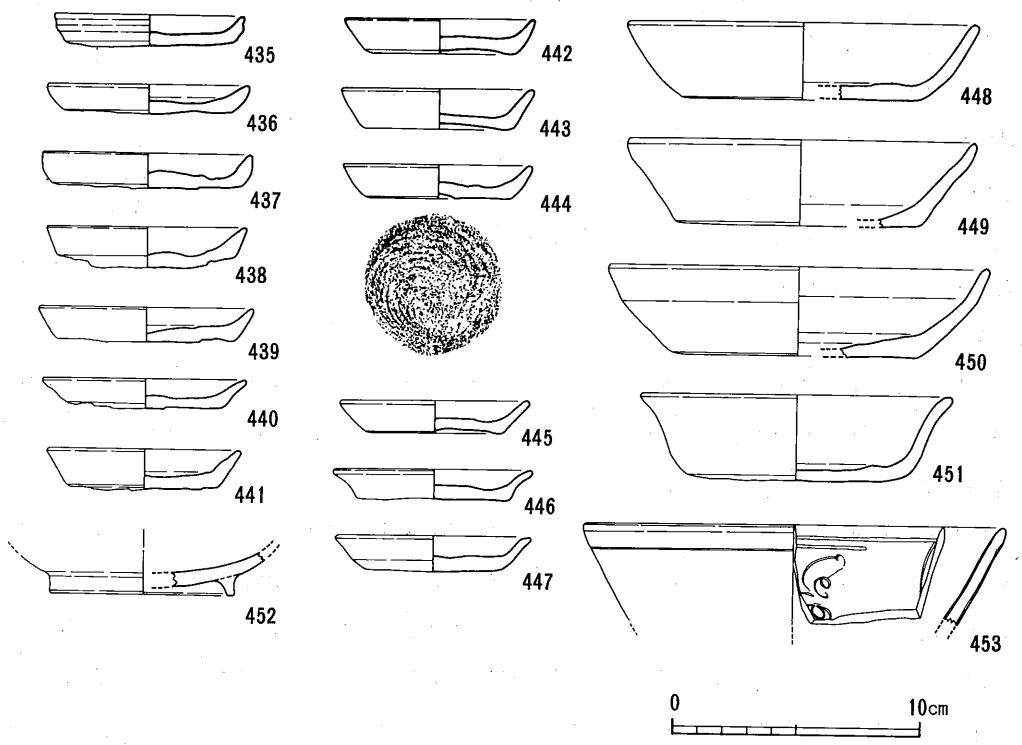


第298図　ST01出土遺物実測図

(5)　不明遺構

土器集中

O－22のグリッドを中心として土師器の小皿・坏が多量に出土している。その中でも土師器の



第299図　土器集中出土遺物実測図

小皿が多いようである。出土遺物が遺構に伴うものかどうかは不明である。

435～447は土師器の小皿である。底部切り離し手法にはヘラ切りと糸切りがあり、体部の形態にはやや内彎するタイプと直線的なタイプと外反するタイプの3種類がある。

448～451は土師器の坏である。底部切り離し手法は糸切りで体部は小皿で見られた3タイプが坏でも認められるようである。

452は土師器の椀である。底部に断面長方形の高台が付く。

453は青磁碗である。体部は直線的に外上方に延び口縁端部は丸くおさめられている。口縁部内面に2条の平行線が縦方向に片彫が見られ、体部内面には飛雲文が描かれている。全面に緑がかった透明釉が施されている。太宰府分類の龍泉窯系青磁椀Ⅰ類－4に当たるものと思われる。

時期は13世紀後半～末頃と考えられる。

SX01

調査区ほぼ中央で方形に溝を廻らす遺構を検出した。溝は幅0.3m、深さ0.1mでそれに区画された部分は東西1.8m×南北1.9mの規模を持つものである。溝からは遺物が出土していないので時期は不明であるが埋土が中世のものとほぼ同じことから同時期と考えてよさそうである。

かなり上部が削平されているため上部構造は不明であるが、おそらく溝に区画され、盛土を持つ墳墓の可能性が考えられる。

(6) 棚列状遺溝

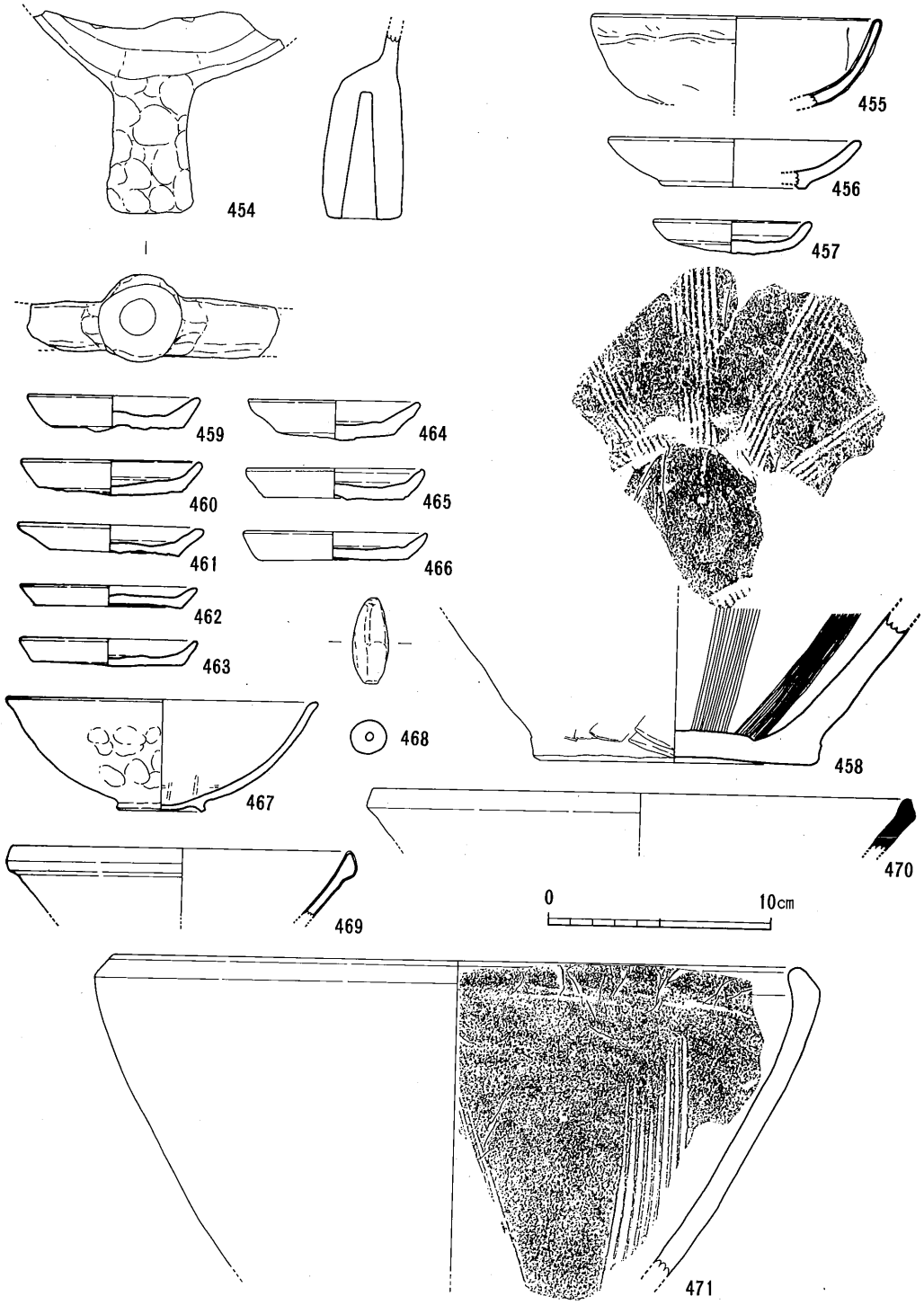
城岡地区では、棚列が掘立柱建物に伴うものと土壙墓に伴うものが11検出された。そのうち掘立柱建物に伴うものは7つであとは土壙墓（墓域）と居住域を画するものである。柱穴からは時期決定できる遺物は出土していないが、土壙墓が13世紀末～14世紀初であることから、おそらくこの頃のものと考えられる。

(7) 柱穴出土遺物

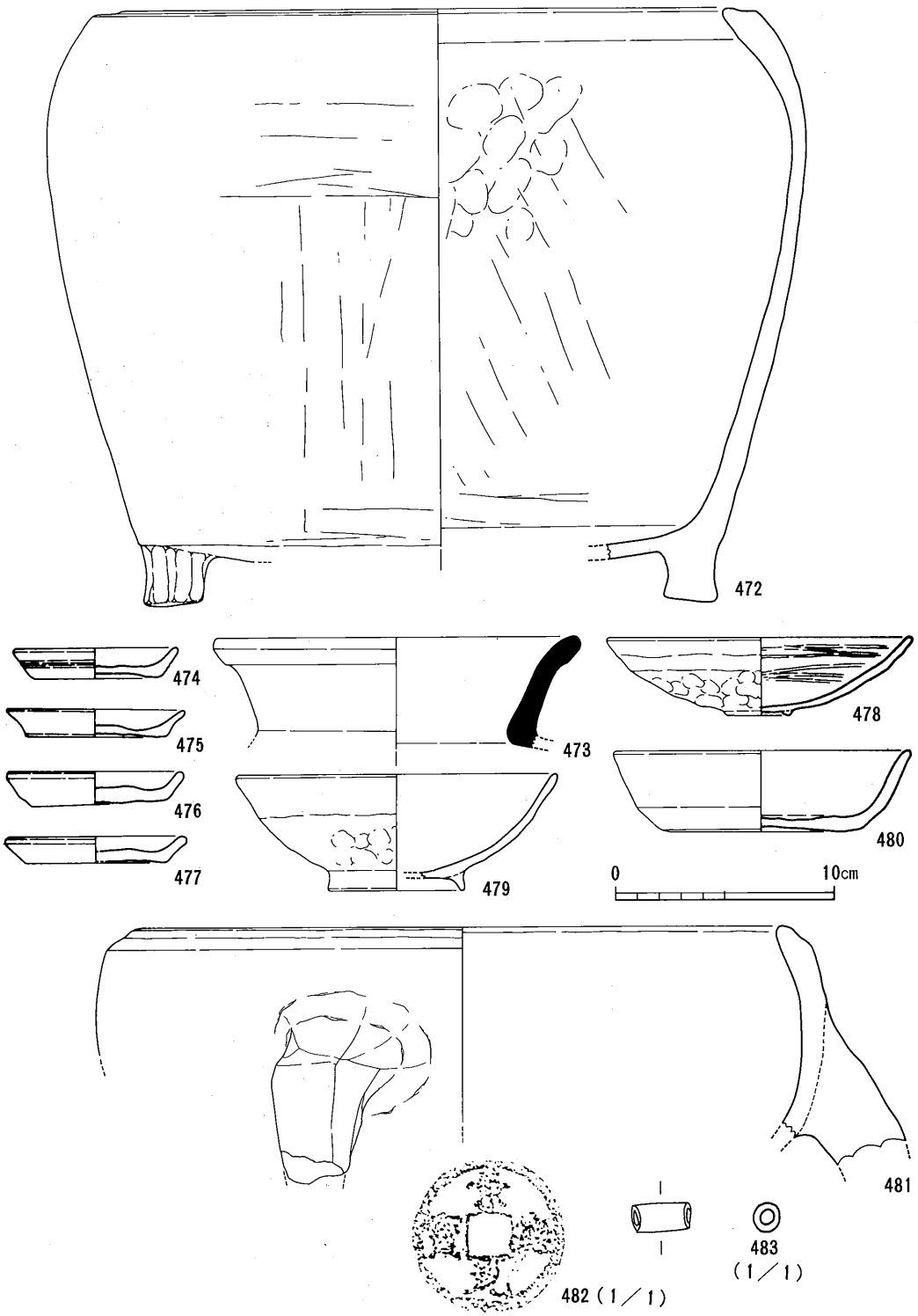
城岡地区において多数の柱穴が検出された。その中の一部は掘立柱建物および柵列を構成する柱穴であるがほとんどはそれらに伴わない柱穴である。柱穴より多数の遺物が出土している。

遺物の出土した柱穴はSP01～22である。

482はSP01から出土した銅銭である。「景徳元寶」（北宋銭・1044）である。454・483はSP02から出土したものである。454は把手付きの焙烙である。把手断面が円形に作られており、柄を差し込むためであろうか把手に穿孔が認められる。483は碧玉製の管玉である。455・456はSP03から出土したものである。455は輸入青磁碗である。体部は下半に屈曲部を持ち、上半は直線的に外上方に延びる。全面に緑釉が施されており、体部外面上半には波状の櫛描が認められる。456は陶器である。高台は断面方形に低く削り出されており体部は内彎気味に延びる。釉は発色が悪く、濁灰色を呈している。高台畳付け部分には施釉されていない。457はSP04から出土した土師器の小皿である。底部はヘラ切りされている。458はSP05から出土した土師質土器の擂鉢である。



第300図　柱穴出土遺物実測図①



第301図　柱穴出土遺物実測図②

459～462はSP06から出土した遺物で土師器の小皿である。全て底部ヘラ切りされている。463はSP07から出土した土師器の小皿である。底部はヘラ切りされている。464はSP08から出土した土師器の小皿である。底部はヘラ切りされている。465はSP09より出土した土師器の小皿である。底部はヘラ切りされている。466はSP13から出土した土師器の小皿である。底部はヘラ切りされている。467・468はSP11から出土した遺物である。467は畿内産の瓦器椀で底部に断面方形の小さい高台が付き、体部は内彎気味に外上方に延びるもので、口縁端部は外方に屈曲する。体部外面に指頭痕が内面にはヘラ磨きが見られる。468は土錘である。紡錘形を呈している。469はSP12から出土した輸入磁器である。口縁部外面が玉縁状を呈しており、白磁椀Ⅳ類－1に当たると思われる。470はSP13から出土した東播系のこね鉢である。口縁端部を内方に屈曲させている。471はSP14から出土した土師質土器の擂鉢である。口縁端部を内方に屈曲させている。体部内面には一単位間を開けて条溝が施されている。472はSP15から出土した土師質土器の火鉢である。底部に低い円形の脚が数本付いていたようである。体部はやや内彎気味に上方に延び口縁端部は内方に摘み出している。体部内外面には板状工具によるなでが施されている。473はSP16から出土した遺物である。須恵器の口縁部である。口縁端部は外方を丸く肥厚させている。474はSP17から出土した土師器の小皿である。底部は糸切りされている。475～477はSP18から出土したものである。全て土師器の小皿で475が底部ヘラ切りされている以外は、底部は糸切りされている。478はSP19から出土した畿内産の瓦器である。底部に三角形状の小さい高台が付くもので体部は内彎気味に外上方に延びる。体部外面には指頭痕が、内面にはヘラ磨きが認められる。479はSP20から出土した土師器の椀である。底部に細長い高台が付き、体部は内彎気味に延びる。480はSP21から出土した土師器の坏である。底部は糸切りされている。481はSP22から出土した土師質土器の土鍋である。3本の脚が付いている。

(8) 包含層出土遺物

土師器

484～513は小皿である。底部切り離し手法にヘラ切りと糸切りの2種類が見られる。484～499は底部がヘラ切りされており、500～513は底部が糸切りされている。器高にはやや深目のものがある。体部形態には内彎するものと直線的に延びるもの外反するものの3タイプが見られる。

514は中型の坏である。底部は糸切りされており、体部は直線的に外上方に延びる。

515は高台付きの坏である。細く長い長方形を呈した高台が付いている。

516～519は脚付きの小皿である。脚径は半径3～4㎝のものである。

520～533は坏である。底部切り離し手法には糸切りとヘラ切りが認められる。坏でも体部形態は小皿で確認された3タイプがあるようである。

534は円盤状高台の椀である。底部は糸切りされており、体部は直線的に外上方に延びるようである。

535～544は椀である。底部に断面二等辺三角形状の高台が外方に踏張るように付くものが多いが、高台の形態を細かく見ると数種類に分けられるようである。535は断面三角形状の低い高台が付く。底径がかなり小さいものである。543は底部ヘラ切りされた坏に断面長方形の高台が外方に踏張って付いているものである。544は底部と体部の境に稜を持つもので、底部の端に断面方形の低い高台が付き、体部は外上方に直線的に延びる。やや古手の様相を持っている。10世紀前半頃のものか。

十瓶山系瓦質土器

545～549は瓦質土器の椀である。底部に断面三角形状や方形を呈した低い高台が付く。器壁はやや厚めに作られており、全て焼成の悪い須恵器のようである。

瓦器

550～564は畿内産の瓦器である。550～553は瓦器の小皿で、底部に指頭痕が顕著に見られる。554～564は瓦器の椀である。口径がやや小さいものもあるがほぼ14.5㎝程度のものが多く、器高は低いものと高いものの2種類あるようである。体部外面には指頭痕が顕著に施されており、体部内面には横方向に、見込み部には平行のヘラ磨きが施されている。高台は細い粘土紐を貼り付けただけの三角形か方形を呈している。

土師質土器

565～573は土鍋である。口縁部形態で2タイプに細分できる。ひとつは口縁部が外方に屈曲するもので、もうひとつは体部が内彎気味に延び口縁部が内方に屈曲するものである。565～568は口縁部が外方に屈曲し、569～573は口縁部が内方に屈曲する。565は土鍋のなかでもやや特徴的なもので体部が内彎し口縁部が短く外方に屈曲する。573は口縁部に穿孔がある。

574・575は土鍋か羽釜の脚である。

土鍋には底部に574・575のような脚を持つものと573のような上方から釣り下げられるようなものがある。

576・577は口縁部が短く上方に延び体部上半に穿孔を持つ釜である。

578～585は擂鉢である。口縁部の形態で2タイプに分けられる。ひとつは体部が内彎気味に上方に延び、やや拡張させる場合もあるがそのまま終わらせるもので、もうひとつは口縁部を内方に屈曲させるものである。体部内面には一単位の間隔を開けて条溝が施されている。条溝は5～11本を一単位とするものが多いようである。

東播系こね鉢・甕

586～615は東播系のこね鉢である。口縁部の形態で大きく2タイプに分けられる。口縁が拡張せず体部から口縁端部がやや屈曲し、上方に摘み上げられたものと、口縁が拡張されるものである。後者のタイプは下方だけに拡張するものと上下に拡張するものがある。このような口縁端部の拡張差は時期差かと考えられる。しかし同時代でも口縁端部にバリエーションがあることは生産地の窯の違いによるものか、あるいは製作集団、その中でも個人差によるものか。時期は609を除く以外は13世紀後半頃のものと思われる。609は14世紀頃のものと思われる。615は小型のこね鉢である。体部はやや内彎気味に外上方に延び、口縁部に至り端部を下方に摘み出している。底部は回転糸切りされている。大型のこね鉢の底部も同様に回転糸切りされている。

618～620は東播系の甕である。618・619は頸部が外反し口縁部は上端に凹線を持つものと口縁端部が上下にやや拡張するものがある。620は甕である。体部外面に平行叩きが密に施されている。体部中央には平行叩きが綾杉状に施されている。618～620は全て焼成が瓦質であるが口縁部の特長、体部の叩き調整などから東播系の甕であることがわかる。

瓦質土器

616・617は瓦質土器である。616は亀山焼のこね鉢と思われる。口縁端部は体部からそのまま終わらせ、上方に面を残している。617は亀山焼の体部と思われる。体部外面に4～5㎜角の格子目叩きが密に施されている。

623は瓦質土器の鍋である。口縁部が「て」の字状に屈曲しており口縁端部はやや拡張されている。体部外面には縦方向の刷毛目が、内面には横方向の刷毛目が施されている。全体に器壁は薄く作られている。

624は瓦質土器の壺である。口縁部は短く上方に屈曲し、端部は丸くおさめている。口縁内面にはヘラ削りが施されている。体部外面には蓋をとめたものであろうか漆喰が付着している。

滑石製製品

621は滑石製の石鍋である。しっかりした鍔が口縁部外面につき口縁端部は太くしっかり作られている。体部外面には鑿痕が顕著に見られる。622は滑石製の石鍋を転用した硯である。破片のため形態は不明である。

その他・土師質土器

625・626は土師質土器の竈である。上端の部分で火避けの鍔が付いている。

627は用途不明土製品である。

628～632は土錘である。628～630は紡錘型の土錘である。631は中央に穿孔があるが土錘ではないかもしれないものである。632は大型の土錘である。

633はおそらく火鉢の脚と思われる。短い円柱状のものが底部と体部の境に付いている。

634は土製の杓の注口部と思われる。

輸入陶磁器

635～648は輸入白磁である。635～647の白磁碗は口縁形態により3タイプ（635～637、638～642、644・645）に分けられる。まず第一の635～637のタイプは体部がやや内彎気味に外上方に延び、口縁端部を丸くおさめるもので体部内面下半部に沈線、上半部に2条の沈線が施されている。釉は薄く、内面と体部外面下半部まで施釉されている[註1]。太宰府編年の白磁椀Ⅴ類－1に相当するものと思われる。これ以後輸入中国陶磁器については太宰府の型式分類と編年に則して行なう。638～642のタイプは体部がやや内彎気味に外上方に延び、口縁部を外方に屈曲させ端部上面を水平にするもので、体部内面下半部と上半部に浅い沈線を施している。体部外面のヘラ削りは口縁部近くまでされている。釉は薄く、内面と体部と高台部の境に近い付近まで施釉されている。643は細く高く、直立した高台を有するもので638～642に伴う高台かと思われる。白磁椀Ⅴ類－4に相当すると思われる。644・645のタイプは体部がやや内彎気味に外上方に延び、口縁部を玉縁にするもので玉縁の大きいものと小さいものがある。内外面に施釉されている。646・647は644・645の高台かと思われる。高台は幅広に浅く削り出されるために器肉が厚くなっている。体部下半はヘラ削りされている。内面に施釉されているが、見込み部の釉は輪状に掻き取られている。白磁椀Ⅳ類－1に当たる。648は白磁皿である。体部はやや内彎気味に外上方に延び、口縁部を外反させている。体部外面下半部までヘラ削りしている。釉は体部中程まで施されている。白磁皿Ⅲ類に当たるものと思われる。649～667は輸入青磁碗・皿である。青磁碗660・661、皿662～667が同安窯系のもので、それ以外は龍泉窯系のものと思われる。649・650は青磁碗である。体部はやや内彎気味に外上方に延び、口縁部は少し外反している。釉は青味を帯びた緑色のもの（649）と黄味を帯びた緑色のもの（650）がある。649は内面に蓮華文を片彫し、途中に蓮華の葉を横から見た模様を施す。650は内面に蓮華文と上半部に浅い沈線を施す。649は龍泉窯系青磁椀Ⅰ類－2・bに当たり、650はⅠ類－2に当たる。651・652は体部が直線的に外上方に延び、端部は丸くおさめている。内外面施釉されており、濃い緑色のもの（651）と青味を帯びた緑色のもの（652）がある。口縁部内面には片彫による沈線が1～2条施され、縦方向の沈線を持つもの（652）もある。651は内面に飛雲文が施されている。652は口縁部に輪花を施している。651は龍泉窯系青磁椀Ⅰ類－4・aに当たり、652はⅠ類－4・bに当たる。653・654は649～652の底部と思われる。653は高台を長方形に削り出し、

釉は黄味を帯びた緑色で畳付け付近まで施釉されている。高台内面にも一部釉がかかっている。内面見込み部には片彫による模様が施される。654は幅広の浅い高台のために器肉が厚くなっている。釉は青味を帯びた緑色で高台畳付け付近まで施釉されている。655・656は外面に鏑連弁の模様を有する。釉は青味を帯びた緑色のもの（656）と濃い緑色を呈するもの（655）がある。龍泉窯系青磁椀Ⅰ類－5・bに当たる。657・658は外面に鏑連弁が形骸化した模様が施されており、やや時期が下り15・16世紀頃のものと思われる青磁碗である。659は龍泉窯系青磁皿である。底径は小さく体部中程で屈曲し、口縁部をやや外反させるものである。底部外面以外全面に青味を帯びた釉が施されている。内面見込み部には草魚が片彫されている。龍泉窯系青磁皿Ⅰ類－1に当たる。660～667は同安窯系の青磁である。660・661は青磁碗である。高台はしっかりしたものが削り出されている。体部はやや内彎気味に外上方に延びる。釉はやや黄味を帯びた緑色で、体部中程まで施釉されている。内面見込み部の釉を掻き取っているもの（661）と掻き取っていないもの（660）がある。体部外面には櫛目が施されている。662～667は同安窯系の青磁皿である。龍泉窯系青磁皿に比べて底部径が大きく、体部中位より下で屈曲する。内面見込み部にはヘラによる片彫と櫛によるジグザグ模様が施されている。同安窯系青磁皿Ⅰ類－1に当たる。

668は染付皿である。体部は内彎気味に外上方に延び端部で外方に屈曲している。口縁端部は輪花状を呈し、体部内外面に草花文が描かれている。器面全体に透明釉が施され、呉須は濃い青色に発色している。器面には貫入が著しい。

669は磁器の皿である。体部は内彎気味に外上方に延び口縁端部はやや外方に曲げている。口縁端部は輪花状を呈している。高台畳付け部分を除く全面に青味がかった透明釉が施されている。全面に貫入が著しい。

670は磁器である。高台は断面方形に削り出されている。釉は高台を除く全面にかけられており、内面見込み部には輪状に釉が掻き取られている。

671は胎土が陶器で、高台畳付け部分を除く全面に透明釉が施されている。京都系のものと思われる。

672は青磁鉢である。体部がやや内彎気味に外上方に延び、全面に濁緑色の釉が施されている。口縁端部は輪花状を呈しており、内面には輪花を一単位とする模様があり、外面は蓮弁状に仕上げられている。

673は青磁の鉢と思われる。高台は断面方形のしっかりしたものが削り出されており、高台畳付けを除く全面に釉が施されている。内面の釉は緑味がかった透明釉で外面は発色が悪く濁白色を呈している。

674は青磁の小碗である。体部はほぼ上方に延び口縁部で外方に屈曲する。釉は高台内面を除く全面に緑味を帯びた透明釉が施されている。体部内面には縦方向の片彫が認められ、外面には中央に圏線を持ちその上下に3本一単位の片彫が交互に配されている。

675～678は唐津系の陶器である。675は体部がやや内彎気味に外上方に延び口縁端部を外方に折り曲げたものである。釉は緑味を帯びた透明釉が施されている。676は口縁端部が上方に屈曲した所謂溝縁皿である。釉は発色が悪く緑白色を呈している。677は溝縁皿の底部である。釉は底部を除く全面に緑味がかった透明釉が施されており、内面見込み部には砂目積みの痕跡が認められる。678も溝縁皿と思われる。釉は発色が悪く濁白色を呈しており、体部外面上半と内面に施されている。

679～681は瀬戸・美濃系の天目茶碗である。高台を除く全面に黒茶色の鉄釉がかけられている。体部は内彎気味に外上方に延び、口縁端部を外方に折り曲げている。680は口縁端部の屈曲が弱いもので全面に白青色の強い鉄釉が施されている。釉の色調から唐津系のものかもしれない。

682は壺の体部かと思われる。焼成は陶器であり、外面にハート型の模様が施されている。

須恵器

683～698は須恵器である。683は坏身である。立ち上がりが上方にしっかり延びている。5世紀後半頃のものと思われる。684は坏蓋である。口縁端部を下方に短く屈曲させるものである.

685～689は底部に方形の高台を持つ坏身である。高台は底部の端に付き、外方に踏張って付くものとそうでないものがある。690～692は壺の底部と思われる。やや太めの高台を持ち、外方に踏張るように付けられている。693～695は甕である。大型のものと小型のものがあるようである。693は口縁が「く」の字に外方に延び、端部はそのままおわらせている。694は口縁部を丸くおさめるもので、695は外側に面を持たせるものである。696は小型の壺である。薬壺と思われ、口縁は短く上方に延びている。697・698は高坏である。697は体部中央に2条の突帯を持ち下半に櫛描波状文を持つものである。698は高坏の脚部である。スカート状に大きく広がり、脚端部は外方に摘み出している。

備前焼

699～702は備前焼の擂鉢である。699は体部内面に指ナデ痕を顕著に残すもので、口縁部外面は拡張されるが凹線は明瞭ではなく、口縁端部は上方に摘み出している。内面には条溝が一単位間を開けて施されている。口縁部外面のみ自然釉がかかっている。時期は二日市遺跡出土の擂鉢と口縁形態が類似することから備前焼Ⅵ期（17世紀中葉頃）と思われる[註2]。700は口縁部外面を拡張させ、2条の凹線を施し、内面には金具の櫛による条溝が施されている。口縁部形態から堺産の擂鉢の可能性が考えられる[註3]。701は口縁部外面を拡張させ2条の凹線を施している。内面には金具の櫛による条溝が密に施されている。外面拡張部だけに自然釉が施されている。時期は百間川当麻遺跡2土坑43出土の遺物[註4]と口縁形態が類似することから17世紀後半頃と思われる。702は口縁部を肥厚させ、外面拡張部には2条の凹線を施している。内面には金具の櫛による条溝が密に施されており、上端は指ナデされている。時期は江戸時代後期頃かと思われる。

瓦

703～708は瓦質の瓦である。703・704は軒平瓦である。703は瓦頭面に唐草模様と珠文を配しているが磨滅のために詳細はわからない。705は平瓦である。上面は指ナデされており、下面は3×10㎜角の格子の叩きを施している。706・707は軒丸瓦である。706は中央に大きめの巴文を配しその周りに珠文を配している。巴文は尾が細く長いもので二重に尾が重なっている部分がある。中世頃のものと思われる。707は中央に巴文を配し、その周りに珠文を配するものである。巴文は頭の大きいもので尾が短く、珠文は20個ほど配するものと思われる。近世頃のものと思われる。708は丸瓦である。外面は板ナデの後指ナデされており、内面は布目が残っている。端部に近い部分はヘラ削りにより薄く仕上げられている。

金属製品

709は小刀である。全長27.3cm、刃部20.1cm、柄部7.2cmである。710は金銅製の刀金具と思われる。

711は輸入銅銭で、「元祐通寶」（北宋銭・1086年）と思われる。

石製品

712は硯である。小片のため全形は不明である。

縄文土器

713～715は縄文時代晩期の土器である。713・714は突帯文系の土器である。頸部は外反気味に外上方に延び、口縁端部から少し間隔を開けて外面に刻み目突帯が付けられている。715は浅鉢の口縁である。

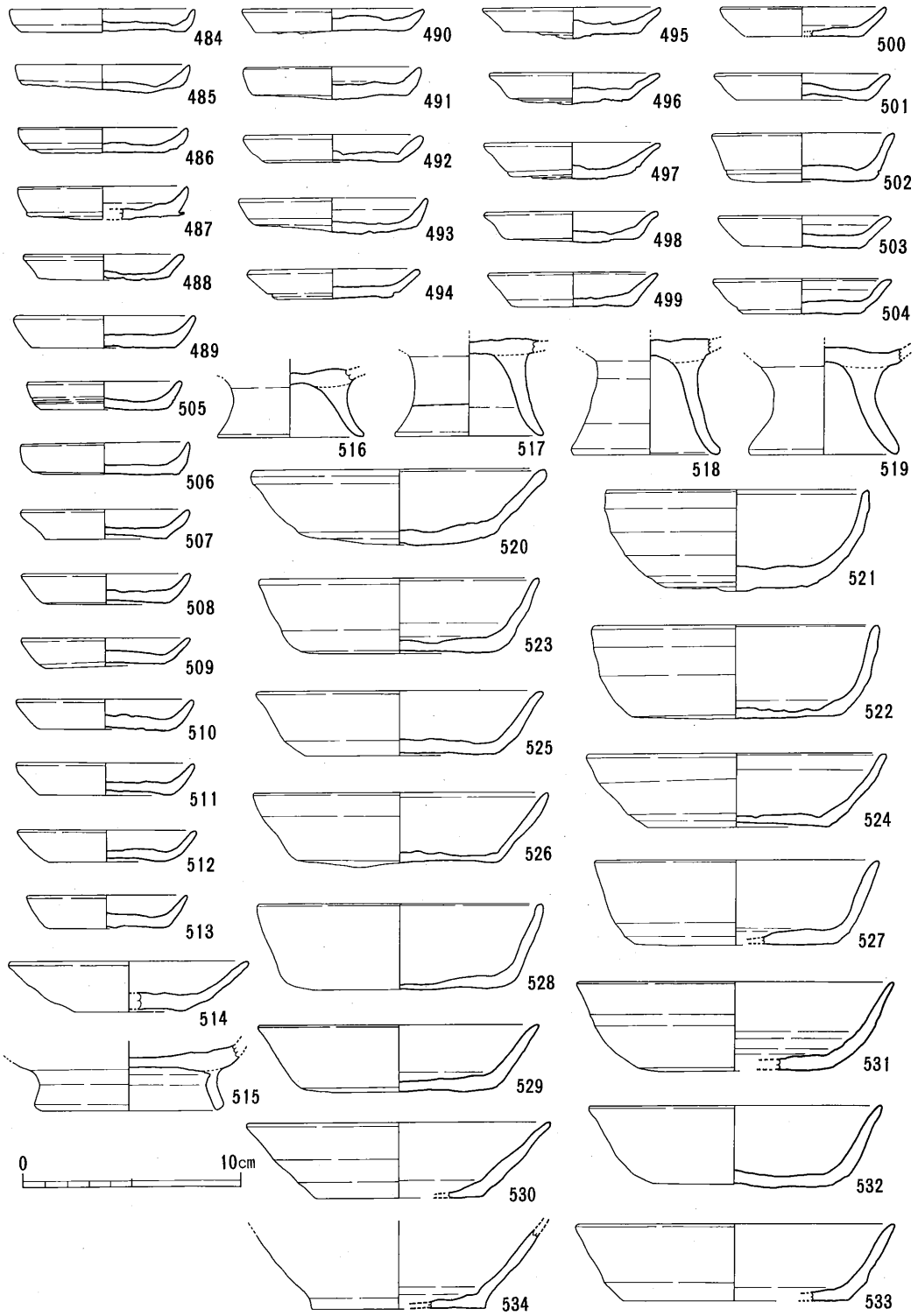
弥生土器

716～723は弥生土器である。716は弥生時代前期の壺である。体部上半に3条のヘラ描沈線が施されている。717は壺で口縁端部がやや上下に拡張され、外面に3条の退化した凹線が施されている。弥生時代中期末か後期初頭頃のものと思われる。718～720は甕である。口縁が短く外方に屈曲し、端部は外側を下方に少し摘み出している。721～723は底部である。しっかりした平底を持つ。724は高坏の脚である。脚部に3ヵ所穿孔が認められる。

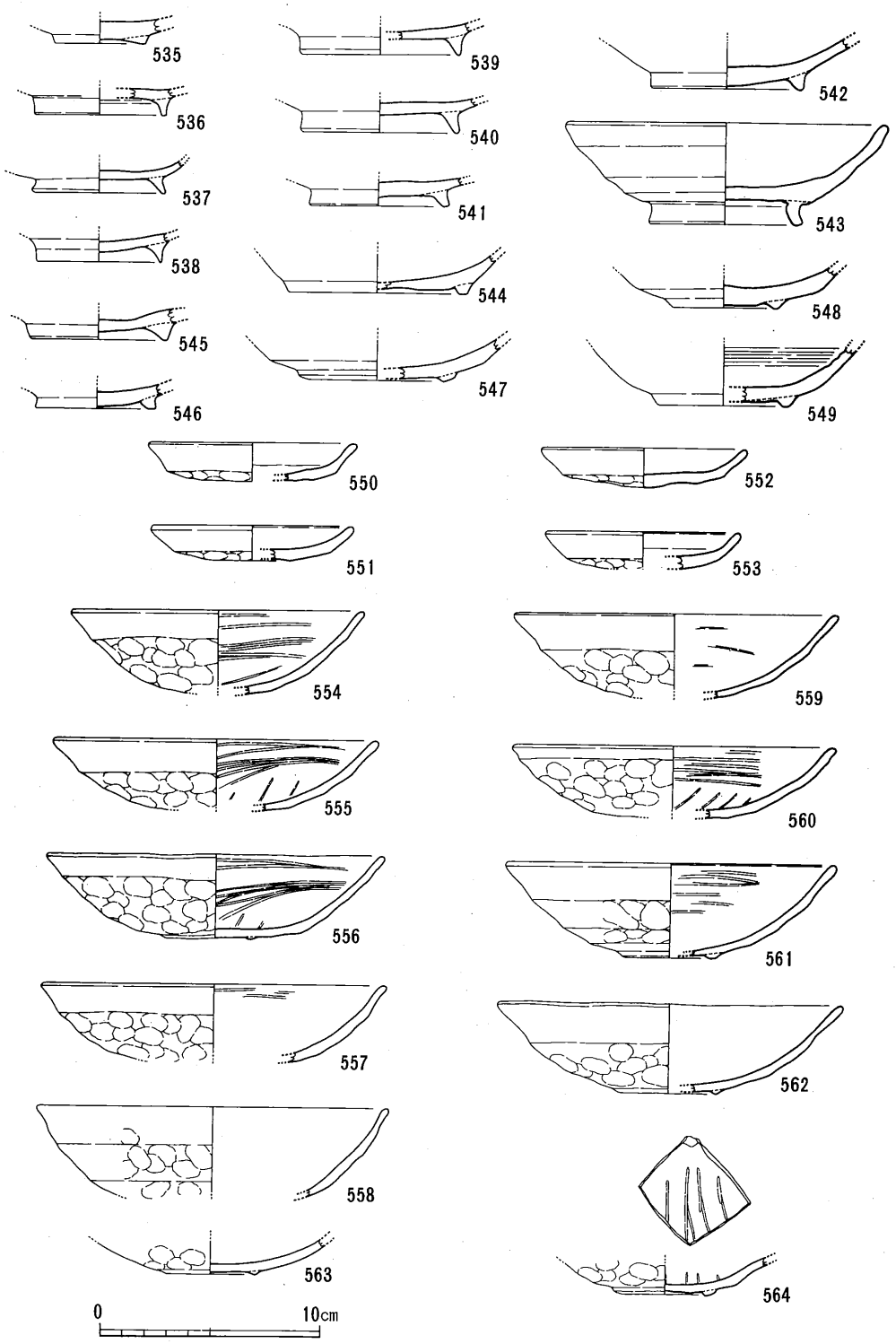
石製品

725～738は石製品である。725は石匙である。上部につまみが付き、左右に長い横長石匙である。下部に細かい調整を施し、刃部としている。726・727はスクレイパーである。728～730は打製石斧である。728・729は基部を欠損しており全形は不明であるが、先端及び側辺は調整が施されている。730は安山岩製の打製石斧である。側辺及び先端部に調整が施されており、先端部背面には磨滅痕が認められる。731は楔状石器であろうか。背部と刃部は細かい調整が施されている。732は凹み石である。上面中央に凹みが認められ、下面には磨滅痕が見られる。

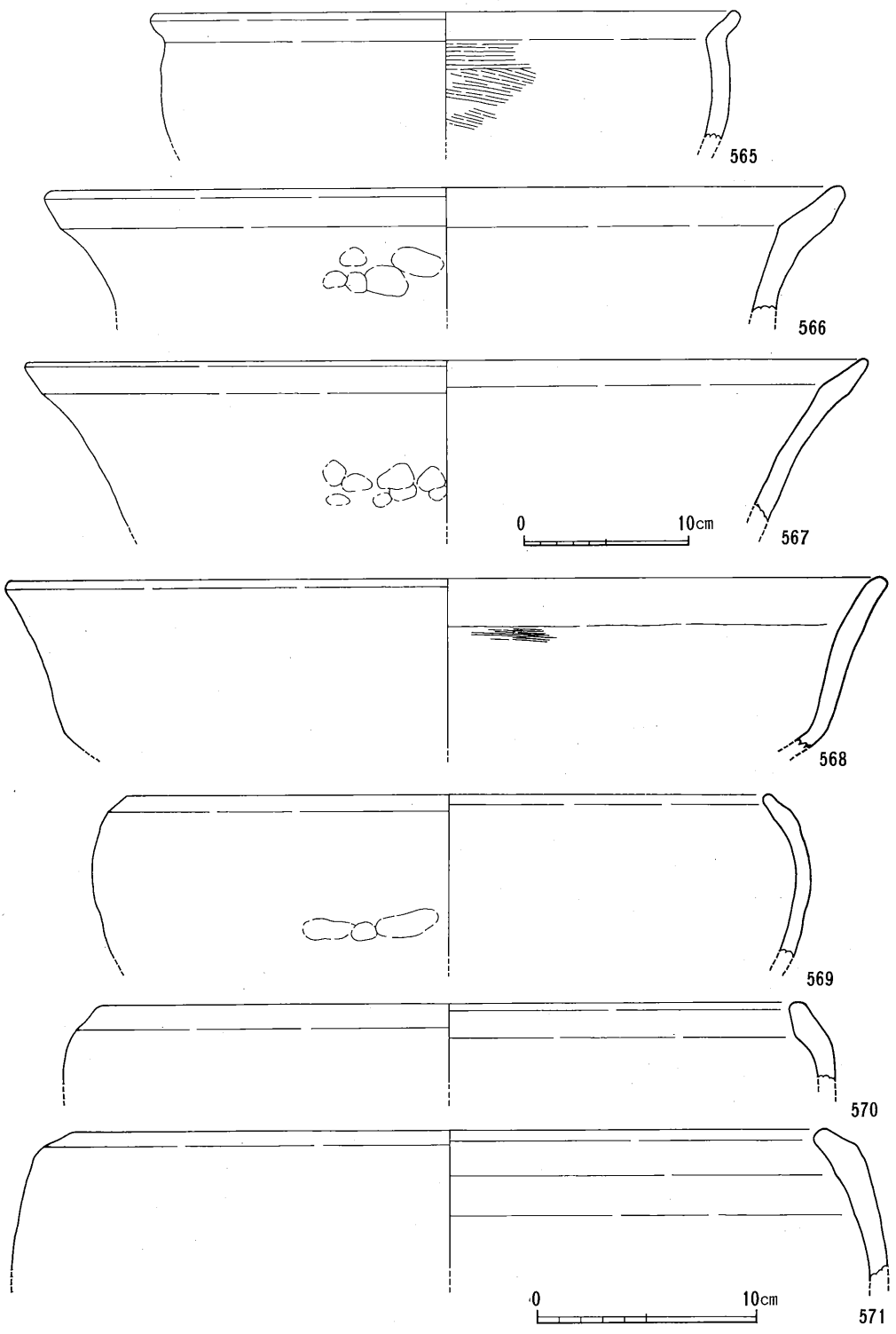
733～738は砥石である。735・736・737が安山岩で、733・734・738が石英粗面岩製である。



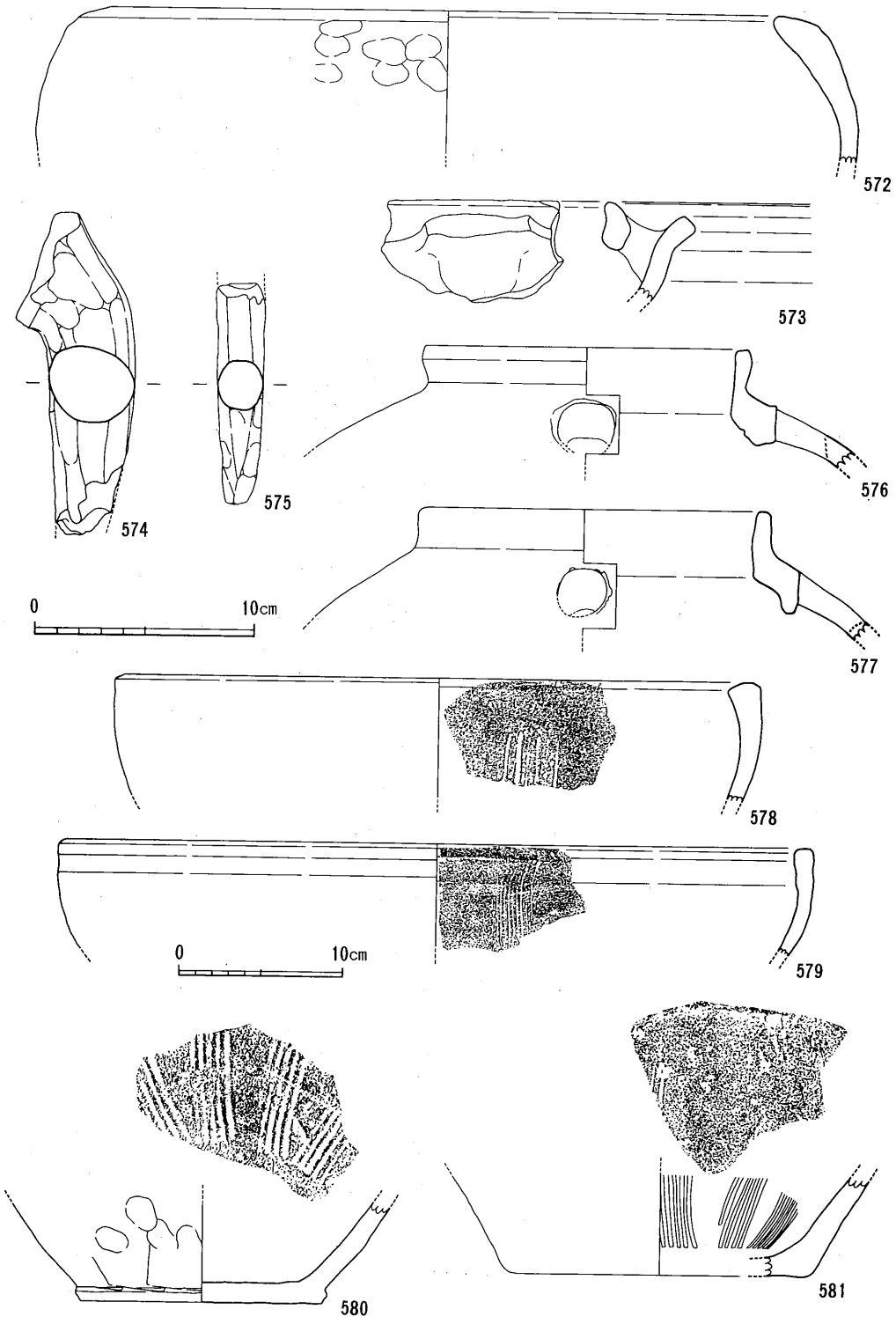
第302図　包含層出土遺物実測図①



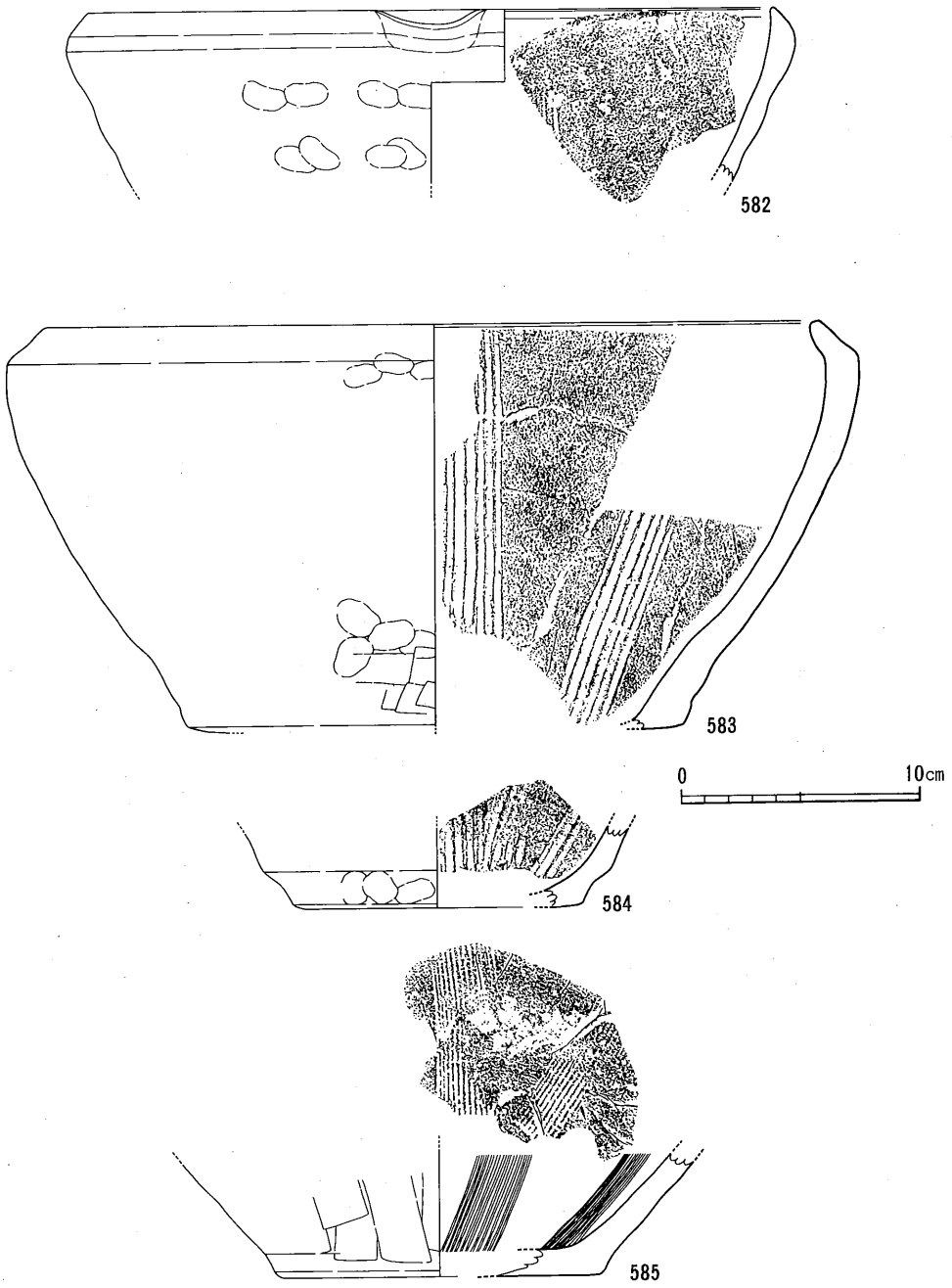
第303図　包含層出土遺物実測図②



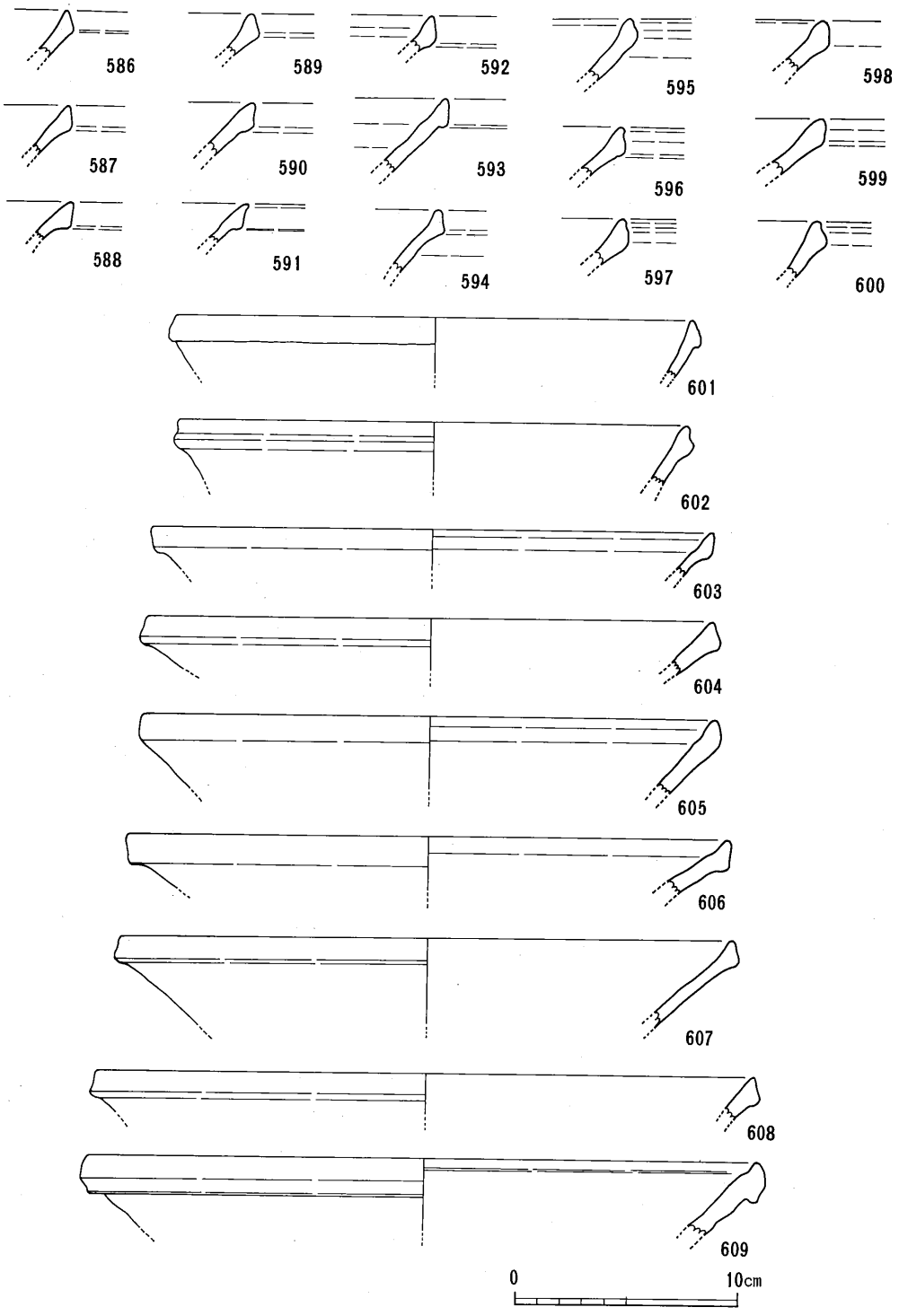
第304図　包含層出土遺物実測図③



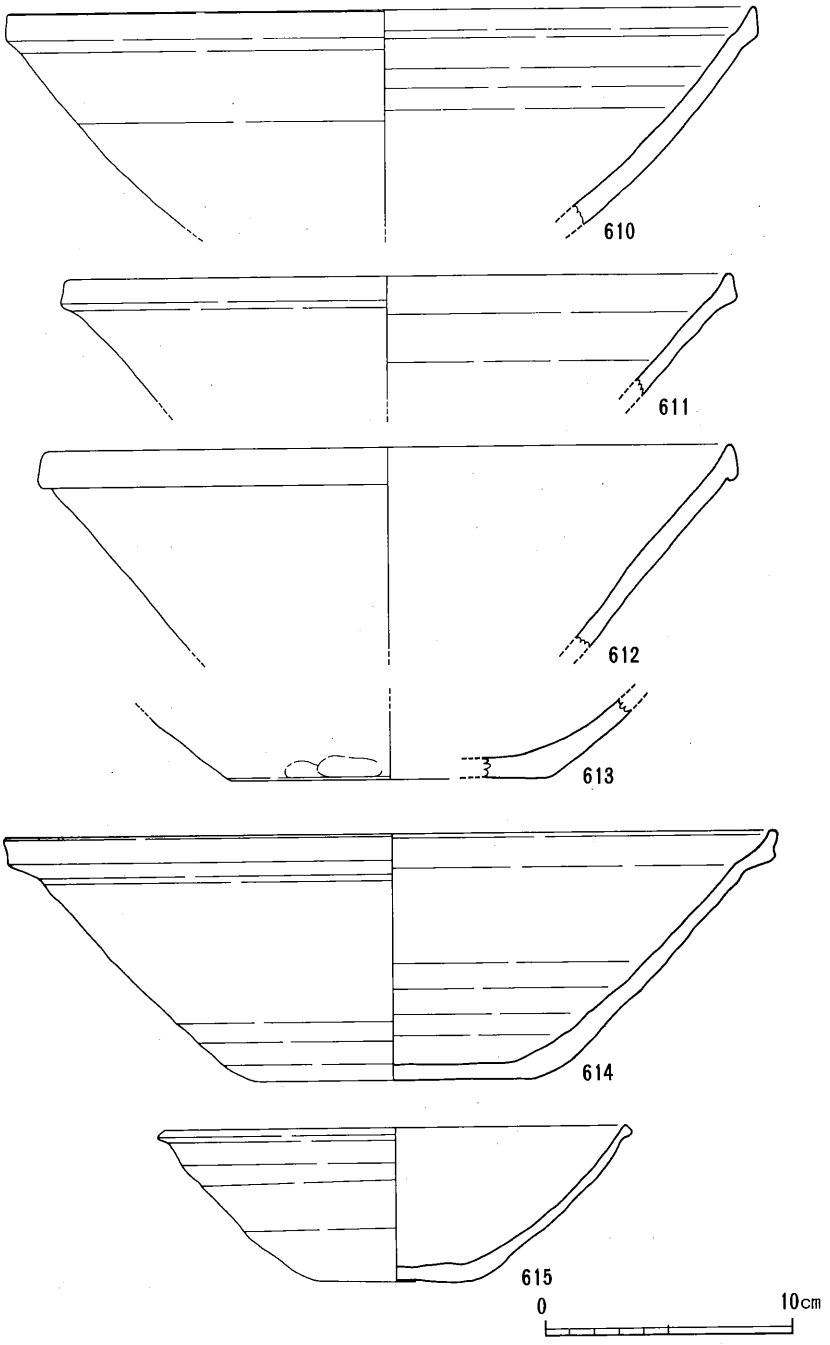
第305図　包含層出土遺物実測図④



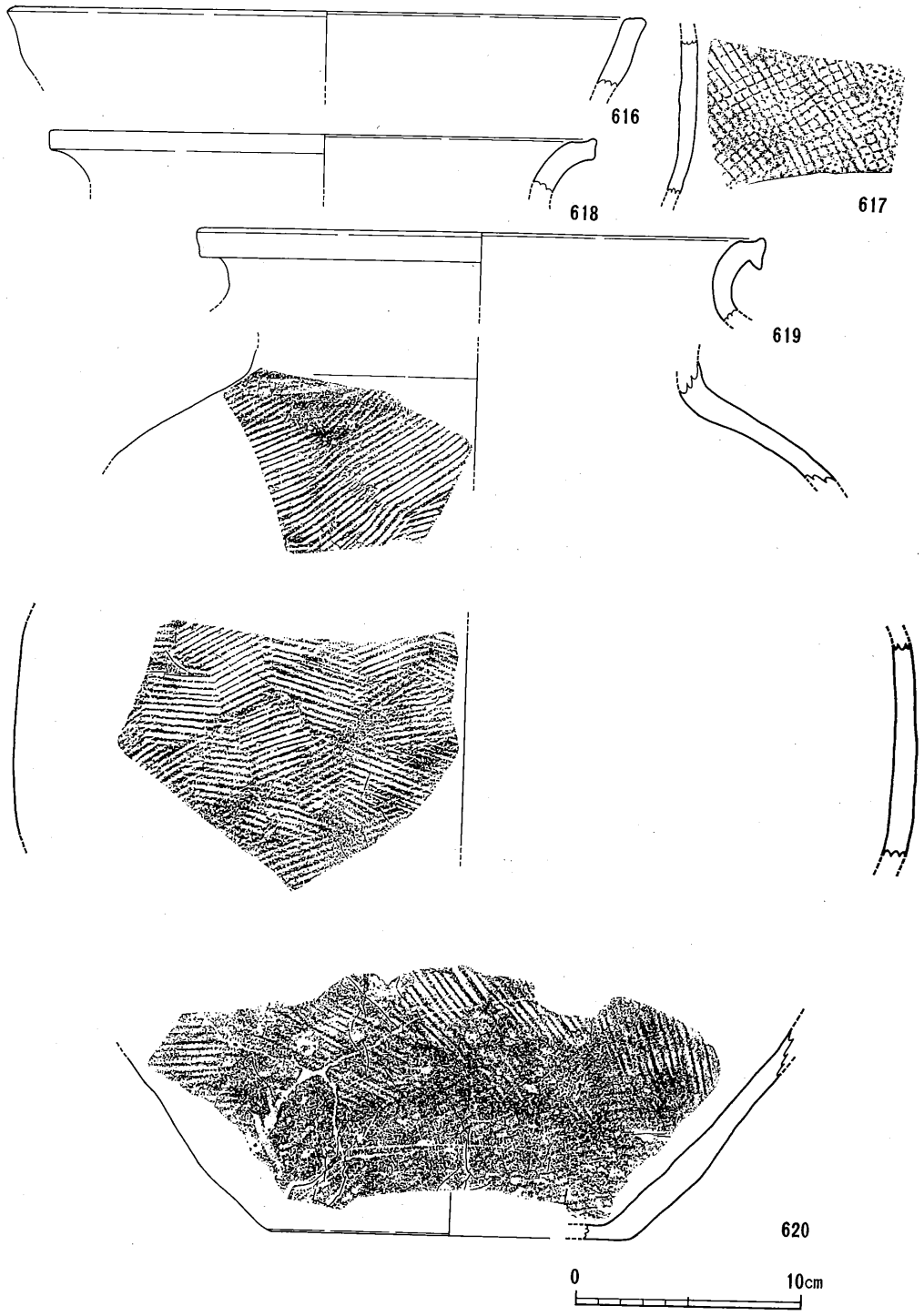
第306図　包含層出土遺物実測図⑤



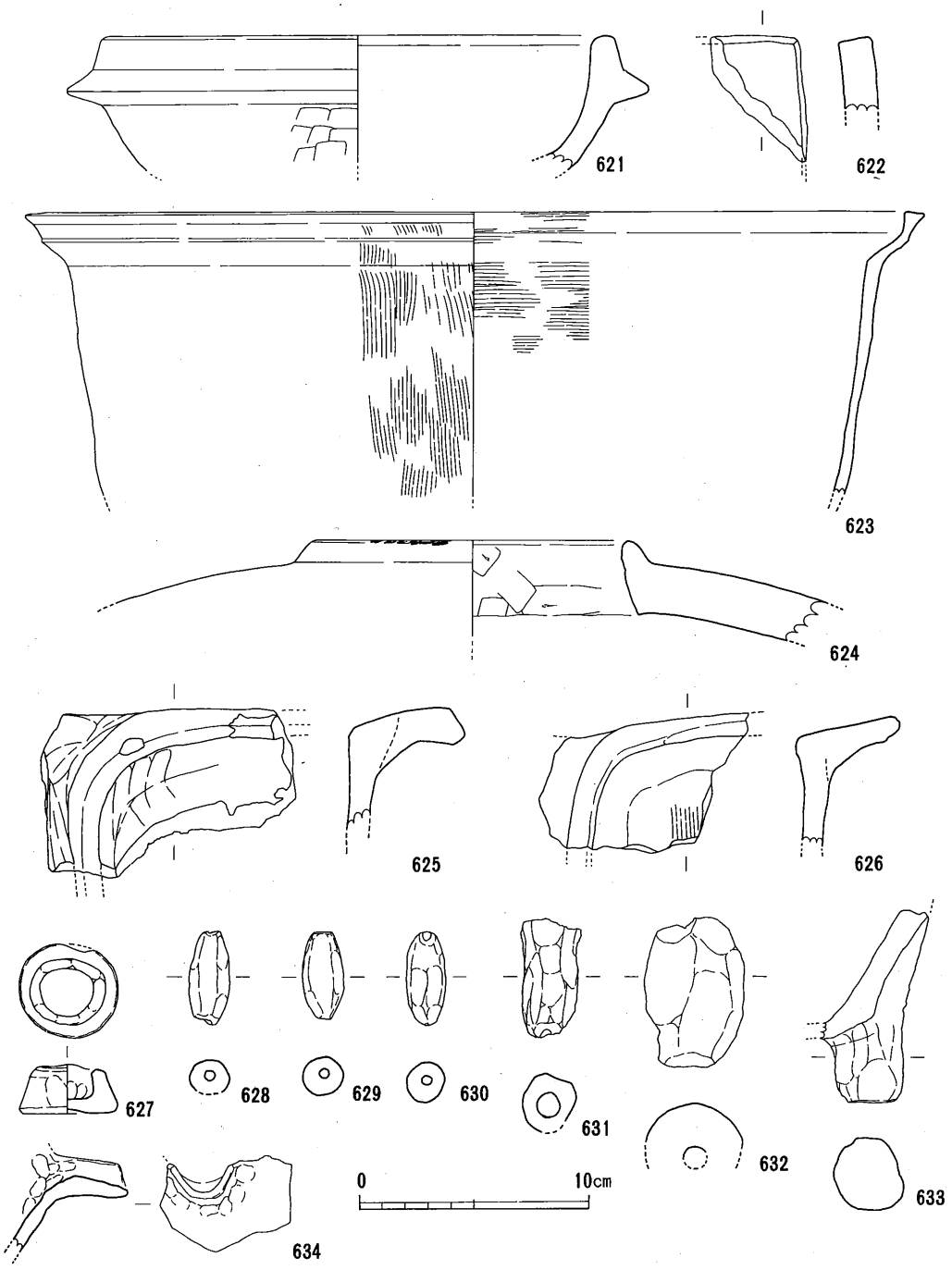
第307図　包含層出土遺物実測図⑥



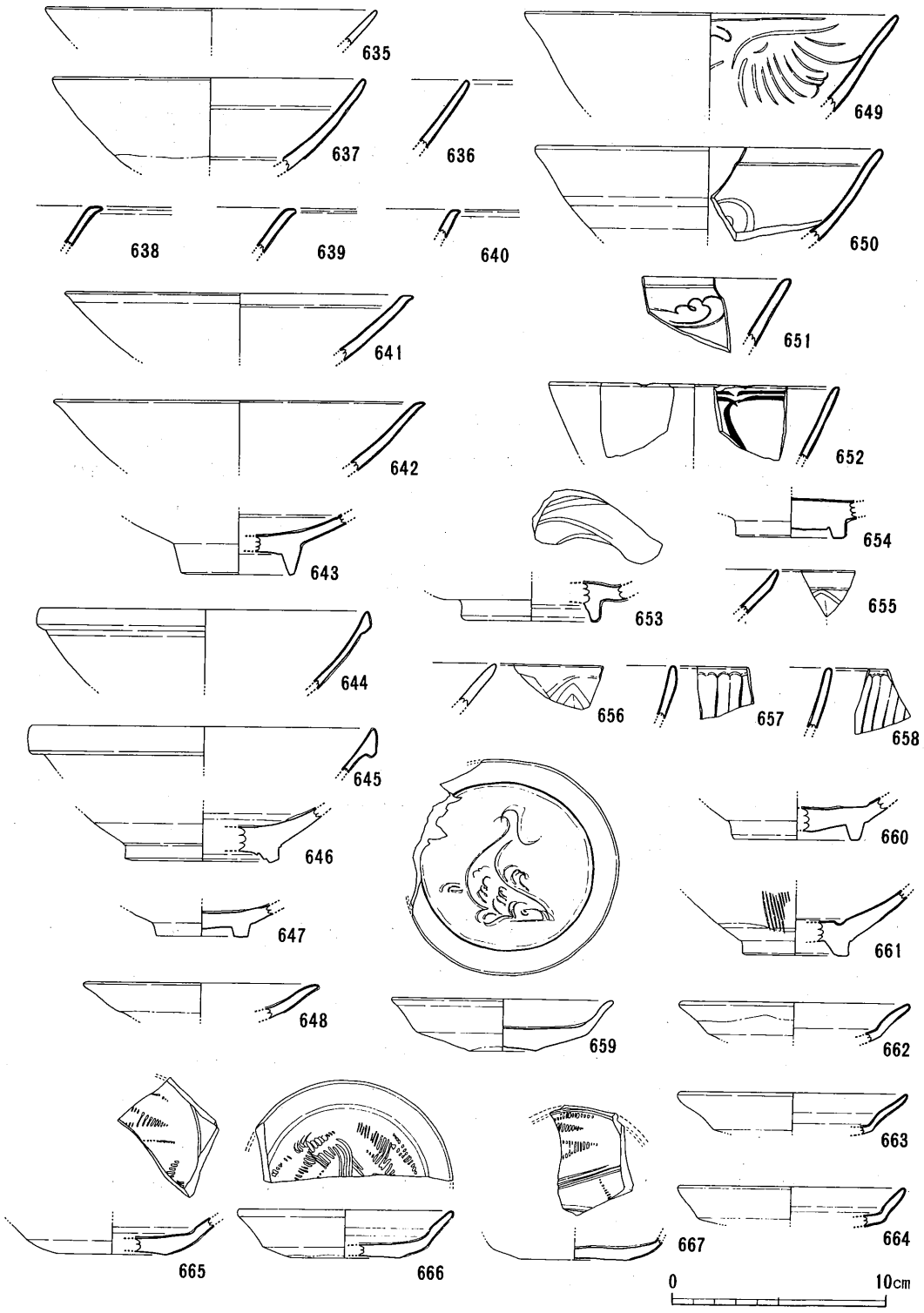
第308図　包含層出土遺物実測図⑦



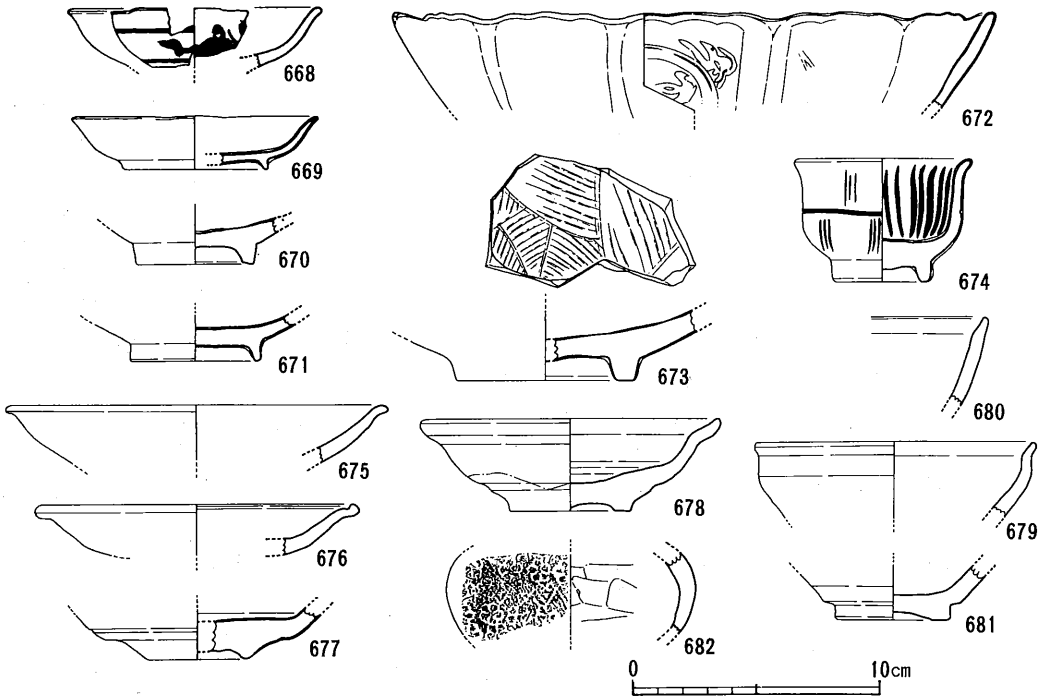
第309図　包含層出土遺物実測図⑧



第310図　包含層出土遺物実測図⑨



第311図　包含層出土遺物実測図⑩



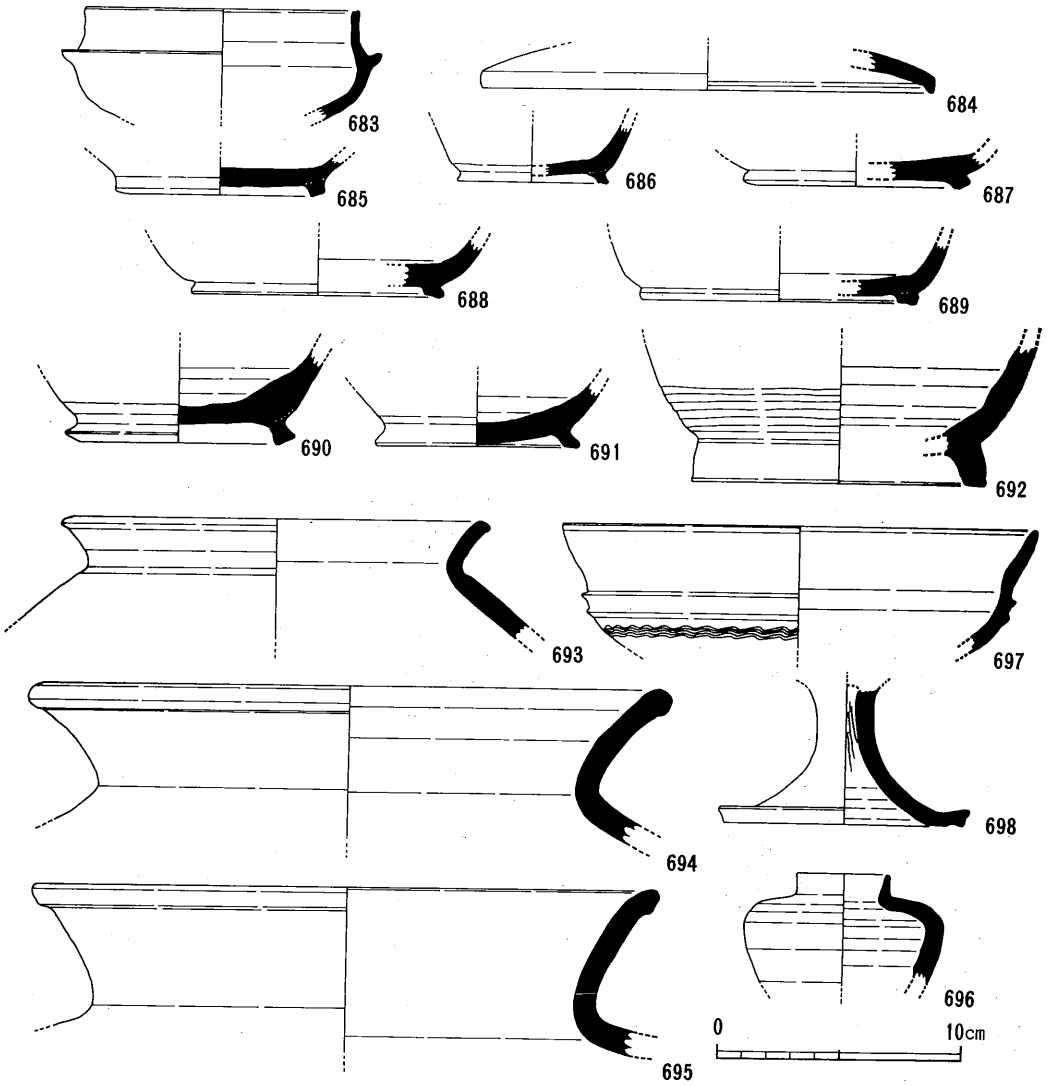
第312図　包含層出土遺物実測図⑪

註１　横田賢二郎・森田勉　「太宰府出土の輸入中国陶磁器について－型式分類と編年を中心に－」『九州歴史資料館研究論集４』　1978

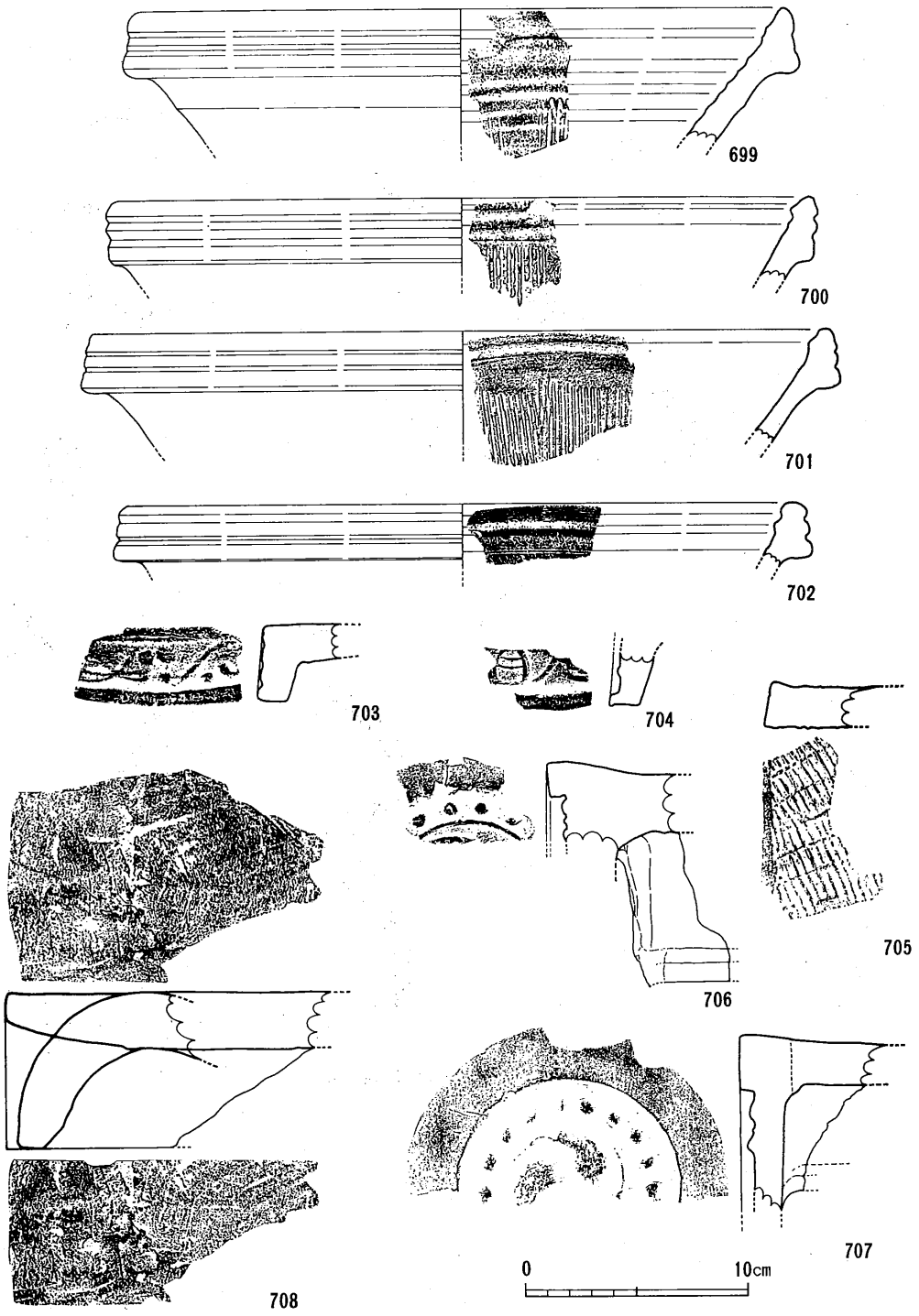
註２　根本　修　「近世備前焼の変遷と年代観」『木村コレクション　古備前図録』　岡山市教育委員会　1986

註３　白神典之　第５章　堺擂鉢について　「堺市文化財調査報告第37集」　堺市教育委員会　1988.12

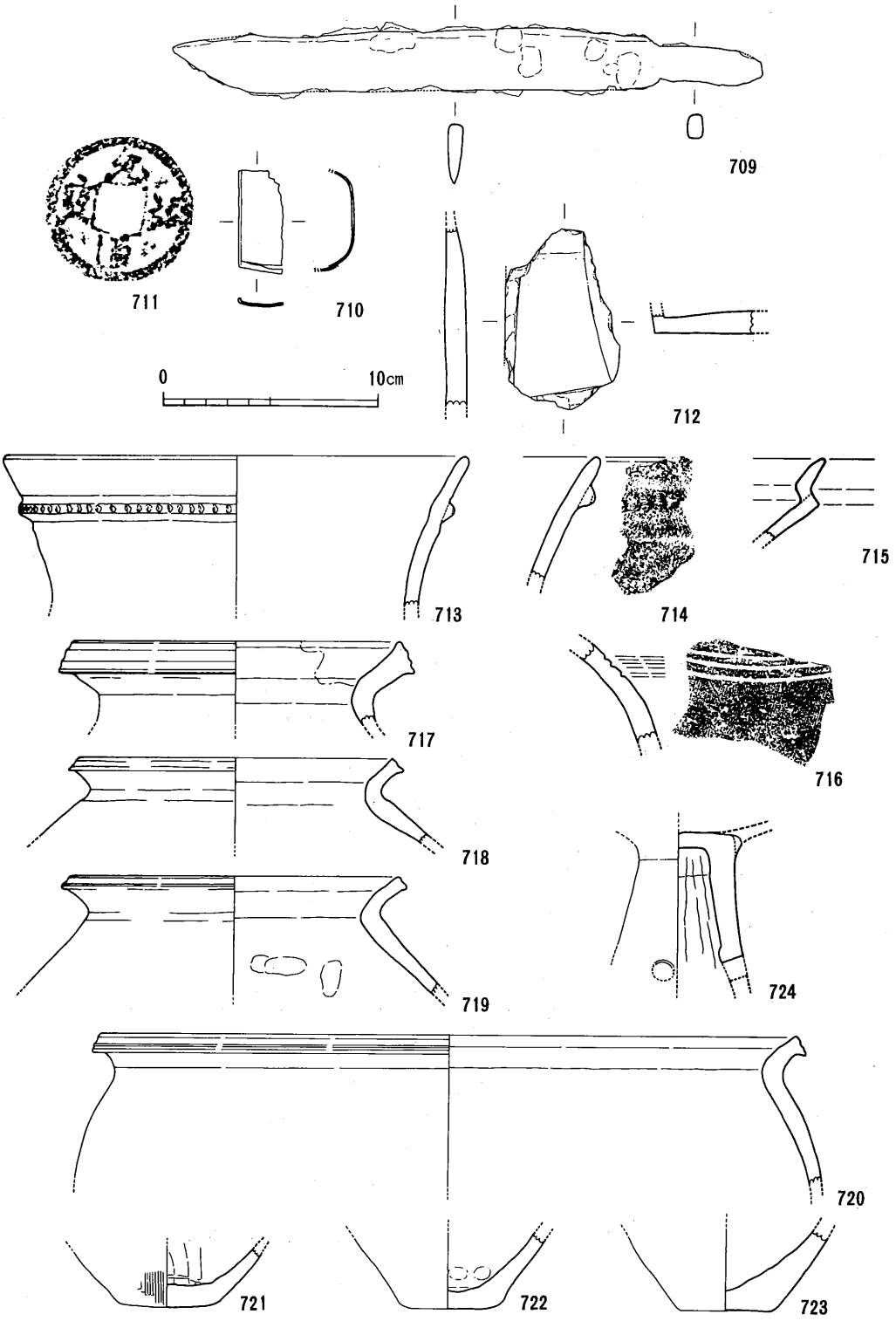
註４　「百間川当麻遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告52』　岡山県教育委員会　1982



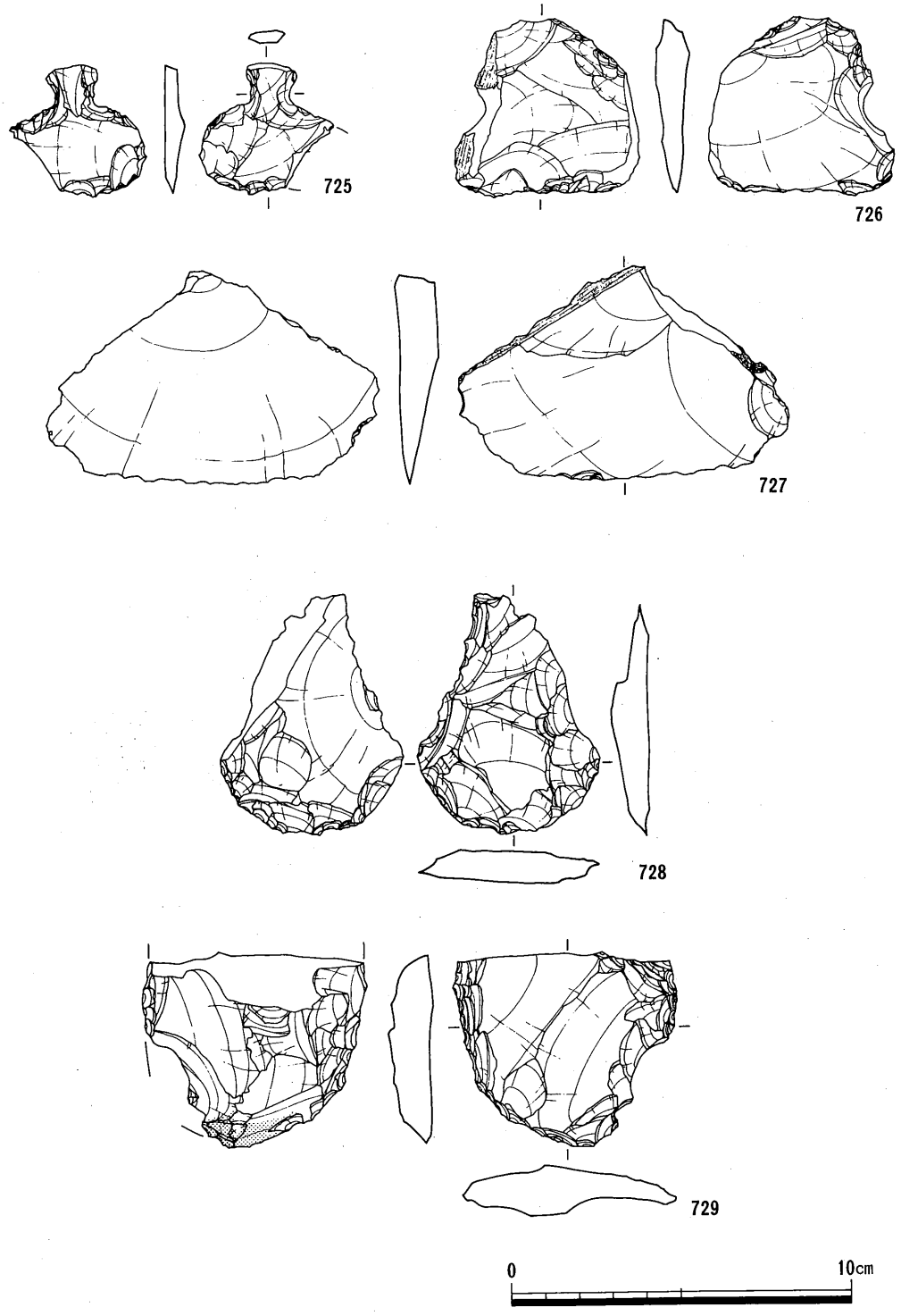
第313図　包含層出土遺物実測図⑫



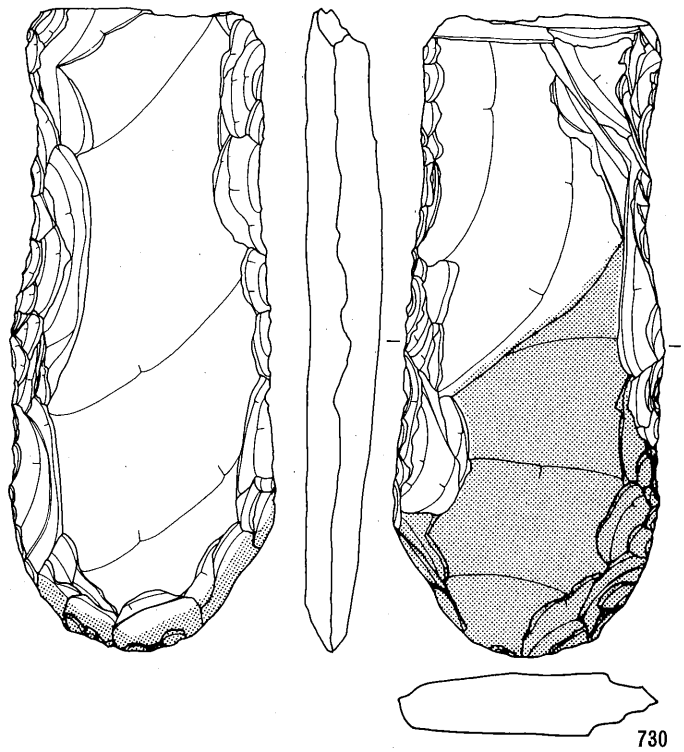
第314図　包含層出土遺物実測図⑬

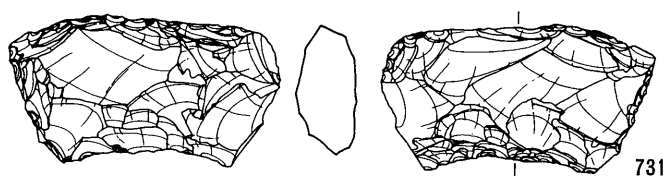


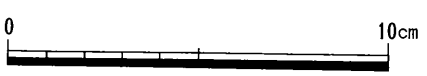
第315図　包含層出土遺物実測図⑭



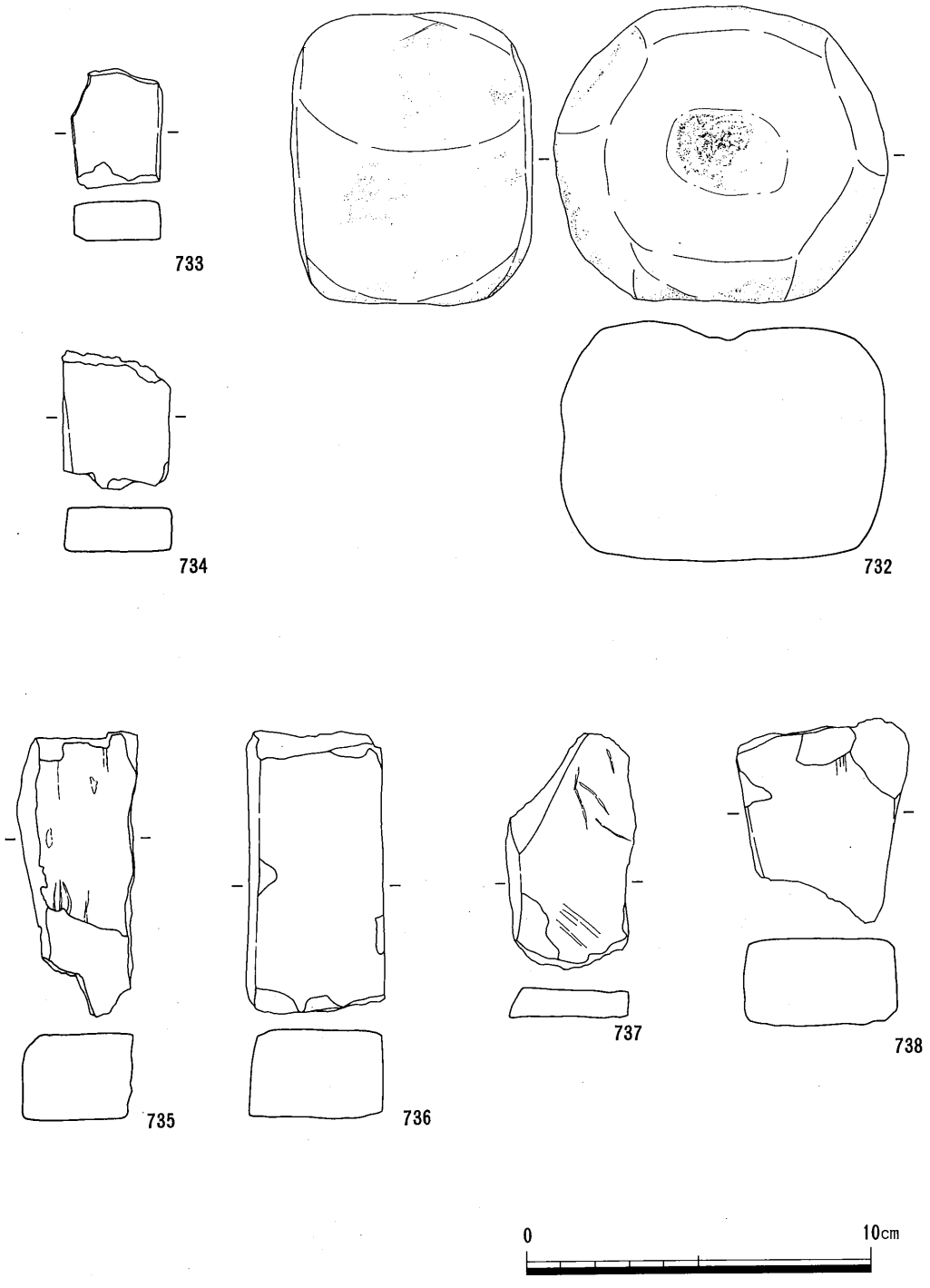
第316図　包含層出土遺物実測図（石製品）①







第317図　包含層出土遺物実測図（石製品）②



第318図　包含層出土遺物実測図（石製品）③

4．小結

城岡地区で検出された遺構は大別して弥生時代後期と中世のものである。弥生時代の遺構は環濠と思われる溝状遺構が検出され、中世の遺構は溝に区画された掘立柱建物が検出されている。それらを各時期ごとに細分すると弥生時代後期（Ⅰ期)、中世（Ⅱ期－①・Ⅱ期－②・Ⅲ期）の全部で4期に分けられる。

－Ⅰ期（弥生時代後期）－

遺構

Ⅰ期の遺構としては調査区南端で溝状遺構が5条検出されている。これらの溝のなかでSD19・20・24は延命の岡を取り囲む環濠と思われ、西側でやや南方に屈曲している。また延命の岡の等高線から20mライン上におそらくこの環濠が回ることが推定される。

遺物

これらの溝状遺構からは弥生時代後期の遺物が多量に出土しており、細かく分ければ3時期に分けられるが継続性があり遺物からも混じり込みが見られることから時期は弥生時代後期としてとらえておくものである。

遺物の器種は八反地地区と比べて手捏の鉢を含む小型の鉢類があまり出土しておらず、やや大型の鉢が目についている。また甕はやや小型のものが見られ、大型のものも口縁部の屈曲がしっかりしている。また口縁端部がやや拡張気味に作られており外面に退化した凹線が施されているものも見られる。底部はしっかりした平底を残すものが多いようである。壺の中には口縁部が肥厚し外面に凹線が施されているものがみられる。しかし遺物の中には庄内併行期頃の甕も見られやや時期幅のあるものがある。

時期は弥生時代後期から庄内併行期（古段階）までの時期と思われる。

－Ⅱ期－①・②期－

遺構

Ⅱ期－①の遺構は主として調査区南西部で検出されたSB10・15・20・27の4棟で構成されている。主軸は約8°東偏し、東西方向の桁行を持つものが2棟あり、北部に南北方向の桁行を持つものがある。建物域は調査区西側に延びると思われる。

Ⅱ期－②の遺構は調査区南西部で検出されたSB17・19・21・22・26の5棟で構成されるものである。主軸は約32°東偏し、雨落ち溝を持つ建物を主屋とする南北方向の桁行を持つ建物で配置されている。西側が調査区外に延びており、全容は不明である。

遺物

柱穴からはほとんど遺物が出土していなが、Ⅲ期よりは古いと思われる。

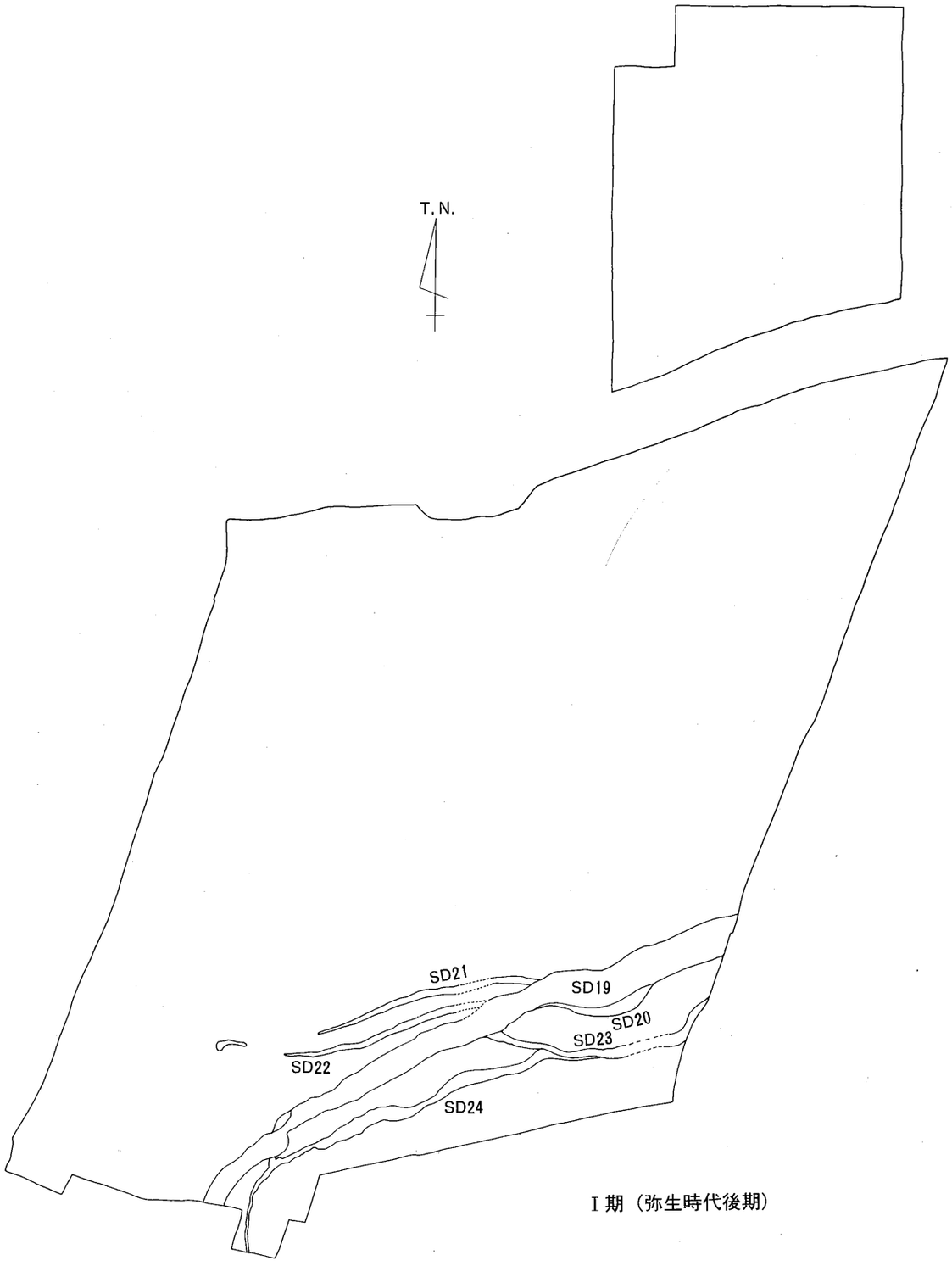
－Ⅲ期－

遺構

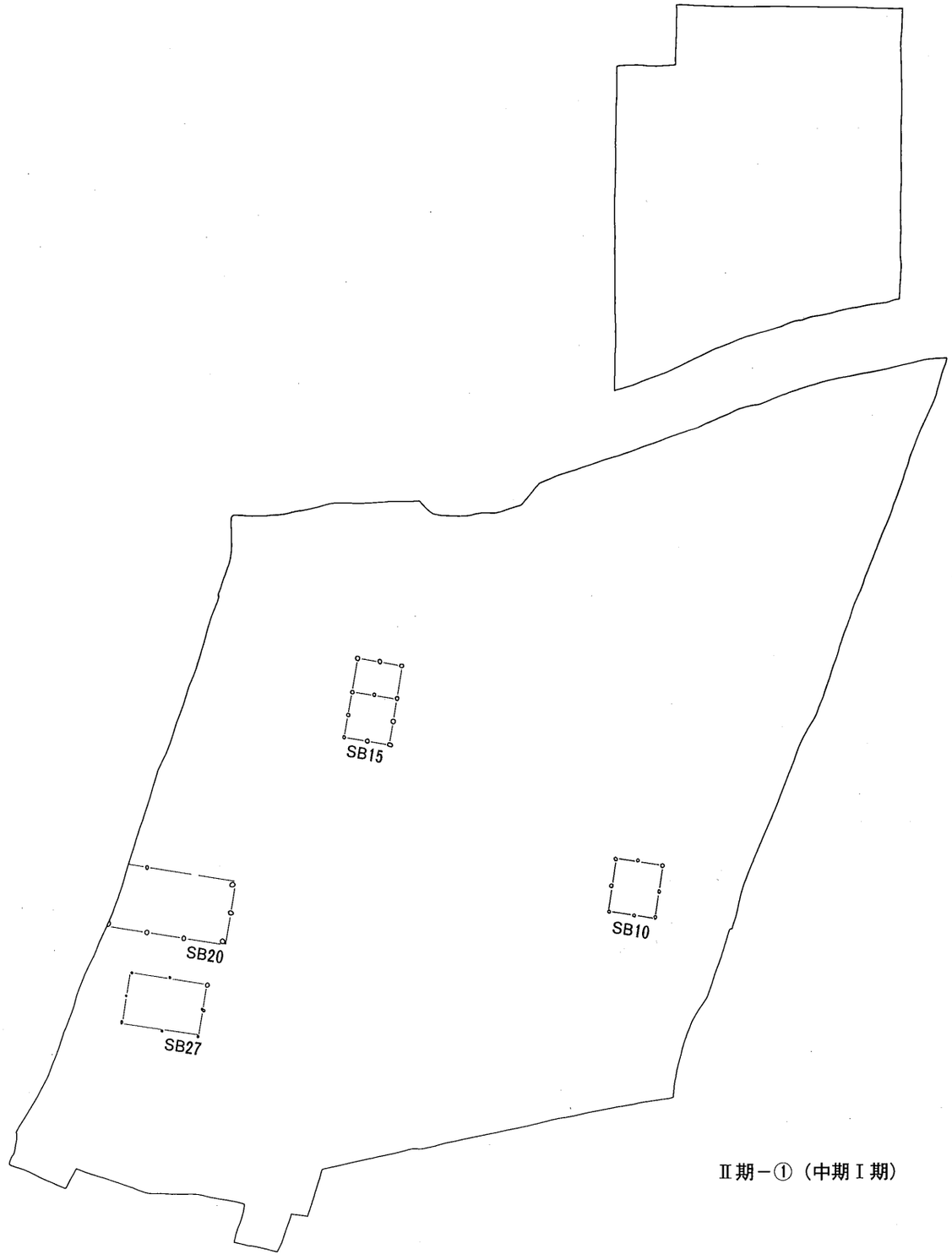
Ⅲ期の遺構は調査区全域で検出されている。検出された掘立柱建物および溝状遺構は、主軸をほぼ南北に取ることと切り合い関係が明瞭でないことから、時期および前後関係を決めるには至っていない。そのためここでは全てをまとめてⅢ期としておく。溝状遺構は調査区中央部でほぼ等間隔で検出されており、おそらくその間は道路として使用されていた可能性が考えられる。また溝から東方に直行するように延びた溝は掘立柱建物を区画する溝と考えられ、区画された中に1棟ないし2棟の建物がある。土坑は主として調査区南半で検出されており、中から河川石や五輪などが出土していることから廃棄土坑の可能性が考えられる。

遺物

溝状遺構からは土師質土器の土鍋・擂鉢類を主体とする遺物が出土しており、供膳形態の椀・坏類はきわめて少なかった。おそらくⅢ期とした時期は13世紀末頃から中世後半期頃と思われる。

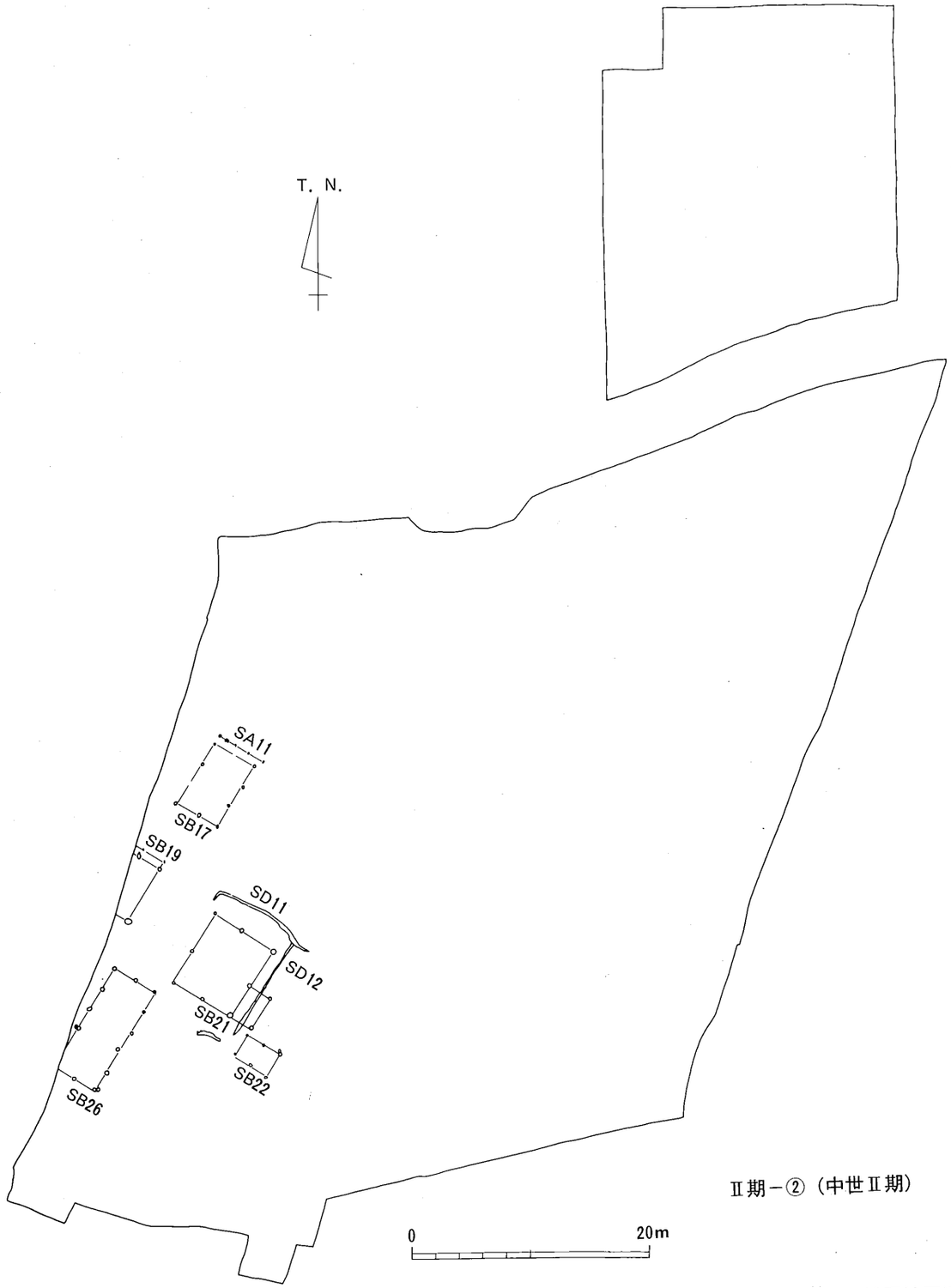


Ⅰ期（弥生時代後期）

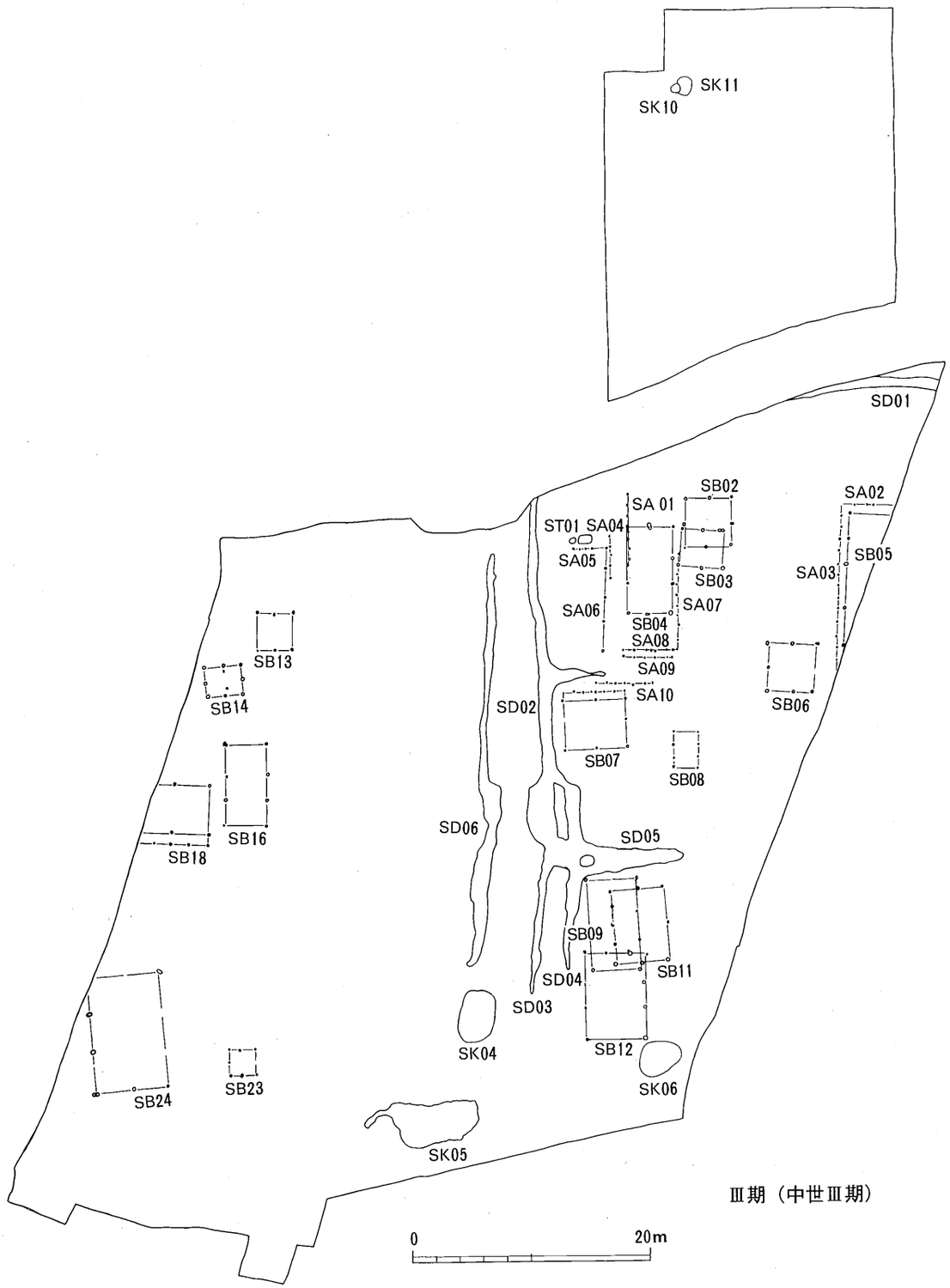


Ⅱ期－①（中期Ⅰ期）

第319図　城岡地区遺構変遷図①



Ⅱ期－②（中世Ⅱ期）



Ⅲ期（中世Ⅲ期）

第320図　城岡地区遺構変遷図②

観　　察　　表

第6表　八反地地区遺物観察表

SK01

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
1	10 56	突帯文系土器深鉢	—	—	—	2㎜程度の砂粒を含む	普通	外面黒灰色 内面暗褐色	——
2	10 56	〃	—	—	—	〃	〃	外面淡黄灰色 内面淡灰色	——
3	10 56	〃	—	—	—	〃	〃	外面黒灰色 内面暗褐色	——
4	10 —	〃	—	—	—	〃	〃	〃	——
5	10 56	〃	—	—	—	〃	〃	内外面灰黒色	——
6	10 56	〃	—	—	—	〃	〃	外面黄灰褐色 内面灰黒色	——
7	10 56	〃	—	—	—	〃	〃	外面灰黒色 内面暗黄褐色	——
8	10 —	突帯文系土器浅鉢	—	—	—	1㎜位の小さい砂粒を含む	〃	外面淡灰色 内面黄褐色	——

SD06

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
9	10 —	弥生土器壺	—	—	—	2㎜以上の砂粒を含む	普通	外面淡黄灰色 内面明黄褐色	——
10	10 —	弥生土器底部	—	—	6.9	2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡橙灰色 内面淡黄灰色	——

SD07

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
11	10 56	突帯文系土器	—	—	—	1㎜程度の砂粒と共に2㎜程度の砂粒含む	普通	外面明褐色 内面淡褐灰色	——
12	10 56	〃	—	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	内外面黄灰褐色	——
13	10 —	〃	—	—	—	1～2㎜位の砂粒を含む	〃	内外面灰褐色	——

SD08

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
14	10 56	突帯文系土器深鉢	—	—	—	1㎜程度の砂粒に3㎜位の砂粒が混じる	普通	外面黒灰色 内面灰黒色	——

SD09

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
15	10 —	縄文土器底部	—	—	5.2	1～3㎜程度の砂粒を含む 金雲母を含む	普通	内外面淡黄灰色	——
16	10 —	弥生土器壺	—	—	—	2㎜以上の砂粒を含む	〃	〃	外面ヘラ描き沈線
17	10 —	〃	—	—	—	〃	〃	外面淡黄灰色 内面灰黒色	——
18	10 —	弥生土器底部	—	—	7.0	2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡橙褐色 内面黄灰褐色	——
19	10 —	〃	—	—	9.9	〃	〃	外面明黄灰褐色 内面灰褐色	——

SD23

挿図番号	図版番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質	重量(g)	備考
23	11 —	スクレイパー	—	—	0.4	サヌカイト	1.6	——

挿図番号	図版番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質	重量(g)	備考
11	56 24	石鏃	(1.8)	(1.7)	0.5	サヌカイト	1.5	——

SD28

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
10	— 20	突帯文系土器	—	—	—	1～2㎜程度の砂粒を含む	普通	外面淡黄褐色 内面褐灰色	——

SD37

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
10	— 21	弥生土器底部	—	—	7.8	2㎜以上の砂粒を含む	普通	外面明橙褐色 内面褐灰色	内面指頭圧痕ナデ

挿図番号	図版番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質	重量(g)	備考
11	56 25	石鏃	9.65	6.2	1.7	サヌカイト	72.4	——

SD38

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
10	— 22	縄文土器深鉢	26.2	—	—	1㎜程度の砂粒を含む	普通	外面黄灰褐色 内面灰褐色	——

挿図番号	図版番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質	重量(g)	備考
11	56 26	石鏃	2.35	1.7	0.5	サヌカイト	0.7	——
11	56 27	〃	2.55	(1.7)	0.3	〃	0.9	——
11	56 28	〃	3.0	1.7	0.4	〃	2.1	——
11	56 29	〃	2.1	1.7	0.2	〃	0.8	——

包含層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
12	— 30	縄文土器口縁部	—	—	—	1～2㎜程度の砂粒を含む	普通	内外面淡黄灰褐色	上部にうず巻状のナデ
12	57 31	縄文土器深鉢	25.4	—	—	〃	〃	外面淡灰色 内面淡黄褐色	——
12	57 32	〃	—	—	—	〃	〃	内外面黒灰色	——
12	57 33	縄文土器浅鉢	—	—	—	1㎜程度の砂粒に2～3㎜位の砂粒が混じる	〃	外面黒褐色 内面黄褐色	——
12	— 34	〃	—	—	—	1㎜程度の砂粒を含む	〃	内外面黒黄灰褐色	——
12	— 35	〃	—	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	外面黄灰褐色 内面灰褐色	——
12	— 36	縄文土器深鉢	18.7	—	—	〃	〃	外面明黄褐色 内面黄灰色	——
12	— 37	〃	—	—	—	〃	〃	内外面灰褐色	——
12	— 38	〃	—	—	—	〃	〃	外面灰褐色 内面黒褐色	——
12	— 39	〃	—	—	—	1～3㎜までの砂粒を含む	〃	内外面黄灰褐色	貝殻条痕有
12	— 40	〃	—	—	—	2～3㎜以上の大粒の砂粒を含む	〃	外面暗黄黒色 内面暗黒色	——

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
12	— 41	縄文土器深鉢	—	—	—	1㎜程度のものに3㎜程の砂粒を含む	普通	外面黒灰色 内面黄灰褐色	——
12	— 42	〃	37.8	—	—	〃	〃	外面黒褐色 内面黄褐色	貝殻条痕有
12	— 43	〃	40.4	—	—	1㎜程の砂粒に3～4㎜のものがまじる	〃	内外面褐色	〃
13	— 44	突帯文系土器深鉢	—	—	—	1～2㎜程の砂粒を含む	〃	内外面灰褐色	——
13	— 45	〃	—	—	—	2㎜位の砂粒を含む	〃	外面暗褐色 内面淡黄褐色	——
13	— 46	〃	—	—	—	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面暗褐色 内面黒褐色	——
13	— 47	〃	—	—	—	〃	〃	外面淡褐色 内面淡橙黄褐色	——
13	— 48	〃	—	—	—	2～3㎜の比較的大きい砂粒を含む	〃	外面褐灰色 内面淡黄灰褐色	——
13	59 49	〃	17.1	—	—	3㎜以上の大粒の砂粒を多く含む	〃	外面明褐色 内面黒褐色	——
13	— 50	〃	—	—	—	2～3㎜程の砂粒を含む	〃	外面淡黄褐色 内面灰褐色	——
13	— 51	縄文土器底部	—	—	6.6	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡橙黄褐色 内面黒褐色	——
13	— 52	〃	—	—	6.4	2㎜程度の砂粒に5㎜位の砂粒を含む	〃	外面明橙褐色 内面淡黄褐色	——
13	— 53	〃	—	—	5.1	細かい砂粒を多量に含む	〃	外面黄灰褐色 内面淡灰褐色	——
13	— 54	〃	—	—	5.9	1㎜程度の砂粒に3㎜程の砂粒を含む	〃	外面黄橙褐色 内面黒褐色	——
13	— 55	縄文土器浅鉢底部	—	—	5.1	1～2㎜程度の砂粒を多く含む	〃	外面明橙褐色 内面灰褐色	——
13	— 56	縄文土器深鉢底部	—	—	15.1	1～3㎜程度の砂粒と共に5㎜位の砂粒を含む	〃	外面灰黒色 内面淡茶褐色	——
13	57 57	弥生土器壺	16.5	—	—	1～2㎜程の砂粒に4㎜位の砂粒を含む	〃	外面黒灰色 内面淡黄灰褐色	内面ナデ 外面ナデヘラ描き沈線
13	57 58	〃	14.7	—	—	2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	内外面黄灰色	内面ナデ 外面ナデヘラ描き沈線
13	57 59	〃	13.7	—	—	1～2㎜の砂粒に4㎜程度の砂粒を含む	〃	内外面灰白色	内面ナデ外面部分的にハケ目段ヘラ描き沈線
13	57 60	〃	12.4	—	—	2㎜程度の砂粒を含む	〃	内外面黄灰白色	内面ナデ外面部分的にハケ目ヘラ描き沈線
13	57 61	〃	10.0	—	—	2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面黄灰白色 内面灰白色	内面ナデ 外面ヘラ描き沈線ナデ
13	57 62	〃	—	—	—	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	内外面淡橙褐色	内面ナデ 外面ハケ目
13	57 63	〃	—	—	—	2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡褐黄色 内面褐黄色	——
13	58 64	〃	—	—	—	2㎜位の砂粒を多く含む	〃	外面淡黄灰色 内面淡橙灰色	——
13	58 65	〃	—	—	—	2㎜以上の砂粒を含む	〃	内外面黄灰白色	——
13	58 66	〃	—	—	—	2㎜程の砂粒を含む	〃	内外面淡橙褐色	外面ヘラ描き沈線
13	58 67	〃	—	—	—	2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面灰白色 内面淡橙褐色	外面ヘラ描き沈線
13	58 68	〃	—	—	—	3㎜以上の大粒の砂粒を含む	〃	外面灰白色 内面橙灰白色	——
13	59 69	〃	—	—	—	2㎜程度の砂粒の中に3㎜以上のものも含む	〃	外面明橙褐色 内面淡黄褐色	外面ヘラ描き沈線
13	58 70	〃	—	—	—	2㎜程度の砂粒を含む	〃	内外面淡黄灰褐色	内面ヨコナデ 外面ヘラ描き沈線
13	58 71	〃	—	—	—	〃	〃	〃	内面ヨコナデ 外面ヘラ描き沈線
13	58 72	〃	—	—	—	〃	〃	内外面黄灰褐色	内面ヨコナデ 外面ヘラ描き沈線

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
13	58	弥生土器壺	—	—	—	1～2㎜程度の砂粒とともに大粒の砂粒含む	普通	外面黄灰褐色 内面淡橙褐色	内面指頭圧痕ヘラミガキ外面段ヘラ描き沈線ヘラミガキ黒斑あり
73									
14	—	〃	—	—	—	2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	外面橙褐色 内面灰褐色	外面ヘラ描き沈線
74									
14	58	弥生土器甕	—	—	—	〃	〃	外面淡黄灰褐色 内面淡橙黄褐色	——
75									
14	—	〃	—	—	—	2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡黄褐色 内面淡灰褐色	——
76									
14	58	〃	—	—	—	〃	〃	外面黄灰褐色 内面淡褐色	——
77									
14	58	〃	26.1	—	—	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡黄灰褐色 内面明黄褐色	内面指ナデ
78									
14	58	〃	22.2	—	—	2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	内外面茶褐色	外面ヘラ描き沈線
79									
14	58	〃	26.0	—	—	〃	〃	内外面赤褐色	口縁端部刻み目 外面ヘラ描き沈線
80									
14	58	〃	—	—	—	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	内外面淡橙褐色	口縁端部刻み目
81									
14	—	〃	—	—	—	〃	〃	内外面淡橙灰色	逆L字状口縁
82									
14	58	〃	—	—	—	〃	〃	外面淡褐色 内面淡黄灰褐色	外面ヘラ描き沈線
83									
14	—	弥生土器底部	—	—	5.5	2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡黄灰色 内面明黄褐色	——
84									
14	—	〃	—	—	6.9	〃	〃	内外面明赤褐色	——
85									
14	—	〃	—	—	7.7	〃	〃	外面淡橙灰褐色 内面褐灰色	外面ナデ
86									
14	—	〃	—	—	6.6	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面灰黒色 内面灰褐色	——
87									
14	—	〃	—	—	10.1	2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡橙色 内面淡橙色	内面ヨコナデ
88									
14	—	〃	—	—	9.1	2㎜以上の砂粒を含む	〃	外面明赤褐色 内面灰褐色	——
89									
14	—	〃	—	—	9.7	2～3㎜以上の砂粒を多く含む	〃	外面淡橙褐色 内面淡灰褐色	——
90									
14	—	〃	—	—	10.0	2～3㎜以上の砂粒を多く含む小量の金雲母含む	〃	外面淡橙灰褐色 内面褐灰色	外面ヘラミガキ
91									
14	59	〃	—	—	10.1	2㎜程度の砂粒に5㎜位の砂粒を含む	良好	外面黒褐色 内面茶褐色	内面ナデ 外面ヘラミガキ
92									
15	59	〃	—	—	11.3	2～4㎜程度の砂粒を含む	〃	外面黄褐色 内面淡灰褐色	黒斑あり 内外面ヘラミガキ
93									
15	59	弥生土器蓋	径 11.0	厚さ (2.2)	—	2～3㎜㎜程度の砂粒を含む	普通	外面淡橙褐色 内面淡橙褐色	内外面指頭圧痕、指ナデ
94									
15	59	紡錘車	径 4.9	厚さ 1.1	—	〃	〃	淡黄灰褐色	——
95									
15	59	土錘	径 6.7	厚さ 0.8	—	2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	表面明褐色 裏面灰黒色	——
96									

SD03

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
20	60	弥生土器壺	25.0	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	普通	内外面淡黄灰白色	内外面ハケ目、ナデ
97									
20	—	弥生土器甕	20.2	—	—	1㎜程の砂粒を含む	〃	外面淡橙色 内面淡黄灰色	——
98									
20	—	〃	13.9	—	—	2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	外面明橙褐色 内面淡橙褐色	外面部分的にハケ目残る
99									
20	—	弥生土器底部	—	—	4.2	2㎜程の砂粒と共に5㎜位の砂粒を含む	〃	外面明黄褐色 内面淡黄灰色	——
100									
20	—	製塩土器底部	—	—	5.4	2㎜以上の砂粒を含む	〃	内外面黄灰褐色	内外面指頭圧痕
101									

SD04

挿図	図版	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
番号			口径	器高	底径				
20	—	弥生土器壺底部	—	—	3.9	2～3㎜程度の砂粒を含む	普通	外面灰白色 内面黄灰色	内外面ナデ
102									

SD05

挿図	図版	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
番号			口径	器高	底径				
20	—	弥生土器壺	10.6	—	—	2～3㎜程度の砂粒を含む	普通	内外面灰白色	——
103									
20	—	弥生土器壺底部	—	—	8.1	〃	〃	外面灰褐色 内面黄灰褐色	——
104									
20	—	〃	—	—	9.7	3㎜程度の砂粒を含む	〃	内外面灰白色	——
105									
20	—	弥生土器脚付鉢	—	—	—	2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	外面明黄褐色 内面淡黄灰色	外面部分的にハケ目残る
106									
20	—	弥生土器甕	12.2	—	—	2㎜程度の砂粒を含む	〃	内外面明黄褐色	——
107									
20	—	弥生土器甕底部	—	—	5.7	2㎜以下の細かい砂粒を含む	〃	外面明橙褐色 内面黄褐色	内外面黒斑内面指ナデ 外面ヘラミガキ
108									
20	—	支脚	—	—	—	〃	〃	明橙褐色	指ナデ押え
109									

挿図	図版	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質	重量(g)	備考
番号								
21	60	スクレイパー	8.65	4.35	0.6	サヌカイト	32.3	——
110								
21	60	打製石斧	(4.3)	5.7	0.6	〃	36.5	——
111								
21	60	石鏃	4.1	1.9	0.42	〃	2.7	——
112								
21	60	〃	2.1	1.8	0.3	〃	1.0	——
113								
21	60	〃	2.55	2.1	0.5	〃	2.5	——
114								

SD11.12

挿図	図版	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
番号			口径	器高	底径				
22	—	弥生土器鉢	6.4	3.5	3.4	1～2㎜程度の砂粒を含む	普通	外面黒灰色 内面淡橙灰褐色	——
115									
22	—	弥生土器皿	12.0	—	—	〃	〃	内外面淡橙褐色	外面指頭圧痕
116									
22	60	弥生土器小型器台	10.2	—	—	〃	〃	内外面黄灰褐色	坏部内外面ナデ 脚部内面板ナデ指頭圧痕円形透し有
117									
22	—	弥生土器壺	18.2	—	—	2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡橙灰褐色 内面淡黒灰色	外面口縁部ハケ目
118									
22	—	弥生土器甑	—	—	—	1㎜程度の細かい砂粒を含む	〃	外面淡黒灰色 内面黄灰色	黒斑あり 内面板ナデ外面タタキ
119									
22	—	弥生土器壺	—	—	—	2㎜程度の砂粒の中に5㎜くらいの大粒の砂粒を含む	〃	外面淡黄灰褐色 内面淡黄灰褐色	内面ヘラ削りの上を板ナデ外面タタキの上をハケ目
120									
22	—	弥生土器甕	17.8	—	—	1～2㎜程度砂粒を含む	〃	外面淡褐色 内面黄灰褐色	内外面ナデ
121									

SD24

挿図	図版	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
番号			口径	器高	底径				
22	—	弥生土器鉢	12.6	—	—	1㎜以下のキメ細かい砂粒を含む	普通	内外面淡褐色	——
122									
22	—	弥生土器底部	—	—	—	2㎜の砂粒を含む	〃	〃	内面ハケ目 外面指頭圧痕
123									

SD43

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
22	—	弥生土器甕	16.4	—	—	1～2㎜までの細かい砂粒を含む	普通	外面明橙黄褐色 内面褐色	外面部分的にハケ目残る
124									
22	—	弥生土器底部	—	—	3.7	2㎜位の砂粒を含む	〃	内外面灰白色	黒斑あり
125									

SD63

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
22	—	弥生土器鉢	18.0	8.0	—	細かい砂粒を含む	普通	灰白色	——
126									

SD15上層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
24	—	弥生土器鉢	9.0	—	—	1㎜以下の細かい砂粒を含む	普通	内外面淡黄灰褐色	外面指頭圧痕
127									
24	—	〃	11.2	2.8	—	〃	〃	〃	〃
128									
24	—	〃	11.6	3.3	—	〃	〃	外面淡橙褐色 内面明橙色	——
129									
24	—	〃	11.8	4.2	—	〃	〃	〃	外面指頭圧痕
130									
24	—	〃	14.8	—	—	〃	〃	外面淡橙褐色 内面淡灰褐色	〃
131									
24	—	〃	15.9	—	—	〃	〃	外面淡橙灰褐色 内面淡黄灰褐色	〃
132									
24	61	〃	18.6	—	—	2㎜位の砂粒とともに4～5㎜程の砂粒を含む	〃	外面黄灰褐色 内面橙黄褐色	内面指ナデ、外面指ナデ部分的にハケ目
133									
24	61	〃	21.6	7.0	—	1㎜以下の細かい砂粒に2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	内外面黄褐色	内面ハケ目、外面ヘラ削りの上をナデ
134									
24	—	〃	20.0	—	—	2㎜程度の砂粒を含む	〃	内外面黄灰褐色	内外面部分的にハケ目
135									
24	—	〃	22.3	—	—	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	内外面暗灰褐色	——
136									
24	—	〃	25.7	—	—	1㎜以下の細かい砂粒を含む	〃	内外面黄灰褐色	内面ハケ目ヘラ削り外面タタキの上をハケ目
137									
24	—	弥生土器高坏	17.0	—	—	2㎜以上の砂粒を含む	〃	外面黒灰橙褐色内面褐灰色	——
138									
24	—	〃	—	—	—	1㎜以下の砂粒に3㎜程度の砂粒を含む	〃	内外面淡黄灰褐色	脚部内面ヘラ削り
139									
24	—	〃	—	—	—	1㎜以下の砂粒に4㎜程度の砂粒を含む	〃	外面灰白色 内面淡橙色	脚部内面シボリ、透し
140									
24	—	弥生土器甕	10.6	—	—	2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡黄灰色 内面黒灰色	——
141									
24	—	〃	13.8	—	—	1㎜以下の細かい砂粒に3㎜以上の砂粒を少し含む	〃	内外面淡橙褐色	外面部分的にハケ目有
142									
24	—	〃	13.4	—	—	1㎜以下の細かい砂粒に3㎜以上の砂粒を含む	〃	内外面橙褐色	内面指頭圧痕
143									
24	—	〃	15.5	—	—	1㎜程度の砂粒に2～3㎜程の砂粒を含む	〃	外面黄褐色 内面黄褐色	内面指頭圧痕ヘラ削り 外面ハケ目
144									
25	—	〃	16.2	—	—	1㎜以下の比較的細かい砂粒を含む	〃	外面黄灰褐色 内面橙黄灰褐色	——
145									
25	—	〃	16.6	—	—	1㎜以下の細かい砂粒を含む	〃	内外面橙褐色	——
146									
25	—	〃	15.8	—	—	2㎜以下の砂粒を含む	〃	内外面淡黄灰褐色	——
147									
25	—	〃	15.8	—	—	1㎜以下の砂粒に2㎜程度のものを少し含む金雲母含む	〃	内外面褐色	——
148									
25	—	〃	16.2	—	—	〃	〃	内外面暗褐色	内外面ナデ
149									
25	—	〃	15.7	23.5	—	2㎜以上の砂粒を含む	〃	内外面淡橙灰白色	内面指頭圧痕ヘラ削り 外面タタキの上をハケ目
150									

挿図 図版 番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
25 — 151	弥生土器壺	14.6	—	—	2～3㎜の砂粒を含む	普通	内外面黄灰白色	内面ヘラ削り外面ハケ目、ハケ目作成の工具による列点文有
25 — 152	〃	13.0	—	—	1～2㎜の砂粒を多量に含む	〃	外面橙灰白色 内面灰白色	外面刺突文
25 — 153	〃	15.0	—	—	1㎜程度の砂粒を含む	〃	内外面黄灰褐色	外面部分的にハケ目あり
25 — 154	〃	14.2	—	—	2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	内外面黄灰白色	〃
25 — 155	〃	18.8	—	—	〃	〃	〃	内面指頭圧痕ヘラミガキ 外面ヘラミガキハケ目
25 — 156	〃	—	—	—	1㎜以下の細かい砂粒を含む	〃	内外面灰白色	内外面部分的にハケ目
25 — 157	〃	18.8	—	—	2㎜以上の砂粒を多く含む	〃	内外面淡橙褐色	内面指頭圧痕 外面指頭圧痕ハケ目
25 — 158	〃	15.0	—	—	〃	〃	〃	——
25 — 159	〃	29.5	—	—	1㎜以下の細かい砂粒を多く含む小量の金雲母を含む	〃	内外面淡褐色	——
26 — 160	弥生土器底部	—	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	〃	内面指ナデヘラ削り 外面タタキ
26 — 161	〃	—	—	—	1㎜以下の細かい砂粒を含む	〃	内外面淡黄褐色	内面しぼり痕 外面タタキ
26 — 162	〃	—	—	5.2	2～3㎜程の砂粒を含む	〃	外面灰黒色 内面黄灰色	外面ナデ
26 61 163	弥生土器壺	(5.1)	5.8	—	1～2㎜程度の砂粒、細かい金雲母を含む	〃	内外面黄灰色	手捏ミニチュア土器 外面指頭圧痕
26 61 164	支脚	—	—	—	1㎜以下の砂粒に3～4㎜以上の砂粒及び金雲母を含む	〃	外面黄褐色 内面灰褐色	内面指頭圧痕 外面指頭圧痕、タタキ

挿図 図版 番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質	重量(g)	備考
26 — 165	石鏃	2.1	1.8	0.3	サヌカイト	0.8	——
26 — 166	叩き石	11.3	3.1	1.4	片麻岩	77.6	——

SD15下層

挿図 図版 番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
27 — 167	弥生土器皿	9.6	—	—	2～3㎜の砂粒を含む	普通	外面淡橙褐色 内面淡橙白色	内外面指頭圧痕
27 — 168	〃	10.4	2.3	—	3～5㎜の砂粒が少し含まれている	〃	外面黄灰褐色 内面淡褐色	〃
27 — 169	〃	10.6	2.5	—	2～3㎜の砂粒が含まれている	〃	外面淡黄褐色 内面淡黄褐色	外面指頭圧痕
27 — 170	弥生土器鉢	6.0	2.7	—	1～2㎜の砂粒が含まれる金雲母を含む	〃	内外面暗褐色	ミニチュア 内外面指頭圧痕
27 61 171	〃	12.4	4.5	—	〃	〃	外面褐色 内面淡褐色	内外面指頭圧痕
27 — 172	〃	9.8	4.9	2.8	2㎜程度の砂粒を多く含む	〃	外面淡橙褐色 内面淡褐色	外面指頭圧痕
27 61 173	〃	13.4	6.3	5.2	細かい砂粒を含む金雲母を含む	〃	外面暗灰褐色 内面灰白色	内面簾状ハケ目指ナデ 外面指頭圧痕
27 61 174	〃	9.0	6.1	3.7	1㎜以下の砂粒を含む金雲母を含む	〃	内外面淡褐色	内外面ハケ目
27 61 175	〃	9.8	6.9	—	1㎜程度の砂粒に3～4㎜程の砂粒金雲母を含む	〃	外面暗黄灰褐色 内面淡黄褐色	内面板ナデ 外面タタキの上をハケ目
27 — 176	〃	—	—	—	1～3㎜位の砂粒を含む	〃	外面黒橙褐色 内面淡灰褐色	内外面ハケ目
27 — 177	〃	22.7	—	—	キメ細かく砂粒はあまりみられない	〃	外面淡黄白色 内面淡黄灰白色	外面タタキ
27 62 178	弥生土器甕	15.2	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	内外面淡褐色	口縁部横ナデ 内面ヘラケズリ、ナデ

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
27	—	弥生土器甕	15.8	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	普通	外面淡黄灰白色 内面黄灰白色	内外面指頭圧痕
179									
27	—	〃	17.7	—	—	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	内外面黄灰褐色	外面全体タタキ 内面全体ハケ目
180									
27	—	〃	16.0	—	—	2㎜位の砂粒を含む	〃	内外面橙灰白色	——
181									
27	—	〃	15.3	—	—	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	内外面黄白色	外面部分的にハケ目
182									
27	—	〃	—	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	内外面灰褐色	内面ヘラケズリ、ナデ 外面ハケ目、ナデ
183									
27	—	〃	17.9	—	—	1～3㎜の砂粒を含む	〃	外面淡黄褐色 内面淡橙褐色	内面ナデ、ヘラケズリ 外面ハケ目
184									
27	—	〃	15.4	—	—	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面黄灰褐色 内面黄灰褐色	黒斑あり外面タタキ目
185									
27	—	〃	14,6	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	内外面淡褐色	外面ハケ目
186									
27	—	〃	15.8	—	—	2㎜以下の砂粒を含む	〃	内外面淡茶色	内面ヘラケズリ 外面タタキ
187									
27	—	〃	15.8	—	—	3㎜以上の大粒の砂粒含む	〃	外面黒橙褐色 内面橙灰色	内面ヘラケズリ 外面部分的にハケ目
188									
28	—	〃	14.2	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	内外面黄灰白色	内面ナデ、ヘラケズリ 外面部分的にハケ目
189									
28	—	〃	—	—	—	2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡橙褐色 内面淡橙色	内面指頭圧痕、ハケ目 外面指頭圧痕、タタキ
190									
28	—	〃	15.8	—	—	〃	〃	外面淡褐色 内面黄灰褐色	外面部分的にハケ目
191									
28	—	〃	14.8	—	—	〃	〃	内外面淡黄褐色	外面部分的にハケ目
192									
28	—	〃	11.8	—	—	1㎜以下の細かい砂粒を含む	〃	外面茶褐色 内面黄褐色	内面ヘラケズリ外面タタキの上をハケ目
193									
28	62	弥生土器高坏	18.1	13.8	15.4	1㎜以下の細かい砂粒を含む 金雲母含む	〃	外面黄灰白色 内面黄灰白色	黒斑あり 脚外面ヘラ磨き内面ハケあり
194									
28	—	〃	—	—	—	2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面黄灰褐色 内面灰茶橙色	内外面ナデ
195									
28	—	弥生土器高坏脚部	—	—	19.2	1～2㎜の砂粒を多く含む	〃	外面黄灰褐色 内面灰褐色	内面ヘラケズリハケ目 外面ハケ目透しあり
196									
28	62	弥生土器小型器台	7.8	6.9	10.0	5㎜程の砂粒を含む	〃	内外面黄褐色	坏部内面放射状に板ナデあり脚部の穿孔は外から穿たれている
197									
28	62	弥生土器壺	8.9	7.4	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	外面淡黄灰色 内面淡黄灰色	内面底に黒斑指頭圧痕 外面タタキ
198									
28	—	〃	—	—	—	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	内外面黄灰褐色	内面板ナデヘラケズリ 外面ハケ目
199									
28	—	〃	12.6	—	—	2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡褐色 内面淡黄灰色	——
200									
28	—	〃	19.0	—	—	2㎜以下の砂粒を含む	〃	外面橙褐色 内面橙灰色	——
201									
29	62	〃	22.8	32.1	—	1㎜程の細かい砂粒を含む	〃	内外面灰白色	内面ハケ目 外面ヘラミガキハケ目
202									
28	—	弥生土器底部	—	—	—	〃	〃	内外面淡茶色	内面指頭圧痕 外面ハケ目
203									
28	—	〃	—	—	2.0	1㎜以下の砂粒を含む 金雲母を含む	〃	外面黄褐色 内面黄灰褐色	内外面ハケ目
204									
28	—	〃	—	—	5.4	1㎜以下の砂粒を含む	〃	外面灰褐色 内面黄灰褐色	〃
205									
28	—	〃	—	—	4.8	1㎜程度の砂粒を含む 金雲母を含む	〃	外面黄灰白色 内面黄灰白色	内面ヘラケズリ 外面黒斑あり、ハケ目
206									
28	—	〃	—	—	4.8	2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面褐色 内面黒褐色	——
207									
28	—	製塩土器底部	—	—	5.2	1㎜以上の砂粒を含む	〃	内外面黄灰褐色	——
208									
28	—	〃	—	—	4.4	1㎜以下の砂粒を含む	〃	内外面橙灰褐色	——
209									
28	62	魚型土製品	全長 5.8	—	—	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	灰白色	——
210									

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
29	—	弥生土器壺	—	—	—	3㎜程度の大粒の砂粒を含む	普通	内外面橙灰白色	——
29	—	弥生土器甑	—	—	8.4	1～2㎜程の砂粒を多量に含む	〃	内外面黄褐色	——

挿図番号	図版番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質	重量(g)	備考
49	—	打製石斧	11.8	5.4	1.8	安山岩	100.4	先端部欠損

SD16上層・中層・下層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
30	—	弥生土器鉢	9.8	—	—	1㎜程度の細かい砂粒含む 金雲母含む	普通	内外面灰白色	——
30	—	〃	10.4	—	—	2㎜程度の砂粒を少量含む	〃	内外面橙白色	外面指頭痕
30	—	〃	9.8	—	—	2㎜以上の大粒の砂粒を多量に含む	〃	〃	〃
30	—	〃	13.0	—	—	2～3㎜の砂粒を多く含む	〃	内外面淡黄褐色	〃
30	—	〃	13.8	—	—	1㎜以下のキメ細かい砂粒を含む	〃	〃	——
30	—	〃	24.0	—	—	2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	外面桃褐色 内面桃灰褐色	——
30	—	〃	23.0	—	—	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面橙白色 内面黄白色	口縁内面にハケ目
30	—	〃	29.4	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	外面黒褐色 内面褐色	体部内外面にハケ目
30	—	弥生土器壺	19.0	—	—	2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	内外面淡橙褐色	——
30	—	〃	11.6	—	—	2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	内外面淡黄灰褐色	口縁部上面と外面に竹管文有
30	—	〃	—	—	—	1～2㎜の砂粒を含む	〃	内外面淡褐色	手捏ミニチュア土器
30	—	〃	14.2	—	—	1～2㎜の砂粒を含む	〃	内外面黄灰褐色	内面ハケ目
30	—	弥生土器底部	—	—	4.0	2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面黄灰褐色 内面淡黄褐色	外面タタキ目
30	—	〃	—	—	2.5	1㎜以下の砂粒に2～3㎜程の砂粒金雲母含む	〃	内外面明褐色	外面タタキ目 内面ヘラ削り
30	—	製塩土器底部	—	—	5.2	1㎜以上の砂粒を含む 金雲母含む	〃	内外面黄褐色	脚部外面指ナデ
30	—	〃	—	—	4.0	1㎜以下の砂粒を含む	〃	外面赤褐色 内面灰褐色	——
30	—	〃	—	—	5.6	1㎜程度の砂粒に大粒の砂粒を含む	〃	内外面灰白色	脚部外面指ナデ
30	—	突帯文系土器	—	—	—	1㎜程度の砂粒を含む	〃	〃	——

挿図番号	図版番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質	重量(g)	備考
30	—	石鏃	2.4	1.5	0.3	サヌカイト	27.0	——
30	—	砥石	6.8	(1.6)	3.4	砂岩	38.3	——

SD17

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
31	—	弥生土器壺	11.0	—	—	2～3㎜程度の砂粒を含む	普通	外面灰褐色 内面黄灰色	——

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
31	—	弥生土器底部	—	—	4.2	1㎜以下の砂粒を含む	普通	外面灰褐色 内面淡灰褐色	外面ハケ目
31	—	弥生土器鉢	15.0	—	—	〃	〃	内外面淡橙褐色	外面黒斑あり、指頭痕
31	—	弥生土器壺	11.0	—	—	キメ細かい砂粒を殆んど含まない	〃	内外面黄灰白色	——
31	—	弥生土器高坏脚	—	—	12.8	2㎜程度の砂粒を多く含む	〃	内外面淡橙灰褐色	——
31	—	弥生土器甕	15.8	—	—	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	内外面黄灰褐色	内面ヘラ削り
31	—	〃	17.6	—	—	1㎜以下程度の砂粒を含む 金雲母含む	〃	内外面淡黄灰褐色	外面ハケ目
31	—	〃	15.4	—	—	1㎜以下の砂粒に2㎜程の砂粒が混じる	〃	内外面黄灰褐色	——

SD21

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
33	63	弥生土器皿	9.2	2.3	—	1～2㎜程度の砂粒を含む	普通	内外面淡黄灰褐色	黒斑、手捏
33	—	〃	10.8	2.5	—	2㎜程度の砂粒を含む	〃	内外面淡黄灰色	底に黒斑、手捏
33	—	〃	11.4	2.2	—	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡黄灰色 内面淡橙褐色	底部に黒斑、手捏
33	63	〃	12.2	3.7	—	1㎜程度の砂粒を含む	〃	外面明橙褐色 内面橙灰褐色	〃
33	63	〃	13.0	3.4	—	2㎜程度の砂粒を含む	〃	内外面橙白色	〃
33	—	〃	13.5	3.4	—	1㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡橙褐色 内面淡黄褐色	〃
33	—	〃	9.8	3.2	—	1～2㎜の砂粒を含む	〃	内外面淡灰褐色	〃
33	—	〃	9.7	3.0	—	3～4㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡灰褐色 内面淡黄褐色	底部全体に黒斑、手捏
33	63	弥生土器鉢	—	3.7	—	1㎜以下の細かい砂粒を多く含む	〃	内外面淡灰褐色	片口手捏 底部全体に黒斑
33	—	〃	—	—	—	2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面暗灰黒色 内面淡褐色	底部全体に黒斑
33	—	〃	—	—	4.0	〃	〃	〃	底部全体に黒斑 外面にしぼり目
33	63	〃	11.6	5.2	—	細かい砂粒に2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	内外面淡黄灰褐色	外面黒斑
33	—	〃	12.4	—	—	3㎜程の砂粒を含む	〃	内外面黄灰褐色	——
33	63	〃	14.7	7.8	—	2㎜程の砂粒を含む	〃	外面淡橙灰褐色 内面灰黒色	底部黒斑
33	—	〃	17.9	—	—	2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面黄褐色 内面淡褐色	内面ハケ目外面ヘラ削り
33	—	〃	16.5	7.7	—	〃	〃	内外面橙白色	——
33	—	〃	19.0	8.3	—	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面明橙色 内面淡黄褐色	——
33	63	〃	18.8	7.3	—	1㎜以下の砂粒に3㎜程度の砂粒を含む金雲母含む	〃	外面淡黄灰褐色 内面淡黄褐色	外面ヘラ削り
33	—	〃	14.0	—	—	1㎜以下の細かい砂粒を含む	〃	内外面淡黄褐色	——
33	—	〃	16.9	—	—	2～3㎜の砂粒を含む	〃	外面明橙褐色 内面黒褐色	——
33	—	〃	17.8	—	—	1㎜以下の砂粒を含む 金雲母含む	〃	外面褐色 内面淡黄褐色	——
33	—	〃	22.0	—	—	1～2㎜の砂粒を含む	〃	外面淡灰褐色 内面黄灰褐色	内面にヘラ削り有
34	—	〃	24.7	—	—	〃	〃	外面淡赤褐色 内面黄灰褐色	内面上部ハケ、下部にヘラ削り外面にタタキ目

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
34	63 265	弥生土器鉢	23.7	11.5	—	1～2㎜程度の砂粒に5㎜程度の砂粒を含む	普通	内外面淡黄灰褐色	内面全体にヘラケズリ 外面上部にタタキ、下部にヘラ削り
34	— 266	〃	10.9	5.9	—	2～3㎜程の砂粒を含む	〃	外面淡橙色 内面淡橙黄褐色	底部外面黒斑あり
34	— 267	〃	—	—	—	1㎜程の砂粒に2～5㎜の砂粒含まれる	〃	外面淡褐色 内面淡黄褐色	——
34	— 268	〃	11.0	—	—	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡橙色 内面淡黄灰白色	——
34	— 269	〃	12.0	7.0	—	2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡橙灰白色 内面淡橙灰白色	内面黒斑、ヘラ削り 外面タタキ目
34	— 270	〃	5.1	4.2	4.2	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	内外面黄灰白色	ミニチュア 手捏
34	63 271	〃	7.5	3.3	3.2	1㎜以下の砂粒を含む	〃	内外面黄灰褐色	ミニチュア 底部黒斑
34	— 272	〃	8.0	6.6	4.1	1～2㎜程の砂粒を含む	〃	内外面灰褐色	内面ハケ目
34	63 273	〃	9.3	5.6	2.9	〃	〃	外面淡橙褐色 内面淡黄褐色	内面ハケ目
34	64 274	〃	31.4	—	—	1㎜以下の砂粒を含む 金雲母含む	〃	外面黒褐色 内面褐色	内外面ハケ目 搬入品か？
35	— 275	弥生土器甕	14.8	—	—	2㎜以上の砂粒を含む	〃	外面茶褐色 内面黄褐色	——
35	— 276	〃	17.0	—	—	2㎜程度の砂粒を含む	〃	内外面淡黄褐色	内面ヘラ削り
35	— 277	〃	16.0	—	—	1～2㎜の砂粒を含む	〃	外面暗橙褐色 内面淡橙褐色	——
35	— 278	〃	16.8	—	—	1㎜前後の砂粒を含む	〃	外面淡黄灰褐色 内面黒褐色	——
35	64 279	〃	15.5	21.4	—	2㎜程度の砂粒を含む金雲母含む	〃	外面黒灰褐色 内面灰褐色	外面タタキ後ハケ目 内面ヘラ削り後ハケ目
35	— 280	〃	14.2	—	—	1㎜程度の砂粒に3㎜位の砂粒含む	〃	内外面淡褐色	外面ハケ目内面ヘラ削り
35	— 281	〃	16.7	—	—	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面橙褐色 内面淡褐色	——
35	— 282	〃	17.0	—	—	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡褐色 内面淡橙白色	——
35	— 283	〃	15.0	—	—	1～2㎜程度の砂粒を含む 金雲母含む	〃	外面淡黄褐色 内面淡黄灰褐色	内面ヘラ削り
35	— 284	〃	14.4	19.8	—	0.2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	内外面淡茶白色	外面タタキ後ハケ目
35	— 285	〃	14.9	—	—	2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面橙白色 内面淡黄灰褐色	外面ハケ目
35	— 286	〃	16.8	—	—	2～5㎜の砂粒を含む	〃	外面明橙褐色 内面淡橙灰褐色	器表面がかなり磨滅している
35	— 287	〃	15.4	—	—	1～2㎜程度の砂粒に5㎜程の砂粒が含まれる	〃	内外面明橙褐色	——
36	— 288	〃	14.5	23.0	—	2㎜程度の砂粒が含まれる	〃	内外面淡黒灰褐色	表面剥落著しい 外面タタキ後ハケ目 内面ヘラ削り
36	— 289	〃	12.8	—	—	〃	〃	外面明黄赤褐色 内面明黄赤褐色	表面剥落著しい
36	— 290	〃	13.0	—	—	〃	〃	外面淡黄赤褐色 内面淡橙褐色	表面剥落著しい 外面タタキ目 内面ハケ目
36	— 291	〃	12.6	—	—	1～2㎜程度の砂粒が含まれる	〃	外面淡黄褐色 内面明赤褐色	〃
36	— 292	〃	12.0	—	—	1～2㎜の砂粒が含まれる	〃	内外面淡黄橙褐色	〃
36	— 293	〃	11.8	—	—	〃	〃	外面淡褐色 内面淡褐色	表面剥落著しい 外面ハケ目 内面ヘラ削り
36	— 294	〃	—	—	—	2～3㎜の砂粒が含まれる	〃	外面灰褐色 内面淡褐色	表面剥落著しい
36	65 295	弥生土器小型器台	8.0	9.1	9.0	1㎜以下の砂粒に5㎜程度の大粒の砂粒が含まれる	〃	内外面黄灰褐色	外面指ナデ内面指頭痕
36	— 296	製塩土器底部	—	—	5.2	2～3㎜の砂粒が多量に含まれる	〃	外面淡橙黄灰色 内面暗灰黒色	外面タタキ目

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
36	— 297	土製品	—	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	普通	淡黄灰褐色	——
36	65 298	支脚	—	—	—	1㎜程度の砂粒含む	〃	内外面黄灰褐色	内側に指押さえが顕著に残る
37	— 299	弥生土器壺	28.6	—	—	2～3㎜の砂粒を含む	〃	外面淡黄褐色 内面淡黄褐色	西瀬戸内系か？
37	— 300	〃	24.3	—	—	〃	〃	外面淡黄褐色 内面淡橙褐色	二重口縁壺 内面にヘラミガキ
37	— 301	〃	15.4	—	—	1㎜程度の砂粒に3～5㎜程の砂粒を含む	〃	外面橙黄灰褐色 内面黄灰褐色	——
37	— 302	〃	10.2	—	—	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡褐色 内面黄灰褐色	外面ハケ目
37	— 303	〃	14.8	—	—	5㎜以上の大粒の砂粒を多く含む	〃	内外面淡黄灰褐色	外面ハケ目
37	— 304	〃	22.4	—	—	1～2㎜程の砂粒を含む	〃	内外面暗黄灰褐色	——
37	— 305	〃	19.0	—	—	1～2㎜程の砂粒を含む	〃	外面淡黄褐色 内面黄灰褐色	外面ハケ目
37	— 306	〃	11.8	—	—	2～3㎜の砂粒を含む	〃	外面淡黄褐色 内面黒黄灰褐色	——
37	66 307	弥生土器長頸壺	12.2	26.7	7.0	1～2㎜の砂粒を含む	良好	外面淡黄褐色 内面褐色	外面全体にていねいなハケ目を施している内面は指ナデ指押えで口縁部付近にハケ目のあとがある
38	65 308	弥生土器壺	21.0	—	—	2～3㎜の砂粒を含む	普通	内外面淡黄灰白色	体部内面ハケ目後指ナデ
38	65 309	弥生土器壺底部	—	—	—	2㎜程度の砂粒に5～6㎜程の大粒の砂粒を含む	〃	外面淡黄褐色 内面淡黄灰褐色	内外面全体にハケ目があるハケ後指ナデ
38	— 310	弥生土器壺	(12.8)	24.7	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	内外面淡茶色	内面ハケ目外面ヘラ削り後上部ハケ目
39	66 311	〃	22.0	(37.2)	—	0.2～5㎜程度の砂粒を含む	〃	内外面暗茶色	頸部外面ハケ目
39	— 312	弥生土器壺底部	—	—	—	〃	〃	内面濁茶白色 外面淡褐茶色	外面ハケ目内面ハケ目
38	— 313	弥生土器脚付鉢	—	—	—	2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	内外面橙白色	——
38	— 314	〃	—	—	10.4	〃	〃	内外面淡褐色	外面ヘラ削り内面ハケ目
38	65 315	弥生土器高坏（小型器台）	—	—	9.2	2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	内外面淡橙褐色	——
38	— 316	弥生土器高坏	—	—	—	2㎜程度の砂粒を含む	〃	〃	——
38	— 317	〃	—	—	14.2	3～4㎜程の砂粒を含む	〃	内外面淡黄褐色	脚部に3ヶ所穿孔有3ヶ所共に穿孔の高さが違う
38	65 318	〃	17.0	11.7	11.8	2㎜程度の砂粒に5㎜位の大粒の砂粒が混じる	〃	内外面赤褐色	〃

挿図番号	図版番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質	重量(g)	備考
40	— 319	スクレイパー	5.7	4.0	0.7	サヌカイト	14.5	——

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
41	— 320	弥生土器皿	12.2	3.8	—	1㎜程の砂粒を含む	普通	外面淡橙白色 内面淡黄褐色	内部に食物のせんい（ワラなど）の痕がある
41	— 321	弥生土器甕	13.8	—	—	2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡黄灰褐色 内面黒黄灰褐色	〃
41	— 322	〃	13.8	—	—	1㎜以下の砂粒を含む 金雲母を含む	〃	内外面褐色	内部に食物のせんい（ワラなど）の痕がある 酒津式土器搬入品
41	— 323	〃	14.9	—	—	〃	〃	内外面明褐色	——
41	— 324	弥生土器壺	15.4	—	—	2㎜以上の砂粒を含む	〃	内外面淡橙灰白色	内面ハケ目

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
41	325	弥生土器壺	16.2	—	—	1～2㎜程度の砂粒を含む	普通	外面淡黄褐色 内面橙灰白色	内面ヘラ削り
41	326	弥生土器底部	—	—	6.2	1㎜程度の砂粒に2～3㎜程の砂粒を含む	〃	外面褐色 内面灰黒色	〃
41	327	〃	—	—	6.1	1～2㎜程度の砂粒に4㎜程の砂粒を含む	〃	内外面暗灰白色	外面タタキ目
41	328	弥生土器脚付鉢	—	—	8.3	2㎜程の砂粒を含む	〃	内外面黄灰白色	〃
41	329	〃	—	—	9.8	1～2㎜程度の砂粒を含む 金雲母含む	〃	外面橙褐色（脚内外面） 内面灰黒色（鉢部の内面）	
41	330	弥生土器高坏	—	—	14.2	〃	〃	外面淡褐色 内面淡橙灰褐色	脚部2ヶ所穿孔
41	331	〃	—	—	—	2～3㎜の砂粒を含む	〃	内外面淡黄褐色	脚部3ヶ所穿孔1ヶ所穿孔位置異なる

包含層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
42	332	弥生土器皿	8.5	2.4	—	2㎜以上の砂粒を含む	普通	外面褐灰黄色 内面暗灰黒色	——
42	333	〃	7.0	2.5	—	2㎜以下の砂粒を含む	〃	内外面淡黄褐色	外面黒斑指頭痕
42	334	弥生土器壺	—	—	—	3～5㎜程度の砂粒を含む	〃	内外面明黄土色	——
42	335	弥生土器甕	13.2	—	—	2㎜以下の砂粒を含む	〃	内外面淡灰橙褐色	内面ヘラ削り
42	336	〃	—	—	—	2～3㎜程の砂粒を含む	〃	外面灰黒色 内面淡灰黄褐色	内外面指ナデ
42	337	弥生土器高坏	—	—	7.3	2㎜程の砂粒を少し含む	〃	外面淡褐色 内面淡橙褐色	内面にヘラミガキ
42	338	〃	—	—	11.8	2㎜以上の砂粒を含む金雲母含む	〃	外面橙灰白色 内面明橙色	——
42	339	〃	—	—	—	3～4㎜位の砂粒を含む	〃	内外面淡橙色	——
42	340	〃	—	—	—	1㎜以下の砂粒を含む金雲母含む	〃	内外面褐灰色	脚部穿孔は2ヶ所認められるが位置からして3ヶ所あったと思われる外から穿孔されたと思う
42	341	〃	—	—	—	2㎜以上の砂粒を含む	〃	外面明黄褐色 内面明黄褐色	脚部穿孔は2ヶ所認められるが位置からして3ヶ所あったと思われる中実
42	342	弥生土器壺	5.4	5.4	—	1㎜以下の細かい砂粒に2㎜程度の砂粒含む	〃	内外面明橙色	小型
42	343	〃	7.3 (7.6)	—	—	1～2㎜の砂粒を含む	〃	内外面淡黄橙色	——
42	344	〃	15.9	—	—	2㎜以上の砂粒を含む	〃	外面明黄土色 内面灰黒色	——
42	345	〃	18.0	—	—	1㎜程の砂粒を含む	〃	外面淡橙色 内面橙黒灰色	——
42	346	〃	18.0	—	—	1～2㎜程度の砂粒に4～5㎜程の大粒の砂粒を含む	〃	外面淡褐色 内面淡灰褐色	——
42	347	〃	21.8	—	—	1㎜以下の砂粒を含む金雲母含む	〃	外面淡橙色 内面黒黄灰褐色	——
42	348	〃	20.4	—	—	1㎜程度の砂粒に3㎜程の砂粒を含む	〃	外面淡黄灰色 内面灰白色	——
42	349	〃	21.0	—	—	〃	〃	〃	——
42	350	〃	21.4	—	—	2㎜以上の砂粒を含む	〃	外面淡橙色 内面明橙色	西瀬戸内系か？
43	351	〃	25.5	—	—	2㎜以上の砂粒を含む	〃	外面黒褐色 内面褐色	二重口縁壺か？
43	352	〃	24.0	—	—	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面橙赤褐色 内面橙褐色	〃
43	353	〃	25.6	—	—	2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡橙灰白色 内面淡黄灰白色	〃
43	354	〃	25.0	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	外面黄褐色 内面黄褐色	〃

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
43	355	弥生土器甕	—	—	3.5	2㎜程度の砂粒に5㎜以上の砂粒を含む	普通	外面黄黒褐色 内面橙黄土色	——
43	356	弥生土器底部	—	—	5.4	2㎜以下の砂粒を含む	〃	外面淡褐色 内面灰黒色	——
43	357	〃	—	—	—	2㎜程度の砂粒を含む 金雲母含む	〃	外面淡橙色 内面淡黄色	——
43	358	製塩土器底部	—	—	5.6	2㎜程度の砂粒を含む	〃	内外面淡灰褐色	外面指ナデ

挿図番号	図版番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質	重量(g)	備考
44	359	石鏃	4.1	(2.0)	0.3	サヌカイト	1.8	——
44	360	〃	2.8	1.8	0.55	〃	1.6	——
44	361	〃	2.0	1.9	0.4	〃	0.9	先端部欠損
44	362	〃	2.8	(1.4)	0.8	〃	1.7	——
44	363	〃	1.8	(1.3)	0.3	〃	0.5	先端部欠損
44	364	〃	2.35	(1.4)	0.25	〃	0.4	——
44	365	〃	1.85	(1.65)	0.35	〃	0.6	——
44	366	〃	1.55	1.6	0.35	〃	0.7	先端部欠損
44	367	〃	2.2	1.6	0.35	〃	0.7	——
44	368	〃	1.8	2.0	0.3	〃	0.8	先端部欠損
44	369	〃	1.95	1.35	0.2	〃	0.5	——
44	370	〃	2.7	1.45	0.25	〃	0.6	——
44	371	〃	2.15	1.4	0.35	〃	0.6	先端部欠損
44	372	〃	1.7	1.1	0.25	〃	0.3	〃
44	373	〃	1.4	(1.65)	0.3	〃	0.5	〃
44	374	〃	2.2	1.7	0.25	〃	0.8	——
44	375	〃	2.1	(1.2)	0.25	〃	0.6	——
44	376	〃	2.1	1.7	0.35	〃	0.7	——
44	377	〃	1.55	1.4	0.25	〃	0.4	——
44	378	〃	1.35	(1.2)	0.25	〃	0.4	——
44	379	〃	3.55	1.8	0.35	〃	2.2	——
44	380	〃	3.2	2.05	0.5	〃	2.5	——
44	381	〃	2.5	1.7	0.35	〃	0.9	——
44	382	〃	2.25	1.6	0.4	〃	0.9	——
44	383	〃	1.9	1.55	0.45	〃	0.9	——
44	384	〃	2.0	1.55	0.25	〃	0.6	——

挿図番号	図版番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質	重量(g)	備考
44	385	石鏃	1.7	1.4	0.35	サヌカイト	0.7	先端部欠損
44	386	〃	2.9	1.6	0.4	〃	2.0	〃
44	387	〃	2.1	1.05	0.35	〃	0.6	——
44	388	〃	3.15	2.1	0.45	〃	2.9	——
44	389	〃	2.4	1.75	0.5	〃	1.9	——
44	390	〃	2.45	1.65	0.5	〃	1.8	——
44	391	〃	2.5	1.65	0.35	〃	1.2	——
44	392	〃	1.5	1.7	0.25	〃	0.3	——
44	393	〃	1.6	1.15	0.25	〃	0.3	——
44	394	〃	1.65	1.2	0.25	〃	0.5	——
44	395	〃	2.0	1.65	0.3	〃	0.8	——
44	396	〃	2.7	0.95	0.3	〃	0.8	末端部欠損
44	397	〃	4.2	3.25	1.0	〃	12.4	——
45	398	石錐	1.95	1.05	0.4	〃	1.30	先端部欠損
45	399	〃	2.85	1.2	0.3 0.25	〃	0.9	〃
45	400	〃	5.0	1.35	0.75	〃	5.9	先端部・基部欠損
45	401	楔形石器	2.95	2.05	0.95	〃	8.0	——
45	402	打製石斧	4.75	5.55	1.2	〃	50.8	——
45	403	〃	5.4	4.75	1.55	〃	38.9	——
45	404	打製石包丁	3.7	5.6	0.7	〃	23.9	——
45	405	スクレイパー	5.8	10.65	1.0	〃	60.3	——
45	406	〃	5.1	8.6	1.1	〃	49.9	——
46	407	〃	2.0	6.05	0.7	〃	6.9	——
46	408	〃	3.5	6.0	0.6	〃	12.8	——
46	409	〃	4.2	6.2	0.6	〃	16.3	——
46	410	〃	3.5	4.95	0.5	〃	12.1	——
46	411	〃	4.6	5.0	0.4	〃	19.1	——
46	412	〃	5.95	4.25	1.25	〃	29.2	——
46	413	〃	3.55	7.05	1.55	〃	18.2	——
46	414	〃	3.8	6.45	1.0	〃	19.9	——
46	415	〃	3.4	7.85	1.1	〃	30.6	——
46	416	〃	3.5	7.4	0.9	〃	19.0	——

挿図 図版 番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	材質	重量 (g)	備考
47 — 417	スクレイパー	4.4	7.85	0.9	サヌカイト	29.2	——
47 — 418	〃	4.35	8.35	0.85	〃	26.6	——
47 — 419	〃	4.25	8.3	1.15	〃	35.7	——
47 — 420	〃	4.1	9.3	0.7	〃	29.2	——
47 — 421	〃	5.8	9.1	1.05	〃	43.6	——
47 — 422	〃	4.65	7.75	0.7	〃	29.3	——

SB02

挿図 図版 番号	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
54 — 423	土師器小皿	7.9	1.5	5.9	1㎜以下の砂粒を含む	良	濁黄色	底部ヘラ切り
54 — 424	〃	8.2	1.4	6.6	〃	〃	濁白色	〃
54 — 425	〃	7.8	1.5	5.0	〃	〃	淡黄茶色	〃
54 — 426	〃	8.2	1.9	4.8	細砂粒を含む	〃	黒灰色	底部糸切り 瓦質土器か？
54 — 427	土師器坏	14.3	3.7	9.5	0.2～4㎜程度の砂粒を含む	〃	濁茶白色	底部糸切り
54 — 428	〃	15.0	3.6	10.0	1㎜以下の砂粒を含む	〃	〃	〃

SB05

挿図 図版 番号	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
57 — 429	土師器坏	14.0	3.7	7.1	1㎜以下の砂粒を含む	良好	淡黄茶色	底部ヘラ切り
57 — 430	黒色土器椀	—	—	高台径 7.0	〃	〃	内面黒色 外面濁白色	A類

SB18

挿図 図版 番号	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
70 — 431	土師器小皿	8.7	1.9	6.0	1㎜以下の砂粒を含む	良好	濁茶黄色	底部糸切り
70 — 432	瓦器椀	16.2	—	—	細砂粒を含む	良	胎土白灰色 器表面黒色	——

SB23

挿図 図版 番号	器種	法量 (cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
76 — 433	土師器小皿	7.7	1.4	6.2	細砂粒を含む	良	暗灰黄色	底部ヘラ切り
76 — 434	〃	8.3	1.2	5.3	〃	〃	淡茶黄色	〃
76 — 435	〃	7.2	1.0	5.5	1㎜以下の砂粒を含む	〃	淡黄褐色	底部糸切り
76 — 436	〃	8.2	1.6	6.2	〃	〃	〃	底部調整不明
76 — 437	〃	8.4	1.4	5.9	〃	〃	濁白黄色	底部糸切り
76 — 438	土師器坏	14.3	—	—	細砂粒を含む	〃	淡黄茶色	〃
76 — 439	瓦質土器椀	14.0	4.4	高台径 5.4	〃	〃	濁灰色	内面板ナデ口縁端部外面にスス付着
76 — 440	須恵器こね鉢	29.7	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	暗灰色	東播系

SB25

挿図	図版	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
番号			口径	器高	底径				
79	—	瓦器椀	14.8	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	良	灰色	——
441									

SB27

挿図	図版	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
番号			口径	器高	底径				
84	—	土師器小皿	7.9	1.5	5.6	1㎜以下の砂粒を含む	良	淡黄茶色	底部糸切り
442									
84	—	瓦器椀	15.0	—	—	〃	〃	灰色	——
443									
84	—	〃	15.3	—	—	細砂粒を含む	〃	胎土白灰色 器表面黒色	——
444									

SB28

挿図	図版	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
番号			口径	器高	底径				
85	—	土師器小皿	8.0	1.0	6.0	細砂粒を含む	良	濁白黄色	底部ヘラ切り
445									
85	—	〃	8.8	1.4	7.0	0.2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	濁茶黄色	底部糸切り
446									

SB30

挿図	図版	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
番号			口径	器高	底径				
87	—	土師器坏	11.8	3.0	7.0	細砂粒を含む	良	淡褐白色	底部ヘラ切り
447									
87	—	〃	11.7	3.4	7.1	1㎜以下の砂粒を含む	良好	淡白褐色	〃
448									
87	—	〃	11.9	2.7	8.8	〃	良	淡白茶色	——
449									
87	—	黒色土器椀	—	—	高台径 6.7	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	内面黒色 外面淡白茶色	A類
450									
87	—	土師質土器土鍋	29.9	—	—	〃	〃	暗茶色	外面スス付着
451									
87	—	須恵器体部	—	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	不良	濁茶灰色	外面格子目叩き 十瓶焼か？
452									

SB33

挿図	図版	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
番号			口径	器高	底径				
91	—	土師器小皿	8.7	1.4	6.4	1㎜以下の砂粒を含む	良	濁黄白色	底部ヘラ切り
453									
91	—	〃	9.5	1.4	6.8	〃	〃	淡茶色	〃
454									
91	—	〃	7.8	1.2	6.0	〃	〃	濁白色	〃
455									
91	—	〃	7.8	1.5	5.7	〃	〃	淡茶黄色	〃
456									
91	—	〃	7.9	1.4	5.8	細砂粒を含む	〃	濁白色	〃
457									
91	—	〃	8.6	1.9	6.2	〃	〃	〃	〃
458									
91	—	〃	7.8	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	淡茶色	底部糸切り
459									
91	—	〃	8.5	1.5	6.5	1㎜以下の砂粒を含む	〃	濁黄白色	〃
460									
91	—	土師器坏	—	—	7.4	〃	〃	淡茶色	底部ヘラ切り
461									
91	—	瓦質土器椀	13.0	—	—	〃	〃	白灰色	——
462									
91	—	瓦器椀	14.7	—	—	精良	良好	胎土白灰色 器表面灰黒色	——
463									

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
91	—	瓦器椀	—	—	高台径 5.0	精良	不良	淡茶灰色	2次的に焼成を受けている
464									
91	—	瓦器小皿	9.1	—	—	細砂粒を含む	良	胎土灰色 器表面灰黒色	——
465									
91	—	須恵器甕体部	—	—	—	〃	良好	灰色	外面格子目叩き
466									
91	78	青磁碗	16.4	6.7	高台径 6.4	精良	〃	胎土濁黄色 釉緑色釉	龍泉窯系青磁椀Ⅰ類－4
467									
91	78	〃	16.3	—	—	〃	〃	胎土灰色 釉青緑色釉	同安窯系 青磁椀Ⅰ類－1・b
468									

SB35

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
94	—	土師器坏	—	—	7.3	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	良	淡黄茶色	底部ヘラ切り
469									
94	—	〃	11.4	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	〃	〃
470									
94	—	〃	12.9	3.0	7.1	0.2～3㎜程度の砂粒を含む	良好	濁黄色	〃
471									
94	—	土師器椀	13.0	—	—	〃	良	〃	——
472									
94	—	〃	14.5	—	—	細砂粒を含む	〃	淡黄茶色	——
473									
94	—	黒色土器椀	12.0	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	内面黒色 外面淡茶白色	A類
474									
94	—	〃	12.9	—	—	〃	〃	黒色	B類 口縁端部内面に沈線有
475									
94	—	土師器羽釜	33.1	—	—	〃	〃	濁茶黄色	——
476									

挿図番号	図版番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質	重量(g)	備考
94	—	銅銭	径 1.8	—	0.1	銅	——	皇朝銭か？
477								

SB36

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
95	—	土師器坏	—	—	6.6	細砂粒を多量に含む	良	淡茶色	底部ヘラ切り
478									
95	—	土師器椀	14.2	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を多量に含む	〃	濁茶白色	——
479									

SB37

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
96	—	土師器小皿	8.0	1.2	5.5	1㎜以下の砂粒を含む	良	暗灰黄色	底部ヘラ切り
480									
96	—	〃	7.4	1.6	2.5	細砂粒を含む	〃	淡黄茶色	〃
481									
96	—	〃	8.4	1.5	6.9	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	暗灰茶色	底部調整不明
482									
96	—	〃	8.0	1.4	5.6	細砂粒を含む	〃	黒灰色	底部糸切り
483									
96	—	土師器脚付小皿	—	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	淡黄茶色	——
484									
96	—	〃	—	—	8.1	〃	〃	〃	——
485									
96	—	土師器椀	15.1	—	—	微砂粒を含む	〃	〃	——
486									
96	—	土師器坏	14.4	3.3	9.5	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	濁白黄色	底部糸切り
487									

SB39

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
97	—	土師器小皿	8.0	1.4	5.1	細砂粒を含む	良	淡茶色	底部ヘラ切り
97	78	瓦質土器椀	14.0	4.8	5.3	〃	〃	灰色	底部糸切り

SB40

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
103	—	土師器小皿	8.2	1.5	4.4	1㎜以下の砂粒を含む	良	淡黄茶色	底部ヘラ切り
103	—	〃	7.4	1.3	6.4	〃	〃	濁茶黄色	〃
103	—	〃	8.2	1.2	5.8	細砂粒を含む	〃	〃	〃
103	—	土師器坏	11.4	—	7.8	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	淡茶黄色	〃
103	—	〃	13.9	3.8	10.0	〃	〃	暗茶黄色	底部糸切り
103	—	〃	13.7	3.5	8.4	〃	〃	暗黄白色	〃
103	—	瓦質土器椀	13.8	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	内面白灰色 外面灰黒色	——
103	—	土師器椀	14.1	—	—	〃	〃	淡茶色	——
103	—	〃	14.8	—	—	〃	〃	内面灰黒色 外面灰色	内面ハケ目、外面指頭痕、瓦質土器か？
103	78	土師器小皿	長幅 8.6	—	—	〃	良好	淡黄茶色	底部ヘラ切り、耳皿状に造られている
103	—	瓦質土器こね鉢	30.8	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	良	胎土白灰色 器表面灰黒色	——

SB41

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
104	—	瓦器椀	15.0	5.5	高台径 3.8	細砂粒を含む	良	灰黒色	——

SB42

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
107	—	土師器小皿	7.3	1.5	5.7	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	良	濁黄色	底部糸切り
107	—	土師器坏	—	—	8.1	細砂粒を含む	〃	淡茶色	〃

SB43

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
108	—	土師器小皿	8.1	1.3	6.1	1㎜以下の砂粒を含む	良好	淡茶黄色	底部糸切り
108	—	〃	8.0	1.7	6.1	〃	良	濁灰白色	〃
108	—	土師器椀	12.8	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	淡黄茶色	——

SB44

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
110	—	土師器坏	13.8	3.2	7.8	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	良	濁茶灰色	底部調整不明
110	—	土師器椀	—	—	高台径 7.6	1㎜以下の砂粒を含む	〃	〃	瓦質土器か？

SB45

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
112	—	土師器椀	12.4	—	—	0.2～3㎜程度の砂粒を含む	良	濁黄白色	「早島式土器」か？石英含む
509									
112	—	土師質土器土鍋	42.6	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	良好	茶色	外面にスス付着
510									

SB47

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
116	—	土師器小皿	8.6	1.0	7.1	細砂粒を含む	良好	淡黄茶色	底部ヘラ切り
511									

SB50

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
118	—	土師器椀	11.0	—	—	細砂粒を含む	良好	濁黄白色	「早島式土器」か？
512									
118	—	土師器坏	12.0	—	—	精良	〃	〃	——
513									

SB51

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
119	—	土師器小皿	6.4	1.3	5.6	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	良	濁黄白色	底部ヘラ切り
514									

SB53

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
124	—	土師器坏	9.2	2.1	6.0	細砂粒を含む	良	茶色	底部ヘラ切り
515									
124	—	〃	—	—	3.5	1㎜以下の砂粒を含む	良好	淡黄茶色	〃
516									
124	—	黒色土器椀	—	—	高台径 7.0	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	内面黒色 外面濁白色	A類
517									
124	—	土師質土器土鍋	—	—	—	〃	〃	暗茶灰色	外面にスス付着
518									

SB54

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
127	—	土師器坏	9.8	2.2	3.7	0.2～2㎜程度の砂粒を多量に含む	良	濁茶白色	底部ヘラ切り
519									
127	—	〃	11.4	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	淡褐茶色	——
520									
127	—	〃	11.6	2.5	6.8	〃	良好	濁茶黄色	底部ヘラ切り
521									
127	—	〃	11.6	—	7.2	〃	〃	暗茶灰色	〃
522									
127	—	黒色土師椀	17.9	—	—	精良	良	淡黄茶色	A類
523									
127	—	〃	—	—	高台径 7.8	細砂粒を含む	良好	内面黒色 外面濁白色	A類
524									
127	—	土師質土器土鍋	—	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	良	茶色	——
525									

SB59

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
133	—	土師器椀	—	—	高台径 6.4	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	良	濁白色	——
526									

SB60

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
134	— 527	土師器小皿	8.2	—	6.3	細砂粒を含む	良	白黄色	底部ヘラ切り
134	— 528	〃	9.3	—	7.2	〃	〃	淡茶色	〃
134	— 529	黒色土器椀	15.1	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	内面黒色 外面濁黄白色	A類
134	— 530	〃	15.0	—	—	〃	〃	黒色	B類
134	— 531	〃	—	—	高台径 5.7	細砂粒を含む	〃	内面黒色 外面濁黄白色	A類

SD47

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
137	— 532	土師器小皿	8.1	2.1	6.1	1㎜以下の砂粒を含む	普通	黄灰白色	底部ヘラ切り
137	67 533	〃	7.7	2.1	6.1	1㎜程の砂粒に3㎜程度の砂粒を含む	〃	橙白色	〃
137	— 534	〃	8.5	2.0	6.7	2～3㎜程度の砂粒を多く含む	〃	黄灰白色	〃
137	— 535	〃	8.2	1.4	7.0	1㎜以下の砂粒を含む金雲母含む	〃	外面淡橙褐色 内面淡黄褐色	〃
137	— 536	〃	8.0	1.5	5.5	1㎜以下の砂粒を含む	〃	外面淡黄褐色 内面淡橙褐色	底部ヘラ切り 底に近いところに沈線状の凹線有
137	— 537	〃	8.8	1.3	8.0	〃	〃	淡黄褐色	底部ヘラ切り
137	— 538	〃	8.0	1.0	6.9	2～3㎜の大粒の砂粒を含む	〃	外面淡橙褐色 内面茶褐色	底部ヘラ切り 内面に鉄分状のものが一面に付着している
137	— 539	〃	8.3	1.3	6.7	1㎜以下の砂粒を含む	〃	外面黄灰白色 内面淡橙褐色	底部ヘラ切り 底に近いところに沈線状の凹線有
137	— 540	〃	8.3	1.0	7.3	1㎜以下の砂粒に3㎜以上の砂粒を含む金雲母含む	〃	〃	底部ヘラ切り
137	— 541	〃	8.1	1.7	5.9	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	橙灰褐色	〃
137	— 542	〃	8.5	1.8	6.5	1㎜程度の砂粒に3㎜程の砂粒を含む	〃	淡橙白色	〃
137	— 543	〃	8.3	1.2	5.5	1㎜以下の砂粒に3～4㎜の砂粒を含む	〃	外面淡橙白色 内面明橙色（茶褐色）	底部ヘラ切り 内面に鉄分状のものが付着している
137	— 544	〃	7.6	1.4	5.5	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	淡黄灰白色	底部ヘラ切り
137	— 545	〃	7.7	1.5	5.8	1㎜以下の砂粒を含む金雲母を含む	〃	〃	〃
137	— 546	〃	8.4	1.5	6.0	1～2㎜の砂粒を含む	〃	〃	〃
137	— 547	〃	7.6	1.6	5.8	1㎜以下の砂粒に3㎜以上の砂粒を含む	〃	外面橙褐色 内面淡橙褐色	底部ヘラ切り 外面に鉄分状のものが付着している
137	— 548	〃	7.4	1.5	6.5	1～2㎜の砂粒を少し含む	〃	外面黄灰白色 内面淡橙褐色	〃
137	— 549	〃	7.8	1.6	4.9	1㎜以下の砂粒を含む	〃	外面淡橙白色 内面黄灰白色	底部ヘラ切り
137	— 550	〃	8.0	1.4	5.3	1㎜程度の砂粒を含む	〃	淡橙褐色	〃
137	— 551	〃	8.5	1.4	6.7	1㎜以下の砂粒を含む金雲母を含む	〃	黄灰褐色	〃
137	— 552	〃	7.3	1.2	5.9	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡橙灰色 内面淡橙褐色	〃
137	— 553	〃	8.1	1.5	6.2	2㎜以下の砂粒を含む	〃	暗橙灰褐色	〃
137	— 554	〃	7.5	1.2	5.8	1㎜以下の砂粒に2㎜以上の砂粒を含む	〃	淡黄白色	〃
137	— 555	〃	7.8	1.8	6.1	〃	〃	外面淡橙色 内面淡橙白色	〃

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
137	67 556	土師器小皿	8.5	2.1	5.7	1㎜以下の砂粒を含む 金雲母を含む	普通	外面黄灰白色 内面淡橙褐白色	底部糸切り
137	— 557	〃	7.2	1.7	4.6	1㎜以下の砂粒を含む	不良	淡灰色	〃
137	— 558	〃	7.8	1.6	4.6	1㎜以下の砂粒に2㎜程の砂粒を含む	〃	〃	〃
137	— 559	〃	7.9	1.3	5.8	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡桃白色 内面淡橙色	〃
137	— 560	〃	8.0	1.4	6.3	1㎜以下の砂粒に2㎜程度の砂粒を含む金雲母を含む	〃	褐灰色	〃
137	— 561	〃	7.4	1.2	6.1	1㎜以下の細かい砂粒を含む	普通	黄灰白色	〃
137	— 562	土師器台付小皿	6.0	1.8	3.7	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	〃	〃
137	— 563	土師器坏	11.9	2.8	8.0	2㎜以下の砂粒を含む	〃	外面淡黄褐色 内面淡橙黄褐色	〃
137	— 564	〃	12.3	4.0	7.6	2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡黄褐色 内面淡橙黄褐色	底部糸切り 内面に鉄分状のものが付着している
137	— 565	〃	12.8	3.3	9.5	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡黄褐色 内面淡橙褐色	底部糸切り
137	— 566	〃	13.7	3.2	9.9	1㎜以下の砂粒に2㎜程度の砂粒を含む	〃	淡橙褐色	〃
137	— 567	〃	13.5	3.5	9.4	2㎜以上の砂粒を含む	〃	外面淡橙褐色 内面淡黄褐色	〃
137	— 568	〃	14.6	3.5	8.7	2㎜程度の砂粒を含む	〃	淡黄灰褐色	〃
137	— 569	〃	14.7	3.5	10.1	1㎜以下の砂粒に3～5㎜の砂粒を含む金雲母含む	〃	淡黄灰褐色	〃
137	— 570	〃	14.6	3.9	9.7	1～2㎜程度の砂粒を含む 金雲母含む	〃	外面淡黄灰褐色 内面淡橙褐色	底部糸切り 内面に鉄分状のものが付着している
137	— 571	〃	13.9	3.2	8.5	1㎜以下の砂粒に2㎜程度の砂粒を含む金雲母含む	〃	黄灰褐色	底部糸切り
137	— 572	〃	14.6	3.7	9.6	1㎜以下の砂粒に4㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡橙褐色 内面明橙褐色	〃
137	— 573	〃	12.6	3.6	9.0	2㎜程度の砂粒を含む	〃	淡黄色	底部ヘラ切り
137	— 574	〃	14.1	3.9	7.6	1㎜以下のキメの細かい砂粒を含む	〃	淡灰白色	〃
137	67 575	〃	13.7	3.8	9.8	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡橙褐色 内面淡橙白色	〃
137	— 576	土師器椀	—	—	高台径 6.9	1～2㎜程度の砂粒を含む 金雲母を含む	〃	外面暗褐灰色 内面黄灰褐色	底部糸切り 円盤状高台を持つ
137	— 577	〃	—	—	高台径 6.6	1㎜程度の砂粒を含む	〃	淡橙白色	〃
137	— 578	〃	—	—	高台径 5.8	1㎜以下の砂粒に3㎜程度の砂粒を含む	〃	外面暗褐灰色 内面黄灰褐色	〃
137	— 579	〃	13.6	4.6	高台径 8.0	1㎜以下の砂粒を含む	〃	外面淡黄褐色 内面淡黄灰褐色	〃
137	— 580	土師器脚付小皿	—	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	淡黄褐色	鉄分状のものが付着している
138	— 581	土師器椀	12.1	—	—	1㎜以下の砂粒に2～3㎜の砂粒を含む	〃	淡褐色	——
138	— 582	〃	13.1	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	外面淡灰褐色 内面淡黄色	——
138	— 583	〃	15.1	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	外面淡桃灰白色 内面灰褐色	内面鉄分状のものが付着している
138	— 584	〃	13.7	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	不良	淡灰色	——
138	— 585	〃	12.8	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	普通	外面淡黒灰色 内面黒灰白色	——
138	— 586	〃	10.8	—	—	1㎜程度の砂粒を含む	〃	淡橙灰白色	——
138	— 587	〃	12.7	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	淡灰色	——

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
138	—	土師器椀	13.8	—	—	1㎜程度の砂粒を含む	普通	淡黄灰白色	——
138	—	〃	—	—	高台径 5.9	1㎜程度の砂粒を含む	〃	〃	——
138	—	〃	—	—	高台径 5.8	〃	〃	黄灰白色	——
138	—	〃	—	—	高台径 7.6	1㎜以下の砂粒を含む	〃	黄灰白色	——
138	—	〃	—	—	高台径 5.5	1㎜以下の砂粒を含む	〃	外面黄灰色 内面灰白色	——
138	—	〃	—	—	高台径 6.6	1㎜以下の砂粒を含む	〃	黄灰白色	——
138	—	〃	—	—	高台径 6.0	1㎜程度の砂粒を含む	〃	褐色	——
138	—	〃	—	—	高台径 6.5	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	淡黄灰白色	——
138	—	瓦質土器椀	14.5	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	不良	外面淡灰色 内面黄褐色	——
138	—	〃	15.0	—	—	1㎜程度の砂粒を含む	普通	外面淡灰褐色 内面淡灰色	——
138	—	〃	14.8	—	—	〃	〃	外面灰黒色 内面黒灰色	——
138	—	〃	13.0	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	外面黒灰色 内面淡灰色	——
138	—	〃	14.8	—	—	1㎜程度の砂粒を含む	〃	外面灰白色 内面淡黄灰色	——
138	—	〃	14.9	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	外面黒灰色 内面淡灰色	——
138	67	〃	13.3	5.1	高台径 6.0	〃	〃	淡灰色	——
138	67	〃	—	—	高台径 5.1	〃	〃	外面灰黄色 内面淡灰色	——
138	67	〃	—	—	高台径 6.2	1㎜以下の砂粒に2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	黄灰白色	——
138	—	〃	—	—	高台径 5.1	1㎜以下の砂粒を含む金雲母を含む	〃	淡黄灰白色	——
138	67	〃	—	—	高台径 5.4	1㎜以下の砂粒を含む	〃	淡灰白色	——
138	67	〃	—	—	高台径 5.6	1㎜程度の砂粒を含む	〃	淡灰色	——
138	—	〃	—	—	高台径 5.8	1㎜以下の砂粒を多く含む	〃	外面灰黒色 内面黒灰色	——
138	—	瓦器椀	13.7	—	—	〃	〃	胎土白灰色 器表面淡灰黒色	——
138	—	〃	15.5	—	—	〃	〃	胎土白灰色 器表面黒灰色	——
138	—	〃	15.0	—	—	1㎜以下の砂粒を多く含む 金雲母を含む	〃	胎土白灰色 器表面褐灰白色	——
138	—	〃	16.1	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	胎土白灰色 器表面灰黄褐色	——
139	—	〃	13.8	4.0	高台径 3.7	〃	〃	胎土白灰色 器表面黄灰黒色	外面指押さえ
139	—	〃	15.0	—	—	1㎜以下の砂粒を含む金雲母を含む	〃	胎土白灰色 器表面黒黄灰色	——
139	—	〃	15.4	4.3	高台径 4.6	〃	〃	胎土白灰色 器表面淡灰色	口縁部横ナデ、指押さえ
139	—	〃	16.5	4.3	高台径 4.8	1㎜以下の砂粒を含む	〃	胎土白灰色 器表面黄灰褐色	内面ヘラ磨きがうっすらと残る
139	—	〃	15.6	4.7	高台径 4.1	〃	〃	胎土白灰色 器表面灰黒色	——
139	—	〃	14.3	—	—	〃	〃	胎土白灰色 器表面黒灰色	内面ヘラ磨き
139	—	〃	16.0	—	—	1㎜以下の砂粒を含む金雲母を含む	〃	胎土白灰色 器表面灰黒色	——

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
139	— 620	瓦器椀	16.1	4.5	高台径 3.7	1㎜以下の砂粒を含む	普通	胎土白灰色 器表面黄灰色	内面うすいヘラ磨き
139	— 621	〃	15.5	4.7	高台径 4.4	〃	〃	胎土白灰色 器表面黒灰色	——
139	— 622	〃	15.0	4.6	高台径 4.8	1㎜程度の砂粒を含む	〃	胎土白灰色 器表面黒黄灰色	内面鉄分状のものが付着している
139	67 623	〃	15.1	4.3	高台径 4.1	1㎜以下の砂粒を含む	〃	胎土白灰色 器表面明灰色	外面指押さえ 内面ヘラ磨き
139	— 624	〃	15.2	4.8	高台径 3.7	1㎜程度の砂粒を含む	〃	胎土白灰色 器表面暗灰黒色	内面ヘラ磨き
139	— 625	〃	15.2	4.1	高台径 3.2	1㎜以下の砂粒に4～5㎜の砂粒を含む	〃	胎土白灰色 器表面明灰色	外面指押さえ 内面ヘラ磨き
139	— 626	〃	15.9	5.0	高台径 4.2	1㎜以下の砂粒を含む	〃	胎土白灰色 器表面暗灰色	〃
139	67 627	瓦器小皿	8.7	1.5	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	胎土白灰色 器表面淡黄褐色	外面指押さえ内面ヘラ磨きがうっすらと残る
139	— 628	〃	8.0	1.5	—	〃	〃	胎土白灰色 器表面灰黒色	底部外面指押さえ
139	— 629	〃	8.6	2.0	—	〃	〃	胎土白灰色 器表面淡黒灰色	外面指押さえ
140	— 630	土師質土器土鍋	26.5	—	—	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面黒橙褐色 内面淡黄褐色	——
140	— 631	〃	31.1	—	—	3～4㎜程度の砂粒を含む	〃	外面暗黒褐色 内面橙褐色	——
140	— 632	〃	35.3	—	—	2㎜程度の砂粒を含む	〃	淡黄褐色	——
140	— 633	〃	38.8	—	—	3～4㎜程度の砂粒を含む 金雲母を含む	〃	外面暗褐色 内面褐色	——
140	— 634	〃	42.0	—	—	2㎜程度の砂粒を含む	〃	淡黄褐色	——
140	— 635	〃	41.4	—	—	2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	外面暗褐色 内面橙褐色	——
140	— 636	〃	42.6	—	—	〃	〃	赤褐色	——
141	— 637	須恵器こね鉢	15.6	—	—	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	明灰色	東播系
141	— 638	〃	—	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	〃	〃
141	— 639	瓦質土器鉢	—	—	12.9	〃	〃	外面灰黒色 内面灰白色	——
141	— 640	〃	—	—	13.9	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面灰黒色 内面黄灰色	——
141	— 641	瓦質土器こね鉢	—	—	—	2㎜程度の砂粒を含む	〃	暗黒色	——
141	— 642	瓦質土器こね鉢	26.2	—	—	2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面灰白色 内面黒灰色	亀山焼
141	— 643	瓦質土器甕	24.7	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	淡黒灰色	〃
141	— 644	〃	—	—	—	1㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡灰色 内面淡黄灰白色	外面平行叩き 亀山焼
141	— 645	〃	—	—	—	〃	〃	明灰色	外面格子目叩き 亀山焼
141	— 646	須恵器甕	—	—	—	2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面灰色 内面淡灰褐色	外面平行叩き、深い明瞭な叩き目 瓦質焼成、東播系
141	— 647	〃	—	—	—	1㎜以下の砂粒に2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面黒灰色 内面淡褐灰色	外面格子目叩き
141	— 648	陶器甕	33.0	—	—	1㎜程度の砂粒を含む	〃	外面暗茶灰色 内面緑灰色	口縁内面自然釉 常滑焼
141	— 649	青磁皿	10.4	—	—	堅緻	〃	粘土白灰色 釉緑灰色釉	内面沈線状の凹線 青磁皿Ⅰ類

挿図番号	図版番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質	重量(g)	備考
141	—	硯	(7.2)	(5.2)	2.1	滑石	(151.7)	——
650								

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
142	—	土師質土器羽釜脚	—	—	—	1～2㎜程度の砂粒を含む	普通	淡橙色	——
651									
142	—	〃	—	—	—	1㎜以下の砂粒に5㎜程度の砂粒を含む	〃	暗黄褐色	——
652									
142	—	〃	—	—	—	2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	暗褐色	——
653									
142	—	土師質土器竈	—	—	—	2～5㎜位の大粒の砂粒を含む	〃	外面淡橙色 内面黒橙褐色	内側部分に5条／cmのはっきりとした刷毛目が認められる
654									
142	—	〃	—	—	—	2～5㎜位の大粒の砂粒を含む 金雲母含む	〃	暗褐色	〃
655									
142	—	土製品	2.0	3.7	3.75	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	淡褐色	——
656									
142	—	土錘	全長 5.3	最大径 3.1	—	1㎜程度の砂粒を含む	〃	淡黄色	——
657									

SD48

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
143	—	土師器小皿	8.3	1.6	5.8	2㎜程度の砂粒に4～5㎜の砂粒を含む	普通	外面淡橙色 内面淡黄褐色	底部ヘラ切り
658									
143	—	〃	7.8	1.2	7.0	〃	〃	淡黄褐色	〃
659									
143	—	〃	8.0	1.3	6.6	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡黄灰褐色 内面淡黄灰褐色	底部糸切り
660									
143	—	土師器坏	13.7	3.4	9.2	3㎜程度の砂粒を少し含む	〃	外面褐色 内面褐色	〃
661									
143	—	〃	15.0	3.5	9.2	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面明橙色 内面淡橙色	〃
662									
143	—	瓦器小皿	9.8	—	—	1㎜以下の細かい砂粒を含む	〃	胎土白灰色 器表面灰黒色	——
663									
143	—	瓦器椀	14.8	—	—	〃	〃	胎土白灰色 器表面灰色	——
664									

SD50

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
143	—	土師器小皿	8.2	1.1	7.4	1㎜以下の細かい砂粒を少し含む	普通	外面明橙色 内面明橙色	底部ヘラ切り
665									
143	—	〃	7.8	1.5	6.0	1㎜以下のキメ細かい砂粒に2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡黄灰褐色 内面淡黄灰褐色	底部糸切り
666									
143	—	〃	7.8	1.5	5.8	1㎜以下の細かい砂粒を少し含む金雲母を含む	〃	外面暗灰褐色 内面灰褐色	〃
667									
143	—	〃	8.0	1.5	5.7	1㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡黄灰褐色 内面淡黄灰褐色	〃
668									
143	—	〃	7.8	—	5.9	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面明黄褐色 内面明黄褐色	底部調整不明
669									
143	—	〃	8.4	1.3	6.0	1～2㎜程度の砂粒を含む 金雲母含む	〃	外面淡黄褐色 内面淡黄褐色	底部糸切り
670									
143	—	土師器椀	12.0	—	—	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面灰白色 内面灰白色	——
671									
143	—	〃	14.0	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	外面黄灰白色 内面黄灰白色	——
672									
143	—	瓦器椀	15.0	—	—	〃	〃	胎土白灰色 器表面淡灰色	——
673									
143	—	〃	13.6	—	—	1㎜以下の砂粒に3㎜程度の砂粒を含む	〃	胎土白灰色 器表面灰黒色	——
674									
143	—	瓦器小皿	7.8	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	胎土白灰色 器表面淡黒灰色	——
675									

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
143	—	瓦質土器	—	—	高台径 4.8	1㎜以下の砂粒を含む	普通	外面灰白色 内面灰白色	——
676									
143	—	青磁碗	—	—	—	堅緻	〃	胎土灰色 釉灰緑色釉	龍泉窯系青磁椀Ⅰ類－4
677									
143	—	土師質土器土鍋	36.0	—	—	2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面茶褐色 内面淡褐色	——
678									

SD51

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
144	—	土師器小皿	8.0	1.1	6.0	1㎜以下の砂粒を含む	普通	外面黄灰白色 内面黄灰白色	底部糸切り
679									
144	—	〃	7.8	1.3	5.0	〃	〃	外面淡灰褐色 内面淡灰褐色	底部ヘラ切り
680									
144	—	〃	8.8	1.6	6.6	〃	〃	外面黒橙灰色 内面黒橙灰色	底部糸切り
681									
144	—	〃	6.3	1.5	5.0	1㎜以下の砂粒を含む金雲母を含む	〃	外面灰褐色 内面橙褐色	内面鉄分が付着している 底部糸切り
682									
144	—	〃	7.2	1.4	5.4	1㎜以下の砂粒を含む	〃	外面淡橙褐色 内面淡橙褐色	底部糸切り
683									
144	—	〃	7.6	1.3	6.2	〃	〃	外面淡黄褐色 内面淡橙褐色	〃
684									
144	—	〃	7.2	1.2	5.6	〃	〃	外面淡黄灰白色 内面淡黄灰白色	〃
685									
144	—	〃	7.6	1.2	5.2	1㎜以下の砂粒を含む金雲母を含む	〃	外面黄灰褐色 内面黄灰褐色	〃
686									
144	—	〃	8.0	1.5	6.4	1㎜以下の砂粒を含む	〃	外面淡橙色 内面淡黄色	底部ヘラ切り
687									
144	68	〃	—	—	4.0	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡褐色 内面淡橙褐色	底部糸切り
688									
144	68	〃	6.0	1.7	4.2	2㎜程度の砂粒を含む	〃	〃	〃
689									
144	68	〃	5.4	1.6	4.8	2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡橙褐色 内面淡橙褐色	〃
690									
144	—	土師器坏	—	—	6.0	1㎜以下の砂粒を含む	〃	外面淡橙褐色 内面橙灰白色	〃
691									
144	—	〃	12.0	3.0	5.8	1㎜程度の砂粒を含む	〃	外面灰白色 内面灰白色	〃
692									
144	—	〃	12.6	3.0	9.2	1㎜以下の細かい砂粒を含む金雲母を含む	〃	外面淡橙褐色 内面淡黄褐色	〃
693									
144	—	土師器椀	14.0	—	—	2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡黄灰白色 内面淡黄灰白色	——
694									
144	—	〃	—	—	高台径 5.0	1㎜以下の細かい砂粒を含む	〃	外面黄灰白色 内面黄灰白色	——
695									
144	—	〃	—	—	高台径 5.6	2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	外面灰褐色 内面褐灰白色	——
696									
144	68	瓦質土器椀	14.0	4.6	高台径 4.4	1㎜以下の砂粒を含む	〃	外面灰白色 内面灰白色	——
697									
144	—	〃	15.0	—	—	2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡褐灰色 内面淡褐灰色	——
698									
144	—	〃	—	—	高台径 6.0	1㎜以下の砂粒に2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡灰色 内面淡灰色	——
699									
144	—	〃	—	—	高台径 6.0	〃	〃	外面淡灰色 内面淡灰色	——
700									
144	—	瓦器椀	15.7	—	—	1㎜以下の細かい砂粒を含む	〃	胎土白灰色 器表面灰黒色	——
701									
144	—	〃	—	—	高台径 4.7	1㎜以下の砂粒を含む	〃	胎土白灰色 器表面暗灰色	——
702									
144	68	瓦器小皿	8.7	2.0	—	〃	〃	胎土白灰色 器表面灰黒色	——
703									
144	69	青磁碗	—	—	高台径 6.0	堅緻	〃	胎土灰色 釉灰青緑色釉	龍泉窯系青磁椀Ⅰ類－4
704									
144	69	〃	—	—	高台径 5.8	〃	〃	胎土灰色 釉灰緑色釉	〃
705									

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
144	69 706	青磁碗	—	—	高台径 6.0	堅緻	良好	胎土灰白色 釉暗灰緑色釉	龍泉窯系青磁椀Ⅰ類－4
144	69 707	白磁碗	10.0	—	—	〃	〃	胎土灰白色 釉淡緑灰色釉	白磁椀Ⅳ類－1
144	69 708	〃	—	—	高台径 6.0	〃	〃	〃	白磁椀Ⅴ類
144	69 709	白磁皿	7.0	—	—	〃	〃	〃	白磁皿Ⅷ類
144	— 710	須恵器こね鉢	21.8	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	普通	外面明青灰色 内面明灰色	東播系
144	— 711	〃	27.4	—	—	2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡褐灰色 内面淡褐灰色	〃
145	— 712	瓦質土器こね鉢	29.0	—	—	2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	外面灰黒色 内面灰黒色	——
145	— 713	〃	16.0	—	—	1㎜以下のキメ細かい砂粒を含む	〃	外面灰色 内面灰色	——
145	— 714	亀山焼甕	34.0	—	—	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡灰色 内面淡灰色	——
145	70 715	〃	—	—	—	〃	〃	外面黒灰色 内面黄灰色	外面格子目叩き
145	70 716	須恵器甕	—	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	外面暗灰色 内面淡灰色	平行叩き、東播系
145	70 717	〃	—	—	—	〃	〃	外面灰色 内面灰色	〃
145	— 718	〃	(20.0)	—	—	1㎜以下の砂粒を含む金雲母を含む	〃	外面淡黄灰色 内面淡黄灰色	東播系
145	— 719	瓦質土器土鍋	26.0	—	—	1～2㎜程度の砂粒を含む 金雲母を含む	〃	外面暗褐色 内面黒色	——
145	— 720	〃	24.0	—	—	〃	〃	外面黒褐色 内面橙褐色	——
145	68 721	土製品	3.0	3.2	(4.0)	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	淡橙褐色	——
145	68 722	〃	4.0	2.7	4.6	1㎜以下の砂粒に2㎜程度の砂粒を含む	〃	灰褐色	——

挿図番号	図版番号	器種	全長(cm)	頭部径(cm)	先端部径(cm)	材質	備考
145	— 723	鉄釘	8.1	9×(8)	(2)×(2)	鉄	——

SD54

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
146	— 724	土師器坏	11.8	3.3	7.5	1～2㎜程度の砂粒を含む	普通	外面淡橙色 内面淡灰褐色	底部糸切り
146	— 725	土師器椀	—	—	高台径 6.0	〃	〃	外面淡黄灰色 内面淡黄灰色	——
146	— 726	〃	13.4	—	—	2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡黄褐色 内面淡黄褐色	——

SD66・67・69

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
148	— 727	土師器椀	—	—	高台径 7.3	1㎜以下の砂粒を含む	普通	外面淡黄灰白色 内面淡黄灰白色	——
148	— 728	〃	14.8	—	—	1㎜以下の砂粒に4～5㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡黄褐色 内面淡褐色	——
148	— 729	土師器小皿	8.2	1.1	6.5	1㎜以下の細かい砂粒を含む	〃	外面淡黄灰色 内面淡黄褐色	底部ヘラ切り
148	— 730	土師器坏	10.8	2.3	8.0	1㎜以下の砂粒に2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡橙褐色 内面淡橙褐色	〃
148	— 731	〃	12.2	2.6	6.8	1㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡橙色 内面淡黄褐色	〃

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
148	—	土師器椀	12.0	—	—	1㎜以下の砂粒を含む金雲母を含む	普通	外面淡橙褐色 内面淡黄褐色	——
148	—	瓦器椀	14.0	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	胎土白灰色 色調淡灰色	——
148	—	瓦器小皿	12.5	—	—	〃	〃	胎土白灰色 色調灰黒色	——
148	—	黒色土器椀	11.6	—	—	〃	〃	外面黒色 内面黒色	内外面ヘラ磨き B類
148	—	〃	14.6	—	—	1㎜以下の砂粒を含む 金雲母を含む	〃	〃	内面ヘラ磨き B類
148	70	瓦質土器甕	—	—	26.0	1～2㎜程度の砂粒を含む金雲母を含む	〃	外面暗褐色 内面暗褐色	外面格子目叩き 内面ハケ目

SK02

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
150	—	土師器坏	13.0	3.6	6.2	精良	良	淡茶黄色	底部糸切り

SK04

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
150	—	土師器椀	13.8	—	—	細砂粒を少量含む	良好	淡白黄色	内面に指ナデ痕有

SK17

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
152	—	土師器小皿	8.2	1.8	3.2	1㎜程度の砂粒と金雲母含む	普通	外面淡褐色 内面淡橙褐色	底部ヘラ切り
152	—	〃	7.8	1.2	6.0	1㎜以下の砂粒を含む金雲母含む	〃	外面淡黄褐色 内面淡黄褐色	〃
152	—	〃	7.8	1.5	6.5	1㎜程度の砂粒を含む	〃	外面暗黄灰褐色 内面暗黄灰褐色	底部糸切り
152	—	〃	8.0	1.5	6.0	1㎜以下の細かい砂粒を含む	〃	外面黄灰褐色 内面黄灰褐色	底部ヘラ切り
152	—	〃	8.6	1.5	6.6	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡橙色 内面淡橙色	〃
152	—	〃	8.8	1.5	7.0	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡黄褐色 内面淡黄褐色	〃
152	—	〃	8.6	2.1	6.0	1㎜以下の細かい砂粒を含む	〃	外面灰白色 内面黄灰白色	〃
152	—	〃	8.0	1.7	6.4	1㎜以下の細かい砂粒を含む 金雲母を含む	〃	外面淡褐色 内面淡褐色	底部糸切り
152	—	〃	—	—	4.0	〃	〃	〃	底部糸切り 円盤状高台
152	—	土師器坏	13.4	3.3	9.0	2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡橙色 内面淡橙色	底部糸切り
152	—	〃	14.4	3.0	9.4	1～2㎜程度の砂粒を含む 金雲母含む	〃	外面黄褐色 内面黄褐色	〃
152	—	〃	14.4	3.0	10.0	〃	〃	外面淡橙褐色 内面淡橙褐色	〃
152	—	〃	14.8	(4.2)	7.6	1～2㎜程度の砂粒を多量に含む	〃	外面橙褐色 内面橙褐色	底部ヘラ切り
152	—	瓦質土器椀	14.0	—	—	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面灰白色 内面黒灰色	——
152	—	〃	—	—	高台径 6.6	2㎜程度の砂粒を少量含む 金雲母含む	〃	外面橙灰色 内面橙灰白色	——
152	—	瓦質土器小皿	7.6	1.3	6.2	1㎜程度の砂粒を含む	〃	外面黒灰色 内面灰黒色	底部ヘラ切り
152	—	須恵器甕	—	—	—	〃	〃	外面灰色 内面緑灰色	東播系
152	—	瓦質土器甕	—	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	外面黒色 内面灰褐色	格子目叩き 亀山焼か？

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
152	—	瓦質土器甕	—	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	普通	外面灰褐色 内面灰褐色	格子目叩き 亀山焼か？
152	—	青磁碗	—	—	—	堅緻	〃	胎土灰色 釉青緑灰色釉	龍泉窯系青磁椀Ⅰ類
152	—	土製品	2.3	3.1	5.0	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	淡橙色	——

SK18

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
154	—	土師器小皿	8.3	1.2	6.4	1㎜以下の砂粒を含む	普通	外面淡黄褐色 内面淡橙色	底部へラ切り
154	71	〃	8.2	2.0	6.4	2～3㎜以下の砂粒を含む	〃	外面淡黄褐色 内面淡黄褐色	〃
154	—	〃	8.2	1.25	6.6	1㎜以下の砂粒を含む	〃	外面淡橙褐色 内面淡橙褐色	〃
154	—	〃	8.2	1.2	7.0	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡橙色 内面淡橙色	〃
154	—	〃	8.6	1.4	6.0	2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡黄灰色 内面淡黄灰色	〃
154	—	〃	8.0	1.4	6.8	2㎜程度の砂粒に5㎜位の砂粒を含む	〃	外面淡褐色 内面黄灰褐色	〃
154	—	〃	8.8	1.5	6.4	1㎜以下の砂粒を含む金雲母含む	〃	外面淡橙褐色 内面淡橙色	〃
154	—	〃	8.6	1.6	6.3	3～4㎜程度の砂粒を含む 金雲母含む	〃	外面黄灰褐色 内面黄灰褐色	〃
154	—	〃	8.0	1.6	7.0	1㎜以下の砂粒を含む金雲母含む	〃	外面橙褐色 内面灰褐色	〃
154	—	〃	8.0	1.6	5.6	2㎜程度の砂粒を少し含む	〃	外面淡黄灰褐色 内面淡黄灰褐色	〃
154	—	〃	8.8	1.7	6.4	1㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡橙色 内面淡橙色	〃
154	71	〃	7.6	1.9	6.0	1～2㎜程度の砂粒を含む 金雲母を含む	〃	外面淡褐色 内面淡褐色	〃
154	—	〃	8.6	2.0	6.8	〃	〃	外面淡褐色 内面淡褐色	〃
154	—	〃	7.8	1.4	5.2	1㎜以下の細かい砂粒を含む	〃	外面黄灰白色 内面黄灰白色	底部糸切り
154	—	〃	8.7	1.5	5.6	〃	〃	外面淡橙褐色 内面淡橙褐色	〃
154	—	〃	8.6	1.7	6.1	〃	〃	外面橙灰白色 内面橙灰白色	〃
154	—	〃	8.1	2.0	5.0	〃	〃	外面淡灰褐色 内面淡灰褐色	〃
154	—	土師器坏	14.4	3.4	9.0	〃	〃	外面淡橙灰白色 内面淡黄灰白色	底部へラ切り
154	—	〃	14.2	3.4	9.4	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面黄灰白色 内面黄灰白色	底部糸切り
154	—	〃	13.0	3.5	8.5	1～2㎜程度の砂粒を含む 金雲母含む	〃	〃	〃
154	—	〃	14.4	4.0	7.6	1㎜以下の細かい砂粒を含む	不良	外面灰白色 内面灰白色	〃
154	—	〃	14.2	3.9	7.9	〃	普通	外面淡橙白色 内面淡橙白色	〃
154	71	〃	14.2	3.2	10.0	〃	〃	外面淡橙褐色 内面淡橙白色	〃
154	—	〃	14.8	3.5	10.2	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	〃	〃
154	—	〃	14.4	3.7	10.0	1㎜以下の砂粒に3～4㎜程度の砂粒を含む	〃	外面灰褐色 内面褐色	〃
154	—	〃	14.4	3.4	9.2	1～3㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡黄褐色 内面淡橙色	〃
154	—	〃	14.6	3.4	9.4	1～2㎜程度の砂粒を含む 金雲母含む	〃	外面褐色 内面褐色	〃

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
154	—	土師器坏	13.6	3.6	9.4	1㎜以下の砂粒に5㎜程度の砂粒を含む金雲母含む	普通	外面暗褐色 内面淡褐色	底部糸切り
154	—	〃	13.8	4.0	8.8	1㎜以下の細かい砂粒に3㎜程度の砂粒を含む金雲母含む	〃	外面暗褐色 内面黒褐色	〃
154	—	〃	14.2	3.4	8.8	2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡橙色 内面淡橙色	〃
154	—	〃	14.6	4.0	8.4	1㎜以下の砂粒を含む	〃	〃	〃
154	—	土師器椀	—	—	高台径 8.0	1㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡橙色 内面淡黄灰色	——
155	71	〃	15.2	5.5	高台径 5.7	2㎜以上の砂粒を含む金雲母を含む	〃	外面淡黄褐色 内面淡黄褐色	——
155	—	〃	14.0	4.2	高台径 6.0	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面淡橙色 内面淡橙色	——
155	—	〃	14.1	4.6	高台径 6.0	2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	外面黄灰白色 内面黄灰白色	——
155	71	〃	13.5	5.0	高台径 5.9	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面橙灰白色 内面橙灰白色	——
155	—	〃	14.4	4.9	高台径 6.6	3～4㎜程度の砂粒を含む	〃	外面黄灰白色 内面黄灰白色	——
155	71	〃	14.2	5.1	高台径 6.4	2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	〃	——
155	—	〃	14.6	4.8	高台径 6.4	〃	〃	〃	——
155	71	〃	14.4	4.7	高台径 6.8	〃	〃	〃	——
155	—	〃	15.2	—	—	1㎜以下の砂粒に6㎜程度の砂粒を含む	〃	外面灰白色 内面灰白色	——
155	—	〃	13.4	—	—	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面黄灰白色 内面黄灰白色	——
155	—	〃	—	—	高台径 6.4	〃	〃	外面明橙色 内面淡橙色	——
155	—	〃	—	—	高台径 5.2	1㎜以下の細かい砂粒を含む	〃	外面濁灰白色 内面濁灰白色	高台部に指でつまみあげた痕が残る
155	—	瓦器椀	15.0	—	—	1㎜程度の砂粒を少し含む	〃	胎土白灰色 器表面黒色	内面ヘラ磨き
155	—	〃	15.0	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	胎土白灰色 器表面灰黒色	口縁上部外面のみ黒色 内面ヘラ磨き
155	71	〃	15.0	4.8	高台径 4.0	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	胎土白灰色 器表面淡灰色	内面らせん状のヘラ磨き
155	—	〃	15.0	5.0	高台径 4.1	1㎜以下の細かい砂粒を含む	〃	胎土白灰色 器表面灰黒色	内面びっしりとヘラ磨き
156	72	〃	14.7	4.4	高台径 4.8	〃	〃	〃	内面ヘラ磨き 外面指頭痕
156	72	〃	15.4	5.0	高台径 3.5	2～3㎜、5㎜位の大きな砂粒を少し含む	〃	〃	内面ヘラ磨き
156	72	瓦器小皿	8.0	1.7	—	1㎜以下の細かい砂粒を含む	〃	胎土白灰色 器表面淡黒灰色	——
156	—	瓦質土器椀	—	—	高台径 6.6	〃	〃	外面淡灰色 内面灰黒色	内面粗いハケ目が施される
156	—	〃	—	—	高台径 5.6	〃	〃	外面灰白色 内面灰白色	——
156	72	〃	14.7	5.0	高台径 5.5	1㎜程度の砂粒を含む	〃	外面濁灰白色 内面濁灰白色	——
156	—	〃	—	—	高台径 6.4	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面濁褐灰白色 内面濁褐灰白色	——
156	72	瓦質土器小皿	—	—	5.5	2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面黒灰白色 内面灰白色	底部糸切り
156	—	青磁碗	—	—	高台径 5.0	堅緻	〃	胎土灰色 釉灰黄緑色釉	同安窯系青磁椀Ⅰ類−1
156	—	須恵器こね鉢	30.0	—	—	1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	外面明青灰色 内面明青灰色	東播系
156	—	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃

挿図	図版	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
番号			口径	器高	底径				
156	—	須恵器こね鉢	—	—	9.6	2㎜程度の砂粒を含む	普通	外面淡灰色 内面灰色	東播系
820									
157	—	瓦質土器羽釜	22.6	—	—	2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	外面黒色 内面黒色	——
821									
157	—	土質師土器土鍋	38.0	—	—	2～3㎜程度の砂粒を含む 金雲母を含む	〃	外面褐色 内面明茶褐色	——
822									
157	—	陶器体部	—	—	—	細砂粒を含む	良好	淡茶色	外面に自然釉がかかり緑色を呈する、常滑焼
823									
157	—	土師質土器羽釜脚	—	—	—	1～3㎜程度の砂粒を含む	普通	灰茶褐色	——
824									
157	73	土製品	—	6.4	6.0	1㎜程度の砂粒を含む	〃	褐色	——
825									
157	—	突帯文系土器	33.4	—	—	2～3㎜の砂粒を含む	〃	外面暗褐色 内面褐色	——
826									

SK25

挿図	図版	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
番号			口径	器高	底径				
158	—	土師器坏	10.8	2.7	7.1	1㎜以下の砂粒を含む	良	濁茶黄色	底部ヘラ切り
827									

SK26

挿図	図版	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
番号			口径	器高	底径				
160	—	土師器小皿	—	—	5.6	細砂粒を含む	良	外面暗白色 内面淡黄茶色	底部糸切り
828									
160	—	〃	—	—	5.4	〃	〃	淡茶黄色	〃
829									
160	—	土師器坏	10.2	1.7	5.8	〃	〃	淡褐茶色	〃
830									
160	—	〃	9.8	2.2	6.0	0.2～1㎜程度の砂粒を含む	〃	淡茶色	底部ヘラ切りか?
831									
160	—	土師器椀	14.0	—	—	細砂粒を含む	〃	〃	器表面がかなり磨滅している
832									
160	—	〃	14.2	—	—	〃	〃	淡褐灰色	——
833									
160	—	〃	—	—	高台径 8.8	〃	〃	濁茶白色	円盤状高台
834									
160	—	瓦	—	—	—	0.2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	濁白色	上面網目叩き痕 下面布目痕、須恵質
835									

SE01

挿図	図版	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
番号			口径	器高	底径				
162	—	土師器小皿	9.0	1.3	7.6	細砂粒を含む	良	暗白黄色	底部ヘラ切り
836									
162	—	〃	8.6	1.1	6.0	〃	〃	濁白黄色	〃
837									
162	—	〃	—	—	5.1	1㎜以下の砂粒を含む	良好	濁黄色	底部糸切り
838									
162	—	土師器坏	13.1	2.9	8.0	〃	良	濁茶黄色	底部ヘラ切り
839									
162	73	〃	13.6	4.0	8.8	0.2～3㎜程度の砂粒を含む	不良	内面淡黄茶色 外面暗茶灰色	器表面の磨滅が著しい 底部調整不明
840									
162	—	瓦器椀	14.0	—	—	微砂粒を含む	良好	胎土白灰色 器表面灰黒色	——
841									
162	—	〃	14.8	—	—	〃	〃	〃	——
842									
162	—	〃	14.8	—	—	〃	〃	〃	——
843									
162	73	〃	15.4	4.7	高台径 4.8	〃	〃	胎土白灰色 器表面黒色	——
844									
162	—	〃	—	—	高台径 4.4	〃	〃	〃	——
845									

挿図 図版 番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
162 － 846	白磁碗	14.7	－	－	精良	良好	胎土青灰色 釉透明釉	白磁椀Ⅷ類－2
162 － 847	須恵器こね鉢	28.4	－	－	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	良	青灰色	東播系

挿図 図版 番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質	重量(g)	備考
162 － 848	石鏃	17.0	16.0	3.5	サヌカイト	0.8	——
162 － 849	〃	(16.0)	15.0	5.5	〃	0.8	——
163 － 850	曲物	口径 21.0	高さ 10.5	底板1.0 側板0.2	スギ材？ 薄板を桜皮で留めている	—	——

SE02

挿図 図版 番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
164 － 851	土師器椀	13.6	－	－	微砂粒を含む	不良	淡茶白色	——
164 － 852	〃	－	－	高台径 7.6	〃	良	〃	——
164 － 853	土師器脚付小皿(坏)	－	－	高台径 4.8	〃	良好	濁白黄色	——
164 73 854	瓦器椀	14.0	4.1	高台径 3.7	細砂粒を含む	〃	胎土暗灰色 器表面黒色	——

SE03

挿図 図版 番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
167 － 855	瓦質土器椀	－	－	高台径 5.0	細砂粒を含む	良好	白灰色	内面にヘラ磨き有
167 － 856	土師器椀	13.5	－	－	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	良	淡黄茶色	——
167 － 857	〃	14.0	－	－	〃	〃	濁茶白色	——

SE04

挿図 図版 番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
170 － 858	土師器小皿	7.7	1.4	6.0	細砂粒を含む	良	濁白黄色	底部ヘラ切り
170 － 859	〃	8.0	1.5	5.8	〃	良好	濁茶黄色	〃
170 － 860	〃	7.4	1.3	6.0	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	良	淡黄茶色	底部糸切り 板状圧痕有
170 － 861	〃	7.4	1.4	5.6	〃	〃	濁茶灰色	底部糸切り
170 － 862	土師器坏	－	－	8.8	〃	〃	〃	〃
170 － 863	〃	13.8	3.2	8.7	〃	〃	淡黄茶色	〃
170 － 864	土師器椀	12.4	4.3	高台径 5.8	〃	〃	〃	「早島式土器」か？
170 － 865	〃	14.0	－	－	〃	良好	濁茶黄色	〃
170 － 866	〃	－	－	高台径 5.4	1㎜以下の砂粒を含む	良	暗褐色	〃
170 － 867	黒色土器椀	－	－	高台径 4.8	〃	〃	灰黒色	A類 かなり磨滅している
170 － 868	瓦質土器椀	15.0	－	－	細砂粒を含む	〃	黒灰色	——
170 － 869	〃	－	－	高台径 5.2	〃	〃	灰色	——

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
170	— 870	瓦器椀	14.0	—	—	細砂粒を含む	良	胎土白灰色 器表面黒色	——
170	— 871	〃	—	—	高台径 4.0	〃	〃	灰色	器表面の炭素がとんでいる
170	— 872	瓦器小皿	8.4	—	—	〃	良好	胎土白灰色 器表面灰黒色	——
170	— 873	白磁皿	9.2	—	—	精良	〃	胎土濁白色 釉暗白色釉	白磁皿Ⅷ類－1
170	— 874	〃	11.4	—	—	〃	〃	胎土白色 釉透明釉	白磁皿か小碗である
170	— 875	青磁碗	—	—	—	〃	〃	胎土青灰色 釉青緑色釉	龍泉窯系青磁椀Ⅰ類－4
170	— 876	土師質土器羽釜	—	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	良	暗茶色	外面にスス付着
170	— 877	瓦質土器こね鉢	34.4	—	—	〃	〃	胎土灰白色 器表面灰黒色	——
170	73 878	瓦質土器椀	13.4	4.6	高台径 5.5	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	白灰色	口縁部黒色化
170	— 879	土師器小皿	7.6	1.9	5.0	1㎜以下の砂粒を含む	〃	濁黄色	底部ヘラ切り
170	— 880	土師器坏	—	—	7.4	〃	〃	濁白色	底部糸切り
170	— 881	〃	—	—	7.0	細砂粒を含む	〃	濁茶白色	〃
170	— 882	〃	—	—	9.0	〃	〃	濁白色	〃
170	— 883	土師器椀	13.6	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	濁黄白色	——
170	— 884	〃	—	—	高台径 5.4	0.2～2㎜程度の砂粒を含む 石英含む	良好	〃	「早島式土器」か？
170	— 885	〃	—	—	高台径 5.6	微砂粒を含む	良	〃	瓦質土器か？
170	— 886	土師質土器土鍋	—	—	—	0.2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	濁茶白色	——
170	— 887	須恵器こね鉢	—	—	—	細砂粒を含む	良好	暗青灰色	東播系
170	— 888	土師器小皿	7.8	1.6	6.0	細砂粒を含む	良	濁褐白色	底部ヘラ切り
170	— 889	〃	7.8	1.5	5.8	〃	〃	濁白色	〃
170	— 890	〃	9.0	1.8	6.0	〃	〃	濁茶黄色	〃
170	— 891	土師器坏	—	—	8.0	〃	〃	内面淡褐色 外面暗灰色	〃
170	— 892	〃	—	—	9.8	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	暗白黄色	底部糸切り
170	— 893	〃	13.2	3.7	9.5	〃	〃	暗褐色	〃
170	— 894	土師器椀	11.8	—	—	細砂粒を含む	〃	濁茶黄色	——
170	— 895	瓦器椀	14.6	—	—	精良	良好	胎土灰色 器表面黒色	——
170	— 896	平瓦	長幅 (7.0)	短幅 (6.6)	厚さ 2.5	1～5㎜程度の砂粒を含む	良	淡黄茶色	——
171	— 897	土師器小皿	6.8	1.0	5.2	1㎜以下の砂粒を含む	〃	濁茶黄色	底部ヘラ切りか?
171	— 898	〃	7.2	1.1	5.0	〃	〃	〃	底部ヘラ切り
171	— 899	〃	8.6	1.2	6.4	〃	〃	濁灰黄色	〃
171	— 900	〃	8.8	1.3	6.6	〃	〃	濁茶黄色	〃
171	— 901	〃	7.6	1.4	5.8	細砂粒を含む	〃	〃	底部糸切り

挿図	図版	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
番号			口径	器高	底径				
171	—	土師器坏	—	—	6.8	細砂粒を含む	良	暗茶灰色	底部糸切り
902									
171	—	土師器椀	—	—	高台径 6.0	〃	〃	濁白色	「早島式土器」か？
903									
171	—	瓦質土器椀	—	—	高台径 5.2	0.1～2㎜程度の砂粒を含む	〃	白灰色	——
904									
171	—	瓦器椀	—	—	高台径 4.0	細砂粒を含む	〃	胎土灰白色 表面黒色	——
905									
171	—	青磁碗	—	—	高台径 6.0	精良	良好	胎土灰色 釉緑色釉	龍泉窯系青磁椀Ⅰ類－4
906									
171	73	土師器小皿	7.5	1.4	6.6	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	濁白黄色	底部ヘラ切り
907									
171	73	土師器坏	12.1	3.3	7.1	〃	〃	〃	〃
908									
171	74	〃	12.4	3.9	8.3	〃	〃	〃	〃
909									
171	—	土師器小皿	8.0	1.4	6.0	〃	〃	濁黄白色	〃
910									
171	—	土師器坏	—	—	8.4	精良	〃	濁黄茶色	底部糸切り
911									
171	74	瓦器椀	14.5	3.8	高台径 4.4	細砂粒を含む	〃	胎土白灰色 器表面銀黒色	——
912									
171	74	軒平瓦	長幅 30.0	短幅 (14.2)	厚さ 2.3	0.2～4㎜程度の砂粒を含む	〃	青灰色	——
913									

挿図	図版	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質	重量(g)	備考
番号								
171	—	砥石	6.9	5.5	5.1	石英粗面岩	(460.4)	——
914								

森1号塚

挿図	図版	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
番号			口径	器高	底径				
174	—	土師器小皿	6.1	1.5	7.0	細砂粒を含む	良	茶色	底部糸切り
915									
174	—	〃	9.1	1.7	5.4	〃	〃	〃	底部糸切り（静止）
916									
174	—	〃	9.4	2.1	5.5	〃	〃	〃	〃
917									
174	—	陶器大皿	—	—	高台径 6.0	精良	良好	淡黄茶色	内面布目有
918									
174	—	青緑釉皿	—	—	高台径 3.9	〃	〃	胎土白灰色 釉緑色釉	——
919									
174	—	陶器擂鉢	29.1	—	—	1㎜程度の砂粒を含む	〃	暗褐色	備前焼
920									
174	—	須恵器甕	30.7	—	—	0.1㎜程度の砂粒を含む	〃	暗灰色	外面クシ描刺突文有
921									
174	—	土師器土釜	26.1	—	—	〃	〃	濁茶黄色	——
922									

森2号塚

挿図	図版	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
番号			口径	器高	底径				
174	—	土師器小皿	8.0	1.5	6.2	精良	良	濁白黄色	底部回転糸切り
923									
174	75	〃	8.3	1.8	5.1	細砂粒を含む	〃	茶色	〃
924									
174	74	〃	9.2	1.5	6.3	〃	〃	濁茶黄色	〃
925									
174	75	〃	8.8	2.1	4.4	〃	〃	茶色	底部糸切り（静止）
926									
174	75	〃	8.8	2.1	4.8	〃	〃	〃	〃
927									

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
174	75 928	土師器小皿	8.5	1.9	4.6	細砂粒を含む	良	淡黄茶色	底部糸切り（静止）
174	74 929	〃	9.0	2.5	4.2	〃	〃	茶色	〃
174	— 930	土師器坏	—	—	6.2	〃	良	濁白色	〃
174	— 931	陶器擂鉢	29.6	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	良好	暗茶色	備前焼
174	— 932	陶器壺	34.2	—	—	〃	〃	暗緑白色	外面に自然釉付着備前焼

森3号塚

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
177	— 933	土師器小皿	8.2	1.3	6.3	細砂粒を含む	良	濁茶黄色	底部糸切り
177	— 934	〃	8.8	1.3	6.7	精良	〃	〃	〃
177	— 935	〃	8.6	2.1	5.0	細砂粒を含む	〃	淡茶色	底部糸切り（静止）
177	— 936	〃	9.0	2.0	4.7	〃	〃	〃	〃
177	— 937	〃	8.6	2.2	4.8	0.2～1㎜程度の砂粒を含む	〃	〃	〃
177	— 938	〃	8.4	2.3	4.7	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	茶色	〃
177	— 939	〃	8.4	2.0	4.0	〃	〃	〃	〃
177	— 940	瓦質土器鍋	22.9	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	胎土濁白色 器表面黒色	——

挿図番号	図版番号	器種	全長(cm)	頭部径(cm)	先端部径(cm)	材質	備考
177	— 941	鉄釘	(3)	0.4×0.4	——	鉄	先端部欠損

挿図番号	図版番号	器種	長さ(cm)	刀部長(cm)	柄部長(cm)	背の厚さ(cm) 刀部	柄部	材質	備考
177	— 942	刀子	10.2	8.2	2.0	0.4	0.2	鉄	——

森4号塚

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
178	— 943	土師質土器火鉢	37.3	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	良	暗茶色	体部外面にクシ描刺突文有
178	— 944	須恵器甕	—	—	—	〃	良好	暗灰色	底部ヘラ削り

森5号塚

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
181	— 945	土師器小皿	6.4	1.0	5.8	精良	良	淡茶色	底部糸切り
181	— 946	〃	6.6	1.5	3.1	〃	〃	濁黄白色	底部糸切り（静止）
181	— 947	土師質土器羽釜	22.0	—	—	0.2～4㎜程度の砂粒を含む	〃	茶色	——
181	— 948	土師質土器擂鉢	—	—	13.7	〃	〃	暗茶色	——
181	— 949	土師質土器火鉢	—	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	〃	——

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
181	75 950	灯明皿	10.2	1.7	3.7	精良	良好	暗茶灰色	底部糸切り後ヘラ削り 内面塗り土 備前焼
181	— 951	擂鉢	25.6	—	—	細砂粒を含む	〃	暗褐色	備前焼

挿図番号	図版番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質	重量(g)	備考
181	— 952	硯	上幅 8.6	高さ 2.5	1.5	不明	—	——

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
182	— 953	青磁碗	16.6	6.9	高台径 5.7	精良	良好	胎土青灰色 釉青色釉	龍泉窯系青磁椀 Ⅰ類－5・b
182	75 954	須恵器壺	—	—	11.1	細砂粒を含む	良	濁灰白色	——
182	— 955	〃	18.4	—	—	〃	良好	濁灰色	十瓶焼
182	— 956	須恵器甕	33.8	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	暗青灰色	〃
182	— 957	〃	24.6	—	—	〃	〃	暗灰色	亀山焼
182	— 958	亀山焼甕	39.1	—	—	細砂粒を含む	〃	濁灰色	——
183	— 959	〃	39.6	—	—	〃	〃	〃	——
183	— 960	須恵器甕	25.9	—	—	〃	〃	暗青灰色	東播系

挿図番号	図版番号	器種	全長(cm)	頭部径(cm)	先端部径(cm)	材質	備考
183	75 961	鉄釘	(9.8)	0.5×0.6	—	鉄	先端部欠損
183	75 962	〃	(8.5)	0.55×0.65	—	〃	〃
183	75 963	〃	(8.3)	0.65×0.75	—	〃	〃
183	75 964	〃	(6.9)	0.6×0.7	—	〃	〃
183	75 965	〃	(5.9)	0.5×0.7	—	〃	〃
183	75 966	〃	(5.2)	0.6×0.65	—	〃	〃
183	75 967	〃	(4.8)	0.55×0.7	—	〃	〃
183	75 968	〃	(4.2)	0.6×0.7	—	〃	〃
183	75 969	〃	(5.3)	0.7×0.55	—	〃	〃
183	75 970	〃	(5.9)	0.55×0.6	—	〃	〃
183	75 971	〃	(3.9)	0.55×0.75	—	〃	〃
183	75 972	〃	(5.0)	0.65×0.75	—	〃	〃
183	75 973	〃	(3.5)	0.7×0.7	—	〃	〃
183	75 974	〃	(3.1)	0.6×0.45	—	〃	〃
183	75 975	〃	(2.3) (1.5)	0.6×0.6 0.3×0.3	—	〃	〃

挿図 図版 番号	器種	全長 (cm)	頭部径 (cm)	先端部径 (cm)	材質	備考
183 75 976	鉄釘	(4.2)	0.6 ×0.7	—	鉄	先端部欠損

挿図 図版 番号	器種	長さ (cm)	刀部長 (cm)	柄部長 (cm)	背の厚さ (cm) 刀部	背の厚さ (cm) 柄部	材質	備考
183 75 977	刀子	(23)	—	—	—	—	鉄	先端部欠損

SA01

挿図 図版 番号	器種	法量 (cm) 口径	法量 (cm) 器高	法量 (cm) 底径	胎土	焼成	色調	備考
184 — 978	土師器椀	13.8	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	良	暗褐灰色	「早島式土器」か？

SA02

挿図 図版 番号	器種	法量 (cm) 口径	法量 (cm) 器高	法量 (cm) 底径	胎土	焼成	色調	備考
184 — 979	土師器小皿	8.4	1.5	6.0	細砂粒を含む	良	濁黄色	底部ヘラ切り
184 — 980	土師器椀	—	—	高台径 5.8	1㎜以下の砂粒を含む	〃	〃	——
184 78 981	瓦質土器椀	—	—	高台径 5.6	細砂粒を含む	〃	黒灰色	内面ハケ目 外面太いヘラミガキ
184 — 982	瓦器椀	—	—	高台径 4.7	〃	〃	胎土白灰色 器表面黒色	——

SA07

挿図 図版 番号	器種	法量 (cm) 口径	法量 (cm) 器高	法量 (cm) 底径	胎土	焼成	色調	備考
184 — 983	土師器坏	—	—	6.3	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	良	濁茶黄色	底部糸切り
184 — 984	土師器椀	12.4	—	—	〃	良好	濁白色	「早島式土器」か？ 石英含む
184 — 985	須恵器こね鉢	28.0	—	—	細砂粒を含む	〃	青灰色	東播系

SA08

挿図 図版 番号	器種	法量 (cm) 口径	法量 (cm) 器高	法量 (cm) 底径	胎土	焼成	色調	備考
185 — 986	土師器小皿	8.2	0.9	5.6	細砂粒を含む	良	淡茶色	底部ヘラ切り
185 — 987	〃	8.0	1.5	5.7	〃	〃	暗灰白色	〃
185 — 988	土師器坏	11.4	—	—	〃	〃	暗茶黄色	——
185 — 989	〃	—	—	6.0	〃	〃	〃	底部ヘラ切り
185 — 990	〃	10.6	—	—	〃	〃	濁白色	——
185 — 991	〃	10.0	2.9	6.0	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	良好	淡黄茶色	底部ヘラ切り
185 — 992	〃	15.0	—	—	細砂粒を含む	良	淡黄茶色	底部調整不明
185 — 993	黒色土器椀	14.4	—	—	〃	〃	内面黒灰色 外面濁黄白色	A類 口縁端部外面に沈線有
185 — 994	須恵器甕	(27.6)	—	—	精良	良好	青灰色	十瓶焼か？

柱穴

挿図 図版 番号	器種	法量 (cm) 口径	法量 (cm) 器高	法量 (cm) 底径	胎土	焼成	色調	備考
186 — 995	土師質土器土鍋	39.6	—	—	0.2～5㎜程度の砂粒を含む	良	茶色	「て」の字状の口縁

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
186	996	土師器小皿	8.2	1.5	6.7	1㎜以下の砂粒を含む	良	淡黄茶色	底部ヘラ切り
186	997	〃	7.8	1.4	6.2	細砂粒を含む	〃	濁黄白色	底部糸切り
186	998	土師器坏	—	—	8.4	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	淡茶色	〃
186	999	土師器小皿	7.6	1.6	5.6	〃	〃	濁白黄色	〃
186	1000	瓦器椀	—	—	—	細砂粒を含む	〃	暗灰色	——
186	1001	土師器椀	13.6	—	—	〃	〃	濁茶白色	——
186	1002	〃	14.3	5.0	高台径 5.8	0.2～3㎜程度の砂粒を多量に含む	〃	〃	——
186	1003	須恵器底部	—	—	11.4	1㎜程度の砂粒を含む	〃	濁灰色	こね鉢である
186	1004	白磁碗	—	—	高台径 7.6	精良	良好	胎土濁白色 釉透明釉	白磁椀Ⅳ類－1
187	1005	土師器坏	19.3	5.1	10.5	0.2～2㎜程度の砂粒を多量に含む	良	濁灰白色	底部糸切り
187	1006	瓦器皿	9.2	1.5	—	細砂粒を含む	〃	胎土濁灰色 器表面灰黒色	——
187	1007	土師器小皿	7.8	1.3	6.0	〃	〃	茶黄色	底部ヘラ切り
187	1008	土師器椀	15.0	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	〃	——
187	1009	瓦器椀	13.6	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	胎土暗灰色 器表面灰黒色	——
187	1010	土師器小皿	7.8	2.0	6.0	〃	〃	濁白色	底部調整不明
187	1011	〃	8.3	1.3	6.3	〃	〃	〃	底部ヘラ切り
187	1012	〃	8.3	1.3	6.4	〃	〃	淡茶色	〃
187	1013	土師器坏	13.7	—	8.6	微砂粒を含む	良好	茶白色	〃
187	1014	〃	14.0	4.1	7.8	1㎜以下の砂粒を含む	〃	淡茶色	〃
187	1015	土師器椀	13.8	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	良	淡茶黄色	——
187	1016	〃	—	—	高台径 6.0	〃	〃	〃	瓦器か？
187	1017	瓦器椀	15.6	—	—	細砂粒を含む	〃	胎土白灰色 器表面灰黒色	——
187	1018	土製品脚	—	—	—	0.2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	濁褐黄色	——
187	1019	土師器小皿	7.4	1.9	6.4	1㎜以下の砂粒を含む	〃	〃	底部糸切り
187	1020	土師器椀	11.9	—	—	〃	〃	〃	——
187	1021	土師器小皿	7.1	1.5	5.1	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	不良	暗灰色	底部糸切り
187	1022	〃	7.9	1.4	6.5	1㎜以下の砂粒を含む	良	淡茶色	底部ヘラ切り
187	1023	〃	8.3	1.3	7.1	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	〃	底部糸切り
187	1024	〃	7.6	1.9	5.8	1㎜以下の砂粒を含む	〃	〃	〃
187	1025	土師器椀	11.4	—	—	〃	〃	暗茶色	——
187	1026	〃	—	—	高台径 5.7	〃	〃	淡黄褐色	——
187	1027	土師器小皿	8.3	1.4	5.9	〃	〃	濁黄色	底部調整不明

挿図 図版 番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
187 — 1028	土師器小皿	7.5	1.2	5.3	1㎜以下の砂粒を含む	良	濁黄色	底部ヘラ切り
187 — 1029	〃	8.3	1.5	7.1	〃	〃	暗茶色	底部糸切り
187 — 1030	〃	8.6	1.5	6.2	〃	〃	〃	底部ヘラ切り
187 — 1031	土師器坏	13.8	3.4	10.1	細砂粒を含む	〃	濁白黄色	底部糸切り
187 — 1032	瓦質土器椀	15.3	4.6	高台径 5.6	1㎜以下の砂粒を含む	〃	灰色	——
187 — 1033	瓦器椀	15.3	—	—	〃	〃	黒灰色	——
187 — 1034	土師器小皿	7.8	1.3	5.3	〃	〃	濁白黄色	底部ヘラ切り
187 — 1035	〃	8.3	1.5	5.8	〃	〃	淡白茶色	〃
187 — 1036	〃	8.3	1.4	5.9	細砂粒を含む	〃	濁白黄色	〃
187 — 1037	〃	7.8	1.4	5.9	1㎜以下の砂粒を含む	〃	濁茶黄色	底部糸切り
187 — 1038	瓦質土器こね鉢	—	—	—	〃	不良	黒白色	——
187 — 1039	瓦器椀	—	—	高台径 3.9	〃	〃	黒灰色	——
187 — 1040	須恵器甕体部	—	—	—	〃	〃	暗灰色	東播系
188 — 1041	土師器椀	—	—	高台径 6.1	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	良	濁白色	——
188 — 1042	土師器小皿	8.6	1.7	6.3	1㎜以下の砂粒を含む	〃	〃	底部糸切り
188 — 1043	〃	8.4	1.3	5.9	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	淡茶黄色	底部ヘラ切り
188 — 1044	黒色土器椀	—	—	高台径 6.2	〃	〃	暗黄白色	底部糸切りA類
188 — 1045	土師器小皿	8.4	1.7	高台径 5.7	〃	〃	淡茶色	底部ヘラ切り

包含層

挿図 図版 番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
189 — 1046	須恵器坏身	11.4	3.6	4.7	精良	良好	内面青灰色 外面暗灰色	底部ヘラ切り未調整
189 — 1047	須恵器坏蓋	14.6	—	—	細砂を含む	〃	暗灰色	——
189 — 1048	須恵器坏身	13.9	4.1	高台径 10.8	〃	〃	灰色	——
189 — 1049	〃	13.4	3.1	9.6	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	不良	濁白色	底部ヘラ切り
189 — 1050	土師器小皿	8.4	1.5	7.8	1㎜程度の砂粒を含む	良	濁茶黄色	〃
189 — 1051	〃	8.6	1.6	6.8	0.2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	淡茶色	〃
189 — 1052	〃	8.6	2.0	7.05	〃	〃	濁茶黄色	〃
189 — 1053	〃	8.2	1.8	5.5	〃	〃	〃	〃
189 — 1054	〃	8.2	1.5	6.4	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	〃	〃
189 — 1055	〃	10.6	1.6	7.4	〃	〃	淡黄茶色	〃
189 — 1056	〃	7.6	1.6	5.6	1㎜程度の砂粒を含む	不良	黒灰色	底部糸切り 瓦質土器か？
189 — 1057	〃	8.0	0.9	6.8	精良	良	淡黄茶色	底部糸切り

挿図 図版 番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
189 — 1058	土師器小皿	7.1	1.1	5.3	1㎜以下の砂粒を含む	良	濁白黄色	底部糸切り
189 — 1059	〃	7.8	1.4	5.4	〃	〃	〃	〃
189 — 1060	〃	7.7	1.4	6.0	〃	不良	〃	〃
189 — 1061	〃	10.0	2.0	6.0	〃	〃	淡茶黄色	底部調整不明
189 — 1062	土師器坏	10.8	2.5	4.0	1㎜以下の砂粒を含む	良	淡褐茶色	底部ヘラ切り
189 — 1063	〃	10.8	3.3	6.2	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	淡茶黄色	〃
189 — 1064	〃	12.8	3.4	8.0	1㎜以下の砂粒を含む	良好	濁白黄色	〃
189 — 1065	〃	12.8	2.7	9.2	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	良	淡茶色	底部調整不明
189 — 1066	〃	13.2	2.7	10.6	1㎜以下の砂粒を含む	〃	淡褐黄色	底部糸切り
189 — 1067	〃	14.2	3.8	7.7	〃	〃	淡白黄色	〃
189 — 1068	〃	13.6	4.3	7.6	精良	〃	黄白色	底部調整不明
189 75 1069	土師器椀	14.6	5.3	高台径 7.6	0.2～2㎜程度の砂粒を多量に含む	良	淡褐色	底部ヘラ切り
189 — 1070	〃	—	—	高台径 8.6	精良	〃	淡茶色	〃
189 — 1071	〃	—	—	高台径 7.4	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	褐茶色	底部調整不明
189 — 1072	〃	11.1	4.2	高台径 5.4	0.2～2㎜程度の砂粒を少量含む	良	淡茶白色	「早島式土器」か？
189 — 1073	瓦器椀	15.8	4.2	高台径 5.0	細砂粒を含む	不良	淡茶色	2次的焼成を受けたものと思われる
189 — 1074	〃	16.6	—	—	〃	良	胎土白灰色 器表面灰黒色	——
189 — 1075	瓦器小皿	8.6	1.6	—	〃	〃	〃	——
189 — 1076	〃	8.6	1.5	4.2	〃	〃	白灰色	器表面の炭素がとんでいる
189 — 1077	黒色土器椀	8.0	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	外面濁白色 内面黒色	A類
189 — 1078	〃	—	—	高台径 6.2	〃	〃	外面淡茶色 内面黒色	〃
189 — 1079	瓦質土器椀	7.3	—	—	〃	〃	灰色	——
189 — 1080	〃	—	—	高台径 4.6	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	〃	——
189 — 1081	白磁碗	16.2	—	—	精良	良好	胎土灰白色 釉透明釉	白磁椀Ⅳ類－2
189 — 1082	〃	—	—	—	〃	〃	〃	白磁椀Ⅴ類－4
189 — 1083	青磁碗	—	—	高台径 7.8	〃	〃	胎土灰色 釉青色釉	龍泉窯系青磁椀Ⅰ類
189 — 1084	青磁皿	12.0	—	—	〃	〃	胎土灰色 釉緑色釉	龍泉窯系青磁皿Ⅰ類
190 — 1085	須恵器こね鉢	34.0	—	—	細砂粒を含む	〃	青灰色	東播系
190 — 1086	〃	—	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	良	〃	〃
190 — 1087	〃	28.0	—	—	〃	良好	灰色	〃
190 — 1088	〃	—	—	高台径 4.0	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	青灰色	〃
190 — 1089	〃	29.0	—	—	〃	〃	〃	〃

挿図 図版 番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
190 — 1090	瓦質土器こね鉢	32.6	—	—	0.2～3mm程度の砂粒を含む	不良	胎土濁白色 器表面灰黒色	亀山焼か？
190 76 1091	体部	—	—	—	細砂粒を含む	良好	青灰色	格子目叩き痕
190 76 1092	〃	—	—	—	微砂粒を含む	〃	〃	〃
190 76 1093	〃	—	—	—	0.2～1mm程度の砂粒を含む	良	白灰色	平行叩き痕
190 76 1094	〃	—	—	—	〃	良好	暗灰色	〃
190 76 1095	須恵器甕体部	—	—	—	細砂粒を含む	〃	暗黄灰色	東播系 綾杉状の平行叩き痕有
190 76 1096	体部	—	—	—	〃	〃	暗青灰色	平行叩き痕有
191 76 1097	土師質土器土鍋	42.2	—	—	0.2～4mm程度の砂粒を多量に含む	〃	暗灰茶色	外面一部にハケ目 スス付着
191 — 1098	〃	40.8	—	—	〃	〃	淡茶色	外面にスス付着
191 — 1099	土師質土器土釜	18.5	—	—	0.2～2mm程度の砂粒を含む	〃	濁黄白色	〃
191 — 1100	〃	—	—	—	〃	〃	〃	〃
191 — 1101	〃	29.2	—	—	〃	〃	淡茶色	内面と上面にハケ目
191 — 1102	土師質土器擂鉢	30.4	—	—	〃	〃	淡茶黄色	——
191 — 1103	平瓦	—	—	—	細砂粒を含む	良	淡黄茶色	須恵質
191 76 1104	軒丸瓦	—	—	—	0.2～2mm程度の砂粒を含む	〃	濁灰色	「巴丈」鎌倉時代 須恵質
191 — 1105	土製品	—	—	—	〃	〃	濁白黄色	何かの把手か？

挿図 図版 番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質	重量(g)	備考
192 — 1106	砥石	(5.8)	5.0	2.3	石英粗面岩	106	——
193 — 1107	銅銭	径 2.3	—	0.1	銅	——	「天禧通寶」
193 — 1108	〃	径 2.3	—	0.1	〃	——	「元豊通寶」

SD30

挿図 図版 番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
195 — 1109	陶器灯明皿	9.9	1.5	6.3	精良	良好	茶褐色	底部ヘラ削り塗り土 備前焼
195 — 1110	〃	9.5	1.5	5.7	〃	〃	〃	底部糸切り後ヘラ削り 塗り土備前焼
195 — 1111	陶器擂鉢	32.1	—	—	1mm以下の砂粒を含む	良	淡褐色	塗り土 備前焼Ⅴ期－B(堺産か)

SD31

挿図 図版 番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
195 — 1112	須恵器坏身	12.3	—	—	細砂粒を含む	良好	青灰色	底部ヘラ削り
195 — 1113	陶器灯明皿	10.2	1.7	5.9	精良	〃	茶褐色	底部糸切り後ヘラ削り 塗り土備前焼
195 — 1114	〃	7.5	1.0	5.2	〃	〃	〃	〃
195 — 1115	陶胎染付碗	—	—	高台径 4.2	細砂粒を含む	〃	胎土灰色 釉青色釉	貫入

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
195	1116	陶胎染付碗	10.2	—	—	細砂粒を含む	良好	胎土灰色 釉青色釉	貫入
195	1117	〃	9.8	—	—	〃	〃	〃	〃
195	1118	陶器皿	20.1	—	—	〃	〃	胎土褐色 釉濁黄色釉	唐津系刷毛目皿
195	1119	〃	—	—	高台径 8.4	〃	〃	胎土暗灰色 釉暗緑色釉	〃
195	1120	〃	—	—	高台径 9.0	〃	〃	胎土濁白色 釉濁黄色釉	〃
195	1121	磁器瓶	6.0	—	—	〃	〃	胎土白色 釉透明釉	菊の刻印有
195	1122	陶器碗	—	—	高台径 4.5	〃	〃	胎土濁白色 釉内面透明 外面茶黒色釉	「掛け分け碗」 瀬戸・美濃系
195	1123	磁器瓶	—	—	高台径 6.4	精良	〃	胎土灰色 釉緑色釉	砂目積み 肥前系
195	1124	〃	—	—	高台径 8.4	〃	〃	胎土白色 釉透明釉	肥前系
195	1125	磁器猪口	8.0	5.7	5.5	細砂粒を含む	良	胎土濁白色 釉白色釉	釉の発色が悪い 肥前系
195	1126	磁器碗	10.3	4.9	高台径 4.3	精良	良好	胎土白色 釉青色釉	肥前系
195	1127	〃	—	—	高台径 4.2	〃	〃	〃	〃
195	1128	〃	—	—	高台径 3.2	〃	〃	胎土白灰色 釉緑色釉	砂目積み 肥前系
195	1129	〃	8.5	—	—	〃	〃	胎土白色 釉白色釉	肥前系
195	1130	〃	9.8	—	—	〃	〃	〃	〃
195	1131	磁器赤絵瓶	—	—	高台径 5.0	〃	〃	胎土白灰色 釉青色釉	高台外側に赤色圏線有 肥前系
195	1132	碗	—	—	高台径 3.1	〃	〃	胎土白灰色 釉透明釉	底部に穿孔有 京都系
195	1133	土師器小皿	7.5	1.5	5.5	〃	〃	濁茶白色	底部糸切り
195	1134	〃	8.1	1.4	6.1	1㎜以下の砂粒を含む	〃	〃	底部調整不明
195	1135	〃	8.7	1.0	6.9	〃	〃	〃	底部糸切り
195	1136	土師質土器擂鉢	22.0	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	良	淡白茶色	——
196	1137	土師質土器火鉢	—	—	30.8	0.2～6㎜程度の砂粒を含む	〃	淡黄茶色	側面に透し有
196	1138	土師質土器焙烙	33.1	—	—	0.2～1㎜程度の砂粒を含む	〃	淡茶色	外面スス付着
196	1139	〃	40.4	—	—	〃	〃	〃	〃
196	1140	軒丸瓦	瓦頭面 12.3	—	—	0.2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	灰黒色	「巴文」 瓦質
196	1141	青磁碗	10.2	6.5	高台径 4.8	精良	良好	胎土灰色 釉青緑色釉	龍泉窯系青磁椀Ⅰ類－4

SD32

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
196	1142	陶胎染付碗	10.2	6.6	高台径 4.5	細砂粒を含む	良好	胎土黒灰色 釉青色釉	貫入が著しい
196	1143	染付碗	—	—	高台径 6.3	精良	〃	胎土白灰色 釉白色釉	肥前系
196	1144	土師器小皿	8.4	—	—	細砂粒を含む	良	淡茶色	口縁部にスス付着
196	1145	陶器擂鉢	32.1	—	—	〃	〃	褐茶色	塗り土 備前焼

SK11

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
197	—	軒丸瓦	瓦頭面 13.6	—	—	0.2～3mm程度の砂粒を含む	良	灰黒色	「巴文」 瓦質
1146									

SE05

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
199	—	青磁瓶	8.0	—	—	精良	良好	胎土白灰色 釉緑色釉	——
1147									
199	—	〃	9.8	—	—	〃	〃	〃	——
1148									
199	—	白磁紅皿	4.5	1.4	高台径 1.4	〃	〃	胎土濁白色 釉白色釉	——
1149									
199	—	陶器筒状深鉢	11.5	7.0	11.3	1㎜以下の砂粒を含む	〃	外面暗褐色 内面黄灰色	備前焼
1150									
199	—	陶器擂鉢	29.8	—	—	〃	〃	茶褐色	〃
1151									
199	—	〃	30.4	—	—	〃	〃	〃	塗り土
1152									
199	—	〃	38.0	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	暗褐色	堺産か？
1153									
199	—	〃	—	—	15.6	1㎜以下の砂粒を含む	良	茶色	——
1154									
199	—	土師質土器焙烙	39.0	—	—	〃	〃	暗茶色	外面にスス付着
1155									

SP25

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
200	76	陶器蓋	9.2	1.3	—	1㎜以下の砂粒を含む	良好	褐茶色	下面ヘラ削り 備前焼
1156									
200	76	陶器小甕	10.4	13.0	6.5	〃	〃	〃	火だすき痕有 備前焼
1157									

包含層

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
201	77	陶胎染付碗	9.3	6.3	高台径 4.2	微砂粒を含む	良好	胎土淡黒色 釉青色釉	肥前系
1158									
201	77	〃	9.6	6.8	高台径 4.6	〃	〃	〃	発色が悪い部分有 肥前系
1159									
201	—	染付碗	9.9	—	—	精良	〃	胎土白色 釉青色釉	肥前系
1160									
201	—	〃	—	—	高台径 3.6	〃	〃	胎土白灰色 釉青色釉	〃
1161									
201	—	染付瓶	3.6	—	—	〃	〃	〃	やや発色が悪い 肥前系伊万里焼
1162									
201	77	陶器碗	7.9	5.8	高台径 4.1	〃	〃	胎土灰色 釉茶黒色釉	「掛け分け碗」 瀬戸・美濃系
1163									
201	—	陶器蓋	7.0	—	—	〃	〃	淡黄茶色	釉は透明釉 京都系
1164									
201	—	陶器灯明皿	9.9	—	—	〃	〃	黄灰色	〃
1165									
201	—	陶器鉢	20.1	—	—	微砂粒を含む	〃	胎土濁白色 釉透明釉	——
1166									
201	—	〃	31.4	—	—	精良	〃	胎土褐色 釉黄緑色釉	三島唐津系
1167									
201	—	青磁碗	13.7	—	—	〃	〃	胎土灰色 釉緑色釉	——
1168									
202	—	陶器灯明皿	9.7	1.6	5.6	細砂粒を含む	〃	暗褐色	底部ヘラ削り塗り土 備前焼
1169									
202	—	陶器筒状深鉢	12.1	6.9	13.1	1㎜以下の砂粒を含む	良	濁茶色	塗り土 備前焼
1170									

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
202	— 1171	陶器筒状深鉢	12.6	6.75	13.0	1㎜以下の砂粒を含む	良好	濁茶色	塗り土 備前焼
202	— 1172	陶器伊部手小鉢	12.3	—	—	〃	〃	暗茶色	〃
202	77 1173	陶器擂鉢	21.1	(8.5)	9.2	〃	〃	内面暗茶灰色 外面茶色	ウールマーク状痕有 備前焼、堺産か？
202	— 1174	〃	22.0	—	—	〃	〃	茶黒色	塗り土 備前焼
202	— 1175	〃	35.5	—	—	0.2～4㎜程度の砂粒を少量含む	〃	茶色	外面ヘラ削り 備前焼
202	— 1176	〃	29.3	—	—	〃	〃	褐茶色	〃
203	— 1177	〃	—	—	13.9	〃	〃	茶色	外面ヘラ削り 底部窯道具痕、備前焼
203	— 1178	〃	—	—	18.1	〃	〃	暗茶色	外面ヘラ削り後指ナデ 底部窯道具痕、備前焼
204	— 1179	土師質土器釜	13.6	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	良	濁白黄色	——
204	— 1180	土師質土器火鉢	26.6	—	—	〃	良好	淡黄茶色	クシ描刺突文有
204	— 1181	〃	20.6	14.4	17.9	〃	〃	〃	内面指ナデ
204	— 1182	〃	29.5	9.3	27.4	〃	〃	〃	内面ハケ目
205	— 1183	〃	32.3	—	—	〃	〃	濁褐白色	——
205	— 1184	土師質土器焙烙	36.3	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	〃	外面にスス付着
205	— 1185	土師質土器土錘	全長 4.7	最大径 3.2	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	良	〃	——
205	— 1186	軒丸瓦	瓦頭面 (12.8)	—	—	〃	〃	灰黒色	「巴文」 瓦質焼成

第7表　八反地地区溝状遺構一覧表

SD	グリッド	大きさ(cm) 天幅	深さ	遺物	時期	備考
01	L7, M6・7, N6, O6	26	7.0	—	—	—
02	L7, M6・7, N6, O5・6, P5	24	10.4	—	—	—
03	I14, J13・14, K12・13, L12, M10～12 N10, O9・10, P8・9, S6・7, T6, U5・6 V2～5, W2	90	28.6	弥生土器	弥生時代	—
04	J17, K15・16, L13～16, M12・15～17 N12～15, S8, T7・8, U6・7, V3～6 W2・3	48	13.0	〃	〃	—
05	N12, O11・12, P11, S9, T7・8, V6～8 U6～8, V3～6, W2・3	118	7.5	〃	弥生時代後期	—
06	R12・13, S11・12, T10・11, U9, V7・8 Y2～5	130	9.0	〃	〃	—
07	Q15・16, R13・14, S12・13, T10～12 U10・11, V9・10, W9, Y2～5, O16・17 P16・17	154	38.6	—	—	—
07・10合流	Q16, J16・17, K16, L16, M16	160	33.7	—	—	—
08	R15・16, S13～15, T12・13, U11, V11・12, W9・10, X9, Y6・7	122	40.0	—	—	—
09	T13・14, V12・13, W10・11, X10, Y10	96	37.0	—	—	—
09下層	P16・17, Q16・17, R14・15, S14・15 T13・14, U13・14	231	77.2	—	—	—
10	R16, S15・16, T14, U13・14, V12・13 W12, X11	72	29.7	—	—	—
11	R16, S16, T15・16, U13～15, W12・13 X12	74	18.6	—	—	—
12	S16・17, T16, U15・16, V14・15 W13・14, X13	108	43.3	—	弥生時代前期	—
13	S21, T18～21, U18, V16～18, W15・16	75	18.7	—	—	—
14	R13, S13, T13	54	6.6	—	—	—
15	S14, T14・15, U15, V15・16, W16	95	60.0	弥生土器	弥生時代後期	—
16	J12・13, K13, L13・14, M14・15, N15 O14・15, P14, Q13・14, R13, S14	76	26.3	〃	〃	—
17	P16・17, Q16, R14・15, S14	76	21.0	—	—	—
18	V18	28	7.4	—	—	—
19	U18, V18	46	6.4	—	—	—
20	U17～20, V17～18	75	22.4	—	—	—
21	J33, K31～33, L29～31, M28・29, N27・28, O25・26, P25, Q25, S20・21 T18～20, U18, V16～18	85	35.5	弥生土器	弥生時代	—
22	R16, S17, T17, U17・18	150	36.0	—	弥生時代前期	—
23	S16	36	4.7	—	—	—
24	N15・16, O16・17	88	23.1	弥生土器	弥生時代	—
25	I18	(136)	38.8	弥生土器・支脚	〃	—
26	H20	24	6.6	—	—	—
27	H20・21	30	6.5	—	—	—
28	H30・31, I21～30, J21	43	27.7 37.5	弥生土器 縄文土器	弥生時代	—

SD	グリッド	大きさ(cm) 天幅	深さ	遺物	時期	備考
29	G22, H22・23	32	5.1	—	—	—
30	J23～28・30, K30, L30, M30・31	14.2	5.2	瓦 土師質土器	近世	—
31	I23・24, J23～28, K30・31, L30・31 M30	(82)	13.5	染付・土師質土器 備前・瓦	〃	—
32	K29・30, L29, M29・30	89	14.1	瓦・土師質土器 陶胎染付	〃	—
33	F25, G25, H25, I24・25, J24, K24	26	11.2	—	—	—
34	F26, G25・26, H25	32	6.8	—	—	—
35	F26, G25・26	24	11.9	土師質土器	近世	—
36	K23	30	8.8	—	—	—
37	G27・28, H26・27, I25・26, J24・25 K24	98	26.6	弥生土器 縄文土器	弥生時代 前期	—
38	H27・28, I26・27, J25・26, K24・25 L24	120	19.8	縄文土器	縄文時代	—
39	D31, E30・31, F29・30, G28・29, H28 I27・28, J26・27, K25・26, L25	48	15.6	弥生土器	弥生時代	—
40	K28, L28	21	4.6	—	—	—
41	I27・28・31	40	3.9	—	—	—
42	N24・25	40	21.9	弥生土器 サヌカイト	弥生時代	—
43	M34・35, N31～34, O26～31, P25・26 Q25	32	15.3	弥生土器	〃	—
44	P26, Q26・27, R27	88	24	—	—	—
45	P26, Q26, R26	78	35	—	—	—
46	H32, I31・32, J31, K31, L31, M31, N31	28	6.3	土師器 瓦質土器	中世	—
47	L29～33, M29～36	105	7.0	土師器 瓦器 瓦質土器	〃	—
48	M32, N32	200	8.0	〃	〃	—
49	M36, N36	66	3.0	—	—	—
50	G37, H37, I37, J37, K36・37, L36・37 M37	94	6.1	土師器 瓦器 瓦質土器	中世	—
51	I34・35, J34, K32～34, L34	89	6.8	土師器	〃	—
52	J33・34, K34	40	4.4	〃	〃	—
53	H31, I30・31, J30	50	6.9	土師器 輸入磁器	〃	—
54	H31～34, I31・32・35・36	60	2.8	土師器 瓦器 瓦質土器	〃	—
55	H35～37	26	2.2	—	〃	—
56	H37・38	116	13.4	土師器 土師質土器 瓦器	〃	—
57	M35, N34・35	18	3.3	—	—	—
58	I30・31, H29・30	29	12.6	—	—	—
59	H33・34, I33	54	4.6	—	—	—
60	E31～33, F30・31, G29・30	39	9.3	—	—	—

SD	グリッド	大きさ(cm) 天幅	深さ	遺物	時期	備考
61	G30～31	24	4.3	土師器	—	——
62	G30～31	38	10.9	—	—	——
63	G42・43, H42・43, I42, J41・42, K41 L40・41, M39, N39・40	212	91.7	—	—	——
64	D30・31, E30, F29・30	48	5.2	—	—	——
65	C34～36, D36～39	20	5.8	弥生土器	弥生時代	——
66	D40～43	34	33.5	—	—	——
67	D40～43	18	6.4	弥生土器	弥生時代	——
68	C35～37	48	11.2	土師器	—	——
69	B38～44	46	43.2	黒色土器 土師器	古代末～中世	——
70	B39～43	36	5.0	瓦器・土師器・瓦	中世	——
71	a42, A42	70	4.0	—	—	——

第8表　八反地地区土坑一覧表

SK	グリッド	形状	規模(cm) 幅	深さ	遺物	時期	備考
01	L5・6 M5	不定形	812×(452)	6.7	突帯文系土器	縄文時代晩期	浅い土坑状の落ち込み
02	K13, L13	隅丸方形	224×176	59.3	土師器	中世	——
03	M14	方形	104× 80	19.7	—	—	——
04	K14	方形	102× 78	27.8	土師器	中世	——
05	K14	円形	径 80	69.3	—	—	——
06	M16・17	不定形	218×224	26.5	土師器	—	——
07	S21	円形	径 80	6.9	土師質土器	近世	——
08	I23・24 J23・24	円形	径 (210)	37.0	—	〃	——
09	L23	円形	径 (148)	24.6	土師質土器	〃	井戸の可能性有
10	L23・24	方形	176×(64)	12 17.6	〃	〃	——
11	K24, L24	円形	径 190	20.0	瓦	〃	——
12	I24	円形	径 80	24.5	—	〃	——
13	I26・27 J26・27	不定形	266×166	31.6	—	—	——
14	F28	楕円形	90× 56	12.9	—	—	——
15	K30・31	円形	径 214	27.1 30.9	土師質土器	近世	——
16	K31	円形	径 230	22.7	〃	〃	——
17	K30, L30	長方形	296×480	20.5	土師器 瓦質土器 輸入磁器	中世	——

SK	グリッド	形状	規模 (cm) 幅	深さ	遺物	時期	備考
18	G30	不定形(円形)	380×300	53.7	土師器・瓦器 瓦質土器・輸入磁器・常滑焼	中世	——
19	P30	円形	径 52	13.7	—	—	柱穴か？
20	P31	円形	径 48	15.8	—	—	〃
21	L32	楕円形	250×119	21.0	—	近世	——
22	H33	楕円形	80×60	9.5	—	—	——
23	I33	不定形	60×124	13.0	—	—	——
24	I35・36 H35・36	不定形	208×156	5.9 23.5	土師器	—	——
25	N37, O37	不定形	96× 68	3.5	〃	中世	溝の延長の可能性有
26	a42, A42	不定形	133×320	9.0	土師器 猪の歯	〃	〃
27	B42, C42	方形	114× 90	9.1	—	—	——
28	A43	方形	152×102	7.7	—	近世	——

第9表　城岡地区遺物観察表

SD19（第二期）

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
216	1	弥生土器甕	14.1	—	—	0.2～3mm程度の砂粒を含む	良	淡黄褐色	口縁端部をつまみ上げている
216	2	〃	15.8	—	—	微砂粒を含む	〃	淡褐色	——
216	3	〃	17.8	—	—	0.2～3mm程度の砂粒を含む	〃	淡茶褐色	表面がかなり磨滅している
216	4	〃	21.3	—	—	〃	良好	濁黄色	口縁端部内面に凹線状の指ナデを施している
216	5	〃	16.4	—	—	0.2～4mm程度の砂粒を含む	良	淡茶黄色	体部外面にハケ目
216	6	〃	16.8	—	—	0.2～3mm程度の砂粒を含む	〃	内面濁白色 外面淡褐黄色	体部内外面に指頭痕がみられる
216	7	〃	15.8	—	—	0.2～2mm程度の砂粒を含む	良好	淡褐黄色	——
216	8	〃	—	—	—	〃	良	淡茶白色	体部最上部に外側からの穿孔がみられる
216	9	弥生土器壺	14.7	—	—	〃	不良	赤茶色	長頸壺と思われる
216	10	〃	15.8	—	—	0.2～4mm程度の砂粒を含む	〃	淡黄褐色	表面の磨滅が著しい
216	11	〃	18.7	—	—	0.2～2mm程度の砂粒を含む	良	内面黄黒色 外面淡褐色	口縁部の拡張がやや大きい
216	12	〃	15.6	—	—	〃	良好	濁黄色	口縁部の拡張が大きく、2条の退化凹線が施されている
216	13	弥生土器底部	—	—	4.7	〃	〃	内面暗灰色 外面濁黄色	——
216	14	〃	—	—	5.6	〃	〃	内面濁褐色 外面濁黄色	体部外面にハケ目内面に指頭痕が施されている
216	15	〃	—	—	6.8	0.2～3mm程度の砂粒を含む	良	淡黄褐色	表面がかなり磨滅している
216	16	〃	—	—	4.9	0.2～4mm程度の砂粒を含む	良好	内面灰黒色 外面暗褐灰色	内面にヘラ削りが施されている
216	17	〃	—	—	3.8	0.2～2mm程度の砂粒を含む	〃	暗白黄色	底部がかなり小さいものである
216	18	〃	—	—	4.9	〃	〃	内面暗白色 外面淡黄褐色	——
216	19	〃	—	—	4.3	0.2～3mm程度の砂粒を含む	〃	濁黄色	底部は小さく上げ底状を呈している
216	20	〃	—	—	3.0	〃	良	淡褐黄色	体部下半に黒斑がみられる
216	21	102 弥生土器器台	—	—	—	0.2～2mm程度の砂粒を含む	良好	淡黄茶色	脚部に多数孔がみとめられる

SD19（第三期）

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
217	22	弥生土器鉢	12.8	—	—	0.2～1mm程度の砂粒を含む 角セン石を含む	良	茶色	角セン石を含むことより搬入品かと考えられる
217	23	弥生土器甕	15.8	—	—	0.2～2mm程度の砂粒を含む	〃	濁白色	——
217	24	〃	15.8	—	—	〃	〃	内面濁黄色 外面暗白色	——
217	25	弥生土器壺	11.3	—	—	0.2～3mm程度の砂粒を含む	不良	淡茶褐色	器表面の磨滅が著しい
217	26	102 弥生土器長頸壺	10.1	—	—	0.2～2mm程度の砂粒を含む	〃	茶黒色	器表面の磨滅が著しい 頸部下半に刻み目が施されている
217	27	弥生土器高坏脚	—	—	—	0.2～3mm程度の砂粒を含む	〃	暗黄白色	器表面の磨滅が著しい
217	28	弥生土器底部	—	—	2.2	0.2～2mm程度の砂粒を含む	良	濁白黄色	——

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
217	102	弥生土器底部	—	—	3.5	0.2～5mm程度の砂粒を含む	良好	暗黄色	——
29									
217	—	〃	—	—	5.0	0.2～4mm程度の砂粒を含む	〃	暗黄白色	底部と体部下半に黒斑がみられる
30									
217	—	〃	—	—	6.9	0.2～2mm程度の砂粒を含む	良	濁白色	底部と体部下半に黒斑がみられる
31									

SD19（第四期）

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
218	—	弥生土器皿	10.2	2.1	3.9	0.2～3mm程度の砂粒を含む	良好	淡黄茶色	内外面に指頭痕が著しい
32									
218	102	〃	8.4	2.9	2.3	〃	〃	暗黄色	黒斑が認められる
33									
218	102	弥生土器鉢	11.6	6.7	3.8	〃	〃	暗白黄色	底部に平底を持つ
34									
218	—	〃	16.8	—	—	0.2～2mm程度の砂粒を含む	不良	濁白色	器表面の磨滅が著しい
35									
218	—	〃	17.1	—	—	0.2～1mm程度の砂粒を含む	良	濁白色	——
36									
218	103	〃	9.3	6.5	3.6	0.2～2mm程度の砂粒を含む	良好	淡白茶色	体部外面にヘラ磨きが密に施されている
37									
218	102	〃	11.2	4.2	2.2	0.2～2mm程度の砂粒を多量に含む	良	淡褐色	体部最下部に指押えが施されている
38									
218	—	〃	13.7	6.4	4.5	0.2～3mm程度の砂粒を含む	良好	濁黄白色	底部はヘラ削りにより尖り底ぎみになっている
39									
218	103	〃	14.5	7.5	5.2	〃	〃	〃	底部には平底が残る
40									
218	—	〃	12.2	4.4	3.0	〃	良	暗白色	——
41									
218	—	〃	16.3	—	—	0.2～2mm程度の砂粒を含む	不良	暗茶灰色	器表面の磨滅が著しい
42									
218	—	〃	22.5	—	—	0.2～3mm程度の砂粒を含む	良	暗黄白色	〃
43									
218	—	〃	25.0	—	—	0.2～2mm程度の砂粒を含む	〃	暗黄白色	——
44									
218	—	〃	28.6	—	—	0.2～3mm程度の砂粒を含む	〃	暗褐黄白色	器表面の剝落が著しい
45									
219	—	〃	37.5	—	—	0.2～4mm程度の砂粒を含む	不良	淡褐色	黒斑がみられる 口縁端部には沈線が施されている
46									
219	—	〃	34.0	—	—	0.2～2mm程度の砂粒を含む	良好	濁茶黄色	——
47									
219	—	〃	43.0	—	—	〃	良	暗灰黄色	口縁部外面に2条の凹線が施されている
48									
220	—	弥生土器甕	16.0	—	—	0.2～2mm程度の砂粒を含む	良好	淡黄褐色	——
49									
220	—	〃	15.9	—	—	1mm以下の砂粒を含む	良	淡茶黄色	——
50									
220	—	〃	15.4	—	—	〃	〃	淡白黄色	器表面の磨滅が著しい
51									
220	—	〃	16.9	—	—	0.2～2mm程度の砂粒を含む	〃	淡黄褐色	——
52									
220	—	〃	17.0	—	—	0.2～3mm程度の砂粒を含む	良好	濁黄白色	黒斑がみられる
53									
220	—	〃	15.8	—	—	0.2～2mm程度の砂粒を含む	良	淡褐色	器表面が磨滅している
54									
220	—	〃	15.1	—	—	0.2～3mm程度の砂粒を含む	良好	濁黄白色	口縁端部がやや拡張されている
55									
220	—	〃	16.5	—	—	〃	〃	淡褐白色	内面に粘土紐の接合痕が顕著に認められる
56									
220	—	〃	13.3	16.8	—	〃	良	濁黄白色	底部は平底である
57									
220	103	〃	11.4	17.6	2.0	〃	〃	淡黄茶色	外面タタキ目 内面ハケ目
58									

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
220	—	弥生土器甕	14.9	—	—	1㎜以下の砂粒を含む 角セン石を含む	良	黄茶色	搬入品と思われる
59									
220	—	〃	14.8	—	—	0.2～3㎜程度の砂粒を含む	不良	淡黄褐色	——
60									
220	—	〃	20.0	—	—	〃	〃	〃	器表面がかなり磨滅している
61									
221	—	〃	16.8	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	良	内面淡白茶色 外面黒灰色	——
62									
221	—	〃	16.1	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	淡白茶色	胴の張らないタイプである
63									
221	—	〃	19.8	—	—	0.2～5㎜程度の砂粒を含む	不良	淡茶色	器表面がかなり剝落している
64									
221	103	〃	17.9	33.4	6.0	0.2～4㎜程度の砂粒を含む	〃	〃	内面ヘラ削り
65									
221	103	〃	9.7	10.4	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	良	淡白褐色	体部下半に黒斑がみられる
66									
221	—	〃	11.1	—	—	0.2～3㎜程度の砂粒を少量含む	良好	淡白茶色	——
67									
221	—	〃	10.2	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	〃	——
68									
221	—	〃	—	—	—	0.2～3㎜程度の砂粒を含む	良	濁白色	体部上半に黒斑がみられる
69									
221	103	弥生土器短頸壺	5.9	6.7	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	淡黄褐色	器表面がかなり磨滅している
70									
222	104	弥生土器壺	18.7	—	—	〃	良好	濁茶白色	外面ハケ目 内面ハケ目
71									
222	—	〃	16.6	—	—	〃	良	〃	口縁部外面に2条の沈線が施されている
72									
222	104	〃	16.3	—	—	0.2～3㎜程度の砂粒を含む	良好	淡白茶色	頸部にヘラ先による刺突文有 外面ハケ目
73									
222	—	〃	15.5	—	—	〃	不良	〃	表面がかなり磨滅している
74									
222	—	〃	—	—	—	〃	良	濁黄白色	外面ハケ目 内面ヘラ削り
75									
222	104	〃	—	—	—	0.2～4㎜程度の砂粒を含む	〃	淡茶色	内外面ハケ目
76									
222	—	〃	15.8	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	濁黄白色	器表面がかなり磨滅している 内面ハケ目
77									
222	—	〃	16.1	—	—	0.2～4㎜程度の砂粒を含む	〃	〃	外面板ナデ
78									
222	—	〃	14.0	—	—	〃	不良	淡黄褐色	器表面がかなり磨滅している
79									
222	—	〃	14.1	—	—	0.2～3㎜程度の砂粒を含む	良好	濁黄白色	外面ハケ目 内面ハケ目
80									
222	104	〃	—	—	—	〃	〃	濁茶白色	内外面ハケ目
81									
223	—	〃	20.0	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	濁黄白色	外面ヘラミガキ 内面ハケ目
82									
223	—	〃	—	—	—	0.2～3㎜程度の砂粒を含む	良	濁褐白色	外面ハケ目 内面ハケ目
83									
223	—	〃	17.0	—	—	0.2～4㎜程度の砂粒を多量に含む	〃	〃	外面叩き後ハケ目 内面指ナデ
84									
223	—	〃	—	—	—	〃	〃	〃	外面ハケ目
85									
223	105	〃	22.0	—	—	0.2～4㎜程度の砂粒を含む	〃	〃	口縁部外面に2条の沈線
86									
223	104	〃	—	—	—	0.2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	濁茶白色	外面ハケ目 内面指ナデ
87									
223	—	弥生土器長頸壺	15.1	—	—	0.2～4㎜程度の砂粒を含む	不良	濁黄白色	——
88									
223	105	〃	13.3	—	—	〃	良好	濁茶白色	外面ハケ目 内面指ナデ・ヘラ削り
89									
223	—	〃	10.1	—	—	0.2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	淡褐色	外面ハケ目 内面指ナデ
90									

挿図番号	図版	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
224	105 91	弥生土器壺	—	—	5.6	1mm以下の砂粒を多量に含む	良好	濁茶白色	外面タタキ後ハケ目 内面ハケ目
224	106 92	〃	—	—	—	0.2～3mm程度の砂粒を含む	良	淡茶色	外面叩き後ハケ目 内面指頭痕
225	— 93	〃	17.1	—	—	0.2～2mm程度の砂粒を含む	〃	淡褐色	口縁部が拡張され3条の沈線が施される
225	105 94	〃	17.6	—	—	〃	〃	濁黄白色	口縁部が拡張され4条の沈線が施される 円形浮文がつく
225	105 95	〃	20.8	—	—	1mm以下の砂粒を含む 角センセン石を含む	〃	褐茶色	口縁部外面に鋸歯文が施される 搬入品か？
225	— 96	〃	—	—	—	1mm以下の砂粒を含む	不良	淡黄褐色	口縁部外面に波状文が施される
225	— 97	〃	17.1	—	—	0.2～2mm程度の砂粒を含む	〃	〃	口縁部外面に刻み目が施される
225	105 98	〃	28.0	—	—	〃	良好	濁茶白色	口縁部外面に波状文が施される
225	— 99	〃	21.7	—	—	〃	良	〃	〃
225	105 100	〃	18.9	—	—	〃	〃	〃	〃
225	105 101	〃	23.8	—	—	〃	〃	濁黄白色	口縁部外面に鋸歯文が施されている
225	— 102	〃	—	—	—	〃	不良	白黒色	円形浮文が付く
225	— 103	〃	21.6	—	—	〃	良	濁黄白色	口縁部外面に波状文が施されている 外面ハケ目
225	105 104	〃	16.7	—	—	〃	〃	濁白茶色	〃
225	106 105	〃	—	—	—	1mm以下の砂粒を含む	〃	濁茶白色	頸部に綾杉状刻み目を持つ突帯が付く
225	106 106	〃	—	—	—	〃	〃	〃	頸部に刻み目の突帯が付く
225	106 107	〃	—	—	—	0.2～2mm程度の砂粒を含む	〃	〃	口縁部外面に鋸歯文 頸部に突帯、外面にハケ目が施されている
225	106 108	〃	—	—	—	0.2～5mm程度の砂粒を含む	〃	〃	頸部に刻み目突帯が施されている
226	— 109	〃	—	—	—	1mm以下の砂粒を含む	良	白黒色	頸部に刻み目突帯が施されている
226	106 110	〃	—	—	—	0.2～2mm程度の砂粒を含む	良好	濁茶黄色	〃
226	106 111	〃	—	—	—	〃	〃	淡茶色	頸部にクシ描き刺突文が施されている
226	— 112	〃	—	—	—	1mm以下の砂粒を含む	良	濁黄白色	二重口縁壺である
226	107 113	〃	19.9	—	—	〃	良好	〃	外面に鋸歯文が施されている
226	— 114	〃	23.1	—	—	0.2～2mm程度の砂粒を含む	良	淡黄褐色	〃
226	107 115	〃	31.4	—	—	〃	〃	濁黒白色	外面に波状文が施されている
227	— 116	〃	(21.4)	—	—	〃	良好	濁黄白色	二重口縁壺である
227	107 117	〃	15.0	—	—	微砂粒を含む	〃	淡黄茶色	二重口縁壺である 下面に突帯がある
227	— 118	弥生土器底部	—	—	4.2	0.2～2mm程度の砂粒を含む	〃	濁茶白色	黒斑がみられる 内面ヘラ削り
227	— 119	〃	—	—	3.3	〃	良	内面淡黄茶色 外面淡茶褐色	内面ヘラ削り
227	— 120	〃	—	—	4.1	〃	〃	灰黒色	内面ヘラ削り
227	— 121	〃	—	—	5.4	〃	良好	暗茶白色	内面指ナデ
227	— 122	〃	—	—	6.7	〃	〃	〃	外面板ナデ 内面ヘラ削り

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
227	— 123	弥生土器底部	—	—	4.1	0.2～2mm程度の砂粒を含む	良 好	暗茶白色	外面板ナデ 内面ヘラ削り
227	— 124	〃	—	—	5.3	〃	良	茶黒色	外面タタキ目
227	— 125	〃	—	—	4.8	0.2～3mm程度の砂粒を含む	〃	淡褐茶色	外面タタキ目 内面ヘラ削り
227	— 126	〃	—	—	4.6	0.2～2mm程度の砂粒を含む	良 好	暗黄白色	内面板ナデ
227	— 127	〃	—	—	5.4	〃	〃	淡褐茶色	外面タタキ後ナデ 内面指ナデ
227	— 128	〃	—	—	6.2	0.2～3mm程度の砂粒を含む	良	淡黄茶色	内面ヘラ削り
227	— 129	〃	—	—	4.4	〃	〃	淡黄褐色	——
227	— 130	〃	—	—	5.0	〃	良 好	暗茶白色	外面タタキ後ナデ 内面ヘラ削り
227	— 131	〃	—	—	3.8	〃	良	〃	黒斑がみられる 内面にしぼり目がみられる
227	— 132	〃	—	—	4.8	〃	〃	濁黄白色	内面指ナデ 外面ハケ目
227	108 133	〃	—	—	5.7	〃	〃	淡茶褐色	内面ハケ目 外面タタキ後ハケ目
227	— 134	〃	—	—	4.0	1mm以下の砂粒を含む	良 好	淡茶黄色	内面ハケ目 外面タタキ目
227	— 135	〃	—	—	1.3	0.2～2mm程度の砂粒を含む	良	淡茶白色	黒斑がみられる 外面タタキ目
228	— 136	〃	—	—	2.8	0.2～2mm程度の砂粒を含む	良 好	濁黄白色	底部に粗いヘラ削り 内面ハケ目
228	— 137	〃	—	—	—	〃	〃	濁褐白色	内面ヘラミガキ
228	— 138	〃	—	—	4.2	〃	〃	〃	内面指ナデ
228	— 139	〃	—	—	4.2	〃	〃	〃	〃
228	— 140	〃	—	—	4.7	1mm以下の砂粒を含む	〃	濁黄白色	内外面の一部にハケ目
228	— 141	〃	—	—	4.8	0.2～3mm程度の砂粒を含む	〃	〃	黒斑がみられる 外面ハケ目内面指ナデ
228	— 142	〃	—	—	4.3	〃	〃	濁茶白色	外面ハケ目 内面指ナデ
228	— 143	弥生土器甕	—	—	4.5	〃	良	淡白茶色	黒斑がみられる 外面タタキ目
228	— 144	〃	—	—	2.2	〃	良 好	濁黄白色	黒斑がみられる 外面タタキ後ハケ目 内面ヘラ削り
228	— 145	〃	—	—	2.6	1mm以下の砂粒を含む	〃	淡白茶色	内面ハケ目
228	— 146	〃	—	—	3.7	〃	〃	濁茶白色	外面タタキ目 内面ヘラ削り
228	— 147	〃	—	—	3.6	0.2～2mm程度の砂粒を含む	〃	淡白茶色	内面板ナデ
228	108 148	〃	—	—	—	〃	〃	〃	内面指ナデ 底部に4つ穿孔がみられる
229	— 149	弥生土器底部	—	—	1.6	1mm以下の砂粒を含む	良	濁茶黄色	体部最下部に指押えが認められる
229	— 150	〃	—	—	2.8	0.2～2mm程度の砂粒を含む	〃	〃	体部最下部に指押えが認められ、上げ底状を呈している
229	— 151	〃	—	—	2.6	〃	良 好	暗灰色	体部最下部に指押えが認められる
229	— 152	〃	—	—	3.0	1mm以下の砂粒を含む	良	内面濁黄白色 外面灰黒色	黒斑がみられる 底部は高台状につくられる
229	— 153	〃	—	—	3.2	0.2～3mm程度の砂粒を含む	〃	淡茶色	——
229	— 154	〃	—	—	4.0	0.2～2mm程度の砂粒を含む	良 好	濁黄白色	黒斑がみられる

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
229	108 155	製塩土器	—	—	6.7	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	良	淡黄褐色	——
229	— 156	弥生土器脚付鉢	—	—	—	〃	良好	濁褐黄色	外面ハケ目
229	— 157	〃	—	—	—	〃	良	淡黄褐色	——
229	— 158	〃	—	—	9.1	〃	良好	〃	体部外面タタキ目
229	— 159	〃	—	—	6.6	1㎜以下の砂粒を含む	〃	濁白黄色	内面ハケ目
229	107 160	弥生土器小型器台	6.8	8.1	8.6	〃	〃	淡黄褐色	黒斑がみられる 脚部外面ヘラミガキ
229	— 161	弥生土器高坏	28.4	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を多量に含む	良	淡褐茶色	——
229	— 162	〃	17.8	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	不良	淡茶色	器表面がかなり磨滅している 外面ハケ目
229	— 163	〃	—	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	良	淡褐茶色	〃
229	— 164	〃	22.1	—	—	〃	不良	淡茶色	〃
229	107 165	〃	16.4	—	—	〃	良好	暗茶灰色	坏部外面ハケ目
229	— 166	〃	—	—	—	0.2～3㎜程度の砂粒を含む	良	濁褐白色	——
229	— 167	弥生土器高坏脚	—	—	—	〃	不良	濁褐黄色	器表面がかなり磨滅している
229	— 168	〃	—	—	—	細砂粒を含む	良好	濁黄白色	内面ハケ目
229	— 169	〃	—	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	良	濁褐白色	外面タタキ目
229	107 170	〃	—	—	16.3	0.2～3㎜程度の砂粒を含む	良好	〃	外面ハケ目
230	— 171	〃	—	—	14.0	精良	良	茶褐色	赤色顔料が塗られている 坏部内底部に穿孔がみられる 祭祀用か？
230	— 172	弥生土器高坏	—	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	濁灰色	——
230	— 173	弥生土器高坏脚	—	—	—	0.2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	〃	内外面指ナデ
230	— 174	〃	—	—	—	〃	〃	淡茶色	——
230	— 175	〃	—	—	—	〃	良好	濁黄白色	脚部に3ヶ所穿孔有
230	— 176	〃	—	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	淡茶色	外面ヘラミガキ 内面ハケ目
230	— 177	弥生土器高坏	—	—	—	0.2～3㎜程度の砂粒を含む	良	濁黄白色	——

挿図番号	図版番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質	重量(g)	備考
231	108 178	舟底状石器	4.8	2.1	1.4	サヌカイト	19.1	——
231	108 179	石鏃	4.5	1.7	0.4	〃	2.8	——
231	108 180	〃	(3.7)	1.8	0.5	〃	3.8	——
231	108 181	石包丁	7.8	3.2	0.7	緑泥片岩	34.8	——
231	108 182	打製石斧	10.2	7.3	1.6	サヌカイト	163.8	——
231	— 183	スクレイパー	5.1	2.4	5.5	〃	8.6	切り出しナイフ状を呈している
231	— 184	〃	7.8	5.3	1.2	〃	65.3	——

挿図番号	図版番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質	重量(g)	備考
185	231 108	スクレイパー	9.3	3.3	5.0	サヌカイト	18.7	——

SD20

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
186	233 —	弥生土器鉢	21.4	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	良	淡茶黄色	内外面ハケ目
187	233 —	弥生土器甕	11.5	—	—	〃	〃	淡茶色	外面ハケ目 内面指ナデ
188	233 —	〃	10.6	—	—	〃	〃	濁茶黄色	外面タタキ目
189	233 —	〃	13.7	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	〃	外面タタキ目 内面指ナデ
190	233 —	〃	21.9	—	—	〃	不良	淡茶色	器表面がかなり磨滅している
191	233 —	弥生土器壺	21.2	—	—	〃	〃	〃	二重口縁壺　器表面がかなり磨滅している
192	233 108	〃	—	—	—	〃	良	〃	器表面がかなり磨滅している
193	233 —	弥生土器底部	—	—	4.4	〃	〃	濁茶黄色	外面タタキ目 内面指ナデ
194	233 —	〃	—	—	4.0	〃	〃	〃	内外面指ナデ
195	233 —	〃	—	—	4.3	〃	〃	暗茶色	外面タタキ目後ハケ目 内面ハケ目
196	233 —	〃	—	—	3.1	〃	〃	濁茶黄色	体部下半は指押え
197	233 —	〃	—	—	1.8	0.2～3㎜程度の砂粒を多量に含む	〃	淡茶色	器表面の剝落が著しい

挿図番号	図版番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質	重量(g)	備考
198	232 —	石鏃	2.1	2.0	0.2	サヌカイト	0.7	——
199	232 —	〃	2.3	1.6	0.3	〃	1.3	——

SD21

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
200	234 —	弥生土器壺	11.8	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	良	淡茶色	——
201	234 —	〃	13.8	—	—	〃	〃	濁黄色	——
202	234 —	弥生土器底部	—	—	2.4	〃	〃	〃	外面ハケ目 内面ハケ目

SD22

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
203	234 108	弥生土器壺	—	—	3.1	0.1～2㎜程度の砂粒を含む	良	淡黄褐色	内面上半指頭痕 内面下半ハケ目
204	234 —	〃	15.9	—	—	〃	〃	暗灰色	口縁部外面に2条の退化凹線が施されている
205	234 —	弥生土器甕	18.8	—	—	〃	〃	濁茶黄色	外面タタキ目 内面ヘラ削り
206	234 —	〃	12.3	—	—	〃	〃	〃	外面板状のナデ
207	234 —	〃	13.9	—	—	〃	〃	淡黄茶色	外面タタキ目
208	234 —	〃	13.6	—	—	1㎜以下の砂粒を含む 角セン石を含む	〃	茶色	外面ハケ目 内面指頭痕搬入品か？

SD23

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
234	209	弥生土器甕	12.9	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	良	暗茶黄色	——
234	210	弥生土器底部	—	—	5.0	〃	〃	茶褐色	——
234	211	〃	—	—	5.5	〃	〃	暗灰黄色	——
234	212	弥生土器高坏脚	—	—	—	〃	〃	淡黄褐色	外面ハケ目 内面しぼり目

SD24

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
235	213	突帯文系土器	—	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	良	淡茶黄色	——
235	214	弥生土器鉢	23.2	—	—	〃	良好	濁黄色	内外面ハケ目
235	215	〃	25.6	—	—	0.2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	〃	外面ハケ目
235	216	〃	34.3	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	良	暗茶黄色	〃
235	217	〃	36.9	—	—	〃	〃	〃	内面ハケ目
235	218	〃	38.5	—	—	〃	〃	濁茶黄色	——
235	219	〃	36.1	—	—	〃	〃	〃	口縁部外面に退化凹線が施されている
235	220	〃	39.4	—	—	〃	〃	暗黄灰色	外面ハケ目
236	221	弥生土器甕	15.5	—	—	〃	〃	暗茶灰色	——
236	222	〃	13.8	—	—	〃	〃	淡茶色	外面ハケ目 内面ヘラ削り
236	223	〃	15.8	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	暗灰色	外面ハケ目
236	224	〃	15.6	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	淡黄茶色	外面指ナデ
236	225	〃	13.9	—	—	〃	不良	濁黄色	外面ハケ目
236	226	〃	17.0	—	—	0.2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	淡黄茶色	器表面は剝落している
236	227	〃	14.0	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	良	暗褐灰色	外面ハケ目
236	228	〃	17.1	—	—	〃	〃	淡茶黄色	〃
236	229	〃	12.7	—	—	〃	〃	〃	内面ヘラ削り
236	230	〃	18.3	—	—	〃	〃	灰黒色	外面ハケ目
236	231	〃	15.5	—	—	〃	〃	淡黄茶色	外面ハケ目 内面ヘラ削り
236	232	〃	15.3	—	—	〃	〃	淡茶黄色	外面ハケ目 内面指ナデ
236	233	〃	14.2	—	—	0.2～3㎜程度の砂粒を含む	良好	濁茶黄色	内面指押え、ヘラ削り 外面指ナデ
236	234	〃	18.1	—	—	〃	不良	淡黄茶色	器表面がかなり剝落している
237	235	〃	16.3	—	—	〃	良	内面淡黄茶色 外面淡黒茶色	外面ハケ目 内面ヘラ削り
237	236	〃	10.6	—	—	〃	〃	淡茶色	〃
237	237	〃	—	—	3.9	〃	〃	〃	〃

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
238	—	弥生土器壺	17.4	—	—	0.2～3mm程度の砂粒を含む	良	暗黄色	口縁部が拡張され、3条の沈線が施されている
238	—	〃	20.8	—	—	1mm以下の砂粒を含む	良好	暗黄色	口縁部が拡張され、3条の退化凹線が施されている
238	—	〃	23.0	—	—	0.2～2mm程度の砂粒を含む	良	暗褐黄色	口縁部が拡張され、3条の退化凹線と刻み目が施されている
238	—	〃	14.9	—	—	0.2～3mm程度の砂粒を含む	不良	淡茶褐色	器表面がかなり磨滅している
238	—	〃	11.1	—	—	細砂粒を多量に含む	良	内面濁白色 外面暗黄白色	——
238	—	弥生土器長頸壺	16.5	—	—	0.2～3mm程度の砂粒を含む	〃	淡褐茶色	——
238	—	〃	13.0	—	—	1mm以下の砂粒を含む	〃	淡黄茶色	——
238	109	弥生土器壺	5.8	—	—	0.2～2mm程度の砂粒を含む	良好	淡黄茶色	体部上半に黒斑がみられる
238	109	〃	7.8	8.4	3.1	0.2～3mm程度の砂粒を含む	〃	淡黄茶色	底部に平底を持つ
238	—	〃	—	—	2.2	0.2～4mm程度の砂粒を含む	良	暗黄灰色	底に小さい平底を持つ
238	—	弥生土器底部	—	—	5.6	0.2～3mm程度の砂粒を含む	〃	淡黄茶色	黒斑がみられる
238	—	〃	—	—	5.2	0.2～2mm程度の砂粒を含む	不良	淡茶白色	体部最下部に連続指押えがみられる
238	—	〃	—	—	4.2	〃	良	内面淡黄茶色 外面暗黄白色	〃
238	—	〃	—	—	6.2	〃	良好	淡黄茶色	——
238	—	〃	—	—	2.4	0.2～3mm程度の砂粒を含む	良	暗黄白色	底部に平底を持つ
238	—	〃	—	—	4.1	〃	〃	淡茶白色	小さい脚が付く
238	—	〃	—	—	3.6	0.2～2mm程度の砂粒を含む	〃	暗白黄色	底部は高台状を呈している
238	—	弥生土器脚付鉢	—	—	—	0.2～3mm程度の砂粒を含む	〃	暗茶白色	——
238	—	弥生土器高坏脚	—	—	—	〃	〃	淡黄茶色	円盤充塡の高坏である

挿図番号	図版番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質	重量(g)	備考
239	109	磨石	5.7	5.1	4.3	流紋岩	184.5	——
239	109	スクレイパー	6.0	3.6	1.6	サヌカイト	23.4	——
239	109	〃	11.8	7.0	1.5	〃	99.5	——

掘立柱建物

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
270	—	土師器小皿	9.1	1.5	6.4	細砂粒を含む	良	濁白色	口縁端部外面に炭素付着 底部ヘラ切り
270	—	〃	7.8	1.2	6.7	0.2～2mm程度の砂粒を含む	不良	淡褐白色	底部ヘラ切り
270	—	〃	7.8	1.5	6.0	0.2～3mm程度の砂粒を多量に含む	良	淡茶黄色	底部糸切り
270	—	〃	7.6	1.3	6.0	〃	〃	〃	〃
270	—	〃	8.1	1.6	6.2	細砂粒を含む	良好	淡黄茶色	〃

挿図番号	図版番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質	重量(g)	備考
265	—	硯	—	—	1.4	滑石	—	滑石製石鍋の転用品か？

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
266	—	土師器坏	14.0	3.5	7.7	1mm以下の砂粒を含む	良	淡黄茶色	底部糸切り
267	—	土師器小皿	6.8	1.6	4.4	細砂粒を含む	〃	灰黒色	〃
268	—	青磁皿	—	—	3.8	精良	良好	胎土灰色 釉青緑釉	同安窯系青磁皿Ⅰ類
269	—	陶器	36.2	—	—	1mm以下の砂粒を含む	〃	胎土白灰色 器表面黄緑色	緑釉陶器か？
270	—	土師質土器擂鉢	29.6	—	—	0.2～3mm程度の砂粒を含む	〃	淡黄茶色	——
271	—	土師器坏	10.6	2.0	7.2	微砂粒を含む	〃	暗灰黄色	底部糸切り

挿図番号	図版番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質	重量(g)	備考
272	—	金銅製品	長径 4.2	短径 2.0	0.2	銅	—	刀のつばの一部
273	117	砥石	11.5	4.5	—	石英粗面岩	—	——

SD02

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
274	—	土師質土器釜	14.1	—	—	0.2～2mm程度の砂粒を含む	良	濁白黄色	——
275	—	土師質土器擂鉢	30.3	—	—	〃	良好	淡茶色	——
276	—	土師質土器土鍋	29.0	—	—	〃	良	淡茶白色	外面スス付着
277	—	〃	28.4	—	—	〃	〃	〃	〃
278	—	〃	31.3	—	—	〃	〃	〃	外面スス付着 体部外面下半ヘラ削り
279	—	〃	33.7	—	—	〃	〃	〃	外面スス付着
280	—	土師質土器火鉢	25.9	—	—	〃	〃	淡茶色	——

挿図番号	図版番号	器種	全長(cm)	頭部径(cm)	先端部径(cm)	材質	備考
281	—	鉄釘	(9.5)	0.7×0.5	0.3×0.3	鉄	——

挿図番号	図版番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質	重量(g)	備考
282	117	砥石	3.6	(5.1)	1.4	石英粗面岩	—	穿孔有

SD03

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
283	—	土師器小皿	7.9	1.2	6.9	精良	良	淡茶色	底部ヘラ切り
284	—	〃	7.6	1.4	6.2	〃	〃	〃	〃

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
274	—	土師器坏	14.0	3.4	3.4	0.2～1㎜程度の砂粒を含む	良	淡褐茶色	底部糸切り
274	—	瓦器椀	15.7	—	—	精良	〃	胎土濁白色 器表面灰黒色	——
274	—	土師質土器土鍋	29.7	—	—	0.2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	淡白茶色	外面にスス付着
274	—	〃	30.4	—	—	〃	〃	淡黄茶色	——
274	—	土師質土器土鍋脚	—	—	—	〃	〃	淡茶黄色	——
274	—	土師質土器土鍋	32.5	—	—	〃	〃	淡茶白色	——
274	—	〃	34.6	—	—	〃	〃	淡白茶色	外面にスス付着
274	—	土師質土器釜	14.6	—	—	〃	〃	〃	体部上半に穿孔有
274	—	〃	16.2	—	—	〃	〃	淡褐色	——
274	109	土師質土器火鉢脚	—	—	—	〃	〃	〃	——
275	—	土師質土器擂鉢	24.1	—	—	〃	〃	濁茶黄色	——
275	—	〃	31.2	—	—	〃	〃	淡茶色	——

SD04

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
276	—	土師器小皿	8.2	1.2	7.4	精良	良	淡茶色	底部ヘラ切り
276	—	〃	8.3	1.2	6.8	1㎜以下の砂粒を含む	〃	淡黄茶色	〃
276	—	〃	6.7	1.6	4.7	精良	〃	灰黒色	底部糸切り
276	—	〃	8.3	1.6	6.0	細砂粒を含む	〃	淡褐黄色	〃
276	—	土師器坏	14.0	3.1	8.7	1㎜以下の砂粒を含む	〃	〃	〃
276	—	瓦器椀	14.3	4.3	3.1	精良	良好	〃	炭素がとんでいる
276	—	土師質土器擂鉢	27.3	—	—	0.2～4㎜程度の砂粒を含む	良	淡褐色	——
276	—	土師質土器土鍋	33.1	—	—	〃	〃	〃	——

SD05

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
277	—	土師器坏	13.9	3.3	10.0	1㎜以下の砂粒を含む	良	濁茶白色	底部糸切り
277	—	土師質土器土鍋	—	—	—	0.2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	〃	外面スス付着
277	—	〃	29.8	—	—	〃	〃	淡褐色	〃
277	—	土師質土器擂鉢	—	—	13.1	〃	〃	濁茶黄色	——

SD06

挿図番号	図版番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質	重量(g)	備考
278	117	砥石	(4.4)	3.8	2.1	石英粗面岩	——	——
309								

SK03

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
279	—	土師質土器土鍋	26.8	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	良	淡茶色	——
310									
279	—	〃	30.6	—	—	〃	〃	〃	——
311									
279	—	〃	35.8	—	—	〃	〃	〃	——
312									
279	—	〃	35.5	—	—	〃	〃	淡茶黄色	外面にスス付着
313									
279	—	〃	38.2	—	—	〃	〃	淡白黄色	〃
314									
279	—	〃	33.7	—	—	〃	〃	こげ茶色	〃
315									
279	—	土師質土器火鉢	32.0	—	—	〃	〃	淡黄茶色	——
316									
280	110	土師質土器擂鉢	—	—	13.2	0.2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	淡こげ茶色	——
317									

SK04

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
282	—	土師器坏	—	—	5.3	精良	良	濁茶白色	底部糸切り（静止）
318									
282	—	瓦器小皿	9.7	—	—	細砂粒を含む	良好	暗灰色	——
319									
282	—	土師質器壺	—	—	6.0	精良	〃	淡褐色	——
320									
282	—	須恵器こね鉢	—	—	10.5	1㎜以下の砂粒を多量に含む	良	灰色	底部糸切り 東播系
321									
282	—	土師質土器土鍋	23.1	—	—	〃	〃	淡褐茶色	口縁部に穿孔有
322									
282	—	〃	29.9	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	淡白茶色	口縁部に穿孔有 外面にスス付着
323									
282	—	〃	23.7	—	—	0.2～3㎜程度の砂粒を含む	〃	〃	——
324									
282	110	〃	26.7	—	—	〃	〃	〃	外面にスス付着
325									
282	—	〃	37.9	—	—	〃	〃	〃	外面にスス付着 体部外面下半ヘラ削り
326									
282	—	〃	36.8	—	—	〃	〃	淡褐色	——
327									
283	—	〃	30.7	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	淡茶色	——
328									
283	—	〃	31.5	—	—	〃	〃	〃	——
329									
283	—	〃	33.6	—	—	〃	〃	淡褐色	——
330									
283	—	土師質土器擂鉢	31.8	—	—	〃	〃	濁黄色	内面に条溝有
331									
283	—	〃	35.8	—	—	〃	〃	濁茶黄色	〃
332									
283	—	〃	—	—	11.8	〃	〃	〃	〃
333									
284	—	〃	—	—	15.8	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	濁黄白色	〃
334									
284	—	〃	—	—	14.2	〃	〃	〃	〃
335									
284	—	土師質土器釜	14.2	—	—	〃	〃	〃	——
336									
284	—	土師質土器火鉢	29.4	—	—	1㎜以下の砂粒を含む	〃	白灰色	——
337									
284	—	土師質土器火鉢脚	—	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	褐茶色	——
338									

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
284	—	丸瓦	—	—	—	0.2～2mm程度の砂粒を含む	良好	灰黒色	丸瓦の尾部か？
339									

挿図番号	図版番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	材質	重量(g)	備考
284	110	鉄製品	—	—	—	鉄	—	カリマタか？
340								
285	110	石臼	下 17.5	9.3	上 16.2	角礫凝灰岩	—	上臼
341								
285	110	〃	下 (20.0)	10.2	上 18.0	〃	—	〃
342								
285	110	〃	—	9.0	26.0	〃	—	下臼
343								
286	110	〃	下 —	—	上 24.0	〃	—	上臼
344								
286	110	〃	下 26.6	—	上 —	〃	—	〃
345								
286	110	〃	27.6	9.7	20.0	〃	—	下臼
346								
286	110	砥石	(16.8)	(10.8)	(8.5)	砂岩	—	溝有
347								
286	117	〃	(6.1)	(3.2)	(2.4)	石英粗面岩	—	——
348								
287	111	石塔	上幅 —	下幅 6.6	高さ 6.7	砂岩	—	——
349								
287	111	〃	3.8	18.0	17.6	角礫凝灰岩	—	——
350								
287	111	〃	10.0	13.0	17.2	〃	—	——
351								
287	111	〃	14.0	15.0	(25.0)	砂岩	—	——
352								
288	111	〃	10.8	14.6	15.8	角礫凝灰岩	—	——
353								
288	111	〃	12.0	15.6	28.2	〃	—	——
354								
288	111	〃	11.6	24.5	22.7	〃	—	——
355								

SK05

挿図番号	図版番号	器種	法量(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	備考
290	—	土師器椀	—	—	高台径 5.8	精良	良	濁白色	——
356									
290	—	須恵器こね鉢	23.4	—	—	細砂粒を含む	良好	青灰色	東播系
357									
290	—	土師質土器羽釜	26.2	—	—	0.2～3mm程度の砂粒を含む	良	淡茶色	つばがかなり退化している
358									
290	—	土師質土器擂鉢	28.9	—	—	〃	〃	濁茶白色	——
359									
290	—	土師質土器羽釜脚	—	—	—	〃	〃	〃	——
360									
290	111	土師質土器擂鉢	28.6	17.3	13.1	〃	〃	茶色	——
361									
290	—	〃	—	—	—	〃	〃	淡茶色	——
362									
290	—	〃	—	—	13.9	〃	〃	〃	——
363									
290	—	〃	—	—	14.1	〃	〃	〃	——
364									

SK06

挿図	図版	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
番号			口径	器高	底径				
292	365	土師器小皿	7.9	1.2	7.0	精良	良好	淡黄褐色	底部ヘラ切り
292	366	〃	8.0	1.2	7.0	〃	良	濁白色	〃
292	367	〃	8.1	1.5	6.1	0.2～2㎜程度の砂粒を多量に含む	〃	濁白黄色	底部糸切り
292	368	〃	7.7	1.5	6.0	〃	〃	〃	〃
292	369	〃	8.1	1.4	5.7	〃	〃	濁茶黄色	〃
292	370	土師器坏	12.6	3.2	7.8	1㎜程度の砂粒を含む	〃	濁白黄色	〃
292	371	〃	14.9	3.1	9.2	〃	〃	濁茶黄色	〃
292	372	〃	14.6	4.1	10.2	0.2～3㎜程度の砂粒を多量に含む	〃	〃	〃
292	373	〃	—	—	9.0	精良	〃	〃	〃
292	374	土師器椀	—	—	高台径 5.8	〃	不良	濁黒白色	——
292	375	〃	—	—	高台径 6.1	〃	〃	〃	器表面がかなり剝落している
292	376	瓦器椀	17.1	—	—	〃	良	灰黒色	——
292	377	〃	—	—	高台径 5.0	〃	良好	〃	——
292	378	須恵器こね鉢	—	—	—	細砂粒を含む	〃	青灰色	東播系
292	379	〃	31.7	—	—	〃	〃	〃	〃
292	380	土師質土器擂鉢	—	—	13.3	0.2～3㎜程度の砂粒を多量に含む	良	濁茶黄色	——
292	381	土師質土器羽釜脚	—	—	—	0.2～2㎜程度の砂粒を含む	〃	淡褐茶色	——
292	382	土錘	全長 (3.7)	最大径 1.5	—	精良	〃	濁黄色	紡錘型

SK07・08

挿図	図版	器種	法量(cm)			胎土	焼成	色調	備考
番号			口径	器高	底径				
293	383	土師器小皿	7.8	1.2	6.4	精良	良	淡黄褐色	底部ヘラ切り
293	384	〃	8.1	1.4	6.8	〃	〃	〃	〃
293	385	〃	7.6	1.8	5.8	〃	〃	濁白灰色	〃
293	386	〃	7.6	1.1	6.0	1㎜以下の砂粒を多量に含む	〃	濁茶白色	底部糸切り
293	387	〃	7.9	1.3	6.3	〃	〃	濁白黄色	〃
293	388	〃	7.8	1.7	6.1	〃	〃	〃	〃
293	389	土師器坏	13.7	3.4	8.2	1㎜以下の砂粒を少量含む	〃	淡黄褐色	〃
293	390	〃	14.0	3.3	8.8	0.1～2㎜程度の砂粒を多量に含む	〃	濁白黄色	〃
293	391	〃	14.4	3.4	10.0	〃	不良	〃	器表面がかなり磨滅している　底部糸切り
293	392	〃	14.5	3.5	10.9	精良	良	淡褐茶色	〃
293	393	〃	13.9	3.1	10.0	〃	〃	〃	底部糸切り